收容書目

制地圖解抄
滄溟夜話
迂言
上下富有の議 并土着の議
新政談 一名蒭言
富國存念書
貨幣秘録
金銀圖録續編
收米權上書
當今金錢米布江水通價考
減銅録
神州論
末黑のすゝき
救急或問
高島喜平上書
佐久間象山上書
治本策

日本經濟叢書

卷三十二

日本經濟叢書刊行會

日本經濟叢書卷三十二目次

目次終

解　題

制地圖解抄

本書は和學者色川三中の口述せるを門人の筆記したるものにして、内容は大化革新前に於ける我國の田制は、周禮に記せる周の制度に同じきことを說き、和漢の諸書を引證して、上古より德川時代に至るまで、田制及田租の沿革を、尤も簡明に說明し、終りには類聚三代格に載せたる格文に據り、弘仁頃（一千一百餘年前）に於ける公營田の租法を擧げて、之を考證したるものなり

著者色川三中は初名を英明と云ひ、三郎兵衞と稱し、東海と號す、常州土浦の人にして、家世々造醬を業とし、富豪を以て聞ゆ、三中少くして學を好み、初め下野の儒者諸葛琴臺に就て漢學を修め、後ち和學に從事して、大に得る所あり、安政二年年五十四にして沒す、著はす所は、皇國田制考一卷・本朝

通貨考一卷・撿田考證四卷、租庸調考一卷・租稅考々証二卷、田制必用一卷・錢貨租稅庸調一卷・物價拔萃一卷・度量考三卷・量品便覽一卷・度量衡問答一卷・本朝量品及附錄三卷・和漢量品二卷・周漢唐宋明清度量衡一卷・唐尺辨僞一卷・尺度考一卷・京升考一卷・東海隨筆十卷・隨筆雜集二卷、其他和學に關する雜著及醫事の書等數十部あり、皆家に傳へたるも、近年散佚して、其の一部分は現に某富豪の秘閣に收められて、人の見るを許さずと云へり

滄浪夜話

本書は專ら治民に關する心得方を、深切丁寧に說きたるものにして、第一卷は百姓の年中行事より說き起し、村方及市街などの取締より、年貢・交易・借金・運漕・義倉等の事に及び、第二卷は割元・庄屋・年寄等邑役人の勤方より遊民・穢多・乞食の事及止賄賂法、竝に訴訟の事等、民政上當局の心得居らざる可らざる事を、一々項目を擧げて記述し、其の記事は概ね皆簡單なれば、中に

は往々隔靴掻痒の憾なきにあらざるも、其の主旨多くは要領を得て、今日吾人の參考となるべき事、亦少なしと爲さゞるなり、著者は何人なるか詳かならざれども、其の自序文にあるが如く、醫者を本業とする者であつて、書名に付せる滄浪は本人の號らしく思はるゝも判明ならず、乃ち序文に「愚也不肖、不能達天子諸侯大夫士之治生、且身貧賤、以疾醫爲治生、經歷民間、親見農工商賈之事、又多聞農工商賈之語、頗有得於民事矣、頃日輯錄其所見聞、名曰滄浪夜話、愚也處士、雖民事也、亦不可公論、故名夜話也」云々とあり、以て本書題名の主意と、著者の爲人を見るべし

本書は貴族院書記官長柳田國男氏の珍藏本を借寫したるものなり、此に一言して、氏の好意を感謝す

迂言

本書は國本・君道・祿位・兵農・學制・雜篇の六篇に分類し、國本に於ては「經濟の

要は本を正すにあり。本を正すは風俗を改めざる可らず」と云ふ事を主眼とし、其の改むべき弊俗の中、重もなる項目六つを列擧して、第一には國君より群臣に至るまで、其の行儀、尊倨高大に過ぎたること、第二は君臣皆誇張矜伐を務むること、第三は諸事を祕密閉固すること、第四は門地の高下を論ずること、第五は先格に因循すること、第六は君臣皆文盲不學なることの六箇條を改むべしと痛論し、夫れより君道に於ては君は國の本なる故先づ君上より尊倨祕閉の弊を矯めざれば風俗改まらず、財政隨て豐かなること能はざるべきを說きて、第一篇の意を補ひ、祿位に於ては諸士の格式及風俗を論じて、奢侈を禁ぜざる可らざることを述べ、兵農に於ては兵は諸士に限る可らず、純粹の商人を除き、農を主として兵役に就かしめ、工も亦之に使用すべしと云ふの主意を論じ、學制は人材の養育論にして、最後の雜論は先づ初めに生財の道は勤儉の二字にあることを述べ、此の勤儉の二字を外にして、生財の道を說くものは、皆邪說なりと妄斷し、夫れより一般に冗費を省くの急

務を論じて、在江戸諸士の員數を減ずるの必要を說き、又君主の內帑と役所の公金と判然たる區別を立てゝ、彼此混同すべからざる事を述べ、商人の金貸を業とする者は、莫大の利益を收むるが故に、貸金に一分の運上を課すべしなどゝ主張し、終りに儒者に俗儒・迂儒・眞儒の別あることを痛論し、卷末には附錄として總論・三戶・名器・醫師・社倉の五目を擧げて、大要簡單に奢侈を抑止するの必要を說きたるものなり

著者廣瀨淡窓、名は建、字は子基、通稱は求馬と云ふ、豐後日田の人なり、少くして龜井元鳳に從ひ、儒學を修め、業成り鄕に歸りて家塾を開き、徒を延き業を授くるに及び、其の名遠近に振ひ、前後藉に上る者四千人の多きに至り、人材彬々として其の門に出で、大村侯及府內侯の如き皆賓師の禮を以て之を厚遇す、安政二年々七十四にして歿せり、淡窓は詩人を以て目せらるるも、其の實詩人にあらずして自ら云へるが如き眞儒なることは、本書及他の著書義府・拆玄等を以て之を證徵すべし、現に本書の如きは事或は煩瑣に

渉るの雖なきにあらざるも、亦以て著者の抱負の一端を見るに足るものあらん

（注意）本書の自序文に於ては、著者は自分にあらざるが如く記しあるも、是れは故らに他人に假託したるものにして、其實太宰春臺の産語に於けるが如く、自身の著作なることは、著述目錄等の諸書及世上の傳説等に徴して明白なるのみならず、その序文に於ても亦暗に其の事を自白し居ることを推察すべし

上下富有の議　幷士着の議

本書は富國の政は別に妙案奇策あるにあらず、只だ勸農を第一に心懸け、量入爲出の四字に注目して、財を理するの肝要なる事を主眼となし、專ら水戸藩の經濟を說きたるものに外ならざるが如し、著者は藩中諸士の祿の不平均を矯正して其の勝手を取直すを以て、差當りの急務とし、之を實行するには、從來同藩にて行はるゝ諸士の祿には地方知行と物成取りとの二法ありて、之

が爲め所務に不平均を生ずるの弊害あるに付、之を改むるの仕方としては、原來地方知行は譜代の家來の樣なるものにして、物成取は年季奉公人を召遣ふが如きものなれば、主義としては地方知行是なりと雖も、今俄に地方知行に引直すことも出來ず、去りとて又悉皆物成取りに改むることは猶更ら不可なりとし、又折衷論として地方の名目は其儘に存し置き、所務は總て郡方にて取立て、其村の平均を以て給與すべしと云ふの說あるも、是又公平ならずとして、結局地方物成平均の三說得失、大岡右之通に御座候へば、右の御意味御斟酌被遊、御舊法に御本づき、第一に是迄の地方を御割替、眞の知行の意味に叶ひ候樣被遊、第二に是迄物成の分百五拾石以上は、不殘地方に御割替、第三に物成の厘を御下げ、御藏入の厘割に而被下置、小給御切符の分は、行々全切米に被遊候はゞ……上下平均可仕哉」と云つて、新たに他の折衷論を提出して、其の詳細の仕方を論述したるものなり

土着の議は諸士の城下住居は、種々の弊害を生ずる根本なれば、之を改めて

各其の田舍の知行地に、土着せしむべしと云ふことにて、此の問題は我が國の學者中、殊に徂徠などやかましく主張したることあり、以來何れの學者も、皆之を是認し居たることとて、水戸に於ては此の節之を實行せんとの企ありて、その利害及仕方等を著者に諮問せられたるに付、乃ち此の一篇を奉りたるものなるべし、著者の意見に依れば「武士民間に土着散在仕候はゞ、其弊に至候而は國主領主の下知をも用ひず、甚しきは謀叛等を企候様成行、兎角下づりの患可レ有二御座一候、又是迄の如く城下住居に而は、武士彌増衰弱に相成り可レ申段は、御承知被レ遊候通に御座候、仍而は今の時勢に而土着御取起しの思召被レ爲レ在候はゞ、封建の意を本と被レ遊、周の制度に御ならひ、鉢植武士にも無レ之、又謀叛等の憂も無レ之様御組立に罷成可レ然哉と奉レ存候」と論じ、其の組立と云ふは、別に六つかしきことにもあらず、卽ち「御城根廻り貳里位迄を限り、右の内に御家中夫々土着仕り、一統御城へ通勤仕候而可レ然奉レ存候、右様相成候へば、是迄の御城下あたり廣すぎて、御居り不レ宜候間、上

町に而は西町、並鷹匠町通の土手を境に仕り、下町に而は馬場の邊を限と仕其外はすべて鄉分に遊ㇾ被、是迄住居の御家中の內、直に其地に土着仕候樣にも可㆓相成㆒奉ㇾ存候㆒云々と云て、水戶の諸士を城下の周圍二里以內の地に、土着せしむべしどの意見なれども、千石以上大祿の人々は、右二里以內に限らず、遠在に屋敷を搆へて土着せしめ、尙其の移轉に要する費用に就きては

一　御家中不ㇾ殘土着と申候へば、誠に廣大なる事に而、御入用等莫大に可㆓相成㆒被ㇾ存候へ共、存之外左樣にも無ㇾ之、御家中百五拾石已上僅かに三百人餘に御座候間、一年に三拾人づゝ御取立に而拾年の內には不ㇾ殘土着と罷成可ㇾ申候、鄉村に而屋敷地御買上の御入用、幷右屋敷土地永代御年貢相減候間、不㆓容易㆒樣に候へ共、是以存之外に御座候、平均壹人へ屋敷地三反步を被㆓下置㆒候而も、三百人分九拾町に候間、不ㇾ殘上畠と見候而も、石數僅かに九百石の地面御買入に相成候義は、縱ひ餘程の御入用に候とも、一度にて相濟申候、共年貢代引け候へ共、九百石の年貢三ッ五分年平均に而、金百貳拾兩に御座候へば、五百石取の御家中一人召抱と被㆓思召㆒候へば、三百人の御家中不ㇾ殘三反步づゝの屋敷被ㇾ下に罷成申候事と奉ㇾ存候

と云ふの主意を述べたるものなれども、此の意見は實際遂に實行せられざり

しものゝ如し

著者藤田東湖は有名なる儒者にして、名は彪、字は斌卿、初め虎之助と稱し、後誠之進と更む。考一正水戸藩に仕へて彰考館總裁となる、東湖幼にして頴悟、稍長じて武藝を嗜み、甚だ讀書を喜ばず年弱冠を踰え、慨然として自ら感ずる所あり。遂に刻苦書を讀み。業就つて彰考館編修となり。續きて總裁の事を攝す、景山公封を襲ぐに及び、擢られて郡奉行となり。累進して側用人に至り。馬廻番頭に班す、當時内外多事の際に當り、東湖闔藩中に於て尤も重用せられ。入ては機密に參預し、出ては四方に應對し。議論風生じ、事留滯なく。藩主の眷遇特に渥かりしと云ふ。安政二年江戸地大に震す、東湖是の日を以て小石川の藩邸に歿す。年五十、著はす所は本書の外に。弘道館述義・常陸帶・東湖隨筆。回天詩史等。數部あり

新政談

本書は幕末の弊政を痛論し、英斷を以て根本的の大改革を行はざる可らざる事を述べ、其の改革の方法としては、第一に「經濟取締の個條」として城中奥女中を三分一に減じ、諸役所を廢合し、冗員を淘汰し、且つ天下の財源を開き、融通をに便にする事等を論じ、第二に「奢侈を禁じ風俗を正すの個條」として、諸侯の家內の江戸住居を止め、旗本は十里四方へ住居せしめ、其他諸侯の居邸・服制及供連等の事に及んで、夫れ〳〵制限を設けて、奢靡の風を禁止せざるべからざることを述べ、第三は「人材取立並撰方の個條」として、人材の養成・學校の設備等を必要とし、第四は「海防の個條」として、先づ初めに諸大名の身上を取直すを急務とし、大艦・大砲の製造を必要とする等の事を論じ、第五は「邊地開き方の個條」として、蝦夷の山林・川澤を開くの手順を說き、邊防を主とし、目前の小利を計らずして、多數の人民を移植すべきを主張し、それには、前條の如く大艦製造の必要ある事等を詳記し、第六即ち最後には「雜事の個條」として、金銀・米穀及常平倉の事を論じ、惡貨は物價騰貴の原因なれ

ば、早く蝦夷を開らき澤山の金塊を得て、善貨に吹替へるべしと云ふ様なる説を述べたるものなり

本書は水戸景山侯の諮問に應じて、其の意見を吐露したるものなり、篇末に卯十二月とあるは、本文に江戸の大地震の事を記し、此度御府下大地震云々の言あるに徴すれば、安政二年(乙卯)の事なるべければ、本書は其の年に上りたるものと思はる

著者藤森弘庵、諱は大雅、字は淳風、通稱は恭助、弘庵は其の號にして、晩に又天山と號す、江戸の人なり、弘庵少くして學を好み、笠間侯世子の侍讀となり、事を論じ權貴に忤ひ、致仕して筆耕自給し、家に儋石の儲なきも、晏如として講讀を怠らず、天保五年土浦侯の聘に應じて賓師となり、大に文教を興し、吏弊を革め、功漸く成らんとするに及び、故あり病に託して、江戸に歸り、帷を下して徒に授く、日ならず弟子大に進み、諸侯贄を執りて道を問ひ、國事を諮る者、其の門に充つ、文久二年々六十四にして家に歿す、

弘庵初め長野豊山に師事し、紫碧海、古賀穀堂等と交遊して、學益〻進み、世に博覧洽聞を以て稱せられたるも、平素訓詁に屑々たらず、専ら氣節文章を以て自ら許るし、嘗て曰く、士不幸にして志を當時に得ざれば、宜く言を立て不朽に傳ふべしと、又た以て其の志のある所を見るべし、著はす所は本書の外に海防備論三卷・弘庵雜談六卷・如不及齋文抄三卷・其他數種ありと云ふ

富國存念書

本書は紀藩の碩儒、仁井田好古の意見書に、同藩の御勘定吟味役幷に代官などの批判を付したる、僅々數葉の短篇に過ぎざれども、好古が其の存念書中に論ずる所は、頗ぶる卓拔超俗の意見にして、我國の學者中多く其の類を見ざるのみならず、歐米に於ける正統派經濟學説の弊竇すら暗に看破し去つて斯學の爲め別に新らしき徑路を開きたるが如き趣あるは、吾人の尤も敬服す

る所なり、乃ち好古は存念書の冒頭に於て、斷乎と俗論を排斥して、奢侈の一概に禁止すべからざる事を論じ、明の陸揖の說を引用して、個人の富と國家の事との區別あることを說き、又御城下（都會）と在中（村方）と各其專業を異にし在中は生產を主とし、城下は融通交易を主となし、以て都會と村方と聯絡して、相持にするが、事國の根本なることを述べたるが如きは、少なくとも當時に在りては大に見るべきの意見にして、其の一節を例證すれば左の如し

古今富國ノ道ヲ論ジ候ニハ奢侈ヲ禁ジ儉約ヲ勸候事定リタル道ニ御座候得共、久シク昇平ノ化ニ浴シ候風俗、一統自然ト奢侈ニ移候事、時世ノ勢ニ御座候得者、强テ是ヲ禁ジ候テハ人情ニ悖リ、悅服難仕御座候ニ付、是ヲ以國家ヲ富サン事、當時ニ於テハ難ニ相成儀ト奉ㇾ存候、其上山中僻遠ノ村々ニ至候テハ、元ヨリ貧困ノ場所ニ御座候得バ、力ノ限リ働候テモ、朝夕ノ煙ヲ舉カネ候者而已ニ御座候ニ付、奢ヲ禁ジ儉ヲ勸處ナドノ論ハ無御座候、治國ノ道ハ人情ニ從フヲ本ト仕候儀ニ御座候得者、時ヲ計リ俗ニ從ヒ、人情ニ順ヒ候樣仕樣事、當時ノ御要務ト奉ㇾ存候、明ノ陸揖此儀ヲ論ジ候テ、凡天地ノ間ハ財物ヲ生ズル其數有ㇾ之事ニ候得者、彼處ニ費スモノ有ㇾ之候得者、此處ニ其利ヲ得ル者有ㇾ之、一人一家ノウヘニテ申候ヘバ、儉ヲ務候ヘバ貧ヲマヌガレ候モノ可ㇾ有ㇾ之候得

共、國天下ニ通ジテ其勢ヲ論ジ候得バ爰ニアル物彼處ニ移リ、カノ處ニ滯ル物コヽニ來ラヌト申計ニテ、是ヲ以天下ヲ富スト申儀ニハ相成不レ申候、蘇州・杭州ナドハ天下第一ノ繁昌ナル處ニ付、飲食・衣服・宮室ノ類ニ夥敷費ヲナスモノ有レ之候得共、マタ是ニ依テ其利ヲ得テ渡世仕候モノ、幾萬人トイフ數ヲシラズ、此時ニ當テ聖人マタ出給フトモ、其風俗ヲ改テ唯儉ヲ勸ルノ政ハナシ給フマジ、四方輻湊スル處百貨集ルユヘ、人民其利ヲ得テ富ヲナシ易ク、繁昌ノ地ト相成候、是等ノ事ハ唯智者ト可レ論ト申說ニテ御座候、其論ズル所ニ泥ミ古ニ馴レ候、尋常ノ論ニクラベ候得者、時宜ヲ辨ヘ候卓見ト奉レ存候、是ヲ以當時ノ宜シキヲ相考候處、御城下・在中共主ト仕候處兩樣ニ相成、在中ハ貨財ヲ生ズルヲ主ト仕、御城下ハ百貨輻湊スル處ニシテ、コレヲ國中ニ融通シ、又他國ニ交易スルヲ主ト可レ仕儀ト奉レ存候、御城下繁昌シテ、百貨國中ニ融通仕候ヘバ、山中僻遠ノ地マデモ其餘澤及ビ候テ、自然ト暮シ易ク、御城下・在中相持ニ相成候儀、富國ノ御政ト奉レ存候

それより一々條項を擧げ、同藩の事實に照らして、實際的に殖產興業の仕方を記し、且つ此等の事は專ら村方に於て從事するものなれば、其の處々に於て生產したる物品は、各々其の最寄りに便宜の場所を定めて持出さしめ、其所に役所又は問屋等を設け置きて、至當の直段に買入れしめ、而して其所よ

り又城下に設けある役所又は問屋に迄り、之を統轄せしめて、夫れ〳〵需用のある方面に、手廣く賣出し、融通せしめんとの考案なれども、物に寄りては、必ずしも斯くの如く、專賣法に依らしむるの必要なく、其の生產者に於て勝手に賣捌かしむべく。又右の仕方の主意は藩中の必要品は、皆國產を用ひ、他國の品は藥種類及無據品の外、相成るべく之を用ひざる樣にすべしと雖も物に依りては、他國の品は安く、自國產は高くして、强て他國の品を禁止すれば、之が爲め一般に難儀に及ばんも計り難し、若し斯る場合あるに於ては、他國に於ける生產の狀况を糺して、此の難儀を救治するの仕方を工夫すべしと云ひ、又「絹紬ノ類ハ是迄御國產無御座候ニ付、右ヲ專ラ織出サセ、御國中ニテ用ヒ候事、只今ノ木綿ノ如クナル樣ニ爲仕度奉存候、其餘紙類・瀨戶物類ノ器物類諸ニ至迄ミナ同樣ニテ、御國產ノ品ヲ用ヒ、猶其品々多ク仕出シ候テ、他所ヘ積出シ候樣ニ仕度奉存候」と云ひ、最後に結論として「右之通御國中ニテハ御國產而已ヲ用ヒ候テ、他所ノ物ヲ用ヒズ、御國中ノ產物多ク

仕出シ候テ、他所へ積出シ候得バ、御國中ノ金銀他國へ出ル事無」之也、他所ノ金銀年々御國中ニ集リ來リ候故、一人一家ノ上ニテ申候得バ、貧キ者アリ富者モ有」之候得共、通シテ論ジ候得バ、金銀財貨年々ニ多ク相成、繁昌ノ御國ト相成可」申儀ト奉」存候」と云ふの主意であつて、此等宛然「マーカンチリスト」の口吻に似なりと雖も當時儒者の經濟說としては、稀れに見る卓見なりと云はざる可らず、蓋「マーカンチリスト」の思想は、歷史上或る時代に於ける世界共通の生產物にして、必ずしも西歐十六七世紀の特產物にあらざることは明にして、而かも我國の封建時代に於ては、何れも皆同樣類似の思想に支配せられ、夫の自給自足說の如きは、多くの學者の主張する所にして、此の一點は好古の論ずる所、必ずしも新奇の說にあらずと雖も、其奢侈儉約に關する俗論を排して、暗に消費の增進を是認し、一人一家を富ますと、國天下を富ますと、異なる所以を看破し、又村方の生產を奬勵すると同時に、其の捌口を便にするの方法を論ずるなど、當時の儒者としては、眞に得易からざる

の大見識なりと云はざる可らず、勘定奉行、代官等が此の存念書に付議して、桑を植付け、絹織物を織出すが如き「新規ノ業在中ハ勿論市中ニテモ相好不申」と云ひ、又桑楮を植付くれば「草苅ノ場ノ支ヘニ相成候筋モ有之」と云ひ、又「餘産ヲ以テ他ノ金銀ヲ引入候主法ニ付、右之業被行候バ御國益勿論之儀に御坐候得共、夫々通商之一件ニテ、勸農之餘業ニ御坐候へバ、其ノ得失私共ニテ研究難仕御坐候……御邦内ニテ他産ヲ不用、此方ノ餘産ヲ以、他へ無滯通商爲致候儀、自然ノ融通ニモ無之ニ付、如何可有御坐」と云ふが如き、一向主意の分らざる愚論を唱へて、好古の意見に反對し居ることを思へば、此の存念書は當局の採納する所とならざりしや勿論なるべし。編者は此の批判を讀んで、好古其人の爲め、竊かに同情の感なくんばあらざるなり

著者仁井田好古、字は伯信、通稱模一郎、始め恆吉又茂一郎と稱し、南陽と號す、助左衛門道貫の長子なり、助左衛門は海士郡加太浦の農、安永二年御用部屋寫物勤務に召出され、後御留守居番となり、祿二十石を賜はる、模一

郎幼より學を好み、十六歳學館の授讀となり、翌年侍講に擧げられ、續きて又會計官に參與す、是れより累進して遂に參政に列し、藩政に獻替する所少なからず、嘉永元年々七十九にして病歿す、嘗て紀伊續風土記新撰の惣裁となり、鞅掌三十三年、遂に百九十二卷を大成し、就中名山・舊跡・碑文の部の如きは、概ね皆模一郎の手に成れるものなりと云ふ、著はす所は既記の外、有名なる毛詩補傳(本書は學者間に定評ある大著作にて、殊に安井息軒など大に之を稱揚し、其の家塾の課本として採用したりと云ふ)・周禮圖說・稽古雜編・上呈八論等數部あり皆有用の書なり

貨幣祕錄

本書は金銀座の濫觴に筆を起して、金銀錢の通用に關する事、及關係の雜事を諸書に考証詳記したるものにして、貨幣史の資料として、一讀の價値あるものなり、書中に「金銀は諸物を運輸するの具なり、故に諸物に金銀の數位相

對して、其半を得るを至極とす」と云ひ、又「當時物價の騰貴を以獨り其罪を金銀の品位輕重に歸して、多少の論に渉らざるは、未だ其實を盡さゞるの論なり」など云へるの言に徴すれば、著者は貨幣量數說の主張者なるべし、終りに貨幣改鑄の事を論じ、屢〻改鑄するの非を唱へ、且天保三年より同十三年に至る、十一年間に於ける、吹替の出目高（改鑄に依り政府の利益したる高）を計上して、其の眞の利益にあらざることを説けるなど、種々の瑣事を揭げたり、著者佐藤治左衛門の傳は詳かならず

本書は溫知叢書に收錄して、其の解題中に、水野越前守執政の時、勘定所に命じて、編述せしめたるものならんと記し、又當時の有司岡本近江守・向山源太夫等の手に成りたるものゝ如く推定しあるも、現に大藏省に藏せらるゝ寫本には、佐藤治左衛門の著作としてあり、又其の文意より見るも幕府の當局の命に依て編述したるものにあらざることは、略〻推測し得らるべし、又同叢書の解題には大に此の書を稱贊し、「後世德川氏一代財計の大體ヲ知ラ

ント欲スル者、此書ニ據テ以テ之ヲ詳カニセバ、必大ニ裨益スル所アラン」など評したるも、是は勿論過稱ならん

金銀圖錄續編

本書は近藤守重の編纂にして、久しく坊間に發行せる有名なる金銀圖錄の續編として、編纂したるものなり、金銀圖錄は明和の南鐐貳朱判に止めあるを以て、本書は其の以來卽ち文政貳分判金より、天保の南鐐壹分判、及其の異品に至るまで、凡二十五品を擧げて、簡單に圖解したるものに過ぎざれども、金銀圖錄を見る者の參考として此に收錄す、本書は大藏省本を借寫したるものにして、著者は詳ならず

收米權上書

本書は米商の奸策を攻擊し、米價を左右する權を彼の輩に放任するは、國家

の大害なるに依り、斷じて其の權を上へ取り上ぐべしと云ふ、頗ぶる痛快の意見を述べたるものにて、別に奇論新說はなけれども、亦一讀の價値あるものなり、本書は先づ初めに於て米權の町人に落ちたる由來を述べ、夫れより町奉行が享保六年より、同九年に至る間に、數回法令を出して、米市場の取締を嚴達し、殊に空相場などは、斷然之を禁止しありたるに拘はらず、享保十年に至り、例の奸商紀伊國屋源兵衞・大阪屋利右衞門・野村屋甚兵衞三人の願出に依り、江戶並大阪に於て、米相場開始を公許せられたる事を述べ、引續き米相場の取締段々と弛廢し來り、遂に享保十五年に至りては、奸商共公然と恐れ憚る所なく、意の儘に相場を事とするに至れるを憤慨し、「米穀糶昂低之權柄は、官にて御操り可被爲在筈之所、百年以來大坂奸商共の手に落候は苦々敷儀に有之、右來歷は前條に述候通りに御座候、惣て和漢共古來流弊之不可救もの、此儀に類するもの餘多有之候得共、かく迄奸商共の術中に陷り候は、實に識者の流涕長大息に御座候、夫より大坂の富商・大賈共富諸侯に

齊しく、同所の諺にも、辰巳屋久右衛門を細川家と同じ身代と申候程の勢にて、天下の富大坂に歸し、錦衣玉食の豪家奢、彼等の上は有之間敷候」などと論じ、又是迄米權商賈の手に有之候ては、奸商ども聊の風雨陰晴にも、心儘に價を高下し、一時に大金を得、其餘毒は武家萬小前並末々にて請る事なり、たとへば町人の內、持正米一萬石之處、五萬石之空米手形賣出し、大利を得、翌春相場下落之節、右之切手買戾し、高價之節切手賣出し申候、或は有米を匿し置、種々の詐術至らざる所無御座候」と述べ、又更らに「大坂堂島の儀は不實商と唱へ、賣繫・買繫・流相場・帳合空米・切手遣米・等天下之大博奕に御座候、小博奕は嚴重に被禁、大博奕を其儘被差置候は、酒狂之小科を戮し、君父を弑し候大逆人を御赦し被置候と、同日の論には當り不申哉……堂島遊民の內狀屋と唱へ候ものは、諸國へ風說種々申觸、大政を評論し、人心を惑亂爲致候ものにて、聖王の誅をまぬかれざる者に御座候」などと遺憾なく、米相場の弊害を剔抉し來りて、結局國家は斯くの如き大害惡を放任すべき事にあらざ

るが故に、米權は一切上へ取り上げて、政府の專占となし、宛も今日の烟草專賣法の如くなさんとするのであつて、其の考案は

一　町人共飯米の儀一町宛組合、高何程と可二申出一、二ヶ年兩度にも叉々三度にも御拂可レ有レ之候

一　町人小前末々、當日限小買致し候者は、穀屋より可二買取一事

一　穀屋の儀は、是迄の通り勝手に商買可レ致、尤賣出し先凡人別見積、御拂米可レ有レ之事

一　穀屋共店方小賣直段は、其時々御役所より申渡可レ有レ之事

一　年來米相場致渡世候遊民共、早々良民に立戻り外商買可レ致、三ヶ月相立候ても、是迄の姿に罷在ものは、召捕吟味可二申付一事

右之條々致二違背一、或種々の故障、其外浮說等申唱候者は、其品に寄り急度御仕置可レ被二仰付一もの也

と云ふのである、而して此の法を實行するに就き、米の買上げは如何がするかと云へば、其の手段甚だ不明瞭にして、徹底せざる所あるも、兎に角先づ大坂への出米高等を積りて、左の如くなさんとするのである

大阪表出米、並御益凡積

大阪表一ヶ年諸國出米高

一　凡米百三十萬石　　但中國・西國・北國より積立米、冬十一月頃より翌年七月頃迄

此代金百三十萬兩　　但し平均一石に付金一兩替

大阪表一ヶ年御益金高

一　金十三萬兩　　但是御挊米御利分、平均壹割と見込

右之外江戸表之出來石數は夥敷儀に可ㇾ有ㇾ之候得共、江戸表の儀は篤と不ㇾ相辨ㇾに付除ㇾ之、其外京都は爲ㇾ登米一ヶ年分凡四十萬石、內大阪より爲ㇾ登米四分通も可ㇾ有ㇾ之歟、其外大津・兵庫・伏見・堺・奈良、いづれも御益は大阪に準じ申候

右大阪表御買米御手當金、凡百萬兩位御用意可ㇾ有ㇾ之處、拾萬兩にて相辨じ候御仕法相考、其外御仕法眼目の處、大略相考罷在候得共、是は御尋の上可ㇾ申上ㇾ候

此の仕法にて江戸は分らぬ故、之を除くなどとは、甚だ幼稚なる申分にて、國家の大經營とも、思はれざれども、而かも上書者の根本思想は、大に取るべき所なきにあらず、但し此等の問題は之を實行せんとするに於ては、中々

容易の事にあらず、乃ち此の上書の如きも、實行よりは寧ろ一の理想として、其の價値を認むべきのみ

本書の著者は何人なるや詳ならされども、末文に拙著隱居放言云々の言あり、又私學友京都町奉行組與力平塚表次郎著述之蠲貸私議云々の言あるを見れば、著者が京都の人にして、一廉の學者なるべきは、略ゝ之を推察するに足れり、此に著者の學友とする平塚表次郎と云ふは、本卷に收容せる「末黑のすすき」の著者平塚飄齋の事なるが如く思はるゝも、明確ならず、若し果して同人とすれば、本書の終りに卯九月とあるは、慶應三年の事にして、本書は實に其頭に何人にか上書したるものたるが如し、且らく記して博識の示教を待つ

當今金錢米布江水通價考

本書は初めに我國の古代に於ける金銀通用の事を略記し、夫れより諸書を引

用して、米錢の相場を詳かに考証したるものなれども、書中の記事は、主として江戸并に水戸間の事柄なれば、之を稱して江水通價考と云へるなるべし、別に注目を要する程の記事なしと雖も、物價史の資料として、多少の價値なきにあらざるが如し、而して著者は何人なるか分らざるも、本書を東海濱田の官舍に於て認めたる由を記しあると、又本文の記事とに就て之を推測すれば恐らくは水戸の一郡吏なるべし

減銅錄

本書は新井白石の本朝寶貨通用事略・佐久間甚八の天壽隨筆（此の書は本叢書第二十八卷に收容したる草間直方の三貨圖彙坤卷に全文を轉載せり）及青島俊藏の光被錄（本書も同上三貨圖彙中にあり、本叢書第二十八卷の解題を參照すべし）中より、我國慶長六年以降天明三年に至る迄、長崎より海外に

出でたる銅の總高を記るし、夫れより著者が長崎に在勤中に取調べたる事實として、天明四年より天保十四年に至る間の輸出高を計上して、銅の輸出の多きを慨歎し、續きて又本多利明の豐饒策（是れは本叢書第十二卷に收容したる經世祕策と同書なるべし）青木定遠の答問十策（同上第十二卷に收容せり、著者花井一好が龜井道載の著作とせるは誤なるべし。太宰春臺の經濟錄等を引證して、銅の輸出の制限せざるべからざる事を論じ、最後には又重ねて正德五年より文政三年に至る間に於て、幕府が輸出を許可したる、其の都度々々の高及仰渡書様のものを列擧し、記事甚だ雜駁なれども、又大に參考に資すべきものなきにあらず、著者花井一好は虎一と稱す、嘗て無人島渡航の件に關し、渡邊華山・高野長英其他蘭學者等と竊かに結んで大に爲す所あらんとせるを、一好同盟に背きて、其の計畫を幕吏鳥居耀藏に密告したることあり、時人大に之を卑しとす、天保十四年幕命を帶びて、長崎に在勤せり、是れ蓋し高島秋帆等の行動偵察として、派遣せられたるかと推察せらる、

彼が弘化二年に江戸に歸りたることは、本書中に記する所なるも、其後の消息は編者之を詳にせざるなり

神州論

本書は簡單なる我國の產物誌なり、金銀・水產・穀類・織物・藥物等の特產地及其の品質等を記載論評して、我國の富饒なる他國の物資を仰ぐに及ばざることを說きたるものなり、別に重要のものにあらざるも、前記滅銅錄の中に神州論附錄云々とあり、本書は本篇のみして肝心の附錄を逸し居れども、參考として此に收容せるなり

末黑のすゝき

本書は著者の隨筆なれども、書中の記事は社會經濟に涉ること少なからず、頗ぶる興味あるものなり、就中二條御城在番衆の交代每に、堀川通西南の數

町は、所謂大番衆并に彼に從ふ下郎鎗持までが、大に威張り廻はつて、町家の者を蟲ケラ同樣に取扱ふて、非常に迷惑を掛け、殊に其際彼等の爲めに宿割を申付けれらたる者などは、嘗に莫大の費用を要するのみならず、取扱上少しの手落にも喧しく怒鳴り飛ばされ、食事の度毎には、酒肴を出さゞれば機嫌惡しく、甚だしきは其宿の妻女を酒の相手に呼出して戯れ、又は遊里へ案內を命じ、金錢の無心を云掛ける等、言語同斷の振舞に及び、町內にては宛も疫病神に祟られたるが如き思を爲せることを詳記し、又奉行所の目付・與力・同心など云へる俗吏の貪濫暴惡を記るしたる所に、「その頃の落し話に、所は室町通の一富豪へ夜盜三人押込けるに、亭主早く起出て袴をはき燭臺をともし、是は能こそ御來臨被ㇾ下難ㇾ有と、三人を坐敷へ案內しけるに、兼々用意致せしや、毛氈を敷速かに酒肴を出しもてなす事甚敷、盜賊も不㆓存寄㆒事故痛み入、そこ／＼に呑喰を仕舞立歸らんとする時、亭主百兩包みを三寶に乘せて三人に贈りしかば、盜賊も大に氣毒がり、ケ樣に馳走に成りたる上金を囉ふ

ては、何とやらお目付の御役人様のよふ也と申せしとぞ、誰が作爲せしや、賊吏頂門の一鍼とも云ふべし」などの珍話ありて、幕吏の暴横の狀、目睹するが如し、卷末には三輪執齋の大學和解「生產有大道」の一節と、林子平の海國兵談の序文及其の水戰に關する一節等を抄錄したるものあり

著者家茂喬、姓は平塚、茂喬は其の名にして、瓢齋と號し、天保年間京都の町目付を勤めたる人にて循吏の名あり。學を好み經濟に志し、著はす所は本書の外に古今米錢考(板本にて流布す)・自警錄等あるも、編者は未だ其傳を詳にせず

救急或問

本書は初めに於て、人君たる者は、修身明德を以て、治國の本とすべきことを說き、次ぎに人才を登用するの要を述べ、人物を見るは敢て難事にあらず、「其言フ所ト國トノ爲ヨリ辭ヲ立ルハ正忠ノ人ナリ。專ラ君ノ爲メヲ主ト

シテ民ト國トヲ次ニスルハ小忠ニシテ、治國ノ大體ニ通ゼザル人ナリ」と喝破したるが如きは、今日の意味に於ける我が經濟學には、直接の關係なけれども、コレより進んで官制法令などの事に及び、政は簡易を至善とすると云ふの意を明にし、論語にある奢則不遜、儉則固、與其不遜也寧固の言を引きて「天地ノ物ヲ生ズルコト限リアリ、有限ノ財ヲ以テ無限ノ欲ニ奉ゼバ、天下ノ富ヲ以テ一人ヲ養フトモ窮セザルコトヲ得ンヤ」と云へる、儒者共通の思想を以て、節儉の必要を說き、又經濟上風俗の改良を急務とし「風俗ハ政事ノ田地」と云ふことを肯定して「如何程ノ善政ニテモ風俗惡シケレバ行ハレズ、關東ニハ佃戸ノ妻ヲ迎ルニ二十金餘モ費ス處アリ、是レニ因テ貧窮ナル者ハ一生獨身ナルユヘ、終ニハ博徒無賴ノ者トナリ、家ヲ潰ス、二毛・下總等ニ荒地多キハ、十分ノ二ハ此ノ譯ヨリ起ル」と論じ、夫れより開墾の必要、租稅の輕減を是なりとするが如きは、普通の論なれども、遂に「國ノ貧シキヲ憂ヘテ利ヲ求メ融通ヲ善クスルヲ專トスルハ小人ノ常ナリ」と斷言し、例の

耶律楚材が起二興一利一不レ若レ除二一害一と云へるを、千古の名言なりとして、極端の消極主義を主張するに至りては、儒者の常套、別に怪しむに足らざるべしと雖、前記仁井田好古の存念書に對照すれば、其の意見は正反對にして、而かも本書の著者が好古の毛詩補傳を嘆稱して、其の家塾の課本としたりと云ふことは豈一奇事にあらずとせん哉、蓋し著者は嘗て好古の存念書なるものを一見したることもなかりしならん、若し之を一見したらんには、著者は必ず好古を以て尤も卑しむべき小人となして、毛詩補傳までも唾棄したるなるべきを疑はざるなり

著者安井息軒、名は衡、字は仲平、息軒は其の號、日向飫肥の人なり、年甫めて冠を踰え、郷を出でゝ大坂に遊び、篠崎小竹に見ゆ、小竹與に語りて大に驚き、詩を賦して之を推奬す、後江戸に至り昌平黌に入りて、松崎慊堂に從學す、文政九年飫肥侯擧げて侍讀となす、明年藩學を創建するに及び助教となり、兼て國政に參預す、天保六年職を辭して東行し、再び昌平黌に入り、

尋て芝增上寺の僧寮に寓し、刻苦研鑽、大に得る所あり、此時飫肥侯復た息軒を起用して參政とし、機務に參預せしむ、嘉永年間遂に幕府に召されて昌平黌の儒員となる、舊制に林氏世々學政を掌り、經を説くは、專ら朱註を用ふ、息軒古學を崇尚して、顧つて此の選に膺る、蓋し異數なりと云ふ、慶應三年幕府政權を奉還し、明年王師東下するに及び、一旦地を郊外に避け、幾もなく又東京に歸り、帷を下して弟子に教授し明治九年家に歿す、年七十八、著はす所は管子纂詁十二卷・左傳輯釋二十一卷・論語集說六卷・書說摘要四卷・孟子定本六卷・戰國策補正二卷・讀書餘適二卷・睡餘漫筆三卷・息軒文鈔六卷・靖海問答・料夷問答・外寇問答・軍政或問・忍艸各一卷・其他三禮毛詩諸書の注釋にして、未だ脱稿せざる者、若干卷あり、皆家に藏すと云ふ

高島喜平上書

本書は著者が有名なる洋式の砲術家だけであつて、其の主張する所は專ら洋

法に倣つて、銃砲の改良を急務とすることを論じたるものなれども、書中貿易論に渉る廉々も少なからずして、著者は一種の自由貿易論者なるが如し、乃ち其の説に曰く

蠻夷互ニ有無ヲ通ジ交易仕候儀ハ、彼ガ國之習俗常ト仕候儀ニテ、此品ヲ以テ彼品ニ易ヘ其利潤ハ互之事ニテ、敢テ一國之利ヲ貪リ候ト申趣意無レ之、交易ハ各國民ヲ撫育致シ候爲之儀ニテ、子細無之事ト手輕ニ相心得候儀ニ御座候、於ニ本邦ニ御深遠之御趣意モ有レ之、御許容難ニ相成ニ處ヨリ甚齟齬仕候意味ニ御座候處、彼等本邦之產物多少有無委敷次第モ相心得不レ申、譬ヘバ有物ヲ以テ與ヘザル樣相心得、憤怨ヲ抱キ候儀ハ、唯々交易御免之一事ニ而已相抱リ居候儀ニ御座候處、若願之通御免ニモ相成、雙方商法取組、代物ニ可ニ相成ニ產物等委敷承知仕候樣相成候場合ニ至リ候得バ、彼等相好候品モ無レ之候ニ付、却テ後悔可レ仕程之儀ニ御座候、云々

と論じ、交易を、彼等外國人が好みの通、自由に許可したる場合には、彼等は日本に交易すべき品物なきにアキレて、直ちに退出するに至るべければ、何にも仰山に彼等の願出を拒絕して、許るす許るさぬなど騷き立つて、却つて之が爲めに、彼等の感情を害するに及ばず、ドシ／＼自由に許るして、米

穀なり石炭なり、望み次第に、交易として差出すべし、其の間に我國の兵備さへ充分に整ひ居れば、商賣は許るしたりとて、聊かも後年の患なしと云ふ事を、痛切に述べたるものなり、此の上書中「本邦之人情ニテハ他ヲ學候儀ヲ耻ト仕候得共」云々の言あれども、爾後六十餘年の今日に至りては、却つて他を學ばざるを耻とするの世の中とはなれり、人情の變遷豈恐るべきにあらずや

高島秋帆、名は舜臣、通稱は糾之丞、又喜平、後四郎太夫と更む、長崎の人なり、秋帆少より火技に志し、此に關する書籍・器械類は悉く之を和蘭に購求し、譯官などと與に其の術を研究して、大に發明する所あり、乃ち日本の兵器は、到底今日の用を爲さゞることを痛論し、專ら西洋の砲術を主張す、天保十二年、秋帆幕命を奉じ、大砲四挺・小銃五十挺を携へて江戸に來る、有司其の術を實撿せしめて、大に用ふべきを覺り、更らに秋帆に命じ、砲術に限らず、凡て軍備に充つべきものは、猶搜索して申訴すべきを諭示し、白銀貳

百枚を褒稱して、與力の列に加ふ、幾もなく長崎に歸り、同志と與に益〻其術を研究して、大に國事に盡くさんとし、偶〻人の嫉む所となり、天保十四年江戸に檻送せられ、將さに叛逆に問はれんとするの時、參政某の陳疏に依り、僅かに一死を免かれて、追放に處せられ、猶嫌疑ありとして、安部某の家に幽閉せらる、嘉永六年赦に逢ひ、復た幕府に用られて、兵制改革の事を担任し、慶應二年江戸に歿す、年六十九

佐久間象山上書

本書は敕命に應じて、奉答したる意見書の如く記しあれども、書中の文意を見れば、幕府へ呈出したるものかとも思はれ、其邊は判然ならず、又著者は元來鎖國主義の論者なれども、幕府に於て旣に貿易交通を許容したる以上は、今更ら致し方なしとて、其の善後策を唱へ居るが如くなるも、朝廷に於て又愈〻攘斥とあらは、ソレも贊成なりと述べ、而して又朝廷の敕宣に、外國を指

して戎狄夷狄などゝあるは宜しからざる事にて、全體學術・技藝・制度・文章等、何に於ても、我が國より遙かに備はりたる有力の大國に對し、斯くの如き稱呼を下すことは不都合なりと論じ、又殊に「西洋の貿易理財の術御取用ヒ御老中様ノ御内ニテ御掛リ被レ爲レ定、公儀御船ヲ以テ御定額ヲモ被レ爲レ立、不斷御國ヲ始メ五世界ヲ往來シテ彼民ト貿易シ御出方ヲ以テ防海ノ入費、外蕃御接待ノ御用途ニ被レ爲レ充度儀ト奉レ存候」といふが如きは、前記高島秋帆の意見と略似たる樣なれども、象山の說は甚だ不徹底にして、眞に開港主義であるや否、甚だ不明瞭なりと云はざる可らず、又此の上書中に「貴賤尊卑ノ等ハ天地自然ノ大經ニ有レ之、侯伯ノ御身ニ護衞ノ儀法御座候モ、是又禮文ノ當然已ムニ容レザル所ト奉レ存候、別シテ皇國ニ於テハ、貴賤尊卑ノ等殊ニ顯ナラザルコトヲ得ザル深意御座候儀ト奉レ存候、服色ノ御制度御正シ被レ遊、御役名モ末々胥吏ノ分ニ至リ候迄、盡ク典雅ニ御更定被レ爲レ在、御文書類モ各其人ヲ被レ爲レ選、御辭命御修飾御座候テ、イヅレノ國ニ散在候テモ、後代迄外人ノ誹議ヲ

不レ被レ爲受候樣ニコソ、奉二望願一所ニ御座候、然ルニ是迄ヨリ更ニ御易簡ヲ被レ爲レ尙、諸侯樣方御綿服ト申御事、天下甚不レ奉レ願儀ト奉レ存候、且御富有高貴ノ方樣ニテ、木綿・紬等ノ御粗服被レ爲レ召候時ハ、其御下風ニ被レ立候上中ノ方々モ皆此服ヲ被レ求候左候、時ハ木綿・紬何ニヨラズ、大抵年々天下ニ定數御座候ニ付、下等貧賤ノ者ニ引足リレ不レ申、其價端的ニ引揚リ、迷惑仕候者少ナカルマジク」云々と云へるなどは、象山に不似合の愚說の如くなれども、嘗て聞く所に依れば、彼は平生頗ぶる修飾家にして、威風儀容を重ずる人なりしと云へば、此等の說は全く彼が本色を表彰するものなるべし

佐久間象山、名は啓、別に又大星と名く、字は子明、象山は其の號、通稱は修理と云ふ、信濃の人なり、象山幼にして穎悟、學を好み神童を以て稱せらる、十五歲にして略〻六經の大意に通ず、稍〻長じて豪邁不羈、經濟を以て自ら任ず、天保十年江戸に出で〻、林述齋・佐藤一齋等の門に出入し、時の名士梁川星巖・渡邊華山等と交遊せり、同十二年藩主眞田侯、閣老となり、出で

て海防の事を督するに及び、象山を以て顧問に備へ、大に參劃する所あり、續いて藩主其の職を退くに當り、陪從して郷國に歸り、郡中監察となる、幾もなく再び江戸に出でゝ、木挽町に僑居し、子弟を集めて教授す、安政年間、門人吉田松陰の事に坐して、獄に下る、且くして赦されて松代に歸り、望月某の別業聚遠樓に屏居す、元治元年京師に出て、薩長士人の間に周旋して、國事に奔走す、時に水戸藩の志士、亦京都に入つて、攘夷の詔を請はんとすると聞き、疏を懷にして山階親王の邸に至らんとし、途上遂に刺客の爲めに殺さる、實に此年七月十一日なり、年五十四

治本策

本書は、敦教・改革・省員・禁姦・安民・成俗の六目に分ち、俗を移し民を化するを以て、經濟の要旨とすることを説きたるものなり、書中に説く所は「今日人心の淳厚ナラザルハ甚ダ憂フル所ニシテ困究ハ憂フルニ足ラズ」と云ふ、又

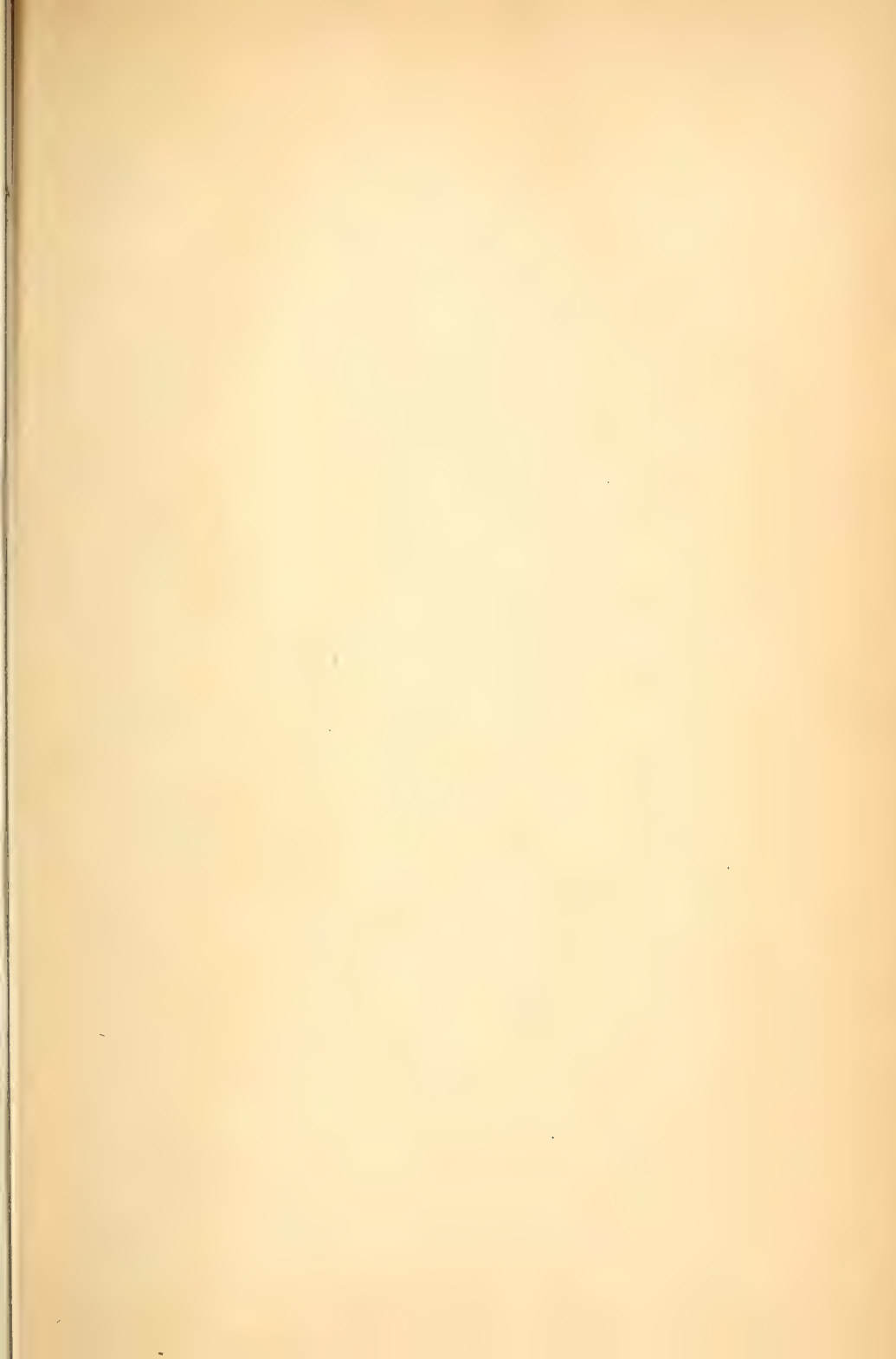
「近年有司・小吏官物ヲ私シ、或ハ市中ニ掠竊スル者アリテ咎ヲ蒙リ家ニ錮セラルヽ者多シ、是皆飢寒ニ迫リテ然ニアラズ、孰レモ廉耻ノ風ヲ失ヒ僥倖ヲ求ムルヨリ大辟ニ陷ルモノナリ」と云つて教化の急務を説き、ソレより又「大賈ヲ抑ヘ小商ヲ擧ゲ、大農ヲ抑ヘ小農ヲノバス」の策を論じ、遂に極端なる節儉論などを主張するが如きは、皆此の時代に普通の説なれども、製紙に澤山の米を消耗するの弊害を記するなどは、聊か耳新らしき事實にして、之が爲め一の法令を設け「紙幾個ヲ出ス時（自國外へ輸出スル時）ハ歸帆毎ニ必穀幾個ヲ求メ歸ルベシ」と云ふの制を定むべしと論じたるは、又一風變りたる意見にあらずや、此等の點より推測するに、著者岡本信克と云ふ人は、土佐の人らしく思はるヽも、其の傳は詳かならず

大正六年一月

瀧本誠一

解題終

制地圖解抄

色川東海著

制地圖解抄

東海色川先生口授　門人筆記

謹デ皇朝ノ古昔ノ制地ノ法ヲ稽フルニ、大方六尺ヲ歩ト云ヒ、二百五十歩ヲ五十代ト云ヒ、二千五百歩ヲ五百代ト云フ、孝德天皇大化年間ニ改革リテ、大方五尺ヲ歩トシ、三百六十歩ヲ一段ト云ヒ、十段三千六百歩ヲ一町ト爲給ヘリ、然レドモ地面ニハ廣狹ノ違アルニ非ラズ、五百代ノ地ト一町ノ地ト全ク同ジクシテ、唯六尺ノ歩ノ五尺トナリタル而已ナリ、此故ニ五百代ノ米二千五百升ト、一町ノ米三千六百升ト亦同ジクシテ、唯升ニ大小ノ差ヒアル而已ナリ、其積實ハ異ナラズ、日本紀・續紀・令義解・集解・式・格・拾芥抄・口遊、其餘古今諸書ヲ通觀スレバ、上下二千年間ノ沿革甚著明也、皇朝量地尺ハ舊記ニ「爲ニ度レ地令ヒ便、而尺作ニ長大ニ」トアリテ、姫周尺ニ倍セル尺ナリ、（姫周尺ノ事ハ予所見アリ、別ニ考ヲ著ス）此故ニ皇朝四十丈ノ地ハ、姫周八十丈ノ地ナリ、皇朝五百代二千五百歩モ、一町三千六百歩モ皆姫周ノ一萬歩ノ地ナリ、皇朝一町ノ穫稻五百束ノ米モ、周田百畝ノ粟百鍾ノ米モ亦同ジ、皇朝一歩ハ姫周ノ四歩ノ地也、皇朝ノ古量ノ五合ノ米ノ重ノ一斤ナルハ、姫周ノ四升ノ米ノ四斤ノ合ヒタルナリ、三代格ニ「稱量一同」トアリ、田令集解ニ、「十五束者成レ斤」トアルハ是ヲ云ナリ、皇朝ノ法ト姫周ノ法ト脗合スルコト此

ノ如シ、周尺ヲ考ル人和漢ニ多シト雖ドモ、諸書皆未タ謬ヲ免レズ、一撮ニ足ラズ、豈ニ傳來ノ古法ヲ祖述シテ、確ニ正シカル者ニ及ブ者有ムヤ　次下ニ制地ノ法ヲ圖解セリ、算計考窮シテ大人君子ノ睿智ヲ以テ定メ給ヘル古法ノ精妙ノ辨知スベシ、村夫子曲學者ノ周漢隋唐ノ制度ヲ詳ニセズ、皇朝ノ制度モ辨ヘズ、是ヲモ知ラズ、彼ヲモ知ラズシテ、杜撰妄說セル俗書多シ、惑ハサル、コト無レ、元明天皇和銅年中、權衡度量ヲ天下諸國ニ頒下シ玉フ、虞書ニ、律度量衡ヲ同クストアリ、禹ハ力ヲ溝洫ニ盡ストイヘリ、講明セズハアルベカラズ、況ヤ古法ヲ解シ得レバ千古周漢ノ度量ノ凝結モ、制地ノ法モ一時ニ氷釋ス、豈ニ愉快ナラザランヤ　仁德天皇紀曰、墾田四萬餘頃、百姓寬饒、無凶年之患、法王帝說曰、播磨國揖保郡佐勢地五十萬代、萬葉集曰、五百代小田、政事要略曰、令前熟田百代、令集解曰、百代之租稻二束者、二段租也

第一

皇朝制地五百代圖

五代　五代　五代　五代　五代　五代　五代　五代　五代　五代

此圖一格ヲ五代トス、五歩ヲ一代ト云フ、朝野群載ニ、四十丈ヲ町ト云フトアリ、一歩ハ八尺ニテ、此尺ハ今ノ小尺ナリ、今ノ大尺ヲ以テ八尺ヲ定レバ、六尺六寸有奇ナルヲ略シテ六尺ト云フ、周ノ步法モ小尺八尺ニテ、大尺ニテハ六尺六寸ナル事ハ、周禮ヲ讀ミテ知ルベキ事ナリ、猶周田ノ條ニ精ク云フベシ、凡テ此書ノ圖古法ニ依リテ、四方四十丈ニ作リテ、其內ノ步積ノ多少大小ノ沿革ヲ著ハシ一見易カラシム、大槪ヲ五百代ノ地トス、大化ニ到リテ十段トシ一町ト號ス

五代　五代　五代　五代　五代　五代　五代　五代　五代　五代

五代

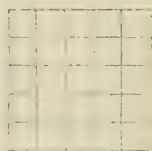
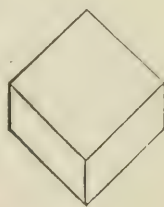
五代ハ二十五步ナリ、周田一畝百步ノ地ハ、此五代ノ地ト全ク同ジ、周尺二尺ハ此一尺ニ同ク、周田四步ハ此一步ニ當ルガ故ナリ、周田百畝ノ粟周量六斛四斗ノ米ハ、此古量ノ二斗五升ナルカ、又此ノ五代ノ米ト同ジ、周田一步ノ米ハ周ノ一斤ナルニ、之ヲ四倍スレバ則此ノ一斤百六十錢ナリ、神聖君子行ヒ玉フ、制地權衡度量ノ古法ノ微妙ナルコトヲ窺フベシ

此等ノ書ニ依リテ、先上世ノ田法租法ノ大略ヲ観ルベシ

第二

大化改新制地之圖

長三十歩 ○一段三百六十歩 廣十二歩	長三十歩 ○一段三百六十歩 廣十二歩	長三十歩 ○一段三百六十歩 廣十二歩	長三十歩 ○一段三百六十歩 廣十二歩	長三十歩 ○一段三百六十歩 廣十二歩
長三十歩 ○一段三百六十歩 廣十二歩	此圖十段ヲ一町トス、前ノ五百代ノ地ヲ此ニテ一町ト云ヒ、五十代ノ地ヲ此ニテ一段ト云ヒ、五代二十五歩ノ地ヲ此ニテ三十六歩トス、是以テ前ノ二百五十歩ノ地ハ、此ニテ三百六十歩トナリ、二千五百歩ノ地ハ此ニテ三千六百歩トナレリ、然レドモ五百代ノ地面ト、一町ノ地面ト全ク同ジクシテ、少シモ增損セルニ非ズ、唯前ノ大方六尺歩ヲ此ニテ五尺トシ給ヘルノミナリ			

一歩之圖

歩法令大尺方五尺
政事要略所謂滅大升也、

容當二京量五合五勺五々一粟一升舂
爲二米五合一、重大半斤

孝徳天皇大化二年正月改新之詔曰、凡田長三十歩、廣十二歩爲レ段、十段爲レ町、町租稻二十二束ト、日

本紀ニアリテ、爾前

第三

白雉三年制地之圖

長二十五步
○一段二百五十步
六十四

長二十五步
○一段二百五十步
六十四

長二十五步
○一段二百五十步
六十四

長二十五步
○一段二百五十步
六十四

長二十五步
○一段二百五十步
六十四

長二十五步
○一段二百五十步
六十四

此圖ハ大化ノ制ヲ少カ改革シ給ヘル所ヲ示ス、段ト云ヒ町ト云フハ、大化ノ制ノ如クニシテ、步法稱量租法ハ、大化已前ノ古法ニ復シ玉ヘリ、此故ニ此圖ノ一段ハ古法五十代ノ步積ニ同ジ、一町ハ五百代ノ步積ニ同ジ、束把稱量租法ハ悉ク古法ノ如シ、政事要略ニ、令前熟田五十代、令集解、熟田百代ト云フハ此ヲ云フナリ

一步之圖

令大尺方六尺、步法如二大化已前古法一

量ハ政事要略ニ所謂大升也、容

三十六

當二京量八合一、粟一升舂爲二米五合一、重一斤也

第四

大寶令田制地之圖

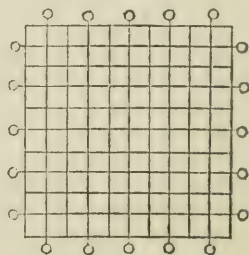
長三十歩 一段三百六十歩 廣十二歩	長三十歩 一段三百六十歩	長三十歩 一段三百六十歩	長三十歩 一段三百六十歩	長三十歩 一段三百六十歩 廣十二歩

長三十歩 一段三百六十歩 廣十二歩

此圖ハ大寶制令ノ時、白雉制ヲ革メテ再大化ニ復セル事ヲ著セリ、一段ノ步積ハ三百六十步、一町ハ三千六百步、々法ハ大方五尺ナル事第二圖ノ如シ、和銅ニ至リテ、今ノ大尺ニテ度リテ六尺ト云フハ、此大方五尺ノ地ナリ、田令集解・延喜式・口遊・拾芥抄等ヲ考フベシ、此ヲ周法ニ考フレバ、春秋公羊傳註ニ、所謂壹萬四千四百步ノ地ナリ、扨此法天正年間ニ至ルマデ變革無シ、第六圖ヲ見合スベシ

即和銅制

步法如㆓大化之制㆒、見㆓第二圖㆒、到㆓于和銅㆒改㆓革尺度㆒、故以㆓其量地尺㆒度㆓此一步之地㆒、大五尺以爲㆓六尺㆒矣、實六尺六寸有奇、當㆓曲尺八尺三寸有奇㆒也

制令之時用㆓減大升㆒、到㆓于慶安㆒革用㆓大升㆒

田法稱量ヲ改革シ玉ヘリ、然ルニ五年過テ白雉三年ノ條ニ曰、「云々、十段爲ㇾ町、段租稲一束半、町租

稻十五束、」令集解曰、「田長卅步、廣十二步爲段、卽段積三百六十步、更改段積爲二百五十步。」トアルヲ合セ見レバ、大化ノ制地稱量租法ヲ停メテ、復爾前ノ古法ヲ用ヒ給ヘルナリ、政事要略曰、「令前租法、熟田五十代、租稻一束五把、以大方六尺爲步、々內得米一升、（此大升也）二百五十步爲五十代、慶雲三年格云、准令以大方五尺爲步、々內得米一升、（此升稱減大升）三百六十步爲段者、今按、五十代與令收步積一同、卽所得米其數亦同、然則段內得米三百六十升、實此大二百五十升也」トアリ、乃知ル大方六尺步ノ大升二百五十升モ、大方五尺步ノ減大升三百六十升モ其米ハ同ジク、步法モ六尺ト五尺トノ差ヒコソアレ、一段ノ地面ノ廣狹ハ更ニ無キコトヲ、扨文武天皇大寶元年ニ至リテ、又大化ノ制地租法稱量ヲ用ヒ玉ヘリ、田令曰、「凡田長卅步、廣十二步爲段、十段爲町、段租稻二束二把、町租稻廿二束」雜令曰、「度地五尺爲步」ト見エタルガ如シ、而ルニ此輸租ノ式ハ、此年ヨリ六年ヲ過テ、慶雲三年復白雉ノ法ニ成レリ、慶雲三年九月十日格云、「准令田租一段、租稻二束二把、（以大方五尺爲步、步內得米一升）一町租稻廿二束、令前租法、熟田百代、租稻三束、（以大方六尺爲步、步內得米一升）一町租稻一十五束、右件二種租法、束數雖多少、輸實猶不異、而令前方六尺、升漸差地實、遂其差升、亦差束實、是以取令前束、擬令內把、令條段租、其實猶益、今斗升既平、望請輸租之式、折衷聽勅者、朕念百姓有食、萬條卽成、民之豐饒、猶同充倉、宜段租一束五把・町租一十五束、主者施行、」此格文ニテ制地ノ法ハ、田令ノ文ノ如クニシテ、唯租法稱量ハ白雉ノ法ニ復シタルコトヲ詳カニ知ルニ足レリ、（白雉ノ法ハ、卽大化已前ノ古法ナリ）而ルニ

和銅ニ至リテ、尺度ヲ改メテ令ノ量地尺ヲ二寸短クシ玉ヘリ、此故ニ田令ノ歩法五尺ノ地ハ、和銅ノ量地尺ニテ度レバ六尺トナレリ、和銅六年二月十九日格曰、「其度レ地、以二六尺一爲レ歩、續日本紀曰、四月戊申、頒二下新格幷權衡度量於天下諸國一」トアルニテ明ナリ、（誤テ田令ノ五尺ナル地ヲ、此ニ至リテ一尺ヲ増廣シテ六尺トナシタルナリト思フ人アルハ、令集解ニ此ヲ解キテ、令五尺内積歩、改二名六尺積歩一耳、其於レ地无レ所二損益一トアルヲ忘レテ、精ハシク思ハヌナリ、又此和銅ノ大尺ニテ度リテ六尺ト云フ地面ハ、即令ノ五尺ノ地面ナルガ故ニ、令ノ大尺ニテ度リタル令前ノ大方六尺ノ地面トハ、大小甚異ナルハ論ナキコトナルニ、誤リテ同一ナリト思フモ麁略ナリ、令ノ一町三千六百歩ノ歩法方五尺ナル地面ヲ、和銅大尺ニテ度リテ六尺ト云フノミノ事ニテ、令ノ一町三千六百歩ノ地面ニ於テハ、更ニ増損セルモノニハアラヌヲヤ）延喜式ニ、「度量權衡者、宮私悉用レ大、但測二晷景一合二湯藥一則用二小者一、其度以二六尺一爲レ歩、以外如レ令」トアルハ、權衡度量制地ノ法、和銅已後變革ナキ故ニ、此ニ和銅ノ制ヲ擧テ、制地ノ歩法ヲモ記シテ、令ノ大方五尺ノ地ヲ、和銅大尺ニテ六尺トスルコトハ、和銅ノ格ノ如ク、其餘令ノ三百六十歩ノ地ヲ一段トシ、（古法ノ五十代二百五十歩ノ地ナリ）三千六百歩ノ地ヲ一町トシ、（古法ノ五百代二千五百歩ノ地ナリ）一町ノ地ハ方四十丈ナルコトハ、令ノ制ノ如キヲ示シタルナリ、（此量地尺ハ、令ノ集解ニ、今ノ大尺ト云ヘルモノニテ、和名抄ニ竹量トアリ、今世ノ中ニ行ハル、呉服尺是ナリ、此竹量ノ八寸ハ、和名抄ニ曲尺トアリテ、今ノ木匠ノ用ヰル鐵尺是ナリ、抑和銅已前令ノ量地尺ハ、竹量ノ一尺二寸ヲ一尺トシタル物ニテ、令ニ所レ謂大尺トハ此ヲ云フナリ、令ノ小尺ハ即竹量ナリ、和銅ニ至リテ改リテ、竹量ヲ大尺トシ、曲尺ヲ小尺ト定メ玉ヘルナリ）朝野群載・北山抄・拾芥抄・口遊、其餘古今ノ諸書ヲ讀ミテ辨ヘタル人ニハ、予ガ辨ヲ費ヤスマジキ事ナレドモ、未ダ考ヘザル人ニ委シク謂ベシ、抑先此ニ姫周ノ制地ノ圖ヲ擧テ、皇朝ノ制地ノ法ト比較セシム、能ク觀察シテ我皇朝制地ノ古法ノ精妙ナルコトヲ熟知スベシ、其次ニ天正年間始メテ制地ノ法ノ變革セシ事ヲ説ントス、（此ハ豐臣氏ノ意ニ出デタルナリ）抑周ノ百畝ノ田ハ、其一畝ヨリ一鍾ノ粟ヲ收ム、管子曰、「河埏諸侯畝鍾之國也、又云、昔狄諸侯畝鍾之

圖也、史記河渠書曰、「收皆畝一鍾」ト見ユ、猶諸書ニ多カルヲ、讀テ能ク知ル、コト也、

第五

姬周制地百畝之圖

畝	畝	畝	畝	畝	畝	畝	畝	畝	畝
畝								畝	畝
畝								畝	畝
畝								畝	畝
畝								畝	畝
畝								畝	畝
畝								畝	畝
畝								畝	畝
畝								畝	畝
畝	畝	畝	畝	畝	畝	畝	畝	畝	畝

此圖ハ周ノ井地ノ九分ノ一ヲ出セリ、一格ナ一畝トス、每畝百步ナル故ニ、百步四方ニテハ一萬步ノ地ナリ、周ハ其小尺ニテハ八尺ヲ步トスル故ニ、此圖方八十丈ナリ、周尺二尺ハ此今ノ大尺ノ一尺ニ當ル、故ニ周ノ八十丈ハ即此ノ四十丈ナリ、周ノ四步ノ地ハ、即此ノ一步ノ地ナリ、周ノ一畝百步ノ地ハ、即此ノ五代二十五步ノ地ナリ、周ノ百畝一萬步ノ地ハ、即此二千五百步ノ地ナリ、大化大寶ノ制ニテ、三千六百步トシタル地モ亦同ジ、方八十丈ノ地ト廣狹ノ差無シ、制地ノ法ノ後此同一ナルハ精妙ト謂フベシ

畝

畝ハ皇朝令ノ大尺ニテ、四丈四方ノ地ナリ、唐尺ニテ五丈、周尺ニテハ八丈ナリ、此畝ニ皇朝古法ノ一步ハ、周唐ノ四步ノ地ナリ、此五代二十五步ノ地ハ、周唐ノ百步ノ地ナリ、周ニテ一畝ニ一鍾ノ粟ヲ得ルヲ良田トス、一鍾ノ粟ヲ春ケ米京量二斗ヲ得ルハ、此五代即周ノ一畝ノ地ヨリ、稻五束ヲ穫テ穀京量四斗ヲ得テ、春テ米二斗ヲ得ルト全ク同ジ、第一圖ト合セ見テ、古昔聖賢ノ意ヲ此ニ深ク用ヰ玉ヒシコトヲ稽ヘ識ルベシ

鍾トハ量ノ名ナリ、周禮考工記ニ、「嘉量深尺、內方尺、而圜二其外一、其實一鬴、其臀一寸、其實一豆、其耳三寸、其實一升」トアリテ、其鄭玄註ニ、「鬴六斗四升、鬴十則鍾」ト云リ、鍾ハ則六斛四斗ナリ、

漢書溝洫志ニ、「收皆畝一鍾」トアル、其師古註ニ、「引二於濁之水一、灌二鹹鹵之田一、更令二肥美一、故一畝之收、至二六斛四斗一」トアリ

此故ニ百畝ニテハ百鍾ノ粟ヲ收ム、此粟六百四十斛ナリ、此粟ヲ舂テ得ル米三百二十斛ナリ、此米ヲ皇朝ノ古量ニテ量レバ二十五斛ナリ、（京量ニテハ二十斛ナリ）論語ニ、有若ガ徹ヲ行フ事ヲ云ヒ、孟軻ガ「周人百畝而徹、其實什一也」ト云ヘルハ、此米ヲ十分シテ其一分ヲ民ヨリ取ルヲ云フナリ、（此周ヨリ以前ノ夏殷ノ政事モ同法ナリ、夏后氏五十而貢・殷人七十而助、皆什一也ト孟軻ガ云ヘルニテ彰明ナリ、思フニ此制地度量ノ法ハ、彼ノ國ノ太古ヨリ唐虞ト云ヒシ時迄モ、變革ナクシテ同一ノ法ナル故ニ、夏殷周ノ三代モ傳襲セルニゾ有ベキ、周末ニ至リテ秦ノ商鞅ガ二百四十歩ヲ以テ畝ト定メシヨリ、漢魏晋唐モ其制ヲ襲用スレドモ、歩法ハ猶古法ヲ用ヰタリ、唐ノ六典ニ曰ク、「天下之田、五尺爲レ歩、二百四十歩爲レ畝、百畝爲レ頃、又曰、度量權衡、內外官司悉用二大者一」トアリテ、周ノ八尺ノ一歩ノ地ハ、唐ノ大尺ノ五尺ノ一歩ノ地ト全ク同ジキヲ以テ知ルベシ、周唐ノ歩法ハ異ナラズシテ、其周ニテ八尺ト云ヒ、唐ニテ五尺ト云フハ、準尺度ノ同ジカラザルノミナル事ヲ、此事猶別ニ史漢晋隋ノ書ニ依リテ委曲ニ說クベシ、先輩ノ考ハアレドモ、疏漏アリテ從ヒガタシ）

天長ノ田令義解ニ、「段地穫二稻五十束一、々稻舂得二米五升一也、即於レ町者、須レ得二五百束一也」トアルハ、三代格・政事要略。令集解ヲ考フルニ、慶雲ノ格ニ依リテ、令前ノ租法ヲ擧テ田令ヲ解シタルナリ、延喜式ニ曰、「穫稻上田五百束、其租一段、穀一斗五升、町別一石五斗」トアリ、此令式ニ所レ謂一町穫稻五百束ノ穀五十斛ナリ、舂テ得ル米二十五斛ナリ、（京量ニテハ二十斛ナリ）彼ノ周田ノ百畝ノ米二十五斛ト同ジ、（令ノ三千六百升ノ米ハ、令前ノ二千五百升ノ米ニ同ジキコト、政事要略ニテ能ク知ル、故ニ、今此ニ令前ノ古法ヲ說キテ周法ト對校セシム、令前ノ古法、令ノ法ヨリ悟リ易キ故ナリ、一町ハ令前ノ五百代ノ地ニ同ジキ故ニ、此五百代ヨリ五百束ノ稻ヲ穫ルハ、一代ヨリ一束ノ稻ヲ得ル理リ也、一代ハ五歩ノ地ヲ云フ、故ニ一歩ヨリハ二把ノ稻ヲ苅ルナリ、二把トハ中人(長曲尺ノ五尺)ノ手ニテ、八乘ノ稻ヲ苅リテ二把トナスナリ、此ノ一歩ノ地ハ周ノ四歩ノ地ニ同キ故ニ、周ノ四歩ノ地ヨリ苅ル稻ヲ、此ニテハ一歩ノ地ヨリ苅ルナリ、此歩內二把ノ穀ハ二升米ニシテ一升ナリ、此故ニ五百代二千五百歩ノ米ハ二十五斛トナリテ、周田百畝ヨリ得ル百鍾ノ粟六百四十斛ノ米三百二十斛ヲ、古量ニテ量リテ二十五斛トナルト正ニ同ジ、又令前ノ歩內ノ穫稻ノ一把ノ穀一升ハ米五合ヲ得テ、重今稱百六十錢ナル一斤トス、延曆儀式帳ニ大斤稻ト云ヒ、太神宮式ニ斤稅トアルハ是ヲ云フ也、此一斤ハ周ノ四斤ニ同ジ、此ト周ト制地權衡度量ノ法ノ同キコト、符節ヲ合セタルガ如シ、其精密微妙ナル、豈之ヲ偶然ト謂フ事ヲ得ムヤ）扨皇朝輸租ノ式ハ、文武天皇ノ聖斷ニテ、百姓ニ食アレバ、萬條即成ル、民ノ豐饒ナルハ猶倉ニ充ルニ同ジ、宜ク段租一

束五把、町租一十五束トスベシト定メ玉ヘリ、（精クハ前ニ出セル慶雲ノ格文ニ見ユ、町ハ周田百畝ニ同ジ）是ヲ以テ一町ノ穫稻五百束ノ内ニテ、十五束ヲ正稅トス、此ノ十五束ノ穀ハ一斛五斗ナルガ、不三得七ト云フ法ヲ建テ玉ヒテ、是ヲ十分シテ水旱ノ爲メニ豫テ其三分ヲ蠲キテ、其七分ノ穀ハ一斛五升ヲ收ム、此穀ヲ舂テ得ル米五斗二升五合ナリ、（京量ニテ量レバ四斗二升トナル）毎年民ノ一町ノ地ヨリ收ムル所ノ米五斗二升五合ナル故ニ、周ノ百畝ノ米二十五斛ノ十分一ノ二斛五斗ヲ征ルヨリモ大ニ薄シ、（此租法ハ周ノ九十分ノ一ニ當ル）桓武天皇ノ勅令ニ、「古者什一而稅、謂ニ之正中一、三代因循、頌聲作矣、國家薄レ征、利レ農、勤恤民隱、是以田一町租、定爲二一十五束一、人知二輸法一、獲レ免二輕徵之苦一、吏不レ私レ利、終杜二絕奸之途一、宜下班二告率土一知中朕意上焉」ト詔セタリ、詳ニ類聚國史政理部ニ見ユ（仙石本ノ十四卷ニ在リ、此一町ノ租十五束ノ米七斗五升ヲ收納スル不三得七ノ法ノ外ニ、國土ノ沃塉ト年ノ穰荒トノ時宜ヲ商量シテ、不二收八・不四得六ト云ノ法ヲ立テ玉ノコトアリシカドモ、皆租米七斗五升ヲ十分シテ、其六分ヲ收メ、七分ヲ收メ、八分ヲ收ムル法ナリ、能ク此ハ覺クベシ、此租米七斗五升ハ、周田百畝ノ米二十五斛ノ五十分ノ二分ニ足ラズ、故ニ不三得七ノ法ニテハ、殆ンド周ノ米ヲ五十分一シテ、其一分ニ過ギヌコト[illegible]、唐虞夏殷周ノ歧衣田制租法ヲ考ル人ハ、此ノ天皇ノ聖勅制田租法ヲ解スヤ否ヤ、延曆ノ民部ノ勘損之例、通二計國中一以二七分已上一爲レ定、所レ除三分者任二國司處分一モ、不三得七ノ法ト云フ也）延曆十九年五月ノ勅ニ曰ク、「天下田租、改二張前例一、十分之內、免レ三收レ七、夫降レ詔革レ例、本爲レ濟レ民、而國郡官司、或不二頒行一、遂令二恩渙容施一、惠澤未レ洽、吏無レ絕レ奸、民不レ免レ弊、宜下下二知諸國一、不上レ得二更然一」ト仰セ給ヒシモ、一町ノ租十五束ヲ收ムル不三得七ノ法ナリ、（論語曰、孔子曰、修レ己安二百姓一、堯舜其猶病諸、子貢曰、如有二博施二於民一、而能濟レ衆何如、可レ謂レ仁乎、子曰、何事二於仁一、必也聖乎、堯舜其猶病諸トアリ、誠ニ病シキモノナルベシ）「神龜三年九月、聖武天皇臨軒詔曰、今秋大稔、民產豐實、思與二天下一、共二茲歡慶一、宜レ免二今年田租一」ト仰セ玉フハ、此ノ町租十五束ヲ免シ給フナリ、天平三年八月詔曰、「如レ聞天地所レ貺、豐年最好、今歲登穀、朕甚

嘉レ之、思與ニ天下一共受ニ斯慶一、宜レ免ニ京及諸國、今年田租之半一、但淡路阿波讃岐等國、並天平元年以往公私未レ納レ稻者、咸免ニ除之一」ト仰セ給フハ、町租十五束ノ半ト、未納稻トヲ免シ給ヘルナリ、廢帝天平寶字二年八月詔曰、「諸國兵士鎮兵傳驛戶等、今年田租免賜久止宣、」此ハ町租ヲ免シ玉フ也、七年八月詔曰、「如レ聞去歲霖雨、今年亢旱云々、宜レ免ニ左右京、五畿內七道諸國、今年田租一、八年十月勅曰、「頃年水旱荐失ニ豐稔一、民或飢乏、仍以ニ軍興一、宜レ免ニ天下今年租一、」每年不三得七ノ法ヲ施行ヒ玉ヒテモ、猶甚シキ水旱ニハ、當年ノ全租ヲ免シ玉ヒ、モシ又別ニ貧窮ヲ救恤シ玉フ事多カリ此事史籍ニ載ル所、枚擧ニ暇アラズ、並准知スベシ、賴襄ガ通議ニ、水必饑、旱必饑、內蝗疫癘必饑、而數免逋欠史不レ絕レ書、大抵中葉以前之志、册々皆如ニ漢文帝紀所一レ載ト云ヒ、文治年間ニ至リテ、町別ニ正稅ノ外ニ粮米五斗ヲ出スヨリ、始メテ田租ノ重キコトヲ云ヘルハ、皆然ル言ナリ延喜式ニ輸租田トアルハ、此租米ヲ收ムル田ヲ云フ也、外ニ不輸租田、輸地子田ノ事モ式ニ見エタルヲ、或人麁略ニ誤解シテ、妄作セル俗書アリテ、今此ニテ辨ジテハ却テ惑ハシキ故ニ別ニ云ントス○此輸租田ノ租穀ニ、調庸ノ准頴三十束ヲ加フル事アリテモ、猶周田什一ノ法ヨリ輕ク定メ玉ヘリ、調庸ノ准頴ノ事ハ、政治要略三代格ヨリ精シキ物ハ有コト無シ、就テ稽フベシ然ルニ皇朝ノ綱紀ノ弛リテ、保元・平治・壽永ノ騷亂アリシ後、源賴朝其弟義經伯父行家ヲ滅ムトシケル時、大江廣元ガ計ヲ用キテ、後鳥羽天皇文治元年十一月、北條時政ヲ都ニ上セテ、守護地頭、及兵粮米ノ事ヲ朝廷ニ奏請セシム、此時天皇ノ御年ハ六歲ニゾオハシマシケル、政事ハ院中ニテ後白河院ゾ聞食シケル時政其月廿八日ノ夜、中納言經房卿ニ謁シテ、賴朝ノ意ヲ以テ守護地頭ヲ諸國ニ置テ、兵粮米ヲ段別ニ五升ヅヽ公田莊園ニ課セン事ヲ請フ、玉海・東鏡、及當時ノ諸書ヲ讀ムニ、後白河院ノ此賴朝ガ奏請ヲ甚ダ思召煩ハセ玉ヒシコト、賴朝廣元時政ガ朝廷ニ要求セシ情狀甚詳ナリ、平家一門ノ領セシ四國ノ天下ニ半ナリシヲ沒官シテ、賴朝ニ賜リシハ莫太ノ朝恩ナルニ、猶上ヲ要シ下ヲ虐シテ、其私欲ヲ縱ニス、豈是ヲ忠孝ノ人ト云ハンヤ、誰レカ謂フ賴朝天下ニ功德アリト翌廿九日、諸國ニ守護地頭ヲ置キテ、町別ニ粮米五斗ヲ取ルコト、賴朝ノ請ニ依ルトノ勅命ヲ、中納言北條時政ニ傳玉ヘリ、承前町別ノ租法不三得七ノ米五斗二升五合ノ外ニ、粮米五斗ヲ出シテハ、一町ノ米

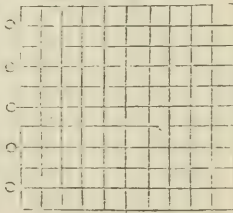
一斛二升五合トナレリ、但法ノ重クナレルハ此ガ初ナリケリ、不ミ得モノ法モ此ニテ破レタリ、是ヲ破リタルハ頼朝ナリ、海内ノ民ノ困窮思ヒ遣ルベシ、後白河上皇ノ思食煩ハセ玉ヒシハ、此民ノ患苦ヲ悲マセ玉ヒシナリ、桓武天皇ノ勅制ニ、天下ノ田租前例ヲ改張シテ、十分ノ内ニテ三ヲ免ジ七ヲ收ム、國郡官司或ハ奉行セズ、遂ニ恵澤洽カラズ、吏ハ奸ヲ逞ツコトナク、民ハ弊ヲ免レズ、諸國ニ下知シテ更ニ然ルコトヲ得ザレト仰セ玉ヒシコトヲ、窃カニ思ヒ合ハスルニ甚モ畏シ、大外記清原頼業ガ涙ヲ拭ヒテ、上御沙汰違亂之上、源氏等悪行不レ止ル事ヲ歎ジテ悲メルコト玉海ニ見エテ、實ニ當時ノ公卿ノ上ニ、奉ニ輔佐シテ、大節ヲ立テ大變ヲ弭メ、乾坤ヲ撑拄シ、日月ヲ昭洗スルノ才德ハナケレドモ、君父ノ可否ヲ獻替スルハ臣子ノ職分ナルニ、義經廣元時政頼朝等モ曾テ忠孝ノ意ナク、却テ上下ヲ暴虐シテ、世ノ憂患誹謗ヲ知ラズ、一時橫行謔戲シテ、妻子臣妾ニ誇ルハ、如何ナル心ゾヤ、其十二月六日、源頼朝獻ニ書于右府一曰、於レ今者、諸國庄園皆置ニ地頭一、正税國役本家雜事、若致ニ對捍一、若致ニ懈怠一、加レ誡如ニ前例一」ト云ヘリ、シカレドモ、民力ノ疲弊、領家ノ愁訴ヲ上皇聞食シテ、「其二年二月二十八日、仰ニ五畿七道諸國庄園一、免ニ除兵粮米進一、可レ令レ安ニ堵土民一事、依此米催事、民戸殊費、於今者、殆無ニ乃貢運上計之田一、頻有ニ領家訴一之間及ニ此儀一、然者賦遣使者可ニ觸廻一之由、可レ仰ニ北條時政一者此ニ依リテ其六月七日、諸國地頭職事、平家沒官領、並梟徒隱住處々之外、於ニ權門家領一者、一々偏止之由、所レ申ニ京都一也」ト東鑑ニ見エタリ、權門家領ニ地頭ヲ置クコト此ニテ止タレバ、兵粮米ヲ課スルコトモ止タルハ勿論ナリ、詳ニ玉海東鑑諸書ヲ讀デ辨フベシ、今熟々此時ノ事ヲ想フニ、若賴朝ヲシテ良師善友ヲ得テ、能ク道ヲ行ハセタラマシカバ、猶海内上下其所ヲ安ジ、子孫モ亦永ク富貴ヲ保タマシモノヲ、惜哉側ニ姦人廣元時政ガ佞媚ノ言ヲ愛シ、其ニ欺レテ終ニ其身ハ不忠不義ニ陷リ、其弟及子ハ皆非命賊手ニ死シ、其家ヲ潰スルニ至レリ、悲ムベシ、而レドモ姦佞ノ人ヲ愛溺シテ事ヲ誤ルハ、此人ノミニハ非ズカシ 其後承久ノ天皇ノ東征モ官軍克タズ、三上皇二十年ノ春秋ヲ過シテ、並ニ島ニ崩御シ玉ヘリ、此事ハ玉海・平戸記・增鏡・東鑑・諸神明惠傳・承久記・其他諸書ヲ熟讀翫味シテ、三上皇ノ叡慮、廣元義時泰時ガ姦意ヲ以テ世ヲ愚惑スルコトヲ辨フベシ、增鏡ニ、後鳥羽天皇御製ヲ載セテ曰ク、「奧山ノ棘ノ下モ踏別テ道有ル世曾ト人ニ知ラセム」ト遊シタルハ、政道ヲ思食シタルナリ 元弘ニ至リテ、賊北條高時ガ强僭ニシテ禮ヲ失スルヲ征伐シ玉ヒテ、其三年七月ニ後醍醐天皇ノ勅制ニ、「兵革始收、民宜ニ安堵一、日者遠近士民、走ニ集闕下一、爲妨ニ農業一、其止レ之、凡除賊黨外、將士食田領職、一皆襲レ故」ト仰セ玉ヘリ、天下ノ士ヲ愛シ農ヲ慇ム聖慮ナリ、其ニハ國史略・參考太平記・古文書ニ見エタルガ如シ、然ルニ足利尊氏弟直

義叛逆シテ亂ヲ爲シ、暴驅虐取スル故ニ、天下是ガ爲ニ騷然タリ、應仁以後諸國闘爭率寧日無シ、而レドモ制地ノ法ハ、猶舊制ノ如クナリシニ、天正文祿慶長ノ間ニ至リテ、豐臣氏長束正家ト云フ姦人ヲ用キテ、初テ大寳令ノ田法ヲ破リタリ、九百年來傳襲ノ聖賢制地ノ法、此ニ至リテ壞了セルハ、識者ノ深ク慨歎スルモ亦宜ナラズヤ、此事諸書ニ見エタル中ニ、簡易ニ取タルハ賴襄ガ通議ナリ、其ニ云ラク、「王制所レ謂、一段爲二三百六十坪一、豐臣氏制二其六十坪一、々蓋方八尺、後縮爲二六尺強一、而仍收二一段之税一」ト云ヘルハ信ナリ、此ニ八尺ト云ヒ、六尺ト云フハ、今ノ木匠ノ用キル曲尺ナリ、扨八尺ト云ヘルハ、其實ハ八尺三寸三分有奇ナルヲ略シテ八尺ト云フナリ、此ヲ以テ蓋トアリ、六尺強トハ六尺九寸ナルヲ云フ也、八尺三寸有奇ナルハ即令ノ歩法ナリ、六尺五寸ハ文祿慶長ノ歩法

第六

天正年間制地之圖

長三十歩 一段三百歩	長三十歩 一段三百歩	長三十歩 一段三百歩	長三十歩 一段三百歩	長三十歩 一段三百歩	長三十歩 一段三百歩
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
同上 一段三百歩	同上 一段三百歩	同上 一段三百歩	此圖ハ田令三千六百歩ノ地ヲ此ニテ十二段トナシタルヲ著ス也、此故ニ一段ハ三百歩也、田令ノ六十歩ヲ削リテ、猶一段ト呼ベリ、民間ニ豐臣太閤ノ爲ニ六十歩ヲ取ラルト云フハ、此ヲ謂フ也、而レドモ歩法ハ猶田令ニ因循セリ、第四圖ト併觀スベシ		
[illegible]	[illegible]	[illegible]			

一歩之圖

○印和銅制

「歩法同ニ第四圖ニ、當ニ曲尺八尺三寸有奇」

京量

「收租用ニ京量ハ、容當ニ古量一升二合五勺」

第八

方今所行制地之圖

方今制地ノ法ハ、曲尺ノ六尺ヲ以テ一歩ト云ヒ、三十歩ヲ一畝ト云ヒ、十畝ヲ一段ト云ヒ、十畝ヲ一町ト云フ、一歩ノ積曲尺ノ三十六尺ナリ、其名實大寶文祿ノ制ト甚ダ異リ、此法ニテ算計スルニ、二町三段一畝十六尺ノ地面ニテ、田令ノ一町ノ地ニ當レリ

文祿ニ至リテ田令ノ法ヲ破リテ、曲尺六尺五寸ヲ一歩トシ、此三十歩ヲ一畝ト云ヒ、十畝ヲ一段ト云ヒ、十段ヲ一町ト云ヒテ、又高ト云フ事、取ト云フ事、皆此時ニ起レリ、（此等ノコトハ當時ノ古文書ニ甚彰明ナリ）其後ニ文祿慶長ノ六尺五寸ノ歩法ヲ、又縮メテ六尺ヲ一歩トナシタル也、精シキ事ハ博ク古文書ヲ讀ミテ、自ラ能ク辨フベキ事ニゾ有リケル、孔門忠恕ノ教訓ヲ宣ヒテ、唐虞三代ノ政教制地税法課役ト、本朝ノ

政教制地租法調庸トヲ比校シテ、其美惡優劣ヲ觀察シテ、誠實ニ聖賢ノ道ヲ學ブ志ノ深カラム人ハ、少カハ取ルコトモゾ有ルト所思シキ故ニ、和漢古今ノ文籍ニ依リテ、己ガ所見ヲ擧テ口述スル所ナリ、門人等云ク、先生ノ說ハ詳ニ本篇ニ出セルヲ、此書ハ吾等ノ忽忘ニ供セム爲ニ略記セリ

安政二年乙卯夏四月

弘仁ノ頃ニ公營田ヲ佃リシ事ヲ觀ルニ、古昔ノ租法調庸ノ事ヲ知ルニ、大ニ有益ノ物也、今類聚三代格ニ載ル所ノ格文ヲ此ニ出シテ、一覽スルニ便ナラシム此文、政事要略。日本逸史ニモ出セルヲ比校シテ此ニ擧グ

貞觀太政官符

應下令ニ太宰府管內諸國佃ニ公營田ニ事

一　合九國口分幷乘田七万六千五百八十七町

口分田　六万五千六百七十七町

乘田　一万九百十町

應ニ割取ニ佃一万二千九十五町國別有レ數

口分田　五千八百九十四町

乘田　六千二百一町

隨レ色可レ輸ニ地子ニ、而府解惣申ニ輸租ニ、宜レ依ニ本色ニ

應レ役傜丁六萬二百五十七人五人作二一町一

右班田之歲、擇二取百姓口分及乘田水旱不損之田一、依レ件割置、號二公營田一、率傜丁五人、令レ營二一町一、給二功幷食一、一如二民間一、以二正稅一宛二營斷一、秋收之後、返二納本倉一、每國令レ有二乘田一、若有二年中盆丁一者、隨レ彡割加、擇二村里幹了一者、各爲二正長一、量二其所レ堪、令レ預二一町以上一、緣田之事、惣委二任之一、若遭二風損蟲霜之害一、依レ實免レ損、近二百姓居一、各建二小院一、所レ穫之稻、除二田租一納レ官、兩色以外便納二此院一、令レ易二納出一

穫穎五百五萬四千一百廿束

三千六百二町町別四百六十束肥後國

八千四百九十三町町別四百束

除二三百九十七萬三千六百九十九束一國別有レ數

佃功一百卅五萬一千四百束町別百廿束

租料一十八萬一千四百廿五束町別十五束

調庸料一百五十萬七千七百九十束、人別調廿束、庸十束

傜丁食料七十二萬三千八百十四束、人別米二升

修理溝池官舍料一十一萬束國別有レ差

納官一百八萬四百廿一束

右目錄也、今納官之數、超二於論定之息利一、須下田租納官二色、爲レ糙之功率十束給二一束一、令レ易レ成レ事

一　應レ免二調庸一事

課丁六萬二百卅人九國各有レ數

全輸三萬二百九十九人

半輸二萬九千九百四十一人

調庸准頴一百五十萬七千七百九十束

右課役之民、率名二貧窮一、備二貢調庸一、極爲二大難一、逃亡之由、更亦無レ他、今須下調庸者、夏月以二正稅一、宛二寬價一而交易、秋收之後、以二營田之穫一返納、夫貧乏之民、夏月作二調庸等物一、迫二於無レ食減レ直賣失、臨二貢調日一、更倍レ價買求、民之大弊故有二此議一

一　應レ給二傜丁粮一事

傜丁六萬二百五十七人人別役卅日

料稻七十二萬三千八十四束九國各有レ數

右貧下之民、朝不レ給レ夕、身當二公事一、且求且役、飢餓之輩、十而七八、今商量以二營田之穫一、依レ件宛給

一　應レ置下修二理池溝官舍一料上事

料稻一十一萬束九國各有レ差

右百姓減少、破壞彌多、計二笇帳一、每國無レ餘、今商量置二件料一、將レ究二役夫功食一、其料亦可レ用二穫稻一

以前太政官去二月廿一日論奏偁、案參議太宰大貳從四位下小野相臣峯守表云、洪水滔レ天、大旱鑠レ地、自然之數、大聖無レ免、准二堯湯之世一、有二十年蓄一、不レ聞下道饉相望、曆有中弃二捐溝壑一者上、蓄多故也、方今頻年不レ稔、雜以二疫病一、臣所レ忝之道、非常被レ害、賑恤數加、府庫稍罄、寬政頻行、民猶不レ足、比屋無二爨炊之烟一、連戶多二荒凉之門一、因レ斯薄レ賦省レ傜既闕二欠於公用一、守常責レ民輸貢之費無レ任、非レ有二變治一、恐難二興復一、易曰、通二其變一、使二民不下倦、劉子曰、明王務修二其法一、因レ時制レ宜、苟利二於民一、不二必法下古、害二於事一、不レ可レ循レ舊、夏商之衰、不レ變レ法而已、三代之興、不二相襲一而王、由レ是觀レ之、法宜三變動非二一代一也、今法者溺二於故律一、儒者拘二於舊禮一、若握二一世之法一、以傳二百代之民一、猶下以二一衣一擬二寒著一、以二一藥一治上二痤瘕一、臣變二易常制一、輙上二新議一、事之由趣具二于表一、右既免二調庸一、兼給二粮食一、於レ民爲レ優、又古者九年耕、必有二三年之食一、以二卅年一通、雖レ有二凶年水溢一、民無二菜色一、今之所レ議、九國卅年之積、三千二百餘萬、以レ之混二合正稅一、永代之蓄、不レ謝二上世一、伏冀倉廩之實、指レ期可レ待、禮節之知、不レ在二遐年一、無レ任二悃欵之至一、謹詣二朝堂一、上表以聞者、伏奉二去正月廿七日勅一、岑守所レ言便宜、

議定奏聞者、臣等才量淺近、無レ稱ニ天旨一、但政或有下宜レ於ニ古一而不上レ利ニ於一今、或有下便ニ於彼一而不上レ行ニ於此一、然明年守所レ言、抑有レ可レ取、但古來所レ行、誠憚ニ乎改一、臣等商量、試限ニ四年一、依レ件行レ之、伏聽ニ天裁一、謹以申聞謹奏

弘仁十四年二月廿二日

全文ニハ文字ノ誤脫猶アレドモ本ノ儘ニ擧タリ、善本ヲ得テ訂正スベシ、算計ノ所ニ至リテハ幸ニ少カノ差ヒ無シ、此文ヲ熟讀精窮スレバ租法調庸公營田ノ事情、明ニ解シ得ラレテ、當時ノ政體ヲ觀ルニ足レリ

制地圖解抄　終

滄浪夜話

滄浪夜話自序

夫治民之道、無善於治生也、天子以萬機治生、諸侯以一國政事治生、大夫以其官職治生、自士以下各以其事治生、庶人之業、農工商賈、皆所以治生也、自天子以至於庶人、不知其生、則不能立其位也、愚也不肖、不能達天子諸侯大夫士之治生、且身貧賤、以疾瞽爲治生、經歷民間、親見農工商賈之事、又多聞農工商賈之語、頗有得於民事矣、頃日輯錄其所見聞、名曰滄浪夜話、愚也處士、雖民事也、亦不可公論、故名夜話也、以國朝沐于神祖之德澤、而四海蒙泰平之化也久矣、夫泰平久則民褻安逸、而怠治生則奢侈、奢侈則不能償、不能償則爭論起、爭論起則禮儀壞、禮儀壞則人倫亂也、是誠辜神祖之德澤也、豈可不怖畏乎、在昔魯漆室邑之婦人、憂魯國之憂、丈夫豈可不如婦人乎、如欲忠於國家者、君子治生於上、小人治生於下、則上下各當安其位也、故曰、治民之道、無義於治生也、此書也初以年中行事、所以示不怠治生也、次以邑市總括、所以使各便於其治生也、次以家作衣服飲食器物、所以制奢侈也、次以商賈、所以强本弱末、次以交際幣物、所以敎節用通好也、次以鄉黨貴賤、所以別民之貴賤與貧富也、次以貢税、所以補助士農也、次以交易、所以通財給用也、次以負債、所以救其難也、

次以運送、所以助民力也、次以義倉、所以制歳計之度備不虞也、次以管轄、所以御邑吏也、次以邑吏、所以使各不遺其職事也、次以市吏、所以禦商賈之姦也、次以神祠、所以敬明神斥亂神也、次以佛閣、所以治浮屠也、次以鄉士、所以授其職也、次以鄉師、所以尊賢退不肖也、次以醫工、所以治民之疾病、使保天年也、次以盲人、所以救癈人除惡弊也、次以游民、所以不使彼怠於民之業、惑於鬼神之事也、次以俳優娼妓、所以禁淫樂淫奔也、次以博徒、所以制博奕遠盜賊也、次以乞子、所以救窮民恤癈人也、次以屠者乞丐、所以不遺卑賤也、次以教文、所以教孝悌忠信也、次以女教、所以教婦道也、次以講武、所以處世而不忘亂也、次以人倫、所以教其道也、次以死葬祭祀、所以令民德歸厚也、次以禁賄賂法、所以治有司之疾也、終以函訴、所以開言路察政治之得失也、然則於民之治生、不可以爲無小補也、愚聞賢不肖、才也、遇時也、庶哉大方君子、有取千一於茲、以爲民人治生之補、乃於愚乎足矣

滄浪夜話巻之一目錄

滄浪夜話卷之一

治民　上

百姓年中行事

一夫不レ耕ば一國飢、一婦不レ織ば一國寒と云り、諺に貧の盗に戀の歌と云、衣服に乏しければ、不レ覺惡心生じ、孝悌忠信の道も行れざるものなり、孔子も先富レ人と云、管子も倉廩滿て禮節を知り、衣食足て榮辱を知ると云り、大邦の君子仁政を行はんと欲せば、先民の衣食乏しからざる政をなすべし、民を富しむるは、匹夫匹婦をして、等しく耕織の業を精勤せしむるにあり、七月の詩禮の月令を見て、聖人の民に心を用ゆるを察すべし、故に予民の年中行事を述ることとしかり

正月元日に年神を祭りて五穀成就を祈り、鎭火祭をなし、鎭守並に先祖考妣の靈を祀り、年を嘉し、親戚朋友の好を通ずべし、年禮濟ば教導師名主の宅へ、郷中の百姓を集め教諭し、終て其郷中の老人を饗應し、養老郷飲酒の意を教示し、忠孝のものを問て稱揚し、且饗應し、其後鍬立の祭をなし、藉田の遺法を教示すべし、武術師も稽古始めに、各其武藝を觀て、上達の者を稱美し、君のため民のためにあらずんば、此術を用ゆべからずと教戒し、止戈の志を教示すべし、女師もまた郷中の女子を集

めて教諭し終て、貞烈のものあらば稱揚すべし教導師・武術師・女師ともに下巻にあり、三師饗應・雜煮・吸物・取肴・一種冷酒三獻に限るべし、飯は一汁三菜なるべし、其費用は高割にすべし、酒肴料理皆土産の物を用ゆべし

正月の式終れば、冬より仕掛たる堤・川除・溝洫・道橋等の普請、家作屋根普請等をなし、農具蠶具修覆すべし、又男子十五歳に至らば、農具を授て田に行しむべし、貧民の子は十三よりすべし女子十歳に至らば、女工の具を授て習はしむべし貧民の子は七八歳よりすべし貧民には官府の錢を貸して作らしむべし、種並培養も官府の錢を貸して耕作せしめ、秋に至て上納せしむべし、また麥田を耘り、春田を耕し、薪をとり繩を綯、俵を編、薦を織り、草履草鞋を作り置くべし

二月四日に祈年祭をなし、社日に土神を祭り、彼岸に先祖を祀り、春分より時の寒暖を考へ、芋を種能地をならし、煙草・茄子・甜瓜・西瓜・胡瓜・絲瓜・眉兒豌豆・刀豆・黎豆・蕃椒等の苗を蒔、桑苗を種ゑ、其餘夏木は十月より此月までに種べし、接木も此月をよしとす、婦人は更衣の用意をなすべし、月令に、天子德を布き惠を行ひ、有司に命じて倉稟を發き、貧窮に賜ひ、乏絕を振ふと云り、誠に貧民の窮乏、今日より四月迄を甚しとす、有司よく心を用ゆべし

三月上巳の佳節に、親戚鄉黨の好を通じ、煙草・茄子等の晩熟の苗を蒔き、早稻の苗を蒔、麻・苧を蒔、麥田に培養し、大豆を蒔、當月までは麥の畝を作ること、日々にすべし、婦人は年の寒暖を考へ、蠶種を箱より出し蠶出ば齋戒沐浴して掃べし、月令に、天子の麥の爲に實を祈ると云り、また后妃齋戒

して、親ら東耕して、躬ら桑とると云々、先王の后妃の農事、蠶の事に心を用ゆる事觀つべし

四月大豆・小豆・紅豆・萹豆・木綿・胡麻・荏草・牛蒡・胡蘿蔔等を蒔、晩熟の苗代をし、早稻田を植、烟草茄子・瓜類を植、此月より朝草を苅り馬を飼ひ、夜の藁細工は十月まで止むべし、婦人は愼で蠶を養育すべし、月令に、野虞に命じて、田野を出行して、天子の爲に農を勞ひ民を勸め、時を失ふことあるなからしむと云り

五月菖蒲の佳節は、農村なれば、其禮も略して行ふべし、大小麥を收納し、晩熟の田を植ゑ、早稻田の草をとり、大小豆・芋・烟草・茄子等を耘り、畝を作り、婦人は桑を採り、蠶を養ひ繭を納め、月令に、蠶事畢く后妃繭を獻ずと云り、古昔后妃の女工を愼み給ふ事見つべし誠に民の艱苦、此時より甚しきはなし、能忍んで精勤すべし、此時を失すれば秋作皆不熟するなり、所により蠶休農休、又潤雨あれば、潤雨の祝と名て、一日宛休足する事あり、其祝ならば神酒を獻じ、餅を備へて神を祭り、下々には錢を與ふべし、五月・六月は休日を停止すべし、邑役人能心を付べし、又梅雨中に指木をすべし、又今月より八月までは、別して陰陽不順なれば、秋作皆不熟するなり、水年には陽神を祭り、旱年には陰神を祀り、其災を濟ふべし、月令に、有司に命じて、民のために山川百源を祈り祀らしむ、大に帝に雩するに成樂を用ふと云へり、政をとるもの愼で陰陽を和順せしむべし

六月粟稗を蒔、田の草を取り、大小豆・紅豆・烟草各日に蟲をとるべし瓜・茄子等を耘り、畝を作り、麻・苧をきり

干し、五穀衣服一切のものを干し、菽豆を採り干し、婦人は繭を干し、蟲ばまぬ様に心懸くべし、其事終れば、先糸をとり紬を織り、夏成の年貢を上納する心懸あるべし
七月七日の佳節に、親戚郷黨の好を通じ、于蘭盆に先祖考妣の靈を祭り彼岸祭・盆祭り共に佛教と云、其祭祀の立上は先存すべし麻・苧干し、干したるは引べし、田の草を採り、一切秋作を耘り、節を考へ蕎麥・蕪菁・蘿菔を蒔、婦人は紬・木綿を織ること怠るべからず
八月朔日の佳節、其鄕黨の古例に隨ふべし、彼岸に先祖考妣の靈を祭り、社日に土神を祀り、大小豆・紅豆等を收納し、麻・苧を引、早稻を苅り、蕪菁・蘿菔を耘り、胡麻・荏草を采り、明たる畑を耘り耕すべし、月令に乃麥を種ることを勸む、時を失ふことある事なからしめ、若し其時を失ふことあるは、罪を行ふこと疑ひなしと云り、今月よりは草に子を結ぶ故に草あれば、子こぼれて、來年草多し、能耘るべし、夜々煙草をのし、婦人は紬・木綿を織り、更衣の心懸怠るべからず、月令に、又乃司服に命じて、衣裳を備へ飭へしむと云り、また秋成の年貢を上納し、不熟の所あらば、內檢見して訴ふべし
九月重陽の佳節も、農時なれば略し行ふべし、稻幷粟・稗・芋等を收納し、木綿を採麥を蒔、婦人は一切收納の穀をよく干し仕舞ふべし、秋作の收納、麥作の仕付、五月に等しき艱難の月なり、能忍で精勤すべし、月令に、草木黃落す、薪を伐て炭に爲ると云り、深山の民夫迄怠るべからず
十月小豆・綠豆を蒔き、蕎麥・蕪菁・菜菔・韮葱・牛蒡・胡蘿蔔等を收納し、小川に假橋を懸け、年貢米を

上納し、義倉に米・大豆を納、春官府より借りたる農具蠶具の料、種培養の代を上納し、鰥寡を恤むべし、今月より夜に藁細工を初め、芻草を苅る事を止むべし、堤・川除・溝洫・道橋普請・家作・屋根普請等を工夫し始むべし、詩に、晝は爾于て茅かれ、宵は爾索綯へ、亟に其屋に乘れ、其始て百穀を播と云り、婦人も又今月より春三月までは、夜績絣を怠るべからず、織縫は常の事なれ共、冬猶精勤して、正月の用意をなすべし、また今月より春三月までは、教導師・武術師・女師廻村して、各其道を教ゆべし、月令に、天子乃將帥に命じて、武を講じ、射御を習し角力すと云へり、また男子二十歲、女子は十五歲以下、其郷の師へ遣して書を學び、且人倫を學ばしむべし、但男女を別て教ゆべし、男子には數術を兼教へ、女子には夜々績絣の道を教ゆべし、飾を考へ楮漆を取り、炭・薪・秣を采るべし、又四木並に佐木を植べし、今月農事終れば、場を滌ひ逐祭をなして、天地の恩徳を報謝し奉るべし、詩に彼狐狸を取て公子の裘を爲ると云り、山野の民それ是を勉めよ

十一月麥に培養し、畝を日向に作り、麻・苧を作る畑を耕し、蕪菁・萊菔の干葉を收め、飢饉の用に供すべし、婦人の勤方十月に同じ、寒入は味噌醬油を製すべし

十二月初旬に、年貢を皆濟し、役錢・夫錢・村入用を勘定し、精勤せし民を賞し、懈怠せし民を罰し、水火災・病難に逢し民には、義倉の粟を貸して之を救ひ、（數を量て年賦にすべし）無告の民を救ひ、其外一切音信贈答をなし、金銀・米錢の借用を返濟し、今年の事を悉く改正し、正月のことも亦豫め量て、其手當をな

し、親戚朋友の好を通じ、目出度春を迎ふべし、月令に、令して民に告て五種を出さしめ、農に命じて耦耕のことを計らしむ、耒耜を治め、田器を具へしむと云り、又天子乃公卿大夫と與に國典を飭へ時令を論じて以て來歳の宜を待と云り、又山林の民は田畑すくなければ、薪を樵り炭を燒、藥種・山菓・野菜・木茸等を取て耕に代べし、深山には大工杣木挽板片等を入て、其業を爲さしめ、極深山にて材木里へ出しがたき所は、其材木性を察して、器財を作り出す時は、手輕くなりて出し易し、また深山谷間開たる所は、小麥・蕎麥を作らしめて、蕎麥切・干饂飩・素麪・干菓子の類を其所にて製せしめ、里へ出せば出し安し、又獵師をして其鳥獸をとらしむべし、國主心を用ゆれば、天地の間に業のならぬ所はなしと聞けり

又海濱の民は舟長・水主・楫取となり、他國へ交易の物を運漕し、又は海草を採り鹽を燒、網舟釣舟にて、魚の大小强弱に隨て、器を製して漁獵をなし、海女となりて貝類を採らしめ、各其地力を盡して天地の賜を空うすべからず

夫農民は四民の本なり、故に先其四時の勤方の大概を識すのみ、予民家に生長して、親く其業を見るといへども、亦老農にしかず、殊に農事も、東國・中國・西國其風土異なるに隨て、其業もまた異なることあり、其國々の老農に問て、よく其風土を知り、其國の寒暖によつて、四時の氣候を考へ、其土地の宜に隨て耕作せしめ、三草・四木を植蠶事を廣め、山林廣野の地力を盡し、川澤海濱の民も亦各能

其業を精勤して、其利を盡し、市街の民もまた然り、工人は怠らず器物を製し、商賈も亦能有無を交易し、三民みな其業を精勤し、黎民飢ず寒ず、誠に至治の澤を蒙るべし、今人其本を捨て、國を治め民を安んと欲するものは予は信ぜず

邑方總〆り

邑に大邑あり、小邑あり、方邑あり、圓邑あり、直邑あり、鋭邑あり、三角邑あり、偃月邑あり、其形一様ならず、何も四方の通路を工夫し、中に道を開き。四方の垣を丈夫にして、道の前後に木戸を付、其外に邑付の番太を置、火付・盜賊・諸勸化を防しめ、家作は東南を開き、西北を閉ぢ、耕作の便を考て建べし、名主の宅を中に建、門前に制札をたて、一切號令を觸流す便を考べし、年寄・長百姓は所所に散じてあるがよし、組頭の宅は四方戸に遠からぬ樣に工夫して建べし、遠ければ一切の世話行屆かず、懶惰博奕不行跡等の者ありても知りがたし、水災・火難の節の手當を豫め量て、水邊ならば泛溢の時の除場を工夫し、水少き處は池地を工夫し、火災の防心懸べし、又田畑へ遠き邑里は、畑の近邊に水溜桶を伏置、水を汲入腐し、糞に和して培養とすべし、又子母車を製して、培養並收納のものを載て引しむべし、譬へ不便利なる邑にても、猥りに轉動すべからず、其土地に隨て、濟方種々あるべし

市街總〆り

大都會は碁盤の目割、其次は雙六盤の目割、小街は十文字、或は一文字なり、何れも四面の垣を丈夫

にして、四方の口々に木戸を付、又一町々々の界目にも木戸を付、夜々は番人を置、火付盗賊の難を防ぎ、本陣・問屋・並旅籠屋は、公儀の御用、諸大名の參勤交代に、上下混雜せず、人馬の繼目に差支なき様に積り、名主・年寄・組頭の宅は、號令不ㇾ滯、國主の政道行屆く様に工夫し、諸商人の便りを考へ、舟着は河岸小揚の都合を量て家作をなすべし、また市中は家込人多、火災多きものなれば、其手當丈夫にすべし、池を掘り、或は軒下に小堀をほり、冬春田の懸水不ㇾ入時は、其溝洫の水を懸べし、水の手あしき處は、井の脇に下水溜を伏置、火を防ぐ手當とすべし、其地理に隨て種々工夫すべし

家作

それ民の住居は、耕作蠶事の便を工夫し、丈夫に作るべし、先祖考妣の神主を安置し、父母妻子を安堵せしむる所なれば、華美を好むべからず、然るに今の民は奢侈にして、家居を廣大にし、造作の美麗にして其財を敗り、父母妻子を安んずることあたはざるもの多し、愚なることにあらずや、古昔帝堯は茅茨剪ず、土階三尺、榱椽斲ずと云り。夏禹王は宮室を卑して、力を溝洫に盡すと云り、天子の宮室猶然り、又勢州の神廟は本朝天子の祖廟なれども、掘立の柱に茅葺の御廟のよし、異國本朝の神聖、其揆一なり、豈則らざるべけんや、故に民屋の度を記することしかり

凡上農夫は、家十間に五間、中農夫は、八間に四間、下農夫は、六間に三間を大數として、貧福に因

て、少しの差あるべし、桁下九尺、床下一尺三寸を限とし、尤棟梁柱椽等釿鉋にして、艶磨は禁ずべし、蠶・烟草等多き處は、二階付を免ずべし、二階下床より上七尺を限とし、二階上軒まで四尺を限とすべし、其餘は是に准ずべし、但臺所二階は、竹又は松丸太等を用ゆべし、板家根は禁じ、茅屋根なるべし

玄關は名主の外は停止たるべし、板張天井・唐紙・瀟伊羅戸・杉一枚戸・腰障子・唐紙腰張・違棚・袋棚等一切停止たるべし、床押入は質素に付すべし、名主並上農夫は、蘆簾天井・反古腰張は功により免ずべし、壁は白壁・大津壁等は禁ずべし、疊は其土地の燈身草・琉球草・茅草にて表を織用ゆべし、緣同前たるべし、但土地に三草生ぜざる所は、琉球表を用ゆべし、市中上商は、間口六間奥行八間、中商は間口四間奥行八間、下商は間口二間奥行五間を大數とす、(但し土地の盛衰により、工商の業により、大に替りあるべし、市中は地面つまりて、間口の廣狭從より改正しがたし、故に先表口は舊制に隨て裏行にて間數を定むべし)市中は大方二階付板屋根たるべし、建方獨方前に同じ、疊・建具・天井・腰張等の制度はまた同前なり、本陣・問屋・旅籠屋・居酒屋の類は旅人の宿するものなれば、家作制外たるべし(但し華美に過たるはゆるすべからず)

土藏は分限に應じて、質素に作るべし、無益の潤飾は停止たるべし、但し白壁は土藏に限りゆるすべし

門は長屋門に物置を兼、質素に作るべし、屏は禁じ、生垣たるべし、最その邑々の家格によるべし、中農夫以下は、盗賊の用心の爲計なれば、木戸生垣たるべし、下農夫、水呑百姓と云共、木戸生垣は

勝手たるべし、市中は本陣の外、門玄關は停止たるべし、制度以前の家作、度に越るもの多からん、檢使改て帳面久留置べし、今改め作る事は用捨すべし、勝手にて改め作る時制度に隨ふべし、造作度に越るは、五年の内に改めべし、年限過て改めざるは科料たるべし

衣服

夫衣服は身の寒暖に適し、且尊卑の等を分つ處なり、夏の禹王は天子の御身にて、衣服を悪しく、美を黻冕に致すとあり、周の文王の后妃は、洗濯衣服を召したること詩經に見えたり、又齊の晏子は大國の大夫なれども、一狐裘を三十年着し、妾に帛を着せず、身を約すること斯の如くして、其祿を分施して、火を擧るもの三百餘家と云り、今の民は衣服を美にして、尊卑の等を亂し、禮に背き財を敗り、父母の孝養に乏しきもの多し、歎しき事にあらずや、故に今衣服の度を記し、君子の考に備ふる事しかり

一 土産ならば、名主の公服に絹を免し、上農までは紬・太織を免すべし、土産ならずんば、名主に紬・太織を免るし、上農夫も皆綿服たるべし但し土産といふとも、十五歳以下の人、絹紬を常服とする事をゆるすべからず

一 男女共五十歳以上の人、紬・太織の常服勝手たるべし

一 夏の服、絺綌漂は停止たるべし、但土産ならば、漂はゆるすべし

一 羽折は常服に准ずべし

一 上下は名主並上農夫に免し、中農夫は羽折・袴を免し、下農夫は白衣たるべし、但其處の家格を問

て用捨あるべし

一　袴は青梅棧留を限りとすべし

一　帶は衣服に應ずべし但し男帶幅二寸五分より三寸迄、女帶幅五寸より六寸を限とすべし

一　火事の羽折は、皮或は木綿なるべし

一　婦人の衣服も、男子に准ずべし、模樣振袖・白小袖は停止たるべし、禮服には親父の定紋を付べし

一　衣服の丈、男子は踝を限とし、女子は地と等しかるべし

一　袖は猥りに大にする事禁ずべし

一　紅・紫・黑色は禁ずべし

一　縫紋・縫模樣は停止すべし

一　夜具木綿に限るべし、但五十歳以上の人病人は、太織紬の夜具を免すべし

一　足袋白色を禁じ、青黄色の指足袋を免すべし、但し婦人は白を免すべし

一　草履中拔・裏付は禁じ、黑青漆緒の雪踏を免し、平日は藁草履を用ゆべし

一　塗木履・皮緒停止すべし

一　笠は眞竹皮笠・管笠を用ひ、其餘は禁ずべし

一　婦人も日傘を禁じ、三度笠を用ゆべし

一　傘蛇の目、長柄頭を停止すべし

一　合羽木綿は、半合羽飾なきを用ひ、本丈なるを禁じ、桐油は黄丸合羽、赤袖合羽を免し、青漆禁ずべし、婦人は本丈木綿合羽を免し、飾を禁ずべし、但し農業の時の雨具は簑笠なるべし

一　頭巾は五十歳以下は禁じ、五十歳以上病人は絹を免し、婦人は黒紬袖頭巾を免すべし

一　渡り皮切巾着蒔繪印籠禁ずべし

一　懷中渡切。錦繡切の烟草入を禁ずべし

一　佩刀作の中身、並金銀・赤銅・四分一等の飾を禁ずべし但し重代の重器は書上免を請て所持すべし、帶する時は飾を除くべし

一　婦人の櫛笄・金銀・鼈甲は停止すべし

制度以前に製せし服は、五年の內は下着とせしむべし、但し名主改て帳面に記し置、五年過て着せば科料たるべし、市中も同前なり

飲食

夫飲食は民の以て天とする所にして、一日も食せずんばあるべからず、殊に人情貴賤となく、貧富となく、美味を嗜ざるはなし、然れども君子は玉食し、小人は麁食すといへり、是故に其土地に生ずる所の上品の物は其君に献じ、其下品の物を己が食とす、是其分なり、又土地の肥瘠によりて、五穀の多

寡あり、山林・川澤・海陸の地利によりて、禽獸魚鼈の多寡あり、皆天の其民に賜ふ所なり、故に其土地に生ずる物を食して、他より買入ては食すべからず、伊勢の神廟の御供米は、三杵春て炊ぐといへり、また夏の禹王は飲食を薄して、孝を鬼神に致すと云り、有がたき神聖の教、誰か是を則らざらんや、故に爰に民の飲食の度を記して、君子の考に備ふる事しかり

一 凡民の冠婚葬祭の類重き饗膳に上農夫は一汁三菜、中農夫は一汁二菜、下農夫は一汁一菜たるべし、但土產の物を以て製すべし、魚鼈なき山林には、禽獸多きものなり、其肉を用ゆべし、又米粟寡所は、小麥・蕎麥多し、溫飩・素麪・蕎麥切を以て料理に代べし、又精進の時も土產の物を用ゆる事同前なり

一 酒講、上農夫は吸物二種、取肴三種、中農夫は吸物一種、取肴二種、下農夫は吸物なし、取肴一種なるべし、最酒肴とも土產なるべし、酒は量なし、亂に至らざるを度とすべし、然れ共酒講の刻限、上農夫は二鼓、中農夫は一鼓半、下農夫は一鼓を限とすべし 但し男女ともに三十歳以前は、冷酒三獻を限とすべし

一 鯉・鱸・鯛は禁ずべし 但し老人病人は制外たるべし

一 獸肉は男女共五十歳以前は食すべからず

一 名酒・名茶・造釀の上菓子は禁ずべし 但し土產の樹菓並名茶は苦しからず

一 奈良漬守口の類、其外一切の澤漬・麴漬の類禁ずべし

一　白味噌醬油金山寺の類禁ずべし

一　水旱の災によりて飢饉の節、時に臨で宜を制すべし

一　烟草、舞鶴・國府・館の類名葉は悉禁ずべし

右禁食と云共、老人病人は制外たるべし

器物

古昔は諫るに宮なし、百工各其職を以て諫むと云り、蓋無益の重器を省て、國家有用の寶器を製する所以なるべし、人君猶爾り、況や庶人においてをや、今世器物に制度なく、民皆奢侈を好て、更に貴賤の別立ず、禮を犯し財を敗るもの多し、故に爰に器物の度を記して、君子の考に備ふる事しかり

一　三方八寸、木具朱蠟色の類

一　金紋蒔繪、並に朱蠟色の椀、腰高の類

一　長柄銚子・土器・金畫の杯・蒔繪硯蓋・盃臺・菓子盆の類

一　臺の物・砂の物類

一　唐並諸蠻國の陶物・錦出の器・燒物皿・大鉢の類

一　唐金鍋・茶釜・靑銅藥罐の類

一　床飾香爐・唐金花瓶・丁子風呂・盆山置物の類

一　金銀・赤銅・四分一等を以て潤色したる器物の類

一　花塗靑銅金物打たる重箪笥・用箪笥・長持の類

一　几帳・衣桁・脇息・床几・金屏風・槌立の類

一　切立銅盥・花塗盥・同手巾懸・唐金手水鉢の類

一　金蒔繪・朱蠟色の湯桶・重箱・食籠・行器・飯器・同臺の類

一　白木の器物・同臺の類

一　唐・朝鮮・琉球・並諸蠻國の器物類

一　古器・茶器・古筆の書畫類

一　櫛・笄・鏡臺・鏡立・針箱・花塗蠟色・蒔繪禁ずべし

一　行器貝桶の類

一　本乘掛・本乘物・釣臺・狹箱・幕毛氈の類

一　武具・馬具、私に所持する事を免さず

右の類の器物は悉く停止すべし

商賈

君子は義に喩る、小人は利に喩る、故に人君必ず小人と利を爭ふべからず、然ども亦國の利器は、以

て人に貸すべからず、今士民穀を賣て一切の物を買上る故に、其買賣の利權悉く商買に歸す、故に士民は日々に貧く、商買は月々に富、人君心を用ひて、法を立度を制し、商買の利權を折き、士民の難を救はずんばあるべからず、故に爰に其一二を擧て其考に備ふ、猶禮の王制の意を考、其國の風俗に隨て其度を制すべし

一 五穀は其國にて、夏秋兩度の收納を見て、國中の有餘不足を豫め積り、不足ならば他國の米を買入、有餘ならば他國へ米を賣出すべし、他國への賣買は、近國並に三都諸國の豐凶問合せ、時節を考へ、利潤ある樣に賣買せしむべし諸侯の政は一國を以て一家とす、天子の天下を以て一家とする政とは、少しく異なることあり

一 其國にては十年程の直段高下を考、其中を取て定むべし、譬ば米壹石五十匁・六十匁の間を以て定とせば、四十九匁に至らば、官府並義倉へ米を買入、六十一匁に至らば、官府並義倉の米を賣出し買下買上・賣上賣下直段の大ならしをして、民の憂なき樣にすべし、又國中にても運賃駄賃の積り有べし、必其國中にては、其年の不作を見て、姦商黨を立て、俄に直段を上て、貧民を苦しめぬ樣に工夫有べし、餘穀も然り

一 呉服物並紬太織・靑梅棧留・木綿類・夏物に至る迄、其國中の民の衣服の有餘不足を豫め積て、有餘の分は他國へ賣出し、不足の分を買入、賣買せしむべし、但城下用達の外は、制禁の衣服を賣買する事を免すべからず、其餘一切の物自國有餘して他國へ賣出し、自國不足して他國より買入る物は、

皆所の免を受て賣買せしむべし

一　南替屋近年貪る事甚し、法を立其姦を防べし

一　質屋は慥成證人を取て、盜賊の物を改め、外の借金より五分安に貸し、期限盡れば前月に斷り、期盡てまた一月過て、請ずんば流すべし、但し書付を以て司配の名主へ訴べし

一　古金・古着・古道具・古筆の書畫は、姦商人を欺き、又盜物多し、役所を立て其品々を改め、官印を居、正札を付、帳面に記し置、姦商を防ぎ、盜物の詮議捷徑なる樣にして、賣買せしむべし

一　炭・薪は自國に不足ならば、他國より買入て、賣買せしむべし

一　酒・酢・醬油の類は、其國不足にても、他國の物を買入、賣買する事を免すべからず

一　水油は其國不足ならば、他國より買入、賣買せしむべし

一　髮油・元結・水引の類は、自國の制にあらずんば、賣買せしむべからず

一　紙茶の類は土產不足ならば、他國より買入、賣買せしむべし、但し大高奉書・唐紙・金銀紙・金銀唐紙の類は禁ずべし

一　藥種は唐並諸蠻國の產物と云共、病に利あるものは悉皆買入、賣買せしむべし、附り砂糖は三品共に、食用の品なれば免すべし

一　陶物は其國に不足ならば、他國の物も賣買せしむべし、但し唐並諸蠻物、其外奢侈の器物は、賣

買せしむべからず、銅鐵器も亦同じ

一　疊表類自國に不足ならば、他國より買入、賣買せしむべし、但し備後・備中表等は賣買せしむべからず

一　建具類奢侈の道具は賣買せしむべからず

一　家具類禁器は、賣買せしむべからず

一　一切無用の重器は、賣買せしむべからず

一　小兒の玩器奢侈の品、賣買せしむべからず

一　小間物類奢侈の品は、一切賣買せしむべからず

一　枕繪・淨瑠璃本の類、賣買せしむべからず

一　造釀の上菓子は、製せしむべからず

一　熟食類奢侈の品は、賣買せしむべからず

一　煙草土産にあらずんば、名葉を賣買せしむべからず

一　國主紋付の衣服、並器物、市に賣らしむべからず

一　國主より賜りたる物は、一切質物に入、並に賣事を免すべからず

一　先例なき運上は、必ず猥りにとるべからず

一 武具・馬具、乘馬の道具 私に賣買せしむべからず

一 牛馬の市に法を立て、姦商の欺を防ぐべき事

一 五穀を始萬物の相場替り次第、其問屋より訴出べし、相場は天なりと云共、其國の事は國主の政にて、十に三四は救はるべし

一 律度量衡を同し、姦商の欺を防ぐべき事種々口傳あり

一 一切の賣物價を定め、正札を付賣買せしめ、若價を飾り代物を僞る者あらば、其市に立しむべからず

禮記王制に、凡禁を執て以て衆を齊すれば過を赦す、圭璧金璋有て市に鬻ず、命服命車市に鬻ず、宗廟の器市に鬻ず、兵車度に中らざるは市に鬻ず、布帛精麁數に中らず、幅の廣狹量に中らざるは市に鬻ず、姦色の正色を亂るは市に鬻ず、錦文珠玉成器市に鬻ず、衣服飮食市に鬻ず、五穀の時ならざる、果實の未だ熟せざるは市に鬻ず、木の伐に中らざるは市に鬻ず、關禁を執て以て譏して異服を禁じ、異言を識るといへり、能其國俗を見、其宜を考て其度を制すべし

音信贈答

夫音信贈答は、親戚朋友の好みを通ずるの道なり、故に聖人其制度あり、公侯は圭、卿は羔、大夫は雁、士は雉、庶人は鶩を用と云り、今その道廢して行れず、或は過、或は不及にして、其節にあたらず、

故に今民の音信贈答の大數を擧て、其節を示すのみ

一　名主の音信、上農夫は米三升・麥三升・大豆三升、中農夫は米二升・麥二升・大豆二升、下農夫は米一升・麥一升・大豆一升程宛なるべし、年寄は半減、組頭は三分一なるべし（年寄組頭共に、其支配下の百姓ばかりなるべし）村役人の幣物多きに似たりといへども、是迄の勤方と違ひ、百姓の事一切司ることなれば、其役料なければ勤らず、故に此制あり、市中猶事多ければ、此の倍なるべし、また山海の民漁獵等を業とする處は、各其物を以てすべし

一　親戚朋友の冠婚葬祭の類重き音信に、上農夫は米五升、中農夫は米三升、下農夫は米壹升なるべし、輕き音信は其半減なるべし、一組の內は、近き親類同然たるべし

一　婦人の音信は、桃李柹栗の類、或は絲綿の類を以て、宜を制すべし

一　二挺立の破魔弓・本磨の羽子板・五寸以上錦・繡衣の雛人形・布地の昇・兜立物・大凧の類、音信は勿論、自分にて飾るも禁ずべし

一　小兒の玩器華美なるものは、音信に用ゆべからず、親與ふるも又禁ずべし

郷黨貴賤

一　異國の書には、郷黨は齢を尊ぶと云共、本邦の民家筋を以て貴賤を分つこと嚴重なり、予故郷に在し時、其故を父老に問しに、答て曰、其郷の芝付百姓と云は、其郷開闢の時は、其田畑を皆所持し

に、其利權を皆商人に取らるゝ故に、大國の諸侯も皆困窮し、借金月々に多く、日費年々に不足すれば、有道の國といへども、今急に什一の古法には復しがたし、先朝三暮四の政をなして、十の一二を救んと欲すること爾り

一　田方米年貢は、古來定の如く納めしむべし、但し遠方の地は、金納又は絲・綿・反物等に代ることもあるべし

一　畑方年貢は、小物成定の外、其土地に生る日用の物は、君並藩中藏前取の入用を積て、其物にて貢せしめ、畑金又は米にて指引すべし、土地の名產の多く、米金年貢にて其價不足ならば、官庫の金を出し、商人の手を經ずして、下民より直に買上にすべし、君にも民にも益あり、一切の物みな然すべし

一　藩中采地あるは、皆其割合を以、采地の產物を貢せしむべし

一　蠶所は繭を納め、木綿所は綿を納めさせ、士大夫共に各其妻子をして、衣服を製せしむべし

一　山林の年貢は、材木・炭・薪・板屋根・板茅等を貢せしむべし

一　海川漁獵の運上も、皆物にて貢せしむべし、鹽も亦同前なり

一　山林の獵人は、其魚獸を貢し、又其皮を貢せしむべし

一　工人の製する器物の運上は、亦法を立て其物を貢せしむべし、買上の時も、又商人の手を經ずして直に買べし

一　商人の運上も、亦各其業に付たる品を貢せしむべし

一　地なし高の運上は、藩中の采地に賜ふべからず

右之外、其國中より生ずる物は皆法を立て、苛政にならぬ様に、各其職分にて得たる品を君に貢し、君より藩中に賜りなば、（賜る處の米金を以て是に代ふべし）上下共に物を買事自ら寡くなり、商人の利權日々に衰へ、士民月々に富、上下自ら安かるべし

交易

前條に云る朝三暮四の貢法にて、一切其國に生ずる物を采て君に貢し、士大夫に賜ひなば、上の賣買の費は十に七は止むべし、然其農民も又穀を賣て、萬物を買費夥し、故に民も亦其土地に生ずる五穀織物・糸綿・材木・炭薪・鳥獸・魚鼈を初め、一切の物を金銀錢に交て、相互に交易し、物を賣ことを必とせずんば、工商は穀を初め、一切の物を買ねばならぬ物なれば、主客の勢ひ大に變じて、穀を貴び貨を賤じ、士農は强く、工商は弱くならば、本大に末小にして國日々に强からん、今其政をなさば、少は指支もあるべけれ共、亦仁政にて、工商の救ひ様は種々あるべし、夫士民は本なり、工商は末なり、故に士と農とは物を買ず、其土地に生ずる物にて、衣食住の用足て、物を賣買する事なきは古の制なり、諸君子冀くば是を勉めよ

借金

今の世の中は、上下に出入を不｣量して、行成に暮す者多きが故に、借金の多きこと、有金の百倍にて勘定嚴密には成りがたきよし先輩云り、然れ共公儀の御力にあらずんば、徳政も行れまじ、先制度以前の借金は其筋々を吟味して、長短各其宜に隨て、年賦に定め、五穀其外一切の有物を金に積りて渡すべし、其後借金の度を制すべし

一　村役人の印にあらずんば、金銀を貸すべからず、故なき借金は、村役人印形すべからず

一　利足、十兩以下の金子は、壹割五分なるべし、拾兩以上の金は壹割と定め、是より高利の金は停止すべし

一　質物も組頭の印にあらずんば貸すべからず、此法立ば、盜物を質物に入るゝ事あるべからず

一　家質・畑質は、總村役人の印にあらずんば、貸すべからず

一　盲人・浪人・富商人等、金貸しを以業とする事を禁ずべし

一　義倉の金は五歩の利足なるべし、但し高不相應には貸すべからず、是總村役人の願にあらずんば貸すべからず

一　國主へ訴て、年賦・月賦等に命ぜられし借金は、重て役所へ出るに及ず、相對にて請とり渡しすべし、若借方違變あらば、亦訴出べし、若令を背ば曲事なるべし、其時々に役所へ出るは、互の難儀なれば也

一　官府の金拜借は故なくんば、免すべからず

一　頼母子講正路の法を建て免すべし、財を融通するの道なり

運漕

當今の諸侯は東都に客居する故に、常に運漕に苦しむ、殊に其國交易の法立ば運漕猶多くして、指支へあるべし、故に今共便利なる器物數品を擧て、運漕の便りとなさんと欲するのみ

一　大道は大八車、並に牛車を用、五穀材木等を運漕せしむべし、然共此車は私に用ゆる事能はず、公儀へ願て、御免を蒙りて用ゆべし

一　細道は四輪の小車を製して、五穀・炭薪等をつみ送るべし、又街道筋に用ば貧旅人の救となり、傳馬・人馬の助ともなるべし、其製し様にて、平地は婦人小兒も引べし、又耕作に用て宅より田へ培養を送り、宅へ收納の物を積べし、予是を子田車と名く（製法口傳あり）

一　雪國には、反り木と云物あり、雪中に用て便利あり

一　大木を引に、丸木を轉じて引法あり

一　川邊には小舟を用ひ、又筏を用ゆべし、小川を深して舟筏を用ゆる法あり（口傳）

一　海邊に小舟を用、礒邊を引て破舟の難を免るゝ法あり、えらみ用て民力を助くべし

義倉

漢の代に義倉と云事あり、君民共に其高の二十分の一を此倉に納て、水旱の災、又冠婚喪祭等の用に供ふと云り、今は君民ともに此倉を建て、高の四分一を入て、不虞の備となすべし、古は三年耕て一年の餘りありと云り、今は上下共に奢侈に陷溺して、其年の物成を皆遣ふても足らず、借金しては、其年々の間を合するを第一とする故に、後の難儀を顧るに暇なく、年々斯の如く不足する故に、上下皆困窮し、後は禮儀廉耻を忘れて、姦曲をなすに至る、歎しき事にあらずや、是を救ふは上より世話やきて、此義倉に各其高の四分一を入て、（借金多四分一を納る事あたはさるものは、先減じて納むべし）其難を防より外はあらじ、王制に、入を量て出すことをなすと云り、民は其出入を量て、其暮方不足せば、二男以下は末業をなさしめ、又は出替り奉公人ともなして、儉約に暮さるゝ程に積りをなして、身の上を立べし、昔時曹溪の六祖惠能は、門徒の僧數百人ありしに、命じて其邊の山を開發させて畑となし、其僧徒をして是を耕作せしめ、年年夏秋の收納の高と、衆僧の數を積りて、豐年には飯を食せしめ凶年には粥を食せしめしと、禪錄にあるよし禪僧の語りし、其書は忘れぬ、浮屠といふ共、英雄の所作感ずるにあまりあり、故に爰に贅して、懶惰の民を勵さんと欲するのみ

滄浪夜話卷之一　終

滄浪夜話卷之二目錄

滄浪夜話卷之二

治民下

邑役人管轄

夫民を治る道は、管轄の法より捷徑なるはなし、其法たるや、國主の有司は、君命を以て名主を治め、名主は年寄を治め、年寄は組頭を治め、組頭は四小戶を治め、四小戶は各其家內を治る時は、其治る所は纔に數人に過ず、凡物すくなければ齊し易し、齊しければ能治るなり、予故に民を治る道は、管轄の法より捷徑なるはなしと云り、故に爰に邑役人の次第を序して、其勤方を記して、是を教導せんと欲する事しかり

割元

此役は邑里市街の役人の筆頭にて、東都の町年寄に同く、其家筋を以て命ぜられ、殊に城下市中に住者なれば、幼少より商賈の事を見聞する町人の事なれば、多くは利を貪て、奢侈を好む者なり、能監察して其疾を禦ぐべし、邑方一切號令の觸本なれば、當人其任に堪ずんば、年寄・長百姓・組頭等よく輔佐して、一切觸出しの號令、遲滯なき樣に勤むべし、其餘の勤方は名主に同じ

大庄屋

是亦割元に續く重役にて、家筋を以て命ぜらるれば、年寄・長百姓・組頭等能補佐して、割元より觸出す號令を、遲滯なく觸下の邑々へ行屆く樣に勤しむべし、此役は在郷に住者なれば、商賈の事を知らず、貪利奢侈の疾、割元ほどにはなけれ共、諺に鳥なき里の蝙蝠と云がごとく、驕奢出易し、能教戒すべし、其餘の勤方は名主に同じ

名主

此職は一邑の長なれば、一邑の民を正治する職分なり、故に漢には里正と名て、其里を正すの義なるよし、領主の地中に居住し、其恩澤にて父母妻子養育する報恩に、年貢を上納し、諸役を勤むる事なれば、士大夫の君に仕ふるが如く、耕作の時を違へず精勤し、國主の號令をよく守り、親に孝に夫婦睦じく、子孫を教育し、遊民の制度を整へ、神社佛寺の非法を監察し、穢多・乞食・川原者まで、各其所を得せしむべし、又能村境を正し、田畑の道筋境目を吟味し、田畑の賣買に、質地永代の法を正し、川筋・樋口・池水・道橋も心を付、村繪圖を作り、水帳・名寄帳を調へ正すべし、又海手・山川に添たる村は、狩人・漁獵・舟長・木樵等の制度を整へ、何にても其所に住者は、皆名主の司配たるべし、年寄・長百姓・組頭をよく立置、大事は總百姓を集會して議論し、小事は村役人計にて議論して、事を決すべし、兎角我意を捨て、一村の百姓の能智を取用ひて是を治むべし、よく治て公事訴訟出來ざる村は、

恩賞あるべし、或は金銀・米粟・布帛の類を賜ひ、或は扶持方を賜ひ、或は帶刀を免す事も有べし、是も皆其者一世切にすべし、若大功有ば、永世にも及ぶべし、此役も家筋にて命ずれば、世々其任に堪る人は出がたし、名主其器にあたらざれば、年寄・長百姓・組頭等輔佐して勤さすべし、必猥りに轉役すべからず

年寄

此役もまた村々にて、名主に續く家筋正しき百姓に命ずべし、名主病氣の時は名代を勤め、或は名主幼少か、又は其器にあたらぬ時は、當分年寄持にもする事なれば、能其人を撰むべし、勤は名主の添役なれば、大方名主に同く、百姓を治る道をよく心懸て、一切の事、名主の手の廻らぬ事は、年寄の心を付て勤さすべし、但し大村は年寄大勢あらば、百姓を分て司配せしむべし、司配を分けねば、月番持の勤め拔けの樣に成て、號令行屆ぬものなり、故に司配を分て、各其司配下多からねば、號令能行はるゝなり、又能組頭を治め正して、一切の事をよく命ずべし

長百姓

是は所にて家筋正しき者の村役勤めぬ者を、長百姓と云、所によりては大勢もあるべし、役はなければ、武家の大臣の寄合の如く、常は職なし、事ある時は、打寄て評議すべし、最品によりては、名主をも强諫すべし、然れ共事を決するは名主なるべし、年寄役關る事あらば、先此內にて選むべし、此

内になき時は他にても撰むべし、百姓代の印も此内にてすべし

組頭

組頭は伍長にて、四小戸を司る、故に四小戸の人別を改め、一切の號令を能觸聞せて、犯す事なき様に命じ、よく五倫を守らせ、懈怠を戒め、博奕淫亂を制し、耕作を精勤し、年貢を時々に納め、諸役を滯りなく勤めさせ、我家内の如く、一切互に懇にして、隔なく交るべし、尤火災・病難・死葬の類も相互に助け合、哀樂を共にすべし、若何にても下知を背き、不如法の事あらば、よく異見して正路に歸せしむべし、若三度に及で聞いれずんば、年寄に告て是を正さしむべし、其上にて聞いれずんば、名主の宅にて、諸役人立合教戒すべし、されども猶聞入れずんば、上へ訴て御下知を待べし、若四家の内に無告の民あらば、互に相助て救ふべし、四家の力に及ばずんば年寄に告、名主に告て一村の救ひを受くべし、一村の力に及ばずんば上へ訴べし、斯のごとく管轄すれば、治らぬ民はなきなり

市中役人

本陣

此役は其役の長にして、家筋にて命ぜられ、御歷々方の交りもする故に、驕侈ともに生じ易く、尤貪利の志も深きものなり、有司よく制して勤さすべし、先宮方・攝家・淸華・勅使・御名代・上使・御三家始め奉り、京都・大阪・長崎始め、諸方在番御用の諸御役人、並諸大名の參勤交代等の御宿申者なれば、

公儀の御法度、國主の號令を愼み守り、先規の記錄を能吟味し、失敬なき樣勤ること肝要なり、尤本陣は私亭と違ひ、能修理して見苦しからぬ樣に心を付べし、公儀の御用、道中筋の事は問屋に相談し、國主の御下知町用等は、名主に對談し、越度なき樣に取計ふべし、小驛にては、本陣・問屋・名主共に兼勤るもあり、大驛にては、各別に職を分て勤る事なれば、互に能心を合て、御用並諸大名の用事差支なく、往來の難儀なき樣に心を盡すべき事なり

問屋

此役も本陣に續て、其町々にては重き役なり、先公儀御定め道中の法度、國主の號令を能愼み守り、公儀の御用、諸大名の參勤交代を始め、一切旅人の往來に難儀差支なき樣に工夫し、人馬の賃錢を改め、先狀ある人馬の數を吟味し、不意入用の人馬の積りをなし、貧者・病者・癈人・老人・婦人・小兒・商人荷物等もなく、一人旅の法を定め、帳付・馬指・手代等の私曲を制し、町人馬・助鄕人馬に依怙贔屓なく使ふべし、別て助鄕人馬は、近くは一二里より、遠くは四五里も來て、其役を勤る者なれば、隨分心を付て使ふべし、又人馬卒駕輿等の無法に酒代を、乞增を取事のならぬ樣に法を立て制すべし、人馬卒・駕輿共に、五人宛に組合組合を定め、段々に組上て、其頭々より制する時は、制せられぬ事はなきなり、又蜘蛛助は此業ある故に、盜賊・火付・逐落等の惡事もせねど、宿なし者の司配もなき者なれば、途中にて如何樣の惡心生ぜんも計りがたし、是も其內にて頭を立、組頭を定め、仕置のある樣に管轄

して使ふべし、又其驛の前後に海川橋・舟渡等の所も、其司配所より法を立てゝ賃錢を無法に貪らぬ様に制すべし、又夜々追剝抔出で、旅人を惱す處あらば、其前後に役所を立て制すべし、又護魔の灰も其道筋に置くべからず、其治方能行届かねば、天下の旅皆其道に出ると云政はならぬなり

名主

市中の名主は、在鄕名主と違ひ、貪利奢侈の工商を治むるが故に、大に治めがたし、且其身も其内にありて是を好が故に、制すと云とも下亦服しがたし、先愼で町奉行の下知を守り、工商の法を正し、其姦曲を防ぐべし、五穀・衣服・材木・茶・酒・酢・醬油・油・炭・薪・荒物・瀨戸物・金物・菜種・菓子・魚鳥等の問屋を改め、古道具・古着・古金の類は、役所を立是を吟味し、律度量衡を正し、鍛冶・大工・桶屋・紺屋・鑄物師・農具・武具・建具・家具・小道具始め、一切職人の法を正し、直段を定め、玩物長器を作る事を停止し、殊に街路筋は旅籠代・米代・木賃・夜具料・饂飩・蕎麥切・素麪・煮賣・赤飯・一膳飯・居酒・團子・餠・雜菓子・茶代・馬宿・駒立・馬飼料に至るまで、細に吟味し直段を定め、旅人の難儀せぬ樣に制すべし、本陣・問屋に心を合せ、手屆かぬ所は、年寄・組頭に命じ、吟味せしむべし、其餘は在鄕名主に同じ

年寄

市中の年寄は、大驛ならば十人あるべし、内一人は本陣付、三人は問屋付、内六人は名主と定め、各其本職の手の屆かぬ所を吟味し、能く輔佐せしむべし、本陣付は勅使・上使・御名代・普請御役人・諸大

名等の御泊り、御小休の先例の記錄を吟味し、本陣を輔佐し、問屋付は手代・帳付・馬指を初め、町助鄕の人馬・蜘蛛助までの勤方を吟味し、其私曲を防ぎ、旅人の難儀なき樣にし、名主付は其町を六ッに分て司り、組頭を能立置、一切の町法を命じ、四小戶を治めしめ、工商の姦を正さしむべし、市中は借屋多きものなれば、家主に命じて是を治めしむること、組頭の四小戶を治むるがごとくせしむべし、また橫丁新田裏々迄も、能工商の業を吟味し、盜賊・博徒の類其間に交り住む事ならぬ樣に治て、國主の政に服せしむべし、其餘は年寄組頭共に在鄕に同じ

神社

古來より其所に勸請しある正神は、能尊敬すべし、神は人の敬に依て位を增し、人は神の德に依て運を添と云り、本邦の神威は外國の比にあらず、誠に神國の名空しからず、然其神は非禮を請ず、淫祠は存すべからず、又邪神の祠は必破却すべし、新社は建べからず、禰宜・神主は其職なれば、神道の奧義を能學ぶべし、兎角今の神職は文盲にして、唯施物を貪る者多し、故に儒者・佛者に比することを得ず、從五位下に任ぜられても、無位の儒者・僧徒よりも賤めらるゝは、其道に暗きが故なり、浮屠氏は能儒書を借りて潤飾する故に盛なり、神道者は是を借りて、潤飾することを知らぬ故に衰るなりと、熊澤了海は云り、實左もあるべし、然其神職の學文は、能日本の古書を學ぶべし、古事記・日本紀以下、國史・律令格（今は亡たり）式・江家次第・西宮記を見て古を知り、萬葉集・記の祝詞・續日本紀・宣命の詞

等を見て古の意、古の言を知りて、國史の意を考へ、其道を潤色すべき事なり、諺にも神は禰宜の習しからと云り、己が拙より其神威も次第に衰るは、悲事にあらずや、寺社奉行能心を用、村役人も亦費多き淫祠を止て、神威を増し、運を添る樣に監察し、且祈るべき事なり、又其家にあらずんば、神道を以て業とする事を禁ずべし

一　本邦の鎭守は其發起一ならず、或は伊勢・熊野を始め奉り、其信ずる神を其所に勸請して、鎭守とするもあり、或は怨靈祟りをなして、其神威を慰んために、祭りて鎭守となしたるもあり、或は靈驗あるによりて、其神を勸請して鎭守としたるもあり、或は其所の領主、又は其臣其民に德ある人を祭りて鎭守としたるもありと聞けり、然るに今陋巷の小祠は、其先如何なる故に、鎭守を崇め祭れるや、知るべからざる者多し、然共古來より其處に祭り來る神祠は、邪神にさへあらずんば、古例のごとく祭祠の度を制して、祭らしむべし

一　鎭守祭祀の入用、上農夫は米五升、中農夫は米三升、下農夫は米壹升を限るべし但し土地の盛衰により少しの差あるべし古代の祭祀は淸肅にして費寡く、古雅にして神をいさめ、祥を祈るに堪たり、祝詞・神樂・催馬樂・管絃・音樂の謠ひもの・採物の類、有職の人に問て行べし、奢侈のねりもの淫樂等は必禁ずべし、祭祀は神をいさめ、社稷保全、萬民安穩を祈る事なれば、民の財を費し、淫祠に神明を穢し奉ること、必ずあるべからず、又伊勢參宮・熊野詣を初とし、靈社へ參詣し、或は諸社の太々神樂、其餘大金を奉納す

る類ひを以て、神信心とするは愚民の常なり、よく教戒して他國へ多く金銀を出さしむべからず

佛閣

古昔は佛法も民の歸依する事は、各心次第なりしに、切支丹宗門御改强より、萬民寺請狀といふものなければならぬ事になりしより、今の如く師旦と極り、志士仁人も役に戒名を付させ、髮を剃せねば濟ぬことになりしより、諸宗の僧も、國の役人の樣になれり、故に寺院を廣大にし、官位を高くし、陪從を多くし、施物を貪て其費をつくのはんとす、捨身隱遁の境界にあらずや、然共今は諸侯の力にて、是を止ることならぬ勢ひに成り、唯能度牒の法を立て、猥りに出家する事を免さず、又民に音信贈答の制度を立、二期の施物にて、常のくらしを定め、死葬祭祀の施物にて、不意の入用の手當となして、其寺格を立ば、寡は寡儘に、多は多き儘に立、種々の勸化・奉加・寄進抔を勸め、或は御免富を願ひ、民の財を貪り、多の金銀を貪らずとも濟べし、又常に郷村の役人をして目付とし、不如法の僧は皆脫衣追院し、又は還俗せしめて民ともすべし、國法正しく立て、其非法を正さば、其本山よりも妨る事能はず、後は寺院も段々に減じて、戒定惠の三字を正しく守る僧徒ばかりにならば、國主の處置次第、却て教化の助とも成るべし、英雄の君寺社奉行を撰時、時勢を察して法を立、村役人をして能監察せしめば、似て非なる惡僧亡て、名僧のみ殘らば、佛法も再興と云ふべし、釋氏を始め諸宗門の元祖の靈も、皆々泉下にて隨喜すべし、昔時永平の開基道元は寺領を辭し、紫野の一休は僧官をも受ずと聞け

り、實左もあるべき事なり

一　旦那寺年々の音信、上農夫は米三升、中農夫は米二升、下農夫は米壹升を限とすべし

一　祈願所年々の音信、上農夫は米壹升五合、中農夫は米一升、下農夫は米五合を限とすべし、若富人祈願の事あらば財を散じ、無告の民並癈人・貧民を救ふべし、禰宜・山伏・神子・巫・陰陽師・賣僧等を賴て祈る類ひにはあらず、利益尤廣大なり

郷士

是は先祖より由緒ありて祿を賜ひ、郷里に住居せしめ、多くは常職なくして、纔の軍役の制あるのみにて、司配頭遠く且常職なくて、郷里に住居する故に、平生の交り皆民なれば益友はなく、驕傲にして才智長じ難し、先學校に入て學ばせ、才覺次第、敎導師共なし、又は武術の師ともなすべし、兎角一切の人皆常の職なくんばあるべからず、能工夫して素餐せしむべからず、是又村役人を以て監察せしむべし

郷師

城下並繁華の市中には、郷師多きものなり、儒者・軍學者・天文・律曆・地理に通ずる者、又本邦の古學・歌學・禮樂・射御・書數・劒鎗・鳥銃等の道に達したるもの、出所正しく、行跡宜者住めば、其郷黨自ら文武の道盛になるものなり、司配をわけ、禮儀を厚くして、平民と混ぜしむべからず、行跡も亦宜しか

らざる者は、反て民の業を怠らしめ、風俗を亂すものなり、必其所を追去るべし、王制に、僞を行て賢ならしむ、僞を言て辨じ、非を學で博し、非に順して、澤にして以て衆を疑しむるをば殺と云り、よく考辨あるべし

醫者

此職は小伎といへども、民命にかゝる大役なり、然るに當時は似て非なる者多し、故に國中の醫者は皆其國の醫師（御匕なり）に命じて沙汰せしむべし、若し其任に堪へざる醫者は、先學校へ入て學ばしむべし、教方よろしければ、三年の內に必國用に供するほどに成るべし、其時其村々へ返して、治療せしむべし、但し學校にある間は、君より養ひ給ふべし、其妻子は其村々にて痛にならぬやうに養ひ方種々あるべし、又其醫者學校にある間は、藩中の小普請醫者、又は其嫡子抔の用達者を、一年宛役にあてゝ、其村々へ遣し置、治療せしむべし、是又醫術の修行になり、且人情艱苦を知る益あり、又其才德なきものは、醫業を止させて民となさしむべし、凡醫者は武術の免許の如く、明師の免許なき內は、必治療をなさしむべからず、庸醫の民命を害すること甚し、又能沙汰して、國中の醫者皆其任に堪る時は、民皆疾殺の非命を免れて、天年を保つべし、周禮に、醫の試樣、並用樣共委敷見ゆ、執政の臣、並醫師能此意を用て、其政をなすべし、又其器量ある教導師をも兼しむべし、外科・眼療・鍼治の類も亦同じ、又仲條流の婦人醫なる者あり、世の女子に淫亂を勸め、且胎內の子と云共、既に人體具類者を殺

を以て業とす、不仁の至極なり、若し其國中に是を業とするものあらば、嚴科に處すべき者なり

盲人

何れの代より始りぬるや、世の盲人たるものは、剃髮して堂上の貴家より官位を授り、京都十老の支配を受ねば、世に交て生活すること能はず、其官金たるや、癈人の及ばぬ大金の出ること故、高利金を貸して、世の不覺者の財を貪り苦しむること甚し、又三味線・淨瑠璃を學で業とするものあり、是又人の子弟に淫亂を勸る道なれば、必禁ずべし、凡盲人の業は、鍼治・導引・管絃・音樂・郢曲・披講・催馬樂・神樂歌、都て唄ひ物の類を學ばせて、其藝の高下に隨て、其師より免許あるべし、是を官として、其高下を定て業となさしむべし、或は琵琶を彈じて平家を語り、筑紫琴を調て、十三曲を謠ふ道は可なり、又其才智次第、此道に限るべからず、其餘の道藝も學ばしむべし、晋の師曠・國朝の蘭亭・塙檢校の如きものもあり、又近年武家の盲人は宮方より御支配あるより、何れも其官位の昇進、大金を出すことなれば、其國の金を聚斂して、他國へ出す不益の事なり、其國の事は其君の號令次第、如何樣にも成るべければ、愛憐すべきものなり、尤官位の高下に隨て、禮法は亂すべからず、然共其國の號令治方は、一切名主の下知たるべし

遊民

近年民奢侈の餘り、遊藝を好が故に、繁華の地には、碁・將棊・雙六・立花・活花・蹴鞠・徘諧・茶の湯の類

を教て、業とするもの多し、是皆民の業を懈怠し、飢寒の憂を招く媒介なり、必遊藝を教て業とすることを禁ずべし、王制に、淫聲・異服・奇技・奇器を作て、衆を疑しむるは殺なりと、宜なる哉、殊に祈禱者・陰陽師・相者・山伏・神子・巫の類は、決して置くべからず、（但し由緒あるは特別なり、能賢察して置くべし）測り知られざる吉凶・禍福・災害・疾病・死生等の事を以て愚民を惑し、財寶を貪る者なり、又王制に、鬼神・時日・卜筮を假りて、以て衆を疑しむるは殺と云り、能考辨して政を爲すべし

藝者 附戲場

今世に流行する藝者は、長唄・女利安・新内・正傳・豐後・義太夫節を事とすれども、皆桑間濮上の淫聲にして聞に堪ず、人の子弟に淫亂を勸る道なり、文彌・半太夫も又同じ、昔時の土佐・外記・祭文・義太夫抔は、古の忠臣・孝子・義士・烈女等の事を述作る故に、比鄙殺伐、鄭衛の淫聲も間々ありと云共、今の淫風には大に愈りて、强て教化に害なし、免すとも可なり、筑紫琴を調て十三曲を唄ひ、琵琶を彈じて平家を語り、今世の作にては、河東節は雅音に近し、免も可なり、戲場も木偶人を繰て、土佐・外記・祭文・義太夫抔を删補して免すべし、歌舞伎は必ず停止すべし、淫風の民の風俗を敗る事甚し、仁人傷ざらんや、孔子夾谷の會に俳優を刑する意味、能く考辨して政をなすべし

傾城

三都・長崎等の大都會にては、青樓も財を通融する益ありと云へども、諸侯の國は夫とは違ひ、損あり

て益なし、其色に淫するに至ては、主の金を横領し、朋友の財を欺き取り、親の家督をつぶし、亡命の身となるもあり、又は黴瘡を傳染して、癈人となるもあり、身を亡し家を亂し、不忠不孝に陥る者、擧て數ふべからず、誠に傾城の名空しからず、利口の輩が、傾城なければ惡少年反て淫奔のこと多しと云は、太誤りなり、仁政行れ、萬民各其所を得て、男女皆禮儀廉恥を知り、嫁娶時を失せざれば、其疾は生ぜぬなり

目明附博徒

今世に云目明なる物は、博徒の内に器量勝れたる惡黨者のことなり、能盗賊其外一切の惡黨者を知て、與力同心に指て捕さするを以て、助置て國用に供す、甚敷惡政なり、凡博徒は其住所近邊の人の子弟を誘て、奇偶・樗蒲・輪駒・紋付・大數・小數・博冊・十五・九寸・仕懸・靑天・女久離・寶引・三笠・日懸・無盡・富・四文百抔云ふ種々の博奕を勸て、農事を怠らしめ、且放蕩無頼の者となし、其金錢を欺取て業となし、剩少し武藝を學び、角力業を事とし、理を枉て爭論を仕懸、其勢を以て愚民を威し服せしめ、誠に民の業を怠らしめ、財を奪ひとり、風俗を敗り、政を亂すこと甚しきものなり、殊に目明は、其尤勝れたる者なり、智士仁人政をなさば、罪人を取ること、何ぞ彼を賴んや、其よく盗賊惡人を知るは、本其同類なればなり、是故に目明博徒は見付次第執て、死刑に處すべきものなり、何ぞ是を國用に供せんや、然共戰國の時ならば、智勇ある頭を付て、進退をば用達者半ならん、治國には川ゆべき所な

きものなり、壯年の時民間を經歴して親く觀る所なり

道心者

是は無告の民、又は癈人の類、上求ニ菩提一の爲にもあらず、下化ニ衆生一のためにもあらず、唯飢渇を免れんために剃髮するもの多し、隨分愛憐して餓死せぬ樣に、其所にて養ふべし、但し其師の禁戒を能守て、不如法ならぬ樣に教戒すべし、仁政行れ人倫の制度立ば、自然寡くなるべし、是は餘の僧と違ひ、度牒の法に及ぶべからず、然其他所より來る者は、其處に置べからず、古來ある辻堂草庵に餘らば、其由緒ある者の方を置べし、新堂は建べからず、他所へも出すべからず、又六十六部並百番順禮の類も、諸國往來の切手を見ずして、獨り旅の者に宿貸すべからず、近在より來る修行者の類ひも、其處の名主より賴なく、出處知れざるものは、一切入べからず

穢多

是本邦の一種の民なり、然其至賤にして良民と相混ずることを得ず、其業も亦至賤にして、皮を剝ぎ履を作るを以て常の職とす、然其是亦民なり、其土地にある者は、皆治めずんばあるべからず、其鄕里の側に一二軒あるは治め易し、五軒以上あらば組頭を立べし、穢多村ならば段々に長を立て、其治方は良民に同じかるべし、但し團右衞門法あれば、制度少しくかはりあるべし、國主の號令法度は一統にして、名主の支配たるべし、其役は斃者、死牛馬の類、其外火付・盜賊一切の惡黨者を捕へさせ、

或は狼藉者を制せしめ、他より來る乞食の類を吟味せしむべし、假ひ商人・旅人たりとも、在所知れぬ怪敷ものは能改て、火付・盜賊・博徒の用心すべし

乞食

是亦一種の賤民なり、穢多の下に就くといへども、良民の落魄して此民となりたるより、今此民の種類大概三種あり、世々其村々に住て居る者を番太と名く、斃者・死牛馬の類を取捨させ、一切惡黨・火付・盜賊・狼藉者、他より來る乞食等を制する役として、其村々にて扶持し置者なり、是は上方は京の悲傳次、東國は江戶の車善七・品川松右衞門等が支配にて、彼等が掟も有故に治め易し、又放蕩無賴の惡少年、親族に見捨られて乞食となり、小屋に入て、悲傳次・松右衞門等が支配となる者を非人と云、山野河原抔に小屋をかけ、大勢集り、乞聚めたる生穀を、其小屋にて煮食するものなり、此內には種々の惡人あり、其用立ものは番太なき村々へ遣して、番太となし、又取上らるゝ者をば取立、惡黨をば皆其國を追拂ふべし、又右の類なるもの、新に落魄して、未だ小屋入もせず、山野・辻堂・宮寺の門前抔に寢、熟食を乞て食し、薦を着て居り、住所も定らぬを薦被りといふ、多くは火付・盜賊其外一切の惡事をなす者也、能見分て正路なるものあらば引上、惡人は必穢多番太等に命じて、其國を追拂ふべきものなり、必ず用捨すべからず、兎角乞食といへども管轄なければ、制しがたきもの也、又此類並盜賊博徒の類には、武用に立者は多くあるものなり、昔時太閤秀吉の微弱の間、兵を招れし

は多く此類より見出し給へり、有司心を用ひずんばあるべからず、然共治國の急務にはあらず、よく考ふべし

敎文

敎導師冬春農隙の時、名主の宅へ、其郷中の男子の分は殘らず集て、耕作の大事並孝悌忠信の道を說聞せしむべし、但し手島流の敎の如く、能百姓の耳へ入樣に敎ゆべし、其敎法は學校にて假名書に著述せしめて、敎導師に授くべし、敎も管轄する所なければ聞ぬものなり、敎導師の講後、名主年寄に向て、各右の旨上の御敎諭謹で行ふべし、若違背するものあらば、用捨なく言上すべしと申時、年寄畏り奉ると答て、又組頭に向ひ右の旨申渡す時、組頭又畏り奉ると答て、各四小戶に向ひ右の旨申渡す時、四小戶皆畏り奉ると答て、拜禮して歸宿し、各其家にて能々家內へ申聞すべし、其間次役人は云ふに及ばず、所にて家筋の者、長少の禮に至るまで、能正して聞せしむべし、鄉黨の禮も又自ら正しくなるべし、王制に、曠土なく游民なく、食節あり、事時あり、民咸く其居を安じ、事を樂み切に勸て、君を尊び上を親み、然して後學を興すと云り、聖人の敎に先後あるを以て觀すべし

女敎

女師は德行正しき女子を、上より命じて定むべし、然共當時女敎なければ、其才德ある婦人至て稀なり、故に先敎導師の兼役とすべし、其敎法も亦農隙の時、名主の宅へ其鄉中の女子を皆集て、婦德・婦

功・婦容・婦言等のこと、並貞順の道、舅姑に事へ、子を教育する等の事を、兒女子の耳へ入やうに說聞すべし、女戒・古烈女傳等の事を和解して、學校に命じて其敎法を作らしむべし、其間次皆親夫に准ずべし、講後の禮、名主の妻より年寄・組頭・平百姓の妻女順次の禮、並申渡し樣男子の如くすべし、婦人の道も漸々に正しく成べし、今諸國に女師ある事を聞ず、大闕典なるべし

講武

徒士・足輕の內にて、鎗劍術に達したるを撰み、武術の師に命じて、是亦農隙の時、村々を順行し、壯者の武術を好むものに敎しむべし、但し孝悌忠信の道を會得したる人にあらずんば敎ゆべからず、文道と違ひ、惡しく心得れば、反て害となること多し、止戈の意を能敎へ、公戰の用に備へ、私鬪を禁ずべし、弓鐵砲も亦同じ、其餘力士角力取の類、獵人・博徒・盜賊・乞食等に至るまで、心を付て、武用に供すべき者は、皆夫役を免じ、或は扶持方を賜り、或は刀を免し、博徒・盜賊は罪を免し、乞食は良民となし、伍法を敎、頭を付、鷹野・猪狩等の時、進退を敎れば、武士に等しく用立也、必忽にすべからず、十年斯のごとく心懸れば、大數百石に三人は用立者なり、千石には三十人、萬石には三百人、十萬石には三千人、百萬石には三萬人出來るなり、夥しきことにあらずや、又有德の民力を其村に用て功ある者、或は富有の民財を散じて窮民を救ふ者の類あらば、其頭となし、又は組頭となして其功を稱揚せば、野に遺賢なく國まさに日々に强からん、能政をなして民を治ても、武備全からざれば、隣國

侮るなり、文事あるものは必ず武備あり、武事あるものは必ず文備ありと聖人の語に見ゆ、豈心を用ざらんや、今の軍術者ここに心を用ず、愚なることにあらずや、如何樣の良法ありとも食足らず、兵足らず、民信ぜずんば、何を以て其心を施して勝事を得んや

人倫

夫君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友五の者は人の倫也、先王德を立道を敎るも、皆此五倫を正し、各其所を得せしめん爲なり、願ふに民は君の仁政によりて其地に安じ、君は民の服從によりて其位に安じ、子は親の恩養によりて生長し、親は子の孝養によりて老後を安じ、婦は夫の愛養によりて其身を立、夫は婦の貞順によりて其家を和柔し、弟は兄の愛惠によりて其身を安じ、兄は弟の敬友によりて外侮を禦ぎ、朋友互に誠信有て、各其郷黨に住するなり、然其民は無智にして是をしらしめがたし、故に人君其制度を立て、是に由らしむべし、今制度亂れて、人倫正しからざること多し、爰に其一二を擧て是を導く事爾り

一　家督は嫡子に讓るべし、必偏愛を以て是を偏改すべからず、但嫡子頑愚か、又は癈人ならば二男に讓り、嫡子は生涯隱居の如く、衣服乏しからぬ樣に奉養すべし、亦男子なく、女子に婿養子をせば、先五世の親盡たる同姓の親族を吟味して養子とすべし、若五世の親の內に男子あらば、女子を他へ嫁して、其男子を養て家を續しむべし、其血筋の內にも、養子すべき男子なきは、天より其家を亡し給ふ

なり、是非なく異姓の養子もすべし、女子も其身は親の種なれども、人の胤を懷妊して、己が胤を傳ふること能はず、故に聖人女子を以て家を續しむることを禁じ給ふ、今此制度亂れて、公侯の家督も異姓より養子して人倫を亂す、嘆敷こと也

一　身上を分つことあらば、上農夫以上は二男に三分の一を分あたふべし、中農夫以下は男子何人あるとも田畑を分つべからず、たわけ者といふ諺も、是より始ると老農の語りし、敎へずんばあるべからず、二男よりは敎導師・武術師に託して、文武を學ばせ、又は末業を仕込み、各其性に隨て、產業を立しむべし、必ず產業立ざる前に、妻は娶らしむべからず

一　隱居は其子の高三分の一を分て取べし、但自由に其田畑を賣ることを免さず、死後又長子に歸すべし、但し父母の內壹人あらば、其半減なるべし、又父の妾子有ば、終身養ふべし、其產し子產業立て母と稱するは各別、嫡子よりは夫迄下女の禮たるべし

一　父中農夫たり、子正路に精勤して上農夫とならば、賞あるべし、但し非道にして富ば、其例にあらず、又父上農夫たり、子懶惰にして中農夫とならば、罰あるべし、但し故ありて衰るは其例にあらず

一　二男以下別業を立ば、高十分一の積りを以て金を與ふべし、女子嫁する時は、其半減たるべし

一　二男以下他の業をなすは、私に其業を立ることを禁ずべし、但し親兄に寄宿する內は制外なり

一　貧民子多くして養育し兼るは、願出で救を乞ふべし

一　文武各一道に達せるものあらば訴出べし、國主命じで其業を立しむべし

一　五世の親盡ざる同姓を娶るべからず、但し母方は苦しからず

一　妾を妻とすることあるべからず、但し子ある妾、父死して後、子より尊で母と稱するは苦しからず

一　妻の親類を養子とすることあるべからず、但し同姓の親族に養ふべき子なき時は苦しからず

一　父母に告ずして、娶ることあるべからず

一　養子又は妻を娶るに、持參金と云事あるべからず、是より血筋を撰ばず又人を撰ばず、甚敷惡弊なり、必ず禁ずべし

一　傾城・妓女を妻とすることを禁ずべし

一　子なき妻を去と云共、其身貞順にして、妾に子あるか、親類に養子すべき男子あらば、用捨すべし

一　惡疾ある女も、子あり且貞順ならば、別室にて終身養ふべし

一　夫正路にして、又は惡疾生じ、女見捨て丶出たるは、再び嫁することを禁ずべし

一　女貞順なるを、男無道にして去るは、再嫁せしむべし

一　譜代の主人正路にして衰たるは、其譜代者を能く補助すべきこと

一 出替り奉公人といふ共、勤の内は、主從の禮違ふべからず

一 授業の師恩は、君父に等しかるべし、今此禮行はれず、歎はしき事也

一 醫師・畫工の類、師の姓を襲ふことあるべからず、名乘の字を免すは苦しからず

一 親戚・朋友正路にして衰へたるは、互に相救ふべし

一 老て子なきを獨と云、衣食を與ふべし

一 幼にして親なきを孤と云、衣食を與ふべし

一 老て夫なきを寡と云、衣食を與ふべし

一 老て妻なきを鰥と云、衣食を與ふべし

一 癈人據なき者は、衣食を與ふべし

一 農時病するは、互に相助けて耕作せしむべし

一 火災・水難に逢たる人は、助て家居を作らしむべし

一 喪家には助けあるべし

一 不幸にして後なく、祭主なきものは、其鄕黨より助け祭るべきこと

一 度牒の法によらず、私に出家する事を免すべからず、又二十歲以下にて出家を免すべからず、如何となれば、戒定慧の三學に達せざれば、眞の出家にあらず、是天地陰陽の性に背きて、修し難き道

なり、今幼少より其人を觀察せず、無理に出家さする故に、成長して欲心生じ、種々の惡業をなし、破戒無慙の惡僧となるは、此法なきが故なり

一　一向宗の養子は、血筋にあらずんば免すべからず、血脉なき弟子と寺を讓り、又俗家にて法談することを禁ずべし

一　神主に非ずして、神道者となることを禁ずべし

一　其家に非ずして、山伏・陰陽師・神子・巫の類となることを禁ずべし

一　嫡子は出家、並他の業に轉ずる事を免すべからず

一　主親の仇討は民と共に免すべし、忠孝を貴む故なり

一　妻敵討は免すべからず、淫奔の者は男女ともに、其國の徘徊を免すべからず

一　婚姻、男子は二十歲より二十五歲、女子は十五歲より二十歲迄の間を以て嫁娶の時とすべし

一　男女共に髮置は、宮參りの節からこ・けし坊主、親の好に任ずべし、袴着は元服の時、帶解は鐵漿水附の時に兼ぬべし

一　婚姻の節、富家といふとも奢侈なるを許すべからず

一　婚姻の節、石を打を嚴しく禁ずべし、又由緒なきもの、音信する事を禁ずべし

一　男女共に五十歲以前、寺參りを禁ずべし、但し先祖考妣の墓參は各別なり

一　二十歲以上五十歲以下の民は、遊藝を禁ずべし

一　私に他國することを禁ずべし、願ふといふ共、他國逗留を一年限とすべし

一　東國に生子をまびくことあり、不慈の甚しきなり、國主仁政にて扶持方を賜はずんば止むべからず、歎しき事也

一　貧民女子を傾城奉公に出すことを停止すべし

一　男女共に伎者となる事を禁ずべし

一　正民・雜戸相混ずることを禁ずべし

一　東百官名も、民には名乘すべからず

一　民といふとも、氏は書しむべき事也、貴賤の分様は、外に如何様も有なり

國富後は、猶訓すべき事多けれ共、今は略するのみ

死葬

終を愼み遠を追ば、民の德厚きに歸するを云り、故に先王是を重じ給へり、今民の孝道に薄くして奢侈なると、浮屠の惡弊とによりて、其制違ふこと多し、故に其一二を擧て示す事爾り

一　父母死せば、三日にして粥を食せしめ、卽日飮食するを禁ずべし

一　喪家は哭泣の聲を免し、談笑高論を禁ずべし

一　民は三日にして殯し、七日にして葬るべし、今卽日葬るは速かなり

一　喪服は民と云共、麻木綿を鈍色にして着せしむべし、服改れば、志も亦改るが故なり
一　忌服は服忌令に過るを免し、減むるを禁ずべし
一　喪家は美膳を以て人を饗應し、且酒燕を禁ずべし
一　民は喪中別室に居せずと云共、男女寢席を同うすべからず
一　貧民は業を廢して、喪を終ること能はず、是以喪に服すべき事
一　民の喪禮に、上輿を禁ずべし、一村寄合、乘物を質素に製して用ゆべし
一　六道錢を持、衣服手道具を棺中に入事を停止すべし
一　死者の裸裎に經帷子を着せしめて葬るは、薄の至り、孝子の忍びざる所なり、經帷子は着せしめずとも、木綿の時服を、寒温に適して着せしむべし
一　先僧の髮剃は、必竟死骸改の檢使なり、剃髮俗體は各其好に任すべし
一　院號は天子の御謚の字なり、決して免ずべからず、居士・大姉も猶禁ずべし
一　民の葬禮に先供を禁ずべし、親戚朋友多き者は、皆跡に隨ふべし
一　佛氏に四葬の說あり、曰、火葬、曰、野葬、曰、水葬、曰、土葬是也、火葬は燒也、水葬は流也、野葬は捨也、皆孝子のなすに忍びざる所なり、唯土葬のみ先王の禮に協へり、是を用ゆべし、然共棺槨の制古に復しがたし、予聞瓶に底を入、石灰にてつめ、底に穴を明、水氣を洩せば、死骸久しく壞れ

ずと云り、財を費さずして孝道に協へり、故に爰に贅す

一 父母死葬の節、上農夫は米六斗、中農夫は米四斗、下農夫は米二斗を限とすべし、祖父母は三分の一、曾祖父母は三分の一、兄は三分の二、弟は三分の一、叔父は三分の一、妻は三分の二、但し子なきは三分の一なるべし 嫡子は三分の二、末子・女子は三分の一、餘は是に准ずべし

一 富人死者の冥福を祈るためならば、其郷黨の窮民に、其財を施し與ふべし、千萬卷の經陀羅尼にも勝るべし、旦那寺並歸依の寺院へ大金を寄進し、或は百番巡禮・四國遍路の類は悉く禁ずべし、是皆佛者の所謂ゆる有爲の施にして、曾て戒むる所なり、彼木佛靈あらば、何ぞ是を歡喜せんや

祭祀

左傳に、國の大事は祀と戎とにありと云、論語に、重んずる所は民食葬祭と云り、豈愼ざるべけんや、然るに今の民先祖考妣の靈を祭るや、唯浮屠の說に任せて、自ら愼み祭ることを知らず、故に其一二を擧て、民の惑を辨ぜんと欲するのみ、予豈彼の大祭を論ぜんや

一 先祖考妣の祭りは、其祭主夫婦齋戒沐浴して、淸淨に時食を調味し、其分限に應じて自ら祭るべし、孔子も祭ること在すが如く、吾祭にあづからざれば、祭らざるが如しと云り、又左傳に、血食と云、其血筋の子孫自ら祭るの義なるよし、識者に問て行ふべし

一 民は廟なし、其家にて祭るべし

一　旦那寺を家に招き、寺にて費多き法事をするは禁ずべし、然れども國家の御法なれば、寺をも捨つべからず、下の祭祀の制度の如く、輕く其法を行はしむべし

一　大祥より以後は吉祭なるべし、今終身肉を供へざるは、浮屠の說より起れり

一　父母死亡の日は、一年に一日なり、是を終身の喪といふ、每月その日を忌日と云は、浮屠の說なり、月々祭るは厚きやうなれども、鬼神は敬して遠くと云義に背けり、先民の先祖考妣の靈を祭るべきは、正月・七月・春秋の彼岸を正忌日と定め、其分限相應に祭るべし、是も佛氏の說なれども、先禮樂興るまでは是を用ゆべし

一　一週忌・三回忌・七年・十三年・十七年・二十三年・二十七年・三十三年忌の如きも、亦佛說なれども、民久しく佛氏に歸依すれば、一概に廢しがたし、先暫是を用て、輕く其法を行ふべし

一　上農夫は父母の祭に、旦那寺へ米一斗五升、中農夫は米一斗、下農夫は米五升を限とすべし、餘の親族の祭り減法葬に同じ、但し葬は父の身上に應じ、祭は其身の分限に應ずべし

止㆓賄賂㆒法

論語に、其身正しければ、令せざれども民從ひ、其身正しからざれは、令すといふとも民從はずといへり、誠なる哉、君の號令民に行はれざるは、其有司賄賂を貪つて、其身正しかざるが故なり、予熟按するに、賄賂を止むる法は楠正成公千破屋の籠城の法より善きはなし、其法たるや、城中の諸緣を求

めて謀反を勸め、成就せば恩賞何百貫の地を與ふべし抔とある、矢文の來る事あらば我に告よ、我必ず其倍を與へんと兼て定め置れし、倍の祿といふ定め故に欲に迷ふて義を忘るゝ者も、皆味方の忠臣となりしとかや、今も有司の賄賂を止るは、先々の賄賂の倍を與ふべしと定めなば、皆廉直に勤むべし、又賄賂せんとせし者よりは、科料として其賄賂の倍を取るべし、斯の如くするときは、國中の賄賂忽ち止むべし、賄賂止めば、令すれば行はれ、禁ずれば止み、君の心のごとく政行はるべし、執政の臣よく熟思すべし

函訴

函訴は何れの世より起るや知らず、是虞舜諫鼓の遺言なるべし、上下の情を通ずること、是より捷徑なるはなし、君賢に臣良に、邑吏亦質直なりといふとも、政事一々民の意に協ふこと能はず、然れども上下遙に隔て、明君といへども其民情を細に知ることあたはず、是を知ること、此函訴より善なるはなし、其法城下に其函を懸置、君を始め諸役人、並村役人に至るまで、非道あらば一々是を書記して其函中へ入るべし、又國家の爲になる事あらば、其事を書記して入れ置くべし、尤何れも其姓名を書記し、譬へ君並諸役人を誇り、又は其工夫も國用に供するにたらぬほどの事にても、咎はあるまじ、亦善事あらば、必ず恩賞あるべしと、其側に札を立置くべし、其鍵は君自ら所持して、一ヶ月に二度宛君並諸役人立會にて、其鍵を執政に渡して是を開しめ、有司に命じて是を讀ましめ、君臣共に

過あらば是を改め、又其書中善事あらば速に是を行ひ、且其者を賞すべし、斯の如く言路を開き長諫を聞ば、國治り民日々に善に歸し、上下共に各其所を得て、泰平の仁風に偃すべし

滄浪夜話卷之二　大尾

迂言

廣瀬淡窓著

題迂言首

迂言六篇、不レ載ニ撰者姓名一、於ニ人家所レ蠹故紙中一得レ之、書言ニ經濟之說一、專主ニ列國一、不レ及ニ天下一、蓋成ニ於侯國微臣之手一、以ニ身不ヒ在ニ其位一、不ニ敢自顯一也、其指ニ斥近時病弊一、多中ニ事情一、至レ論ニ施設之方一、則有レ可レ行焉、有レ不レ可レ行焉、以レ迂爲レ名、可レ謂レ善ニ於自處一矣、編次錯亂、又有ニ散失一、頗加ニ修理一、命ニ侍史一謄レ之、以爲ニ帳中之秘一、覩レ有ニ昇平二百之語一、則其人距レ今未レ遠、或存ニ在世一、恨不下一ニ見之一、以盡中其蘊上也、庚子仲秋稔六日、苓陽幽人廣瀨建書ニ於梅花塢淡恩之下一

迂言乾上

廣瀨淡窓著

國本一

東照神祖關原ノ一戰ニ、四海ノ亂ヲ平ゲ玉ヒシヨリ、今ニ至ルマデ二百三十餘年、天下安然トシテ干戈ノ事ヲシラズ、君臣上下各其分ニ安ゼリ、ソレ漢土ニテハ三代ヲ稱シ、就レ中周ハ國運長久ニシテ八百年ノ久キニ至レリ、然レドモ武王ヲ去ルコト纔ニ三世、昭王ノ時ニシテ南巡不還ノ變アリ、其子穆王ニ及デ、荒服ノ者至ラズ、十餘世幽王ニ至テ國家傾覆セリ、又我邦ニテハ王朝ノ時ヲ盛ナリトスレドモ、東夷征伐等ノコトアリテ、二百年干戈ヲ用ヒザルコト、未ダ曾テ聞カズ、然レバ方今ノ太平ハ、漢土我邦ニ於テ開闢以來ノ一時ト云ベキナリ、コレ神祖道德ノ遠ニ及ベルト、歷世大君ノ能祖宗ノ法度ヲ守リ玉ヘルトニヨレリ、下タル者豈其大恩ヲ知ザル可ンヤ、且幸ニシテ此時ニ生レ合セタリ、亦豈自樂マザル可ンヤ、然ルニ今時諸侯ノ國貧窮極テ甚シク、上ハ國君ヨリシテ、下ハ士大夫庶人ニ及ブマデ戚々トシテ憂懼シ、身ノ置キ所ナキガ如シ、ソレ諸侯ヲ分チ封ズルコト、其妻子親族ヲ養ハシメンガ爲ノミニ非ズ、武備ニ供シ爭亂ヲシヅメンガ爲ナリ、今時ノ如ク干戈ヲ用ユルコト無キ時ハ、

諸侯ハ土地ヲ賜ハリタル而已ニシテ、何ノ勞役モナキコトナレバ、兵粮ハ倉廩ノ中ニ朽チ、軍用金ハ府庫ニ充滿スベキコトナリ、然ルニソノ蓄ヘナキノミナラズ、預メ數年ノ後ノ歲入ヲ引キ當ニシテ、商賈ノ金ヲ借リ一時ノ急ヲ救ヲ事トセリ、何ゾソレ顚倒ノ甚シキヤ、今時ハ諸侯ニ明君アリテ、儉約ヲ務テ國家ノ窮ヲ救ヲ心トシ玉ヒ、臣下ニモ亦種々ノ策略ヲ獻ジテ、國ヲ富スノ術ヲ行フ者アリ、一且ソノ効ナキニ非ザレドモ、只一時ノ利益ニシテ永久ノ謀ニ非ズ、是ヲ以時過ギ世カハレバソノ法忽チ破レテ、依然トシテ困窮ニ及ベリ、是唯ソノ末ヲ務メテ、ソノ本ヲ正スニ暇ナキ故ナリ、喩バ湯ノ沸タルヲ止メントシテ水ヲ加ユレドモ、薪ヲ除クコトヲ知ラザルガ如シ、扨本ヲ正スコト如何ト云ハバ風俗ヲ變ズルニシクハナキナリ、風俗ハ國ノ本ナリ、國ノ盛衰存亡ハ、皆風俗ノ美惡ニヨルナリ、當時武門ニ一種ノ弊俗アリテ、和漢ノ古ヘニ其類ナキコト多シ、是ヲ以困窮モ亦古今ニ並ナシ、然レドモ人皆云、風俗ハ天下一同ノコトナレバ、諸侯ト云トモ之ニ隨ハザルコトヲ得ズ、安ゾ獨其國ノミヲ變ズルコトヲ得ンヤト、是不學無術ノ徒ノ言ナリ、凡物之理ハ大小トナク一ナリ、試ニ庶人ノ上ヲ以テ之ニ喩ヘンニ、庶人ノ職ハ父母妻子ヲ養ヒ、衣食住ニ乏カラザルマデノコトナリ、然ルニ家數千金ノ蓄アリテ、家族兩三人ニ過ザル者アリ、如レ此ハ衣食豐滿スベキコトナルニ、却テ身代立行キガタク、ソノ屋宅ヲ典賣シテ、父子分散スルニ至ル、是レ无レ他、世上ノ風俗ニカラメラル丶故ナリ、音信贈答ヨリシテ、年中ノ行事一々閭里ノ風俗ニ從ヒ他人ノスルホドノ事ハ、是非トモセデカナハヌコト

ニ心得タル故、其費莫大ニシテ遂ニ家ヲ亡スニ至ルナリ、若シ其主人タル者見識アリテ、世上ノ風俗ニ隨ハズ、一己ノ家法ヲ建立シ衣ハ寒ヲフセグニ取リ、食ハ腹ニ滿ルニトリ屋ハ風雨ヲ覆ニトリ、其他音信贈答ノ類一切省略スルトキハ、身代兩三年ノ中ニ忽立カハルナリ、諸侯ノ國亦如レ此、但シ此處ハ當時政ヲスル程ノ人皆心ヅキタルコトナレドモ、唯内心ニ世上ノ風俗ヲヨキコトニ思ヒ、己レ獨其例ニ異ナルヲ耻辱ト心得タルユヱ、節儉ヲ勤ムル中ニモ至テ心苦シテ少シ時過レバ定タルコトクヅレテ、モトノ通リニナルナリ、若世上ノ風ハ惡シテ己ガ國風ハ善ト云フコトヲ知リ、一時ノ貧富ニ拘ハラズシテ、國風ヲイツマデモ守ルトキハ困窮ノ源長塞ルナリ、ソノ善キコトヲ善キト知コト、智者ノ上ニテハ易キコトナレドモ、凡人ノ上ニテハ唯世上一同アルコトヲ善トノミ心得ルユヱ、一國ノ風俗スベテ善キ處ニカタマルニ非ザレバ其理ヲ知ラシメ難シ、是風俗ヲ變ルヲ以テ最初ノ務トスル所以ナリ、天下初テ定タル時ハ人情久シク亂ニ苦タル末ナルユヱ、萬事儉素ニシテ奢靡ヲ好ムコトナケレドモ、太平久ニ及ンデハ、人心安佚ニ耽リテ奢ヲ生ジ、遂ニ亂ヲ催スニ至ルコト和漢古今一轍ナリ、故ニ弊俗ト云モノハ皆治世安佚ヨリ生ズルモノナリ、前ニ述タル如ク、我邦當今ノ太平古今ニ例少キコトナルユヱ、ソノ弊俗モ亦古今ニ未曾有ノコトノミナリ、此俗ヲ一變スルニ非レバ今時ノ困窮ヲ救コト難ク、又漸々衰亂ニ趣ノ勢ヲ過シ止ムルコトモ難ナリ、因テ弊俗ノ中其大ナル物ヲ擧ルコト左ノ如シ

第一ニ、國君ヨリ群臣ニ至ルマデ、「其行儀尊倨高大ニ過タリ」、今時諸侯ノ振舞ヒ、古ノ諸侯ハサテオ

キ、漢土我朝ノ天子モ及ザル尊大ナルコトナリ、文盲ナル者ハ、武家ト云モノハ如レ此ニ有ル筈ノ樣ニ思ヘドモ、古ノ武家ハ然ラズ、列國ノ開祖タル君ハ、何レモ君臣上下ノ間至テ親ク近カリシナリ、其事ハ國初ノ物語類ヲ讀タル程ノ人ハ知ルベキナリ、今時ノ風儀ハ全ク泰平久シク續キタルニヨリ、上タル人富貴ノ内ニ成長シテ下ノ情ニ通ゼズ、下タル者ハ上ヲ恐ル、コト甚ク、敬シテ遠クルノ心得ナル故、其間日々ニ隔タリテ如レ此ニナレリ、是全ク太平ノ弊俗ニシテ、衰亂ニ赴ムクノ候ナリ、今時臣下ノ目見エスルトキ、始終低頭ニシテ少モ君ノ面ヲ見ルコトヲ得ズ、君モ亦其面ヲ見玉ハズ、目見エト云ハ、名有リテ實ナキコトナリ、言ヲ掛ケ玉フニモ格式アリテ、位卑キ者ニハ言カ、ラズ、タトヒ言アリテモ、此方ヨリ答辭ヲ申スコトカナハズ、又教ヲ施ス者ハ、天子ト雖ドモ北面セサスルコト古ノ禮ナルニ、今時ハ少シ席ヲ改ルノミニテ、古禮ノ式ニヨル人ハ十ニ二三モナシ、道ノ行レザル所以ナリ、又大臣ヲバ敬禮スルコト古ヨリノ道ナレドモ、今ハ老臣國政ニ任ズル者トテモ、己ガ幼子弱孫、或ハ賤妾ノ下ニ置キ、其類ヨリモ臣僕ノ如クニ過セシムル類モアリ、漢土ノ禮ハ暫クオキ、近ク我邦ニテ論ゼンニ、親王ハ大臣ノ下ニ次ヅルコト皇朝ノ制ナリ、其通ニコソナクトモ、相應ノ禮敬ハ有ベキコトナリ、人君已ニ如レ此ナレバ、臣下皆其風ヲ學ビテ、家老物頭ハ何ヲ以テカ我家ヲ高ブラント云ヒ、平士歩卒ハ何ヲ以カ我身ヲ高ブラント云ヒ、互ニ腕臂ヲ張リテ人ヲ直下ニ見テ、無禮ヲスルヲ動功ノ如ニ心得ルナリ、易ノ卦ニ、坤下乾上ヲ否ト云、地ハ下ニ在テ其氣上ニノボラズ、天ハ上ニアリ

テ其氣下ニクダラズ、上下懸隔シテ通ゼズ、故ニ否塞ノ義トシテ、君臣和合セズシテ、國家治ラザルノ象トセリ、今ノ武門ノ風全ク此處ニ落ルナリ、今時儉約ヲ務メテ奢靡ヲ戒ルコト、諸國皆其說アリト雖ドモ、奢靡ノ源ハ尊倨ヨリ起レリ、尊倨ノ態ヲ不改シテ、イカ程節儉ヲ行ノトモ、前ニ云ヘル水ヲ加ヘテ薪ヲ添ルガ如シ、畢竟詮ナキコトナリ

第二ニ、誇張矜伐ヲ務ルコトナリ、人君苟且ノ外出ニモ、數百ノ人ヲ引卒シテ、戰場ニ趣クノ裝ヲナシ、其衣服器仗マデモ美ヲ盡シ、嚴シク呵殿ヲ行フコト、表向ハ非常ヲ警護スルト云フ申立ナレドモ、內實ハ然ラズ、タヾ己ガ家隷ノ多キト、器仗ノ美ナルヲ世人ニ誇リ示ス爲ナリ、今時ノ太平ナレバ、途中ニテ不慮ノ變起リ、四方ヨリ引包ンデ討取ト申スコトハ曾テナキト云コトハ、誰モ知ラヌ者ハナシ、人君イカニ其身ヲ重ジ玉フトモ、夫迄ノ心遣ハシ玉ハズ、唯諸侯ハカクアルベキ筈ト云迄ノコトニテ、其本ハ全ク是誇張ナリ、國君如此ナレバ、家中ノ諸士モ亦其眞似ヲシテ、有リモセヌ家隷ヲ雇ヒ、无用ノ人數ヲ召連レ、仰山ナル容體ヲナシテ互ニ相誇ル、鄙諺ニイハユル食ズシテ楊枝ヲ使フト云フモノナリ、今時何事モ外聞々々ト稱シテ世間ヲ張リ廻シ、持ヌ物ヲ持タルフリヲ爲ス、江戶ノ事ハ勿論ナリ、參勤道中ニテモ、宿屋驛所ニテ金銀ヲ遣ヒテ人ノ耳目ヲ張リ、口ヲキカスルヲ眉目トス、其費莫大ニシテ、國家ノ困窮ハ皆コレヨリ起レリ、今時如何ニ儉約ヲ務ルトモ、此誇張ノ態ヲヤムルニ非ズシテハ、國ノ富ト云フハ決シテナキコトナリ

第三ニ、「諸事秘密閉固スルコトナリ」、目見ノ時、人君ノ面ヲ見コトヲ許サズ、又言ヲモカケ玉ハヌコト、一概ニ尊倨ノミニ非ズ、秘閉ヨリ起レリ、若面ヲ見セタラバ、退テ男振ノ善悪ナド評判センコトイカヾト思ヒ、言ヲカハシタラバ、其中ニ粗末ノコトアリテ、穴ヲ見出サンカト云フ心遣ヒナリ、外出ニモ必乗輿ニテ面ヲ見セズ、聊ノ事ニモ取次ヲ用ルコト皆シカリ、又人君ノ行事ハ一々記録シテ後ニ傳ベキコトナルニ、記録ト云コトナク、祖先以來ノコト一切分ラヌ様ニナリ、子孫ノ心得ニナラヌ、是皆十ニ一モ悪キコトアリテ、人ノ口ニ掛ランカト云心遣ナリ、俗諺ニ、悪事千里ト云ヘリ、物ヲ一概ニ諱ミカクセバ、善事ノミ隠レテ、悪事ハ却テ見ル丶ナリ、他國ノ人ハ姑ラク、國中ノ臣民ハ皆己ガ子モ同様ナルニ、如レ是ニ秘密閉固シテ、其身敵陣ノ中ニアル如ニ仕玉フハ、如何程カ心苦キ振舞ナラズヤ、且人ハ萬物ノ靈ナレバ、草木ト同朽ル事ヲ耻テ、何ナリトモ後ニ名ヲ傳ル様ニ心掛ルコト、吾輩卑賤ノ徒迄モ皆其心得ナリ、況ヤ高貴ノ身ニ於ヲヤ、タトヒ悪キコトアリテ人ニ嘲ラル丶トモ、一向ニ名傳ラズ、草木ト同ク朽ルニ比スレバ、豈大ニ勝ラザランヤ、凡如レ此ノコトハ必シモ人君ノ意ヨリ出ルニ非ズ、臣下ノ計ラヒニテ是非トモ其通リニスルナリ、其故ハ君ト下民トノ間近ク互ニ相知ル時ハ、姦臣アリテモ其中ニ於テ邪計ヲ行フコト成リ難シ、故ニ君ヲ勸メテ務テ自閉藏セシメ、下民トノ間ヲ隔ル様ニスルナリ、秦ノ趙高ガ二世皇帝ニ勸テ、宮中ニ深ク居ラシメ、臣下ニ面ヲ見セズ、聲ヲ聞セヌ様ニセシメテ、終ニ弑逆ヲ行ヒシコト、古今同轍ナリ、但シ今時ハ臣下タル者、一々姦計ヲ存

ルニモ非ザレドモ、文盲ナル僻ニ、大名ハ是非カクアル可シト心得タル者モアリ、畢竟人君ニ不利ナルコトナリ、又家老以下モ其風ヲ見習ヒ、同列ニモ容易ニ對面セズ、諸事掩ヒ藏スヲ主トス、國中ノ事サヘ如此ナレバ、鄰國ニ對シテハ尙更ナリ、今時何方モ武士ヲ他國ニ出スコトヲ忌嫌フ、是ハ國ノ虛實ヲ他方ニ明サンカト云フ心遣ナリ、今時天下混一シテ、同ク一君ニ奉ズルノ時ナレバ、戰國割據ノ時ニ比ス可ラズ、國ノ事他方ニ漏レタルトテ、何程ノコトカアルベキ、夫士大夫ハ四方ノ事ニ任ズル身ナレバ、閒暇ナラバ日本國中ヲモ遊歷サセ、世上ノ樣子ヲ見聞サセタルコソ、事アル時ノ用ニ立ツベキコトナリ、假初ニモ門外ニ出サズ、處女ヲ育ツル如ニスルコト理ニ當ラズ、凡秘閉ハ誇張ト相反シテ其病根ハ一ナリ、誇張ハナキ物ヲアル樣ニ見セ、秘閉ハアルコトヲナキ樣ニ執成ス、其僞ヲ飾ルニ至テハ一ナリ、今時イカナル良策ヲ施トモ、秘閉ノ風儀ヲ改ルニ非ザレバ、君臣上下ノ間隔リテ、其內ニ姦計ヲナス者アリ、良策モ却テ惡策トナルナリ

第四ニ、「門地ノ高下ヲ論ズルコトナリ」、門地ヲ論ズルハ、先祖ノ美ヲ擧テ、子孫タル者ニ先祖ヲ辱メザル樣ニ出精セシムル道理ナレドモ、今ハ益ハ少シテ害ノミ多キナリ、ソレ門地ノ高ハ先祖ノ功多ニヨリ、卑キハ先祖ノ功少キニヨレリ、其先祖ト云、何レモ百年二百年以前ノ人ナリ、互ニ門地ヲクラベ合バ、死タル人ニ相撲ヲ取ラセ、己ハ其傍ニ立テ行司ヲナシテ居ル心ナリ、一生界如此ノコトヲ爲タリトテ現在ノコトニハ何ノ用ニモ立ズ、扨門地高レバ、不才不德ニテモ耻ルニ及バズト立テ、一

切ノ藝業ヲ修セズ、門地卑レバ、才德藝能アリテモ貴ブニ足ズト立テ、一切ノ能者ヲ用ヒズ、風俗如レ此ナレバ、大ニ國家ノ害トナルナリ、今時諸國此風盛ニシテ、其身數千石ノ大祿ヲ食ミナガラ、不才无能ニシテ君ノ役儀ヲ務メズ、且之ヲ耻トモ思ハズ、唯系圖ノ咄ノミヲシテ月日ヲ送ル者多シ、シカノミナラズ下ニ器量ノ者アリテ、主君ヨリ格別ニ取立玉フコトアレバ、門地ヲ申立テ合從シテ之ヲ拒ミ、其君ヲモオビヤカスニ至ル、主君モ家中一統ノヿナレバ、之ヲ如何トモスルヿナク、枉テ之ヲ忍ビ玉フコト多シ、凡門地ノ沙汰盛ナレバ、上ノ威光薄クナルナリ、其故ハ位階上ヨリ賜リタル物ナリ、門地ハ其家ニ附タル物ナリ、門地卑レバ位階高クトモ、貴ブニタラズト云コトニナリテハ、上ヨリ下ヲ取立ル方モナクナリ、人モ思マヽニ使レヌナリ、王室ノ中比執政家ノ權盛ニナリ、風俗如レ此ニアリシヨリ、王室遂ニ衰タリ、此弊俗改ルニ非レバ能者進マズ、如何ナル良策アリテモ施シ難シ

第五ニ「先格ニ因循スル事ナリ」、今世ハ何事モ先格ト云コトヲ推立テ事ヲ取料ラフ、先君ノ法ヲ固ク守ル樣ニテ、手厚キコトニ聞ユレドモ、其實ハ苟且ニシテ姑息ヲ務ルヨリ生ズルナリ、先君ノ法ト云モノハ、開國ノ君、又ハ其後ノ君ニテモ、遠ク國家ノ憂ヒ、子孫ノ末ヲ慮ラセ玉ヒ、千思萬慮ヲ加ヘテ法度ヲ建立シ、永々臣子タル者ノ守ルベキ筋ヲ定メ玉フ、是ヲ先君ノ法トイフ、今時ノ諸侯ハ創業ノ君ハ或ハ卒伍、或ハ庶民ノ內ヨリモ出タル人アリ、千辛萬苦シテ戰功ヲ建テヽ國土ヲ領シ玉ヒ、天下太平ノ後ハ、程ナク世ヲ辭セラレテ、後ノ法度ヲ立ルニ暇アラズ、二世三世ノ君ハ、其比戰國ノ砌ニ

テ、我邦ニ文字未ダ行レザル時ナレバ、成ヲ守ルノ難キコトヲ深ク知リ玉ハズ、唯舊例ニ因循シテ事ヲ處置スル而已ナリ、古ヘ律令格式ト云フ名目アリ、格ト云コトモアル事ナレドモ、今ノ格ト云フモノハ、一口ニイヘバ皆例ナリ、タダ先ニアル例ヲ引テ、其通ニスルコトナリ、其例ト云モノ、先君深ク慮テ定メ玉ヘル事ニアラズ、喩バ酈食其ガ漢ノ高祖ニ始テ見シ時、高祖牀ニ踞テ、兩女子ニ足ヲ洗セナガラ逢レシト云コトアリ、是ヲ武家ノ格ニスレバ、其後酈氏ノ人ガ目見スル時ハ、君ハイツモ牀ニ踞ケ、前ニ盤ニ水ヲ入レ、女子兩人左右ニ畏テ居ルト云樣ナルコトドモナリ、是後ノ人義理ノ當然ヲ以テ事ヲ處スルコト能ザル故ニ、先例ヲ考ヘテ其通ニサヘスレバ、申譯ハ立ツト云心ナリ、本其事ニ身ヲ入レズ、心ヲ勞セズシテスルコトナリ、其事ガ二度三度重ナレバ、其例愈キマリテ、先君ヨリ不易ノ法ト定メ玉ヘル樣ニ人皆思フナリ、今時ハ其格ト云モノ、金鐵ヲ以テ鑄固メタル樣ニナリ、タトヒ國家疲弊シテ滅亡ニ及トモ、息ノアル限リハ、格ハ崩サレヌト心得タリ、先年此近國ノ諸侯式日禮ヲ受ケ玉フ時、一人袂ヨリ鼻紙ヲ落シテ座ヲ起チタリ、其次ニ禮ヲスル者、一人ヅヽ來テ皆紙ノ上ニ額突ケリ、見苦キヿ限ナカリシニ、一人紙ノ上ニ手ヲツキ、紙ヲ手ノ裡ニ隱シテ退キタリ、禮畢テ後紙ヲ落セシ者ハ、差控ヘ申付ラレ、拾シ者ハ褒賞アリシ也、今ノ先格ニ拘ル者、皆落タル紙ヲ拾フヿニ心付ヌ類也、若英主アラバ、先ヅ此弊ヲ改メ玉フベキ也、不レ然バイカナル美政モ行レ難シ

第六ニ、「文盲不學ナルコトナリ」、是ハ今更ラ改メテ申ニ及バズ、且儒生ノ口ヨリ左樣ノコトヲ申セバ、

己ガ得手ノ筋ニ引落ス様ニテ、聽人ノ信仰モ薄キコトナレドモ、何分ニモ申サデ協ハヌナリ、前ニ述タル五ノ弊習モ此所ヨリ起リ、又其弊ヲ改ムルモ此所ヨリスルニ非レバ功ヲナシガタシ、今時國々君ト世子トニハ侍讀ノ職アリ、國ニハ學校ノ設ケアリ、文學ヲタヽトブコト無キニハアラネドモ、其方法宜キヲ得ザル故ニ、無益ノコトトナルナリ、其法ヲ改ムルコトハ、其ノ學制ノ條ニ此ヲ審カニスル故、コヽニ贅セズ、ソレ拔群ノ英雄ハ、學問ヲ待ズシテ見識ヲ具ルハ勿論ナリ、通例ノ人ニモ文盲ナレドモ、才氣アリテ用ニ立ツ者アリ、學問アレドモ迂緩ニシテ用ニ立ヌ者アリ、是无學ノ人ノ口實トスル所ナリ、ソレハ其人ノ性質ノワザニシテ學問ニハヨラズ、試ニ才氣同シテ一ハ无學、一ハ有學ノ人ヲクラベ見ベシ、學問ノ効ハ明白ニワカルナリ、總テ文盲ナル者ハ古今ノ變ニ達セズ、其ノ聞見スル所、己ガ生來三五十年ノ間ノ事ナリ、故ニ今時ノ風俗ヲ見テハ、日本開闢來ノ事ト思ヒ、又異國ノ事トテハ、少シニテモ其レヲ取リ用ユルヲ耻辱ノ樣ニ思フ、又治亂興衰ノ理ニウトク、世界ハイツ迄モ今ノ通リノ者ト心得ルコト、少々ノ才智アル者ト雖ドモ免レザル所ナリ、如レ此ノ人ヲ概シテ俗人ト名クルナリ、只今ノ通リニテ日々ニ流レ渡リ、後ノ事ヲ不レ顧バ、只眼前ノ日用ニ立ツ者ヲ使テ濟コトナリ、若シ深ク國家ノ患ヲオモンパカリ、衰ヘヲ變ジテ盛リトシ、危キヲ變ジテ安キトナサントナラバ、古今ヲ知リ物理ニ達スルニ非レバ不可ナリ、二百年來諸國ニ明君ト稱スル君多シ、其中ニ一箇ノ學ヲ好ザル人アリヤ、是世人ノ遍ク所レ知ナリ、故ニ君相ハ勿論、一家中ノ者ニ學ヲ好マシムル樣ニ風教ヲ施スベ

キナリ、以上ノ六弊ハ、諸國一同ノ風俗ヲ指シテ言ナリ、此外ニモ言ベキコトハ有ベケレドモ、或ハ其君ニ限リ、或ハ其國ニカギリタルコト多シ、只此六弊ハ諸國一轍ニシテ、其中ニ成長シタル人ハ、智愚トナク邪正トナク、皆其弊ヲ免カレズ、故ニ之ヲ掲タルモノナリ、世ノ經濟ヲ論ズル者、只制度ノ末ヲ論ジテ。此所ニ心ヲ用ヒザルコト其本ニ暗キナリ、「孟子曰、人不レ足二與適一也、政不レ足二與間一也、惟大人爲三能格二君心之非一」ト、此語ノ大意ハ、人君ニ物ヲ云トキ、其用玉フ人ノ善惡ヲ云ニ及バズ、政事ノ得失ヲ論ズルニモ及バズ、唯君ノ心ノ底ニ思召違ヘラレタル處アリ、其處ヲ得ト論ジ喩セバ、一切ノコト皆其內ニコモルトナリ、コレ余ガ最初ニ六弊ヲ論ズルユヱンナリ、當時如何ナル良策ヲ施シタリトモ、君タル人底意尊倨ヲ好ミ、誇張ヲ勉メ秘閉ノ態ヲ改メズ、門地ノ習ヒヲ變ゼズ故、格ニ因循シテ不學文盲ヲヨキ事トシ玉ハンニハ、家老以下モ又其心得ナルベシ、其通リニテ只今世ニ流行スル身代直シナド言フモノヲ召抱ヘテ、困窮ヲ免レントセバ、彼イカニ內ニ在リテハ范蠡計然ガ妙術ヲ廻ラシ、外ニ向テハ蘇秦張儀ガ詭辯ヲ振フトモ、少々ノ金銀ヲ得テ一時ノ急ヲ救フコトハアルベシ、永久國家繁昌ニシテ、君臣安堵スルコトハアルマジキナリ、但シ右ノ弊習ヲ改メテ風俗ヲ移シ易ルコト、凡庸ノ人ハ決シテ能ザルコトナレドモ、明君英主ニ於テハ易々タルコトナリ、本ヨリ艱難困苦ヲスル譯ニハ非ズ、唯一種ノ流俗ヲ拔ケ出タル見識サヘ有レバ、掌ヲ反スヨリモ易キコトドモナリ

迂言 乾上國本 終

迂言乾中

君道二

君ハ國ノ本ナリ、君正ケレバ正カラザル者ナキハ、古今ノ常理ニテ、五尺ノ童子モ知ルコトナレバ、此ニ詳ニセズ、因テ前ニ論ゼシ六弊ノコト、先ヅ君ヨリ之ヲ改メテ、臣下ニ及シ玉フベキナリ、就レ中尊倨秘閉ノ兩條、最初ニ之ヲ改ムルニ非レバ、一切ノ美政取行ガタシ、當代太平ニ赴キテヨリ以來、諸侯英主ト稱スル君往々アリ、其行事、記錄ニモ人口ニモ傳ヘタリ、其内ニ此兩ツノ態ヲナス人嘗テナシ、何レモ賢ヲ禮シ老ヲ敬シ、下民ト相親ムコト父子ノ如クナリ、其行狀文盲ナル者ニ聞カシメテハ、何分ニモ實事トハ思ハレズ、只虛言ヲカザリタル樣ニ聞ユルナリ、是古今ノ變ニ達セズ、英雄ノ心ヲ知ラザルガ故ナリ、今二ツノ弊ヲ改ムルニハ、先ヅ君ヨリ務テ下ヲ親ミ近ケ玉フベキナリ、淸ノ乾隆皇帝ノ言ニ、朕ハ萬民ノ父母ナリ、子タル者父母ノ面ヲ識ラズンバアルベカラズトテ、巡狩ノ時道ノ兩邊ニ士民ヲ殘ラズ坐ラセ、其身馬ニ騎テ其中ヲ通リ、下民ニ命ジテ得ト其面體ヲ仰ギ見セシメラレシトゾ、蠻夷ノ人ナガラ、流石ニ中國ニ君トシテ、其民ヲ歸服セシメシ程アリテ、其度量感心スベキコトナリ、和漢ノ風俗同ジカラザレバ、我國ノ天子ハ、彼國ノ天子ノ樣ニハ有マジケレドモ、諸侯

抔ハ先ヅ其位ニテ宜シカルベキナリ、然ラバ目見エノ節ノ儀式、外出道中ノ式、大抵右ノ處ヨリ慮テ舊例ヲ變ジテ新制ヲ始メ、中庸ノ法ヲ立テ、、之ヲ孫子ニ貽シ玉ハンコトアラマホシキナリ、人君國中通行ノコト、今時ノ太平ナレバ、儀衛ヲ省略シ玉ヒテ然ルベキナリ、大國ニテ言ハヾ近行ハ僕從十四五人、一宿以上ノ所ニハ三十人程ニテ苦カルマジ、小國ハ夫ヨリモ減ジテ可ナリ、途中或ハ乘輿、或ハ馬上、時アリテハ歩行モ宜シカルベキナリ、君トテモ格別仰山ナルコトハ、好ミ玉フワケニテハナシ、隨分手輕クシテ屢往來シ、下々ノ樣子ヲモ熟覽シタク思召サル、コト、是人情ナリ、只先格ト云物ニカラメラレ、今迄ノ通ナリ、若英主アリテ其處ヲ看破シ玉ハヾ、僕從ヲ減省スルコトモ、下民ヲ親ミ近ルコトモ、難キコトニハ非ザルナリ

國君ハ國中ヲ殘ル所ナク巡檢シテ、山川ノ要害、土田ノ肥瘠、人民ノ風俗等、精ク諳ジ玉フベキ也、且巡檢中其所々ノ故老ヲ召レテ、親ラ其内ノ故事、或ハ民ノ難苦ヲ尋訪ヒ、又孝悌力田等ノ者アルハ、目見エ仰付ラレ、褒詞賜物等アリ、是下民ニ親ミヲ結ブノ道ニシテ、且鬱散ニナリ、保養ノ爲メ宜也

古語ニ、君ハ父母ノ如ク民ハ子ノ如シ、未ダ子富テ父母貧キ者ハアラズト云ヘリ、然ルニ今時ノ諸侯府庫空虚シテ燃眉ノ急アレドモ、民ハ格別ニ其事ヲ苦ニセズ、有ル物ヲ隱シテ、用金ノ調達ヲ成丈セヌ樣ニスルコト、下ニ罪ナシトモ申難レドモ、畢竟上タル人、父母ノ恩愛ナキ故ニ、下モ亦子タルノ道ヲ盡サヌナリ、凡下タル者ハ、其上ヲ愛敬スルハ天理ノ常ニシテ、愚民ト雖モ豈其情ナカランヤ、

今モ國君或ハ高貴ノ人ノ手ニ觸レラレタル器物、又ハ其筆跡類ヲ得レバ、之ヲ神體ノ如クニ尊崇シ、之ヲ以テ狐付キヲ落シ、瘧ヲ落ナド申立テ、寶物トスルコト一統ノコトナリ、若其人ヨリ言ヲ掛ラレ、或ハ格別ノ懇志ニ與ルコトアレバ、有難ク思フコトハ心肝ニ徹シ、身命ヲモ惜マズ、況ヤ財用ヲヤ、近ク譬ヲ取テイハンニ、今時佛門ニ一向宗トイフモノ、至テ繁昌ナルモノナリ、其檀越タル者、金銀ヲ惜シマズシテ寺院ニ寄附セリ、故其本山ノ主ハ一尺ノ土地ヲモ有セザレドモ、其富ハ大國ノ君ニ過タリ、政ヲスル人ハ、タヾ彼レ地獄極樂ノ説ヲ以テ愚民ヲ刼スユヱ、如レ此歸依スルトノミオモヘリ、是其一ヲ知テ其二ヲ知ラザルナリ、彼ノ教トテモ、金銀ヲ本山ニ賂ハザレバ、淨土往生ハ叶ハズトハイハズ、只此方ヨリアリガタク思ニヨリ、是ノ如ニスルナリ、又其難レ有思コト、盡ク淨土ノ説ヲ信ジタルニモアラズ、本山ノ主タルモノ位階頗貴ク、權勢頗盛ナリ、然ドモヨク匹夫匹婦ヲ親ミ、或ハ相見ヲ許シ、或ハ手カラ剃度ノ式ヲ行ヒ、其外種々ノ所作ト、言説トヲ以テ親ヲ結ブ、其所ヲ卑賤ノ身ニテハ、至テ冥加ナルコトニ思フヨリシテ、財ヲモ惜マズ身ヲモ惜マズ、聖人ノ語ニ悅以先レ民、民忘ニ其死一ト云フコト、當時佛者ノミ其意ヲ得テ、國家ヲ有スル人ハ、却テ其智ニ及バザルナリ、今ニモ人君小ク尊倨秘閉ノ故態ヲ變ジテ、民ヲ親ムノ心アラバ、モトヨリ己ガ上ニ戴ク人ニシテ、現在ニ死生榮辱ノ命ヲ制スルコトナレバ、淨土ノ説ノ荒唐タルガ如キニアラズ、何ゾ愛敬セザランヤ、但シ民ノ金銀ヲ取ベキ爲ニ、親ミヲ加ヘ玉ヘト言ニハ非ズ、民ヲシテ上ヲ親マシムルコト、國ヲ保ツノ要道ナレ

ドモ、今時ノ人其處ニ疎キコトヲ言ントシテ、此喩ニ及ブナリ
今時諸國困窮ニ及ブコト、皆參覲ニ付テノ費用多ニヨレリ、近來儉約ヲ勤ムルノ說盛ニ興リ、道中ノ供廻リヲ省略シ、ナホ又江戸勝手ノ家隷ヲモ減ズルコトニナリテ、イカニモ其効ナキニ非レドモ、兎角如レ是ノコトヲスレバ、外聞惡キ故、儉約モ年數ヲ限リテコレヲ勤メ、數滿レバモトニ反ス、其後ハ又漸々ト世上ニツレテ奢靡ニ流レ、困窮ハ以前ヨリモ倍スル樣ニナルナリ、何レ明君英主アリテ、奮然トシテ非常ノ擧ヲナシ、世上ノスル所ニ拘ラズシテ、永久不易ノ良法ヲ立テ玉ハヾ、困窮ノ源長ク塞ラントレ思フナリ、夫レ唐土封建ノ世ニモ、述職ノコトハ有レドモ、此レハ參覲ノミニテ、都下ニ滯留スルコトハナク、又人質ヲ差シ出スコトナシ、今ハ諸侯ノ妻子ヲ人質トシ、其身モ一年替リニ交代アリ、半バ都下ニアリ、半バ其國ト道中ニ在ルナリ、是其費用莫大ナル所以ナリ、仍テ私ニ思フニ妻子ヲ人質ニスルコト、上ニ對シテ二心ナキ所ヲ明スタメナレバ、諸侯自カラ其身ヲ以テ質トシ玉ハヾ、此ニ過タル丹誠ハ有マジキナリ、然ラバ都下ニ近キ國ハ姑ク置ク、遠國二三百里以上ノ所ハ、一向家督ノ間ハ定府ニテ、退老ノ後ニ歸國シ玉ヒタルコト宜シカルベシト思フナリ、其大意ヲ云ハヾ國君二十ニシテ世ヲ繼、家督二十年ナラバ年四十ナリ、然バ世子已ニ二十ニ及ビ玉フベシ、乃世ヲ讓リテ國ニ歸、國政ヲ取行ヒ玉フベシ、如レ此コト又二十年ナレバ、當君ハ四十、老侯ハ六十ニ成セ玉フ、コヽニ於テ當君又世子ニ讓リ歸國シテ、老侯ニ替リテ政ヲナシ、老侯ハ大老侯トナリテ、萬事ヲステ閑暇

安樂ヲ以テ日ヲ送リ玉フベシ、如レ此ニ定ムレバ、國君一生ノ中タヾ一度ノ往返ニテ事スミ、道中ノ費大ニ減ズベキナリ、扨一國ノ政務大トナク小トナク、一切老侯ノ手ヨリ出デ、當君ニ伺ハズ、當君ハタヾ都下ニアリテ、御公儀ニ御奉公ノ筋ノミヲ專一ニシ玉フ、左スレバ隔年ニ出府シ玉フヨリハ、上ニ對シテノ勤ハ一倍行屆キ、コレニ過タル忠誠ハ有マジキナリ、若其意味ヲ以テ格別ニ申立テアランニハ、上ニモ御許容有ベキナリ

夫婦室ニ居ハ、人ノ大倫ナリ、今ノ諸侯其國ニ歸老シ玉ヘバ、夫人ハ都下ニ留、終身相見ノ期ナシ、公法トハ申シナガラ、人倫ノ變ニシテ、傷ジムベキ事ナリ、若シ前說ノ如ナラバ、夫人モ主君歸老ノ時ハ、一同ニ歸國シ玉ヒ、都下ニハ當君夫婦居玉テ事スムナリ、公子ハ出生ニ隨ヒ、追々ト本國ニ送歸シ、老侯ノ手ニ生長アラシメ、學校ニモ出席シ玉フ樣ニスベシ、女公子ハ都下ニ於テ嫁シ玉フ事ナレバ、邸內ニ留メ玉トモ可ナリ、凡婚嫁ノ事、ナル丈小國ト取リ結ブベキナリ、其故ハ當時諸侯ノ婚姻互ニ家格ヲ申シ立、奢靡誇張ヲ務ニヨリ、其費用莫大ナリ、小國ナレバ彼ノ方ニ誇張ノ心ナキニヨリテ、此ノ方ニモ其心不レ生、又國ノ格ニ因テハ、女公子ヲ家老ノ家ニ賜ハル事モアリ、尤シカルベキコトナリ、凡大國ト緣ヲクムコト、亂世ノ一助ニ成ヤウニ思モノ有ドモ、全ク不レ然、亂世ハ父子兄弟ト雖ドモ恃ミ難シ、婚姻ヲ恃テ滅亡セシコト、古書ニ歷々タリ、又治世ニテハ音信贈答ノ費ノミニシテナンゾ益モナシ、且ツ今時ノ弊習、諸侯ノ夫人タル者、ヤヽモスレバ本國ヨリ多ノ奴婢ヲ携行キ、夫

ノ家ニテ本國ノ格ヲ申シ立、彼ノ方ノ命ニ順ハズ、召使ノ者ドモ互ニリキミヤイテ、閨門ノ內ノ往復隣國トノ取ヤリノ如シ、如レ此弊俗ハ信ニニクム可コトナリ、英主アラバキツト其弊ヲアラタメ家風ヲ建立シ玉ベキコトナリ、閨門ノ內正ク婚姻家ノ交リ禮ニカナヒタラバ、無用ノ費ハヨホド省ク可キナリ今時諸侯誇張ノ態ヲ專ラニセラルヽコト、皆都下ヨリ起レリ、是ハ三百ノ諸侯都下ニ住シ玉ヘル故、太平久ニ從ヒ、互ニ奢靡ヲ競ヒ、少シニテモ人ニ負ケジトスルコト、必然ノ勢ナリ、人情ノ常ニシテ、怪ミ尤ムベキコトニ非、若其弊風ニ染ムマジキトナラバ、一邸ノ法度ヲ堅ク立、少シモ世上ニツレ立タザル樣ニシ玉フベキナリ、ナホ又君タル人ニ學問ヲ勸メテ、一種ノ俗見ヲ脫シ玉フ樣ニスベキナリ、ソレ諸侯ハ大小ニヨラズ、皆人君ナリ、古唐土封建ノ時ハ、天子諸侯ヲ合シテ人君ト稱シ、士大夫ヲ人臣ト稱ス、天子ト諸侯ト位ニ高下アリト雖ドモ、其人君タルハ一ナリ、後世變ジテ郡縣トナル、是ニオイテ人君ト稱ルハ天子ノミナリ、三公九卿ヨリ以下皆人臣ニシテ、其家アルノミニテ、民人社稷ヲ有セズ、古封建ノ時ニ比スレバ、タヾ士大夫ノ分限ニシテ、諸侯トハ雲泥ノ違ヒナリ、我邦ハ古ハ郡縣ナリ、故ニ人君ト云モノハ、天子一人ニシテ、大臣ヨリ以下皆人臣ナリ、當時封建ノ制行レテハ、御公儀ヲ初メ奉リ、諸侯萬石以上ノ人ハ皆人君ナリ、夫レ人ノ君タルコトハ、信ニ天ノ重祿ナリ、區區ノ一身ヲ以テ餘多ノ土地ヲ掌握シ、山河ニ據リ有チ、億萬ノ人民ノ生殺與奪ヲ掌リ、一草一木一魚一蟲ノ微ナルマデ、皆其威令ヲ受ザルハナシ、如レ此ノ天祿ヲ受ルコト、豈容易ナランヤ、人君ニ生タル

人ハ、信ニ自ラ重ズベキコトナリ、然ルニ今ノ諸侯、其身人君ノ重キニ居ナガラ、却テ爵號ノ虛名ニヒカサレ、轉任ト云フニ望ミアリ、種々ノ手入ヲナシ、多分ノ財ヲ費シ玉フコトヲ口惜ク思フナリ、諸侯タル人ハ、唯々上ヨリ國土ヲ賜リシ所ノ御恩ヲ深感シテ、爵號ノコトハ望ヲヤメ、何ニテモ上ヨリ授ケ玉フ者ヲ頂戴シ玉フベキナリ、其外衣冠儀衛ノ飾リナドモ、少シノ差別ヲ論ジテ、互ニ甲乙ヲ爭フ、都テケ樣ノコトハ、上ヨリ大名旗本御家人ナドヲ鼓舞シ玉フ一術ナリ、通例ノ人ハ左樣ノ處ヨリ出精シテ奉公ヲモ勵ムベシ、學問シテ道理ニ達シタル人ハ、何ゾ如レ是ノ筋ニヨリテ、上ニ事ル道ヲ勤メモ怠リモスルコトハ有マジキナリ、右ノ處ニ了見ツク時ハ、誇張ノ情自然ト薄ラギ、都下一統ノ弊習ヲ免ルベキナリ

唐土古ハ封建、今ハ郡縣ナリ、我邦古ハ郡縣、今ハ封建ナリ、封建ト郡縣トハ人情風俗一切カハリタル事ナリ、郡縣ノ時ノ士大夫ト云者ハ、浮雲ノ如ナル物ニテ、朝アリテ夕ナク、三公宰相ニ至ルトテモ一尺ノ土地一介ノ人民ヲ有セズ、富貴ハ一代カギリニシテ子孫ニ傳ヘズ、故ニ意ヲ得ル時ハ奢靡ヲ恣ニシ、歡樂ヲ盡シ、身死レバ家モ亦亡ナリ、封建ノ人情ハ不レ然、人君ハ民人アリ、社稷アリ、己ガ一身ノ歡樂ヲ慮ノミナラズ、國家ノ謀子孫ノ慮、片時モ忘ベキニアラズ、士大夫ト雖ドモ家ヲ世ニシ祿ヲ世ニスルコトナレバ、其憂ハ國君同樣ナリ、然ニ今時ハ封建ナレドモ、諸侯都下ニ集リ住シテ、殆ド都下ヲ以テ己ガ家トスルニ近シ、故ニ郡縣ノ時公卿皆帝都ニ集シ形ニ似テ、其國ト民トニ遠リタ

ル故、其事ヲ深ク慮ラズ、唯眼前自己ノ身ト家トノ事ノミニテ、都下ニテ人ノ見聞スル所サヘ見事ナレバ、面目此上ナシトシテ、家中ノ困窮、百姓ノ疲弊ハ、諸侯第一ノ不外聞ナレドモ、其所ニハ心ヅカズ、唯一時ノ侈ヲ恣ニス、是郡縣ノ弊俗ト相似タリ、唐土晉ノ時ニアタリテ、王愷石崇ガ輩侈ヲ恣ニシ、互ニ相誇シコト、人ノ能知ルトコロナリ、如レ此ノ輩ハイカホドノ侈ヲナシテモ、唯其身ト家トヲ亡スマデナリ、今ノ諸侯少ニテモ左樣ノ事アリテハ、一日ノ娛ミハ一國ノ困窮子孫ノ難儀トナル事ナリ、此ノ所ヲ深ク慮リ玉ベキナリ

耻ヲ知ハ、聖人ノ敎ニシテ、武門ニテハ尤モ重ズル所ナリ、然ドモ耻ベキ事ト、不レ可レ耻コトヽノ差別、明ナラザル人多シ、諸侯ノ上ニテ云バ、賦稅多シテ百姓逃散スルハ耻ナリ、俸祿少シテ士大夫困窮スルハ耻ナリ、武備缺テ亂世ノ慮リ無ハ耻ナリ、己ガ臣下ヲ思通リニ使コト能ハザルハ耻ナリ、人ノ物ヲ借リテ返ザルハ耻ナリ、人君節儉ヲツトメテ宮室ヲ營マズ、惡衣惡食シ玉ハ耻ニアラズ、無用ノ供廻ヲ減ジテ、下ヲ休シムルハ耻ニアラズ、身ヲ謙讓シテ官階ヲ求メザルハ耻ニアラズ、國中ノ士民ノ困窮ヲ救ヲ主トシテ、親族世間ノ音信贈答ヲ省略スルハ耻ニアラズ、凡ソ人ニ笑ルヽハ耻辱ト立ルハ俗人ノ見ナリ、唯智者ニ笑ハレヌ樣ニ心ガクベシ、愚者ニ笑レタリトテモ、少モ耻ベキ事ニアラズ、國君其所ニ心ヅキ玉ハヾ、世上ノ流行ヲ逐テ、誇張ヲ務ムルコトハ有マジキナリ

或曰、人君其身ヲ質素ニシテ僕從ヲ多クセズ、又謙損簡易ヲ主トシテ士民ニ親ミ玉ハヾ、イカニモ上

下ノ間ハ親クナルベシ、然レドモ下民其上ヲ心易ク思ヒ、狎レ侮ッテ恐ル心ナク、終ニハ政道ノ害トナラン、　答曰、上タル人下ニ恐レラルヽハ、只賞罰之權ヲ握ルニアリ、功ノアル所ハ、卑賤トイヘドモ殘スコトナク、罰ノアル所ハ、大臣トイヘドモ避クルコトナク、且其賞罰己ガ手ヨリ是ヲ決斷シテミダリニ人ニ委ルコトナシ、是ノ如クナレバ、平日何程謙損ニシテ、下民ヲ同輩ノ如ニシ玉フトモ、彼レガ心ニ恐ルコトハ、鬼神雷霆ノ如ニ思フベシ、若シ賞罰明ナラズ、且其權ヲ人ニ委レバ、君ノ位ニアリテモ、木像ヲ上段ニ飾タルト同樣ノコトナリ、イカホド僕從ヲ多シ、其身ヲ尊倨高大ニシ玉フトモ、何ノ恐ルコトカアランヤ

或曰、不慮ノ變ト云フモノハ太平トテモアルコトアリ、故ニ無用ノ僕從ヲモ容易ニハ省キガタシ、且僕從ヲ多スルハ、此方ノ武勇ヲ耀ス爲ナリ、廢ス可ラズ、答曰、勇ト云モノハ、三德ノ一ニシテ、武門ニテハ第一ニ重ズル所ナリ、然ドモ目ヲ瞋シ肱ヲ張テ、人ニ誇ルヲ勇ト思フハ、是其末ヲ知テ其本ヲ知ザルナリ、勇ノ本ハ天命ヲ知ニアリ、凡人ノ死生禍福ハ皆天命ニアルコトナリ、古ノ人生涯數百度ノ戰ニ出テ、遂ニ薄手モ負ザル者アリ、又一戰ニ打死スル者アリ、又戰ニ出ザレドモ人ニ殺サルヽ者モアリ、是皆其人ノ天命ナリ、是人ノ智惠分別ノ及ブ所ニ非ズ、故ニ我ハ唯義ニ於テスベキ程ノコトヲスル迄ナリ、其上ハ天ヨリノ計ヒアルベシ、心遣無用ナリト、是ノ如ニ安心決定シタル處ヨリ、矢石ノ中ニ在テモ恐ルヽコトナク、又高貴權勢ノ人ニ對シテモ屈スルコトナシ、之ヲ眞ノ勇者ト云ナ

リ、往年御公儀ニオイテ、世子ノ近臣タル者ニ脇差ヲ差セマジト云説起レリ、若其中ニ亂心者カ、逆心ノ徒アランモ計リガタシトナリ、時ニ松平伊豆侯其説ヲ折テ、護衛ノ者刀ヲ帶セズシテハ用ニタヽズ、若其中ニ亂心者出來ルコトアルナラバ、徳川ノ御運ノ末ト云モノナリ、人力ノ及ブ所ニ非ズトイハレシヨリ、其評議止ミタリ、是勇者ノ言ナリ、故ニ物ヲ用心スルコトモ大體ニシテ置ベシ、アマリニ過レバ却テ臆病ニ落ルナリ、我鄕ニ物ニ恐ルヽ男子アリ、夜ハ假初ニモ獨行セズ、同行之人少クテモ心細シト云ヘリ、或トキ五人一同ニ夜行シタリ、於是四人前後左右ヨリ取圍テ道ヲ行タリ、同行ノ者彼男ニ向テ、如此ニスル上ハ、貴君安心ナルベシト云シニ、答テ、頭ノ上ガ油斷ナラズト言シナリ、今ノ貴人ノ所作此男ニ類スルコト多シ、之ヲ武勇ト云ベシヤ、之ヲ臆病ト云ベシヤ

君德ヲ正セント欲セバ、世子タル時ヨリ心ヲ用ユベシ、其事大略學制ノ條ニ述タレバ此ニ贅セズ、古ヘ君ニモ、世子ニモ、師・傅・保ノ三ツアリ、今世子ニ其任ヲ設ケ、君トナリ玉ヒテ後モ、其人ヲ其儘ニ用ヒ玉ハンコト然ル可キナリ、三ツノ者師尤モ重シ、傅之ニ次ギ、保之ニ次グ、今時宜ニヨリテ其制ヲ定メバ、世子五歲マデハ婦人ノ手ニ長ジ玉ヘドモ、六歲ニ至ラバ、男子正シキ人柄ノ者ヲ擇ビ其側ニ差シ添ヘ起居周旋ニ心ヲ附ケ、行儀正シク成長シ玉フ樣ニスベシ、是即保ナリ、十一二歲ニ至リ、授讀既ニ畢リ講說ヲ聽キ玉フ所ニ至ラバ、然ル可キ儒者ヲ差シ添、經史ノ義理、古今ノ事變ヲ說カシメ、身ヲ修ムルヨリ國ヲ治ムルニ至ル迄ノ方法ヲ知リ玉フ樣ニスベシ、其任ニ當ル者即傅ナリ、十七

八ニ及バセラレ、追々國政ヲナシ玉フ時ニ至ラバ、家老中老ナド大身ノ内ヨリ、威望德器アル人ヲ擇ンデ之ニ師トシ事ヘ、一切ノ行事政務ノ處置、皆問ヒ謀リテ其敎ヲ受ケ玉フベシ、是即師ナリ、君トナリ玉ヒテ後モ、右三人ノ者心ヲ合セテ輔佐シ、若シ諫ヲモ納ルベキ事アラバ、事ノ大小輕重ニ隨ヒ、三ツノ内ヨリ申シ出ル樣ニスベシ、世子ヨリ平日師ヲバ最モ重ジ玉ヒ、内庭ニ於テハ之ヲ上座ニ置テ、拜禮ヲモ行ヒ玉ヒ、傅ハ其一等下、保ハ又其一等下ノ侍ニテ宜シカルベシ、諺ニ三ツ子ノ心百マデト云コトアリ、幼少ノ時其人ヲ畏レ玉ヘバ、成長ノ後モ其習ヒ殘リテ、自然ト其人ノ言葉ナレバ聽キ用ヒ玉フナリ、當時ハ藝術ノミニ師アリテ、道ヲ學ブノ師ナシ、一大缺事ナリ、今其事ヲ執行ヒ玉ハヾ誠ニ美事ナリ

事古リタル申シ事ナレドモ、君ニモ世子ニモ近臣ヲ擇ブベキナリ、格別ノ賢者ハ容易ニ得ベカラズ、サレドモ文武兩藝ニ於テ相應ニ通達シ、且行狀正シキ者ヲ、學校奉行ニ命ジテ之ヲ擇マセ、近臣ノ内ニ加フベキ者ナリ、其事ハ是亦學制ノ條下ニ述タリ、古皇朝ノ時、學校ニテ選擧ヲ主リシコトアリ、近臣善ケレバ、君モ世子モ、何トナク其風ニ化シ玉フコト、必然ノ理ナリ

迂言乾中君道終

迂言乾下

祿位三

諸侯臣下ノ賦祿、國ニヨリ不同アリ、大抵少キハ國ノ三分一、中ハ半、多キハ三分二ニ及ブベシ、唐土封建ノ時ニモ、世祿ト云コトアレドモ、祿ノ多少ハ一世々々不同アリ、只不肖ノモノアリテモ、少シハ祿ヲ賜ヒ、士格ニ列シテ庶人ニ落ヌ樣ニスルヲ世祿ト云ナリ、我邦ノ制ノ如ク、千石ハ世々千石、百石ハ世々百石、歩卒ニ至ル迄モ祿ヲ世々ニスルコト、誠ニ上ヨリ祖先ノ勞ニ報イタマフ所、アツキガ上ニモアツキト云者ナリ、臣タルモノ上ノ大恩ヲ知ラズンバアルベカラズ、抑當時諸國貧窮ニツキ、臣下ノ賦祿或ハ其半ヲ減ジ、或ハ面扶持ナド云コトニナリタルトモ、武士ノ身ナレバ農工商ノ業ヲ營ムコトモ成リ難ク、困窮此ニ極レリ、上タル人モ亦下ノ困苦ヲ知リ玉ハズンバアル可ラズ、其本ヲ論ゼバ、國初ノ時制度宜ヲ得ザル處アルヨリシテ、後ニハ雙方共ニ迷惑ニ及ベリ、然レドモ過去ノコト論ジテ益ナキコトナリ、今時家中ミナ知行處ヲ離レテ城下ニ居住スル故、雜費ツヨク貧窮ニ及ブコト、先哲ノ委ク論ゼシ處ナリ、士ヲ知行處ニオクコト、此近國ニモアルナリ、如何ニモ良法ニテ、軍用ノ時知行所ノ百姓ヲメシツルヽニヨリ、兵卒ノ備他國ニ數倍セリ、何卒諸國ニモ其法ヲ行ハセラレ然ル

ベキコトナリ、但シ前ニ申セシ如ク、今時臣下ノ祿名ノミアリテ、其實大ニ減省スル故ニ、モシ知行所ニ引越シタランニハ、上ニ指支アルベシ、是ハ知行所ニ於テ獻米ヲ出サシムベシ、此ノ如ニテモ田舍ハ雜用減省スル故、城下ニ在ヨリハ窮スマジキナリ、又役儀ニ任ズルモノハ必ズ城下ニ出、是ハ役儀次第ニテ、或ハ高ノ中ヲ減ジ、或ハ不レ殘是ヲ賜ヒ、或ハ足シ高ヲモ用ユベキナリ、太平久シク世祿ノ家ニ生レタル者ハ、無用ノ人多ク、卑賤ノ人ニ英才多ケレバ、之ヲ擧用ヒザルコトヲ得ズ、然レドモ上ノ賦祿モ亦限リアレバ、新家ヲ增スコト容易ニ非ズ、故ニ舊家ノ內、弱年或ハ不才ニシテ、役儀ヲ務ザル者ハ、相應ニ獻米ヲ出サシメ、其分ニテ有用ノ人ヲ召抱ユベキナリ、新ニ召出サル者ハ初ヨリ役祿ト家祿トヲ分チ、役祿ハ退役限リ召上ラレ、家祿ハ子孫ニ傳フベシ、役祿ハ多キヲ厭ハズ、家祿ハ多クスベカラズ

位階ノコトハ上中下三等ト立テ、黑衣黃衣靑衣トワカチ、一等ノ內ヲ又三ニワケ、其紋所ヲ殊ニシテ、九等ト定メタラバ宜カル可キナリ、凡今時士民共ニ奢靡ニ長ジ、其レヨリ困窮ニ及ブコト、服飾ニ制度ナキ故ナリ、此事ハ先哲ニモ論ゼシ人アリ、凡ソ誇張ヲ務ムルハ人情ノ常ナレバ、縱令堯舜ノ御世ナリトテモ、一向人ニ其心ノナキヤウニスルト云コトハ出來ヌコトナリ、只其情ヲ□ヒテ害ヲナサシメザルヨリ外ハナシ、凡ソ富貴ハ人情ノ誇ル所ナリ、其內貴ニ誇ルハ其害小ナリ、富ニ誇ルハ其害大ナリ、今服飾ニ貴賤ノ分チナク、上下一般ナル故、人皆美服ヲ飾リ、僕從ヲ多クシテ、其所ニテ己ガ

富ヲ顯シ、其富ニテ貴ヲ顯サントス、此レ風俗日々奢靡ニ流レテ、困窮ニ赴ク所以也、今服飾ノ制ヲ定メ、貴賤ノ分チ一見シテ明白ナレバ、人皆美服ト僕從トヲ用ルヿナク無用ノ費大ニ減ズ可キ也

當世武家ニテハ、禮服ハ麻上下ヲ用ヒ、常服ハ肩衣袴ヲ用ヒ、又羽織ヲ用ユ、是ハ上ハ公儀ヨリ、下ハ列國一統ノ事ナレバ、諸侯ノ私ニ改ムルコトヲ得ザルトコロナリ、只衣服ノ色ノミハ定制ナキコトナレバ、如何樣ニモ其國中ニ於テ制度ヲ立テ、苦シカラヌコトナリ、因テ試ニ其差等ヲ分タンニハ、家中上等ハ黑色、中ハ黃色、下ハ青色、庶人ハ縞ニテ純色ヲ用ヒズト定ムベシ、且又當時ノ家ノ紋ト云モノ、門地ヲ表スルノ具ニシテ、日用ニ切ナラヌ者ナリ、姑ク之ヲ變ジテ階級ヲ分ツノ具トナシ、衣服ノ階級三等ニシテ、一等ノ中ニ上中下ヲ分チ、紋ヲ九トホリニシテ是ヲ分ツベシ、位階進デモ服色易ラズハ、紋ハ上ヨリ張リテ用ベシ、左スレバ途中ニテ行合ヒタルトキ、十間モ手前ヨリ先ヅ服色ヲ見テ、黃色ハ黑色ヲ避ケ、青色ハ黃色ヲ避ベシ、服色同クバ、近ヨリタル上ニテ其紋所ヲ見テ、相當ノ會釋ヲナスベシ、黃衣ノ者ハ數十ノ僕ヲ從ヘタリトモ、黑衣ノ無僕ナルニハユヅルベシ、青衣ノ黃衣ニ於ルモ亦然リ、大祿ニテ貧ナルモノハ、木綿ヲ黑ニ染テ用ユベシ、其レニテ羽二重ノ黃衣ヲ着タル者ヨリハ、何時モ上席ナリ、黃衣ノ青衣ニ於ルモ亦然リ、如レ此スレバ美服ヲ競フコト、自ラ止ムベキナリ、右ノ如ク服色ヲ定タル上ハ、僕從ノ數ヲ限ルベシ、是ハ大國小國ニヨリテ、大ニ差等アルコトナレバ、一概ニ定メガタシ、今暫ク國守大名三十萬石內外ノ所ニ付テ說ヲ立ンニ、今時ハ大國小

國共ニ困窮ノ最中ニテ、眉ヲ焚ヨリ急ナレバ、大國トイヘドモ時勢ニ從ヒ、小國同樣ニ制ヲ立ツベキナリ、因テ黑衣ハ年頭式日登城ノ時ハ、上ハ家來四人、次ハ三人、黃衣ハ二人、靑衣ハ一僕然ルベシ、何レモ馬駕籠ヲ用ヒズ歩行スベシ、馬ハ武用ナレバ廢スベカラズト云人有ベケレドモ、其レハ少シ遠行ノ時カ、又平日ノ調錬ニタエズ用エベシ、式日ニカギル可ラズ、人ノ足トテモ時々ハ用ヒネバ、軍陣ノ用ニハ立タヌナリ、駕籠ニノルコトハ、老人病人婦人ナラデハ猥ニ乘ルベカラズ、武士ノ隣家ニ行ニモ、駕籠ニノルコト、誇張ノ至ニシテ、且又武用ニ害アルナリ

位階九等ノコト、先ヅ一等ハ家老政事ニ任ズルモノヽ位トス、又世子ヲ除テ他ノ諸公子ノ位トス、二等以下ハ、役名役格國ニヨリ不同ナル故、一々配當シ難シ、故ニ姑ク之ヲ知行高ニ配ス、萬石以上ノ世卿ハ、役ナクトモ二等タルベシ、役格ニテハ家老ノ次タル者ノ席トスベシ、三等ハ三千石以上、コレ迄ヲ黑衣トス、四等ハ千石以上、五等ハ三百石以上、六等ハ百石以上、コレマデヲ黃衣トス、七等八等九等ハ中扈從・歩士・歩卒ノ位トス、コレヲ靑衣トス、萬石以上ハ大國ニテモ一兩家ニ過ギザレバ、先ヅ三千石以上ヲ以テ家格ノ最上トスベシ、然レバ役格ハ一等ヲ以テ最上トシ、家格ハ三等ヲ以テ最上トス、家格ハ四等五等ノ者モ、役格ハ一等ニモ進ムベシ、是賢者ノ道ヲ開クナリ、是大國三十萬石内外ノ所ヲ以テ言ナリ、小國ハ其國ニ從ヒ、知行高ノ割合ヲ改ムレバ、其他ハ大國ニ異ナルコトナシ
家中ノ子弟、及其僕隷、ミナ其位ト服色ヲ定ムベシ、大略靑衣ニテ、其内黑衣ノ子弟ハ七等ニ準ジ、

黄衣ノ子弟ハ八等ニ準ジ、青衣ノ子弟ハ九等ニ準ジ然ルベシ、陪臣ノ位モ亦此三等ノ内ニ配當スベシ、九等ニ至テハ、父子主從皆同列ニシテ可ナリ、大祿ノ子弟ヲ陪臣ニ準ズルコト人ノ承允セヌコトナレドモ、先ヅ一旦下位ニ居キテ其身ヲ高ラセズ、下情ニ通ゼシムルコト、即其人ヲ教育スルノ術ナリ、而後十六七ヨリ二十二三マデノ内、國君ヨリ目見仰セ付ラレ、其上ニテ階級ヲ給ハルベシ、即其家格ノ一等下ニ居クベシ、三千石ノ嫡子ハ第四等、庶子ハ第五等、千石以下モ之ヲ以テ差トス、聖人ノ教ニテハ、天下生ナガラニシテ貴キ者ナシ、天子ノ子モ猶士ノ如シト立タリ、故ニ古ヘ公侯伯子男ノ世子タル者、其父薨ズレバ、士ノ服ヲ着テ天子ニ見エ、其上ニテ父ノ爵ヲ賜ルコト周ノ禮ナリ、誠ニ美美シキヿナリ、如此ニシテコソ、君臣ノ道ハ明ナル可キナリ、其家ニ生サヘスレバ、君ヨリ賜ハラズトモ、父ノ格ハ我物ト心得ルコト門地ノ弊ニシテ、君却テ臣ニ制セラルル理ナリ

家中ノ陪臣皆等級ヲ與ヘ、直臣タリ共等級卑キモノハ、陪臣ノ下ニ坐スベシ、今時此ノ制ナキ故ニ、直臣陪臣互ニ意地ヲ張リテ相下ラズ、直臣ノ位卑キモノト、陪臣ノ位高モノハ、苟且ニモ同席セズ、同席スレバ必上下ノ爭ヲ爲ス、大ニ禮讓ノ義ヲ敗リ、且同國ニ在リ乍ラ、仇敵ノ如ナルヿ、政ニ害アルヿトナリ、國中ニテケ様ノヿアルハ、君ノ耻辱ト云ベシ、凡國中ニ一人タリ共、無格ノモノヲ置クベカラズ、婦人小兒出家社家ノ類迄、必其格ヲ定メ、出會ノ節少モ席順ノ評議ニ及ヌ様ニスベキ也、俗人ノ説ニハ、格ヲ定メズシテ、名々己ガ身ヲ尊キ物ト思ハシムル、是即互ニ勵ミ合テ出精セシムルノ術

ナリト、コレハ上ヨリノ世話行屆カザルヲ掩ントシテ、如レ是ノヿニ託スル、所謂遁辭ト云モノ也、如レ是ニテハ人ニ爭ヲ致ル理ニテ、和合一致スルヿナシ、亂世抔左様ニアリテハ、別シテ差支多キ也、又太平ニテハ互ニ誇張ヲ務ムル故、奢靡ニ流レ困窮ノ源トナル也、必俗說ニ惑フ可ラズ

右ノ如ク位階ニ從ヒ服色ヲ定メタル上ハ、家中ニテ美服ト多僕トヲ用ヒテ、外ヲ張ルコト自ラ止ミ、困窮モ年ヲ追テ改マルベシ、其次ハ庶人ノ奢靡ヲ戒ムベシ、今時ハ只絹布ヲ用ルコトノ禁而已ニテ、其他ニ及バズ、誇張ハ人情ノ免レザル處ナレバ、絹布ヲ禁ゼラルレバ、又外ノ事ヲ以テ人ニ勝タントシ、其費ハ益多クナルナリ、其レヨリハ相應ニ誇ルベキ筋ヲ定メテ其願ヲカナヘ、奢靡ニナガレザル様ニセシムベキナリ、其仕方ハ庶人ニ段格ヲ設クルニシクハナシ、古ノ時民ニ爵一級ヲ賜フナド云コトアリ、當時諸國ニモ富人ニ金ヲ獻ゼシメテ、格ヲ與ルコト一統ノ事ナレドモ、其法尚精密ナラズ、因テ愚按ニ及ブナリ、格ヲ與ヘント思ハヾ、先ヅ無格ノ者ニキビシク法ヲ立ツベシ、服飾ノ上ニテ云ハヾ、羽織ト云モノヲ一統ニ制禁スベシ、冬春雨時ハ身ヲ暖ムルタメナレバ、綿入レ羽織ヲ許スベシ、四時共ニ薄キ羽織ヲ用ユルコト禁ズベシ、其上ニテ褒賞ノタメ、或獻金ノ數ニ從ヒ羽織ヲ許スベシ、其一等上ハ袴脇指ヲ許スベシ、是又其功ト獻金トニ從フベシ、其上ハ苗字ヲ許シ、其上ハ目見エヲ許シ、其上ハ段々ト家中ノ格式ニ準ズベシ、如レ此スレバ、少シニテモ人ノ上ニ立ント思ヨリ、才力アル者ハ何ナリトモ功ヲ立テ、賞ニ與リ、財アル者ハ、金ヲ獻ジテ格ヲ求ルナリ、私ニ財用ヲ費シテ人ニ誇ル

處ヲ上ニ物ヲ獻ジテ其許ヲ蒙テ面目ニスルハ、其利害雲泥ナリ、此處ハ諸國大抵其通ッナレドモ、二ツノ行屆ザルコトアリテ、其法死法ニナリ、用ニ立タヌナリ、一ハ无格ノ者ニ制禁行屆カズ、私ニ羽織袴脇指苗字迄ハ勝手次第ニ之ヲ用ヒ、タヾ官府ニ出ル時ノミ法ノ通ニスルナリ、凡庶人ハ官府ニ至ルコト至テ少シ、人ニヨリテハ生涯足踏セザルモノアリ、其處ニ格ヲ立タリトテ、何ノ用ニモ立ズ、故ニ平日ノ所行ニ委ク心付ケ、法ヲ犯ス者アレバ、村役町役ノ者迄モ罰セラルヽ樣ニスベシ、而後始テ公許ヲ蒙リタル者ハ規模アリテ、有格ト无格トハ途中ノ行合ヒ、席上ノ出合ニ、一向別段ノ挨拶ニ成ルベシ、第二ニハ、世襲ト云コト當世ノ習ニテ、百姓町人ニ格ヲ與ル迄モ、一度格ヲ許サルレバ、子々孫々多ク其通ニナルナリ、此弊俗ニヨリ、諸國共ニ町人百姓ニ苗字帶刀ノモノ澤山ニナリ、一向上ノ用ニモ立タズ、人ノ爲ニモナラズ、政事ノ妨ニハナルナリ、凡ソ苗字帶刀ハ庶人分外ノ事ナレドモ、格別ノ功ニヨリテ免サルヽナリ、若世々其通リナラバ、庶人ト異ナリ、農商ノ業ヲモ改ムベキコトナリ、故今制ヲ立ル時ハ、庶人ノ格ハタトヒ何十萬金ヲ獻ジテ、家老格ニナルトモ、其子ハ羽織ナシノ平百姓ニモドスベシ、其者親ノ跡ヲツガント思ハヾ、又新ニ功ヲ立ルカ、金ヲ獻ズルカセシムベキナリ、如レ此スレバ功ヲ立ル者、金ヲ獻ズル者、混々トシテ斷ルコトナク、下ニハ出精ノ者タエズ、上ニハ利益ノ源ツキズ、是ヲ活法ト云ナリ

迂言乾下祿位終

迂言坤上

兵農四

武備ハ國ヲ保ツノ要務ニシテ、武門ニテハ、太平ト雖ドモ片時モ之ヲ忘レズ、苟モ武家ニ生タル者ハ、三歳ノ小兒ト雖ドモ、亦武備ノ大切ナルコトヲ知ル、然レドモ今時諸侯ノ國、上下共ニ困窮ヲ免ル、コト、大敵ヨリ圍レタル中ヲ出ントスルガ如シ、迚モ亂世ノコトナド慮ルニ暇アラザルナリ、如何ニモ上ノ御武運盛ナルコトナレバ、亂世ト云コトアルベキニモ非ザレドモ、關原ノ後太平トハ申シナガラ少々ノ事ハナキニ非ズ、前ニ大阪ノ役アリ、後ニ島原ノ役アリ、神祖ノ御聖德ト、大猷院殿ノ英武ナルト雖ドモ、如レ是背叛ノ徒アルコトヲ免レズ、左スレバ此後モ右兩事ノ如キコト有マジキトモ云難シ、然レバ武備ハ怠ル可ラザルコトナリ、今時諸國共ニ兵備空乏ニシテ、合戰ニ出ル人甚少キ事、先哲ノ論明々タリ、寡不レ敵レ衆コト、天下ノ常理ナレバ、イカニ武士道ヲ立ル志アリトモ、戰士少クテハ、大敵ニ勝コトハ迚モ不レ能ナリ、亂世ハ小國ハ大國ニ併セラレ、弱國ハ强國ニ役セラレ、同列ノ諸侯モ、後ハ君臣ノ勢ヲナスニ至ル、コレ小國ノ武士皆腰抜タルニハ非ズ、何分ニモ少キハ多キニ敵セザルナリ、故ニ武士ノ意氣地ノミヲ張ツメテモ、戰士ヲ多クスルノ術ナクテハ、亂世ニハ人ニ降參ス

ルヨリ外ハナキナリ、扨戰士ヲ多セント思ハヾ、農兵ヲ用ルニ若クハナシ、抑周ノ時農兵ノ法アリシハ、井田ノ制ニテ、十ガ一ノ賦稅ヲ納メタル時ノコトナリ、今我邦ノ稅ハ、大抵十ニシテ四五ヲ稅スルト云程ナレバ、和漢古今未曾有ノ重斂ナリ、カヽル重斂ヲ出サセ、其上農夫ヲ合戰ニ出スト云コト決シテ行フ可ラザルコトナリ、因テ此一段ハ前ニ述タル如ク、武士ヲ知行所ニオキ、其中ノ百姓ヲ主人ヨリ家隷分ニシテ、武用ニ立ル樣ニスベキナリ、左スレバ古農兵ノ如ク、是非トモ家々ニ割リ付ルニ及バズ、主從ノ相談ニテ、イカ樣ニモ戰ニ出ル者ハ多クナルベキナリ、臣下ノ知行所ニ非シテ、直ニ君ニ屬スル者モ亦如此ニシテ其人ヲ募リ、平日ハ農工ノ業ヲ務メ、事アル時ハ步卒ニナリテ、戰ニ出ル樣ニスベシ其者ニハ少々ノ格式ヲ許シ、又ハ徭役ヲ免ズル樣ニセバ、好デナル者出來スベキナリ古ハ農夫ノミヲ兵卒ニ用ヒタレドモ、今ハ夫レニ限ル可ラズ、農ハ重斂ニ苦ミタル時節ト云ヒ、且又農隙ノ時ヲ伺テ用ユルナレバ、不便利ノ事多シ、故ニ博ク人ヲ取リ用ベキナリ、四民ノ內但商ノミハ何十萬アリトモ、戰場ニハ用ヒ難シ、其他ハ敎ニヨリテ兵卒ノ用ニナルベキナリ、百工ノタグヒ隨分取用ユベシ、獵師ナドハ尤宜シカルベシ、醫師・社家・山伏皆刀劍ヲ帶テ、武士ニ擬スルモノナレバ、是亦取リ用ユベシ、僧モ時宜ニヨリテハ取リ用ユベシ、凡如レ此ノ類皆相應ニ格式ヲ與ヘ其譯ヲ立レバ、面目ノコトニ思ヒ、戰場ノ役ヲモ辭セザルナリ、是兵卒ヲ多クスルノ法ナリ

或曰、武士ニモ非モノヲカリアツメ、戰場ニ出シタリトテ、何ノ用ニカ立可キ、答曰、然ラバ吾子今

ノ武士、一々戰場ノ用ニ立ツト云コトヲ受合ベシヤ、太平數百年、今ノ天下ニ一人モ戰場ニ出タル者ハナシ、用ニ立ト立ザルハ、其時ニ至ラザレバ知リ難シ、只戰場ニ出タルトキ、一働キセント覺悟ヲキメタル者ヲ用ニ立ト云ヒ、其覺悟ナキヲ用ニ不レ立トスルヨリ外ハナシ、左スレバ武士ニ非ザル者モ、戰場ニ出ルニ事決シ、毎年講武場ニ出ル樣ニナレバ、自然ト其心得ニナリ、今ノ歩卒ナドノ覺悟ダケノコトハ備ルナリ、又亂世ニナリタラバ、上下一同合戰而已ニナル故、治世ニ定メタル人數ニ不レ限、戰士モ追々增スベシ、只國ノ强ト弱トハ、治世ヨリノ風儀ニヨルナリ、百姓職人ナドモ合戰ニ出ル者多レバ、國ノ風俗自然ト武氣ヲ含ミ、强毅雄壯ノ態アルベシ、是亂世ノ煎藥ニハ第一ノ良方ナリ、夫一國ヲ以テ人ノ一身ニ喩レバ、君ハ首ノ如ク、臣ハ腹ノ如ク、民ハ足ノ如シ、人ノ心腹肥滿スト雖ドモ、足弱キ者ハ倒レヤスシ、國モ亦然リ、民弱キトキハ覆リ易シ、民ヲ强スルノ方、農兵ニ若クハナシ、漢土後世封建スタレテ農兵ヤミ、國體柔弱ニナリテ、遂ニ北狄ニ併セラレタリ、我邦今幸ニ封建ノ制トナレリ、然ルニ軍兵ハ、郡縣ノ制ニヨリテ、養兵ノ法ヲ用ルコト、憾ムベキノ至ナリ、是世祿ノ弊ニシテ、祿ヲ食ム者多ニヨリ、賦稅亦多ラザルコトヲ得ズ、賦稅過多ナレバ、農夫戰ニ用ユ可ラザルナリ、今我說ハ養兵ヲ主トシテ、民兵ヲ兼用スルナリ、此分ニテモ民ノ風俗强クナルナリ、若平時此法ヲ用ヒズ、事急ナルニ及デ、軍兵少キヲ患ヒ、俄ニ民ヲ募リテ兵トナサバ、乃吾子ガ所レ謂何ノ用ニカ立ベキト云說確當トスベシ

武家ノ出替リ奉公人、重用ニ立チガタキコトハ、先哲詳ビラカニ之ヲ論ゼリ、是ハ全ク太平ノカザリモノナリ、今時合戰ト云コト、容易ニ有ベキコトニアラザレバ、先ヅ其分ニ推シ移リテモ急害ナシ、然レドモ今時武家貧窮最中ニ五兩七兩ヅヽノ給金ヲ費ヤシテ、飾リモノヲ供ユルコト、無用ノコトナリ、故ニ前ニ僕從ノ數ヲ減ズルコトヲ云リ、僕從減ゼバ、奉公人減ジテ費ハブキ、勝手宜シカルベキナリ、猶又其上ニ一ノ法アリ、家中ノ子弟、次男以下十五六ニ及ビタラバ、他家ニツカハシテ若黨トナスベキナリ、左スレバ俸祿少キモノハ、家口減ジテ便利ナリ、引キ受タルモノモ、給金ヲツカハスニ及バズ、衣食ヲ與ヘタル分ニテ宜シ、前ニ論ゼシ如ク、家老ノ子ト云ヘドモ目見エセザル中ハ、親ノ家隷同前ニテ、七等ニ列シ青衣ヲキルト定ムル時ハ、家中ノ若黨ハ皆青衣ナレバ、親ノ家ニ居テモ他家ニ行テモ、格式ニ高下ナシ、給金ヲ取ラズ、奉公人ト譯異ナレバ、他家ニアル中ニモ學校ニ出テ、文武ノ兩藝ヲバ學ブベキナリ、其內ニ養子ノトコロ定マレバ、主家ヲ引キ取ツテ此ニ行キ、其時ハ故主ト同格ニモ、又其上席ニモナルナリ、主從ノ挨拶ハ、古禮ニ、他人ヲ拜シテ父トシ、兄トスルコトアリ、故ニ其例ニ隨ヒ、父兄子弟ノ挨拶ニテ宜シカルベシ、左スレバ小身ノ子、大身ヲ父兄分ニスルコト、後年ノ爲ニモ心强キコトナリ、大身ハ子弟ヲ他家ニツカハサズトモ、其家ニテ家隷分ニシテ召使ベシ、下位ニ置テ下情ニ通ゼシメ、又鄙事ニ習ハシムルコト、其身ノ利益ナリ、凡直參陪臣ノ差別嚴ニスグルコト、今時ノ弊ナリ、大身ハ事多ケレバ、一身ニテ奉公ハ勤ラズ、其臣ノ力ヲ借リテ勤ム

ルコトナレバ、陪臣ノスル事モ、皆公用ニアラザルハナシ、故ニ直陪ノ處ヲ混ジテ、只位級ノ高下ヲ分ツ而已ニシテ置ベキナリ、凡家中ノ奉公人皆君ト主トヲ分チ、君ト云ハ國君ニシテ、己ガタメニ世世ノ君ナリ、主ハ居家ノ主人ニシテ、其家ニアル間ノ主ナリト定ムベシ、今時ノ奉公人、多ハ他方ノ缺落モノ、或ハ町人百姓ノ次男三男、遊蕩ニシテ父兄親族ニ容ラレザルモノ、家中ニ奉公ニ出ルナリ、之ヲ止テ武士ノ素姓正キモノ用ルコト、双方ノタメ宜キモノナリ

武ヲ講ズルコトハ國ノ大事ナリ、舊例ナクトモ公儀ニ願ヒ立テ、是ヲ取リ行フベキナリ、戰士ヲ多クスルノ法ヲ用ユル時ハ、只今マデ軍勢一萬アリシ處モ二萬トナルベシ、因テ之ヲ二ツニ分チ、夏ト冬ト兩度是ヲ試ムルナリ、大略ハ農事ノ妨ニナラザル時ニ、一萬ノ兵ヲ地ヲ擇ンデ之ヲ聚メ、其部伍ヲ分チ、甲冑・旗・指物ノ類一々眞ノ合戰ニ赴ク時ノ通リニシテ、驅引ヲ試ムベシ、冬ハ夏ココロミタル者ハ出ルニ及バズ、兼テ學校ニ於テ軍學ヲ講ズルコトナレバ、將帥ノ任ニ當ル者ハ、皆軍學ニ通ゼシメ、歩卒ノ類ハ刺擊ノ法ヲ知ラシムベキナリ

公戰ト私闘ト、其事同ジカラズ、今時武家ニ講ズル處、皆私闘ノ法ナリ、故ニ兩度武ヲ講ズルノ擧ナクテハ、軍陣ノ事ニ用ユベカラズ、ヨロヒヲキセ馬ニノセ、大勢出逢シメテ互ニ相タヽキ合セテ、之ヲ試ムベキナリ、此事ハ先哲既ニ論ゼシコトナレバ、委シク言ニ及バズ

今世ノ武家、隣家ニ行ニモ槍ヲ持セ、具足ヲ荷ハセ、數十ノ僕從ヲ召シ連ルヽコト、治世ニ在テ武備

ヲ忘レヌト云フ申シ立テナレドモ、實ハ誇張ノ具ニシテ、無用ノ費莫大ナリ、故ニ平日ハ一切之ヲ除キテ、其代ニ講武ノ場ニ於テ之ヲ詳ニスベシ、家老以下皆知行高ニ應ジテ人ヲ召シ連ルベシ、其兵卒當前ヨリ多ク、器仗堅固ニシテ調錬法ノ如クナルハ、主人ノ覺悟ヨロシキナリ、兵卒少ク、器仗弊敗シ、調錬法ノ如クナルコト能ハザルハ、主人ノ覺悟アシキナリ、此處ニテ甲乙ヲ分チ、褒賞ヲモ加ヘ、戒勵ヲモ加フベシ、如レ此ナラバ、何ゾ必シモ平日多クノ僕從ヲ召シ連レテ、無用ノ費ヲナスコトヲ用ヒンヤ

今時ノ賦税甚ダ重コト、古今ニ類ナシ、農ハ國ノ本ナルニ、本ヲ苦メテ末ヲ養フコト宜ニ非ズ、然ドモ税ヲ減ズルト云コト、今時ノ勢ニテハ爲シ難キトコロナリ、唯一切ノ徭役コト〲ク田地ニ掛ルトコロヲ、他事ニウツスハ行ベキコトナリ、古租・庸・調ノ法アリ、田アルハ租ヲ出シ、人アレバ庸ヲ出シ、家アレバ調ヲ出ス、今ノ處ニテハ庸モ田地ニ掛ル道理ナリ、此分ヲ人別ニ配當シテ出サシメ、田ニ掛ル所ヲ減ズベキナリ、譬ヘバ男子一人ニ付二十ヨリ五十マデノ者、一年ニ十日ノ公役ヲ勤ト立テ、其錢ヲ取立、其錢ヲ以テ人夫ヲ雇ヒ出シテ用ユベシ、公役ト申ス内、實ノ公役アリ、村役アリ、ソレハ部ヲ分チ、徭役錢ヲ其役筋ニ預リ置キ、出入ニ私ナキ樣ニスベシ、其公役錢ヲ出者ハ、軍役ニ出ル者ヲ除イテ、其他ハ一切取立ベシ、軍役ニ供スル者ハ、一年一度ノ講武ノ時ハ、必城下ニ出ルコトナレバ、前後數日ノヒマヲ費スベシ、故ニ之ヲ除クナリ、町人ヲ始トシテ一切ノ遊民田地ヲモタズ

シテ結構ニ生活ヲスル者多シ、如レ此ノ類ニ錢ヲ出サシメテ、農夫ノ肩ヲヤスムル樣ニスベキナリ

出家スル者ハ、金ヲ出シテ度牒ヲ申シ受ルコト、和漢ノ古例ナリ、今ハ其ノ方已ニ廢セリ、是庸ノ法明カナラザルニヨレリ、今庸法ヲ用ルトキハ、度牒ノ法モ再興スベキ理ナリ、但シ僧モ宗旨ニヨリ、又山伏神主ハ軍役ニ供スレバ、度牒ニ及バズ、軍役ニ出ザルモノハ、徭役錢ヲ出サシムルベシ、其軍役ニツカヒガタク、又徭役錢ヲモ出サシメ難キハ、何トカ度牒ニ類シタル法アルベキコトナリ、凡僧ヲ度スルコト、ミダリニスベカラズ、必其數ヲ限ルベシ、遊民多ケレバ國疲敝スルコトハ、三尺ノ童子モ知リタルコトナレバ、此ニ詳カニセズ、古ヘ土地人民政事ヲ諸侯ノ三寶ト云ヘリ、今ノ人ハ唯土地ヲ重ンズルコトヲ知テ、一寸ノ土地ト雖ドモ之レヲ費ヤサズ、人民ニ至ツテハ之ヲ惜ムコトヲ知ラズ、良民變ジテ遊民トナルハ、人ヲ棄ルノ理ナリ、然ルヲ彼方ノ勝手ニマカスルコト、米穀ノ生ズル田地ヲ棄テ、草ノ中ニ埋モラシムルガ如シ、何ゾソレ思ハザルノ甚シキヤ

庸ノ法、古法ノ如クニスレバ、男女共ニアルコトニテ、其制極メテ詳ラカナリ、前ニ述タル處ハ、タダ田地ノ公役ヲ減ンガタメニ其一端ヲ云者ナリ、若シ全ク古法ノ通リヲ行ヒタラバ、上ノ利益ハ大ニ有ベケレドモ、下民重歛ニ苦シミタル上ニ、又外ノコト加ハリテハ、益窮スベキナリ、若シ如レ是ノコトヲ起シテ、十ケ四ノ税ヲ三ニモ二ニモ減ズルト申スコトナラバ、大ニ良法ナルベシ、然レドモ容易ノコトニ非ズ、姑ク舊貫ニ因ルニハシカズ

山林川澤ニ賦アレドモ、其入ルトコロ少ナシ、之ヲ家中ノ祿ニ賜ヒタラバ、宜シカルベキナリ、縦ヘバ千石百石ヲ賜ハルトコロヲ山一ツ二ツヲ賜ヒ、其生ズル處ノ材木ヲ其有トナシ、年々賣出ストコロノ價ヒヲ積リテ、百石ニモ千石ニモアツベシ、川モ亦然リ、魚鼈ノ數ヲ量リ、地行高ニ應ズベシ、此ノ如クスレバ、上ヨリ祿米出ルトコロ少クシテ、倉廩富ムベキナリ、又山澤ノ利未ダ十分ニ地力ヲ盡ザル所多シ、ソレヲ人ニ與ヘ、我物トシテ工夫ヲ付サセ、或ハナキ材木ヲ仕立テ、或ハ材木運送不便利ノ處ハ炭ヲヤキ、又ハ茸類ヲ仕立ルナドセバ、地力十分ニ出ヅベシ、サレドモ是小民ノ利ヲ奪フコトナレバ、施シ行ヒガタシ、若賦稅ヲ減ジテ農夫ヲ利シ、今迄田地ヲ作ラザリシ者モ、皆農務ヲ事トスル樣ニナシ、其賦稅ヲ減ジタル代リニ、庸ノ方ヲ建立シ、且山澤ノ利ヲ上ニ占ル樣ニセバ、宜シカルベシ、唯是改革中ノ大端ニシテ、容易ノコトニ非ズ

迂言坤上兵農終

迂言坤中

學制五

夫賢ヲ進メ不肖ヲ退クルハ、國ヲ治ムルノ本ニシテ、賢者用ラルレバ國興リ、不肖者用ラルレバ國亡ルコト、古今ノ通理、人ノ遍ク知ル處ナリ、然レドモ今時封建ノ制、士大夫タルモノ皆其祿ヲ世々ニスル習ナレバ、世祿ノ家ニ生レタルモノハ、不肖ナリト雖ドモ退ケ難シ、又下ニアルノ賢者ヲ擧ントシテモ、上ノ賦祿限リアレバ、世祿ノ外ニ新家ヲ增スコト、上ノ力ニモ及ビ難キ所ナリ、此ヲ以テ止ムコトヲ得ズ、不肖ナガラモ舊臣ノ家ニ委任シテ、推遷ルコト天下一同ノコトナリ、畢竟舊家ヲ廢スルト云コト致シ難キコトナレバ、只舊家ノ子弟タルモノヲ教育シテ、善ニ赴キ惡ヲ棄シメ、國家ノ用ニ供スルヨリ外ハナシ、然ラバ人才ヲ教育スルコト、今時諸侯ノ國ニ於テ第一ノ要務ナリ、人才ヲ教育スルノ法學校ニ如ハナシ、但シ前ニ述タル如ク、今時學校ノ制宜ヲ得ザルガ故ニ、教養ノ術行屆カズ、古人學ヲ設ルノ本意ヲ失ヘルモノナリ、故ニ今竊ニ愚按ヲ以テ古禮ヲカンガヘ、學校ノ制ヲ改メ建ルコトヲ左ニ錄ス

易ニ童牛之レ牿スト云フコトアリ、コレハ幼少ノモノヲ教育スルニ付テノ喩ヘナリ、童牛トハ、初生

ノ牛未ダ角ヲ生ゼザルナリ、牿トハ、角ニハムル木ニシテ、物ニ觸レツクコトナキヤフニスル器ナリ、牛ノ未ダ角ヲ生ゼザル內ニ牿ヲハメ置クベシ、サスレバ物ニ觸ルコトヲ初ヨリ知ラズ、若シ角ヲ生ジタル後ニ牿ヲ用ヒタリトモ、ソノ詮ナキナリ、人ヲ教ルモ亦此ノ如シ、幼少ノ內ニ早ク教ユベシトナリ、初ニ論ゼシ今時ノ六弊ノ如キ、二百年來ノ風習積リ〱テ生ゼシコトナレバ、今明君英主アリテ、一旦其弊ヲ改メタマフトモ、人情驚キ疑テ心服セズ、カクスル內ニ君ノ世カハレバ、又本ノ通ニナルナリ、只學校ヲ設ケテ、家中ノ子弟ヲ其中ニ遊バシメ、幼少ヨリノ見聞スル所、一切世俗ノ流弊ニ異ナルコトノミナレバ、自然ト其中ニ化シテ、六弊モ改ムルトモナク止ムベキナリ

學校ノ制ヲ改ムルコト他ニ非ズ、古ノ時世子學ニ齒スルノ禮アリ、其事委クハ禮記ニ見タリ、故ニ此ニ載セズ、ソノ大略ヲ申サバ、國君ノ嫡子ヲ學校ニ出シテ、國人ト一同ニモノヲ學バシメ、尊卑ノ差別ヲセズ、群臣諸民ノ子ト打混ジテ、只年齢ノ長ジタルモノヲ上座ニオクコトナリ、サスレバ世子タル人、自然ト賢者ヲ尊ビ、長者ニ讓ノ道ヲ知玉ヒ、成長ノ後君ノ位ニ居玉ヒテモ、必ズ自ラ高ブラズ、賢者ノ言ヲ用ヒ玉フナリ、ソノ處ヲ禮記ニ、「知、爲ニ人臣一、然後可ニ以爲ニ人君一、知レ事人、然後能使レ人」トアリ、君ノ子此ノ如クナレバ、群臣ノ子ハ勿論ナリ、今諸國ノ學校、世子幷諸公子出席シ玉フコト、格別聞及バズ、大方ハ師ヲ招テ教ヲ受玉ヘリ、又家中ノ子弟出席スルモノハ、家格ニ因リテ座席ヲ序テ、長幼ヲ論ゼズ、コレソノ大本已ニ違ヒタリ、其稽古スル所モ、十ニ七八素讀ヲシタルノミナリ、

又問ニ久ク學ブモノモアレドモ、只訓詁ヲサガシ、詩文ヲ作ルヲ事トシ、有用ノ學ヲ務メズ、之ニ由テ學校ノ敎モ形ノミノコトニナリテ、人才ノ生育スルナド甞テナキコトナリ、今古制ニヨリテ長幼ノ序ヲ正シ、尙又稽古ノ筋モ、無用ヲ去テ有用ニ就キ、而後ニ賞罰黜陟ヲ其間ニ加ヘバ、風習大ニ改リ久ヲ待ズシテ一國ノ人才斐然トシテ、大祿世家ニ尸位素餐ノモノナク、下ニアルノ賢才モ相應ニ進路ヲ得、且從前ノ弊俗一洗スベキナリ

學校ノ制ハ、文武ノ兩學ヲ分テ之ヲ建ツベキナリ、文學ニテハ經學・歷史學・諸子學・文章學・兵學・醫學・天文學・和學・職原學・蘭學・書學・數學・諸禮學ナド、一切文字言語ヲ以テスル事ノ國用ニ供スベキコトハ、後ニ載タル故ニ此ニ出サズ、學校ニ出テ學ブ所ノ生員ハ、諸公子ヲ始トシテ、家老ヨリ步卒迄ノ子弟、十歲ヨリ二十四五歲マデ、部屋栖ノ者ハ不レ殘出席セシムベシ、敎官ノ上ニ奉行一人ヲ立、文武ノ兩校ヲ併セ掌ラシムベシ、是ハ至テ重任ナレバ、家老ノ內ヨリ人ヲ擇デ命ズベシ、凡國中家老ヨリ步卒迄ノ子弟十歲ニ及ビタラバ、父兄ヨリ奉行ノ宅ニ携行キ相見セシメ、以後其支配ニ屬スベシ、奉行ヨリ名前ヲ帳ニ錄シテ上ニ達シ、其人生長シテ家督相續スルニ至テ、始テ其支配ヲ離シ、其帳ヲ消スベシ、扨其人稽古ノ次第、藝術ノ差等、皆敎官ヨリ奉行ニ達シ著帳スベシ、尙又月々年々ニ考訂シテ、差等ノ進ムニ隨ヒ其事ヲ錄シ、且時々君ニ言上スベシ、又奉行タル人ハ唯藝術ノ高下ヲ考ル而已ニハ非ズ、生員ヲバ時々相見シテ、目ニハ其容貌ヲ視、耳ニハ其言語ヲ聽、進退周旋ノ度、輕重疾

徐ノ氣象ヲ知ルベシ、且奉行ハ大身ニテ、稗官屬吏多レバ、之ニ命ジテ生員家ニ在ル時ノ行狀ヲ探セ父兄ニ孝悌ナリヤ、朋輩ニ和順ナリヤ、酒狂淫亂等ノ行狀ナキヤ、有リヤ、一々委ク取調ベ、是モ亦帳ニ拵ヘ置ベシ、生員成長ノ上、其家ヨリ家督ヲ願ヒ、又他家ヨリ養子ノ願ヲ差出ス時ハ、教官ト奉行トニ與判ヲ賴ムベシ、教官ヨリハ文武兩藝ノ差等、此位マデハ升リタル事相違ナキ由ヲ書シ、奉行ヨリハ其人柄迄モ見屆ケタル由ヲ書シテ、而後判ヲ加ベシ、其高下ニヨリテ文句ニ差等ヲ立ツベシ、若一向取ルベキコトナクバ、判ヲ辭退スベシ、虛ヲカキテ君ヲ欺ク可ラズ

入學稽古之次第ハ、初ニ素讀ヲ授カルベシ、其傍ニ手跡ト諳誦ト數術トヲ學ブベシ、素讀ノ中ニ於テ上中下三等ヲ分テ、四書。五經。小學。近思錄等ノ物已ニ畢リ、誦讀滯ルコトナクバ卽上等ナリ、其上ハ輪讀ヲナサシムベシ、其傍ニ講釋ヲ聽シムベシ、輪讀ノ方左傳。史記等ノ類、授書ヲ輪次ヲ以テ讀シメ、音聲朗暢ニシテ句讀无ㇾ誤ハ、誦讀ノ上等ナリ、其上輪講ヲセシムベシ、經史ノ類ヲ列坐シテ輪次ニ講ジ、言語明白ニシテ義理通達セバ、輪講ノ上等ナリ、其上ハ文章ヲ試ムベシ、漢文ハ今時武門ニテ公事ニ用ヒズ、且之ヲ能スルコト容易ニアラズ、故ニ文章官ノ外、通例ノ人ハ俗文ヲ學シムベシ、其法ハ教官ヨリ席上ニオイテ題ヲ出スベン、或ハ訴訟ノ判斷、或ハ隣國トノ掛合、或ハ公邊ノ願書、或ハ下方ニ向テノ告諭ナド、少シヅヽ意味ノ六ツカシキコトヲ設ケテ問ヲ起シ、當人ノ存ジヨリヲ書シムベシ、其文ノ道理至極シテ、文句能行トヾキ、見ル人感服スル程ニアレバ、文ノ上等ナリ、右素讀ヨ

リ文章ノ稽古マデ、十一二歳ヨリ學ビテ、速カナルハ五六年、晩キハ八九年、大抵二十歳ヨリ內ニ修行成就スベシ、通例ノ學問ハ先ヅ其分ニテスムベキナリ、又歩士歩卒ナド格別才氣モナク、身分相應ノコトヲセント思フ者ハ、ソレマデノ稽古ニモ及バザルナリ、但シ士分以上ノ人ハ、右ダケノコトハ有タキモノナリ、其上ノコトハ學問ヲ職分トスル者ニアラザレバ、知ルニ及バザルナリ、藝術ニ終身ヲ抛テ、其精微ニ入ルコトヲ求ルハ、文武共ニ師範役ノ者ハ然ルベシ、其他ハ無用ノコトナリ

儒者教官ニ任ズルモノハ、科目ヲ分テ其職掌ヲ守ルベキコトナリ、前ニ述タル經學ヨリ以下ノ十餘件、各其長ズル所ニ從ヒ、或ハ一二、或ハ三四ニ兼通スベシ、一人ニテ一切ノ事ニ通ズルコト、力及バザル所ナリ、强テ之ヲスル時ハ、其事未熟ニシテ用ガタシ、今時ノ學弊ハ科目ヲ分ツコトナキニヨリテ、人ノ知ルコトヲ知ラネバ耻トナル故ニ、競テ同ジ道ヲ走ル、ヨツテ我知タルコトハ人モ知ル、人ノ知ヌコトハ我モ知ラズ、儒者百人有トモ、一人ト同ジコトナリ、是皆學問ヲ己ガ名ヲ成ス爲ニシテ、國用ニ供スルト云心ナキ故ナリ、是ハ上ヨリ科目ヲ分ツテ人ヲ用ヒ、其長ズル所ヲ取テ、其短ヲセメヌ樣ニシタマヘバ、儒者モマタ其心得ヲナスナリ

諸公子ヨリ一家中ノ子弟、日々學校ニ往來スルノ法式ヲ申サバ、先ヅ公子幷ニ家老ノ子弟ハ、家隷ノ內ニ素讀ヲ授クルホドノ者ハ有ルコトナレバ、始メハ其者ヨリ授カルベシ、大略ハ十歳ヨリ素讀ヲハジメ、十二歳ニモイタラバ、素讀ハスムベキナリ、其上ニテ學校ニ入ルトモ苦カラザルコトナリ、但

シ家ニテ句讀ヲサヅカルトキ、家隷ナレバトテ必ズ無禮ノ所作アルベカラズ、教ル者ヲ上座ニオキ、禮敬ヲ盡シテ學ブコト、其父兄ヨリ堅ク命ジ玉フベキナリ、扨學校ニイタルトキハ、公子トイヘドモ美服シ給フベカラズ、從者多クシテ兩人ニスグベカラズ、途中步行シテ人ヲ避シムルコト有ベカラズ、古ノ禮ニ、「爲二人子一者坐不レ中レ奥、行不レ中レ路」ト云コトアリテ、親アル者ハ其身ヲ卑下シテ、親ノ所作ニ類セヌ樣ニスルモノナリ、人君ノ子ハ別シテノコトナリ、國ニ二ツノ君ナシ、君ノ子ナレバトテ、カリソメニモ君ニ擬シタル振舞シ給フベカラズ、學館ニ至ラバ、門外ニ長屋アルニ從者ヲ息マセ、其身獨リ門ニ入給フベシ、從者ヲ門內ニ入ルベカラズ、學校ニ大小ノ二門アリ、大門ハ國君奉行教官ノミ其內ニ出入シテ、生員ハ公子ヨリ以下皆小門ヨリ出入アルベシ、玄關モ教官ハ本玄關ヨリ通リ、各其請問ニ赴クベシ、生員ハ小玄關ヨリ進ミ、生員ノ席ニ列スベシ、教官ノ中ニ威儀監ト云モノヲ立置、生員ヲ導イテ法式ニ從ハシムル樣ニスベシ、生員ノ坐席ノ次第、文章生ヲ上トシ、次ハ輪講生、次ハ輪讀生、次ハ素讀生ト居間ヲ限リ、公子ト雖ドモ相當ノ席ニオクベシ、一日ニ一度生員教官ニ禮謁スベシ、コレモ科目ノ高下ニ從ヒ、其序ヲ分チ三四段トナスベシ、國君奉行學ニ至ルノトキ、又其法ニ從ツテ禮謁ヲ受ベシ、長幼ヲ序ヅルコトハ、其列同ジケレバ、年齡長ジタル者ヲ上坐トスベシ、又時アリテハ階級ヲ分タズ、生員ヲ打チ渾ジテ、年長ノ者ヲ上ニオク樣ニイタシ、長幼ノ義ヲ明スベキナリ、但シ生員ノ內諸公子ハ黑衣大身ノ子弟目見エスミタル者ハ黃衣、其他ハ一切青衣ナリ、故ニ同列

ニアリト雖ドモ、身柄ノ貴賤ハ明ナリ、己ヨリ貴キ人ハ下坐ニアリトモ、侮ルコトハナキナリ、又世子學ニ齒スルコト、何分ニモ人ノ耳目ヲ驚スコトニテ、行ヒ難シトナラバ、世子一人ヲ除テ、他ノ諸公子ハ是非法ノ如クニ有タキナリ、然ラザレバ家老以下諸大身ノ子ノ則ニナラズ、復古ノ擧モ詮ナキコトニナルナリ

輪講ヲ試ルハ、唯其書籍ノ文面ニ通ズルト、不レ通トヲ知ルガ爲メ而已ニハ非ズ、講者言語明白ニシテ譬喩親切ニ、イカニモ聽者ノ肺肝ニ通徹シテ尤ニ覺ルハ、辨才アル故ナリ、如レ此者ハ成長ノ後ハ、四方ニ使シテ君命ヲ不レ辱ノ徒ナルベシ、又言語拙訥ニシテ論辨明白ナラズ、聽人茫然タルハ、其人辨才ナキナリ、如レ此ハ假令ヒ書面ノ義ニ誤ナクトモ、貴ブニ足ラズ、文章ニ至テハ、人ノ見識ノ高下、才智ノ長短、殘ル所ナク其内ニ見ハルヽ者ナリ、其處ニ至テハ、漢文和文ノ差別ハナシ、故ニ日用ニナル和文ヲ試ルナリ、是全ク其人ノ才智見識アリテ、事ニ處スルノ所ヲ見ンガ爲メナリ、古ヘ身言書判ノ四ツヲ以テ人ヲ取リシナドノ遺法ニヨル所ナリ、文ノ試ヲ數々スレバ、其人ノ才不才ハ鏡ヲ以テ照スヨリモ明ナリ、是又他日其人ヲ用ルニ付テノ心得ナリ、故ニ奉行ノ任ハ人ヲ育スルニ始リ、人ヲ知ルニ終ルナリ、人ヲ育レバ國ニ賢才多クナリ、人ヲ知レバ職任各其宜ヲ得ルナリ、若唯生員ノ勤惰ヲ督スルヲ任ト思ヒタラバ、大ニ本意ヲ失ヘリ、前ニ所レ謂重任トハ、其處ヲ云ナリ

學校稽古ノ次第、素讀ヨリ文章ニ至ル迄ハ、一統ノコトナリ、其上ハ人々ノ志ニ隨フベシ、或ハ經義

ヲ研究シ、或ハ百家ヲ博覧シ、或ハ詩漢文ヲ學ビ、或ハ和學蘭學ナド、各其師ニ随フベシ、若シ有體ノコト好ム處無クバ、一切セズトモ可ナリ、但シ閑隙ニ書ヲ見ルコトハ、士分以上ノ人ハ生涯廢スベカラズ、前ニモ申セシ如ク、正シキ人ニテモ、才智アル人ニテモ、書ヲ讀ザレバ見識ト云フモノナク、其爲ル所皆俗見ニ墮ルナリ、多ク書ヲ讀ンデ、聖賢ノ心術、豪傑ノ事迹ニ通ズルニ非レバ、俗ヲ免ルルコトハ能ハザルナリ、又教官ニ任ズル者ハ、文學ヲ以テ終身ノ任トスルコトナレバ、如何ニモ手ビロクモ、奥深クモ穿鑿スベキナリ、兵學ハ武ニ屬スルコトナレドモ、兵書ヲ講ズルハ言語ヲ用ルニ過ズ、經史ノ講説ヲ爲スモ同様ノコトナリ、故ニ文學ノ一科ニ屬ス、醫學モ又然リ、儒書醫書講説ニ兩様ナシ、故ニ學力アリテ、醫書ニ委シキ醫師ヲ學校ニ出席セシメ、一切ノ醫生ノ爲ニ醫書ヲ講ゼシムベシ

素讀ヲ授クルコトハ、輪講生輪讀生ニ命ジ、輪讀ヲ監スルコトハ、文章生輪講生ニ命ズベシ、輪講ヲ監スルコトト、文章ヲ試ルコトハ、教官自ラ之ヲナスベシ、凡ソ學校ニ出ルモノ、大國ハ數千人ニ及ベケレバ、稽古ノ筋モ行トヾキカヌル譯ナリ、前ニ申セシ公子家老ノ息、其家ニテ素讀ヲ授カルベシト云ヒシモ其故ナリ、實ハ右ノ人々ニ限ラズ、誰ニテモ其近隣ニ授讀講釋ナド致ス者アラバ、其人ヲ師トシテ學ビテ苦シカラヌコトナリ、左スレバ其事ヲ豫メ奉行幷ニ教官ニトヾケ置クベシ、其上ハ學校ニ日々出席スルニ不レ及、只日ヲ限リテ出席シ、教官ノ檢察ヲ受テ、素讀生ヨリ文章生迄ノ内、其階

級ノ處ニ名板ヲ連ヌベキナリ、私ニ教授スル者アルハ、學校ノ助ケトナルコトナリ、嫌フベキコトニ非ズ、若シ私ニ師ヲ取リテ、一向學校ニ名ヲ出サヌコトハ、祿ヲ食ム者ノ子弟ニハ禁ズベキナリ、又知行所ニ居ル者ノ子弟ハ、學校ノ居寮生トナリ、或ハ其地ニテ師ニ就テ學ブベシ、凡一郡ニ儒生數人ヲ置キ、其他ノ敎諭職ニ任ズベシ、是ハ祿ヲ與ルニ及バズ、郡奉行ヨリノ取次ヲ以テ、其地農家醫家神職ナドノ内ニ學ヲ好ム者アラバ、一旦學校ニ出シ、檢察ノ上其器ニ當ラバ、苗字帶刀ヲ許シ、村儒トナス可シ、是ヲ以テ在宅ノ武士、及ビ庶民ノ師トスベキナリ

國君學ニノゾンデ生員ヲ試ミ玉フコト、月ニ一度ニテ宜シカルベシ、其時ハ輪講文章ノ類皆眼前ニオイテ試アルベシ、モトヨリ生員上等ノ者ノミニテヨロシ、試終リテ格別ニ手ギハヨロシキハ、襃詞マタハ賜物アルベシ、奉行學ニ至ルハ月ニ三度程ニテヨロシ、文武兩學共ニ同ジ、君ハ兼テ奉行ヨリ生員ノ人柄、並ニ其能不能ヲ聞タマヒ、尙又學校臨試ノ時、目ノ當リ委クコレヲ察シテ、後年其人ヲ取用ル時ノ心得トシ玉フベシ

德行言語政事文學ハ、孔門之四科ニシテ、成德ノ人ヲ稱スル語ナレバ、童蒙ノ任ズベキニアラズ、然ドモ其大概觀ベキナリ、生員學校ニオイテ、進退周旋禮儀ニカナヒ、己レガ身柄ノ貴ヲ挾マズ、長者ニ下リ能者ニ讓ルハ、卽德行也、講談ニ臨ンデ言語爽カニ、聞モノ、耳ヲ驚スハ、卽言語ナリ、文章ニテ義理ヲ判斷シ、事體ヲ處スルコト一々宜シキヲ得タルハ、政事ノ才アリテ文學ヲ兼タルナリ、凡

人ヲ觀ノ道、其小ヲ觀テ其大ヲ知ルコト、古人ノ貴ブ所ナリ、返々モ藝術ノ高下ヲ考ルノミノコトトシ玉フベカラズ

武學ハ文學ヲ去ルコト一丁程ニシテ建ツベシ、其中ニテ劍術槍術弓術馬術砲術柔術ナド、一切武備ニ供スル程ノコトヲ、科目ヲ分テ教官ヲ置クコト、一々文學ノ如クスベシ、生員ノ力量ニ隨ヒ、其甲乙ヲ分ツコト、亦文學ノ如シ、是モ武士ノ一通リ知ラデ叶ハヌコトノ分ヲ一統ニ知ラシムベシ、藝術ノ精微ニ入ルコトハ、師範役ニナル志ノアル者ノミニスベシ

學校ノ制ヲ右ノ如クニ立ルコト、人才ヲ育シ、且卷首ニ論ゼシ六弊ヲ變ゼンガ爲メナリ、公子ヨリシテ大身ノ子タルモノ、學校ニ於テ歩士歩卒ノ子ト列ヲ同シ、長幼ヲ以テ相讓ル時ハ、自然ト尊倨ノ態ハ除クベシ、從者二人ニスギズ、途中人ヲ避ケシムルノ事ナキ時ハ、誇張ノ態ハ除クベシ、途中ヨリ學校マデ衆人ニ面ヲミセ、且應對進退セバ、秘閉ノ態アルコトヲ得ズ、學校中專學業ノ高下ヲ以テ席順ヲ定ムル時ハ、門地ノ論ハ無用ナリ、書ヲ讀デ古今ニ通ゼバ、因循ノ弊文盲ノ害ハ自免ルベシ、然ラバ子弟其中ニ生長スル者ハ、知ラズ知ラズ當世ノ俗習ヲ脫シテ、成人ノ後家ニ居リ官ニ任ズルニ至テモ、其作事必觀ベキモノ有ナリ

太平久ク、人安佚ニ習ヒ、難行苦行ヲ勤ルコトアタハズ、右學校ノ制モイカニ宜キコトナレバトテ、其人ノ身ニ苦痛アルコトナラバ、決テ行レヌ說ナリ、今述タル處ノ如キハ、聊モ難儀ノコトハアラズ

只一種ノ驕慢ノ心ヲ除ク迄ノヿナリ、是モ其筈ノヿト心得レバ、少モ難キヿハナキナリ、譬バ茶ノ湯ヲスルモノ、貴賤ノ別チナク同間ニ入、人ノ飲餘シタル茶ヲ飲ム、其時ハ大名モ臣下モ打混ズルヿナレ共、曾テ耻ル心ナシ、又棊ヲ圍ム時、君タル人イカホド負ルコト嫌ノ人モ、臣下ニ向テ二手一時ニスルトイフヿハナシ、都テノコト其業ヲスルカラハ、其法ニ從ズシテハ何ノ詮モナク、又樂ニモナラヌモノナリ、然ルニ學問ノ事ノミハ古法ニ從ハズ、或ハ教ル人ヲ下坐ニオキ、朋友ニモ長幼ヲ論ゼズ、家格ヲ申立ル抔、棊ヲ圍ニ、己レ獨ハ二手一時ニスルトイフ様ナル類ノコトナリ、且千ノ利休ガ定メタル慰ミゴトノ法ハ、己レガ身ヲ屈シテモ固ク之ヲ守リ、歴代聖人之定玉ヘル人倫ノ大法ハ、我ヲ張リテ之ヲ守ラズ、何ゾ其レ輕重ヲ顚倒スルノ甚シキヤ、是ハ儒者共ヨリ其事ヲ申立テザルガ不念ナリ、サレドモ儒者ノ職モ、今時ノ諸侯ノ取扱位ニテハ、故實モ存寄モ申シ出ルコト出來ザルハ尤ナリ、トカク人君ハ論語ニ、「君使レ臣以レ禮スレバ、臣事レ君以レ忠」トイヘルコトヲ心得玉フベキナリ

諸公子以下ヲ混合スルコト、人才ヲ育弊俗ヲ變ズルノミニ非ズ、外ニモ其功多シ、右ノ如スレバ、生員タル者ハ貴賤上下ノ隔ナク、皆朋友ノ好ヲ結ビ、至テ心安クナルナリ、故ニ後年公子ハ國君トナリ玉ヒテ後モ、下情ニ能通ジ、歩卒ニ至ルマデモ、其人柄ノ大略ヲ諳知シ玉フ、故ニ之ヲ使役スルニ便アリ、家老諸大身ノ子モ亦然リ、家中ノ人柄ヲ知ルハ、公儀ノ上ニ於テ何ヨリノ心得ナリ、又下ヨリモ上ノ心ヲ能知リタル故ニ、無用ノ處ニ疑ヒ恐ルヽ心少ク、至テ上ヲ親ク思フ、凡國ヲ治ルノ道、下ヨリ

上ヲ親ムト云フコト第一ノ好キ事ニテ、又第一ノ難キコトナリ、幼少ノ時朋友ノ因ミ有レバ、自然ト親クナルナリ

今世ニ養子ト云コト盛ニ行レ、貴賤トナク異姓ノ人ヲ以テ己ガ嗣トスルコト、古ノ道ニ不レ合コトナリ、然レドモ智者ノ事ヲ處スルハ、「轉レ禍爲レ福、因レ敗成レ功」ト云コトアリ、今時ノ時宜ニテハ、養子流行スルヲ幸ニ、賢ヲ進メ不肖ヲ退クルノ手段ヲ施スベキナリ、前ニ申セシ如ク、家督ノ願ヲ出スト キ、奉行教官ノ與判ヲ取ルト定ル時ハ、無藝無行ノ者ニハ判ヲセズ、故ニ其親モ强テ願立ルコト致シ難ク、或ハ長子ヲ捨テ次男ヲ用ヒ、或ハ實子アリテモ養子ヲスルナリ、然レバ不肖ヲ退ルコト、上ノ命ナクトモ、風俗ノ中ヨリ自然ト出來スルナリ、養子ヲスル時、今迄ノ風俗ナレバ、門地ヲ第一トシ、己ガ家ト同格ヨリ下ノ者ハ用ヒザレドモ、學校ニテ生員ノ差等明白ニナリ、才能アル者ハ上ハ君聽ニ達シ、下ハ一家中ノ評判高キ故ニ、自然ト門地ヲ論ゼズ、評判宜キ者ヲ擇ンデ養子トス、故ニ百石ノ家ニ生レテモ千石ノ家ヲ繼ギ、千石ノ子モ萬石ノ家ヲ續グ樣ニナルベシ、其處ハ君ト奉行職トノ鼓舞ニヨリテハ、一同其了見ニナルベキナリ、然レバ賢ヲ進ルノコトモ、上ノ命ヲ不レ待シテ自然ト成就スベシ、前ニ賢者モ相應ニ進路ヲ得ベシト云タルハ其處ナリ

迂言坤中學制終

迂言坤下

雜論六

財用ヲ利スルハ、國ヲ治ムルノ要務ニシテ、當世ニテハ別シテノ急務ナレバ、諸國ノ政ニ從フ程ノ者、其事ニ汲々タラザルハナシ、然レバ其術日ヲ逐テ精シクナリ、范蠡計然ノ如キノ人才モ往々有ルベキナリ、古語ニ、「耕當レ問レ奴、織當レ問レ婢」ト云フコトアリ、財ヲ生ズルハ書生分上ノ事ニアラズ、其道ノ人ニハ如カザルナリ、但我輩ノ知ル所ヲ論ゼバ、財ヲ生ズルノ道、勤儉ノ二ツニアリ、勤ルトキハ財生ジ、儉スル時ハ財散ゼズ、此二字ハ昔人大禹ノ德ヲ贊スル處ニシテ、其至ルニ及デハ、只聖人之ニ當ルト云ホドノコトナリ、是萬古不易ノ道也、此二ツヲ外ニシテ、財ヲ生ズルノ道ヲ說クモノハ、皆邪說ナリ、後世利ヲ興スノ說盛ニシテ、其說ヲ唱ルモノ或ハ云フ、我說ニ從ガハヾ、節儉ヲ用ヒズシテ財用富饒ナリト、是姦計ヲ設ケテ民ノ財ヲ欺キ奪フニ過ズ、後ハ必一國ノ痛ミトナリ、其疵數世ヲ經テモ瘥エガタシ、譬バ腎虛ノ人アルニ種々ノ補藥藥食ヒ等ヲスヽメテ、如レ此ナレバ房欲ヲ恣ニシテモ害ナシト云フガ如シ、必ズ其命期ヲ促スナリ、國家ヲ有ツ人ハ、如レ此ノ邪說ヲ避ルコト、蛇蝎ヲサクルガ如クニシ玉フベシ、又人君ノ內ニ、專ラ惡衣惡食ヲ務テ、克己ノ道ヲ行ヒ給ヘドモ、下ヲ御ス

ルニ法ヲ以テスルコト能ハザルノ人アリ、其儉約只一身ニ止リテ一國ニ及バズ、一身ノ外、猶冗費ノミ多フシテ、國ノ貧シキコトハ自若タリ、是ヲ孟子ニ「徒善不レ足ニ以爲一レ政」ト云ヘリ

冗費ヲハブクコト、今時ノ急務ナリ、冗費ヲハブカントセバ、先ヅ冗官ヲハブクベシ、前ニ僕從ノ數ヲ減ズルコトヲ擧シモ其一端ヲ擧ルナリ、其他如レ此ノ類擧テ數ヘ難シ、但シ冗官タルモノ久敷其事ヲナシ來リ、夫レニ因テ衣食セシ者ナレバ、俄ニ之ヲ省クトキハ、職業ヲ失ヒ困窮ニ及ブ、是以黨ヲ結ビ亂ヲ企テ、其議ヲ拒ム、富國ノ策ノ行レ難キ所以ナリ、故ニ冗官ヲ省カントセバ、豫メ其者ノスベキ職業ヲ定メ、困窮ニ及バザル樣ニ路ヲ開イテ置キ、而後其處ニ移スベシ、此ノ一段政ヲスル人餘程ノ工夫ヲ勞スルニ非ザレバ成就シ難シ

都下郷内ニ留ルコト、庶人ノ身ニ譬ヘテ云バ、旅行シテハタゴ屋ニ居ル道理ナリ、一日ノ雜用家ニ在トキノ一倍ニモ三倍ニモ當ルコト、先哲ノ言ニモコレヲ云リ、故ニ郷内ノ人ハ、一人ニテモ少ナキヲヨシトス、仍テ江都詰家隷ノコトハ、成丈減省スベシ、迚モ今時ノ勢ニテ、諸侯ノ屋鋪ニ夜討ナド在ベキコトニアラズ、右樣ノ備ニハ及バヌナリ、タダ主君外出ノ時ノ儀衛ト、公邊列國ヘノ取合ニアヅカル役人サヘアレバ濟ムベキナリ、但シ公儀ヨリ役目仰付ラルヽコトアリ、其時ハ人モ多ク用ユルコトナラバ、其時ニ至リ國本ヨリ呼登スルトモ可ナルベシ

財ヲ用ユルノ道、量入爲出ノ四字ニ止マルコト、聖人ノ言ナリ、入ルコト多ク出ルコト少ナケレバ、

匹夫ト雖ドモ又富ム、出ヅルコト入ルヨリ多ケレバ、天下ヲ有ツト雖ドモ、又足ラザルニ苦シム、故ニ國ノ入數ヲ積リテ出數ヲ定メ、少シヅヽノ餘リヲ存シテ、不虞ノ變ニ備フルコト、古今ノ通法ナリ、今時ノ處ニテハ、先ヅ參勤道中ノ入用、江戶邸第ノ入用、世間ヘノ音信贈答ノ入用、在國ノ入用ナド一々部分ヲナシ、財用ノ出數ヲ豫メ定メ、一事ニ一役ヲ用ヒテ之ヲ司サドラシムベシ、其費用ノ多少役人ノ手ニ任セ置キ、若シ取リ料ヒ宜シクテ費ハブク時ハ、手當ノ財餘ルナリ、即チ是ヲ其役處ノ金トナシテ蓄ヘ置キ、之ヲ商人ニ預ケ其利息ヲ出サシムベシ、如此ニシテ年々フユル時ハ役人ノ功ナリ、或ハ其階級ヲ進メ、或ハ其祿ヲ益スベシ、若シ役人取料ヒ行屆カズシテ、手當ノ財用不足スル時ハ、上ニ申シ出シテ、證文ヲ納レ金ヲ拜借シ、後年此方ニ餘財出來タルトキ之ヲ返スベシ、若借財積リテ返スコト能ハザルニ至リテハ役人ノ罪ナリ、如此ハ或ハ其階級ヲ退ケ、或ハ其祿ヲ減ズベシ、如此ニ國財ヲ部分ニシテ、容易ニ交通セザレバ、役人共銘々出精シテ、オノレガ功ニセント思フベク、自然ト節儉行キ屆キ、府庫自富ムベシ、サテ右ノ財ハ國財ト名ケ、只公儀ヨリ御手傳金ノ命アルトキ、諸役所ニ配當シテ之ヲ出サシメ、其他ハ君ト雖ドモ決シテ之ヲ用ユルコトヲ得ズ、若シ已ムコトヲ得ザルコトアラバ、君亦證文ヲ納レテ之ヲ借用シ、後ニ返濟シ玉フベキナリ、諸事費用ノ多少、固ヨリ時ニヨリテ不同アルナリ、先ヅ其常ヲ料リテ法ヲ定メ、若シ變ニ逢フテ費用多キコトアラバ、果シテ理ノ當然ヨリ出デタルト、役人ノ不屆キヨリ出タルトヲ論定シテ、處置アルベキナリ、此事國ニヨリテハ

其制立チタル處モアルベシ、今其事ナキ所ノ爲メニ之ヲ論ズ

賦稅ハ勿論ナリ、諸產物ノ運上モ皆少キヲヨシトス、多ケレバ物價高クナリテ、國疲弊スルナリ、但シ商人ハ金ヲ人ニ貸シテ、其利息ヲ收ムルコト、其身ニ取リテハ莫大ノ利益ニシテ、上ニ一錢ノ運上ナシ、且ツ滯ルコトアル時ハ訟ヘ出テ、上ノ厄介ニハナルナリ、此事運上アリテ宜シカルベシ、喩ヘバ、百金ヲ人ニ貸シ、其利十金ト定メタラバ、乃チ一金ヲ上ニ納メ、證文ノ奥ニ役人ノ判ヲ取ルベシ、如レ是ニシテ滯リタラバ、上ヨリノ世話ヲ以テ、急度借主ヨリツグノヒ返サシムベシ、若シ運上ヲ納メズ、役方ノ判ヲ取ラザルモノハ、滯リタル時願ヒ出ヅルコト叶ハズト定ムベシ、但シ是モ極瑣細ノ假借ニハ公私共ニ煩シ、運上金壹步以上ノ分ヲ、左樣ニ致シ然ルベシ

刑罰ノ法、死罪・徒罪・移居・罰金ニテ宜シカルベシ、遠嶋ハ國中ニ相應ノ島アラバ行フベケレドモ、然ラザレバ事ムツカシ、追放ハ己ガ國ノ禍ヲ人ニ嫁スルノ道、亂世ノコトニシテ、太平ニ行フベキコトニ非ズ、今時盜賊其他ノ姦民、世上ニ充滿スルコト、皆追放ノ弊ナリ、此近國ニ其弊ヲ慮リテ、代ルニ徒罪ヲ以テセラレシ君アリ、誠ニ仁政ト云フベシ、但シ徒罪ノ法、其詳ナルコト未ダキカズ、何レ時宜ヲ計リ、折中シテ行フベキナリ、教ニ從ハザル者ハ、其居ヲ移スコトハ、古ノ法ナリ、是ハ城下ニ居ルモノヲ邊鄙ニ移シ、近ニ居ルヲ遠ニ移シテコラシムルナリ、固ヨリ其地ニ入帳シテ、其地ノ役人ヨリ敎禁ヲ加ユルナリ、追放帳外トハ大ニ異ナリ、罰金ハ徒罪移居ニモ至ラヌ程ノ輕キ處ニ用ユベシ

武士ノ人ニ殺サレ、或ハ不慮ノ變死ヲスル者ハ、家斷絶ニ及ブコト、今時ノ通法ナリ、是其法弊アルコトヲ覺ユ、得ト事ノ筋ヲ穿鑿シテ處置アリタシ、間夫ヲ爲シテ殺サレタリト云フ類ハ、斷絶スベキナリ、小身モノ獨行シテ賊ニ遇、一人ニテ多人ノ爲ニウタレリト云フ類モアルベシ、是ハ寡不レ敵レ衆ハ理ノ當然ナレバ、必シモ尤ムベカラズ、理非ヲ論ゼズシテ、殺サルヽハ耻辱ト立ルハ、無理ナル判斷ナリ、又水ニ溺レテ死シ、其他不慮ノ變死、正シキ人ニモ有マジキコトニ非ズ、一概ニ之ヲ罪スベカラズ、此處ノ道理分明ナラバ、僕從ヲ多クシテ無益ノ用心ヲスル風儀、改リテ宜カルベキナリ

記錄ト云モノ、國々ニ无テ叶ハヌ者ナリ、古ヘ晉ノ乘、楚ノ檮杌、魯ノ春秋ト云シガ如キ是ナリ、今時文學盛ニ行レナガラ、諸國皆記錄ナキコト一大缺典ナリ、急々文臣ニ命、撰述セシムベキ者ナリ、其法司馬遷ガ史記ノ體ニ倣ヒ然ベシ、先ヅ開國ノ君ヨリ歷世ノ君マデ、一々世家ヲ編ミ、其君ノ行狀ヨリシテ、國ノ大事ハ皆其中ニ錄スベシ、群臣ハ列傳ヲ作ベシ、其外ニ史漢ノ八書十志ノ例ニ從ヒ、其國ノ土地ノコトハ地理志、制度ノコトハ禮志、刑罪ノコトハ刑法志、食貨ノコトハ食貨志ナドヽ、名目ヲ立テ之ヲ編纂スベシ、二百年來ノコトナレバ、大國ナラバ四五十卷ニモ及ベキナリ、而後之ヲ傳寫シ、或ハ雕刻シテ、國中ノ書ヲ讀ム程ノ者ニハ、不レ殘見セシムベシ、遠キ古ノコトヲ學ビナガラ、近キ吾國ノコトニ不レ通シテ可ナルベキヤ、之ヲ讀テ習熟セバ、政務ニ付テノ心得一方ナラヌコトナリ、且國君以下士大夫マデ、皆其行事ノ後ニ傳ルヲ觀バ、自ラ戒勵ノ志ヲ生ズベシ、今時儒生能文ノ人アレド

モ、皆ナグサミ事ノミニ文ヲ作リテ、少シモ國家ノ用ニ供セズ、是上ニ取用ヒ玉ハザル故ナリ、如レ是ノコトアラバ、文章始テ用ニ立ツナリ、記錄ノ文ハ漢文ニテモ、又和文ニテモ苦シカラズ、タダ文章能行屆キテ、事情如レ見ニ寫シ得ルヲ主トスベシ

或ノ曰、世間ニ一種ノ說アリ、天下ノ諸侯其國富饒ナル時ハ、或ハ亂ヲ企ルニ至ル、故ニ諸侯ハ貧シキニ如クハ無シ、是御公儀ノ意ヨリ出モノナリト、然ラバ富國ノ策ハ、トテモ行フベカラザルニ非ズヤ、答曰、其事ハ已ニ先哲ノ論辨セシ旨アレバ、今更言フニ不レ及、夫レ諸侯窮スレバ、下民ニ取ラザルコトヲ得ズ、下民窮スレバ、老弱ハ溝壑ニ轉ジ、壯者ハ相聚リテ亂ヲ爲スヨリ外ハナシ、天下ハ皆御上ノ物ニナルニ、諸侯ノ民而已ヲ困メ給フコトイカデアルベキ、又右ノ如クナレバ、亂ニ赴クノカタチハ現然タリ、イカデ左樣ノ淺ハカナル思召アルベキ、是全ク小人ノ腹ヲ以テ、君子ノ心ヲ料ルト云フモノナリ、且又國初ノ時ト今ノ時ト、天下ノ勢同ジカラズ、今ハ諸侯ヲ富シテ參勤ノカゲザル樣ニスルコト、要務タルコト是亦先哲已ニ之ヲ論ゼリ、夫良醫ノ疾ヲ治スル、其症ニ隨ヒ、實スルトキハ之ヲ瀉シ、虛スルハ之ヲ補ス、若實症ニ逢テ之ヲ瀉シ、一旦効ヲ得タリトテ、其後ノ症ヲ論ゼズ、專ラ瀉スル而已ナラバ、豈良醫ト云ベケンヤ、今諸國困乏已ニ窮ル時ニ當リテ、尙之ヲ貧スルノ法ヲ施スハ、極々虛脫ノ症ニ峻瀉ヲ用ルガ如キコトナリ、豈天下ヲ經スルノ良方ナランヤ、凡ソ諸侯ニ金ヲツカハシムルハ、都下ノ小役人、幷ニ商賣人、又江戶勝手ノ役人抔ノ利ニナル筋ナリ、故ニ種々ノ說

ヲ設ケテ其財ヲ散ゼシメ、歸スル處ハ御上ノ思召抔唱ルコト、勿體ナキコトナリ、且ツ諸侯タルモノ謀反セヌ而已ヲ奉公ト心得、事スムベキヤ、天下ノ武備ニ供スルコト、第一ノ務ニ非ズヤ、萬ニ一モ大阪島原ノ兩役、又蒙古ノ來リ襲ヒシ如キコトアラバ、貧窮ニシテ人馬ノ備、器仗ノ具モナクバ、何ヲ以テカ上ノ用ニ供スベキ、是不忠ノ甚シキニ非ズヤ、下々ノ風說トルニ足ザルコト如レ此

或曰、儒者ノ論ハ强テ日本ヲ漢土ノ風ニセントスル癖アリ、是以其言時宜ニ合ハズ、用ヒ難キコト多シ、　答曰、譬バ今新ニ家ヲ建ル者アリ、サシヅイカガスベキヤト問ハヾ、イカニモ十分此方ノ存寄ヲ申ベキナリ、若普請成就ノ上存寄ヲ問タリトテ、申スベキコトナシ、申ストモ思フコトノ十分一也、國ヲ治ルノ道亦然、開國ノ始ニ、此方ニ任セ存寄通ニ致ス可シトナラバ、イカニモ唐風ニモ、何風ニモ思フ通ニスベシ、制度已ニ定リ。且數百年ヲ經タル後ニ存寄ヲ問タリトモ、イカデ申シ出コト有ベキ、唯其時ノ急務ヲ少々存寄ヲ付ルノミナリ、但シ俗人ノ存念ト少シ異ナル處ハ、譬バコヽニ一ツノ家宅有リ、モト瓦葺ニモスベキ所ヲ茅葺ニ致シタリ、因テ程ナク漏ル樣ニ成レリ、卽其所ヲツクロフ、其後モ亦漏ルニ隨、追々ト手ヲ入レタリ、然ル所數百年ヲ經テ、今ハ屋根ノ茅一面ニ朽タリ、漏ル所數十ケ所ニ及ビ、家內ヲ傘ヲサシテ通行スル樣ニ成タリ、然ルヲ主人ノ心ニテハ、今迄ノ通リ少シ手ヲ入テスマサントスルトモ、中々其分ノコトニテハスマズ、家ヲ立テ易ルニハ及バザレドモ、屋根ノ分ハスベテ葺キ易ルニ非レバ不可ナリ、今ノ時勢是ニ似タリ、國初ノ時制度ノ吟味十分ナラズ、其後唯姑

息ヲ以テ一時ノ急ヲ救タルニ、今日ニ至テ困窮コヽニ極リタリ、今從來ノ例ヲ考タルノミニテハ、トテモ形々付ク樣ナシ、イヅレ舊例ヲ變ジテ新規ヲ起スコトアルニ非レバ不可ナリ、其新規百年以來見習ヌコトナル故、俗人ハ目ヲ驚シテ、唐流阿蘭陀流ナド言罵ルナリ、實ハ唐モ何モ有コトニ非ズ、何トナリト致テ國家ノ急ヲ救フマデノコトナリ、然ラズンバ人ノ國ヲ己ガ慰モノニスルト云モノナリ、豈仁者憂世ノ本意ナランヤ

日本ハ漢土ト中ニ海ヲ隔タレドモ、其地脉ハ相通ゼリ、天地ヨリ見レバ唯是同國ナリ、然レドモ其君同カラズ、制度一ナラザルヨリ、風俗ニ異同アリト雖ドモ、大本ノ人情ニ至リテハ、少シモ異ナルコトナシ、中古朝廷ヨリ漢土ニ音信ヲ通ゼラレ、彼方ノ道ヲ學デ、禮樂制度一々彼方ニ擬セラレタリ、其後太平久シク續キ、上タル人安佚ニ耽リ、文ヲ玩ビ武ヲ忘レタルヨリ、天下大ニ亂レ、武人下ヨリ起リテ、天下ヲ領スルニ至ル、然レドモ古語ニ、天下ハ馬上ヲ以テ得ベクトモ、馬上ヲ以テ治ム可ラズト云シ如ク、治國安民ノ術、武人不學ノ徒ノ力ニ及ブコトニ非ズ、故ニ賴朝三世・北條八世・足利十三世、前後四百年ニ渉レドモ、天下安寧ニシテ干戈ヲ見ザルコトハナク、專ラ爭亂ノコトノミナリ、東照神祖出玉フニ及デ、武ヲ以テ亂ニ勝チ、文ヲ以テ民ヲ安ジ、鎌倉以來ノ弊風ヲ改メ玉ヒテ、天下升平二百餘年ニ及ブコト、武家アツテヨリ以來未曾有ノコトナリ、是ハ漢土ニテ「周監ニ於二代一、郁々乎文哉」ト云シ如ク、鎌倉室町ノ武ノミニ任セシ弊政ヲ監セラレ、諸事文武ヲ兼用サセ玉ヒシ故也、然リ

ト雖ドモ物久キヲ經レバ必弊ヲ生ズ、周冕殷輅聖人ノ制ト雖ドモ、後世弊ナキコト能ザルガ如ク、今時武門一種ノ弊風ヲナセリ、今其弊ヲ補ントセバ、先ヅ武門ノ政ニ所長アリ、所短アルヲ知ルベキナリ、武門ノ所長ハ老子ノ見ニ似タルコト多シ、是必ズシモ老子ヲ學ブニ非ズ、自然ト相合ナリ、老子ノ術ハ「不下敢爲二天下一先上」ト云ヲ主意トシテ、一切ノコトニ此方ヨリ手ヲ出サズ、禮制ヲ立テズ、何ゴトモ舊來ノ例、或ハ下ヨリ願出ル旨ニ隨テ之ヲ取計ラフ、是武門ニ於テ第一トスルコトナリ、其他老子賢ヲ尙ビズ、武門モ亦門地ヲ論ジテ賢愚ヲ論ゼズ、老子學ヲ絕テ無憂トス、武門モ亦學問ヲ不レ貴、老子簡易ヲ貴ブ、「老子虛二其心一、實二其腹一、弱二其志一、强二其骨一」ノ說アリ、今ノ武士皆骨力壯健ナレドモ、虛心弱志ニシテ、少シノコトモ思慮工夫ヲ廻スコト不レ能、如レ是ノ類勝テ言盡シ難シ、老子ハ孔子ノ師ニシテ、他ノ諸子ノ及ブ所ニ非ズ、漢ノ文帝景帝專其學ヲ好マレテ、天下大ニ治リ、三代ト隆ヲ同セリ、我邦二百年來ノ升平モ亦之ニ近キモノナリ、但老子ノ學ハ、禮ヲ廢シテ制度ヲ立ルコトナキ故ニ、上ニ賢君アリテ、質素ヲ以テ下ヲ率ヰ玉フ時ハ、天下大ニ治ルト雖ドモ、若奢靡ヲ好ム君一タビ出ル時ハ、其制度ナキ所ニ乘ジテ己ガ欲ヲ縱ニシ遂ニ亂ヲ生ズルニ至ル、文帝景帝ノ後ニ、武帝出テ奢ヲ恣ニシ、天下疲弊セシガ如キ其弊ナリ、我邦ノ事勢モ亦之ニ相近シ、上ニ武帝ノ如キ君アルニハ非レドモ、二百年ノ久キヲヘテ、國初ノ時萬事質素ナリシ風、追々ト消エ亡セテ、奢靡誇張ノ風俗ヲナセリ、是初ニ制度ナキガ故ナリ、今其弊ヲ補ントナラバ、制度ヲ改メ始ルト云コトハ、時勢ニ於テ致シ

難レドモ、唯其制度ナキ内ニ於テ一種ノ小制ヲ始メ、洪水ノ出ル所ニ堤防ヲ設ル如キコトヲナスベキナリ、若夫レ程ノコトヲ致シ得ズバ、誠ニ拙キコトナリ、凡天地ノ人ヲ生ズルコト絶エズ、其内ニ賢才ノ者モ亦絶エズ、前人ハ前人ノ天職アリ、後人ハ後人ノ天職アリ、二百年前ノ君相タル人ノ天職ハ、亂ヲハラヒテ治トナスニアリ、今ノ君相タル人ノ天職ハ、治ヲ保テ亂ニ赴カシメザルニアリ、其職ニ當リナガラ手ヲ束テ之ヲ務メズ、國家窮スレバ罪ヲ前人ニ歸シテ曰、先格ナレバ致方ナシト、嗚呼今ノ政ヲスル人、罪ヲ先格ニ委ルコトナクンバ、國家安穩殷富ナルベキノミ

儒者ニ俗儒・迂儒・眞儒ノ三ツアリ、書ヲ讀マザル人トテモ、其品ノ分リタルコトヲ承知スベキナリ、俗儒トハ、古今ノ書ヲ博覧スレドモ、古ノコトハ今ト違ヒ、唐ハ日本ト違ヒ、貴人ハ平人ト違ヒ、聖賢ハ凡人ト違ヒタル故ニ、書物ノ中ニ有コトハ、一ツトシテ今時ニ取用ベキコトナシ、且唐メキタルコトヲ言ヘバ、俗人大ニ忌嫌フ故ニ書物ノ中ノ事ハ、見臺ニ向タル時ニ非レバ言ズ、平日ノ言行ハ、一々世俗ノスル所ヲミテ、少シノ出入モナキ様ニスル、是書ヲ讀タルノミニテ、少シモ俗人ニ異ナルコトナシ、故ニ是ヲ俗儒ト云フ、迂儒トハ、其一等上ニシテ、和漢古今同ジカラザレドモ、此方ノ仕方ニテ和モ漢トナスベク、今モ古トナスベキト云處ニ目ヲ付テ、平生ノ學トコロヲ今日ノ事ニ施ントス、然レドモ其才力不足智略不練スル事自然ト迂遠ニナリテ事情ニハヅレ、時宜ヲ失フ、故ニ迂儒ト云ナリ、眞儒ト云モノハ、又遂ニ其上ニシテ、已ニ和漢古今ノ同キ所ヲ知リ、又其異ナル所ヲ知ル、故ニ施シ

行フベキ所ハ是ヲ行ヒ、行ハレ難キ所ハ不レ行、其學問熟シ、其才知練タリ、平日ノ所行俗人ト異ナルコトナシ、故ニ俗儒ニ似タレドモ、其中ハ異ナリ、知己ニ遇ザル故、其存寄ヲツヽムナリ、若知己ニ遇トキハ、必ズ古ノ道ヲ以テ當世ニ行フ、其スル所俗人ノ目ヲ驚ス、故ニ外ヨリ見バ、迂儒ニ似タレドモ實ハ非レ迂、己ガ力量ト可レ爲勢トヲハカリテスル所ナリ、是古ノ所レ謂君子儒ト云モノナリ、當世ノ儒者、十ニ九ハ俗儒ナリ、其一ハ迂儒ナリ、俗儒ハ古今物理ノ異ナル所ヲ知テ、其同ジキ所ヲ知ラズ、迂儒ハ其同キ所ヲ知リテ、異ナル所ヲ知ラズ、皆一隅ヲ見ルナリ、其品ヲ論ゼバ迂儒ハ俗儒ヨリモ高ク、其害ヲ論ズレバ俗儒ハ迂儒ヨリモ淺シ、此ノ二ツノ者少シク可レ用シテ、大ニ不レ可レ用、一官ニ居シメテ其任ヲ責レバ害ナシ、國家ノ重任ヲ命ズレバ大事ヲ誤ルナリ、眞儒ハ百千人ノ中ニ、唯一二人ヲ得ベシ、其ニ非常ノ事ヲハカリ、國家ノ重ヲ荷ハシメントナラバ、眞儒ニ非レバ不可ナリ、故ニ國家ニ長タル人ハ、預メ此ノ三品アルコトヲ知テ、而後其擇ブ所ヲ知ベキナリ

迂言坤下雜論 終

迂言附錄

迂言ノ中ニ、庶民ノ奢靡ヲ禁ズルノ方ヲ言リ、其說未詳ナラズ、ヨツテ數則ヲ錄シテ、之ヲ補フ者也

廣瀨建

總論

ツラ〳〵國家ノ興廢ヲ考ルニ、治極レバ亂ニ入リ、亂極レバ治ニ入ルコト、寒暑晝夜ノ常數アルガ如シ、其故ハ治極レバ、安佚ニ耽テ奢靡ヲ生ジ、奢靡極レバ困窮ヲ生ジ、困窮極マレバ爭亂ニ及ブ、又亂極レバ苦痛ニ堪テ儉約ヲ生ジ、儉約極レバ豐饒ヲ生ジ、豐饒極レバ治平ニ及ブ、然ラバ奢靡ハ亂世ノ源、儉約ハ治世ノ媒ナリ、國家ヲ有ツ者、奢ヲ戒メ儉ヲ勸ルノ務、豈一日モ忘ルベケンヤ、是レヲ以

上ヨリ屢儉約ノ號令ヲ下シ玉フ事ナルニ、如何トモシガタキハ、庶民ノ愚ナル習シニテ、有ルニ任セテ奢ヲ事トシ、上ノ令ヲ犯シ、剰ヘ上ヲ怨ミ罵ルニ至ル、是猶夏虫ノ燈ニ付ヲ人救ヒ出セドモ、又飛來テ終ニ燈油ノ中ニ命ヲ失フガ如シ、下愚ノ至リ、哀哉、抑號令嚴ナル時ハ、愚民ト雖ドモ刑罰ヲ畏ル丶故ニ、暫クハ其禁ヲ犯スコトナシ、然レドモ上タル人少シク怠リテ、其禁弛ブコトアレバ、漸々ト舊ニ復シ、數年ノ後ニハ、其弊俗又以前ヨリモ倍スルニ至ル、譬バ水ヲセキタル其防ギ□ル、時ハ、水勢平常ニ數倍スルガ如シ、是以俗ニ公儀ノ三日法度ト云フテ、深ク畏ル丶コトナシ、故ニ一時儉約ヲ行フハ難キコトニ非ズ、唯永久相續スルヲ以テ難トス、若永久相續セントナラバ、奢ニ流レズ、儉ニモ過ギズ、中庸ノ所ヲ取リテ制度ヲ定メ、之ヲ守ラ使ムルニ如クハナシ、聖人ノ語ニ、「民可レ使レ由レ之、不レ可レ使レ知レ之」トアリ、儉約トモ奢トモイハズ、唯ヨキ程ニ制度ヲ定テ、民ニ守ラシムルハ、使レ由レ之ナリ、制度ヲ定メズシテ、言語號令ニテ儉約ノ理ヲ得心サセ、民ノ心ヨリ行ハ使メントスルハ、使レ知レ之ナリ、是聖人ト雖ドモ能ハザル所ナリ、故ニ今竊ニ自揣ラズシテ、古人ノ遺意ヲ考ヘ、制度ヲ定ルノ說ヲ左ニ錄ス

三戸

制度ヲ定ントセバ、先ヅ民ニ差等ヲ立ベキナリ、古ノ時ハ庶人ノ上ニ格別ノ差等ハ無シ、コレハ庶民ノ田地屋宅皆定數有リ、上ヨリ渡リタル物ニテ、私ニ賣買增減スルコトヲ得ズ、故ニ民ノ身代少シノ貧

富ハ有レドモ、大抵同等ナリ、後世ニ至テハ、和漢共ニ豪强兼幷ノ習ヒ起リテ、其富ル者ハ王侯ニモコエ、貧者ニ至ハ立錐ノ地ナシ、故ニ齊ク庶人ナレドモ、自然ト貴賤高下ノ差等ヲナスコト、人君ト奴僕トノ如シ、然ヲ上ヨリ見レバ、畢竟庶人ナリトテ、之ヲ同一ニスルコト、勢ノ行レザル處ナリ、且富ル者ハ上ノ用金ヲモ調達シ、凶年非常ノ變有レバ、不足者ヲ賑スノ功アリ、然レバ其身ニ於テモ衣服居宅ナド少々自由ヲ致シタリトモ、苦カラヌ事ナリ、貧ナル者ハ村中町中ノ厄介ニナル事ハアレドモ、上ノ爲メ人ノ爲メニナルコトハ無シ、然レバ平日ノクラシカタ、富者ト同樣ニスル理ナキナリ、此處ハ上ニモ一向慮ナキニハ非ズ、故ニ身分相應ノ諭告アレドモ、定制ナキコトナレバ、人情少シニテモ人ノ上ヲ行ントト思ヨリ、貧民モ富民ノ眞似ヲスルナリ、左スレバ富民貧家ト一列ニナル事ヲ耻、又其上ヲ行ントス、是風俗日々奢靡ニ趣ク所以ナリ、故ニ其階級ヲ嚴ニシ、少シモ等ヲ越ルコト叶ハザル樣ニ定レバ、人ノ眞似ヲスル弊俗、自然ト息ベキナリ

古ヘ民ニ上戸中戸下戸ノ三等ヲ別ツコトアリ、酒ヲ飲ム者ニ其稱アルモ、其名目ヲ假リ用ヒタル者ナリ、今時ノ所ニテハ、此ノ三ツヲ以テ、衣服其外ノ制度ヲ定メ然ルベキナリ、且ツ又古ヘ社倉・常平倉等ノ名目アリテ米穀ヲ貯ヘ、非常ノ用ニ供フル法アリ、今時モ貯ヘ穀ト云コトアレドモ、名アリテ實ナキコト多シ、因テ三戸ヲ別ツ次ニ、其法ヲモ建立スベキナリ、三戸ノ法、三都ナドノ豪商・富民極メテ多キ所ハ、猶外ニ良方アルベシ、先ヅ村戸又在町ノ爲ニ、其說ヲ立ル者ナリ

富ル者ハ少ク、貧ナル者多キハ、理ノ常ナリ、故ニ千戸ノ町ナラバ、大略下戸八百、中戸百七十、上戸三十ト云ホドナルベシ、故ニ下戸ヲ通例ノ民家トミルベキナリ、制度ノ法、下戸タル者ハ少シノ絹布モ用コトヲ許サズ、紋付ノ服ヲキルコトヲ許サズ、夏羽織・袴・脇指ノ類一切之ヲ禁ズベシ、下戸タル者、其家富ム時ハ町役ニ願ヒ出、中戸ニ轉ズベシ、其時冥加金ヲ出シテ、米十五石ヲ買ヒ社倉ニ寄付スベシ、既ニ中戸ニナリタラバ、絲入縞、并ニ夏羽織ヲ許シ、又衣服ニ紋ヲ許スベシ、其紋ハ家ノ定紋ニアラズ、中戸ト云シルシナリ、因テ◎此ノ如キ者然ルベシ、門ノ柱ニ、屋號并ニ主人ノ名ヲ表札ニカケ、其上ニ此ノ紋ヲシルスベシ、下戸ハ表札ヲ小ニシテ、主ノ名ノミヲ書キ、紋ト屋號トヲ用ニベカラズ、中戸タル者其家マス〳〵富時ハ、又町役ニ願ヒ出、上戸ニ轉ズベシ、其時ハ米三十石ヲ社倉ニ寄附スベシ、服ハ紬ノ類絹布ノ下品ヲ許シ、袴脇指ヲ許スベシ、其紋ハ⚭重環シカルベシ、是二等ヲ加ヘタルシルシナリ、是モ表札ニ出スベシ

右ノ三戸ミナ町役ノ方ニ帳面ニ控ヘオキ、平日出會ノトキ、上中下家格ヲ以座列ヲ定メ、少シニテモ之ヲ亂ルベカラズ、サテ右ノ法主人一世限リニスベシ、中戸タル者主人死スルカ、隱居シテ其子當主トナラバ、其時又米十五石ヲ出スベシ、若其手當テナクバ、暫ク下戸ニ貶シ、米ヲ納テ後中戸ニ復スベシ、上戸ハ家督初メニ三十石ヲ納ムベシ、若シ能ハザル時ハ、暫ク中戸ニモ下戸ニモ貶シテ、米ヲ納メテ後舊ニ復スベシ

右衣服ノ制ハ、主人ノ一身ヨリシテ、ソノ女房・嫡子・隱居・夫婦マテハ、主人同樣タルベシ、次男以下及女子ハ、上戶中戶下戶ヲ分タズ、皆下戶ノ通ナルヲヨシトス、若隱居中戶ニテ當主下戶ニ落タルハ、隱居夫婦ハ中戶ノ服ヲ用ユベシ、隱居上戶當主中戶ナルモ亦然リ、凡ソ奢靡ノ源ハ皆婦人ヨリ起ル、故ニ必ズ家格ノ通リヲ固ク守ラシムベシ、妻ノ服ニモ夫ノ紋ヲツクベシ、若男子ノ紋不相應ニアラバ、何ナリトモ上中下三等ノ別チヲ、服ノ正面ニツクベシ、其他櫛簪ノ類、皆三等ニ分ツベシ

中戶以下ハ婚禮・葬禮・年頭等ノ表立タル儀式ニモ、決テ上下ヲ着シ、脇指ヲ佩ルコト致スベカラズ、下戶ニ於テハ羽織モ亦然リ、但シ羽織ハ身ヲ溫ル爲ニハ、綿入羽織ヲ許スベシ、是ハ紋ヲ付ズ、又紐ヲコヨリナドニ致シテ是ヲ分ツベシ、又五十以上身衰ヘ寒氣ニタヘザル者、下着ニ帛物ヲ用ルコトヲ許スベシ、必ズ上ニ出スベカラズ、若制度ヲ犯スコトアラバ、罰ヲ施スベシ、其罰他事ニ非ズ、輕重ニ從ヒ社倉米ヲ寄附セシムベシ、是ハ罰ノ爲ナレバ、升進ニハナラズ、如此スレバ、利害眼前ニ明白ナル故ニ、吝嗇ノ徒モ皆寄附米ヲ心掛ルナリ

里正村長ノ類ハ、中下戶タリトモ上戶ニ準ズベシ、組頭ハ下戶タリトモ中戶ニ準ズベシ、モシ役儀ナクテ苗字ヲ許サルヽ者アラバ、平日ハ役筋ノ者ヨリモ上席タルベシ、公事ノ時ハ下席タルベシ、上戶ニテ組頭ヲ勤メザル者モ、亦此例ヲ以テスベシ

屋宅ノ制ハ廔改メカユベカラズ、故ニ三等ノ差別ヲタテズ、唯門柱ノ表札ニテ之ヲ別ツベシ、且衣服

萬端ニツキ、上下ノ別已ニ明ナル時ハ、分ヲ越テ屋宅ノミヲ高大ニスル望ミナシ、故ニ制ヲ立ズトモ自然ト分限相應ノ所ヲナスベキナリ

名器

今時ノ俗庶人タル者、勝手ニ苗字ヲ名ノリ、袴ヲ着シ脇指ヲ帶スレドモ、嘗テ其禁ナシ、政ヲスル人ノ心ニ、是ハ奢靡ノ筋ニモ非ラズ、富民ノ上ニテ其分ノコトハ害ナシトナリ、是古ヲ稽ヘザルノ過ナリ、聖人ノ言ニ、「唯名與レ器不レ可ニ以假ヒ人」トアリ、名ハ、稱號也、苗字是ナリ、器ハ衣服類諸具ナリ、袴脇指是ナリ、假トハ、元來其人ノ身ニ相應セヌコトナレドモ、當分カシオクト云意ナリ、凡人ノ奢ヲナスハ、己レガ耳目口腹ノ慾ニ供ユル爲ノミニハアラズ、人ニ勝ンガタメナリ、故ニ衣服ハ己レガ目ヲ悦シムル爲メナラバ、平日美服ヲ用ユベキ事ナルニ、家居ノ時ハ粗惡ノ品ヲ用ヒ、外出ニハ美ヲ盡ス、飲食居宅亦シカリ、皆人ニ誇リ示サンガタメナリ、故ニ何品ニヨラズ、人ノ尊ブ所ニ目ヲ着ルコト人情ナリ、若紋付ヲキタル者ハ、イカナル粗服ヲキタリトモ、無紋ノ者ヨリハ上座ニ定ムル時ハ、人皆美服ヲ顧ズシテ紋付ヲ願フベシ、袴脇指ヲ用ユルハ、庶人ノ最上ト定ムル時ハ、今マデ衣服・居宅・娼妓・俳優ノ爲ニ擲シ財ヲモ、儉約シテ社倉米ヲ寄附シ、其格ヲ求ムルナリ、故ニ苗字・脇指・袴・羽織ノ禁嚴ナレバ其位貴シ、其位貴トケレバ、人皆美服・美食・美宅ヲ捨テ其方ニ趨ク、是奢ヲ禁ゼズシテ奢ヲ止ルノ妙法ナリ、兵法ニ、避レ實擊レ虛ト云コトアリ、實トハ敵ノ心掛ル方ナリ、虛トハ敵ノ油斷

シタル所ナリ、喩バ敵我出城ヲ圍ムコトアルニ、之ヲ救ハズシテ敵ノ本城ヲ襲フナリ、左スレバ我城ノ圍ハ自ラ解ルナリ、政ヲスルモ亦然リ、奢靡ハ民ノ所レ病ナリ、專ラ之ヲ抑ユルハ實ヲ擊ツナリ、勞シテ功少シ、格式ハ民ノ食着セヌ事ナリ、其方ニ手ヲマハセバ、自然ト今マデノ所ヲ離レテ其方ニ赴クナリ

苗字帶刀ハ、庶人分外ノ事ナリ、然レドモ功ニヨリテハ許サルコトアリ、但米穀金錢ノ員數ヲ以テ定ムベキコトニ非ズ、非常ノ功德アラバ之ヲ許スベシ

醫　師

醫師ハ、僧家同樣ニテ、諸事制外タルコト、御公儀ノ定メナリ、然ラバ三戶ノ制ニ拘ルベカラズ、苗字・脇指・絹布・羽織等之ヲ用ユベシ、席順ハ平日ハ上戶ノ上席ニシテ、公事ノ時ハ役筋ノ者ノ下ニツクベシ、凡ソ人ハ上輩ニアヒシラヘバ上輩ニナリ、下輩ニアヒシラヘバ下輩ニナル者ナリ、醫ハ司命ノ職ニテ其任重シ、氣象卑劣ナル時ハ其任ニ堪ヘズ、故ニ三戶ノ制ヲ亂ルニ似タレドモ、暫ク國俗ニ從ヒ之ヲ制外ニ置クベキナリ、但シ國ニヨリテハ、醫師ハ村野ニアリテモ土民ノ數ニ加ヘズ、諸事別格ニセシ所モアルナリ、如レ此ナレバ沙汰ニ及バヌコトナリ、今我說ハ制外ナガラモ、身分ハ里正・組頭ノ支配ニ屬シタル中ニ於テ、其差別ヲ立ルナリ

醫師數多キコト、當時ノ弊俗ナリ、醫師多ケレバ病家少ク、活計ナリガタキニヨリ、本業ヲ指置幇間

ノ業ナド勤ル者多シ、且病人ヲ經ルコト少ケレバ、其技老練スベキ樣ナシ、故ニ其株ヲ定メ新家ヲ始メヌ樣ニスベシ、大抵百五十戸ノ地ニ醫師一人ト定ムルトキハ、千五百戸ニ十人、一萬五千戸ニ百人ナリ、如レ此ニシテ其方角ニ付テ組ヲ立ツベシ、醫業ハ幼少ニテハ勤マラヌ者ナレバ、其株必缺ルコト多シ、其時ハ其組中ニ名目ヲ預リ置、他方ヨリ入リ醫、又ハ新ニ醫トナル者アラバ、其株ヲ買セ、其苗字ヲ相續セシムベシ、カクノ如スレバ、醫ノ數フエズ、且由緒正カラヌ醫者ナクテ宜シカルベシ、醫師ハ制外トハ申ナガラ、三戸ノ制既定リタル所ニテハ、一錢ヲ費サズシテ上戸ノ上席トナル事、衆人ノ服セヌ處アルベシ、且株ヲ定メ他人ヲ禁ズルコトナレバ、少シハ運上ヲモ出スベキ理アリ、因テ冥加ノタメ年々米一石宛ヲ社倉ニ寄付スベシ、サスレバ三十年ニハ三十石ニ及ブユヱ、自然ト上戸同樣ニナル理ナリ、是ハ其本業ヲ出精セシメンガ爲ナリ、モシ家貧シテ其手當ナリガタキハ、極々流行ラヌ醫者ナリ、其拙技モ亦知ルベシ、如レ此ハ其株ヲ賣リテ變業スルニハシカズ

社倉

社倉ノ法ハ、和漢舊例アルコトナレドモ、今吾言フ所ハ、三戸ヲ別ンガ爲ニ米ヲ寄附セシメ、其米ヲ貯ヘタル處ヲ社倉ト名附ルナレバ、古ヘノ社倉トハ、名同シテ實ハ異ナル者ナリ、故ニ古法ニ拘ラヌ新制ヲ立ベシ、其法ハ先ヅ然ルベキ者ヲ擇テコレヲ司ドラシメ、寄附米有ルニ從ヒ之ヲ帳面ニ錄シ、一年ニ一度ヅヽ之ヲツメカユベシ、イツモ直ヒ高キ時ニ賣リ拂ヒ、卑キ時ニ買入ベシ、サスレバ少々ヅ

上下富有の議 幷土着の議

藤田東湖 著

國に三年の蓄なきは、國其國にあらずと相見え候處、連年の凶荒故とは乍レ申、御貯金穀御手薄の儀は、委細御承知被レ爲レ在候通りに而、當年十分の豐作に、而かも莫大の御不足相立可レ申候間、御勝手の儀は、是非御取直しの御仕法不レ被レ遊候ては不二相叶一儀、扨又衣食足而知二榮辱一と相見え候處、御家中の儀多くは今日の飯米にも差支候程に御座候間、是又何等歟御仕法不レ被二下置一候而は不二相叶一候得ば、尊慮の通り此所より御手を下し不レ被レ遊候而は、何事も思召のみに而、御行屆には能成兼候半奉レ存候、扨上下富有の政と申而も、不思議なる妙計奇策は有レ之間敷儀に奉レ存候、世上に而は金銀を貯へ候を富有と心得候得共、金銀は萬物を融通仕候爲めに而、諸品さへ御座候へば、金銀は誠に不用の者に御座候へば、金銀は客にて諸品は主に御座候間、右諸品一として土地より生ぜざるもの無レ之、土地より生候もの丶内、五穀を第一の寶と致し候へば、富國の政は勸農を第一と仕候儀、申上候迄無二御座一候

一　富國の政は勸農を以て第一と仕候事も、誰も存じ辨へ候事に候得共、年中衰弊の鄉中、如何程御

世話被レ爲レ在候迚も、一朝一夕に引立可レ申筈無レ之存候とて、此儘御打過被レ遊候而は、御勝手彌增々跡くりに罷成候間、勸農の儀は幾重にも厚く御世話被レ遊、御勝手の儀も差當り、只今の所に而御仕法不レ被レ遊候而は、不ニ相叶一御事に奉レ存候處、是以て外に不思議なる妙計奇策は有ニ御座一間敷奉レ存候、理財の書にも、財用を理するの說數多御座候得共、つゞまる所は量入爲出の四字、至極の肝要と奉レ存候、享保年中成公樣御代迄は、御藏入籾三十二萬俵にすぎ、代方等の金四萬五千兩にすぎ候處、近來に至候而は、御藏入籾十八萬內外、金四萬兩程のならしに罷成候間、右平均の金穀に而御入用を組立候儀、卽ち量入爲出の法と奉レ存候

一　御收納の金穀を本に致し、御勝手の規矩を組立候儀、誰も存じ辨へたる事に御座候得共、中々其通りに而申樣には成し兼候と申事に相成居候所、左候而百石の御家中に而二百石のくらしを仕り、五百石の家に而千石の入用御座候と同じ姿に而、いつ迄も勝手取直し目當無レ之のみならず、益跡繰に罷成り候道理と奉レ存候、尤御勝手の元拂は、御勘定奉行持前に御座候間、拂方相過し不レ申樣、精々骨折候樣子に候得共、是迄の姿に而は量入爲出とは申し難く、量入減出と申位の事に御座候、御勘定奉行迚も、爲出と申所へ心付ざる筈は無ニ御座一候得共、中々一役の力に及び兼候儀故不レ得レ已少々づゝも出を減候工夫のみ仕候儀は無理に無ニ御座一候、一體手づから金銀の取扱等仕候は、大臣の職に無レ之段勿論に候へ共、御勝手總體の〆くゝり仕候儀は執政の職分に而、既に周の世に而は、家宰國用を制

すと相見え、公邊にても御老中に而御勝手を心得、御家に而御年寄の持前に御座候間、量入爲出の仕法に至候而は、御勘定奉行等一役の力に及び兼候のみならず、御勘定奉行のみに而取扱候筋には無レ之儀と奉レ存候間、何とぞ御年寄に而國用を制し、隨而御勘定奉行始め、小役人夫々其職に存分踏込相勤候樣仕度ものに御座候、只今の姿に而は量入爲出の目當は無レ之、下々小役人持前の事まで皆伺筋と相成り居、瑣細の事迄御年寄の下知を受候上取扱候樣相成居候間、少しく筋の下知ゆるみ候得ば、諸向の取捌ゆるみ候樣に而御模通り不レ宜、尤御取締御儉約と申す儀は一統相心得居候得共、其弊に至りては意地ぎたなく相成居候故、悉く御取締の樣なる內に、殊の外御不益相立候類も有レ之候間、御儉約も久敷もの抔と口に出し、誹謗仕り居候向も相見申候、誹謗仕候而は不レ相濟レ候得共、吝嗇なることをも御儉約と相心得、何事に寄らず、御時節柄との事に而下々を押付る姿故、誹謗被レ致候而も實に申譯無レ之事も相見え、詰る處皆上の御不德と相成候段、何共殘念千萬奉レ存候間、何卒義と利の境相分り、儉約吝嗇の差別相立、人々心服一致仕候而、存分に相勤候樣仕度ものと奉レ存候

一　量入爲出と減出との差別は、一ヶ年御用途を此方より割付候てこそ爲出とは可レ申候、御用途有レ之候度毎に、其入用の內を減候を減出とは可レ申候、（減出と申義古語に有レ之義には無二御座一、全く爲レ出と申字面へ對し、かりに只今の姿にて減出と申す字を名づけ論候儀に御座候）譬へば客を招き候程の手當有レ之時は、兼約の分は勿論臨時に客を招き候而も、兼而手當有レ之ゆゑ差支不レ申、扨手當無レ之時は、一切客をば招き不レ申、縱ひ先方より參り候とも、一切斷りに及び候樣

に仕候を、爲出とは可レ申奉レ存候、減出は夫とは違ひ、何程手當有レ之候而も、此方より一切招き不レ申、客の方より參り候得ば、其度毎にあいしらひ、酒食饗應等夫々差略を加へ候ゆゑ、年中本式の饗應も出來不レ申、客も氣受不レ宜候得共、此方に而は彌張り勝手の不益は不レ少候、物事右の類に而出を減候のみに而は、人々氣受も不レ宜候上、儉約も屆き不レ申、出を割付候へば儉約も屆候上、面々氣受も存之外宜き道理に御座候へば、是非量入爲出の御目當相立候樣仕度ものに御座候

一　量入爲出の儀經書に相見え候得共、經書の樣に許りは出來兼候とも可レ申候へ共、經書のみに無レ之、古今の賢君・良相國用を制し候に、少々の異同は御座候とも、つまる所量入爲出の四字にとゞまり候樣奉レ存候、南龍院樣は言行錄の内に、碁盤の圖御工夫の事、左の通り相見え申候

宮地文右衞門は九郎太郎と申せし時、鐵炮を鍛錬し、筆勘妙を得、智才拔群の器量を御覽じ、御召出し奉行職に被二仰付一候、其上賴宣卿御工夫を以て、碁盤の圖と申繪圖を被レ成、五色八色にさいしき、御領國納米の總高を擧げ、兒を四ッ五ッ六ッと極め、第一御家中知行切米、第二に江戸御參勤上下の御入用、第三在江戸の入用、第四所々の御普請、第五に御臺所入用、第六に御鷹初御能御止宿の御鷹野、ヶ樣の品々をわけて、御普請御作事ある時は、外の御入用を減じ、又御加增御金可レ被レ下年は、又御普請御作事を止、あなたこなたを入合せ融通せしゆゑ、御勝手に增減の手品有レ之、總而御身體すわりて、御勝手に御つまり被レ成候事曾てなく、御一代御自由に御座候事、御工夫の碁盤

づもりの故なりと、久右衛門入道昔物語を致しけるとかや

南龍公の御英明は不レ及ニ申上ニ候處、一寸奉ニ推察ニ候而は御勝手向の事には御搆ひも被レ遊間敷御方樣の樣奉レ存候へ共、右之通り御勝手の御規格御立被レ遊候段奉ニ感服ニ候も恐多き御事に御座候、これ即ち量入爲出の御意味に御座候間、何とぞ右御良法に御本づき被レ遊、御領中高何十萬石の內、何萬石は御家中の知行御切米、殘高何萬石の內に而年中の御用途を組立、當年の豐凶により、來年の御普請金何程、御買物代何程、其外夫々割付、何れも其職々へ御任せ、人々御爲を自分の事の如く身に入相勤、尤非常臨時の御手當は、又別に引分け置、凶荒軍旅等の御備、行々相立候樣仕度ものと奉レ存候

一　量入爲出の御法、大圖右の通に而可レ然候處、御家中の祿高只今の通り不平に而は、御見通し相立不レ申、當時御家中の地方知行七萬石餘、（外に二萬石餘、備前守知行）物成も七萬石餘に相見候得共、地方は御藏入同樣、豐凶により收納動きは有レ之候へ共、年々七萬石は七萬石に而、上より別段には不レ被ニ下置ニ候處、物成は豐凶に拘らず、三ツ八分の厘に而被ニ下置ニ候ゆゑ、昔と違ひ御藏入の厘割より餘程よろしく候間、名目は七萬石程に而も、實は御藏入より御補ひ被ニ下置ニ候割合に有レ之、御家中の祿何萬石と御見通しも不レ宜候、右を平均仕候說は、委細末に可ニ申上ニ候

一　御家中の祿不平無レ之樣被レ遊候上には、御家中人別祿高夫々御定め被レ遊候儀、御軍制の根本と奉レ存候、御家中祿高に應じ御軍役相勤候は、百姓の持高により年貢を納候と同樣に御座候間、人別祿高

一ト日に相分り候樣に無レ之候而は、御武備は難二相立一、隨而御勝手の規矩も相立不レ申候、一家の事に而論ずるに、一年の暮し方は祿高何程に而、上下何人と申す所より工夫仕候儀に御座候、如何なる不始末ものにても、我家の上下人別何人、下男女給金何程と申す儀を心得不レ申者は無二御座一候、一國の儀は取調べ可レ然筈に御座候處、御家の儀に而は如何に候哉、近來の姿に而は、御家中總人數何人、祿高何萬石と申す御定も無レ之、死亡・斷絶・減祿・又召出・御加增・御足目等、年々月々動き有レ之候へ共、全く自然に任せ置、上は御年寄始め、下は小役人に至るまで、總人別總祿高の員數を心得不レ申、御證文並御黑印帳抔を見候へば、其年々に被二下置一候丈けの祿は相分候へ共、何百石の士何人と申す儀急には不二相分一、御規式帳を委細にかぞへ候得ば、御家中當主の人別は相分候へ共、總領次男三男は勿論、家來又者等に至りては更に相分り不レ申候ゆゑ、御家中軍役の目當一向相立不レ申、乍レ憚武家の御制度にはあるまじき儀と奉レ存候、然る處御家中人別改の儀、先頃御目付共へ御下知被レ爲レ在候由、右等の處へ被レ爲二思召付一候儀と乍レ憚奉二感服一候、迚もの儀吟味役にも懸りを命ぜられ、上萬石より下御切符迄祿高御改の上、譬へば千石何人、八百石何人、五百石・四百石何人々々と、諸士の定數御極め、祿高により家來の人數、右よりも輕く御定、尤輕く御定被レ遊候上は、是迄の備ひ人等は、一人たりとも御軍制には不二相用一候樣相成候はゞ、御家中何人、陪臣何人、都合何千何百人と申す儀は、帳面に而一ト目に相分り、且實に右人數は揃ひ居候間、いつ何時御近領等騷動有レ之候迚も、速に出張も罷成り

可レ申、上下勝手取直しと申儀も、畢竟御武役の爲めに御座候處、是迄の通り御軍制無差別に而は、御鹿狩にこそ備ひ人召連れ、賑々敷は相見可レ申候處、眞の人數に至候而は何程も無レ之、百石取も旦那一人、二百石取も旦那一人と申す姿に御座候へば、御家中の祿は取とくにて、譬へば大高持の百姓も小高の百姓も同じ年貢を納候如くに而甚不相當なる事に御座候、御家中地方物成合せて十六萬石にすぎ可レ申候處、中山備前守始め其主人のみに而は、上二萬石より下五十石まで、僅に五百人餘に相見え申候、其内に而戰場迄も召連れ候家來を持候族は、中山・山野邊・鈴木・松平の外は何程も有二御座一間敷、尤五六百以上の家に而は、夫々聢と仕候家來も相見候得共、是以何程も無レ之候へば、必死の場合に臨候へば、前書十六萬石餘の御家中に陪臣を加へ候而も、千人ならでは御用に相立候人數有レ之間敷候、僅に千人の軍役の爲に十六萬石餘の祿を被二下置一候樣に而は、萬人の軍役には、百六十萬石無レ之候而は不二相成一割合に而、あまり如何敷儀に御座候間、十分祿高に應じ御軍役御定め被レ遊候はゞ、輕く被二仰付一候而も、一倍は人數相增可レ申奉レ存候、尤御家中人別祿高御定め被レ遊候上は、右人數の内斷絕仕候もの御座候節は、必別家御取立、又は新規御召抱等被二仰付一、減祿上り知等出來候節は、必御加增等被二下置一、すべて御家中の祿は、御國の御軍役と御見通し被レ遊、御軍役は第一の御勤に御座候間、御家中の祿と御定め被レ遊候分は、一石一錢たりとも、御勝手へ御寨し込み不二罷成一樣被レ遊可レ然筋と奉レ存候

但本文御家中の祿と御定め被レ遊候分は、御手不レ被レ爲レ付候樣にと申す儀は、既に往古も右の意味と相見え、御家中斷絶等上り知は、御役金奉行收納仕候古法と承り及候間、只今の如くに御勝手へ御くらし込には不二罷成一儀と奉レ存候、藤堂氏の先祖高虎の定めも、家中の祿は定め置、賞罰共に有員數の中に而融通仕候ゆゑ家中相勵み、行狀人馬等相嗜候趣も、古記に相見え申候事

中村與一左衞門淑穆執政曰、本文御家中の祿と御定め被レ遊候分は、一石一錢たり共、御勝手へ御遣込み不二相成一樣のヶ條確論と奉レ存候、但書の通り御家中上り地は御役金奉行收納、籾は御藏方收納に、此節より被レ遊候樣奉レ存候

一　御家中人別祿高を御定め被レ遊候はゞ、年々暮春の御慰勞是迄の通には被二下置一兼候間、是迄迚も心付候人は御座候而も、無レ據打過候事と相見候得共、一體何年目御加增、何年目本知と申す儀は、是迄の御定には御座候へ共、其年數には當人々々心待居候ゆゑ、被二下置一候ものは當然と相心得、不レ被二下置一候へば不平と存候樣相成居候間、實は是迄の見合に不レ拘、前件の通祿高の明き御座候時に、才器勤勞等御吟味の上、夫々御慰勞被レ下候而よろしき筋に御座候へ共、物事御規定無レ之儀は流れ易く候間、御慰勞の儀は彌張り是迄の前振を斟酌仕り、不相當の儀は御改被レ遊候而、御目當相立居候方可レ然奉レ存候、是迄の前振り、閑暇なる役に而も御加增早く、繁勤の場に而も御慰勞薄きと申す類も有レ之、杓子定規には御座候へ共、年來きまり御座候ゆゑ、萬々一不正の御役人事を拔候迚も、十年と申す前振を、三年に而被レ下に取扱候儀は不二相成一、先づ御前振の内に而、早き例を用候位の事に御座候、左候へば杓子ながらも定規有レ之候ゆゑ、不正の御役人も私欲を致し兼候、然る處杓子定規なりとて、一概に打破り以來は、拔群の者へのみ御慰勞と罷成候へば、後々に至り候而は、無法の濫賞等行れ候樣成行候患も御座候間、本文の通

り前振を斟酌仕候方とは申上候事に御座候、抵宜敷事に而は新法は服し兼、扨又大抵不都合なる儀に而も、舊法は人々心服仕り候儀、御慰勞には限り不レ申樣奉レ存候　扨家中諸士以上斷絶等無レ之內は新規召出無レ之、上り知無レ之內は御加增等無レ之樣に而は、是迄よりも御慰勞大きに後れ可レ申樣に候へ共、平均仕候はゞ、是迄と格別の相違は有レ之間敷奉レ存候

御下ゲ札定り御慰勞相止、勤行に據て被レ下候とも、不正の行致候儀は申立兼候事と存候、何程先例等有レ之ても、今助に五百石被レ下金鄕士出來候日には同前也

與一左衞門曰、御筆御札御尤に被レ爲レ入候へ共、本文細字に認候通り、後來濫賞難レ計奉レ存候間、御舊法により早晩斟酌仕候而御行穩と奉レ存候

一　春暮御慰勞の儀、是迄は五ヶ年十ヶ年目と定り有レ之候得共、人別祿高の動きを待候樣に而は、動きの遲速により、御慰勞の遲速出來候而、幸不幸有レ之樣に候へ共、是迄の姿にかけはなれ了簡仕候へば、左樣にも有レ之間敷、一體御家中の身の上は、すべて上の被二仰付一次第とは乍レ申、一ッには運と申すもの有レ之、既に御役がへの儀は、上下一統缺席を待居候事故、同じ祿高同じ役儀にて、或は四五年に而進み、或は七八年乃至十年餘に而進み、兩番に明き無レ之內は、御進物番より轉じ候事不二相成一、御進物番動き無レ之內は、御馬廻進み兼候事に相成居、甚遲速幸不幸有レ之候へ共、人々あきらめ居、誰は早く進み仕合なり、誰は遲く不仕合なりと申す迄に而、不幸には存候へ共、不平とは存じ不レ申候、祿高の事も明き知無レ之內は、不レ被二下置一ものと相成候へば、彌張り御役替同樣に而、上を御恨み申

候樣の儀は有之間敷候、是迄は祿に御定め無之候ゆゑ、御慰勞の評議も可成丈け祿を御をしみ、御加增に而よろしき所とも、まづは御足目と相成り、御足目被下可然にも、御格式又は御褒美等ときざみ候事も有之、御取立ものは可成丈ふゑ不申候樣に罷成り居、諸向勵み薄き氣味も御座候へ共、御家中の祿と御定め被遊候分は、少々たりとも上に而御勝手へ御遣ひ不被遊候樣罷成候へば、却而諸向引立候樣にも可罷成奉存候

一　御家來の祿高等大意右の通に而、御定め相立可申候間、殘り何萬石に而御連枝樣方御始め、御方方樣方御合力被遊、又其殘に而諸御用途を組立候儀は、御勘定奉行持前に而取調候はゞ、種々御良法可有御座候間、彼是委細には不奉申上候

但本文にも申上候通り、是迄の姿は諸向の御用途すべて筋何之上取扱候故、御入り合は宜き樣に候へ共、人々身に引受け候而了簡不仕候間、存の外御不益相立候儀も御座候樣奉存候間、御勝手の規矩相立候はゞ、諸役向等何れも御任せに相成候而は如何可有御座哉、是等は得と其筋に鍛錬の者へ御掛被遊候樣奉存候

一　諸御入用の出途、前年の豐凶により御組立に罷成候迚も、天下一統奢侈の中と申、且は御家格御勤品等も被為在候ゆゑ、是も無據、彼も御差略に相成兼候と申す氣味に而、是迄迚も不得止御出途のみに候間、此上御省略の被遊方無之樣には候へ共、御軍役を何よりの御勤と被思召候はゞ、

平常の儀は如何程に御差略被ㇾ遊候迚も、御耻辱には無ㇾ之様奉ㇾ存候、仍而は大抵無二御據一と申す儀をも御決斷被ㇾ遊、諸事の御不自由を御こらへ被ㇾ遊、御武役御全備を御樂み被ㇾ遊候樣に而可ㇾ然哉と奉ㇾ存候

公邊初品さへ御免に相成置候上は、餘の儀は略候儀、此上にも可二相成一哉の事

公邊御獻上等御初品、御年限を以て御用捨御願は格別、永久御用捨は御六ヶ敷奉ㇾ存候、且前條兼盤の目割合に而御初品も入候間、假令御用捨年限中に而も、右御入用御除置可ㇾ然奉ㇾ存候與一左衛門

一　御家中の勝手取直し之儀も、種々の說御座候へ共、貧富と申にも夫々次第御座候間、たとへ如何樣に御世話被ㇾ爲ㇾ在候迚も、御家中一統富有に而、世の中の金持と申す如くに、家々勝手取直し候儀は、聖人の御世に而も出來不ㇾ申筈と奉ㇾ存候、乍ㇾ併貧しきを患へず、均しからざるを患ふと申す聖語の通り、面々の祿高等甲乙無ㇾ之被二下置一、其上に而貧富有ㇾ之候は、面々の心得次第とも可ㇾ申候へ共、祿を不平に被二下置一候て、貧乏ものは畢竟不心得ゆゑと申す樣に而は、乍ㇾ恐御無理と奉ㇾ存候、只今の姿に而は御家中の祿大不平に罷成居候間、此等は是非平均の御仕法無ㇾ之候而は罷成間敷奉ㇾ存候、地方と物成と所務の多少顚逆仕居候段は、委細御承知被ㇾ遊候儀故、くはしく不ㇾ及二申上一候、右地方物成を平均仕候には地方を丸に御止め、すべて物成取に被ㇾ遊可ㇾ然と申說も御座候、又物成取の族丸に地方に御直し被二下置一可ㇾ然と申說も御座候、又地方の名目をば殘し、高分け幷百姓には不ㇾ致、其村

の取をならし、御郡方扱に而取立被二下置一可レ然と申說も御座候、此三說何れも一理有レ之樣には御座候へ共、何れも得失有レ之候間、三說御照し合せ被レ遊候上、彼是と斟酌仕り、御取行に仕度奉レ存候、三說の得失大略左に申上候

地方にて二三ヶ所にて出し候がよろしく候、左樣無レ之候而は、譜代の家來出來不レ申候

一　地方知行之儀は、祖宗の御朱印御黑印等を以て、家々先祖より拜領仕候分、勿論新規の分に而も、土地人民を賜り知行仕候儀、御家中の身に取り第一の規摸に而御座候、然る處大臣を始め尺地一民も所持不レ仕、不レ殘物成取と相成り、御藏米取の御扱に罷成候は、無二此上一不本意に御座候へ共、近年地方は割合によろしからず、豐年に而も格別の所務無レ之、凶年には莫大の損毛相立候故、物成取の所務を羨み候事に罷成候處、畢竟武家の本意を忘れ、眼前の利欲に迷ひ候故、右樣の人情に罷成り、甚苦々敷事に御座候、一體地方知行の儀は、譜代の家來の樣なるものに而、物成取は年季奉公人を召遣ひ候樣なると奉レ存候、左候へば武役等の儀、此上御世話被レ遊候思召被レ爲レ在候はゞ、地方知行をます〳〵御取ふやし被レ遊候はゞ格別に候處、却而丸に御止め被レ遊候而は、譜代を相止め年季ものに仕候と同樣に而、故實を失ひ便利に趨り候御政事に御座候間、利欲を好み候ものは不本意とも奉レ存候歟に候へ共、心ある者は相歎き可レ申奉レ存候

一　物成取を不レ殘地方に御直し被レ遊候儀は御本法にて、至極よろしく可レ有二御座一候、一體物成近來

は數多に御座候へ共、往古は誠に少く相見え、全く地方知行被二下置一候迄の內、先づ物成に而被二下置一、又は新參御取立者抔へ當座賜り候分のみに而、御譜代の御家中は地方被二下置一候事と奉レ存候、寛永年中の古帳を見候へば、地方知行貳拾參萬石餘にて、物成は僅かに五千石餘に御座候、然る處往古は地方は五ッ取り、物成は四ッ取に而、地方の族多く候而は、御勝手御釣合に罷成兼候ゆゑ、段々物成取りを御ふやし被レ遊、御年寄始め御役方等のみ格別の御慰勞に而、地方に御直し被レ下候ものと相見え、其節は地方に相成候儀を本意にも存候上、所務も相過候事に可レ有レ之處、今は地方も七萬石餘、（中山給知の外）物成も七萬石餘と相成、次第に地方は減じ、物成は相過候勢に候へ共、昔と違ひ物成過し候に隨ひ、御勝手の御損と相成候段、文公樣御代より物成を貳分拂に而、三ッ八分に被二下置一候へ共、夫に而も地方の所務よりはよろしく、人々地方をば好み不レ申候處、御年寄始め御慰勞に而、地方に御直しの廉は相殘り、本意と申す迄にて、懷合は甚差支候故、武公樣御代より知行の割樣に斟酌を加へ候間、文化以來の地方はまづ格別の損毛無レ之候へ共、舊來の地方は彌增損耗相立候由に承知仕候、文化以來の算法に而割合に而も、地方よりは物成よろしく相成居候間、只今物成取の族は、不レ殘地方に御直し被二下置一候はゞ本意とは乍レ申、小祿の族は懷合さし支、畢竟上に而利の爲に御仕法相加へ被レ遊候樣相心得、餘程騷々敷可レ有レ之、殊に只今迄物成の族十に七八は、家柄ものには無レ之、是まで地方の族十に七八は舊家に御座候處、舊家の地方衰微仕候分は其儘に被二差置一、新家へは新に文化以來の

振合に而、相應の地方被二下置一候而は、舊家の族氣受にも拘り可レ申、かた〳〵物成を丸に地方に被レ遊候儀も不二容易一奉レ存候

一　地方の名目をば御居置、御郡方に而取立、其村のならしにて被二下置一候と申す儀、御舊法をも殘し、時勢をも勘辨仕候而、旁宜しき樣には御座候へ共、地方の儀是迄さへ、眞の地方の意味を失ひ（今の地方古の意味を失ひ候次第は、委細末に申上候）候處、猶更各自のみ纒成候而は、其村に而取をならし所務仕候へば、是迄高免の村を持候人を懷合よろしく候へ共、下免の村に而は所務よろしからず候間、彌張り所務も不平出來候のみならず、高分けも無レ之候而は、彌張り物成取に而御座候か、眞の物成取に候へば、村も三年ごとに割替に相成候ゆゑ、惡しき村計へは當り不レ申、且年々三ッ八分の取に而相渡候間、惡しき村に而も米品不レ宜位の事に而、格別の相違無二御座一候、地方を村のならしに而被二下置一候而は、年々同じ村に而動き無レ之、免の折候村に而は、所務は遙に物成に劣り候儀差見え申候、左候へば地方の名目のみに而其實を失ひ、しかも物成取より所務少く候而は、折角御仕法被二下置一候詮も薄く可レ有二御座一哉と奉レ存候

一　地方物成平均の三說得失、大圖右之通に御座候へば、右の御意味御斟酌被レ遊、御舊法に御本づき、第一に是迄の地方を御割替、眞の知行の意味に叶ひ候樣被レ遊、第二に是迄物成の分百五拾石以上は、不レ殘地方に御割替、第三に物成の厘を御下げ、御藏入の厘割に而被二下置一、小給御切符の分は、

行々全切米に被㆑遊候はゞ、地方の族は御藏入同様の所務に罷成り、物成の族も是迄の如く、上より御償ひ被㆑下候事無㆑之候、只御切符のみ豐凶に拘らず御切符金頂戴仕候へ共、石切米と違ひ年々相場の動き無㆑之候ゆゑ、御勝手の見通しも宜く、上下平均可㆑仕哉と、右仕法左に申上候

一　是迄の地方知行は、譬へば百石の地方に候へば、三四ヶ村五六ヶ村、乃至七八ヶ村に而被㆓下置㆒候故、一村に拾石貳拾石位づゝの割に候處、其拾石貳拾石も一と纏めには無㆑之、かしこの山ぎし、ここの谷間に一反貳反づゝ散在仕候（多くの内には、五石十石も一とまとひに相成居候も有㆑之候へ共、夫は至て少く御座候）事故、百姓も右に准じ、持高拾石の内三石は御藏入分、殘り七石地頭何人の分と申す如くに御座候間、地方知行と申す迄に而、世話も屆き不㆑申のみならず、僅に五石拾石收納の爲に、所々代官等相巡り候ゆゑ、隨而失費も多く、やゝすれば先納金申付、百姓をこらし候ゆゑ、百姓共も年貢未進等多く、地頭は百姓をふみ付、百姓は地頭をうらみ、年來かくの如くのありさまとは罷成候事に御座候、其源を考候へば、中古以來御勘定所の算法に而、知行を百石・貳百石・三百石を、壹石・壹斗の過不及なく割付候故、帳面の上はさつぱと相見え候へ共、實地には右の如くなる田畠は無㆑之候故、こゝかしこの田畠をぬき〳〵に調合仕候外は無㆑之、前書の通りには罷成候事と奉㆑存候、寬永の御檢地相濟、正保年中知行割の面は左樣には無㆑之、祿高も貳百石何斗、三百石何斗何升とはしたの付候知行に御座候、實地を一と纏ひに割候へば、是非少少の過不足は出來候筈に御座候、仍而は右古法に復し候上、知行割大まかに、貳百石の族には天水場

に而百石、用水場に而百石と申す如く、千石の大祿に至る迄右に准じ、何れも實地に而一と纏ひに相成、百姓も一人に付數ヶ所の地頭へ年貢を納候樣の儀無レ之樣罷成候へば、地方取は小き大名の如く罷成候て、知行所世話の厚薄もよく相分り候間、上の御仕向ヶ次第、面々爭而知行所を世話仕り、地頭は百姓を惠み、百姓は地頭を忝く存候樣にも可二罷成一奉レ存候

與一左衞門曰、本文小祿に而村數多は、本大祿のもの養子等に而減祿に成候計に御座候、今被レ下候割合は、左樣に無レ之樣奉レ存候、」又曰、本文尤に候へ共、村々取の高下有レ之候間、村數少く一纏ひに割候へば、同じ百石に而、收納に至り大に不同に相成候故、御勘定所に而中古より今の割に相成候樣に承候事に御座候

一　是迄物成の族も百五拾石以上は、右同樣新割に而被二下置一候はゞ、是迄より懷合は不レ宜候とも、面々の本意の筋にも御座候間、土貢申上候ものは有レ之間敷奉レ存候

一　百五拾石以上の族は、地方に相願候はゞ、百石位被二仰付一可レ然候へ共、一概に上より地方に被二仰付一候而は、取續兼候者も可レ有レ之候間、彌張り物成に御据え置に而可レ然奉レ存候、乍レ併是迄の通り三ッ八分の厘に而被レ下候而は、地方よりも割合宜しく相當不レ仕候間、年々豐凶により、御藏入の厘割を以被二下置一可レ然奉レ存候所、御藏入は大圖三ッ壹貳分の厘割に候へば、物成取俵に六七分減に而は難儀差見え、所詮御行ひに罷成兼候間、まづ以來は御藏入の厘に而被二下置一候旨被二仰付一、扨物成の族一同

御用召に而、百石は百貳三拾石、七拾五石へは九拾石内外に祿高御增被二下置一候はゞ、懐合は是迄と相違不レ仕候へ共、祿高相過候間、乍二虚數一も面々難レ有可レ奉レ存候、扨右樣御改の上は、物成取の歴割は、上の御藏入通りと罷成候間、御改めの日迄は、上にも御家中にも損益無レ之候へ共、其翌日にも新知物成被二下置一候節は、上に而御償ひ被レ下候儀は相止み、御家中はヶ樣仕候ものと相成候ゆゑ、騷々敷も無レ之旁御摸通り可レ宜奉レ存候、御切符の儀も米三拾石金三拾兩は勿論、拾七石五斗以上位は、すべて物成に御直し被二下置一、拾五石以下の分も、石切米はかけめりに被レ遊候はゞ可レ然奉レ存候與一左衛門曰、地方知行は御慰勞に而御直し被二下置一候間、願に而御直しは如何有レ之哉、物成取は先づ是之迄通り被二差置一候方可レ然、尤其内に御城巡一二里の內、荒地村方へ熟談之上、借受切開之分は、御郡方見分の上、村方故障無レ之候はゞ、當人へ下屋敷に被レ下、往々は其村內に而地方に被レ下候樣可レ然哉、此節人々開發の志有レ之候間、御行ひに可二相成一哉、」又曰、本文御切符米三拾石金三拾兩より、拾七石五斗以上の物成に御直し難レ有事に候へ共、知行に御直し候へば、家督無二相違一被レ下に相成り、御家中御給分御繰合六ヶ敷、暮春御慰勞御加增等は相成兼候樣に可二相成一と奉レ存候

一　右之通りに而、御家中の祿は平均可レ仕奉レ存候、扨平均仕候上には、祿に應じ人馬等武役嚴重御定め、是迄御定めは有レ之候へ共、當時の世の中にては、迚も持張兼候御定めゆゑ、御定のみにて、實に持候人は無レ之候、右御定めも御軍用懸りへ間合不レ申內は、相分り不レ申樣相成居候段、如何敷奉レ存候彌張り上の御勝手

に准じ、持祿の內は何程は家來持馬の出途、何程は武具の手當、其殘に而衣食住等割つめにくらし候樣不ㇾ二相成一候而は、御家中の職分不二相濟一候、上下の勝手取直し方御下問被ㇾ爲ㇾ在候所へ、上下共軍役を以て論を立候儀、あまり事情に通ぜざる論と可ㇾ被二思召一候へ共、當時世上一統武家困窮仕候儀は、畢竟軍役を忘却仕候儀、其病根と奉ㇾ存候、百姓は持高に應じ、年貢を納め、武家は祿高に應じ軍役を心懸候筈に候へば、右本職さへ忘却不ㇾ仕候へば、自然に勝手入り合無用の失費は相省け候道理歟と奉ㇾ存候、然る處百姓は不ㇾ殘無年貢に不ㇾ致候而は取續き不二相成一、武家も軍役をゆるし不ㇾ申候而は勝手取直し兼候と申す樣に而は、縱ひ懷合は夫々よろしく候共、御國は難二相立一候、參河國は東照宮勃興し給ひしゆゑを以て、今に年貢丸御免、作り取の百姓御座候由の處、存之外困窮の民多く御座候由承り及候、彌張當時の武士軍役をおろそかに仕候而も、勝手すり切候樣なる者と奉ㇾ存候、異國に而も諸侯の分限をば千乘の國抔と唱へ、萬一の節兵車千乘を出すべき國と申す事と相見え申候、況や武家の制度に而は、如何なる小大名にても、軍役不二相嗜一候而は不二相濟一儀、況や御國の儀三藩の一に被ㇾ爲ㇾ在、既に寬永年中御上洛の節は、壹萬千餘人御召連被ㇾ遊候程の御家に候へば、何程世柄押移候迚も、時勢相應の御軍役は御備へ不ㇾ被ㇾ遊候而は、不二相濟一御儀と奉ㇾ存候へば、乍ㇾ恐眷實に御思惟被ㇾ遊、富國强兵一擧して兩全の御所置被ㇾ爲ㇾ在候樣仕度奉ㇾ存候

賤臣　藤田彪　拜上

與一左衛門曰、地方物成平均の三說得失、大圖云々のヶ條對策第一の眼目と奉ㇾ存候、一々尤には候へ共、行に至而は六ヶ敷樣相見え候、第一地方を眞の知行の意味に叶候樣御割替不二容易一候、第二是迄の物成の分百五拾石以上、不ㇾ殘地方に御割替の事、是迄御勘定所仕來通に候へば、多くの甲乙なく割替可ㇾ成候處、村數少く割候へば、村に善惡有ㇾ之候間、收納に不幸出來候筋合に候、第三物成の厘を下げ、御藏之厘割に而被ㇾ下候儀は尤の筋に奉ㇾ存候

一　去年凶作に付御下げ金穀御跡埋、追々當時評議仕候處急務勿論に奉ㇾ存候、御跡埋出來候はゞ、本文量入爲出の御仕法第一と奉ㇾ存候、十ヶ年平均の御收納と、十ヶ年平均の御入用と照合、公邊御勤向は被ㇾ遊方無ㇾ之候間、御入用御居置、其餘は御收納の平均に而御減じ付可ㇾ然候、惣御家中御給分、中山・山野邊・鈴木・松平・太田御居置、其餘は十ヶ年の間知行不ㇾ殘御引上、御藏入年々の御收納百石に付何程と申處に而、金穀物成取同樣被ㇾ下、物成取は尙以御收納に准じ被ㇾ下可ㇾ然、尤其年に御收納百石に付何程と申儀分り兼可ㇾ申候間、宵年の御收納を以來年被ㇾ下可ㇾ然候、左候へば地方地行舊家の面々先祖より拜領の地に離れ、不本意に可ㇾ存候間、村方は御居置、御城巡二里內外を、知行へ土着願之者は爲二御濟一、且各村百姓の內、御家中百石に付壹人となり、萬一の節付屬致候樣御郡方へ達、當人へは筋より達、平日親み居地頭も耕地世話勿論、荒地開發無主同樣の荒地は、御郡方見分の上、地頭持に成候樣被ㇾ遊候はゞ、人々羨土着致候樣可二相成一哉、物成取は是迄の通

り、御慰勞に而地方へ御直し可レ然候、乍レ然物成取り武役勤候家來分、一季抱に而は役に立不レ申候に付、貳百石より以上へは、鄕中より御貸人割合を以て御付置可レ然候、三百石以上は譜代同樣の家來一人位は持たれ可レ申哉、此節の樣子に而は、持兼可レ申と存候へ共、能割定候へば持候事相成可レ申哉、右惣物成之御仕法には、御金壹萬兩も無レ之候而は御行に不二相成一、其御金は來年より二割の御減じ割を以て積金に御跡埋出來候を、一方御下げ夫を以て御行ひより外無レ之樣奉レ存候

上下富有の議　終

土着の議

御家中眞實の武備行屆き、宗族繁茂仕候樣相成候は、尊慮の通り土着に無レ之候而は行屆き兼候儀、乍レ恐御確言と奉レ存候、城下住居の弊、並に土着の得は、古人も往々論述仕り置候儀、委細御承知被レ遊候上、御下問被レ爲レ在候御儀と奉ニ恐察一候間、此段は委細に不レ奉ニ申上一候、仍而は如何樣に被レ遊候はば、當時の勢に而土着御摸通りによろしかるべき哉と愚考仕候處、天下一統城下住居の制度、（戰國より土着致來り候分は格別と奉レ存候）御國の儀も御始封以來二百年、御家中御城下住居仕り、甚しきに至候而は御國には屋敷さへ無レ之、定府に而僅の五間三間の御長屋を宅と相心得候樣成行候儀、御承知被レ遊候通りに御座候、城下住居のものを鉢植武士に譬へ候へ共、長屋住居に至候而は鉢植所には無レ之、床の間のいけ花にひとしきありさまに御座候處、去春御仕法替に而定府御止被レ遊、誠に格別の御儀に御座候ひき、右に付愛許より御國に引移候さへ人々殊の外相嘆き、島流し等にも罷成候樣なる風情に御座候、況んや御家一統山林田野の間へ引移候儀、如何程の悲嘆愁苦に可レ有ニ御座一哉、尤如何程悲嘆等仕候迚も、御政體に於而御摸通りよろしき儀に御座候はゞ、御決斷に而被ニ仰出一、始めは苦み終は樂み候樣御仕法も可レ有ニ御座一哉に候へ共、天下一統城下住居の中に而、御家のみ土着御取行ひ被レ遊は、御摸通り之處幾重にも

御評議無レ之而は、容易ならざる儀勿論と奉レ存候、尤士着の儀古人も論じ置、殊に近年世上次第に奢侈增長仕り、城下住居に而は、武備等可也に心懸候も不二容易一、いよ〳〵古人の論存じ中り候ゆゑ、心ある者はやゝもすれば士着々々と申す樣罷成候間、大勢の御家中の内には、好み候而引移候者も可レ有レ之候、即ち愚臣抔共一人に御座候へ共、これは御摸通り等得と勘考仕候には無レ之、全く一己々々存意に而覺悟仕候儀故、惣體の御居りに至候而は、惣體の御見通し相立不レ申候而は、御摸通りには罷成兼候半奉レ存候、只今の姿に而好み候ものゝみ五人拾人被二仰付一候迄に而は、數年の是迄の鄕士同樣の姿に罷成り、別而御國の强みに罷成候程にも至り兼可レ申奉レ存候、既に八王子千人頭抔、往古は御目見以上の御扱に御座候由の處、何頃よりか半席同樣の扱に罷成り、一統相嘆き居候儀、御出入の荻原彌右衞門每度愁訴仕候通に御座候、畢竟御旗本は皆江戶內住居仕り、世事巧者に相成居候ゆゑ、遠在の八王子より年頭たま〳〵罷出候のみにて世事にうとく、今日の禮式等不造作に御座候ゆゑ、自然と扱をもおとされ候樣成行候儀と相見え申候、御家の儀御定府同樣に被レ爲レ在、是迄は在江戶御家中も多く御座候間、御國者さへ餘程をかしく相見え候由に而惡口等仕候、尙更士着の中より五人三人勤番仕候はゞ、わざ〳〵越度等こしらへさせ、惡口仕候樣相成候は差見候と奉レ存候、左候へば士着の思召被レ爲レ在候はゞ、第一に去年以來の御仕法少しも御弛め不レ被レ遊、御家中過半交代に罷成、縱ひ永詰仕候ものも、御長屋をば全く假の住居と心得候樣無レ之候而は、士着の儀は御取行ひに罷成間敷候、

去年以來の御仕法、誠に格別の御儀には御座候へ共、御役人少々交代御試み、其餘は永詰と罷成候ゆゑ、どちら付ずにて、人氣とり兼候樣奉レ存候、尤只今より不レ殘御國勝手被二仰付一、段々交代御はじめ被レ遊候樣にと申上候儀には無レ之候へ共、御國より新に永詰被二仰付一候樣にては、定府と永詰と名目相違仕候のみにて、此節永詰にて罷登り候者、十年二十年も過候はゞ、又御國を嫌ひ候儀差見えに御座候間、何御役にても缺席次第、右跡は交代被二仰付一候はゞ、一概にも無レ之、五七年の內には、餘程交代に可二罷成一奉レ存候、但兩御番等其外交代に罷成兼る向も有レ之、又宅御供御廣間番等師匠番御殘し可レ然勤番も相見え申候處、其外大抵は交代に而御撲通りに可二罷成一奉レ存候　然る處交代の儀は先づ此位に而被二差置一御國より新に妻子召連江戸へ引移候者も有レ之、又鄕中へ引移候者も御座候樣に而は、永詰者御國者土着者と申す樣罷成り、御居り以の外不レ宜奉レ存候、江戸御國と二つに罷成候さへ不レ宜候との御評議に而、定府御止め被レ遊候上は、以來江戸より御國へ引移り、又は御國より鄕中へ引移候のみに而、御國より江戸へ引移候ものは無レ之樣不二相成一候而は、土着の儀は行はれ兼可レ申奉レ存候、御守殿奥番、其外御方方樣御付の類は、御家中の內悴へ身上を讓り候ものにて、隱居がてら江戸へ永詰仕候樣にも可二罷成一哉と奉レ存候　左候へば土着の本は、交代御持張り專一と奉レ存候

一　土着之儀、御始封の節直に被二仰出一候はゞ土貢無レ之候處、一旦御城下住居の御組立に被レ遊、御家中一統御城下に安んじ候ゆゑ、義公樣御代に而すら御馬廻土着の儀、御撲通り不二罷成一、無レ程御止めに罷成申候、尙更只今の世の中に而、土着御取立被レ遊候は、餘程御仕向け振六ヶ敷可レ有二御座一候、扨土着仕候へば、御家中一統御領中村々へ散在仕り候樣に、人々說を唱候へ共、右樣相成候へば、御城下丸に明き屋敷と相成り、御郭中を始め上下町の諸士屋敷、皆無用の地と罷成可レ申候、尤五六百石以上の大臣に候はゞ、御城下の屋敷をも手入等仕り、家來の內より屋敷守として壹兩人も差出し置、可也に掃除等も行屆き可レ申候へ共、中以下小臣ものは、御城下の屋敷迄世話仕候儀は、中々行屆申間

敷奉レ存候、扨又御政事方は勿論、諸役人遠郷に住居仕居候而は相勤り兼候間、御役人は御城下へ引移り不レ申而は相成間敷候處、是以五六百石以上の大臣に候はゞ、鄉村の屋敷へは家來等殘し置御役可レ勤候內は御城下に引移候へば、鄉村の屋敷はから明きと罷成候、是迄江戶に數年罷在候族さへ、御國の屋敷持通候者少く御座候、御城下に而僅に三百坪四百坪の屋敷すら如レ此に御座候處、土着仕候上は屋敷付田畠山林等も有レ之、打捨置候而は荒廢仕候間、御役人共は皆在々より、御城下へ交代相詰可レ然哉に候へ共、是迄御城下より江戶へ交代の儀は、平日御國に而一統打寄、江戶の御用向き等申合相成候ゆゑ、江戶に詰候內は當座もの、樣に而も、年中御國に而江戶の儀を取調候樣にも罷成候處、江戶も旅先き、御城下も旅先きの旅計りと相成候而は、御用辨不レ宜候のみならず、江戶と御城下へ二重に交代仕候樣に而は、御家中取續き兼候間、鄉村より御城下へ交代の儀、今の時勢に而は出來申間敷奉レ存候、其外御家中民間へ雜居仕候而は、種々さまざまの故障多可レ有レ之候處、是は御郡奉行共より委細に申上候儀と相略し候儀に御座候、右の通り種々の故障有レ之上、御役人引移の儀差支候へば、所詮土着は出來不レ申候樣には御座候へ共、古今の時勢制度等御斟酌の上、漸を以て御取立被レ遊候はゞ、隨分御取行ひに可二罷成一哉と奉レ存候、右御組立の儀項細の儀は、種々異同有レ之候共、大だいの處は封建世界と、郡縣世界との差別得と御見通しの上、御組立の方可レ然奉レ存候

一　天下の制度に封建と郡縣との差別御座候儀、誰も存知辨へ候儀御座候處、右の差別により土着の摸

様も相違可ㇾ仕奉ㇾ存候、漢土の儀も周以前は封建の制度に而、只今の如く大小名夫々國を持罷在候處、秦漢以後は郡縣の世と罷成候へば、只今封建の御世の見合に相成候は、周以前のみに御座候、周以前と申候而も、夏の世殷の世等は時代ふるく、制度等詳ならず候間、漢土歴代數千年の內、只今の見合に相成候は、周の世のみと奉ㇾ存候、日本の儀往古國造等の世界は、封建の姿とも可ㇾ申候へ共、是以其節の摸樣相分り兼、其後はすべて唐の制度にならひ、郡縣世界と罷成候へば、只今の見合せには罷成間敷奉ㇾ存候、盛衰記太平記の頃の摸樣を相考候に、諸國在々に武士散在仕り、只今の鄕士の大なる樣に相搆へ、一族親類は勿論、家の子郎黨引纏め土着仕居候ゆゑ、武士は强く候處、戰國打續き太閤の時に至りて、大名國がへと申事始り、先祖代々土地に根つき候武士、其時に居を移し候ゆゑ、段々土地にはなれ、遂に城下住居の制度と罷成、武士愈弱く罷成候儀と奉ㇾ存候、土着の世に而は、縱ひ一旦敗北、又は討死等仕候ても、其子孫又々起り立候事相成候ゆゑ、譬へば新田義貞討死仕候而も、追而新田義興起り立、楠正成討死仕候而も、其子正行等數年の後起り立候如く、宗族一類同所に根つき居候間、其種類中々容易には斷絕不ㇾ仕候、新田楠等は忠臣に候間宜候へ共、朝敵も彌張右同樣、急々には平ぎ不ㇾ申道理に御座候、流石の太閤此所を見開き、自由自在に國替申付、武士の根を弱め候儀は大見識と奉ㇾ存候、右等の趣に而了簡仕候に、武士民間に土着散在仕候はゞ、其弊に至候而は國主領主の下知をも用ひず、甚しきは謀叛等を企候樣成行、兎角下づりの患可ㇾ有ㇾ御座ㇾ候、又是迄の如く城下住居に

而は、武士彌增衰弱に相成り可ㇾ申段は、御承知被ㇾ遊候通に御座候、仍而は今の時勢に而土着御取起しの思召被ㇾ為ㇾ在候はゞ、封建の意を本と被ㇾ遊、周の制度に御ならひ、周の制度の儀、淺學の愚臣中々手に取候樣には論じ兼候間、たまじひに杜撰の儀申上候ては恐入候儀と不ㇾ申上ㇾ候へ共、在町の者は[illegible]世祿の士[illegible]と云、武士民間に雜居は不ㇾ仕候、扨又只今の御城下住居には無之[illegible]に存候、委細[illegible]御下問次第、愚意等とは委敷申上候半と此段は不ㇾ申上ㇾ候鉢植武士にも無ㇾ之、又謀叛等の憂も無ㇾ之樣御組立に罷成可ㇾ然哉と奉ㇾ存候、愚案大略左に奉ㇾ申上ㇾ候

一　御城下の儀は、すべて是迄の通り御居置、御家中をば、不ㇾ殘鄉中へ御移しに罷成候而は、封建郡縣の制度混雜仕候のみならず、御城下の屋敷持張り候段は、委細前に申上候通りに御座候間、御城根廻り貳里位迄を限り、右の內に御家中夫々土着仕り、一統御城へ通勤仕候而可ㇾ然奉ㇾ存候、右樣相成候へば、是迄の御城下あたり廣すぎて、御居り不ㇾ宜候間、上町に而は西町、並鷹匠町通りの土手を境に仕り、下町に而は馬場の邊を限と仕り、其外はすべて鄉分に被ㇾ遊、是迄住居の御家中の內、直に其地に土着仕候樣にも可ㇾ相成ㇾ奉ㇾ存候、尤右に付而は委細に論候はゞ、御手順等も數多可ㇾ有ㇾ御座ㇾ候へ共、何れ是迄の御組立は、御城下に住居の御組立に候處、御家中鄉宅と罷成候上には、御城下の儀は可ㇾ成丈御せばめ、町家の儀も悉く減少不ㇾ仕候而は、御居り合不ㇾ宜奉ㇾ存候

但是迄の御城下を狹め候儀、是迄の御摸樣を以て了簡仕候へば、何歟事かはり候說の樣には御座候へ共、五軒町、備前町邊すべて明き屋敷御座候度每に取拂、畠に切おこし、其外往來等も、所に寄り追々畠に仕り候へば、忽ち鄉村の姿と罷成可ㇾ申候、町人は直に御郡奉行扱に被ㇾ仰付ㇾ候へば百姓

に罷成、譬へば市場驛場の百姓の如く可二罷成一候、下町も七軒町より七町目位迄は御殘し、其外は不レ殘郷村に罷成可レ然奉レ存候、すべて右樣の儀、是迄の摸樣にかけはなれ了簡不レ仕候而は、御取行ひ御六ヶ敷奉レ存候、佐竹時代には武士何れも土着仕候ゆゑ、百萬石の分限に而さへ、城下は何程も無レ之樣承り及申候、西町大町邊には町家有レ之、藤澤小路抔には寺院有レ之由之處、寛永年中下町の田を御埋めさせ、田町御取立、大町西町の町人共御移しに相成候由、左候得ば御城下の儀もむかしより只今の姿には無レ之、泉町の裏通り、又は下町竹隈、其外年貢地今以相殘り居候分も御座候田舍景色に而御座候を、段々御世話に而御城下の姿をなし、次第に諸事江戸を御まね被レ遊候ゆゑ、今の勢と罷成候樣奉レ存候、土着の御制度に罷成候からには、あちらこちらに御仕向不レ被レ遊候而は、御摸通りに罷成兼候半奉レ存候

與一左衛門曰、本文の通り御城根廻り二里位まで限に土着仕り、御城へ通勤仕候儀尤に了簡仕候、乍レ併御家中不レ殘土着仕候而は、小祿の者取續兼可レ申候間、五百石以上は御城下最寄りへ、知行の內何分一と歟御割渡、其處へ土着通勤可レ然候、三百石以下百石取は是迄の屋敷へ居付、知行の內何分一最寄りの土地に而御渡し、勝手次第共土地へ參り、附屬の百姓に力を合せ耕作致候而は、如何可レ有二御座一候哉

町家多く賣者より買人少き時は、彌町は日に空敷相成候へば、町を減候儀兼而我等も申事也

町家少く被レ遊二御付札一乍レ恐御尤に奉レ存候へ共、急には相成兼候儀と奉レ存候與一左衛門

一　右の如く御城根廻壹二里の地に土着被ニ仰付一候儀に候はゞ、公邊へ御屆等にも及び申間敷御家中窮迫等のもの、下屋敷住居御濟し被レ遊候御見通しにて、何等御突中りも有レ之間敷奉レ存候

一　知行割替の儀委細上卷に申上候通り、御丁簡にも罷成候はゞ、御城下根廻りの村々、何れも百五拾石以上地方の族へ御割渡し、夫々右知行所に土着被ニ仰付一、譬へば千波村・吉田村・坂戸村等に土着仕候へば、上より被ニ下置一知行をも、高の內にて三ヶ一四ヶ一程は居村に而御割合被ニ下置一、御番方相勤候節は勿論、御役人被ニ仰付一候迚も通勤可レ然奉レ存候

一　地方に無レ之族も、今の五軒町、或は蓮池町邊に土着仕り可レ然奉レ存候、家來壹人も召使ひ候事不ニ相成一、全く當主壹人御軍役を相勤候程の小祿は、是迄の通り御城下住居に而可レ然奉レ存候

一　城下にも屋敷を持候儀は、大圖四五百石以上と御定め被レ遊候而可レ然哉、扨右四五百石の族に候へば、御役方相勤候內は御城下屋敷へ移り、鄕村の屋敷は留主居を差置候樣にも出來可レ申候間、遠鄕に土着仕候てもよろしき樣に候へ共、是以同じくは御役方被ニ仰付一候迚も、彌張り家をば動し不レ申方、始終の御摸通りよろしき樣奉レ存候間、どちらと申候へば、御城廻りへ土着仕り、尤小祿ものよりは路法遠き所へ住居仕候方可レ然奉レ存候、左候樣へば、縱ひ三里四里位の場處に候迚も、月三才六才の出仕は差支不レ申候間、御年寄若年寄等の御役儀も、彌張り鄕宅に而勤り可レ申奉レ存候

一　千石內外大祿の族は、御城廻りに限り不レ申、遠在に而屋敷を搆住居仕り、何等次第有レ之間敷奉レ存候

一　御城下狹くは相成候へ共、かけはなれ考候へば、御城下大く相成候姿も有レ之候間、右二里四方にても二里半四方に而も、御家中土着の地をば御城廻りと相唱ひ、西町內馬塲をば御郭中と相唱へ可レ然、尤唱への儀は何と申候ても頓着無レ之候へ共、御目當迄に申上候事に御座候

一　土着地の儀は、實地に臨み了簡不レ仕候ては、空論に御座候へ共、地勢等連續仕り、平常の変りは勿論、御軍制等も自然と右の割合に□り候樣の工夫も可レ有ニ御座一奉レ存候

一　御城下廻り土着場所三組と歟、四組と歟、何れ是も御軍制により御定め、譬へば何組に百石何人、貳百石何人、三百石四百石何人と御割付、一の組の小祿は、いつも右同組の大祿の人を頭にいたし、其頭死亡等仕候はゞ、又其組の內にて御立被レ遊候類に被レ遊可レ然、扨又一の組の諸士共土地に故障有レ之人は、國替の如く二の組へ知行がへ被ニ仰付一候はゞ、心得も改り可レ申奉レ存候、もし又斷絕等仕候はゞ、御城下住居の內より被ニ仰付一、何某の上り知賜り候旨達に相成候はゞ、知行所割にも不レ及、直に以前斷絕仕候人の跡を引受候樣可ニ罷成一候、是等の儀は尙更得と御評議に相成候はゞ、只今心付候事も實地には行はれ不レ申、又存之外御摸通りよろしき儀も可レ有ニ御座一候

一　遠鄕に散在仕候と違ひ、申さば御城下の大きく罷成り候樣なるに而、既に江戸は四里四方にて、本所五ツ目邊、又巣鴨染井、或は麻生高繩等より、皆御城へ通勤仕候事に而、唯町家等軒を並べ候申を通行仕候故、遠路とも覺えず候へ共、御國にて中臺・後臺・三反田・柳澤邊より御城へ通勤仕候と、道

のりは同様に可レ有二御座一候間、遠郷に散在仕候と違ひ、別而差支も有レ之間敷候へ共、是迄の通の御振合に而は差支可レ申候間、諸事大まかに不レ被レ遊候而は相成間敷候、譬へば諸役人の出仕も日勤には及び申さず、隔日歟二日置位に相成り、早朝より終日相詰候はゞ、御用辨は是迄と相違仕間敷と奉レ存候御家中相互ひの見舞抔は、大抵股引半天にて相濟、御城へ出仕の節野服馬上にて御郭迄罷出、御郭の四隅に支度所御設け置、出入共右場所に而支度を替候様の事無レ之候而は差支可レ申候其外明何日御用召抔申儀も、來る何日と申す如く、夫々御差略振無レ之候而は相成間敷候へ共、其役其品により候儀故、前廣より逐一には了簡仕兼候事に御座候

一　屋敷の儀は夫々御買上げ、士着被二仰付一候而も、屋敷地のみにては、麥大豆存分に作り候には土地不足仕り、且又田方も無レ之候而は作得薄く候間、田畠分限相應に自力にて所持仕候儀は、御濟し被レ遊可レ然候處、百石に付何石迄買入候儀は不レ苦、其外は屹と御制禁無レ之候而は、他日の御故障に可二相成一奉レ存候

一　次男三男等自分にて、別家に取立候儀も御濟し可レ然候へ共、是以田地多少の員數御定め無レ之候而は相成間敷、尚又次男か又三男等に至候而は、段々扱をおとし候御定め、肝要に可レ有二御座一奉レ存候

一　御家中の内にて、是迄も田畠等買入候ものも御座候へ共、皆内々に御座候間、表向は百姓持に候間、年貢等皆御郡方扱に候へ共、士着仕候上は分限に應じ、田畠を所持仕候儀は表向に相成候へば、彌張り諸士の持分に相成可レ然奉レ存候、仍而は年貢等の扱も百姓とは別に御定め、譬へば御郡方にて見分

の上筋へ申出、評定所より當人々々へ達し、米は御藏方納め、金は御金方納めと相成、不心得に而不納等有レ之候節は、本祿金穀にて御引おとしに相成候樣に無レ之候而は、御摸通り不レ宜奉レ存候

但本文の儀は、自分知行所の外に田地を持候儀を申上候事に御座候、自分知行所之內自分百姓の田地を買取候分は、年貢は不二相納一、不レ殘自分所務仕候儀勿論と奉レ存候

與一左衞門曰、本文但書自分知行之內、自分百姓之田地買取候事、後來の故障出來候儀安心不レ仕候、自分百姓尙更地頭世話致し、持こらへさせ候而可レ然候、荒地開發は其土地方御郡方見分の上、地頭持分に相成候而も可レ然奉レ存候

一　御家中不レ殘土着と申候へば、誠に廣大なる事に而、御入用等莫大に可二相成一被レ存候へ共、存之外左樣にも無レ之、御家中百五拾石已上（地方物成兩樣に而）僅かに三百人餘に御座候間、一年に三拾人づゝ御取立に而、拾年の內には不レ殘土着と罷成可レ申候、鄉村に而屋敷地御買上の御入用、幷右屋敷土地永代御年貢相減候間、不二容易一樣に候へ共、是以存之外に御座候、平均壹人へ屋敷地三反步（三拾間四方九百坪）を被二下置一候而も、三百人分九拾町（二十七萬坪）に候間、不レ殘上畠と見候而も、石數僅かに九百石の地面御買入に相成候儀は、縱ひ餘程の御入用に候とも、一度にて相濟申候、其年貢永代引け候へ共、九百石の年貢三ツ五分平均に而、金百貳拾兩に御座候へば、五百石取の御家中一人召抱と被二思召一候へば、三百人の御家中不レ殘三反步づゝの屋敷被レ下に罷成申候事と奉レ存候、委細は御勘定奉行・御郡奉行等へ御掛被レ遊候

へば、御分り可ㇾ被ㇾ遊奉ㇾ存候

但本文は全く新に上畠を御買上げの積に候へ共、御城下廻り荒地等も餘程可ㇾ有ㇾ之候、扨又昔は御家中大抵下屋敷を被ㇾ下置、御城下近郊に夥しく御座候由、質素の風儀相殘り候頃は、皆右下屋敷を耕作仕り、家內又は下男女等一同出精仕候事と相見候處、御家中次第に品計よろしく罷成、本を忘れ候に隨ひ、耕作は百姓の致候事に而、諸士自力耕し候は外聞不ㇾ宜抔に心得、且つ下男女等も減少仕候故、下屋敷をば皆其近邊の百姓に爲ㇾ作候樣成行候ゆゑ、年貢さへ上納滯り、下屋敷之詮も無ㇾ之付、寬政中大抵御引上げに罷成、三百石以上持來候分のみ御居置に罷成候事に御座候、夫故千波向ふ抔今以大臣下屋敷殘り居、大炊頭樣下屋敷より山野邊兵庫下屋敷の內、皆御家中下屋敷に御座候、是等の類は不ㇾ殘御引上げ、夫々土着被ㇾ仰付ㇾ候へば、畠地御買上げの代料も餘程相減じ可ㇾ申奉ㇾ存候、扨又前文に申上候通り、上下町を御つめ被ㇾ遊、鄉分多く相成候はゞ、此土地坪數も莫大の儀と奉ㇾ存候間、旁新規御買上は相減じ可ㇾ申と奉ㇾ存候

一御城廻り土着に候へば、通勤等の儀は差支無ㇾ之候へ共、子弟文武の修業等差支候處、是は御郭中に學校相立、尙又土着の組々へ鄉校御設けに罷成候へば、大人は學校へ罷出、幼少のものは鄉校にて修業可ㇾ罷成ㇾ奉ㇾ存候

與一左衞門曰、本文學校さへ御立六ヶ敷候間、鄉校迄は行屆安心不ㇾ仕候へ共、幼少の子弟は最寄土

着者、素讀位教授可ニ相成一哉と奉レ存候

一　御國住居候てさへ、江戸へ交代無レ之候へば、御家中一統生涯將軍家御始め、尾紀其外諸大名の模樣をも相心得不レ申もの數多御座候、尙更鄕宅と罷成候へば、一段不案內に可ニ罷成一候間、前に申上候通り、交代之儀は始終御持張、何れも鄕宅より交代勤番仕候儀、別て肝要と奉レ存候

一　土着の御目當大圖前書之通に而可レ然哉と奉レ存候へ共、委細の儀に至而は、前廣に論判仕候而も、實地に至り齟齬仕候儀も可レ有ニ御座一候、且つ其人により候儀故、逐一には不レ奉ニ申上一候、扨土着のよろしきと申は、畢竟風俗質素筋骨丈夫に罷成、分限相應の人馬たしなみ相成候ゆゑに候處、諸事の御〆り合等は、御城下住居の方よろしき儀勿論に御座候、左候へば唯土着仕候のみに而、風俗も質素に不ニ罷成一、筋骨も丈夫に不ニ相成一、人馬をたしなみ不レ申、此節の姿の御家中鄕村住居と相成候のみに而は、御〆り合不レ宜、御政事の上に而大御損と罷成り、殊に御城下の風俗近在に押移り、是迄よりも百姓共一段人氣惡しく罷成候はゞ、旁以の外なる儀に御座候、左候へば風俗の御世話御行屆き、御家中心掛にも宜敷相成候へば、御城下住居に而も、彌張り土着の意に叶ひ、自分馬の草苅にも罷出、妻女等も下男女を召連、下屋敷等へ罷越耕作仕候樣にも可ニ罷成一候、縱ひ土着被ニ仰付一候迚も、太田村・湊村等の鄕士の如くにては、鄕士と申名のみに而、御城下住居と同樣に御座候間、此仕向け振別而御大切と奉レ存候、一體御國の儀、諸事江戸を學び、町の名迄も江戸同樣に名づけ候位故、御政事の上に於て

も、矢張り江戸をまね候仕癖不レ少、御城下賑々敷相成候をよろしき事に一統心得居候へ共、城下の繁華程士風衰弱に罷成り候勢に御座候、天下の内江戸は繁華の第一に御座候處、江戸程士風衰弱の處は有レ之間敷奉レ存候、會津抔土着には無レ之候へ共、家中あみがさを冠り、木綿合羽を着用致し、大小を帶候へば、城下内を馬を引、薪を背負ありき候ても不レ苦風俗に罷成居候ゆゑ、隨分相應の勝手に而も皆近在へ罷出、薪等自分に而こり候由、御國抔の了簡にては、あまり賤しき樣に存候へ共、其國風に而は左樣も不レ存、尤手代足輕の類は、右の通りあみがさ木綿合羽は用ひ候事不二相成一樣に相成居候ゆゑ、直に諸士の見分けも相成、不敬無禮等も出來不レ申由、夫にて社諸士の忍びとも可レ申候へ共、御國の儀は御城下内悉く外見を取繕ひ候樣相成居、たま〳〵忍びの節は、諸士の身形をくづし候故、輕きものと見分けも不二相成一候、會津に限らず、米澤其外諸士の儀は、忍にても大小をばはなし不レ申候由に御座候、右旁に而相考候へば、御國の儀も御城下の風俗外見を取繕ひ不レ申樣、御仕向けに仕度奉レ存候へ共、何程質素の風に御仕向け被レ遊候ても、只今迄にはましと申候迄に而、御城下住居にては、存分實用に武備等相嗜み兼可レ申候間、上卷に申上候通り、第一分限に應じ人馬割御定め被レ遊、右御定の人馬は必心懸候樣被二仰付一、其上に而心懸よろしく、三百石に而四百石の人馬心懸候ものへは、得と御吟味の上祿をも御增被二下置一、人馬を持候得ば、御加増被レ下候ものと相成候へば、極めて無理なる事をもいたし人馬をふやし、御加増を望み候類も安心不レ仕候間、いよ〳〵勝手の規矩相立、他借等不義理も無レ之、眞實に行屆候哉の境見極め、且常に一ヶ年二年間ふやし候のみにては、摸通りも難レ計事故得と御吟味の處肝要と奉レ存候もし又四百石に而三百石丈の人家來ならでは無レ之族は、是

又御吟味の上、其在り入丈けの祿に御削り被ㇾ遊（平日心得よろしき者にても、折惡しく病難又は臨時物入等相嵩み、不ㇾ得ㇾ止人馬等減じ候ものも可ㇾ有ㇾ之、右の類は得と御吟味の上、御救不ㇾ被ㇾ下候ては相成間敷奉ㇾ存候、尤祿を御削りとは申上候へ共、人馬揃候迄は當座御引上に而可ㇾ然哉）候樣罷成候はゞ、御家中一統の魂入かはり可ㇾ申奉ㇾ存候、魂入かはり候へば、御城下住居に而は武備等厚く相嗜み兼候と申所を、人々眞實に了簡仕り、殊に土着仕候族の追々武備相整候を羨み、段々に鄕宅相願候樣、罷成候樣必然の勢と奉ㇾ存候、眞實に好み不ㇾ申者を、無理々々鄕宅被ㇾ仰付ㇾ候而は、拜借被ㇾ下等過分に而も進み申間敷候所、眞實に相願候日に至候はゞ、其分限に應じ可ㇾ然御手當被ㇾ下置ㇾ候はゞ、爭而土着仕候樣可ㇾ罷成ㇾ候、（前に申上候通り、知行所御割付に相成居、願の上土着御濟し可ㇾ被ㇾ遊と罷成居候へば、土着可ㇾ仕と志し候ものは前廣に心組仕り、御城下屋敷普請等は不ㇾ致、諸事鄕宅の心懸仕候上へ、夫夫御手當被ㇾ下候はゞ、莫大の御金に無ㇾ之候而も相辨じ可ㇾ申奉ㇾ存候、殊に小臣の族は御城下の屋敷は、土着不ㇾ仕者へ相對にて讓渡候はゞ、隨而少分の手當は出來可ㇾ申奉ㇾ存候間、何れ御懐を御定め、年々段々被ㇾ仰付ㇾ可ㇾ然奉ㇾ存候）百石へ金拾五兩づゝ被ㇾ下候而も、金千五百兩にて百石の士百人は鄕宅に可ㇾ罷成ㇾ奉ㇾ存候、左候へば一概に社御六ヶ敷候とも、年々三四十人位づゝ被ㇾ仰付ㇾ候儀は、百姓分家等の御入用程は懸り不ㇾ申候而出來可ㇾ申奉ㇾ存候、仍而は土着の儀愈御取行ひ被ㇾ遊候思召に被ㇾ爲ㇾ在候はゞ、交代の儀彌增御取ふやし、地方知行夫々被ㇾ下置ㇾ、人馬の御定相立、御城下をせばめ候目當有ㇾ之、町家の數を限り、御城下に浮食游惰のもの壹人も無ㇾ之樣、御仕向け被ㇾ遊候御手賴敷と愚慮仕候

賤臣　藤田彪　拜上

上下富有の議 并士着の議終

新政談

一名芻言

藤森弘庵著

新政談 一名芻言 巻之一

藤森弘庵著

御內々愚存の趣御尋に付申上候、私儀從來短才蒙昧の資性、猶世事甚不器用にて、飾ニ固陋一候ても迚も世に容れらるべき事難く、其上近來老衰多病に相成候故、殊更辭退の志を守り罷在候得ども、幼少より歷史抔少々披閱も仕候と、古今の成敗得失の故に於ては、折々心付も有レ之候爲、人に對し申談候事も有レ之候得ども、從來下賤の身分、一事も業に施し試み候儀には無レ之に付、書を以て馬を馭するの類にて、事に施し候ては、定て空疎にして行れ難き事多く可レ有レ之と奉レ存候、乍レ然不レ恥ニ下問は先賢の盛德、芻蕘に詢るは先哲の明規、大海は不レ捨ニ涓滴一、泰山は不レ讓ニ土壤一、今明公高貴の御上にて、愚矇の私式迄も下問を垂給ひ、盡レ言勿レ諱との盛意、實に德を先賢古哲に比し、量を大海泰山に同うし給ふと申べし、然るに空疎を恥て不ニ申上一候ては、明公の盛意を空くするに相當り、却て不敬至極と奉レ存候間、心付候まゝ左に相記申候、山野之鄙人禮數に嫻はず、言語不敬に渉る事も可レ有レ之、其儀は幾重にも御海涵あらせられ、古人采葑の義に取らせられ、其采るべきを撰び給はゞ、唯一身の幸のみならずと奉レ存候

一　近來外夷陸梁天變□臻候に付、廟堂にも色々御軫念あらせられ、質素・儉約・武備嚴重等の被二仰出一も度々有レ之例に承り候得ば、天下人民のために、御手元も格外の御省略、御奥向迄も粗服御用ひ、金銀の器は不レ殘消鑄被二仰出一候抔、儉を腹する躬よりするの御盛德、三代の令主も及ばざる程の御事、申も恐れ多き儀に候得ども、實に難レ有思召、螻蟻の私式迄も誰か仰ぎ慕ひ奉らざらん、然るに此度又又御府下大地震、人家摧倒幾許を知らず、死傷十萬を以數へ候由、實に古今未曾有の大變と申べし、乍レ然桑穀朝に生じて高宗中興し、野雉鼎に雊て殷道再び盛んなるは、災變によりて恐懼修省の政を施し給へる故成べし、今此大變に付て御修省の御政を施させられ、右御改革あらせられ、天下積年の大弊を御除きあらせられなば、却て世運御中興の御基とも申べし、乍レ去末世人情浮薄にして、武備の被二仰出一有レ之候得ば、各時好に投じ、流行に從ひ、東西に奔走仕候ても、其胸中を寫候得ば、敵愾の志にては無レ之、それを手にして青雲の望を遂んと欲し、騎馬揃を被二仰出一候得ば、中には時に臨み借馬を雇ひ、武器を損料にて辨じ、唯夫を言草にして、知行所へ御用金を當て、平日奢侈にて困窮せし埋草にし、上の爲に恨を民に結ぶ事あるまじとも不レ被レ申、粗衣粗食の被二仰出一有レ之候得ば、公に出ては木綿を着し、家に在ては縮緬を服し、夫は津綟子の肩衣を製し、妻女は金襴の帶を買ひ、出仕には燒味噌の辨當を携へ、家に歸りては非時の珍味をつらね、毎夕の遊宴を設る等の儀、上下一同の流弊に相成、奢侈に在て奢侈を知らざる事、魚の水中に在て水を忘るゝが如く、公を次にして私を先と

するを、世間平生の事と心得る世のあり樣に候得ば、中々當り前武備儉約等の被仰出抔にて、行屆可申儀とも不覺事に候、琴を調べ候もの、極々調子の諧ひ兼る時は、不殘緒を解き、張り直さねば諧ひ兼るよし、天下の事も此大弊を生じ候上は、斷然として大改革を施し、大體より建直し、世間の人心より一變せざれば、中興の盛なるを致す事、難かるべき儀と奉存候

一　近來段々被仰出有之御樣子を相伺候に、右御改革の思召無之にはあらざれども、此天下の大なる上にて、下々の困窮を御救被成度思召候ても、御救被成候事思召通十分に相成兼、外夷を斷然と御處置被成度思召候ても内々武備御整被成兼、大に經濟向の御取締文武の御引立、邊地御開きの思召有之候ても其人物無之天下の奢を止め、素朴の風に御引戻被成度、色々被仰出有之候ても具文のみに相成、實効相立がたく候は、皆天下の人心より御引直し被成候御手段無之故に奉存候

一　此人心より引直し候と申は、甚難き事の樣子にて、甚易き事に御座候、上の御誠心薄く、御踏込み不足しては、日々百度も被仰出有之候共、徒に文具にのみ相成行れ兼る故、人々難き樣に存候得共、誠心を込十分に踏込候得ば必行屆き申候、誠心を以て踏込、己々が心次第にて相成事故、其氣に相成候得ば、存の外容易にすら／＼と行れ候ものに御座候、古人も陽氣發處金石亦透、精神一到何事不成とも申候、扨又此誠心薄く、踏込不足故は、天下の利害と銘々の利害と、心に徹底不致故に御座候、乍去當時重き御方々樣は不及申、輕き者迄も此勢にて天下泰平、決て危亂の心配無之

事と心得候者は一人も無レ之、何れも兢々の心を抱き申候得共、只如レ此にては、行々の難難レ計抔と、夢現の様に覺え候而已にて、行々屹と天下の大害と相成、銘々もその大害を蒙るべき事とは不レ存候故、此時勢に及び候ても上は姑息を事とし下は身の勝手を謀り安閑として富貴を貪り、妻子眷屬の榮耀を事とし打過候、若此通紀綱解弛四海困窮し其上に此度の天災等にて諸家彌窮迫して、財用の出方別に無レ之、上は無レ據領分知行の民に取候より外は手段無レ之、其處より人心も恨み離れ候樣相成、上より無理を申せば下は輕侮の心を生じ、先當年抔は幸に作方も可なりに候間、不足を申ながらも落着居候得共、萬一不幸にして近年の内にも凶歳に出逢候て、强訴押借は不レ及レ申、撰打潰し等の儀も起るまじきとも申難し、古より左樣の事より追々增長して、國家危亂の基となりし事其ためし少なからず、此至治の時に當り左樣の儀は毛頭あるまじとは存ずれども、禍の發するは不慮に突然と起るもの故、萬一右樣の儀も出來候はゞ、上に御大變を貽すのみならず諸御役人下々迄も、安閑として榮耀を極め過さるゝものにてはあるまじ、されば是自然其身の大害となる事なり、譬ば此度の如き地震に逢ひ、初より家の潰れ倒れん事を知らざれば、早く駈出し逃るゝ暇も無レ之、禍に逢ふなれども、若早々家の倒るゝ事を知りたらば誰か家に在て其禍に逢んや、されば天下の事も其通にて、實に我身の大害と心付ば悠々として居らるべき筈になき事なり、故に先よく／＼靜に人々心に熟考して、此形勢にては我身の害になるやならずやと御思慮ありて、彌大害になると申事を心に徹底せらるゝ事肝要なり

一　扨此處御心に徹底し候はゞ、地震に潰るゝ家の下に在て其禍を逃るゝ如く、此大害を免れんと誠心より踏込給ふ樣相成申べきなり、又此通誠心を以て踏込、良策を求め給ふ時は、夫々工夫の付ぬ事はなし、「心誠求レ之、雖レ不レ中不レ遠、未レ有三學レ養レ子然後嫁者一」と申て、誠心より求る時は工夫の付ぬ事はあらず、子の養ひ方を學で嫁入はせねども、子の出來るに至りては、其子の可愛さに、誠を以て取扱ふ故、飢寒させぬ樣に行屆となり、扨又一體何事をするにも、心に覺悟を極め候はねば、事を遂る事は難きもの故、宋人蘇軾も「陛下不三先自斷二於心一、雖レ有二伊呂・稷契一、無レ如二之何一」も申たり、されば右の通御誠心より御踏込付たらば、早々覺悟を極め給ひ、斷然と決行あらせられ、此大禍を免れ、天下泰平の基を開き、幾久敷國家と共に繁昌すべき大改革をなさんと、決心して思召込るべし

一　此御覺悟極る上は、大改革をなし給ふ手順也、何事を致すにも手順と申事有レ之、施し方順を失ひ候ては、如何なる美事も行れ乘るものなり、ましてや此大改革をせんとならば、先其根元より直し始めねばならず、平素藩中抔の及二困窮一身上取直し等の儀ならば、麁服・麁食を用ひさせ、普請・遊興をやましめ候類の世間通例の事を施し、御身をつめさせらるゝ抔と申事にて行屆き可なれども、此大弊を生じ大害を萠し候に至りては、中々左樣の儀にては引戻さるゝ儀とは不レ覺候、是を病人に譬候に、平素少々の鼻風を引候位に候はゞ、藥種屋出來合の風藥妙ふり出し抔と申ものを買用ひ候ても事濟可レ申候得共、傷寒大熱時疫の類の大病に至りては、中々左樣の事を致候内には病勢進み終に命を落すに至り

候べし、早々名醫を迎へ病根を審にし汗吐下の活法を施し不レ申候ては助り不レ申候、されば天下に於ても此大弊を改め大害を除き給はんとならば、先當時の大弊を生じ、財用不レ足して武備不レ整、人物乏しく命令行れざる根元を御穿鑿あらせられ、其根元より御直し無レ之ては中々參る事にては無レ之候

一　扨其根元と申候は外の儀にあらず、當時人情輕薄に相成、忠愛の心入薄く、只銘々身の用心致候、て、御奉公向は次に致し、甚敷に至候ては、上を掠めて我身を利し、上の威を假り諸侯をゆすり、賄賂を貪りて民の難儀をも顧みず、恨を上に結ぶ事を恐れざるより起り候、又如レ是人情輕薄に相成候根元は、廉耻の風絶果、上下隔絶致候より起り候（此廉耻の風と申は、從來我皇國の美風にて、天孫以來代々に養ひ置給へし處にて、上下近く、君臣一體、下情よく上通し、萬民の疾苦をいたはらせられ、太平の基を開き給へしは、三河以來の御家風にて、神祖の尤御心を用ひ給ひし處なり、古記をよく／＼心に入て讀候得は相分る事なり、されば此二ヶ條は國脉の第一にて大切の事なり、是をおろそかにするは國脉をちゞむる道なり、恐るべし）此上下隔絶廉耻の風絶果候根元は、内重の弊より生じ候、此内重の弊と申候は、諸役人權威につのり、公儀を廢して私恩を貴び、唯我門下に立入る者か、上官の口入手引有レ之ものを引上げ、權門に奔走せずしては、奉公も出世も出來兼る故に、人々袂にすがり、膝元に拜伏して心願筋を申立、人の見る前をも憚らず追從輕薄するを、精勤すると申様成惡風に相成、其下々も又其心にて其下を取扱ふ故、少し目上に向ひ存寄にても申ものは、不穩氣質抔と一生のけものに被レ致候様なる處より、人々耻を忍び、只上官の氣に入候様にとのみ心掛、終には耻と申事は心に忘れ、如何なる見にくき事をしても、立身出世さへすれば、人に向ひ榮曜らしく誇り高ぶり候間、人もまたそれを羨み、段々其所行を學び候所

より、果は一同の風となり、學者迄も世に容らるゝ事を門人に敎ゆる樣に成り、諂諛をするを耻と思ふ者一人も無きに至れり、かく諂諛盛になり候得ば、自然と上官の氣に入まじき事、或は上官の非を擧て直言する抔は、馬鹿ものとして人々忌嫌ひ、唯其功德を譽むるもの計に成行ければ、上官も自然と我不行屆の事あるは露計も悟らず、我壹人天下の賢才の樣に存候て、今の貴人我家來や我下役、或は下賤の者は皆我養を受我差圖を受るもの故、我より智惠も器量もなきものゝ樣に見え給ふとみゆれども、天より賢才を生ずるに、家柄にかゝはる事はなき故、下々とても賢才いくらもあるなり、其上貴人はたとへ如何なる御美質にて、才氣も備はらせられたりとも、深宮の内に人となり給ひ、かしづく人々雍閉して、下樣の事は御耳に入ぬ樣にする故、あらせらるゝ才氣も自から働き給はぬ樣成候は、古今の通病なり、ゆゑに古の明君賢將は必我賢才とは思召さず、御身を遜給ひ、賢才を選擧て、我に及ばざる處を正さしめ、諂諛するものをば悅び給はず、千人の諾々は一人の諤にしかずと仰せられたり下情を探る事は無之故、自然と上下隔絕致候樣相成候なり

一　扨又内重の弊を革め申とて、其弊の生ずる根元を探り、また古人ヶ樣成時に出て、其弊を改め救はれたる成法に倣ひ申さずして、只見留も無之、私意を以てこね返しては、徒に紛擾を增すのみにて、成効はかたかるべし、此弊の根元と申は、皆御先祖樣の御心を用ひ給ひし御美政より生候儀にて、其譯は昔織田信長公天下を經略し給ひし時、攻ては取攻ては取、其地を我物にし、其臣下に與んとせられ、果ては孤立の勢となり、功業つひに不果して、半途にして沒せられし故、豐臣太閤は攻ては降し、降しては與へ、大諸侯を多く拵らへられしにより、尾大不掉の勢と申て、獸の尾身體より大き過て、振廻し出來兼る如く、天下の諸侯自由成兼、二世にして滅びければ、その處を東照宮樣御明智を以て御察被遊、御二代御三代樣御引續き、此思召を被爲繼、大諸侯罪ある時は、少しも無御用捨御取

潰し、綱紀なければたちまち斷絶被㆓仰付㆒、或は兩三人の子供へ分地被㆓仰付㆒、其上隔年の參勤交代御手傳課役等にて、成丈諸侯の力を弱め、その牙角をくじき候樣被㆑遊候は、是皆天下泰平人民至治の恩澤を蒙る樣にとの厚き御仁心より出たる御政なり、乍㆑去外を輕くすれば、內の重くなるは自然の勢にて、其弊を生ぜんとするに當りて改正し、釣合を取直し、萬代不朽の功業を立給ふは、御子孫樣方の御持分に候を、享保の頃御上にて爰の處御心付被㆑遊候と相見、室新助上書の內にも、參勤の御ゆるめ方御尋有㆑之樣子に候處、可㆑惜は新助實用の學識乏しく、右の御尋に本づき、諸侯の力を養ひ、內外の釣合を正す處には不㆓心付㆒、只舊習に因循し、御止め申上たりと相見え候、夫より以來右の弊彌增長、當時に至候ては、國持大名といへども、御役人に詞を返す事も出來不㆑申、其他の諸大名、或は旗本の人人に至りては猶更にて、見請候ては御威光らしく相見え候得ども、果は前文に申候通、人々諂諛を事とし、上下隔絶致候樣成行事也

一　此弊の根元明らかに相知候においては、古人の成法に倣ひ、挽回の策を御處置あるべき事なり、唐土歷史の內を熟考仕候に、當時にて倣ひ給ふべき成法は、漢の光武皇帝の天下を再興し給ひし御手段なり、其譯は當時の內重の弊に、前漢の末と勢ひ相似たる故なり、初秦の始皇帝孤立して亡びしに懲りて、漢の高祖多く大諸侯を封じけるに、尾大不㆑振の勢になりて、終に吳楚七國の亂を生ぜし故、景帝・武帝の頃よりして、諸謀臣皆諸侯を削り弱むる策を言上し、色々の咎を以て諸侯を抑へ、諸侯の力

を弱くせられければ、諸侯の亂は無けれども、成帝・哀帝の頃に至り、内重の弊を生じ、果は大權王氏に歸して、王氏の氣に入らぬものは、立身も出世も不二相成一樣に成行候間、孔光・張禹・谷永・劉歆が如き、其頃の大儒と呼るゝ人達迄も、皆諂諛するを事として功德を頌し、諛言朝廷にみちて、下の疾苦上に聞えず、上下隔絶、廉恥の風絶え果るに至りける、是當時の弊によく相似たり、光武此時に當り、此弊を改むるにいかなる手立を用ひ給ひしと尋るに、廉恥の風を勵すと、下情を通じ民心を結ぶとの二つを以てせられければ、終に天下を再興し給ふに至れり、扨其廉恥の勵し方は如何と尋候得ば、其時分に嚴子陵・周黨と申す隱者ありて、平日富貴を心掛ず、己が操を正しくし志を高く致候ものにはありける、光武不時に此兩人を召させられ、丁寧に御取扱有レ之候得共、兩人とも志を屈せず、仕を辭しければ其意に任せられ、厚く賞せられて多くの賜物あり、禮を厚くして宿次馬を賜り、故鄕へ送り返し給へり、扨此兩人操を正しく致候迚、元來通材達識と申にも無レ之候得ば、被レ爲レ召候迚國家政治の御役には相成間敷候得ども、唯富貴を目がけず、權門に奔走せず、己が操を守る處を賞せられ、天下の人をして自から諂諛輕薄の耻べき事をしらしめ、廉恥の風を引起さんとの思召とみえたり、さればこそ後漢の世は殊の外節義の風盛んにて、人物多く出で、公家の爲に力を盡す風儀とはなりたるなり、夫故其頃任延と申人、忠臣は私せず、私臣は不レ忠、正を履み公に奉ずるは、家來たる身分の取守りなりとて、直言を申上し如きものも出たるなり、其下情を通じ民心を結ぶの御手段は如何と尋るに、光

武即位の始め、伏湛と申人平原の大守として、天下兵亂の節に當りて、獨百姓を撫安し、下々の手附手代の輩迄も皆信仰して、一境の內安く治りければ、忽ち召出されて尙書と申役にせられ、無レ程宰相の任を被二仰付一、又卓茂と申人は民を視る事己が子の如く、善を以て民を敎へ導き、敎化大に行れ、道に遺れたるを拾はずと申程なりしかば、忽ち擢でゝ大傅と申重職に任じ、褒德侯といふ大名に封ぜられ、しかのみならず、百姓を取扱ふ小役人の員數を減じ、民をして勞擾の患をまぬかれしめ給ひし類、皆下情を通じ百姓を寬息し、其心を結び給ふ政事にあらざるはなし、かく廉耻の風を勵し民心を結ぶの政を行はれ、內重の弊を變じて諂諛の風改まり、下情も隔絕せざる樣になりたればこそ、中興の業を開き、後世迄も建武・永平の治と申て、鑑ともいたす事なり

一　かゝる目出度先蹤もある事なれば、當時此大弊を改め給はんとならば、第一に材能ありて權門に奔走せず、操を正くして富貴に目をかけざる、公儀を先として私利を耻るもの、大小名又は小役人の內にもいくらもあるべし、（光武は嚴子陵・周黨を民間より擧げられしを、今大小名小役人と申者、當時は封建にて時勢ちがふ故なり）それを選び、人にも目立程に御引上げ、若其人高尙の志を抱き屆せざる時は、其まゝ深く賞せられ、（これを御威光にて是非引出さんとすれば、無レ據出すべけれども其人輕くなる、世人の引立に成らず）權門に奔走し、袂にすがり膝元に拜伏し、耻を忘れ立身出世を求め、公儀を後にして私利を心掛るものは、決て用ひ給はず、（奔走せぬものを折々引上げられても、又奔走するものも折々用ひらるゝ事あれば、人々奔走のあしく耻べき事といふ事をしらず、世間の風儀は直らず、故に奔走の士は決て用ひられざる樣にすべし）其上甚しく耻を忘れて立身を望む輩あらば、その惡風を咎め、勤向に付金銀を貪り、上の御外聞を憚

からず、諸侯或は下々を掠るものは、屹度御穿鑿ありて、其罪を正さしめ給はゞ、人々廉耻の風を勵し、公儀を先にし私を後にする樣に可ニ相成一候、扨又右の通廉耻を辨へ、公儀を先にし私を後にする心持の人を御用ひ、民ありての君、民有りての國にて、天下の民心離れては、君でもなく、國でもなくなり候程の民心は大切なるものにて、その民を治るは、上は申に及ばず、諸大名諸役人迄の職分にて、此職分を闕ぎては天道もゆるし給はず、國家の御爲と不ニ相成一、依レ之身分も不ニ相濟一と申儀をよく／＼呑込せ、民を治むるは上の御職分と申儀、古人天工人、其代レ之と申すより、聖賢世々に懇々と説置れ候儀にて、是より不ニ呑込一しては、誠心を以て政事を取扱ふ事難き故なり、其上上の御職分なれば、下々迄もみな銘々の職分なる事をも心得ねばならざる譯なり、いかにとなれば、人君天に代り民を治め給ふに、一人にて御手屆き兼候間、諸大名に地を分て治めさせ給ふなり、諸大名も又一人にて國中を治め給ふには、御手屆き兼る故、諸大名家來を多く遣ひ治め給ふなり、奉行代官は皆上の御手代なの、たとへば主人呉服屋商賣なれば、其家に勤るものは、番頭も手代も、若者も小供も、飯焚も荷持負ひも、皆呉服商賣なるがことし、此例にて押せば、御上へ御奉公申すものは申に及ばず、士と唱て諸侯に奉仕する輩、何れも民を治むるを職分とせざるはなし、是をよく呑込ぬ故、民は只年貢を取我用を足さするものとのみ心得、やゝもすれば虐使して民心を失ふに至るなり、故に是を呑込ませする事肝要なり　奢侈遊惰にして困窮に及び、民に用金など申付、除邑錄などを見候に、領中不取締百姓不レ治罪を以て、改易に仰せ付られたる諸侯往々見ゆれば、民心を失ふものを罰せらるゝは御祖法也　公事訴訟の取扱不平にして、民を苦しむる事あらば、其事の大小により嚴罰を下し給ひ、小吏の民を掠むるを嚴重に罪せられ小吏の民を掠むる事、上官の人は一向しり給はぬ事なるべけれども、近來は至て甚敷なりたるよし、よく／＼御穿鑿あらば分るべき也、先一二ケ條承りしまゝをしるす、小吏皆手先と申ものを遣ひ、此手先に遣ふものは、みな所の惡黨にて惡黨に仲間ある故、下々の惡事もしる樣なれども、元が惡黨故惡事をする也、或は賄賂の取次を事とし、或は盜賊壹人あれば、其盜賊を處々引あるき、其盜たる金錢にて買物せし所は、皆引合として呼出、江戸迄も呼出、數日宿つめ杯させる、わづかの端錢にて、不存して賣たるも、左樣なり候得ば五兩も拾兩もかゝるゆゑ、無レ據手先を頼み、小吏に賄賂を遣ひ、手先にも謝禮して其名前を除き貰ふ類、中には賣もせぬもの迄も引合に付け、賣らぬと申候ても、首を切らるゝものゝ申言、間違あることなし抔と申候て、無理に引合にする類もあるよし、以前問屋御取上げ、下々難儀に及候に付、其後難レ有思召を以、不レ殘御取潰し相成候處、又々御取締筋などゝ、奸商の詞を助け取なして再興致し、奸商利をしむるの手傳をして、下方難儀に存候間、御免願出候得ば、いつ迄も引付置、賄賂を迎ひ、宿賃雜費數千金を費させ、又公事訴訟に出るものも、譯もなき事を七年八年も宿詰をさせ、大

金を遣はせ、手寄を以て進物を送るを待などの類いくらもあるよし、是皆上の害に根を民に結ぶなり、此輩私をする事は穿鑿にも不レ及、わづかの御苑行にて、大造にならしをいたし、家宅拆掃へ居るにてもしるゝなりなば天下の耳目も一新して民の疾苦も上に達し、上の思召も下にとゞきて上下一致に相成、如何様飢饉に及び候共奸黨邪謀を以て誘き候共外夷邪法を以迷はし候共、民心固結して、決て上を後ろにし候事は有レ之間敷候

一　右之通にして天下廉耻の風盛に、人々公を先にして私を後にし、人の見ぬ處にても、上の御爲に精心を盡し、我家の事を所置する如くの心入に相成、天下の人民はひたすら上の御恩意をいたゞき、上の命令を守る樣相成は、是は世俗の詞に申本氣になる也、天下一同本氣に成りし處にて、大御改革を被二仰出一候得ば、上の御爲には火水の中にも飛込勢にて相働候故、何事をも被二仰出一候共、事の立ぬと申事は無レ之、人材も自から生じ候樣可二相成一、此根本を被二差置一、末より被レ成二御直一候ては、如何樣御心配御骨折御座候ても、皆有レ名て實なき事に相成、天下の御益には不二相成一と奉レ存候

一　右の通根元より御振ひ、人々本氣になり候上、大御改革被二仰出一候ても、御手段は數々と奉レ存候得共、一々相認候には事も長く相成候共上右根元の策思召無レ之ては、末事を申上候ても御無益の儀、且却て事成就不レ仕候ては、大敗れに可二相成一も難レ計に付、只ヶ條書計左に相記申候

一　御經濟御取締之ヶ條　御奥向女中三分一に御減少之事　諸役所を減じ候事　役所人別減じ候事　無用の費省き方之事　凶年には禮を殺と申事　普請を手輕にする事　奸賊贓之罪を嚴にする事　天下の財源を開き、融通を便にする事

一　奢侈を禁じ、風俗を正すヶ條　諸侯藩中家内國に可ニ差置一事　手明御旗本衆十里四方へ住居之事　三千石以上無役の人家來陣屋住居之事　諸侯の居邸陣屋造り之事　章服制度之事　諸大名供連、并手廻り陸尺渡り仲間之事　遊所場平人と入交り候を禁候事　寺院御取扱之事

一　人材取立、并選び方之ヶ條　文學所之事　武學所之事　洋學所之事　奇材異能之士選擧之事

一　海防之ヶ條　天下の諸大名身上爲ニ取直一方之事　御旗本衆身上爲ニ取直一方之事　天下之人民身上爲ニ取直一方之事　處々へ防禦人數置方之事　大艦大銃造り方之事　夷狄御取扱之事

一　邊地開き方之ヶ條　山林川澤を開くに手順ある事　人を集る仕方之事　目前之利を計らず、邊防を主とすべき事　大艦を造るべき事　邊防武備之事

一　雜事之ヶ條　金銀米穀之事　常平倉之事

右は先荒增に御座候得共、前文も申上候通、人々本氣に相成不レ申候て御改革被レ成掛、半途にして廢候ては、却て後害を生可レ申候間、御手を附られざる方可レ宜と乍レ恐奉レ存候、本氣に不ニ相成一人を集て改革仕候は、朽腐れたる木を集て家を作るに異ならず、家が出來仕候ても、大風にてもあれば忽ち倒て、却て人の怪我仕候基に相成候如くに御座候、右故前文人を本氣に仕候策計相認候、乍レ然ヶ條書の角にも愚存御尋に候はゞ、委敷相認め可ニ差出一候、以上

卯十月

新政談（一名芻言）卷之一　終

新政談 一名芻言 卷之二

一　都て天下國家を治るの手段、先我志を定ると、一國の是とする處を明らかにするとに有レ之候所、前文申上候通御誠心より御踏込、是非大御改革被レ成候て、風俗より御改可レ被レ成御覺悟にて、御取掛被レ成候處則志を定るにて、其材能ありて權門に奔走せず、操を正しくして富貴利達に目をかけず、公儀を先にして私利を耻るものを賞し、權門に奔走し袂にすがり、膝元に拜伏するものは決て用ひ給はず、其上にも甚敷出世を願ひ、私利を營むものあらば、其罪を正さしめ給はゞ、上の御貴び被レ成候所は、廉耻節義の士に有事、下々にても呑込、皆々其處へ心掛候樣相成べし、是一國の志も定まれるなり、乍レ然上にて如何樣思召込れ候ても、下々にて應ぜぬ事有レ之、又は色々異論の生ずる事も有レ之ものにて、其節迚も是にては參兼る事と御疑念の心を御生じ被レ成候樣にては、百年立候ても事の定ると申事無レ之、あちらへ倒れ、こちらへよぢれ、果は萬事瓦解して、なま中改革を始めざるには劣り候樣成り行、千歳の笑草と相成申候間、一旦改革に取掛候上は、何所迄も精神を籠、根づよく思召込、若此事成就せざるに於ては、士道不二相立一事と被二思召込一、一命をも掛候て、決て一寸も退くまじと思召さるる程の儀に無レ之ては不二相成一事、又上の御處置圖に當り、廉耻の心を失ひ給はざる樣にさへ有レ之候

得ば、下は必其正しき風に歸せざる事は無レ之筈に候得共、夫共中には頑愚悍獷のもの有レ之、其教に從はざるものあるべし、是を化するは恩威の二ッを以てするにあり、恩威を立るは賞罰にあり、重賞の下には死士ありと申て、人は必しも利欲によつて重賞を望むにあらず、重賞を賜る事其度に當れば、恩に感じ義にはづみて、勢に乘り命もをしからぬ程になるは人心の常なれば、如何成頑愚のものなり共、此勢におしはめて使へば、思はず知らず其氣になるものなり、夫にて從はざるは罷民とて、役に立ずの穀潰しと申ものなれば、夫を其まゝ差置候得ば、風俗を敗り教化を妨ぐの第一なれば、嚴敷咎て決て許さざる事なり、しかし此賞罰を立たり共、一の信の字を得ざれば行れず、信と申は僞なく間違なき事なり、賞罰の定はありとも、よく廉恥の心を辨へ、公儀に志し私利を營まず、身を捨てゝ御奉公向に志すものも、不吟味にて上へ達せず、千人に壹人たり共、其賞を漏るゝものありては、賞の定間違て僞となる故、下にては上の賞は愛憎に寄て施し給ふ事かと疑て、善に進む儀勢忽ち挫くるなり、此儀勢挫くるもの一人あれば、千萬人丈を見て、愛憎による事にては、我ども望なしと忽ち怠惰の心を生じ候故、千金を費し賜ありても皆むだ事となり、ものを貰ひつゝ小言を申す樣成横道の風儀に移れるなり、頑愚の罷民を罰し給ふも同樣の道理にて、兎角上の命令に從はず、教化を妨ぐるものを罰して、不吟味にて千人に一人にても逃るゝものあれば、是又上の罰は愛憎に寄るかと疑心を生じ、惡に懲るゝ心なく、自分横着をして、どうぞ上の人大目に見て呉ればよきと望みて、上の罰を無

慈悲成事の様に心得恨み、自から慎み戒むる心にならぬなり、一人如レ此なれば、千萬人夫を見て、彼が罰せらるゝも、又上官の氣に入らぬ故なるべしと心得て、只上官の氣に入事を謀りて、果は廉耻の風を失ひ、上の罰は廻り合せの惡敷などゝ心得て、恐るゝ心は無き様に成行、幾百人を罰し給ふとも、上の威は立ぬなり、されば其功罪をよく〳〵吟味ありて、縦と衆人も彼者は廉耻ありて、公儀を先とし私利を營まず、忠義精勤の士なりと目の付程の者は、急度漏るゝ事なく其角を賞し給はゞ、一人を賞して千萬人喜び、成程廉耻の風は無ければならぬもの、私利に耽りては成らぬもの、上の御爲には蔭日向なく忠勤せねばならぬものと存る様に成るべし、殺濆の罷民にて、人の目に付程のものは、よく吟味ありて漏るゝ事なく罰を下し給へば、一人を罰しても千萬人喜び、成程上の御仕置は御尤にて、廉耻を辨へず私利を營み、勤向に蔭日向ありては、決て不ニ相濟一事と存ずる様に相成なり、是を下々賞罰の信を失はずと申すなり、如レ此賞罰の信を失ひ給はざれば、上の賞を蒙りしものは、廉耻精勤の士に相違無レ之と極る故、其ものは別段難レ有事に存じ、感激しては命もをしからずと存る様に成、外より見るものも廉耻精勤は貴きもの、我も盡し候はんと思ひ込、父兄・子弟も己が父兄廉耻精勤なれば、世間へ見榮とし、我子弟廉耻精勤なれば、他人に向ひ鼻を高くする様に成、罰を蒙りしものは頑愚の罷民に相違なき事顯然たれば、人前へは顔出しもならぬ様になり、外よりみるものも、怠惰にして廉耻を忘れ、不勤後ろ暗き事をしては相濟ぬ事と存込、一家親類も他人へ對し面目を失ひ候様成候得ば、

上の賞は極難レ有ものに相成、罰は極おそろしき事と相成申候、是を賞罰行れて恩威立ッとは申すなり、都て褒美と申ものは、あまり度々遣せば、下々夫に馴て、例として取る筈の樣に心得、賜候ても格別難レ有も存ぜず、賜らぬ時には不足に存じ、催促をする樣に相成なり、是を恵に狎と申候、下恵に狎るゝ時は、上の恩澤輕く相成申候故に、宋の太祖は例を申立て恩澤を求むるもの四十餘人を誅し給へる事あり　扨此通恩威既に立に及んでは、一國の志す所廉耻精勤にある樣に相成候、是を誠の一國の志定ると申候、此志定まる上は、今日直に廉耻の心を勵し、精勤する目の付處を教ゆるなり、是を國是を明にすると申候、扨其致方は上御一人より下は小役人に至る迄の銘々職分をよく心得さする事なり、其職分と申候は、前文にも申す如く、民を治むるの天職にて、侍以上のもの御直參陪臣の差別なく、皆是を職分とせざるものは一人もなし、されば銘々其職分を盡さんと存ずるには、政をなさるる上は猶更、今日の事をなさるゝにも、如レ此せば天下萬民の爲に可二相成一やと御思案あらせられ、諸役人も如何致せば天下萬民の爲に可二相成一と思案し、大小名陪臣迄も如何致せば一國萬民の爲に可二相成一と思案し、家内の暮し方は申に及ばず、衣服を製するにも、宴樂をするにも、かくしては此末は天下萬民の不爲に相成事に成行、己が職分を欠くに至りはすまじき哉、一紙半錢の費も天下萬民の爲に惜み、一年片時も天下萬民の爲と存じて油斷せずと申樣に心掛、爰さへ失はざれば、忠義精勤なりと目を付さするは、是を國是を明にすると申候、乍レ然堯舜天下を帥るに仁を以てして、民之に從、其令する處、其好む所に反すれば民從はずと申て、月に百度の號令を出し給ふとも、上にて深く其思召にて、事々に心を用ひ給はずしては、中々下々其心になるものにてはなし、又上にて事々其思召にて、諸事

遊ばさる、樣にさへあれば、下々其心にならぬ事はなき事なり、其上にも民を思はず奢侈を事とし、政事に怠り暴令を施し、萬民に難儀を懸るものあらば、是を罰し給ふは、前文申上候通御祖法なれば、決てゆるし給はぬ樣にあれば、民の爲に心を勞し、己が職分を盡すは、天下晴ての是なる事と相成り、是を國是を明にするといふ、昔漢の高祖楚の項羽と天下を爭はれし、項羽は大勇猛の大將にて、百戰百勝せられければ、只己が勇に誇り、秦の降卒二十萬人を坑にはめて殺し、少しも民を憂ひ人を安んぜんとの心無ㇾ之、高祖は寛仁大度にして、初より恐らくは沛の子弟を安んずる事能はず、恐らくは豐の父老を安んずる事能はず抔とて、只人を安んずる處に目を付居られし故、百戰百敗せられしかども、終に天下を保ち給へり、されば世を保つ領主は民を安ずる心あるとなきとによつて、軍の勝負にはかゝらずと知べし、豐臣太閤は智謀勝れてありしかども、民を安んずる心掛うすき故、二世にして亡び、我神君樣は世を憂ひ民を安んぜんとの御心厚かりしかば、萬々歳の御治世をひらき給へり、然れば世を治むるは智謀にも寄らず、民を憂ひ給ふ所にある事分明なり ケ樣あれば前にも申下情も上通し、民心固結して天下御繁昌の大基本と相成なり、もしまた上にて此國是を明かにし給ふ思召なく、御職分を忘れ給ひ、只御自分の御爲御益とのみ御心掛あれば、孟子のいはゆる王は何を以て我國を利せんといはゞ、大夫は何を以て我家を利せんと云、士庶人は何を以て我身を利せんといひ、上下互に利を日常として、詰る所は國危く、上の禍に相成と申は此事なり、恐るべき事にあらずや

御經濟御取締之大意

一　右の如く上より御誠心を以て踏込せられ、人々廉恥の心を抱き、公儀を先とし私利を營まず、精勤をする樣になり、其人を用ひて大改革をなさんとし、上下一同志も定り、一國の是とする所明かに、皆々天下萬民の爲を心掛樣相成候迚、四海積年の流弊にて奢侈增長して、一同困窮に及びたる上の事

なれば、俄に何事を施さんと存候ても、一事も施する事なりがたし、民を治るは恒産を制し、衣食を足すより始むる事なれ共、是も手屆かず、只當惑するのみなり、乍レ然其手段如何せばよからんと云は、是を疾を療治するに譬ふれば、病に標本と申事ありて、標とは末の事なり、本とは病の根なり、根ありて末は出るもの故、其根を療治すれば、末は從て直るは常の法なり、しかし標急なれば先標を治むと申て、頭痛の根は腹中の毒にあり、腹中の毒を去れば頭痛は止むべし、乍レ去頭痛の強くして堪がたきに至りては、先ツのぼせを引下げて、頭痛をゆるむるより施すべき事なり、萬民をゆるむるは本なれども、此大困窮にて今日にも差支ゆる時に當りては、先其締を付、是をしのぐより手を下さずしては事屆き兼るなり、故に經濟の御取締を第一に致すなり

御奧女中三分一に減少之事

一　奢侈の根元は婦女より起るなり、其故は婦女と申ものは、陰柔にして人に悅らるゝ事を性とするものにて、其上に見淺きものなれば、天下の爲の上の爲のと申事は露ばかりも思はず、只我よき衣を着て人の氣に入りたしの、よき櫛・笄さして人に美しと譽られたしのと申のみにて、人のよき衣を着し、美くしき櫛・笄さしたるを見れば、一圖に羨ましく思ひ、譯もなく求る故、男も愛に引されて、つひに其望を叶ひる樣に成行ば、あれを羨み是を見倣ひ段々增長し、果もなき立派に及ぶ故、夫が一統の風となりて、實用を廢し勤向を缺ても、婦女の身支度をする樣なるあほうものも出來するに及ぶ也、此

奢侈の根元たる婦女を多く奥向に集め置るゝ様にては、本より天下の御爲、上の御爲、露ばかりも存ぜぬ心にて事をなせば、御倹約御取締も中々行届べき儀には決て無ㇾ之、且婦女と申ものは、表向の役人の如く天下の政事に預るものにてはなき故、用向ありとて皆内證の用向なり、内證の用向と申ものは如何程缺たり共、天下の興廢利鈍に預る事は無きものなれば、如何程御加減被ㇾ成たり迚、天下の事に於て差支る事はなし、只其用事迚左右御給仕、御着服裁縫、御守殿等の御贈答等の外は格別の事あるべき謂れなし、左右御給仕御裁縫迚も、御一人か御二人位の御上に付ての儀、其様に多人數ならずとも、御間に合ぬと申事はなき事なり、御守殿御贈答の類は、諸事御省略の上は、御守殿女中も三分一に御減じ、ヶ様成むだなる禮數は不ㇾ殘御省き無ㇾ之ては、御取締成兼事ゆゑ、極御省きあらば、是又左様に多人數掛るべき謂れなし、左すれば四分一五分一に減ぜられたり共、決て御用差支ゆる事無き事なり、其上人少なければ役所數も局數も減じ、又被ㇾ下るゝ御流御衣服、其外被ㇾ下もの迄も減じ候へば、御裁縫も人少にて相濟様に相成、細事に至りては蠟燭・油・湯・薪炭の類迄も減少致す様に相成候間、是に過たる御倹約はあらず、されば先是迄の三分二を御減じ被ㇾ遊候ても、御先祖様方の御時節に比し候はゞ、まだ百倍にも及ぶべし、故老の咄に承り候得ば、神君様駿府に被ㇾ爲ㇾ入候節、折々關東へ御鷹野に被ㇾ爲ㇾ入候節、七人衆と號して古き御召仕の女中あり、夫を不ㇾ殘御供に被二召連一、御左右の御用向は其人に御給仕被ㇾ爲ㇾ在けるよし、其七人衆皆乘掛馬にて御供し、外に女中一人もなかりしよし、

高貴の女中御供をせらるゝに、下女壹人も召つれられざるは、御質素なる事是を以て推はかるべし、されば定て奥向女中拾五人か貳拾人には過ぎざる事なるべし、又承り候に、伊達政宗より毎年茜木綿献上ありければ、本多佐州内意ありて、上樣には國持衆の献上とあればよきものと思召候て、女中方御仕着に御用被ㇾ遊て、茜木綿は女中方殊の外迷惑がり候間、以來は外品と御引替可ㇾ然と被ㇾ申候由、古漢の文帝の盛德を譽て、幸する處の愼夫人衣地を曳かずと申傳へたれ共、我神祖の御盛德に比すれば猶及びがたかるべし、御先祖樣はかゝる御盛德にて、三百年太平の基業を開かせられたる事なれば、夫を御倣ひ可ㇾ被ㇾ遊事は勿論の事なれども、時世も違ひ候得ば、國初の通には參るまじき故、三分の一とは申なり、都て事は貴近より始不ㇾ申候ては、人々心服不ㇾ仕候間、是より先第一に手を御下し不ㇾ被ㇾ成候ては外々行屆不ㇾ申候、平日に心を付候に、諸侯の家中儉約を致さるゝにも、奥向女中より第一減少致されたりと承り候得ば、其事必行屆なり、奥向は其まゝ差置、家中より被ㇾ始候と承り候得ば、必行屆ざるなり、近年上杉鷹山公は賢君の聞えありて、上よりもしば〳〵御賞美あらせられ候程の御人なりしも、其始御取締の御手初は、奥女中九人に減ぜられしより始られたり、十五萬石の御身上にて、九人にせられしは勇斷と申べし、唐の太宗宮女三千放たれて宮を出ると、古人の美談とせしにもをさ〳〵劣るまじと覺ゆ、しかし婦女は譯の分らぬものにて、兎角舊習に泥むものなれば、かく減ぜんとせば色々難儀を申立、あれへすがり是へすがり、其事を覆さんと謀るべし、其謀る所を

遂げすば怨言を出し、浮說を生じ、種々の言をなさんと思ふべければ、中には上筋の御方々へ手を入れ泣付すがれば、其御方も御婦人方なれば、天下の御爲御不爲には、露ばかりも思召なく、只目前の愛に泥み給ひ、色々御嶽願等もあるべけれども、夫にて成規破れ候樣なる未熟の事にては、其他の事は迚も屆くものにては無ㇾ之故、天下の御爲背に腹はかへられぬと申俗言の如く、斷然と行はる事肝要なり、扨又此人別御減じ、江戶人別減少に迄相響き候譯は、下の江戶人別減し方の箇條に申べし

但此策行れ、御奧向幷御守殿三分一に人別減じ候は、御入用筋も莫太の御省略たるべし、されば只今此女中御暇被ㇾ下候に、十分の御手當被二成下一、片付相成候樣有ㇾ之候ても、二ヶ年も相立候內には、其御費たちまち相戾り、其後は莫太の御儉約と相成可ㇾ申候

諸役所を減じ候事

一　都て役所數多ければ入用多き譯にて、如何なる役所にても、役所と相成候得ば、炭も入、油も入、紙も入、筆も入、人も入、小遣も入、疊も入ば道具も入故、取締をする事は、役所を減るが第一の要務たり、然れ共一寸見請候處にては、役所は決て省き方無ㇾ之樣にみゆれども、諸事簡易にして、本氣にて上の御爲と存込働き候者を御遣ひ被ㇾ成候はゞ、其勤向に功者なるものをして工夫爲ㇾ致候はゞ、此役所は彼役所へ併せ爲二引請一、此役所は缺ても無二差支一と申事可ㇾ有ㇾ之なれ共、私共不案內に候間、爰と指して申儀相成兼候得共、一藩一家中數少き上にてさへ、臺所頭を止めて賄頭にて兼帶するの、

奥用人を止めて奥用達にて勤さするのと申様なる儀、随分都合出來するもの也、ましてや天下の數多き御役所なれば、省くべき處の無き事はあるまじ、たとへば御普請あれば小普請方を併せ、御普請方定小屋あれば、外方に御普請あればとて、別に假小屋を建るにも及ばず、定小屋をひろくし置、其内にて切組持運びて建るといたしても事濟めば、假小屋にも及ばず、野扶持にも及ばずと申様成類、其外輕るき御臺所人・坊主衆等の、多き中にはいくらもあるべし、御鷹部屋の類も、右は色々御趣意ありて、下情を試み非常に備へ給ふの類、又は御鷹野雀雲雀等大名へ被レ下候て、御懇意あらせられ候御趣意等もあるかの様に相伺候得共、是も當時は形計に相成居、其實は御規式計にて、何の御益にも不レ相立事故、下情を試み給ふには、好く目の明き、廉耻を辨へ、國家を大切に職分を盡す役人を御選、非常に備らるゝにも、何も御鷹匠計頼みになる譯もなし、御側向・御近習向に其人物を選給はゞ、御事缺はあるまじ、雁・雲雀を諸大名に被レ下候はゞ、諸大名も時々の献上致候は、以前大名參勤の節、御殿山・小菅等へ御迎ひ心にて御成被レ為レ在たる時世の餘習にて、其頃は上下共に誠意を以御心安くあらせられたる事にて、諸大名を懇遊ばさるゝ御手段は御尤に候得共、當時の如く形計、年を追て諸事手重に相成候ては、諸大名も難レ有迷惑に相成候事にて、雙方共誠意を達する道具にも不レ相成レ候間、是等の類は御先例にも候間、御省略中は十ヶ年もさらりと止め、諸大名よりの献上も唯年始計として、其外は相止め、只國持大名衆計國産の品一度と申様に相成候はゞ、是も大概相止候ても可レ然候得共、只京都御

進獻の御拳の鶴は、恭順の誠意を盡せられ候御大切の御祖法に被レ爲レ在候得ば、此御用に相成候分計御殘し、外は不レ殘相止候はゞ、下々も大に助り可レ申事に候、御鳥見餌さしの類在々を廻り、民の難儀に相成候事幾許を知らず、是を止め候も御仁政の一つたるべきかと覺候

追て考るに、火消の事も初は非常の備、御防火の爲にも相成可レ申事に可レ有レ之候得共、只今はがゑん仲間と申者を遣ひ候、是等は皆無賴無宿も同樣成ものにて、火事の間を見て盜みをする事を業とし、少々の火事も大になして、却て下々難儀に及候事なれば、并當代火掛りの手當等を負る而已にて、是等は四ヶ所位に減じ、御曲輪外并武家屋敷等の火事には一切不レ構、只御曲輪御門等の火消のみに相成候はゞ、下の爲にも相成、大分の御省略たるべし、扨又武家屋敷、并町家消火の儀は、下の諸侯の居邸作り方のヶ條に申べし、近頃淺草御門御燒失・彼御門に家續きにも無レ之故、如何して燒け候やと申候所、或人あれは定火消屋根へ登りし故燒ける筈なりと答へ候間、定火消屋根へ登候て燒ける筈とは如何なる譯ぞと尋ね候に、定火消屋根へ登り候へば、立て居り兼る故瓦をめくり、其上鳶口・纒等を突立居るなり、其屋根と申者は皆杉皮か板にて葺有レ之、瓦下にて雨かゝらぬ故ぼろぼろするなり、其處へ風下になれば、火消のもの皆其まゝ打捨て逃散る故、火の子忽ち燒付てやけしなり、是は予が目擊せし處なりと語れり、火消のぼらずば中々燒けはすまじきものをと申候ひき、如何あるや、是等は火事場へ御出役の御方々能々御心を用ひ、本氣にて勤給はゞ、右の利病は相分るべき事なり

役所人別減候事

一　役所人別多きは、むだなる費のある根本なり、故に人數を減ずるは儉約の第一なり、しかし人々道具は有次第にて、明きは無きもの故、減じては間に合兼るかと存ずるなれども、左にあらず、たとへば我々式の家にて纔か十人前の吸物膳を平素出して遣し處を、五人前に致候ても、どうかかうか間に合行ごとく、少人數なればとて前にも申すごとく、人々廉耻の風を勵し、忠精を盡す氣に成りて働く時は、決て御間缺はなき事なり、只武備警衛の場所、或は御政務筋へ掛り候分は減少なり兼る故、其外は其役所々々功者にて、精勤を身に入るゝものを選び工夫をさせ候はゞ減高必いくらもあるべし、手の書けぬ御祐筆、算盤の出來ぬ御勘定人、料理の出來ぬ御料理方等、いくら有ても間に合ふ事にあらず、夫より其職に達し役に立ものを選び、少人數にして精勤次第御心付給はり、御遣ひ被レ成候はゞ、却て大勢にて突掛持にするより間に合ふべきなり、夫を御慈悲などゝ心得て、むだ人を多く差置は、役所を以て御救小屋とするなり、御救小屋は窮民を入るゝ處にて、士を入るゝ場所にはあらず、夫を難レ有儀と心得るは、廉耻を忘るゝと申べし、又御勝手方・御普請方・御賄方に掛り候ものは、是迄上のものを盗み候を役德と號し、公然として耻る心もなく、小給ものゝ事左樣無レ之ては、暮方不二行立一抔と自から許して、餘計掠むるを働の有りと心得、廉耻の風儀を失ひ候て、風俗を敗るの第一にて、又御儉約の立ぬ根元なり、されば此風を嚴敷戒め、少しにても後ろ暗き事致候ものは、忽ち罸を下し懲らし

め給ふべし、乍ㇾ然古は十五俵二十俵にて、諸式も安く世の中も質素故、可なり暮し方も付しなれども、當時は諸式高直にて、世間の風儀奢に移り、中々暮方取續兼候間、中には無ㇾ據左樣の事は耻かしきながらも、共々に致候樣成候間、是迄の人數より三分一位に減じ、少人數にて精勤さする處へは、養廉米として半高づゝも別段被ㇾ下、少しの不調法は、此養廉米を半分とか一年分とか減じ罰とする樣にせば、自から盜みをする風は止みて、廉耻の風興り、御儉約も立べし、此養廉米を被ㇾ下候ても、人數三分一にて相濟候はゞ、尙半分の御益あり、此御人數御減少に相成候もの、幷に御玄關番中の口番、御仲間御小人・御臺所人・御賄方小間遣・六尺・坊主の類多人數の處、いづれも三分の二を減じ、此人數を以ケベル組とし、御先手組・百人組・御留守居同心・火消同心、其外ケ樣の類組合せて貳三千人も拵へ、七八十俵百俵二百俵位の處より出たるものと、諸組與力を組合せて騎馬隊とし、平日に調練して、常は所々の御番所等に遣候はゞ然べし（高に不同あるは、先其儘持高にて爲ㇾ勤、後は追々歸ㇾ一樣にする手段有なり）御旗本の馬取をケベル組にして調練させるは事體を失ひ、實用の役に立ぬ譯は、下の武學の條に申べし、諸役所人少ければ御入用も減じ、人少なれば事簡易ならざれば間に合ず、事簡易になればば物もかゝらず、諸式とても三十人にて遣ふと、十人にて遣ふにては大造なる違ひなり、橫行なる役德は罰せらるゝにしても、輕き所に至りては少々づゝの役德なしとは申がたし、是も三十人にて取ると、十人にて取るは大なる相違なり、古へ馬を養ふもの、口付中間馬の食を掠めて馬を瘦せさする事を憂て、別當を立てたらば猶々瘦せたり

に随ひ、段々殖たる事と見えたり、手數さへ省ば少人數にて濟事、是を以て知べし

其頃は御役名も、役々の人數も、至て少なき事にてありしが、後世に至り物事手重く、手數かゝり候

第一の良法とす、且ヶ樣に諸役所人別の多く成たるは近頃の事と見え、私家に延寶の武鑑有レ之候處、

と申如く、人數殖候得ば夫に隨つて掠る處も多く成ものなり、故に取締をするには、人數を減ずるを

無用の費省き方之事

一 天下の大なる御身上にて、財用の足らぬ筈は無き事なるに、不足すると申は無用の費多き故なり、

無用の費は人しらずして增長するものなり、是を我々式の貧家にて推し考ふるに、その始め極々取續

きの始りは、一年の入用十四五金か二十金に過ず、其節は一年中衣食の費、妻子の入用、世間の突合、

共にならして十五兩か二十兩の内外にて十分事足る處、追々入目も多く相成、百金以上にも成、衣食の

事も缺ぬ樣になれば、色々の望み榮曜の心出來て、入りますく多き程望み彌大きくなり、いくら入

ても十分には屆き兼る故、入用の節無き事とは不レ思して入ヶの不足なりと、取れば取る程貪る心出來

て、貪れば貪る程入用不足に相成ものなり、是を始に立戻りて考見れば、最初十五兩か二十兩の身上

の節とても、まさか寒さに裸にて居もせず、飢るに不レ食して居もせざれば、後には知らずして無用の

費多き事推て知るべき也、古へ御創業の御時節は、軍馬の事もいまだ止ず、御城の御普請、諸士の御

手當等、不時の御物入幾許もしれぬ事なるに、其頃は未だ天下の御取箇筋も、只今の通には行屆かせられず、諸運上御益筋も只今の樣に無レ之事なるべし御身上の行立

ぬと申事は承り及ばぬ事にてありしは、無用の費なき故なり、（昔御玄關ゐ武家、古き册板にてありし由、是にても古へ質素の御美風押はかるべし）されば用を足すの仕方は、無用の費を省くにしかず、扨右の通奧女中を減じ、役所を減じ、其上役所勤の人別を減じ候はゞ、無用の費大半は減ずべきなれども、諸役所仕來の常例常格に依て、無用の費は必ずあるものなり、夫を減ずる仕方は、直に其役を勤るものに調べさするにしくはなし、其局中に在るものになくては見えぬなり、只舊來の仕癖を改るは、人々むだなる事と存候も、互に同勤の前を顧み、押隱し申出さぬもの故、大勢の中にて材能ありて、忠誠無二に上の御爲を存る者を、人數の多寡によりて、三人とか五人七人十人位も選び出し、其ものゝ存寄を以、減じ候て可レ然處を一人づゝ爲二書出一、夫を折中し給はゞよく行屆くべし、其上にて國初の事を思ひ、不自由を忍び勘辨すれば、行屆かぬ事は無き事なり、夫を彼是申候て私利を營む者は、不廉無耻の族にて、上へ忠誠の心薄きなり、夫を罰して忠誠を勵むものを賞し、人を選みて用ひ給はゞ、天下の御入用半分過は減ずべし

凶年には禮を殺ぐ事

一　凶年には禮を殺ぐと申は、定式の御規式も相成たけに御減少、御入用を省き下々をゆるめ候は、古人救荒の一策に御座候處、只今凶年と申には無レ之候得共、かゝる御時節に候得ば、其例に準じて成丈御省き上下をゆるめ候儀肝要と奉レ存候、萬一重立候儀にて止切に相成兼候儀は、先づ十ヶ年も御年限を御立御止め、或は皆止に相成兼る儀は、事を御省略ありて然るべき事なり、三季献上を始とし、時

献上の類不ㇾ殘相止、只年始計、拜領の品も御暇の節計、是等も無用の費を省き、諸事御手輕に相成、
國持大名は時献上の形を存し此表にて調達、國產と稱する類の形容計の儀は相止、手輕の產物一度づつも、恭敬の心を盡し候迄に献上致させ、其外御能拜見等よりして上下共に手數かゝり物入候儀は、一切相止候ば多分の御費相減可ㇾ申候

但平日御料理頂戴の儀、是を禮儀と申すは無ㇾ之難ㇾ有儀に有ㇾ之候得共、日々大分の御費も相掛、其上人數も相掛。多人數にて致候得ば、例の役德にて猥りの費多き事に奉ㇾ存候、銘々廉恥の風を勵み、精勤致候心に相成候上は、飢さへ不ㇾ致候得ば、御湯漬に相成候ても、不足あるべき謂れ無ㇾ之候間、是等も相止み候はゞ、御臺所諸色も人々も多分相減候ても、御間に合候樣相成可ㇾ申候間、御料理の御入用計には無ㇾ之、大分の御費相省け可ㇾ申候、右の外にも手數相掛候事は却て費あるゆゑ、萬事簡易に手數相減候樣致事、無用の費を省く第一の心得也

普請を手輕にする事

一 天下の大費は土木遊宴にしくはなし、乍ㇾ然當時は御遊宴はすきと御嫌ひ被ㇾ遊候御樣子にて、大造なる御入用らしき儀も不ㇾ承及、天下儉德を仰ぎ奉る事なれば、御省略可ㇾ被ㇾ遊樣もあるまじ、只土木の事に至りては、上の御好に出ずとも、年々無ㇾ御據ㇾ御造作も夥敷事なるべし、其上此度大地震に付ても、諸々御門々々は不ㇾ及ㇾ申、御櫓其外塀、石垣の類、大破に及び候處も多く可ㇾ有ㇾ之、是等は成

外見に丈ヶ御手輕に被ㇾ爲ㇾ遊、石垣外闇塀等の無ㇾ御據ㇾ場所は盡く御取繕ひ、内向御要害一式にて、外見に不ㇾ相拘ㇾ候場所は、丈夫なる板打柵塀にても相成、御門の渡御櫓等は御要害とは乍ㇾ申、國初とは武器の樣子も替り、當時にては火器盛に相成候事故、右の類は却て御無用心たるべし、丈夫なる柱を掘込に致候冠木御門に相成候はゞ多分の御費も相省け可ㇾ申、其外委敷相認候ては事くたくく敷御座候間、此心持にて諸事御省略に相成候ば、御用途相減候第一たるべし

伝承り及候得ば、下方普請と違ひ、上の御普請と申候得ば、柱一本にても大金相掛候由、去とて下方よりは御定直段と號し、押買同前に引上候間、高直に賣候にも無ㇾ之、物毎手數多に成候て、取扱ふ人々例の役徳を多分する故なるべし、是等の御取締は下の奸贓之ヶ條に申べし

奸贓之罰を嚴にする事

一　奸贓と申は、只引負をする事計には無ㇾ之、奸計を以下を虐げ賄賂を取り、役徳を貪りて上を掠め、或は盜賊の引合を付け、或は租稅の高下を私し、或は訴訟し依怙を事とし、或は町人と申合、上の威を假り押買〆賣をなし、或は職人と申合、出來の品より上前を取、或は出來ぬ事を存ながら、出來さうに申なし賄賂を迎へ、或者見分と號し辨當代をねだり候類、勘向により種々の巧をめぐらし、上下を掠むるを都て申すなり、此弊當時に至り候ては甚盛に相成候間、下々にて正直にして正路を守り候ものは、度々ゆすりかたり同前の虐を蒙り迷惑し、惡黨は追々緣寅して罪を免るるのみならず、橫

行して人を掠め道を守て身上を果すものもあり、巧を以て身を起すものも出來るは、皆此輩の手に出る事多し、是を深く戒めざれば下々は行立ず、又上の事は金次第如何に成様に心得候得ば、御威光も自ら薄く、罪してもおそれず、賞しても羨まず候様成行ては、下々不取締となるべし、下々不取締にては、無用の入費掛る基となるなり、大意の ヶ條にも申候通、廉恥の風を勵し、諸役人を本氣にさせ給はゞ、此輩如き下々迄大概は風俗も改り可ㇾ申候得共、贓罪を犯し候者は再勤成兼程に、猶更嚴敷制し給はざれば、無用の費取締出來兼るなり、故に別段のヶ條に仕候

但是等巧計を以上下を貪り候手段、中々一々書付候事は難く候得共、前文にも申候通中には小給にして妾宅抔構ひ、大造なる暮し方致居候もの有ㇾ之候間押て知るべき事、御穿鑿あらば忽ち相分る也

天下の財源を開き、融通を便にする事

一 前文相認候御奥女中と申者御城中耳に限らず、御守殿御親藩奥向迄の儀皆其内に有ㇾ之候、是等迄御減無ㇾ之ては御贈答等の御手數省け不ㇾ申、又御城との釣合不ㇾ立候ては、婦女子心服不ㇾ仕、崩れ候基に御座候、諸役所并諸役人無用の費減候儀は江戸計に限らず、遠國諸役所陣屋等迄の儀に御座候、又無用の費を省き候は、民政武備等の正費缺べからざる角を十分に可ㇾ仕との爲に候得ば、其正費の内にも可ㇾ取締ㇾ處不取締にては、矢張無用の費に候間、此等は本氣に成取扱ふ人の心得に有ㇾ之事一々は申述がたき儀なり、此諸ヶ條改まらざれば漏るゝ器に水を入るゝと同様にて、何程入れても十分に滿

る事は無レ之、此諸ヶ條相立候得ば漏るゝ道塞、入れば入る程御經濟建直るべき故、入方の儀を申べし

一　第一天下の身上と申は、四海を一に被レ遊候事故、御米御金の御藏に滿るを富と申には無レ之、天下の富を富と可レ被レ遊は勿論の儀に候得共、御藏空しくては、天下を富すべき御世話可レ被レ遊にも御行屆難レ被レ成故、先財を集る事より申なれ共、「財聚則民散、民聚則財散、長二國家一整二財用一者、必由二于人一」と聖人も戒め置れ候事故、聚るは散ずる爲と申儀を、諸役人にも能々始より爲二呑込一無レ之ては、天職を御缺き被レ成、天道に背き候樣相成、富て天下を失ひし事、殷の紂王・秦の始皇・隋の煬帝が如き其例少からず、恐るべき事に御座候、故に經濟の取締をするは、民政武備其外の政事を行屆かせ、天職を盡す爲にて、金穀を積貯へん爲にあらずと心得る事肝要なり

一　貨財の源は農桑にあり、天下に米穀布帛有餘る樣に無レ之ては、天下の富にあらず、天下富ざれば上も富まず、故に天下萬民をして農桑に力を用ひさする事肝要なり、しかし是は人君の天職にて、前にも申述候通、士以上皆是を職とせざるはなき故、天下の經制を立るは、是より組立るを大法とするなれば、經濟御取締の爲ならずとも、是非是は御勤の無ければ不二相成一譯なれども、夫は天下の大政の上より申事、是は當時の急務より申事にて、天下の大政は古より規範有レ之、世々の聖賢委敷申置れし事に候得ば、是は別に論ずべき事、爰は只御經濟御取締の儀に付て申なり、身上を直すを天下の大政と心得居候樣御覽被レ下候ては、至極迷惑仕候間、能々御酌取御覽可レ被レ下候

但農桑の勸め方、古人の成法も有ㇾ之、一々申候得ば事長く候間別論とす、只其害を除事を一二ヶ條擧て、小民の害をする第一は奸猾の小吏なり、是等の所行、或は村役人と組合租税の高下して、上の間にて利を貪り、或は公事を長引、永く宿詰をさせて民を疲らし、其間に賄賂を迎、諸願も金錢にあらざれば取次ず、罪人も金錢に依て免れ、濟間敷事も金錢に依て見濟、惡黨を手先として上前を取、盜賊を捕て引合を多くし、其外御益を表面にし、運上株式新規開發等と號し、下の難儀をも不ㇾ顧、事情を巧みにし、詰る處は皆己が私を謀る而已にて、上の御益は一分なれば、下の傷みは一寸、其九分は皆奸吏の所得となり、上には一寸の恨みを殘す、如ㇾ此類甚だ多し、其上諸運上諸問屋株式などゝ申ものは、皆〆買〆賣の手段にて、上にあぐる御益は聊の事にて、諸問屋の利益は大造なる事なり、其利益する處は皆諸色の品物に掛る故、物價自から騰貴し、天下の難儀と成なり、譬ば此度の如き大變に候得ば、山方より直樣竹材木の類五艘入來れば、問屋より直に其一艘か二艘へ御用の札打込、御定直段と號し、山方にも無ㇾ之程直安にて引上げ、其品々御用に相成分は、時節柄を申立增直を取、餘る分は高價を以外へ賣出し、又其一二艘御用にて引上候直段の不足を、殘りの三四艘へ掛候間、いくら嚴敷御觸有ㇾ之候ても、高直にならざるを得ず、是にて諸色迄も響き高直に成故、一同の難儀と成、其時は上の御用は下直に納め候ても、詰り一體の物價高直に成候得ば、果は上の御詰りとなる、是は急なる節の奸曲にて、此輩平日皆此手段計致居候、夫を小吏輩賄賂を貪り

見逃し、上へも色々取成、問屋株式等を取建候事、別て近來の流行と相見え申候得ば、是は皆天下の詰りに相成候元に御座候、元祿の比にや、甲州の半紙一手に引請候樣被ニ仰付ニ候はゞ、三千金の御益上げ可ㇾ申と申出候處、時の閣老土屋侯上へ三千金の御益は聊の事にて、彼がメ買をして利する處必萬金に過べし、其萬金品物にかゝれば、天下萬金の損をする也、天下に萬金の損を掛け、世間つまれば上にての三千金に、天下の萬金の恨を買ふ也と被ㇾ仰ば、其事止みしと承候ひき、古人はよく根本に眼目を付られしものなり

一　其次は諸國の產物なり、產物は法度を立て、奢靡無用の品を禁じ、必要の品を多く作り出す樣諸國に令し、諸品物等不ㇾ殘元方國所名前を印るさせ、奢靡の品僞り拵物・濫惡の品拵出し候もの、其處にて吟味し罰を下し、質朴丈夫の品天下に澤山行渡り候樣あれば、天下の融通よろしく財源開くるなり、且はヶ樣に致候ば、奢靡淫侈の源を塞ぐべし、右の通に候得ば米穀布帛、其外日用諸色の品々迄、澤山生出するなれ共、又其融通不ㇾ宜候ては、滯候て捌け兼る故、大船を造り運漕を便にし、諸侯は銘銘出す米穀國產を以て江戶邸の入用を辨じ、上にも國々公領より出る米穀產物を廻船して、成丈公用を辨じ、其餘あるを町人へ渡して賣買せしめ、米は常平倉を都會の場所々々へ建て、其價の高下を制し、諸產物も上より下し給ふ價を時の準繩にして、猥に高利を貪る事を禁じ給はゞ、物價平にして四海富をなし、公用事を缺く事あるべからず、却て一體の物價を平にせず、上の御定直段抔とて、押賣

同前の事を致し、上計勝手宜様にすれば、其時は便利の様なれども、一體の物價騰貴して、詰りは上も高き物を御用不レ被レ成しては不ニ相成一様成る勢なり、爰の釣合は目前の事計考候ものには不レ分事なり、元方より奢靡濫惡の品作り出させぬ様にする事難き様なれども、難き事にあらず、米澤の織物糊を入て沙を加へて、目方を増すを、領主より嚴敷禁ずれば、一切左様の拵物米澤より出ぬにて知るべし、生財に大道あり、作レ之者疾、用レ之者舒、則財常足と有レ之候得ば、右の通財源開け、諸物澤山にて其價高からざるは、作レ之者多きなり、無用の費省けて入用少きは、用レ之者舒なるなり、是經濟立て國用足るの仕方なり

新政談一名芻言卷之二終

新政談 一名芻言 卷之二

奢侈を禁じ風俗を正すヶ條

一　右經濟取締の法行はれて、國用足るの道付たりとも、けふまで天下一體奢侈の風甚しく、風俗猥りに成來りし時世なれば、上にて本氣になり、靡麗の風を斷し給ひても、下々自然と質素朴實の風に移るは難かるべし、又此風俗改まらざれば、上にて如何樣被遊候ても、世界の困窮は改まるべからず、世界の困窮改まらざれば、眞の國用足るとは申べからず、是を改めんとならば、先其源より改むべし、扨江戸は大都會の事にて、萬國の寄り集る處、遊手の民多く、奢侈に移り勝なる地なれば、其風天下に及ぶ故、天下も日々に奢侈になるは勢なり、されば天下の奢侈を禁ぜんとならば、先江戸より始むべし、扨又江戸に遊民多く集る根元をきり候はねば遊民散ぜず、遊民散ぜざれば風俗を正す事難し、故に先遊民を散ずる手段を先とす

一　江戸に遊民多く集る源は、婦女の多きにあり、婦女の多くなるは、諸藩邸にて追々定府を多くすると、奥向追々手重になるとにあり、美麗を好むは婦女の常情、首飾調度衣服飲食に至る迄、新奇流行時を追て增長し、音曲遊宴日々新に月に盛にして、色々の物好を盡し、諸色の賣れる事、水の流る

るよりも速にして、利潤夥敷事なれば、地方の商賈競ひで江戸に來り、法外の大利を得るに任せ、又其金銀を輕視して、分外の侈りを極る故、武家も又その風推移り、遊興さかんなる上に、諸藩困窮すれば町人の力を仰ぎ、金銀の融通する故、其町人の機嫌を取り、勘定奉行の留守居のと申、一文不ㇾ識の了管もなき輩、侍の事體を打忘れ、町人と同樣成振廻遊興をするを突合と號し、公務同前に心得る樣なる、譯もなき事に流るれば、四方の無賴遊手の徒、其甘味を慕ひつどひ來る故、人別年を追て夥敷なる事なり、近來此遊手多く集るを厭て、人返の法令を下し、江戸を拂ひ退くべしと申ものもあり、是は人情事務を知らぬ妄說なり、當時江戸の遊民小商人の類、みな諸國に家あるものにあらず、又家あるにもせよ、俄に追ひ拂ひ村里へ遣し、農業につかしめんとしても、今迄なかりし田地を、左樣に得らるゝものにあらず、是必數萬の人路頭に迷ひ申べし、數萬の人路頭に迷ひ候樣の事をいたし候ては、忽ち一揆流賊となり申すより外あるまじ、是大亂の本なり、又嚴法を設け罪を正し、輕罪のもの及び非人を驅て蝦夷へ被ㇾ遣、開發せしむべきと申ものあれ共、是は秦の始皇罪人を發して長城を築かせて、終に陳勝・吳廣の亂を引出せし故轍なり、都て如何なる事も、無理にては行はれず、勢を以て驅り候得ば、容易に行はるものなり、勢を以て驅るは先其根本を除き、又其末の行き處を拵らへて、自然と自分々々の、才覺を以て、所々へ分れ散ずる樣にするなり、扨其仕方は第一江戸の婦女を減ずるなり、婦女の減じ方先御奧向より始むべし、御奧向の婦女減じ方、既に御取締の條子申述べたり、そ

奢侈の風を禁じ、其後は諸侯幷旗下の人々迄令して、成丈減ぜしめ、召仕婦女何人と申事を書出さしめ、分外に多き分は、尙又御沙汰ありて減ぜしめ、少き分は勝手次第とし、家中召仕の分も右に準じ候て、なる丈減少致候樣令せられ、其上諸侯藩中家內國に差置き、手明御旗下衆計十里四方在住、三千石以上の上は親藩幷御守殿に令して、不殘三分の二を減ぜしめ、下々迄諸事簡易にして事を省かしめ、無役の人、家來陣屋住居等の儀被仰出候はゞ、江戶中婦女大半減ずべし、此婦女既に減ずれば、町人の甘味大に減じ、江戶に在りても大造の利益ある事を得ず、其時に當り是を處置する策なければ、亦一揆の本となるなり、故に是を處置せんとならば、天下の農商を分ち、以來農人商賈となる事を許さずば、江戶の中以上の商人、國々城下婦女多くなり、繁昌すべきをしりて、其便利に從ひ、思ひ思ひに分散移住すべし、又蝦夷地に於て金山・銀山・石炭山、幷新發田地・商賣向等に參りさへ致し候得ば、稼ぎ渡世十分出來て、十分の利を得べき樣に上より手入をし給ひて、手順を付て被遣、直に行ても取つゞくべき形勢を示し給はゞ、江戶は利益なくして取續難く、彼地は利益多くして取つぎ安を見ば、中以下の者は必競ひては彼地に趣くべし、其上にも邊地を厭ひ候者、歸農の志あらば、國々令して、有力の者は居住を與て、自から廢地を耕し、永業とする事を許し、無力の者は夫々農具家作の料を給はりて、耕作をする事を許し、廢地を開くものは、十年の鍬下を給はりて課役を免し、農の大益ある事を示し給はゞ、喜んで農に歸するものも數多なるべし、此三通を以て驅らば何の苦もなくすら

すらと人別減ずべし、然る上にて奢侈を禁じ、風俗を正すの法も行はるべし、藩中家內國に差置方以下の條々、幷奢侈の禁じ方、風俗の正し方下に詳にす

諸侯藩中家內、國に可₂差置₁事

一　飢ゆるものは食をなし易く、渴するものは飲をなし易しと申如く、差詰り困たる時は、大概の事は辛抱する存寄になるは人情なり、一昨年米利堅船始て來りし時は、江戶の婦女不₂殘在て、立退く支度をせしなれば、あの時に國勝手を命ぜられれば、人皆喜で行くべかりしに、其事濟で又尻のあたゝまるに付、國に行は迷惑に思ふ樣なりけれ共、又此度の地震にては、家も傾き住居もならず、苦しむものゝ數多なれば、此勢に乘じ國勝手を命ぜられば、米利堅の時程にはなくとも、平日よりは思ひ切よく、中には喜ぶものもあるべし、諸侯もまた國へ人を遣すには、國元の長屋普請に至る迄物入も多きなれ共、江戶屋敷勤番になれば、普請を極省略して事濟故、其物入高減じ、格別の痛にはならぬなり、もし此時を過し候得ば、人々尻のあたゝまり付、藩邸も又夫々家內持を入るゝ積の普請に物を入れ出來し、又々國の普請をすると云は、二重の物入に相成、差支多かるべし、雖₂有₂智慧₁不₂如₂乘₁勢、今時易₁然とは、ヶ樣の時節を申すなるべし

一　諸藩在江戶にて御役を勤らるゝ時は、其家中にてその御役に掛り候勤致候ものは、大概人を撰み用ひらるゝ事にて、扨人を撰候時は一家中に澤山はなきもの也、其上何れ公邊を勤るものは事馴れざ

れば公用を辨じがたく、國より勤番に出しものにては間に合兼候事もあるべし、是も上より事を簡易にして、手のかゝらぬ樣に被成候て、古への風に復し帳面にかゝはらず、銘々の器量を以て勤る樣になり候得ば、大概は勤るべきなれども、又先例に委敷物馴たるものにあらざれば、勤り兼る役々もあるべき間、御役中は其役々計定府にして、供方番方勝手方は不殘勤番に致候迚、差支なき事なり

一　御役に無之諸侯、家中不殘勤番と申ても、君侯御家内御國元へ被遣候事は、御祖法にて出來兼る勢なれば、其御附奥向を取扱ふ人々、幷留守居の類、長く在府させねばならぬものは、見計ひ一家中に五軒か十軒定府と致し、其役を轉じ候はゞ、又々國元へ遣し、入替り以て可然なり

一　家中勤番多ければ、遊冶放蕩にて身を果し、國へ歸る事出來兼る樣相成、人の損じ多かるべしと申ものもあれども、夫は銘々家中取締の致方不宜、風俗惰弱なる故によるなり、己が不取締を顧ず、大法を難詰するは、廉恥をしらざる申條なり、右の通家中人數を減少し、在府中は繁勤にさせ、物事極々簡易にして、君臣の間を近くし、邸中に大稽古場を立置、君侯始少しも暇あらば、稽古場に出で文學武藝を講究せしめ、婦女を談じ遊蕩を好むを耻とする樣成風儀に仕立、右樣不行跡の者あらば、士仲ヶ間にて齒せざる事に致置候はゞ、門禁なしに放置候ても、左樣の心得違出來るものにはあらず、其上にも極不檢束なるもの、心得違あらば直に國に遣し、格式を奪ふと申樣になし置べし、却て淫欲の事は一度や二度は勘辨すべしと初に許す故、深入もするなれども、初に嚴敷懲し候得ば、はまるも

のには無レ之、其上に勤番者の放蕩人出來るは、大概定府の者手引をするなり、定府のものは暮し方に追れ、幼少より內職にてもする事を覺え、小錢を遣ひ、一文不レ識に育ち、放蕩をするを江戶氣前と心得る樣成もの多く、國より出たるものを田舍者と侮り突廻す故、國者も負ぬ氣に成、通人にならんと心掛る所より、手引して放蕩仲ヶ間に引入るゝなり、江戶者は元より困窮なるもの多ければ、都て自由に金錢も廻らず、故に身を果す程に遣ひ候事も出來兼れども、國者は少しの繰廻も出來る故、人も見継異候て、終には首の廻らぬ借財して、身を果すもの多し、定府の惰弱ものなき家々には、左樣の風は行れぬものなり、其上勤番者と申せば、家內の用事無レ之故、閑暇無事なれば、兎角打寄飲食突合する故、終に遊冶の習も出來るなれば、極人少にして繁勤にし、其間は文武の稽古事に奔走させるは、中々放蕩に志す暇はなかるべし、諸藩の風俗正きは、天下の風俗を正くする根本なれば、上よりも能能令せられ、藩風を正さしめ給ふ可事なり

手明き御旗本衆、十里四方へ住宅の事

一　是も江戶人別を減ずる一策に御座候、古人も既に心付候て、室新助言上仕候事、献可錄の中に相見申候趣左の通に御座候

漢土の中を考申候處に、勿論繁昌の事に御座候得共、群臣の住宅不レ殘城下に有るにては無レ之、帝城を取廻し、或は二三里、或は五六里山野隔候て、方々へ分散致し住居仕候得ば、妻子僮僕等は不レ及

レ申、其外商賣抔も夫に付てすぎはひあり候故、都て諸國より集り申者も、五里七里の外へはふき申候道理に御座候、唯今江戸の繁昌は、日本にては古今無レ之事に御座候、然る處御城下一同に入込罷在候故、是程廣大なる武藏野に候へ共、尺地も殘り不レ申人家と罷成候、夫に遊民惡黨共其間に紛れ居り候故、中々仕置も難レ仕、科人絶不レ申候、是によりて奉レ存候へば、寄合組小普請、其外無役のもの共、江戸廻り五里三里外、又は王子・葛西・戶塚・板橋邊にて、百人二百人程づゝ住居候樣に罷成候はゞ、末々商人の類も夫々付て集り可レ申候間、御城下自然と人少に罷成可レ申候、第一諸國勝手の爲にも宜敷、江戸風俗も改り、又は火事の沙汰も靜り可レ申候

右新助申上候儀、至極便利の儀に御座候、乍レ然是は右組々に組頭支配夫々しかと仕立無レ之ては、風俗も猥に相成、且右樣遠方へ組分けに相成候得ば、其中より人材を見出し、御拔擢被レ成候御仕方無レ之ては、人々捨物せられし樣に存候て、人心自ら引立不レ申、役に立ぬ人物多く可二相成一候間、右の通組分けに相成候上は、文學武藝所其組々にて建立、其頭支配精を入候て、人材を仕立候を職分に仕候て、其内より選擧の法を以差上げ候樣可レ仕、此撰擧の法は、下々人材仕立方の箇條の内に委敷可二申上一候多く御役に立候程のもの上げられ候得ば、頭支配の勤功に相成、二年も三年も、其組下より一人も人材出不レ申候はゞ、其頭支配の不勤に相成、下席へ轉じ候樣被レ遊候はゞ取立方相勵み、其下も器量次第にて出身、御役付可二相成一と心掛け候て、人心自ら引立、風俗もよろしく可二相成一候、甲府・

駿府御番士、幷甲府住宅小普請の面々も、右の格を以御撰擧有レ之候はゞ、是又一同相勵、人材も出可レ申候、京大阪より是迄年々勤番被二仰付一候御番士も甲駿に準じ、彼地在住被二仰付一、年々勤番相止候はゞ、御用途も大分の御省略可二相成一、是も撰擧の法同様、御番頭幷諸司代御城代にて取立候はゞ、只今より人數多被二仰付一候ても、御足し高も不レ及レ被レ下、御入用にも不二相響一、兩所御警衞筋も相屆、兩全と奉レ存候、一體は右の外浦賀・下田・箱館等御警衞の場所は、皆土着に被二仰付一、其近所にて知行所被二成下一輕きものは自分にて耕し且守り候者、多分の御物入も省可レ申候、（若御家人在住被二仰付一候節は、一時に被レ遣候て、事及二雜混一可レ申候間、先場所を極め、一ヶ所二百軒とか、百軒とか地面割を致し置、其後に先小身百五十俵以下とか、三百俵とか申所にて可レ被レ遣、尤年々御手當出候高見積り置、何れも引越御手當家作料として、本高の貳三年分位拜借被二仰付一、夫は十ケ年位の上納として、年々二ケ所位づゝ御拵被レ成候て相濟候ば、又其上何百石迄と申樣にして、追々に致し候得ば、高取の衆御手當多く出る頃に及候へば、先の御手當金追々戻り候間、格別の儀に無レ之樣可二相成一候、扨又右に遣候人々大借有レ之分可レ有レ之候へ共、是を金主損に致候ては人情に戻り、上にて御拂被レ成候へば大造成事にて、御行屆難レ被レ成と奉レ存候間、是は町人共等は御利解、無利足二三拾ケ年賦に被二仰付一、其代り上にて御引受、一錢も損毛無レ之樣御遣給可レ被レ下と被二仰渡一、當人へは御藏米取は御渡方にて引落、地方は國役金同樣爲レ致二上納一、町人へ御下げ有レ之候て可レ然儀に奉レ存候）

右之外三千石以上の人々は、家來陣屋へ差置候樣被二仰付一候ば、在方取締可レ宜と奉レ存候

諸侯之居邸陣屋造り之事

一　前文之通諸侯奥向人數を減じ、藩中可レ成丈國勝手に相成り、後の海防のヶ條に申候通に、道中召連候人數、幷江戸供廻り迄大に減少被二仰付一、其上前にも申候禮數を省き、上よりして諸事簡易に被レ成候はゞ、諸侯居邸に差置候人數大半減じ可レ申、其上勤番人多く候得ば、同勤合宿、或は直に役所住

居に致し候ても相濟、長屋向は只今迄の三分一にても事足可ㇾ申候、且家內無ㇾ之候得ば、間數も多分は入申間敷候間、陣屋造り同樣の素朴なる事にても差支無ㇾ之事と奉ㇾ存候、扨又此通の家造り質素に相成候はゞ、邸中多くの明き地出來可ㇾ申、左樣候得ば此度の如き地震等の變有ㇾ之候ても、壓死の憂も少く、常に火災の節も、空地有ㇾ之候得ば、消防も致し易く、大火に不二相成一人命の危難を免れしむる御仁政と奉ㇾ存候

右火災の儀に付ては、消防人立方便利可ㇾ有ㇾ之儀と奉ㇾ存候、是は末事の樣に候得共、多くの人民難儀を蒙り、諸侯の困窮にも相成候事故、諸侯居邸火除地出來候因にて、此處へ愚說相認申候

近來は十人火消組御減少にも相成哉に承り候、此火消組と申は、無賴の人足多く抱置候間、急速の間に合候處は宜敷候得共、此輩誠の市井の惡たれ共故、火消の事に寄せ、或は盜賊を事とし、或は火事を廣げ、或は平日ゆすり騙りを致候て、不二聞入一を遺恨に存じ、火災の節は、其恨を以て少しの過を大造に致候て、其家を打壞ち候類、色々の惡弊有ㇾ之由、既に先年麹町邊より大火有ㇾ之候、最初一旦近所のもの打寄消留候處へ、火消の者駈付、再び火を爲二燃立一夫より芝邊迄も其災を蒙り候樣成大災と相成、數萬人の難儀と相成候と承り申候、尤其節右の者夫々御仕置にても被二仰付一候由には候得共、諸民の難儀は取返しがたき儀に御座候、其上近年町火消と申すものも、追々風儀不ㇾ宜、近邊に富豪の町人有ㇾ之候得ば、其家の方へ火を引、町柄よろしき所は火を引廣げ、其跡の普

請取形付等に、町人に是非雇はねばならぬを見かけ、多分の日雇賃作料等を貪り候様なる悪弊あるなれども、文盲の役人町方の小吏抔は、却て是を喜びて、融通宜敷抔と稱して罪せぬ故、彌横行になるなり、されば此兩樣を改革致候はでは、江戸の大火止時なかるべし

扨前文追々申述候通、江戸人別減少の策行はれ、諸侯邸中空地多く出來、町家も追々人別相減、稠密の人家も餘程くつろぎ出來可レ申、其時に此定火消役四組に相減、一組の人數は是迄よりは相增、御城四方に置候て、不時の警固の相圖を司り、御城中非常の節、消防の事計を專らに引受、是は外より込入候儀は不レ相成、四組の者何處迄も力を盡し消留候樣相定、大手方櫻田方御防は、外より御城へ吹掛候火道を絶切、防留候事を專ら司り、其外は御曲輪内には御曲輪內、八代洲河岸は八代洲河岸、大名小路は大名小路、愛宕下は愛宕下、番町は番町と申樣に、七八町四方、又は十町四方位づつ、大小名共火消組合を立置、其所に出火の節は其組合切にて、自ら片付は差置き、早々人數を差出消留、外組合の場所迄も燒出候程の儀は、隣組合より人數差出、助合候て消留可レ申、決て遠方へ人數差出候を相禁じ候はば、火事場込合不レ申、又銘々持場より外へ燒出候得ば、其組合一同無念伺候樣有レ之候はゞ、却て手廻り宜敷儀と奉レ存候、其上御使番衆火事場見廻衆御出役有レ之候はゞ、直樣左傳に相見候鄭國防火の法に倣ひ、大幟にても御立火道を標し、いまだ燒けざる家を彼の空地の處迄取壞たせ、水の手を差圖有レ之抔と申樣に、夫々御引受相定居御取計有レ之候はゞ、大火には不レ

相成二事と奉ㇾ存候、町方の儀は近來素人火消出來候て、火消方大に行屆候樣承り申候間、尙又是迄のいろは組分けの通にて、其組々切にて爲二消留一、外組より猥に込合儀不二相成一、若隣組町內迄燒出候勢に候はゞ、隣組より相助け、是又御使番が火事場御見廻りにて、火道の家を毀ち候御世話、水の手の差引等致候て、其先へ燒廣がり候はゞ、又々其先組合にて引受、防ぎ止候樣に手分け分明に候はば、火事場込合無ㇾ之、町奉行は火方へは一切構不ㇾ申、只盜賊を吟味召捕候計に候はゞ、手筋不二混亂一、嚴然として物靜に取鎭候事出來可ㇾ申なり、都て變事の節は、物靜ならざれば行屆兼るものに御座候、且當時火事の節、あまり諸方より大人數集り候而已にて、場所込合、却て消防は不二行屆一、中には色々の惡黨入交り、火を呼盜致候ものも立入候樣相成候、其上詮もなく手明きにて、むなしく集候ては、物入も莫大の事に御座候、御門々々は、其御門番火消人數にて防ぎ候はゞ、勿論夫にて若御手薄と思召候はゞ、其所組合大名或町火消にて、平日此御門は此組助防と申儀定め置候はゞ、別段不ㇾ及ㇾ被二仰付一、行屆き可ㇾ申候、夫にても前々も申候通、却て火を呼燒候類も有ㇾ之候はゞ、嚴敷吟味の上、急度御咎被ㇾ仰付ㇾ候はゞ、此弊も相止可ㇾ申候

章服制度之事

易則易ㇾ行、簡則易ㇾ從とて、物毎簡易ならざれば、さし支ゆる者なり、況や武家の御制度と申ものは、戰國の餘風を受けて、極々簡易にして繁重ならざるものなれば、今あまり事を手重にするは、行れ難

き本なれ共、またあまり簡易にすぎて、上下の差別少しもなきゆゑ、富るものは凡夫下民にても、勝手に奢侈なる事もする故、士以上の者も夫よりあまり見苦敷候ては、威光も捨り候樣に心得て、痩我慢にても綺羅をかざり、其上の人は又其上をかざる樣に相成、却て奢侈の源となるなり、故に事繁重ならざる樣、章服の制度を大略立て、一見して是は町人、是は百姓、是は御役人、是は何格式と申事相分り候樣有レ之度事に御座候、制度無レ之故、金銀さへ有レ之候得ば、諸侯も羽二重、町人も羽二重、奥樣もちりめん、裏店の女房もちりめん、甚敷は天鵞絨は至極貴き物にて、王后とても常服には用ひさせられざる程の品を、百姓町人の娘が下駄の鼻緒に用ゆるの類、賈誼が申せし如く、「帝之身、白衣皂綈、（黒紬なり）而富民墻屋被二文繡一、天子之后、以緣二其領一、庶人孽妾、以緣二其履一」と申勢にて、實に上下顚倒と申べし、是故自然と物の價も高直に相成、奢侈も追々增長する筈なり、去ば大概諸品を三四段位に立て、たとへば百姓町人の服は木綿に限り、足輕仲間は是に同じ、士以上は絹紬、布衣以上は羽二重縮緬とか申樣、天鵞絨厚板の類は、百姓町人にては帶たりとも不レ許レ用抔と申位に、極々簡易に上下の分限を建置べし、しかし是は只上下の分限を立て、奢侈を禁ずる爲計なれども、尙又其上急度士以上の常服、御役人小吏藩士等迄、夫々分限を立るには、たとへ一時の權宜に寄て、不レ殘木綿服を用ゆるにもせよ、夫々の章服とすべき品、或は上下、或は羽織を以て色分けをなし、格式を分ち給はゞ、上下の亂るゝ事なかるべし、其分け方はたとへば御老中は上下の色赤く、若年寄は黄色、大目付は小

持筋、御目付は堅筋、其の裝は黒拵と申樣に、羽織對に至りても同斷、紐或は半襟等にて夫々色を分ち、百姓町人は淺黄に限る、平士は花色に限ると申樣にあり候はゞ、一覽にして是は何者と申事分明なるべし、大小名供立迚も同樣にて、或は駕籠に候はゞ駕籠の日覆ひ、馬に候はゞ馬の髣等の色を分け置候はゞ、供立等は如何樣減少候ても、國主は國主、侍從は侍從、四品は四品、諸大夫は諸大夫、無官は無官、三千石以上以下、一覽して分明なり、ヶ樣分明に分候時は、如何樣紛らかし見榮を致し候ても無詮事、自から僭上の奢侈の風も止むべし

但此衣服の制を當時に申候はゞ、事情に迂濶之樣に聞え候得共、此制無レ之ては、天下の供連減少の條に至り差支る故、是非是より定無レ之ては不ニ相成一と申なり

諸大小名供連幷手廻り陸尺渡り仲間之事

一　當事諸侯供連と申者、譯もなく多人數召連候事にて、夫も手人にても候はゞ、警衛の爲と申儀も可レ有レ之候得共、多分は渡りもの日雇にて候間、平日殊の外りきみ歩行、何ぞと致候得ば、私の意氣地にて喧嘩等は仕出し候事は有レ之候ても、實に君の爲に身を惜まぬと申志あるには無レ之候間、彌非常の儀に出逢候節は、主人を差置逃散る事より外は無レ之、何の警衛の爲にも不ニ相成一事なり、其上武士の道に禮讓を厚くし、疎忽無レ之樣道を讓り、互に往來すべき處、彼渡り者等が分別もなく、只己が顏を磨き、給金を貪り候本とせんとの利欲より、先を爭ひ駈拔け横切等致候て喧嘩等仕出し、主人は

何の遺恨も無レ之に、果は侍迄も打交り、互に失禮に及び候樣相成、甚敷に至りては、親類縁者も仇敵の如く相成候類往々有レ之候、果は侍迄も陸尺手廻の風を學び、いかつに相成候、風俗の敗れ是より甚敷はなしと申べし、其うへ中には無智無分別の主人に至りては、其無頼の渡り者の勢ひを借りてりきみ候て、今日は誰を途中に於て越候、誰を小路にて跡に付候などゝ自分の失禮して士道を失ひし事は不レ省、又己が人に恐らるゝ程の威光なく、只渡りもの、蔭にてりきむは、耻かしき事と云事に不二心付一、猥りに高金を出して雇ひ抱ゆるは、實に自分の智惠見識のなきを、世間へ吹聽する樣なるものなれ共、（或人云、大名供立を見て、其の主人の了簡あるかなきか、其家中人物あるかなきかをしるべし、先大道を道狹く廣がり、六尺が寒中に尻を出し、晴天に合羽籠を二十荷も三十荷も、そろ〳〵と擔ぎ廻て、夫をりきみとする了簡ならば、其主人も凡物にて、家來も人物なき事しるべしといへるは、確言と申べし）世間一同の流弊となりて、獨り心付くものありても、改むる事も出來兼る勢なり、されば是等の流弊を改め、質素禮讓の風にせんとならば、先大小名の供立、是迄よりは四分一位に減じ、只警衛の爲とならば、駕籠脇の士を多くして、前後の供を省くべし、其上日雇を召連候儀は、誠の外見計にて實用無レ之間、不レ殘手人に致し候樣被レ命候はゞ、手人にては左樣に多人數抱置候儀相成兼候間、自然供立減少すべし、又人數は如何程減少しても、前のヶ條に申候章服制度立候ば、一覽して國主城主布衣、幷諸御役人夫々相分候樣に有レ之候得ば、少しも家格に拘り候事は無レ之、御威光も缺け候事もなかるべし、章服さへ定り候得ば、壹人にて御乘切被レ成候ても、御威光落ると申譯無レ之事は、火事場の御使番衆にて見るべし、裏金の陣笠は外人用る事不二相成一と定り居る故、裏金の陣笠さ

へ冠り被レ居候得ば、壹人にて混雜の中へ乘付被レ申候ても、人々路を開きて避け申候、此通に候得ば、外御役人其外にても、章服分明ならば、誰か是を恐れ避けざらん、さあれば何も大勢の供立にて廣がり步行、りきみ候にも及ばぬ譯なり、然る後士は禮讓を貴び候譯を、大小名へも能々被ニ仰諭一、途中互に失禮無レ之樣に被ニ仰付一候はゞ、自から侍も美風に相成、陸尺手廻の惡風、侍へ移り候事あるべからず、扨又世間に渡り仲間とて、御番所を初今日此處に居候ては、明日は外へ行、其處を不常もの有レ之候、是等は皆無賴の惡者、一時の間は合候樣なれども、取逃・缺落・博奕等を事とし、風俗を破る事是より甚敷はなし、其上家々にて右の類を一時抱に差置迚、何ぞ事ある時は、役に立候ものにてはなし、給金差出候事は同然にて、まさかの時に役に立ざるものを用ゆるは甚不便利なり、乍レ然是等は口入と申もの有レ之、諸事引請仲ヶ間を建置、是等の手より入り候はぬものは、勤方差支ゆる樣にする故、無レ據用ゆるなり、其上急に取逃・缺落する時は、跡代りのもの間に合兼ぬれども、此受負引請居候得ば、直に外人と差替、一時の間缺無レ之、便利の樣に見ゆる故、是を止めたらば差支んと存るもの有レ之べけれども、左にあらず、家々常抱に相成、渡り奉公不ニ相成一と成候得ば、此ものども缺落・取逃しては行處無レ之、又此方暇出候得ば、跡奉公口見付候迄は取續方難澁と存候は、自から身を大切に、不奉公はせぬ樣に相成候、其通不奉公をせず、二年も三年も同所に勤候樣相成候得ば、上下の情も親しく、主人の急を見捨ざる樣にも相成べく、在候得ば急に間缺出來候樣なる事を仕出すもの稀に成は勢なり、

乍レ然右の通番所其外仲間不レ殘常抱に致候ても、只今迄の通人數大勢不ニ召仕一候て不ニ相成一樣にては行屆き兼候間、前文も申候通、都て供方幷御番所相勤候ものも、極人少にて相濟候樣御制度を被レ立、其上にて右渡りもの不レ殘相止、銘々屋敷へ常抱にいたし置、或は便利に寄り在所の部人遣ひ候樣被ニ仰付一候はゞ、風俗も自から正しく可ニ相成一、右の通に候得ば、渡り中間の類は家々抱込に相成、人數不足位に可ニ相成一候得共、手廻陸尺のあまりもの多く出來可レ申、此類は其まゝ差置候得ば、不慮の儀出來可レ仕も難レ計候得ば、是等は大概親方と申もの有レ之、夫々子分を揃居候間、其親分のものを能々被ニ仰含一、御手當被レ下候て、或は海防の場所、或は蝦夷地新開の地へ被レ遣、取付方御世話有レ之候はゞ、江戸にては稼ぎ方も無レ之故、喜んで參り可レ申候、若右の通遠方へ行候を迷惑に存候はゞ、江戸に罷在、駕の者人足車力働き等に相成も、勝手次第可レ然候

遊所場平人と入交り候を禁候事

一　遊所場之儀、大都會は是非無レ之ては不ニ相成一事に御座候得共、又平人と入交り候は、甚風俗の害に相成、奢侈の根本に御座候、其譯は遊所場と申ものは、人家に掃溜め芥捨場のある如く、壹人貳人の小家にては、其時々に塵芥を取捨候ても奇麗に片付候得共、百人も百五十人も暮し候家にては、掃溜無レ之候得ば、玄關先へも庭へも勝手へも、塵芥とりちらけ候如く、少々の城下杯にては、遊所有レ之候は不レ宜、遊所無レ之候ても、猥なる儀無レ之樣世話も行屆候得共、大都會にては人多く集るなれ

ば、遊所無レ之ては、家に掃溜無レ之塵芥散廣がる如く、一面に不義密通の事行はれ、中々行屆く事にては無レ之候、乍レ然右之場所平人に入交り候ては、倡優妓女之類何れも遊手にて、甘食美服をして暮すもの故、平人自然と右を見習ひ、甘食美服して遊び居る事をよき事と心得、見馴聞馴候に從ひ、いやらしき所行も不レ耻樣に相成候間、奢侈の根本にして風俗を亂り候故に、是迄の通吉原町計被レ立候て、外場所不レ殘御制禁相成候ば、至極御美政と奉レ存候、乍レ然此度地震に付ては、所々假宅と號して、平人住居と入交り候所へ御免許も有レ之候由、如レ斯候ては無分別の者を眩惑し、人の金を騙し取らんと存候も其筈の事に候へども、是を悠々被ニ差置一候はゞ、此もの共は助り可レ申候得共、一體の人其風に染み、風俗を破り候のみならず、產を破り家を失ひ候樣相成候ものも多く出來可レ仕候、此等の生活大切に被ニ思召一候得共、多くの平人は尚更御大切にて、夫を產を破らせ家を傾けさせては、御不仁第一と申ものにて、自分の大切なる身をそぎて、禽獸の餌に遣候と同前に御座候、職人等大金を設け候間、其金を遣はせ候はゞ、融通の爲抔と申俗論も有レ之かに承及候得共、職人とても御膝元の民にて候間、成丈金を貯、まさかの時差支無レ之やう致す存寄ならば、夫にましたる事は無レ之候、何も夫を遣はせて仕廻には及不レ申、又是非遣ふ了管の者ならば、假宅にても本宅にても同然の事なれば、風俗を破り平人を心得違さするだけ、上の御損と申ものなり、故にいか樣有ても、郭の外へ假宅不ニ相成一事に致し、假宅を建るならば、直に郭中へ假宅出來候樣ありたきものなり、此節の儀何方も潰れ損じたる事なれ

ば、何れの道普請をせねば、假宅にもならざる故、直に郭中へ假宅命ぜられ候とて、差支はなき事なり

但ヶ樣の事はわるく致候得ば、中途にて賄賂筋等にて取成者もあるなれども、夫は私の利を見て、上の御爲御不爲は顧ぬものゝ存寄付なり、よく〳〵風俗の敗れに相成候へば、上の御損と申處を勘辨すべし、此外にても隱賣女に似寄候渡世のもの往々有レ之由、是等は嚴敷禁ずべき事、風俗を正すの第一なり、若また吉原町計にて不足に候はゞ、外にて平人住居に離れ候場所へ、吉原同然に一廓を拵へ、幾ヶ所も御取立被レ成候共、平人と檐を並べて住居する事は可レ禁事なり

寺院取扱之事

佛法中國に入りてより數百千年、中古は天下の大法と並び行れし程の事なれば、人心にも種々染込居候故、共横行奢侈天下の財を費すを惡みて、近來は是を直ちに打破らんと存ずるものも有レ之候得共、左樣にては却て人心服せず、又當時にては邪宗門の入るを制するため、一つの政治の具と成ある事なれば、中々容易に破らるべき事にはあらず、しかしむかし邪宗門の弊にこりさせられ、一時權宜の御法にて、宗門改の印をする事にはなりたれども、實は僧徒の政事に立交る事は、彼法にもあるまじき事なれば、此改方は別段大臣を立て、專ら天下の戶籍と人別と改むる事を司らしめ、魚鱗册を編て、一人も重複の人別無レ之樣改め、伍法を立て互に吟味させ僧徒は祈禱佛事等計を司り、夫共邪法に紛は敷もの有レ之候はゞ、早々訴出候樣と計にて、宗門改調印等の儀はすまきと被レ相止、

魚鱗册は人別帳なり、拵方福惠全書に見ゆ

墓所を守り年忌法事等取行候儀は、是迄の通被ニ仰付一候はゞ、何も僧も抹を失ひ候と申にも無レ之、御政道も相立、兩全と奉レ存候、其上にて僧徒の奢侈不如法を禁ぜんとならば、決て是を打潰さんとせず、能々佛法の趣意を御詰問ありて、戒法を保つを僧と申す所を銘々能々爲ニ心得一佛法を大切に守護候樣被ニ仰付一決て戒法を亂り候事は不ニ相成一事に被ニ仰渡一若所化に破戒の者有レ之候はゞ歸俗に被ニ仰付一寺僧の百姓となし、一寺住職の者に破戒の者有レ之候得ば、是は御定の通遠島にて、其跡は罪人の法脈故法脈を絶ち、右の寺は本寺或は近所の同宗にて爲ニ引受一其寺は庵室にして墓守り計に致し、法事祈禱其外共、其引受たる寺にて取計、御朱印有レ之候はゞ、是亦其寺にて預り、知行收入其引受の寺德たるべし、又其庵室にせし寺の境内不レ殘新開、畑地或は田地にして庵室守に耕させ、庵室の修覆食料迄、村方へかゝらぬやうすべし、本寺或は別引受の寺も、寺德多く百姓の世話に不ニ相成一祠堂金を貪り、葬禮にのぞみ布施の多少を論じ、葬送を差支させ、檀家を困らせ候樣成惡風は自から除くべし、（祠堂金を貪り、或は布施をねだり、葬禮を延引させ、百姓町人迷惑に及ぶ事、江戸にてはあまりに聞及はず候得共、在方にては度々有レ之事なり）貪欲も五戒の一つなるに、其僧徒色欲を破戒とする事は心得あれども、貪欲・妄語・飲酒等の戒は一向存ぜぬ樣子なり、是は御穿鑿ありて、心得違なきやう有レ之、彌戒を守り候僧徒は、貴に御尊敬ありて、紫衣にても紅衣にても給はり候はゞ、僧徒の趣意にも相叶ひ、又不如法の者も無レ之、五戒を能保ち申程の者、奢侈を事とし、檀家を困ましむる事はあるまじ、佛法は本樹下石上を栖とし、一處に三宿せずと申事なれば、其樣に普請の莊嚴を好む事

もあるまじ、是僭を制するの要術なり、右數ヶ條の趣先江戸人別を減するよりして、順を追て施し給はゞ、江戸の奢侈大に改り、風俗も打替つて立上り、四方目を拭ふ程の事成べし、其勢を以て天下に令し給はゞ、天下の風俗も一新すべし、左あれば自然と四海の困窮も改り、國力も不足なきに至るべし、其上にて人才を育し、材傑の士追々御引上げに相成候はゞ、御武備は不レ及レ申、何事も凛然として御紀綱も立ち、諸大名も畏敬して御威光を仰ぎ奉る事、一□侍る事と奉レ存候

新政談一名偶言卷之三終

新政談 一名芻言 巻之四

人材取立、幷撰び方々條

一　良工ありといへども良材なければ、大普請を成就する事能はず、良御ありといへども良馬なければ、數十里の遠きを一日に致す事難かるべし、况や國を治め中興の盛を致さんと欲して人材なく、庸庸碌々の輩を集て事を謀り給ふ計にては、たとひ明君良相上に在て、如何程御思慮を勞し給ふとも、行屆くべき事には候はず、故に古人も求レ材若レ渴とて、喉の乾きたる時湯水を懇望する如く人材を求め給ふなり、しかし天の良材を生ずる、家柄系圖にかゝはらず候故、廣く天下に其材を求め給ふならば、幾らも御役に立人あるべけれども、當時は世祿にして、人材を門地家柄の中にて求めねばならぬ御時節にて、其門地家柄の人は、大抵富貴の中に育ち、下情にも通じ給はず、輕き御家門達は公儀風を切らせ、りきむ事のみ覺えて、少し年も長ずれば奸吏猾胥の風移り、役德を取て活計を立る見掛者多く、公家の爲に心力を盡し、天下の爲にならん抔と心掛るものは稀なる事なれば、是非此風を一變し、人材澤山に出て、何を被二仰付一候ても御用向に精忠を盡し、御間に合候樣相成には、平日人材を御養ひ被レ成方無レ之ては、自然と出來る事は無き筈なり、されば平日人材を養ひ、天下の御用に立ん

となれば、學問所に如く事なし、しかし學問所を設けたりとも、學者徒に空理を講じて、口先に堯舜文武仁義忠信を唱へたればとて、事を任せて致さするも、御役に立ぬ樣にては、空言施す事無きにて、人材とは申がたし、ましてや只古の事を覺え講釋讀書をする計、其人となりを察すれば諂諛邪佞を事とするのみにて、俗人にも笑はるゝ樣成埒もなき事を仕出し、士の風上へも置兼る人物のみ多くなりては、何の御役にも不ㇾ相立ㇾ、只今ヶ樣と申すに無ㇾ之候得共、古より其ためしある事にて、是皆其師表たる人物を選び給はず、只上官の氣に入る樣、人の鼻息をのみ伺ひ出身を望み、口に性命道德を唱へて、天下の事は痛くも痒くも思はぬ樣成、空氣ものに學政を司らしめらるゝ故、自然と其風士人へ移りて天下の爲にするの志薄くなり、學者として經濟實用を談ずる事を忌み、少し御爲を思ふのあまり、感激して時事を論ずるものあれば、敵讎の如く取扱、少しの過ちも搜して抑折する工面計する樣成、鄙劣千萬の惡風も起るなり、されば今學問所を起さんとならば、先其師表たるべき人物を選び、公平にして私の門戶を建ず、經濟實用の心掛厚く禮儀廉耻の辨へありて、名聞躁進の心なきものを、御家人の内より廣く選び、たとひ業は少々鈍くとも頭取て人を容るの量あるものなれば、其任を命ぜられ其上は其人に其下役を選ばせ、其上は公に評議ありて、平日の行ひ人の心服すべきや否を吟味して手を揃へ、又公に議して實材取立の法を立て敎へ導き候はゞ自然と實材多く出づべし、尤人々兼備の材は少きものゆゑ、各科目を分て敎へ文武は合併に無ㇾ之ては、實用に不ㇾ相成ㇾ候間、武學所も同樣たるべし、

只其内に局を分ちて教ゆる事は海防備論に申述候如く、洋學の事はまた別に說あり下に詳にす

一　右の通文武學所を取立て人材を養ひ候ても、政教一途に出ざれば、自然と實用の志薄くなるのみならず、役に立ものも役に立ぬものも、混淆して分ちなければ人氣引立なく、有用の材長じ兼る故、選擧の法を立て、不時に拔擢あらせられ、又其外よりも奇材異能、及び吏材を選擧する法を設け、廣く人材を求め役々に備へ給はゞ、天下人材に乏しきの歎きはなかるべし、其法下に詳にす

一　此學校只江戸のみに限らず、諸國大都會の地、幷に甲府・駿河、其外土着勤番の士多く被ニ差置一候處、防禦屯營の場所は不レ殘御取立、勤番の支配と致し、其屬官にて世話し、人材を選擧有レ之候はゞ勤番の人々出身の道付候て自ら引立、人材も出可レ申候

文學所之事

人の學問を仕候は、元天下國家の御役に立可レ申爲に候得共、我心身不レ正しては御役に立事難き故、廉耻を辨へ節操を正くするを先とすべき事なり、教ゆるものも是を以てし、學ぶものも是を以てし、其根本を正し平日廉耻を忘れ、節操を失ひ候行ひあらば是を戒め、其上讀書をして義理を講究するにも、第一今日國家の御用に立べき心得を先として銘々心掛、何もかも出來候得ば、夫に越たる事はなけれども、左樣に全材は多く無レ之もの故、或は水利、或は民政、或は公事、或は禮典抔と申樣に、夫夫色々の科目を立て、銘々の長ずる處を以講究せしめ、何れも空理にならぬ樣に、直に今日施すべき

手段を磨き、其筋々の御入用の節は、古人の敷奏言を以てし、明試功を以てすると申如く先試み、其平日の心掛る處を以て、自分存念を十分に言せて見、其說至極尤に聞え候はゞ、假に其人をして其事を取計らはせ、兩三年にして彌勤功も相立候樣子にて、廉耻節操も正く候はゞ、直に其ものを其役に任じ、其上は又其後の勤功にて、上官の人に選び給ひ、保擧と申て此もの聢と何々の御用に相立候て、決て御後ろ暗き儀不ㇾ仕候と申事を、請合候て上へ推擧致させ、其人其役の內に御後ろ暗き儀致候はゞ、其選擧の人も連座にて倶に御咎を蒙り、三年も過て申上候通御役に相立、御後ろ暗き儀無ㇾ之候ば、其選擧の人の勤功の一ヶ條に相成、若又上官の人銘々の身の用心計致候て、二年も三年も人を推擧不ㇾ致候はゞ、溺職と申て役儀にすがり、私を營み候咎を以御役儀被ㇾ召上ㇾと申樣に有ㇾ之候はゞ、擧るものも本氣に相成、人を選び人を戒め、擧らるゝ人も本氣になり、御用に相立心掛いたし、身を愼み可ㇾ申候、左樣候得ば自から人材も出可ㇾ申候

一　學問所惣裁は、文學惣裁の屬官たるべし

一　軍學の儀も矢張學問所の一科と致候て、師に堪たる者を拵へ出し候樣無ㇾ之ては、有用の材出不ㇾ申候

學問所の敎へ古人の成法明白に候間、是は只實用に趣せ候大意を相認候而已に御座候、乍ㇾ然古へ詩書を讀せ、禮樂射御書數を以て人を敎へ候は、書は皆古への政事の評議せし伺、并仰せ出されの案

文、或は天下の御定、年貢の定法等を載せ候ものにて、詩は當時の政事の美惡によりて、上を大切に存じ候心のあまり、善事は喜び、惡事を憂ひ、或は譽め、或は譏り、人情世態の相見候ものにて、都て事を所置致し候には、人情よくはまり勘辨不レ仕、道理計にては行れがたきもの故、書にて定法を知り、詩にて具合を考へ、直に今日の實用に施すべき手段を學び候事に御座候、又禮は今日士の所作に入用の立居振舞より、吉事凶事、客の取次取扱ひ、軍陣に人數の遣ひ方、婚姻等の事にて、夫々直に今日の入用の事、樂も直に祭禮賓客等にて、今日士のせねばならざる事、射御并手を書き算盤を取候も、直に士の今日御奉公をいたす入用の事にて、是非不二心得一候ては不二相成一業なり、是を學びさへ致候得ば、今日御奉公向差支無レ之樣相成べき儀故、敎への具と仕候事に御座候、是を以ても古人の實用に人を御仕はめ被レ成候所は相分候也、後世の樣に徒に理窟計を申出、士の勤方をさすれば、何もいたし得ずと申樣成學者は、古へは無き事と相見え候

一　學問に門戶を立候は甚不レ宜、聖門ですら或は德行に長じ、或は詞令に長じ、或は政事に長じ、或は文學に長じ候人々出來候事故、人は各長ずる處ありて、其所長を取て材を成させ不レ申しては、役に立候樣不二相成一候間、其師表たる人度量寬浩にして門戶を立ず、只御役に立べき人を多く拵出す積に無レ之ては、人材育ち兼るのみならず、流儀立を致候所より、人々忌嫌ひ出來、己と流儀違ひのものは仇讎の如く心得、御役に立候もの有レ之候ても、取立ぬ樣に相成候間、學者の心も自から不平を生

じ、人を容ぬ樣に相成申候末は、其風土一同の風と相成、勤向にも黨を分ち、私の意地を立公の心なく、互に相陷れ候樣に相成、國家の亂を生じ候事、古へより往々有レ之候間、愼むべき事に御座候
藏板物改を致候樣なる瑣碎の事は、學者に爲レ致候ては、自から心掛け淺く相成候間、是等は輕き出役位のものにて一局を立置、夫に計掛り改め相濟候事と奉レ存候、其外にもヶ樣なる小事有レ之候間、何れも左樣に有レ之度事に御座候

一　文武兩途に分れ候ては、實用に不二相成一候間、備論にも申置候通、合併に被レ遊候方可レ然と奉レ存候、尤一國の内にて夫々局を分ち、光明俊偉の才を仕立候を趣意に仕候儀肝要に御座候

武學所之事

一　武藝に精修仕候儀は、武士の本業に候得共、先我朝武道の立方と、當時御旗本御家人銘々身分に寄、如何なる業を以て御奉公可レ致と申實用の位と、今の時勢古へと軍の模樣變り候譯とを能々爲二心得一修行爲レ致不レ申候ては、御役に立不レ申のみならず、實用に臨み差支出來候なり、如何樣平日調練行屆候迚、實地に臨み差支、役に立不レ申候樣にては無用の事なり、先第一我朝武道の立方と申ものは、古の武士の常言に弓矢取身は、名こそをしけれ抔とて、名を惜み耻を知るを士道と仕り候事にて、銘銘士節を磨き、人の見ぬ所にても不忠をせず、命を惜まず、上よりの御差圖無レ之ても、機に臨み働きするを旨とし、武勇と致す事故、其餘風殘りて、明抔へ亂妨に行しに、名もなき武士迄も一人々々の

働き強く、明人抔も我國の人は一人二人づゝ分れ散りて働くを拒き禦て、纔か百人か二百人にて亂妨に行しを、大敵の樣に倭寇と申て手剛き事に致し、戚南塘兪大猷の輩世に名將と稱せらるゝ者、大軍を用ひ是を防ぎ候を以て大勳功と致候事なり、此亂妨に行しもの、廉耻の風を心得候士と申には無ㇾ之候得共、是にて我國古への士の養ひ方、名節を以てせし遺風殘りて、一人にても逃ず退かずに働く遺風ある事を見るべし、ましてや三河の御家風と申は、猶更廉耻を貴び給ひし事にて、御先祖樣御時に節義の士多く、戰陣に臨み一己の利害を顧みず、命を輕じて御奉公せし士多きにて見るべし、當時太平打續き、遊惰奢侈の風に成候間、人々脆弱にて物の用に立がたき樣に見ゆれども、矢張何處にか古の美風は殘り、武士とさへ申せば事に臨み逃ては濟ぬものと申事は、兒童も心得居候間、是を引立て用ゆれば、隨分古の如く耻を知らする事も容易に相成候は、古來よりの習せに寄る事なれば、先此美風を失はせぬ樣、教督の任に立人能々申含め、自分も其旨を失はず引立べき事なり、又當時の旗本の士、身分に大小不同有て、九千石より百石以下迄色々あり、夫々軍役の割合もありて、人數も被ニ差出ー事故、其被ニ差出ー人數組合せ方、備の立方、隊々は如何なる道具にて働き、供人は如何なる兵器を持て主人を助け、如何なる心得にて働と申事を能々銘々心得無ㇾ之ては、實地に臨み候節、百樣差支ゆるなり、其心得もなく、甲越流の、西洋流のと申て、步卒や騎卒を遣ふ法を以て、旗本の士を組合せ調練をするは、慰にはよかるべけれども、實用の心掛とは申難し、海防備論にも申述るごとく、先大元

帥を立て、其下に隊將を立て、又隊長を立て、幾組にも分ち、彌敵に對し戰鬪する心得にて、主人家來とも備振戰鬪の仕方により、銘々得道具用ひ方を相分ち、必用の兵器に相應じ候樣無レ之ては不二相成一事なり、當世は兎角左樣の分別も無レ之、只時の流行に投じ、西洋流の砲隊が流行すれば、銘々の身分の辨もなく、鐵砲を持て足輕仲間の進退を學び、恥ともせず、只見分の節隊伍揃ひ、筒音一連に參候抔と申樣成事を手柄と致し、家來も主人も無二差別一足輕壹人の働をする事にては、五百石も千石も賜候役前は不二相濟一と申心得も無レ之と申は、餘り淺間敷了簡と申ものに御座候、戰士は大祿は大祿程、其働も餘計に無レ之ては不二相成一事故、古は物頭の類大祿を取候ものは敵と接戰に至りては、尤粉骨を盡して手痛き戰をする事にて、足輕は祿も少く身分も輕き故、遠方より弓鐵長槍にて、戰士の敵へ近寄る手傳をするなり、しかるに主人も家來も千石取も三兩貳人扶持の足輕も、同じ鐵砲を持て遠方より打計にては、大祿を頂戴致し居るは勿體なき事にて尸位素餐の士と申ものなり、其心得もなきは廉耻の心薄きと申べし、左樣廉耻もしらぬ士は只遠方より鐵砲を放し、役前を濟せる心得と見ゆれば、命を掛て一騎前の働は迚も出來せぬ故、不レ殘祿を辭して、千石を分て足輕二十か三十も御抱へ被レ成候樣相願てこそ、上の御爲を存ずる士とは申べし、若又一騎前の働をする心掛ならば、命を掛て敵を破る仕方は如何の働を以てすべき、自分軍役にて召連候家來は、如何の引廻しに致し可レ使、備方は如何可レ致と申心得無レ之ては不二相成一事、只鐵炮を以て足輕働の眞似をして、濟事にては決てあるま

じ、此等の事を能々心得違無ㇾ之樣さするには、大惣練惣組の致方定り居不ㇾ申ては不㆓相分㆒事なり

一　扨右之通大元帥相立、其下に付けて人數立備配等致候得ば、誰々は如何樣の事を致候が主役、誰は如何樣の事を致候が主役と申事を、其人の身分に寄定めて、其業を專に爲㆓修行㆒候はゞ、實地の御役に相立可ㇾ申なり

一　古とは兵器相變り、鐵砲盛に相成候事故、戰の仕方、幷備の建方もかはり無ㇾ之ては、戰は不㆓相成㆒候間、其都合を見合て、大元帥の方略にて、一體の軍法を相立可ㇾ申なれ共、先大略は足輕同心、幷諸文申候小役人を減少、御軍役の方へ相廻し候人をば、不ㇾ殘鐵砲隊にて隊伍を組せ、座作進退打放の手業を調練し、弓組も少々は拵へ、的弓は無用に付不ㇾ可ㇾ致、差矢を爲ㇾ學、横矢幷戰士槍入前の鬪合をよく爲㆓講究㆒、百石前後の小役人、幷與力は馬隊鐵砲組として、平日騎馬の練熟を爲㆓心掛㆒、馬入の鬪合等よく〳〵講究なさしめ、其上の旗本の士は、何れも直接戰の心掛にて、命を輕じ敵陣へ打込切破り候手段をいたし、幷大砲を取扱ひ臺を打立て、其下より切入手段を平日に爲㆓講究㆒、專ら鎗劍を磨きて、一騎前の働を熟し居る樣仕候は、實用に可㆓相成㆒と奉ㇾ存候、大砲の儀師家の筋目も可ㇾ有ㇾ之候得共、其人計にては普く間に合不ㇾ申候間、士分の者誰も取廻し、打放の出來候樣平日稽古無ㇾ之ては不㆓相成㆒事に候

一　前錯も申候通、戰は地に寄て器械も又各便不便有ㇾ之ものに御座候間、西洋にて便利に候ても、我

國にて用ひ難き物も有レ之候間、能々講究いたし、我國の地にて用ひ便利なる樣に心掛べき事、勿論の事に御座候

一　船戰は又別段の事に付、是又惣大將を相立、船の取扱ひ、水戰の仕方、幷船中必用の武器、及び戰士の働き方迄夫々講究ありて、其役々の道具遣ひ方、專に修業あるべき事と奉レ存候、其上水軍は水練達者に無レ之ては不ニ相成一事故、水軍の兵別に幾場も相立不レ申候ては、精妙に至りがたく、尤都ての士船軍は出來不レ申候と申樣にては差支候間、皆水軍も修業あるべき事なれども、左樣に何もかも妙を得候事は難き事故、別に水軍計の稽古致候もの相立、水軍惣督にて教練可レ致事と奉レ存候、水練の儀川計にては役に立不レ申候間、專ら江戶は羽田・江の島等の海邊に教場相立、船にて稽古可レ有レ之候

一　武器製造の儀も夫々局を建置、夫々の職人を局中に差置、武器幷稽古道具の製造を爲レ致、夫々工夫を盡し、辨利を考作り出し候樣爲レ致、其道具に一つ〳〵作人の姓名をしるさせ候事、刀鍛冶の如く致、遣ひ試み候て、其品の工拙出來不出來によりて、月々の扶持方宛行を增減有レ之候はゞ、自から其職堪能なるものも出來可レ仕なり、若其料を盜み賣り、道具手薄に出來致し候ものも有レ之候はゞ嚴敷罰し、若手を拔人命にも拘り候樣成事を仕出し候に紛れ無レ之候はゞ、死罪にも被ニ仰付一と申樣に有レ之候はば私を致候もの有レ之間敷、尤左樣致候には、業次第にて御宛行格外に厚きもの有レ之候樣に無レ之ては、引立申間敷候、且又掛り御役人職人と馴合利を貪り候ものは、改易に可レ被ニ仰付一と申程に無レ之ては、

器物精妙に不㆓相成㆒候兎角當時の弊風にて、掛り御役人職人と申合上前を取候間、職人も手を拔御入物計多く、器物は粗惡に相成候、此弊相止不㆑申候ては、御武備御手薄に相成候間、大切の儀に御座候

一 大艦製造の儀は、水軍惣督府の方の引受にて可㆑然と奉㆑存候、是等一々不㆓相認㆒分は、海防備論と御見合被㆑下候樣奉㆓願上㆒候

一 文武所共一年惣御入用積を極め、地方にて御附、右の御入用は此中にて相濟候事に候はゞ、惣裁惣督の下知にて會計府へ引合不㆑申、直に決斷取計候樣無㆑之ては事延引に及び、人の引立行屆兼候、右の外は一昨年相認候拙著海防備論中に申置候間、相略申候

洋學所之事

一 是は從來外國の言語を取扱ひ候業にて、狄鞮象胥の學なれは、職方代の所屬たるべき事にて、是迄は專ら譯士の致候事に而已相成居候所、近來外國よりも色々申來候に付、譯士計にては相濟兼候に付、追々士人も仕候樣相成候間、洋學所御設け之儀肝要と乍㆑憚奉㆑存候、乍㆑然世間にて無分別の醫者、其外國の文字計讀覺え、譯もなく外國を學び、却て我國を賤み、外國に無㆑之ては何もかも不㆓相成㆒と申樣心得違の者も有㆑之かに相聞候、是等は行々政教の妨げに相成、大害を生じ可㆑申も難㆑計候、其上譯書の致方家々にて相違いたし、少々計翻譯致し覺候得ば、直に外國の書を譯し上木致し候類不㆑少、杜撰謬誤も必可㆑有㆑之、中には譯もなき無用の辨を費し候書も出し候ものも可㆑有㆑之候間、洋學

所にては洋學精究の者を多く被レ集候て翻譯局を立て、猶更研究確然と間違無レ之様取調、洋書の内にも御禁制の邪宗を重に說候事も可レ有レ之候に付、左様の類を相除き、有用の書渡來候はゞ早々御取入、直様に翻譯被ニ仰付一、不レ殘上木世間へ御廣め私に翻譯仕候儀御差止可然かと奉レ存候

一 諸器物製造の儀に至りては、洋人精巧を極め、甚便利の品可レ有レ之候得共、是又人々諸事に渉り候様にては出來兼候もの故、鐵砲は鐵砲、大艦は大艦、金銀銅鐵採煉の仕方等迄、有用の儀は夫々局を分ち、專門に修業爲レ致、其學精敷相成候ものは武器製造局又は金銀銅鐵坑等へ被レ遣、其致し方を傳受し、職人を導き候事を主らしめ給はゞ、其道に精巧なるもの多く出來て、御用御間缺なかるべし

一 洋人智巧を貴び候處より、色々の玩物を製作致候て相渡候由に候得共、都て物はあまり器用にて日を慰め候ものは無用の品多く、却て人の隙を費し財を費し人の奢を開き候間、夫を製造致候儀は嚴敷禁ぜられて可レ然奉レ存候、西洋の天象は船を乘候には、必用の業に可レ有レ之候得共、曆日は爲レ差益も無レ之、其外小さき時計或は蒸氣車鏡等、其外目を驚かす様成器物に至りては誠の無用の物にて御座候

一 此洋學所外國語を重に取扱候事故、行人の司さどる所相當と奉レ存候得共、當時外國應接は別段被立置レ候事故、右にて惣裁いたし、武學惣督の屬官と仕候て可レ然事と奉レ存候

一 邪教は元彼方宗旨にて弘め候を事と致居候得ば、是を禁ずると、是を取扱候人々御引受にて可レ然かと奉レ存候、前文の通僧徒の宗門改相止候はゞ、此司にて御改可レ然と奉レ存候、手を分ち國々を改候

は、民政を司り候人々の任、幷に諸大名の任たるべくかと奉レ存候

奇材異能の士選擧之事

一方略武技、其外諸科を設け、將帥に堪候もの、絶域に使すべきものと申す見込を付て選擧あるべき事にて、從來奇材異能の士は、天の是を生じて天下の用に御立被レ成候者に御座候間、世祿の御時節なりとも、是を埋れものに被レ成候て被二捨置一候はゞ、天道に逆ひ又人情にも戻り候事に御座候間、是非選擧の法無レ之ては不二相成一は勿論に候得共、是迄の士皆位牌知行にて、無二增減一被二召仕一候事に付、其上奇材異能の士不レ殘被二召出一候はゞ、續きがたく候に付、御選の上極々拔羣にて、人望も有レ之者計被二召出一御宛行を厚被二召仕一、其代りに一代切として、其人死後にて、其妻女には一生扶持被レ下て、其身功も相當、悴は士百姓によらず、元へ御戾し被レ成候はゞ、續き兼る事は有レ之間敷候、右は諸方屯營等より諸藩の人を御引上げ、又は百姓浪人等を御引立被レ成候儀にて、御家人に候はゞ、左程奇材異能と申程に無レ之共、人に秀候材有レ之、別段の藝術有レ之候ものは、夫々推擧いたし候上、被二召出一其材を試み、矢張各自分の長ずる處にて、平日能心得居候筋を爲レ言見候て、彌役に立可レ申樣子に候はゞ、夫々の場所に試み、彌御役に立候て廉耻の心もあり、風儀も正敷候はゞ、格別に御引上ゲ御用ひ、又國々へ御遣、土着勤番人の類も其頭々より保擧致させ、拔羣に御引立被レ成候はゞ、皆々相勵み、人材も多く出可レ申也

保擧の法、頭々の賞罰前の人材を育する大意の處に委し

一　奇材異能のみならず、民を治むる役人は、別て人を撰び用ひざれば、御職分に叶ひ候樣、天下の民を治むる事難し、故に尤撰ばざるべからず、よつて吏材あるものを撰び、是又保擧の法を用ひて、其身分の大小に寄て、或は御郡代、或は御代官、或は小吏として民を爲ニ取扱一其治方行屆と不行屆にて賞罰を施し、或者公事方をして聽斷を專らにせしめ、其埒明と埒不レ明とにて賞罰を施し給はゞ、小民其恩澤を蒙る事限りあるべからず、民政を司り訟を司る役人は、金銀を取らんと致候得ば、いくらも取れるなれども、恨を上に取る事甚敷ものなれば、尤贓賄の罰を嚴にして、夫々横目を付置て、少しにても左樣の事有レ之候はゞ嚴敷罰すべし、淸潔の吏は格外に立身さすべし、公事方の役人も同斷にて、其上公事長引候得ば、下々難儀如何計り知れず、故に早く取捌候を爲ニ心掛一、一年も二年も引付埒明き不レ申候はゞ、溺職の罰を下し給はゞ、是又下々大に歡び、民心を結ぶの第一と相成申べし

海防のヶ條大意

一　此儀は一昨年秋相認候海防備論に委敷有レ之候得共、あの節はいまだ外夷御取扱も相定不レ申候節に付、別に愚存有レ之候得共、當時に至り候ては、最早既に大槪は形勢相定候間、今更急に約定御變じ致レ成候ては、外國へ不信を御示被レ成儀にて、民無レ信不レ立と御座候て、信を失ひ候樣にては此方不直に相成、人心に引ヶを生じ候間、何處迄も御約定通りの分は、此方より御破り被レ成候は不レ宜、乍

㆑然外夷は兎角覬覦の心を挾み人の虚を伺ひ、狎ては増長致し易く御座候間、此方に御備無㆑之、只彼を恐れ候處より穩便の御取扱被㆑成候と見掠候節は、色々難題も申出し其上にも望も追々増長可㆑仕候、彼よりあまり増長我儘を申候樣に相成候節は、此方にても堪忍相成兼候樣に可㆓相成㆒は必然の勢故、彼より破り候得ば、是非是より應じ不㆑申候ては不㆓相成㆒、其節に至り俄に手當被㆓仰付㆒候迚、中々御間に合申候事にては無㆑之、實は當時の勢、賈誼が申候火を積薪の下に差置き、燃立ぬ間を安きと存居如く、是を消防する手當無㆑之ては、一旦燃立に及んでは手あまり候に相違無㆑之に付、只今の內御手當の儀肝要と奉㆑存候、扨其御手當御備の被㆑成方は、備論の內に申候惣督を御立被㆑成候儀第一、乍㆑然前文武學の儀に付相認置候惣督重務の事を司り、總練を致候事故、是を兼て洋學惣裁も此屬官にて可㆑然、遍く海內に防禦を設る事も備論に申述候通にて可㆑然か、其外費用を省き人材を育し、利器を制し文武學を設る等は、前文に大略申述候得ども、尚備論に并せ御覽被㆑下候得ば、愚見の趣意相分可申候、備蓄を廣くし不虞に備へ候儀は下の常平倉の條に委敷申べし、仍て其外は備論に漏れ候儀を相認候

天下の諸大名身上取直方之事

一　處々の守衛屯戍を諸侯に勤めさせせんとならば、只今の通諸侯困窮しては勤り兼るなり、故に諸侯の困窮を取直さんとならば其根元を直すべし、天下の諸侯及㆓困窮㆒候根元は、家內江戸定府にて家中も定府多く、江戸の奢侈を見習ひ、幕府日々に大造に相成、奢に在て奢を知ざる樣相成候と、諸事手

重にて借上を忘れ、家老は大名の氣に相成、大名は公家風を學びて、諸事高上に相成候とに寄り申候、此借上の譯は、能々御代初より其以前の事を思ひ見れば、直に相分り候事なり、神祖駿府に在せし時、千葉あたり迄度々御鷹野にて被㆑爲㆑入候節、七人衆と申す御召仕の年寄たる女中ありて、夫を御供に被㆓召連㆒、諸事御手元の事此人々御世話申上たるよし、此七人衆皆乘掛馬にて御供せられたると承り候、當時一萬石の隱居にても此質素の風ありや、又陪臣家老の家内にても、乘掛にて步行事あるや、是と引くらべ候得ば、當時の借上を見るに足れり、又加藤清正は肥後半國の大守なりしが、ある時急に家老の庄林隼人を召されけるに、隼人直樣仕出し候て、清正猶雪隱に被㆑居候處へ、隼人出掛候て御用を伺ひければ、清正仰せに、いつぞや八代へ參候節見掛候得ば、其方の口取仲間着込を着て罷出たり、よき心掛のもの故取立可㆑遣㆑之、其方へ可㆑申と存候てつひ忘れたり、只今雪隱にて風と思ひだしたるが、急に其へ不㆑申候ては、今にも我等か死ぬか、其方が死ぬか致候へば、かく心掛よろしき者を取立ずに仕廻も不本意の事故、俄に其方を呼出したりと被㆑仰たるに付、隼人も感涙を流し難㆑有存候處、清正又申さるゝは、此寒夜にわざ〳〵呼出、さぞ寒く候半、勝手にて一杯呑て行けと被㆑申に付、隼人引掛に御臺所へ廻り、其趣を申候て、立ながら一杯呑で、殿樣は御持病にて長雪隱をなさるゝ間、さぞ冷え給ふらん、粥にてもあつくして上げろと申付て歸り候事と承り候、君臣の誠心を見るのみならず、當時の無造作にて手重ならざる所を見るに足れり、清正は肥後半國を領せらるゝ節なれば、隼人

も何れ萬石位の大臣と相見え候に如レ是たりき、然るに當時千石被レ取るゝ御旗下の士、五石か十石取の用人に命ぜらるゝにも、此通手輕に致さるゝ事は出來申間敷、爰を以て見候得ば、物事あまり手重に過ぐる事顯然たり、借上にて手重になるは、夫に準じて諸入用も多く相成候間、困窮する筈の事なり、故に諸侯の困窮を救はんとならば、此借上手重の風を改むるにしかず、此借上手重の風を改めんとならば、中々詞を以て申付たりとも、是迄の惡習に染み込、借上手重とは不レ存事故改むる心には不ニ相成一只上より諸事を古の樣に簡易にして御見せ被レ成候得ば、自から其風下へ移り簡易に相成申候

一 夫のみに限らず、諸侯隔年の參勤に疲れ候得共是も享保の頃ならば格別、今に至りては御改め候ては、久々大弊を生じ可レ申候も難レ計に付、在江戸共貳年づゝに相成候はゞ、道中の費用半分相減じ可レ申譯は、備論に委敷相認置候間略レ之

一 大艦を造らせ在所の米穀江戸へ運漕し、其外諸物海運にして、江戸屋敷暮し方皆々在所産物にて相濟せ候樣命ぜられ候はゞ、江戸屋敷入費も相減可レ申候

一 供方其外減少の事は、前に申上候通に御座候

一 諸家留守居と申もの突合寄合と號し、酒食遊興に長じ、何も辨へ無レ之故外勤を挾み、譯も無き事迄舊例を拵へ、手重にする事を好み、小吏或は坊主衆抔と仕組み、私をいたし候ものも間々有レ之、又譯もしらぬ主人をすゝめて供立を立派にさせ、賄賂を遣ひて願事をさする類、又内勤新古の差別を立

て、新役をば奴僕のごとく取扱、新役も耻をしらず、夫を安んじて奔走致す樣な惡風有ㇾ之、物事簡易廉直に相成兼候間、先是等を御取締無ㇾ之ては相改り申間敷候

右の通にて猶又奢り遊興に長じ、武備等疎略に仕候者も有ㇾ之候はゞ、能々御正しの上、兩三人嚴敷御沙汰被ニ仰付一候はゞ必然相締り、身上取直候樣可ニ相成一候

御旗本衆身上爲ニ取直一之事

一 御旗本衆は大抵三河以來質素儉約にて、忠實精誠なりし人々の子孫なれば、猶更古風を不ㇾ失して、諸大名手本にも不ニ相成一候ては不ニ相成一譯に候所、追々太平に狎て、高取は却て大名を見習ひ、小身は町人を眞似て、高上奢麗に相成候故、武備の心掛自から薄く、上の御威光にも拘り候樣相成候間、諸事上の御家風を古へに御復し、嚴敷御制度を御立、分限不相應の儀有ㇾ之候はゞ、夫々御沙汰有之、文武に仕はめて、古の忠義廉直の風に御引戻し被ㇾ成、其上に前文申上候通、十里四方住宅にて、馬抔も手飼に被ㇾ致、三河にて成瀨小吉貳百五十石の身上にて、大小を竹にくゝり、畑の脇に建置て、鍬を取て耕し居候抔と申樣なる風儀に御仕立被ㇾ成候はゞ、自から身上取直し可ㇾ申、御家人は尤諸大名の手本に不ニ相成一候ては難ㇾ成事故、別て此風儀御正し無ㇾ之ては、御威光も相立不ㇾ申儀と奉ㇾ存候、當時にては此二十年前とは相替り、御家人の放蕩少し相止候樣奉ㇾ存候得共、いまだ譯もなき所行有ㇾ之もの往々承り及申候、是皆困窮の本に御座候

前文申上候通、手明の人々在住被二仰付一候はゞ、諸役冗員を被レ減候て、勤候者繁勤可二相成一故、夫は別段養廉料被レ下、厚く御手當被二仰付一候はゞ、困窮仕候儀も有レ之間敷候

天下の人民身上爲二取直一方之事

一　農業は人民の本業に候間、是を出精致候樣委敷教諭ありて、孝悌力田のものは、其領主支配にて取調べ格式を賜り、末に走り商賈の眞似を致し候ものは、純粹の百姓より寄合等の節は、下席たるべくと御定め、商賈致候者は、帶刀差免候事御禁制有レ之候はゞ、自から本業出精候樣可二相成一、是人民身上取直候根元に御座候

一　近來は武家困窮致候に付、身上直り渡り用人抔申候酷虐無耻のものを召抱、平日奢り候て身上すり切候を、自分手元の省略仕候事をば不レ存して、百姓へ無理の用金課役を當て、平日年貢取居候は、武備其外勤用の爲に候處、夫をば奢りの方へ遣ひ込、武備勤用は却て手薄にいたし置、騎馬調練等にても被二仰出一候得ば、又々權柄に入用を取立候類にて、下の世話は一向不レ致、百姓は只年貢用金を取立候ための者とのみ心得居候類多く候故、人民一體困窮に及び申候、是等は能々御穿鑿ありて、無理成取扱にて、下方困窮衰微に及び候儀顯然に候はゞ、夫々御咎被二仰付一候事、御先祖樣御代の節の通に候はゞ、下々困窮を免れ可レ申候

一　在々に商賣飲食店出來、物事便利に相成候は、在方困窮の基に御座候、是を御禁制、近古迄有レ之

候市日と申もの、近來は産物多き場所の外は大概相止候得共、是を復し、此市日の外は見世賣不ㇾ相成候はゞ、自から不自由に相成、奢も長じ申間敷候

一　商賣相禁候迚、所の産物、幷米穀材木等仲買紺屋綿打、其外民間必用の儀は、町人には準ずべからず、是を嚴敷押へ候ては、諸産物出來方捌け方不ㇾ宜、却て人民の差支に可ㇾ相成候

一　博奕は百惡の元にて遊惰の媒に候間、嚴敷御禁制無ㇾ之ては、百姓困窮の基に御座候、在方には博奕渡世のもの有ㇾ之候、夫を取締役人手先に被ㇾ使候故、此輩又子分を大勢持て博奕を致候間、如何様被ㇾ禁候ても互に隱し合ひ、自分遺恨有ㇾ之ものになければ人指不ㇾ致故候、尙更盛に相成相止不ㇾ申候、若手先を相止村役人へ嚴敷被ㇾ命、取締候はゞ相止可ㇾ申候

一　在方髮結床有ㇾ之候は、博奕の媒ち奢りの基に候、古の通藁にて髮を結び候樣と申候ては、却て人情に戻り可ㇾ申候得共、髮結床は御取拂候方、下の爲可ㇾ宜と奉ㇾ存候

一　村方へ遊手の者入込、遊藝等敎へ候は困窮の基に御座候、手習物讀の師匠、醫者の外は在方へ差置候儀、御禁制可ㇾ然と奉ㇾ存候

一　葬禮の儀制度無ㇾ之、近來大造の費相掛り、幷寺院布施を貪り、葬送等爲ㇾ致ㇾ延引ㇾ候儀より諸事增長仕候、是皆困窮の基に御座候、寺院の儀は前文に相認置候、葬禮の儀は上より百姓の定制を御立可ㇾ然奉ㇾ存候

一　窮民の儀は其領主より世話致候は勿論の儀に候得共、猶更吉凶の節儹に施し候代りに、分限に應じ米を出し、村々にて積置義倉を起し、下々互に救ひ候樣有度事

一　凶年の手當、公領は支配、私領は領主より元米を村々へ遣し、豪農義民を募り積米致させ、小民よりも年々出來秋に五升三升づゝ爲レ出候て、其村人別三年位の食料有レ之候樣御仕法有レ之度事

前文三ヶ條の趣を以て、上下一同富有に相成候はゞ、海防の根元に御座候

處々へ防禦人數置方之事

一　此儀は海防備論に委敷載せ置候間、別段不ニ相認一

大艦大銃造り方之事

一　此儀承り候得ば、外國より大艦御取寄に相成候由に付、早々右を取崩し候て、諸寸法一々明細に圖面にいたし、何方にて見候ても、直樣製作出來仕候樣被レ成候はゞ、諸大名へ御渡し高役にて爲ニ御造一、小高の分は組合候て造り候はゞ、早々數百艘も出來可レ仕候、右を御秘し被レ成候ては、志有レ之家にて雛形拵へ、役にも不レ立無用の事に費を仕候のみならず、御武備には一向相成不レ申候、すべて大艦製造大銃鑄法等は、早々上にて御取調、反射爐等の拵方迄圖面に被レ成候て、諸大名へ御示し被レ成候はゞ、則ち我國の武備を早く御行屆せ被レ成候御手段にて、夫を御秘し被レ成候は、御國の御爲を不ニ思召一に相當申候、且右艦銃共諸國便利宜敷所々にて多く造り候得ば、費用も大分相省け申候事に

て、忽ち海內の御備出來可ㇾ仕候
以前私幼年の頃、外國より目鏡渡り申候、共筒を廻し候得ば、中にて色々替り候て、一樣に不二相成一に付、いつ迄見候てもあき不ㇾ申候とて、のろけ目鏡と呼申候、共品二ッ渡り候處、一ッは何方か御大名へ御買上、一ッは賈人の手に渡り、見世物に致候て、大阪より江戸へ參り候所、某藩の足輕五十金には直樣買取打こわし、中の仕かけを見候て、竹筒にて其仕掛に倣ひ、數百本拵へ賣出し大金を得候由、今外夷の大艦を御こわし御覽被ㇾ成候は、むだの樣に相聞候へ共、夫を形に致し、即刻に數百艘出來仕候得ば、却て天下の御益と奉ㇾ存候

夷狄御取扱之事

一　外國の儀最早御約定も御定り候上の儀故、是非の儀申上候ても無益に付、當時御約定相成候上にて申べく、山に虎豹有て獵師も容易に入らず、淵に蛟龍すみて漁人もむざと釣を垂ずと申道理にて、內の御備へ十分に有ㇾ之ば、外人猥りに覬覦の心を生じ候事は無ㇾ之、共上是より信義を御缺き不ㇾ被ㇾ成、道理を以て彼が心を打服する樣被ㇾ成候はゞ、增長して難題を申出す儀は有ㇾ之間敷候、扨共信義を御缺不ㇾ被ㇾ成樣被ㇾ成方は、彼は夷狄にもせよ、此方よりは誠心を以て欺かず、彼方にて求め候品々被ㇾ遣ても、成丈入念堅固にて、先の爲にも相成品々被ㇾ遣候はゞ、第一には御國風の手厚き所を御示し、第二には此方の實意を御見せられて、彼も難ㇾ有可二相心得一と來り候得ば、右賣渡の儀町人へ御任

せにて、町人共色々濫惡の品を注文仕入候て持出し、一時の利を貪り高直に賣渡し候由、都て物の儀は萬國共工手間に應じ候もの故、左樣に濫惡の品高直なるべきいはれ無レ之、彼は諸方を歩行候もの共故、此方の不實を存ぜぬには有レ之間敷候得共、外の望み有レ之に付、其まゝ欺を受居候ても、實は我國の人を見下げ候て、輕侮の心を生じ候は、是等に寄可レ申候、都て町人に御任せ被レ成候ては、彼等は無分別にて御國の爲などは露計も不レ存、只己が利欲に計泥み候もの故、我國同士にてすら信義を失ひ、人をはめ候もの多く候に、己が淺智を以て、外國人は何も不レ存抔と見侮り、如何の事可レ仕も難レ計、其信義を失候は則我國の信義相缺き候にて御座候間、何卒先方へ町人より直に引合せ御禁制、官府にて注文の品御調べ御吟味の上、丈夫なる品を時の相當の直段にて町人より御買上げ、諸掛りを加へて相當の直段にて彼へ被レ遣候はゞ、我國の人眞實謹恪なるに服し可レ申候、都て如レ此御和談被レ成候上は、國の御爲に釁隙を生ぜざる御趣意にて、御利益の御趣意には有レ之間敷、若又御利益の思召に候はゞ、賣物は小利を得候迚、御出役其外大に物入の儀は大損と申ものにて、中々勘定に相掛り候事に無レ之、若御國の御爲と思召候はゞ、少々の利は目がけずとも信義を失はず、永く釁隙を生ぜざる樣こそ肝要と奉レ存候

御約定には官吏引合と有レ之候得共、先町人直に引合、品物直段等相極、其上にて官吏へ差出、官吏より相渡代銀受取、町人へ渡候樣承り候、若左樣候はゞ權下に在て、直引合も同樣に御座候。

一　町人共直引合仕候害は是のみに限らず、邪法傳染の儀も難ㇾ計、又清朝には阿片の亂抔有ㇾ之節、皆內地の商人彼と馴合手引仕候にて見候得ば、大弊を可ㇾ生は必然と奉ㇾ存候

一　七里四方遊歩御許に相成候由、右にて彼の輕卒ども自由に人家へ押入、及ニ狼藉一候も間々有ㇾ之由、輕卒は彼も是も同樣にて、無分別もの故、大將の令ありても、私に右樣亂妨相働候は必然、是迄は未だ此方の樣子も不案內故、まだ左樣にも有ㇾ之間敷候得共、追々如何なる事を致候ても、穩便との被ニ仰出一にて、此方より手出し不ニ相成一候ては、彌見侮り增長して、亂妨强淫等度々有ㇾ之樣に可ニ相成一、左樣にては御國威も打挫け、御大切の事に御座候、右樣の亂妨仕候事は、彼にてもよろしくと存候て、上官差許し候譯に無ㇾ之に付、能々此方の國法を御示し被ニ仰含一候上、七里四方の間は成丈百姓家は外へ移、士着士を被ニ差置一、平日武藝を勵せ、若無案內に士人の家へ這入亂妨仕候はゞ直に打捨候て、此方同士にても此通の國法の趣彼へ被ニ仰含一、彼にても能々申含め、打捨に逢不ㇾ申樣可ㇾ致申付、若右國法を被ニ相背一打捨に逢候共、殺され損たるべくと約定を御立被ㇾ成候はゞ、御國威相損じ申間敷候、宋の王彥章邊地の大將として、契丹と境を接し罷在候節、契丹と宋は和議を結び候邦に候處、夷人中國の法を犯し候もの有ㇾ之候節、忽ち捕て耳を喰ひ、數百人の耳を喰候得ば、敢て中國の法を犯すもの一人もなく相成候由歷史に相見え候、夷狄を取扱候には酷成樣なれども、此の如く猛烈なる事を見せ置不ㇾ申候ては、柔弱姑息に付上り、却て釁端を開き候樣相成候、双方議定の上は何程猛烈に候

共、先方にても何とも可ㇾ申樣無ㇾ之付、永く和交は續き、無事に可ㇾ有ㇾ之候

一　夷狄應接の儀は機に臨み變に應じ候取計ひ、同權に無ㇾ之ては行屆き兼候に付、備論にも申候通、大總督を被ㇾ差置、廟堂にては其大綱を御議し大意を御立、其他は右の主意に相叶候樣、大總督等に應答致候樣不ㇾ被ㇾ仰付ㇾ候て、一々江戶へ御伺ひ〳〵と申樣にては、乍ㇾ恐御國威薄く相成可ㇾ申候

一　內々御備嚴重にて、和交を御結び被ㇾ成候得ば、彼も侮りの心を生ぜず、內も御斷被ㇾ成候御力有ㇾ之候得ば、人民の爲を思召、和交御結び被ㇾ遊候所を、難ㇾ有奉ㇾ存候て感服仕るべし、若內の御備いつ迄も御屆無ㇾ之、只和交に計御心を被ㇾ用候ては、外の侮を生じ候のみならず、內もまた侮の心を生じ可ㇾ申、御大切の儀と奉ㇾ存候間、中々悠々と被ㇾ遊候儀にては無ㇾ之、片時も早く大御改革ありて、內の御備相立候儀肝要と奉ㇾ存候

新政談（一名偶言）卷之四　終

新政談 一名偶言 巻之五

邊地開き方の箇條

蝦夷地の儀ニ見も不レ仕候事故、誠の推しはかりには候得共、心易き者共參見候ての咄を取合せ相考、且古人草昧の地を開き候法、幷漢土邊地防戍の制等を見合、愚意相認候儀に御座候

一 先邊地御開きの儀、何の御爲と申儀御決定第一と奉レ存候、右を被レ開候て御國地を御增、御取箇を御增候樣被レ成候儀に候哉、又は是迄の通空虛にして、捨地同樣に相成居候へば、外國人來開發仕候も難レ計、左樣候ては御國疆を失ひ候のみならず、直に外夷と界を接候樣相成候に付、內地の守衛六ヶ敷相成候間、爲ニ御警衛一御開被レ成候哉、若御取箇相增候御爲に候はゞ、不レ殘上の御手にてぼつ〳〵と御開き、御物入も格別無レ之樣無レ之ては、中々新開の場所より左樣に直樣御益上り候ものには無レ之候間、詰り矢張是迄の通、只漁獵運上の利を御取置被レ成候ても、格別の御得失は有レ之間敷と奉レ存候、若又爲ニ御警衛一人を實して、外國人の占據不レ仕候樣にとの思召に候はゞ、江戸の御防に、品川浦へ少々の御臺場御築被レ遊候てすら、五十萬や六十萬兩は相掛候事故、日本國の御防に、此手廣き御防ぎ場所を御拵被レ成候事故、餘程御物の入事と、初より御覺悟無レ之ては參り屆き不レ申候、乍レ然品川

の御臺場は此後年々御手入等にて御物も入、防掛り大名衆も物入多にて、身上續兼候難澁有レ之候得共、邊地は一旦御開被レ成候得ば、被レ成方に寄警衞諸侯へ被二仰付一、幷諸侯も失費無レ之相守る事出來可レ仕、其上追々御國益とも相成候間、一旦御物を被レ入候ても、畢竟御損には相成不レ申候、夫はたとひ御益無レ之共、御守衞の大臺場御築立の思召にて候はゞ、是非早々御取建無レ之候ては不二相成一事と奉存候、扨又其開き方に罪人を遣すの、信濃・出羽等の民を移すの、蝦夷人に恩を施し人を殖すの、志あるものを募り、心次第に試みに開かせるのと申ものも有レ之候得共、罪人迚左樣に多人數あるものにてはなく、また嚴法を立て、多く罪人を拵へ、邊防を修めんとして一揆に相成、國を亡し候者秦の始皇に御座候間、此事も容易に相成兼候、信濃・出羽の百姓を移し候と申者、右兩樣迚左樣に餘計の人多く有レ之ものにては無レ之、夫を無理に多く移し候得ば、是迄其土を安んじ居ものを遠方へ遣し新百姓に致候者、人情に戻り候のみならず、其本國只さへも人數不足の處へ、又々如レ斯多人數引移候は、其跡荒蕪に相成可レ申候、蝦夷人へ恩澤を施し人を殖候と申者、一通者尤の樣に候得共、高が貳千人や三千人の員數なれば、二三百年も相立不レ申候ては、中々此廣き境土へ充滿する程の人數は生育不レ仕候、其內には外夷より最早心掛、人を植候工面も仕候樣子に付、間に合候事には無レ之候、志あるものを募り開かせ候と申ても、何程志あり候ても金銀無レ之ては、遠方へ參り致方あるものに無レ之に付、是非有力者を語ひ不レ申候ては相成兼候得共、有力の者は蝦夷へ不レ參とも、三都抔に居自由に貨殖仕候手

段有レ之、蝦夷地へ参り候迚ヽ急度まうかり候と申見詰無レ之候間、誰も應じ候者は無レ之、ケ樣成る事を御當に被レ成候内には、空敷歳月を過し候樣に相成候、外夷より開き候はんと覬覦仕候處を、先此方より開き可レ申と申者、一月をも爭ひ候譯にて、手後れに相成候ては、臍を噬にても不レ屆儀に御座候、誠に眉に火の付候如く火急に致さねば、御間に合兼候時勢にて、左樣に火急に致す積にても、中々五年や六年には行屆事にて無レ之、夫をかく悠々たる了簡にて相過候得ば、其内には必外夷心を生じ、金銀銅鐵の出るを知らば、かゝほるにやの新疆を開き候手段にて萬國の人を集め、何の造作もなく開き候に相違無レ之、其時に至り候ては、此方の境土たる約定ありとて、口舌を以て爭ひ候ても間に合候事には無レ之候、彼は自分の利を専らにせず、土地の開くるをよしと致候心入にて致候間、何之造作もなく開け申候、此方にて御開き被レ成候ても、矢張其思召にて我國の人にて開き、邊防の御爲に相成候得ば宜敷と申思召を以、大臺場を築候積にて御元入を被レ成、上の御益を御目かけ不レ被レ成、人を御疑被レ成候御掛念を御止メ、御開無レ之ては相成間敷と乍レ恐奉レ存候、申上候も恐多き儀に候得共、松前家一手に御任被レ置候ては、外夷より被レ開候も難レ計とて、上へ御引上げに相成候て、矢張同樣御手屆き不レ申、外夷に開かれ候ては御申譯無レ之儀、是を思召候ても御踏込、御手早に御開き無レ之ては不二相成一かと奉レ存候

一　昔漢の高組楚と天下を爭ひ給ひしとき、陣平に申付、楚の君臣を離間させ候とて、其入用に黄金

四萬斤を陳平に渡し、其出入を不ㇾ問と申候、都て大事を任じ候には、其人私を致候哉とて疑候樣にては、其人も力を盡し兼、又々一々伺はざれば事を取計ふ事出來ぬやうにては機會を失ひ、其功成就仕るものにては無ㇾ之、僅か楚の君臣を離間さする一事を取計らふにてすら、飛はなれたる奇謀を廻らさするには、四萬斤を任せて疑はずと申樣無ㇾ之ては參り不ㇾ申ものを、此大事を取扱候に、初より小兒を使に遣すごとく案じ候ては、迚も成功有ㇾ之ものにては無ㇾ之候間、有志材傑の士を御撰ひ、先敷奏言を以てし、明試功を以てするの古法を用ひ、其手段を言はせて御覽あり、尤に相聞候を撰び、手を分候て一つに御任せ、入用等迄打任せ、其成功を試み、兩三年には彌其言の如くに可ㇾ參と思召候はば、猶更打任せて御させ被ㇾ成、其言のごとく參り不ㇾ申候ば、御罰し被ㇾ成候て可ㇾ然、治平の時に當り、內の事を御させ被ㇾ成候には、公正廉直の人に無ㇾ之ては御役に立不ㇾ申候得共、ケ樣成草創の事を御させ被ㇾ成候には、才氣さへあれば少々の私は致候ても、無二御構一御任じ不ㇾ被ㇾ成候ては、成功は難きと奉ㇾ存候、右の陳平はもと楚の國より裸にて出奔して來り候男にて、當にも不二相成一人物に候得共、高祖一斷の疑心をさしはさまず、任じて御遣ひ被ㇾ成候間、夫にはまりて智謀を振ひ、遂に其事を成就するのみならず、宰相までも相勤候樣相成申候

一　蝦夷地を開候には手廣なる事故、中々五萬や十萬の小人數にては不ㇾ參候間、先其御見積り肝要に御座候、此見積り無ㇾ之故、罪人を遣すの、信濃・出羽の百姓を移すのと申杲說も有ㇾ之候、私承り候

に、イシカリ川の左右計にて、一耕土に六七十萬石開き候場所有レ之候由、其外飛々に二三萬石開き候處は、いくらも有レ之由、左樣候得ば先カラフトはさし置、蝦夷地計にても貳百萬石近き田地は出來可レ仕と奉レ存候、夫を先內端に見候て、百六十萬石の地と見候得ば、此地を耕すには人別百萬人無レ之ては相成不レ申候

大數關東にては、一萬石の地にては人數五千四五百より六千人位、上方筋にては、七千人より八千人近く有レ之候、是は關東は土疎にして畑多く、上方は土肥て兩作の地多き故、同じ高にて人を多く養ふゆゑなり、今蝦夷地は新開の場所故、關東の割を以てはかる所なり、上方筋にては六七萬位の高にて、領分の大別拾萬人あるの、十五萬人あるのと申類有レ之候得共、夫は繩延餘高あるにて、實に地に着候人別と申者は、地方限あるものにて、其樣に大勢養ひ候ものにては無レ之候

其上に金銀銅鐵の坑開け、石炭材木出で、海邊漁獵も盛に相成候はゞ、其人別も二十萬に及ぶべし、如レ此大人數中々一國や二國の人を移し候迚、足り候事には無レ之、徒罪遠島等の罪人とて、左樣にあるものにて無レ之候間、諸方無業のものは不レ及レ申、天下中の他稼ぎ心掛るもの、幷乞食非人にても何にても參り度ものは勝手に參る樣に致し、其參り度相成る樣勢を以て驅り不レ申候ては、中々夫を申付移すと申樣にては、人情に戾り候のみならず、被二仰付一て遣はさるゝからは、道中十分御手當不レ被レ下候ては不二相成一故、行參るものにては無レ之、都てケ樣なる事は望み無き事を令して、無理に遣し

候より、銘々より望を起し、爭て夫に趣き候樣無レ之ては、急には參り不レ申候

一　其勢を以て[illegible]候手段は別儀にあらず、利のある所は人の集るものにて、蝦夷へ參りさへすれば大利ありて、金銀を手に摑て取候樣なりと承り候得ば、天下の身分自由になるものは、必ず其先々と承り傳て、蟻の集るが如く集るべし、カリホルニヤの銀山銀多く出で、大利ありと承り傳へて、清朝の人民萬里の波濤を越て西洋船に賴み彼地に趣き、渡世するもの年々に多しと申にて、其勢はしるゝ也

山林川澤を開くに手順ある事

一　山林川澤洪荒の地を開くは、手を下すに次第なければ勞して功少し、其手順と申は、孟子に堯の時、洪水の跡にて大荒となり、村里民居のあたり迄草木生ひ茂り、禽獸の栖となりしを、是迄は打捨ありしに、堯帝計は其人民の難儀に及ぶを憂ひ給ひ、大勢の中より人材を選びて、舜と申人を見出し、引上げて總督とせられけるに、舜も又壹人にては行屆難き故、大勢の中より人材を選び出し、益・禹・稷と申す三人の人材を得て、各其長ずる所を用ひて一役づゝ打任て、益をして山林を焚き、繁茂したる草木を拂ひのぞき、晴々と成て山氣にて人の病む患を去り、虎豹抔の住む事のならぬ樣にして、出て人を食ふ畏を除き、人民心丈夫に村居せしめて、無事に今日を送り、安心して耕作に出精する事の出來樣致させ、其次に田地を開發せんとせられしかども、水利不レ宜候ては、水の引ける低き場へ耕作すれば、川下支へる時出水の患あり、高き處へ作付すれば、旱の時干損の患ありて、其上水の引方工夫

なく、うかとそのまゝ川なりに任せて、猥に手を下し初れば、後は其外へ水を引ば、田地と成處ありても、水の引方にさしつかへ、開き兼る等の憂もある事故、先水道の穿鑿なければ不二相成一に付、禹と申水利功者の人に命じて水利奉行とし、川々の浚へ、渠堀の引方を司らしめ、水道を工夫して出水せぬ様、干損せぬ様の處置ありて、其次に稷と云人は、幼年より草木の世話數寄にて、天性耕種の事に功者なれば、それに命じて民に植付より養ひ、草取・苅取までも、仕方をよく／＼世話をやかせて、教へ導かせ給へり、爰に於て天下の人民安居して耕作し、水利の便を得て作物もよく出來ければ、さしも荒はてたる山林も一時に開けて、天下繁昌の地とはなりたり、しかし右の通開け耕作して食する迄は、一年や二年には行き兼る故、其間民も食はずに働く事はならず、仍て書經に申如く、禹水土を平げて後、稷と庶民をすゝめて鮮食せしむとて、其間の取續きには、山狩川狩さして禽獸魚鼈をとり、草木の實抔夫食になる食物を取て凌ぐ事をすゝめ、耕作の出來迄を取續かせ給へり、是其手順なり、故に今此洪荒の地を開き給はんとならば、此手順によらざれば成功はかたし、されば先堯の舜を上げて任ぜしごとく、實心を以て此事に任ずる人を擧て惣督に任じ、其人の目鏡にて舜の益・禹・稷を擧げし如く、材略ありて其事功者にして、實心にはまりて力を盡し候人を見出し、其人の心一ぱいに爲レ働、外より臂を引かず、打任する事是第一なり、扨此手揃ひたる上は、先山林生ひ茂り、熊羆等と同居する同然にて、山氣も強く病人出來て、又獸に食はるゝ擾れありて、人々朝夕安き心も無き樣にて人氣

ゝ伸ず、耕作に身を入ざる事ならず、生活六ヶ敷と見る時は、誰ありてかゝるおそろしき所を好て住家にせんや、それこそ命ありての物種なれば、いかに割合宜敷と聞ても、行て住むもの壹人もあるまじ、故に益の火を掌り山澤を燃せし如く、秋冬の落葉して枯木になり、風の烈しき節を見合、火を付て生茂りたる草木を一旦焼拂ひ、山氣をのぞき、禽獸の害を遠ざくる事、是第二なり、其次は禹の水利を治めし如く、地面の高下を計り、川下の支へを浚ひ、水の出ぬ樣にし、且は溝堀用水の引方を工夫して、水旱の患なき樣地處を見立て田地を發く、是第三なり、其上は稷の稼穡を教へし如く、耕作には便利不便利ありて、農具の拵へ方よりして、地味によりて植物の得失あるなれば、猥に植ては實のり悪敷、利少き故人もすゝまず、よつて功者なるものを先達として、此地の農具はヶ樣作るがよし、此處の植物は此種よろし、此地味の養ひ方は此糞よろし、此處の氣候は何頃植て、何頃草取、何頃苅取がよろし、早稻地に相叶ふや、晩稻地なるやと申樣成事を委敷教へ導かざれば、百姓は只自分の仕馴れたる事計、土地の見合等は不功者なる上、諸方より寄り集りの人を用ゆる事故、一樣ならずしては必ず取實よろしからず、利少うして人氣すゝむまじければ、ヶ樣に世話をやき、少しも取實を多くさせて、人心をはづませ引立る、是第四なり、右之通にて農民の仕付は濟む事なれども、此人民始め集り來りて、直樣作物出來て、直樣喰ひ續く譯には出來兼る故人も集らず、よつて禹稷はもろもろの食し難きものにすゝめて鮮食せしめし心持にて、先金山銀山鐵山銅山の類を開き、漁獵の道を

開き、此致方は下の人を集る條にくはし蝦夷地に行けば、自由に生活の出來る事を見せて、大勢先を爭ひて集り來る上にて、追々田地を與へ土着の民として、家內を持せて永住さする、是第五なり、此五段の順を失はず候得ば、十年を過さず蝦夷は豐饒繁盛の地となるべし、若手順を用ひ給はず、取留もなく處置前後しては、如何樣力を盡さるゝとも、決て開る事かたかるべし

一　火を付て燒く時は、數千年の大材一時に灰燼となるはをしむべきの、石炭多ければ夫々燃付て、一年も二年も火消兼て困るべきのと申す俗論もあるなれども、大業をなすものは細事を顧みず、蝦夷三百里四方の地、高山大澤も多き事なれ共、たとひ人居になるべき近所の山林を燒たればとて、外に大材の出る處はいくらもあるべし、また漢土は石炭多く出る國なれども、益の山澤を燃せし時、石炭に燃付て困りしと申す傳記もなく、且常陸國笠間近所の山々にも石炭ある處ありと聞、あの邊山火入りて、山の燒ける事度々なれども、つひに石炭に燃付て、二年も三年も消え兼し事を承らず、夫はたとひ燃付て、消兼る處たまさかにはあるにもせよ、左樣の所は捨物にして、其外を開けばよろしき事にて、如ㇾ此小膽臆病の議論は聞にたらず

一　中には蝦夷地度數四十五度以上にて寒氣甚敷、稻作の仕付難かるべしと申もの有ㇾ之候得共、都て耕作の地は其陰陽を見、其流泉を見ると申て、度數にて寒氣强きにはかゝわらず、山を北にし水を南にし、水利よろしき場所は、陽氣にて作物出來るものなり、且承り候得ば、蝦夷地は菜大根の類よく

出來る地あるよし、菜大根の出來る地は、餘程地味よろしき場所にあらざれば出來ぬものなれば、吃度稻も出來るべし、若又稻出來ぬ地にても、黍は必ず生ずべし、何にても食物渡世になるものなれば、稻計には限らず、桑を栽て蠶を養ひ、楮を植て紙を漉き、櫨を植て蠟を取り、麻を植て苧を取り、其外漆・甘蔗の類何にても作らすべきなり、石炭多きよしなれば、夫を掘するも食續の一つなり、其捌方上より便利にして御世話あらば、何をしても渡世にならぬ事はなきなり

人を集る仕方之事

一　此百餘萬の人を集るは一時には參らず、前文に申せし如く、人をはづみにのせて、先を爭ひて來る樣にする事肝要にて、其はづみにのせ方は、大利ある事を示すにしくはなし、其大利の示し方は、先金銀銅鐵の出る山多きよしなれば、これこそ幸のことなれば、先夫を開くべし、其ひらき方は、試み掘を致候志のものあらば、申出べしなど〻被仰出位の事にては、是迄見ぬ所にて、彌あるか無きかもしれず、掘かゝりても、利があるか無きかもしれず、又よきかげん試み掘して彌出るに極れば、上へ御取上に相成やらんもしれず抔と存る故、誰ありて我試んと申すものあるまじ、たま〳〵ありても、一人や二人の微力にては行屆きもせず、中々人の競ひ集る樣にはならぬなり、是者迚も上にて一錢も遣はず、下にさせて其上前を召上げられんなど〻の、小さき利分を御目かけ被成候樣にては參る事にて候はず、初にも申如く、御益の爲にあらずして、邊防の御爲と申す事に候はゞ、先大臺場を築

さて、夷を御防ぎの御用心を被レ成思召にて、先三拾萬か五拾萬金の御元入を被レ成、當分は上の御益は一錢も御取不レ被レ成、不レ殘下に儲けさする思召にて、金銀銅鐵ともに上にて功者なるものを御召出し、處々爲ニ見立一候て試み掘をなされ、幾ケ所も〳〵も誰か手ふりにて行つても、掘方なり、持運なり、淘錬なり、仲買なり、仕入なり、自由に出來候樣に被レ成候はゞ、掘出し候鑛、出來候金銀の類、上へ御買取の直段、內地、山方の例などを引別せず、上にては御世話樣にて、防禦の爲に相成候御得と御覽、何にても下の割合極々宜敷樣になされ候はゞ、人々其大利ある事を聞て、競ひて集り來るべし、此集り來に付て、掘方は長生致し難しとて人の忌み候事故、江戸中非人乞食の類、幷輕罪のものを被レ遣候て（此江戸に多きは乞食非人願人の類に御座候、是等一旦天下多事の時に當り、飢饉等にても出逢食兼候に至候はゞ、必流賊に可ニ相成一と識者は心配仕る事なり、故に此ものは頭々もあるに付、其頭に命ぜられ、引連參候樣被ニ仰渡一て可然か）人足とせられ、素人は其持運び陶錬仲買、其外の業をさせ、掘人足を好むものは、勝手に素人にても御させ被レ成、又人多く集るに付ては、酒屋も醬油屋も、道具屋も疊屋もなくてならぬものは、皆上より名工を御撰び、造り酒屋も幾軒もよき續事を被レ遣、上酒を造り出させ、外酒入らず、却て奧州あたり迄も蝦夷酒出る樣に相成候は、追々人も集り來るべし、米も入る米屋も出來る、廻米にては高直にて引足らず、米を作る存寄の者も出來る、直に上より田地を與へ、是迄の定法にかゝはらず、十年も鍬下を被レ下、其上五公五民抔と申儀をはづして、（五公五民の取箇と申すは貳割五分の取に當るなり、譯は事長ければ略す）拾分一とか、貳拾分一とか申樣に、極々租稅を薄くして、百姓を致候ても割合宜敷を御見せ被レ成候得ば、又爭て耕作に赴く

もの多く出來仕るべし、其上にも鹽場も建れば、漁獵場も建れば、夫も皆上より元入を被ㇾ成候て、網元船納屋干場其外迄御こしらへ置、手ぶらにて行候ても、直に渡世のなる樣に被ㇾ成、先當分は運上を取らず、掛り丈の利を見て品物を買上げ、（是を町人の手に任すれば大利を〆めて、働く人利德少き故すゝみ不ㇾ付候に付、上へ買上と申なり）諸國へ運漕せられ、其外諸產物、石炭にても、紙にても、漆にても、蠟にても、絹にても、皆此通に下々大利を付て、上には御世話の御入用計にて別の御益を見ず、廉潔公正にして國の爲に邊防を治むる志の役人を御撰び爲ㇾ取扱、例の役德を貪りて下を掠め候ものは、早々邊備を妨ぐるの罪を正し、嚴罰を與へ候樣被ㇾ成候はば、十年を過ず百萬の人數出來すべし

目前の利を謀らず、邊防を主とすべき事

一　小利を見れば大事ならずと、聖人も戒め置給ひし事にて、如ㇾ此下計を益し候ては、上之御損の樣に俗吏は心得候て、隨分大概に上の御損の行ぬ樣御益を御取被ㇾ成候ても、外々の百姓職人より割合も宜敷間、何も其樣に下の大利を付け候には不ㇾ及抔と申說出べし、是は誠の小人の了簡、鼻先の見識と申すものにて、左樣なる處に未練を生じ候ては、人の氣勢乘り不ㇾ宜、人の氣勢乘り不ㇾ宜候ては、集る人競ひなく、たとひ集るにもせよ、疑ひなく集れば、拾年にて行ものは貳拾年かゝるなり、邊防拾年遲く相成、其內に外國より手早く人を被ㇾ植候ては、悔みても返らぬ災なり、爰をよく考へ給ふべし、また蝦夷より出る產物抔も、新開の地其樣に上工を撰び教ゆるは、物入も多くて費なりと思ふ人

もあるべけれども、左にあらず、蝦夷より出る產物と申せば、皆手厚く精巧にして、丈夫にて欺き僞りの品は決てなく、直段も恰好なりと申樣、世間の人に信ぜらるゝ樣になれば、其品捌け方宜敷、融通の滯りなき故、却て其地の繁昌に相成、邊防御手當もはやく御屆きなさるゝなり、爰をよく〳〵取扱諸役人にも勘辨させ度事に御座候

一　此事起り候はゞ、町人の山師共御益筋を申立て、運上差出請負仕度と申ものいくらも出來し、賄賂を摑み夫をとり成す俗吏、紛然として出づべし、其時餘程上にて御踏張、邊防の御爲と申儀を被ㇾ思召込、其說を御切破り無ㇾ之ては、事は必ず破れ申べし、俗吏は夫には色々理窟を付て其運上を取て、夫にて御備を被ㇾ成候得ば、同然などゝ色々詞を巧にして申せば、上官も其氣になり、取成す人も出來すべき間、其決斷尤大切なり

大艦を造るべき事

一　內地にて御經濟御取締、大名身上爲ㇾ御取直ㇾ方等に付て、大艦御製造の事認置候得共、此邊地御開きには、猶更大艦大切なり、譯は此大人數を三百里四方の處へ集るには、只松前一濱にては不自由なり、湊も所々便利の地を撰び、幾ヶ所も〳〵開き、金銀銅鐵石炭米穀、其外諸產物、陸地の運漕遠ければ無用の費多く、自然と其品物高直に相成、捌け方不ㇾ宜故、川筋出しかた船着便利等相考、都合よろしき湊々より、內地の捌け宜敷都會の地、江戶大阪、其外所々へ積出し、諸方より集る人も、

何も奥州路をはる〴〵經て、松前箱館へかゝらずとも、直に自分在所より都合宜敷内地の湊へ出て便船し、金山ある地なり、銀山ある地なり、石炭ある處なり、耕す田地を求るなり、勝手次第に行事相成樣無レ之ては、人々おつこうに存候て、見合するは人情に候間、其心配なく、官人にても何處々々迄行さへすれば、蝦夷に行くは何の造作もなしと、人々存ずる樣になければ不二相成一、夫には大艦多く通路を便にするにしかず、扨又其大艦は外國の制にならひ、堅固にて難風波の憂ひなく樣無レ之ては、人人不安心にて恐れ候のみならず、産物の運漕も費多ければ、其價外の代物へ上掛候はでは不二相成一候に付、産物の價自然と貴く相成、融通不レ宜なり、扨又其大艦製造の儀、蝦夷地は大材多きよしなれば、渡來の大艦を早く打こわし、一つ〳〵其寸尺にならひ、其製造の通作らせられ候はゞ、即時に拾艘も二十艘も作り出すべし、其艦を作るも働き人足等多く入る故、また一つの人を集むる手引となるなり、渡來の品をこわすは惜き樣なれども、早く造るには其形を取、梶を拵るものは、十艘も二十艘も梶をこしらへ、舳を作るものは、十も二十も舳をこしらへ、帆柱・帆桁・炮門・船艤と申樣に、其形の通のものを一時に多く造り、取合するの手早にしかず、一つ破りても、一時に十も二十も出來すれば、御損はなきなり、夫を一つを惜みぐづ〳〵と固拆に取り、夫を見て造る樣にては、まだ愛がわからぬの、あそこがわからぬのと、まご付て居る內には、日數はかゝり物入も多くて、成功は少きなり、此處は決斷の入る處にて、物事切れはなれよからずしては、却て損失の基なり、しかし大艦十艘二十艘出來

して〻、産物盛になればまだ不足なるべければ、追々百艘も二百艘も造り出すべし、（此御入用蝦夷地産物の内より出べし）先夫迄は是迄の大船と幷せ用ふべきなれども、一艘や二艘拵しらへて先爲ㇾ濟、跡は是迄の船にて濟ませるなどゝ申樣にては、渡海の人安心せず、集り不ㇾ宜、是は海防の御入用兼ての思召にて、急に造り出すべき事なり、尤蝦夷地にて便利の湊を考へ作らば、材木に直段なく、人足を遣ふは何れの道開發にて、人を集る御入用の中に籠るゆゑ、甚御手輕に出來るべし、

邊防武備之事

一　右之通初より次第を追て、十分に御施被ㇾ成候得ば、十年を出ずして蝦夷地は極々繁昌の地に相成申べし、扨又是を以武備を立るに、兩樣之立方あり、先其一は古の兵を農に寓せし法也、其一は漢の趙充國屯田の法なり、兵を農に寓する法に從ば、諸侯の御國は止めて、上の御役人にて總督大將裨將隊長等を立て、不ㇾ殘公領として治むるなり、趙充國屯田の法に傚はゞ、諸侯より兵を出し陣屋を構ひ、且耕し且守なり

一　先兵を農に寓するの法より申べし、兵を農に寓せんとならば、蝦夷中之田地を公田にして、百姓の物とせず、男子一人前にて田地何程と申事を極め置て、其田地を耕して十分一の年貢を納めさせ、其子弟貳十歳以上に成家内を持たらば、又分家して壹軒前とし、壹軒前定式の田地を渡し、いまだ獨身にて親元同居の內は、一軒前四分の一の田地を渡し、死絶えて子なく、或は罪ありて追放等に相成

候はゞ、其田地皆上へ上り、又外に一軒前に成候百姓へ御渡し被ㇾ成候と申樣に致候得ば、總體百姓の身上定り有りて、大高の者も出來ず、小高の者も出來ず同樣相成なり、右樣百姓の高同樣になければ、軍役を同樣に割付る事は成がたし、其同樣なる身上の百姓を伍人組にて組合せ、田地高に掛て軍役を定め、五人組の內より軍役を勤るもの壹人（此割合古法とは少し相違なれども、當時の宜に斟酌して申なり）と定め、平日は五人組五組合せて、貳十五軒に組頭壹人、是を五組合せて、百貳十五軒に組頭を合せて、都合百三拾軒にて名主壹人、夫を又五つ合せて、名主共に六百五十五軒合せて勸農役一人差配す、此勸農役人以上は上の人にて、御代官手代位の役なり、是を又五組合せて三千貳百七拾五軒、（上の役人は數に入らず）是を農官一人の支配所とし、添役幷吟味役・公事方・勘定方等の者貳十五人計にて勤め、又夫を五つにて壹萬六千三百七十五軒を合せて、一郡代を置て治む、此通不ㇾ殘幾郡代にも組立て人別帳を編て、人別を正し敎化を施す、扨又軍役を勤めさするには、月々壹度づゝ調練をして、右之內五人組より一人づゝ人を出させて、三千二百七十五人を得、此內組頭百貳十五人、名主二十五人ありて、正卒三千百貳十五人なり、不ㇾ殘炮隊として是を伍法を以て編み、五人の內一人勇壯多力のものを選び伍長とし、五組合せて二十五人に組頭一人を添へ、又五組合せて百貳十五人にて、組頭五人名主一人として隊伍の取締をさせて、六百二十五人に組頭二十五人・名主五人・三千百貳十五人に・組頭百貳拾五人・名主二十五人・勸農役人五人、差引の合圖を司る農官壹人、裨的として號令を司る士五十人、大炮を司る郡代一人、大將として軍政を司る、外雜

兵・兵粮・小荷駄等は手明きの組にて勤る、是其大略なり、大將の旗本は兼て戰士を養ひ、鐵炮隊にて打破り、旗本は短兵接戰を旨とす、此通幾郡代も組立て其上を總督にて支配す、海濱漁獵の者幷海近き村々の百姓は、又其方計組合せて水軍とす、海運の大艦を以て平日調練し又廻船の上乘りを兼帶す、如レ斯致候には總督以下勸農吏迄は、皆上の御人を用ゆる故に、諸侯の防禦は被二仰付一候には及ばず

一　若又田地を公田とせず、內地の通り皆持主の私田とし、力次第にて多く持せ開かせ、百姓は軍事には不レ構年貢を出させ、夫を以て防禦を被レ成候思召ならば、諸侯に命じて人數を定詰にして、處々へ柵砦を構ひ守らしむべし、むかし此定詰の士不レ殘國元より兵粮諸式を運びて守る樣にては、物入多にて中々續く事にてはなし、夫を困窮しても無二御構一被二差置一候得ば、備禦行屆がたし、詰りはまさかの時の御役には不二相立一、御不用心の第一なり、故に夫を困窮させぬやうにして、永く武備のゆるまぬ樣にするには、屯田に如くはなし、屯田と申は、漢の趙充國先零と申處を擊し時、急に合戰なく、只兵を備て其虛を伺ふには、大勢の人數を差出置、都より送る兵粮飼葉鹽噌の類多の分費にて、中々續き難き故、言上して始し法なり、右の夷境に廢田やいまだ開發せざる地面、貳千頃以上ありしを申受て兵士に耕させ、其穀を積て粮食雜用として、つひに夷を平げしなり、今は此制に倣、出勢の諸侯に明き地を渡し、其所へ士足輕を土着させて、自から耕して取上る穀を、扶持方とし雜用として、其間に調練武藝をはげまし、所々に柵砦を構へ、まさかの時は百姓と共に其內に引入て、夷狄の害を受

ぬ樣に防ぎ守るべきなり、此通するには、武備は皆守衛の諸侯に任せて、上の御役人は民を治むる事計を司るなり、如レ此ならば御固めに諸侯も費少なくて身上續き、守衛も行屆くべき事なり、是は何れにても思召次第可レ然奉レ存候

雜事之箇條

時勢の急に前文に不レ殘相認候得共、金銀米穀の儀は上より其輕重を制して、天下の融通を便にし、人民をして凶年飢歲の患をまぬかれしむる大權に御座候間、其大意を別段相認候

金銀米穀之事

一　人民日用無くて不二相成一品は、衣と食とにて候得共、夫を天下の人不レ殘手作にて用ゆる樣には不二相成一候間、多く作り出すものと、作らぬものと融通するに、品物にて交易するは本法なれども、品は重くして持運びに便利ならざる故、金銀錢を用ひて是を融通するなり、金は至て得がたく、銀は其次、銅は得安き故、銀は銅より貴く、金は銀より貴し、故に其自然に從ひ、直段を立て通用さするなり、しかし其品位なければ、人情不備の處ある故、自然と其直段下るなり、金銀の直段下れば物の價貴くなる故、近來諸式高直の御世話度々ありても、兎角物價下らず、世人及二難儀一候は、近來度々金銀御吹替ありて目方も輕くなり、其上弐朱金杯は外國人も見て、銀胎にて金を衣せたり抔申樣なり、當百も一向分量に當らぬ事なれば、物の價下り兼るも其筈の事と奉レ存候、先達ても被二仰出一候通り、

享保の金百兩は當時の金貳百兩餘に當り候を見候得ば、享保の頃米一石金壹兩に候は、當時は米五斗にて金壹兩仕候、當り前の事にて何も高直に相成候には無之候、諸品も右に準じ申候、其上世俗日々に侈りに長じ、金錢を用る事多き故、以前の數にては金錢不足に付、一兩もあり、壹分もあり、貳朱もあり、壹朱もあり、當百もあり、四文錢もあり、一文錢もあり、黃金丁銀等は俗間平日通用にあらず、故に數へず其數段々多く相成候に付、直段追々輕く成なり、其譯者天下年々出來する米穀布帛、其外諸色は皆人力に出る者故、少々の不同はありても、大數は極りあるものなり、夫に易ふるは金銀故、其諸品と金銀の釣合にて、物の直段は極るなり、たとへば天下壹年の出す米穀貳千五百萬石と見て、其外衣服の費貳千五百萬石、諸品の費又貳千五百萬石の代に直し、天下の金銀を以て換ゆるもの七千五百萬石なり、夫を享保の頃天下通用の金は、壹兩と壹分となりし故、其壹品貳千五百萬兩づゝありても、穀との釣合石壹兩に當るなり、今は壹兩も壹分も、貳朱も壹朱も、當百も四文錢もある故、夫を一つ貳千五百萬兩づゝと見ても、合せて壹億五千萬兩程の高なれば、夫を以て天下の米穀七千五百萬石を融通さする故、是非倍直に相ちらねばならぬ勢なり、扨又米價高ければ、米を賣るものは勝手宜敷樣に存ずれども、左にあらず、其高き米を食て物を拵へ出す故、物も高く賣らねば、職人食事ならず、諸品高直になれば、米を賣るもの其高き諸色を買て暮すゆゑ、其米に元入多く入るなり、是を以て少しも勝手に不相成、世間一同の難儀となるなり、故に惡弊を多く造り候は、世間一同の難儀となる根本なり、俗見より一寸

考候得ば、金銀は上より拵へて融通さするものゆゑ、よくてもあしくても上の申付次第、いくら輕くても惡くても差支なしなど〻存ずるなれども、左にあらず、天下の大なる上に至りては自然の勢ありて、其勢に從ひ不レ申候しは、何程上の御威光にても、屆き候事には無レ之、其證據には近來物價の騰貴、度々御沙汰ありても下らぬにて知べし、故に蝦夷地にて金銀多く出るならば、天下の金銀を吹替へ、極々精良にして、目方を殖し其數を少くすれば、物價は自から低く相成べし

一　米穀の儀は、我國は米穀を多く出す事、萬國にすぐれし國にて、食に難む事は容易に無レ之筈なれども、夫も僅か一年凶年あれば、餓莩道路に滿るに至るは、近年太平打續き、末を逐候もの多く、米穀の出來方減じ、游手にして食するもの多きと、米穀を輕んじ候とに有レ之候、故に勸農の法を設て、公領は申に及ばず、私領迄も夫々世話をやかせ、農人容易に商賈となる事を許さず、游手を禁じて本業に就かしめ、其上にて民間に士と混ぜぬ樣、別段に格式を十段計に立置て銘々米を積せ、凶年に米を施し、救荒の御手傳を致し候か、豐年に米を出して社倉の元を助け候類は、其米の高にて何格式を被レ下ると申事を御定めあり、又輕罪ありて過料を召上げらる〻ものも、其程に準じ米を納めさせ給はば、人々米の貴き事を知りて、平日に農業にも出精し、自から米穀多く相成べし、其上にて村々へ社倉を設けて窮餓を救はゞ、天下に餓莩なかるべし

　社倉の仕方朱子に本きて、當時に通ずべき樣は、中井善太が社倉私議に委し、故に略す

常平倉之事

一　米穀甚貴き時は工商を傷る、甚賤き時は士と農とを傷る、工商傷るれば諸色騰貴し、士農傷るれば國貧し、故に甚貴きも甚賤きも、其傷るゝ事は同然なり、善く國を治むるものは、米穀をして甚貴く、甚賤き事なくして、士農工商ともに傷るゝ事なき樣にいたす事と承り候、よく米穀の價を平にするものは、一國每に年々上中下の出來方あるを、秋熟の時に當り豫め觀る事を肝要とす、又凶年に當りては、其年の不作にて、民の收る處何分位の損毛たる事を察し、是もまた分つて上中下の三等とす、扨また民生日用食料を考へて、其餘計を得て貢挪ふべき分を、上熟の年は四分にして、其三を上へ買あげ、中熟の年には挪ふべき米を三つ分にして、其貳つ分を上へ買上げ、下熟の年は挪ふべき米を貳つにして、半分を買上げ、扨又凶年に當りて、大凶作の時は上熟の時貯へ置たる分を挪ひ、中凶年には中熟の年貯へ置たる分を挪ひ、少しき凶年には下熟の年貯へ置たる分を挪ひ候得ば、平常天下の米不足なく、餘る事なく、米價常に平かなり、しかし是は古へ井口の法天下に行れ、天下の田地不レ殘公田にて、米の散斂上の自由になる時になければ行はれぬ故、漢の宣帝の時耿壽昌と申すもの、常平倉を建議して、其法邊郡をして皆倉を築かせ置て、穀賤き時其價を增してこれを買入て、米直段を上げて農を利し、穀貴き時は直安に是を挪ひて工商を利し、穀貴き時は直安に是を挪ひて工商を利したれば、天下大に其利を蒙り、後世迄も傳へて良法とせり、今も其法に倣ひ、江戶大阪抔其外米の多く出

る地に不ㇾ殘倉を築き、米賤き時は豪商を諭して右の倉に買入させ、米貴き時を待て上より令し、時の價より賤く賣拂はせ給はゞ、米の騰貴する患を免るべし、此米賤く賣拂たりとも、賤き時に買入置し米にて、元が下直の米なれば、其金利を加へて拂はせ候ても、凶年の米には甚下直に當るなり、豪商も諸侯に金を貸て綏らるゝより、米を預り置けば丈夫にて、金利には無ㇾ間違ㇾ當り候間、喜んで從ふべし、左樣致候て、米穀は不ㇾ殘上へ收められ、大概出來の上は、上の御役人上乘して諸方へ廻米せば、奸商人の難儀を見込て、途中に廻米などをさし留置て、諸問を申立て米價を騰貴させ、人を飢餓に及ばする弊はなかるべし、かく米價常に平にして、人民飢餓の患を免れ候はゞ、天下太平御長久の御基と奉ㇾ存候

右は去々月御尋に付、大意并箇條の目認差上候所、去月又々右の箇條の譯一々認差出候樣御沙汰に付、早速相認可ㇾ申處、久々病氣罷在、延引恐入奉り候、其内歲除近く相成候に付、乍ㇾ病中ㇾ押て相認候間、草々の次第愚存不ㇾ行屆、甚不文の處多く御座候間、御宥恕御推覽被ㇾ遊被ㇾ下候樣奉ㇾ願上ㇾ候、以上

卯十二月

新政談 一名 芻言 卷五 大尾

富國存念書

仁井田好古著

富國存念書

仁井田好古著

進達

一　富國存念之儀、壹印別帳之趣、仁井田□一郎申談候ニ付、申見サセ候處、御勘定吟味役、幷御代官共料簡之品、右帳面寫貳印別帳ヘ附札之通申出、猶又御勘定組頭、幷在方頭取共料簡之趣、三印別帳之通申出候儀ニ御座候、右ニ付私共夫是相考評議仕見候處、元來御國之儀者、萬端便利宜敷、田畑多少之村方トモ、作間稼從來之業四印別帳之通ニテ、其外ニモ工商之類土地相應利用ヲ考稼馴レ罷在、大底者御國之產物ニ而、御國用不足無ニ御座一候、然共絹布織物之類、今以開業仕候者無ニ御座一、譬少高ニテ多人數之村方ニ罷在候者共、何レ右業在中ニテハ難レ被レ行、畢竟市中之業ニ御座候得共、是以養蠶之儀不便利ニテ御座候ニ付、在中所々桑ヲ植附候樣成行候ハヾ、穀作之障リニモ相成可レ申、聊ヅヽノ儀ハ當時ニテモ、養蠶之業仕候者有レ之趣ニ御座候得共、指而引合ニハ難ニ相成一勢州御領分大石村ニテハ、從來致シ馴罷在、白紬幷縞類織出シ、大石紬ト相唱、名產ニ相成御座候得共、利益聊之業ニテ、穀作ニハ相及不レ申趣ニ御座候、既ニ京都西陣抔之儀ハ、絹布織物類從來之業

ニテ、諸國捌キ方取計之儀ニ御座候得共、近來不景氣ニ付、捌キ口不レ宜趣ニモ相聞エ候ニ付、殊更新規之業在中ハ勿論、市中ニテモ相好不レ申、其外夫是之件々トモ、先是迄ノ姿ニテ差置キ、兎角農事專一ニ相勤メ、尤作間稼之儀ハ從來致シ馴レ候業相任セ置、其品ニ寄仕込銀助成等之儀ハ誠精取計遣シ、油斷無レ之樣相勵セ候方可レ然奉レ存候、猶御料簡之趣被ニ仰聞一候樣仕度奉レ伺事

富國之儀ニ付存念書

古今富國ノ道ヲ論ジ候ニハ、奢侈ヲ禁ジ儉約ヲ勸候事定リタル道ニ御座候得共、久シク昇平ノ化ニ浴シ候風俗、一統自然ト奢侈ニ移候事、時世ノ勢ニ御座候得者、强テ是ヲ禁ジ候テハ人情ニ戾リ、悅服難レ仕御座候ニ付、是ヲ以國家ヲ富サン事、當時ニ於テハ難ニ相成一儀ト奉レ存候、其上山中僻遠ノ村々ニ至候テハ、元ヨリ貧困ノ場所ニ御座候得バ、力ノ限リ働候テモ、朝夕ノ煙ヲ舉カネ候者而已ニ御座候ニ付、奢ヲ禁ジ儉ヲ勸處ナドノ論ハ無ニ御座一候、治國ノ道ハ人情ニ從フヲ本ト仕候儀ニ御座候得者、時ヲ計リ俗ニ從ヒ、人情ニ愜ヒ候樣仕候事、當時ノ御要務ト奉レ存候、明ノ陸揖此儀ヲ論ジ候テ、凡天地ノ間ハ財物ヲ生ズル其數有レ之事ニ候得者、彼處ニ費スモノ有レ之候得者、此處ニ其利ヲ得ル者有レ之、一人一家ノウヘニテ申候ヘバ、儉ヲ務候ヘバ貧ヲマヌカレ候モノ可レ有レ之候得共、國天下ニ通ジテ其勢ヲ論ジ候得バ、爰ニアル物彼處ニ移リ、カノ處ニ滯ル物コヽニ來ラズト申計ニテ、是ヲ以天下ヲ富スト申儀ニハ相成不レ申候、蘇州・杭州ナドハ天下第一ノ繁昌ナル處ニ付、飲食・衣服・宮室ノ類ニ夥敷費ヲナ

スモノ有レ之候得共、マタ是ニ依テ其利ヲ得テ渡世仕候モノ、幾萬人トイフ數ヲシラズ、此時ニ當テ聖人マタ出給フトモ、其風俗ヲ改テ唯倹ヲ勸ルノ政ハナシ給フマジ、四方輻湊スル處百貨集ルユヱ、人民其利ヲ得テ富ヲナシ易ク、繁昌ノ地ト相成候、是等ノ事ハ唯智者ト可レ論ト申說ニテ御座候、其論ズル所ニ泥ミ古ニ馴レ候、尋常ノ論ニクラベ候得者、時宜ヲ辨ヘ候卓見ト奉レ存候、是ヲ以當時ノ宜シキヲ相考候處、御城下在中其主ト仕候處兩樣ニ相成、在中ハ貨財ヲ生ズルヲ主ト仕、御城下ハ百貨輻湊スル處ニシテ、コレヲ國中ニ融通シ、又他國ニ交易スルヲ主ト可レ仕儀ト奉レ存候、御城下繁昌シテ、百貨國中ニ融通仕候ヘバ、山中僻遠ノ地マデモ其餘澤及ビ候テ、自然ト暮シ易ク、御城下在中相持ニ相成候儀、富國ノ御政ト奉レ存候、其主法左之通ニテモ可レ宜哉ト奉レ存候ニ付、奉ニ申上一候

一　富國ノ道ハ財ヲ生ズルヲ根本ト仕候、財ヲ生ズル處ノ道、田畑ハ五穀ヲ生ジ、山林ハ材木ヲ出シ候事其大綱ニテ、是ヨリ枝葉樣々ニ分レ、其品數ヘ盡ガタキ儀ニ御座候、田畑ヲ作リ候儀ハ在々ニテ、是迄大體行屆有レ之儀ニ御座候得バ、分テ論ズベキ儀ハ無ニ御座一候、此ウヘハ唯水旱ノ患無レ之樣ニ、池ヲ掘リ堤ノ重置ヲナシ、井溝ヲ附候樣ナル儀行屆、御手入可レ有ニ御座一儀ト奉レ存候

一　農作ノ助成ニ相成候樣ニ、大川堤・小川堤、其外空隙ノ宜シキ場所ヲ見立、桑ヲ植ヱ楮ヲ植候事先第一ニ可レ仕儀ト奉レ存候

桑ヲ植テ蠶ヲ養ヒ糸ヲ作リ候儀ハ、在中ノ所作ニテ、右糸ヲ御城下ヘ出シ、右糸ヲ絹紬ニ織リ候事ハ

御城下ノ職ニ仕、マタ在中ニテ楮ヲ多ク作リ、是ヲ御城下ヘ出シ、右ニテ紙ヲ漉候事ハ御城下ノ職ニ仕、大底御國中ニテ用ル所ノ絹紬色々ノ紙類、ミナ是ヲ用ヒ候樣可レ仕儀ト奉レ存候、紙ヲ漉候事水ニヨリ候ヨシニ御座候ヘバ、水ノ宜シキ所ニテ可レ仕儀ニテ可レ有二御座一、一樣ニハ定ガタク奉レ存候

桑楮之儀、農家ニ益アル品ニハ御座候ヘドモ、場所幷取計振ニテ損益有レ之、既ニ文化之度桑楮之儀ヲ勸メ廻リ候モノ有レ之、一旦植附方相弘リ、田畑迄モ植附候向モ有レ之ニ付、早速制止候事ニテ、其頃深ク相泥ミ候モノハ損銀不レ少、跡ニ及二難儀一候事ニテ、無レ程イヅレモ取拂申候、尤大川除堤・田地片手等ヘ植附候テハ、修理難レ屆生立不レ宜、所ニ寄水行ニ障リ、或ハ草苅ノ場ノ支ニ相成候筋モ有レ之、先ハ山中向山寄等ニテ空地多ク、本作難レ屆場ヘ相當可レ仕、既ニ勢州川俣街道・大和路抔畑廣之場處ニハ、前々ヨリ植附、一廉ノ助成ニ相成申候、御國ニテモ所ニ寄ヨク生立、養蠶・紙漉等ノ稼ト相成候村モ御座候、櫨之儀前々ヨリ御世話振モ有レ之、大川除堤マタハ山畑等ヘ植附候筋多ク候處、近年蠟實下直之年多ク、先年ヨリハ銀成リ劣リ候趣御座候得共、是又農家之一助ニ相成申候、文化之度勢州田丸領之內、耕作難二行屆一場廣之村々ヘウヱ試サセ候處、修理難レ屆故哉、マタハ土地ニ應ジ不レ申歟、生立不レ宜、利ヲ不レ見相止候儀御座候、肉桂之儀ハ御國出來ハ上品ニテ、銀成宜シキヨシニ御座候、右孰モ村方ニヨリ得失有レ之、作リ馴候物モ多有レ之候得共本作ノ餘力ヲ以相稼候類ニテ、近頃目前ノ利ニ迷ヒ、奇ヲ好ミ候樣ノ人氣ニ付、一向ニハ難二申進一、程能取計候方ト奉レ存候事

一　右ノ外或ハ櫨ヲ植、或ハ肉桂ヲウヱ、其餘土地ノ性ヲ考候テ植附候品、猶色々可レ有ニ御座一ハ、皆農作ノ助成ト爲レ仕候事

一　名草・那賀・伊都ノ三郡ハ、北ニ葛城山有レ之候處、右山一面ニ禿山ニテ樹木無ニ御座一候、是へ一面ニ雜木幷松木ノ類ヲウヱ附候ヘバ、數年ノ後村々ノ益夥シキ儀ト奉レ存候
葛城山、先年ハ茂リニテ候處、七八十年已前盡ク斬取リ候テ御國用ニ充ラレ、夫ヨリ後別ニ植附不レ申候ニ付、右之通禿山ニ相成候事ニ御座候、右山ニ樹木生立候ヘバ、猪鹿籠リ作ヲ荒ラシ、難儀仕候趣下ニテ申候者モ御座候ヨシ、御手入ニテ樹木茂リ候樣ニ相成候ヘバ、猪鹿ヲ打取、農作ノ妨ニ不ニ相成一候樣ノ仕方ハ、如何程モ可レ有ト奉レ存候

一　當時處々ニ村作地多ク有レ之、村々ノ難澁ニ相成候事ニ御座候、是迄色々御世話モ御座候得共、トカク難澁ノ根ヲ拔ク事難ニ相成一御座候、就レ夫大底紀ノ川ヨリ北ニ有レ之候村々ハ、皆葛城下ヲワケテ、或ハ村附、或ハ組附ト申ニ相成候儀ニ御座候ニ付、右山ノ内ヲマタ小分ニ仕、村作地ニ相成有レ之田地ニ附テ、右田地ノ補ヒト爲レ仕候ハヾ、右田地ヲ持候テ難儀無レ之、主附候樣ニ可ニ相成一ト奉レ存候、マタ前段ニ申上候通、諸村ノ內桑ヲ植楮ヲウヱ候テ、農作ノ助成ニ爲レ仕候筋右之內ヲ見計、右村作地ニ附候樣ニモ可レ仕奉レ存候
右山ヲ分テ村作地へ附候儀、譬バ是迄村中ニテ支配仕來候山ヲ、或ハ半分ニ分、或ハ三分ニシテ其一

分ヲ村作地ニ附候テ、其二分ヲ村中ノ支配ニ爲レ仕候ト申樣ニテ可レ然奉レ存候、右之通ニ相成候ハヾ、村中ノ者共ハ不足ニモ可レ存樣ニ御座候ヘドモ、是迄禿山ニテ有レ之候山ニ樹木生立候ヘバ、タトヒ半分ニ相成候テモ、是迄丸ニテ支配仕候ヨリ、其益尤多ク可レ有二御座一奉レ存候

村作地片附方之儀ハ、先年ヨリ追々御世話御座候上、近年在中ニテ作間稼商職相初候モノ數多有レ之、自然手痛キ働ヲ厭ヒ、農風ヲ失ヒ候樣ノ場ニモ至リ可レ申基ニ付、諸職重立候筋ハ夫々株札ヲ以相改、所持高無レ數者ヘハ、村作地ノ內ヲ主附セ、持增候上ニテ差免候樣ニ取計候ニ付、段々村作地相減有レ之、猶又近年米價高直ニ付テモ、自ラ農事出精イタシ、田畑相對直段ヲモ格別ニ引上候事ニテ、都テ農業相勵候ニ付、猶追々村地モ相減可レ申候、尤村山多所ハ右ヲ取分ケ、村作地ニ相添主附セ候儀、是迄モ折々有レ之候得共、右葛城山筋ノ儀ハ、前條之通ニ付、是等ノ業取計可レ申場モ稀ナラデハ有レ之間敷候得共、件之場ニ臨候テハ、是又村作地片附方之一ト手段ニ御座候事

一　有田・日高ノ山中、並ニ熊野山中田畑至テ少キ所ニハ、專ラ山稼ヲ以テ渡世ト仕候事ニ御座候得者、材木ヲ出シ柴薪ヲ出シ、炭ヲ燒候事渡世ニテ御座候、右ノ手行宜シキ樣致シ遣可レ申事

右材木ヲ育候事ハ、十年廿年ノ後ナラデハ益ト成不レ申候ニ付、唯炭ヲ焚候事手近ク、今日ノ渡世ニ御座候處、近年ハ炭ヲ焚候事皆御仕入方ノ所有ニ相成候ヨシ、右者先年ノ通ニ相成候樣仕度奉レ存候

紀勢御領分之內、山海之產物夥敷、猶又極山中、或ハ海中抔ニハ、是迄イマダ不二手馴一品モ有レ之、

産業ニ可レ用類ハ成丈ケ手行取計、御國用ニ宛候得バ、上下之益不レ少儀ニ可レ有ニ御座一候、尤其品見當リ候共、土地之便利ニ應ジ、引立ノ手段ニモ深ク差別可レ有レ之ニ付、夫々ノ業ニ當リ候半デハ得失難ニ申解一、株々へ分ケテハ不ニ申試一候事

一　山中ノ村々椎茸ヲ作リ、蜂蜜ヲ取候類、皆山中ノ助成ト仕候事ニ候、猶ケ様ノ事イカ程モ可レ有レ之、或ハ煙硝ヲ焚キ、或ハ藥物ヲ採候類、其土地々々ヲ見立候テ、助成ニ相成候儀ヲ爲レ仕、海邊ニテハ石灰ヲ焚キ、海藻ヲ取候類、是又幾許モ可レ有レ之奉レ存候

一　山中僻遠ノ地海邊ニ遠ク、マタ大川筋船ノ通ヒ有レ之場所へ遠キ所、毎日二里三里ヅヽノ嶮路ヲ歷テ、其仕出シ候物ヲ持出候テ、僅ニ一日ノ飯米ニ替候事ニ御座候得バ、往來ノ日ヲ費シ骨ヲ折候事莫大ナル儀ニ御座候、ケ様ノ場所ハ何ナリトモ其宜シキヲ相考、手藝ニテ居ナガラ作リ出シ、一荷持出シ候得バ、四五十日ノ飯料ニモ相成候樣ニ仕ラセ候得者、大ニ渡世仕易ク、莫大ノ御仁惠ト奉レ存候

右手藝ト申候テモ、六ケ敷儀ハ得不レ仕儀ニ付、先燐兒(ツケギ)ヲツキ枌(ソフギ)ヲソギ候樣ナル類ニテ可レ有ニ御座一歟、是等ハ其場所ヲ見候ウヘナラデハ難ニ申定一御座候

一　熊野山中ニテハ、疱瘡ヲ不レ仕村々多ク有レ之、右ノ處ニテ疱瘡仕候ヘバ、十ニ七八ハ病死仕候ニ付、疱瘡ヲ恐レ嫌ヒ候テ、甚シキ儀ニ御座候、タマタマ仕上リ候者有レ之候テモ、依レ之身上ヲ傾ケ、必至ト困究ニ相成、親類村內迄モ其難澁ヲ受候事ニ御座候、右御救方宜シキ御主法相立候得バ御仁政

ノ第一ト奉レ存候

山中ニ疱瘡人有レ之候時ハ、疱瘡小屋ヘ連行介抱人ヲ附テ、有之處ニテ養生爲レ致候儀ニ御座候得共、村民ノ力ニテハ右ノ所作難二行屆一、其上宜シキ醫生モ無二御座一候ニ付、仕上リ候者無レ少御座候、御世話御座候テ、御救方御主法相立行屆、マタ宜シキ醫生有レ之候得バ、誠ニ無二此上一御仁惠ト奉レ存候、當時丸山健齋京都ヘ罷越、佐井文庵ト申疱瘡醫ニ就テ傳授ヲ受、右療治宜シク仕候事ニ御座候ヘバ、山中ニ有レ之醫生ヲ撰ビ右之術ヲ學バセ、マタ御城下ニテモ宜シキ者ヲ撰ビ候テ右ヲ受サセ、山中ニ御差置ニ相成候ハヾ、疱瘡ノ難儀ヲ免レ、一統難レ有可レ奉レ存候

一　海邊漁事ヲ專ラト仕候浦々ハ、網并船等手厚ク仕入爲レ仕、大漁ナドノ節右ノ內ヲ除置、不漁ノ節ノ手當ニ爲レ仕候事、其手段可レ有二御座一奉レ存候

一　陶器之儀ハ、世上一統日々入用之品ニ御座候得バ、御國中宜シキ土有レ之場所ヲ見立、日用ノ品品澤山ニ作リ出シ、御國中ハ勿論、他所ヘモ積出シ候樣爲レ仕度奉レ存候

御國中ニテハ御國產而已ヲ用ヒ候テ、他所ノ品ヲ用ヒズ、トカク御國產御國中ニ手廣ク行渡リ候樣仕度奉レ存候、是迄モ廣浦・男山ニテ陶器ヲ仕出シ候得共、手廣クモ得不レ仕、御國中一統ニ用ヒ候儀モ無二御座一候、右等共得失ヲ相糺シ、手廣ク爲レ仕度奉レ存候

一　勢州御領分御手入之儀、土地之樣子ニ從ヒ、少々ヅヽノ相違ハ可レ有二御座一候得ドモ、大底ハ御國

同樣之儀ニ可レ有ニ御座一奉レ存候ニ付、別ニ不レ奉ニ申上一候
右イヅレモ財ヲ生ズルノ道ヲ論ジ候事ニ御座候、右之外猶樣々其手段可レ有ニ御座一候得共、多クハ業ニ臨ミ取計候事ニ御座候得バ、委クハ紙上ニ難レ盡奉レ存候

一　右之通山中處々ニテ仕出シ候諸物、便宜之場所へ持出シ候得バ、其所ニ役所又ハ問屋等有レ之候テ、右ヲ相應宜シキ直段ニ買遣シ、夫ヨリ御城下へ相廻シ、御城下ニテモ役所又ハ問屋有レ之、右ヲ受取共貨物ヲ御國中ニ手廣ク賣出シ、融通仕候儀ヲ專ラト仕、猶其用ヒ餘リ候品々、イヅレモ他所へ積出シ候樣仕候事
右之所作ハ、是迄御仕入方ニテ仕候業ト似寄候事ニ御座候、就レ夫御國中ノ產物一所ニ集候事ハ、不便利ノ樣ニ存候者モ有レ之哉ニ御座候得共、是迄御仕入方ニテ仕候業ト主意モ違ヒ、下ノ爲ヲ主ト仕候事ニ御座候得バ、難儀ハ有レ之間敷ト奉レ存候、マタ物ニ寄勝手ニモ爲レ仕可レ申事ニ御座候

一　御城下ヲ初御國中ニテ用ヒ候衣服飲食、並日々常用ノ諸道具類ニ至迄、皆御國產ヲ用ヒ、他所ノ品ヲ用ヒ不レ申候樣爲レ仕候事、但藥種類及ビ無レ據品モ可レ有レ之、是等ハ別段之儀ニ可レ有ニ御座一候
品ニ寄他所ノ品ハ安ク、御國產ハ高ク候所、强テ他所ノ物ヲ制禁イタシ候テハ、一統難儀ヲ可レ申儀ニ御座候、若左樣ノ品モ有レ之候ヘバ、其作リ出シ候根本ヲ相糺シ、一統難儀無レ之樣ノ仕方イカ程モ可レ有レ之儀ト奉レ存候

一　世上日々當用ノ物ノ內、尤多ク用ヒ來リ候物ハ絹布ノ類・紙類・瀨戸物類・金モノ類ニテ御座候、右之內木綿ノ儀ハ在中ニテ多ク織出シ、御國中ニテ用ヒ候ノミナラズ、他所ヘ多ク賣出シ候事ニ御座候ヘ共、絹紬ノ類ハ是迄御國產無二御座一候ニ付、右ヲ專ラ織出サセ、御國中ニテ用ヒ候事、只今ノ木綿ノ如クナル樣ニ爲レ仕度奉レ存候、其餘紙類・瀨戸物類諸ノ器物類ニ至迄ミナ同樣ニテ、御國產ノ品ヲ用ヒ、猶其品々多ク仕出シ候テ、他所ヘ積出シ候樣ニ仕度奉レ存候

一　右之通御國中ニテハ御國產而已ヲ用ヒ候テ、他所ノ物ヲ用ヒズ、御國中ノ產物多ク仕出シ候テ、他所ヘ積出シ候得バ、御國中ノ金銀他國ヘ出ル事無レ之也、他所ノ金銀年々御國中ニ集リ來リ候故、一人一家ノ上ニテ申候得バ、貧キ者アリ富者モ有レ之候得共、通ジテ論ジ候得バ、金銀財貨年々ニ多ク相成、繁昌ノ御國ト相成可レ申儀ト奉レ存候

右イヅレモ國ヲ富シ候大意ヲ論ジ候事ニテ、是ヲ業ニ施シ候ニハ、樣々委曲可レ有二御座一、紙上ニハ難二申盡一奉レ存候

右之條々取計仕候ニ付テハ、御入用モ多分ナル儀ニ可レ有二御座一候ヘドモ、右ハ別段ノ取計ヲ以差掛リ、御物入無二御座一、追々御國益ニ相成候樣ノ手段可レ有二御座一奉レ存候、此儀ハ別段ニ可レ奉二申上一候

右財ヲ生ジ國ヲ富シ候兩條ノ御主法、御國中ニ徧ク行ハレ候儀ハ、御大造ナル御儀ニ御座候得共、俄ニハ其効驗モ著レガタク可レ有二御座一候ヘドモ、右之內ニハ一兩年ニテ、其ノ効ノ相見エ候モ可レ有二御

座ハ、大體ハ五年計ニテ小成可レ仕、十年ヲ積候ハヽ大成可レ仕儀ト奉レ存候、何卒右之通被ニ仰付一候御儀ニ御座候ヘバ、御國中一統御仁政ノ御化ヲ奉レ蒙、人々難レ有悅服仕ルベクト奉レ存候、已上

二月　　　　仁井田□一郎謹上

二印別帳ヘ付札之趣、御代官達書

一　富國總論之別册被レ成ニ御渡一、申見否相達候樣御申聞之趣承知仕候、在中百姓ドモ、當時力田幷作間之稼業、且近年御世話振候手續等、御勘定吟味役中被レ達之通ニテ、猶此上御農政筋ニ付、上下之得失可レ有レ之儀ハ、精々取調相伺可レ申心得ニ御座候、其餘之條々、大意ハ御國產ニテ相辨ジ、餘產ヲ以他之金銀ヲ引入候主法ニ付、右之業被レ行候得バ、御國益勿論之儀ニ御座候得共、夫々通商之一件ニテ、勸農之餘業ニ御座候得者、其得失私共ニテ研究難レ仕御座候、内諸國之產物各其能ヲ考、交易通商致來候儀、世情自然之勢ニ相見候處、御邦內ニテ他產ヲ不レ用、此方ノ餘產ヲ以他ヘ無レ滯通商爲レ致候儀、自然ノ融通ニモ無レ之ニ付、如何可レ有ニ御座一、都會ト遠隔ノ地ハ格別、御國抔ニテハ容易ニ取締モ難ニ出來一業ニモ可レ有ニ御座一候歟、近來御國產之內、和藥之一條取締出來候得バ、利潤可レ有レ之由ヲ申出候者有レ之、在々作人共ヘ爲ニ申見一候得共、得益未然ノ儀、且ハ年來ノ取引等ヲ申者モ相交リ、一同難レ致、イマダ取締兼候品モ御座候ニ付、諸物取締ノ主法ニ付テハ、猶更御大造之儀ト奉レ存候ニ付厚御評議御座候御方ト奉レ存候事

十一月　　　　　　　　御代官

三印

一　別帳水旱之患無レ之樣御手入之事

右ハ農事第一ノ儀ニ付、夫々用水不足之旨願出候筋取調セ、實ニ無レ據分ハ池重置、並井關築立、新溝御普請等申付候事ニ御座候得共、細雜ニ行屆候儀ハ、何樣御大造ナル儀ニ付、容易難ニ行屆一御座候事

一　農作之助成ニ、川除堤其外空地ヘ桑楮植付候事

右桑植付候儀ハ、先年御世話振モ有レ之タル哉ノ趣ニテ、新堀川土手堤ニ植付候筋ハ、于レ今殘リ御座候得ドモ、其餘近在ニハ殘リ無レ之候、山中筋ニテ素ヨリ蠶ヲ養ヒ候村々業ニ馴、相續致シ居候得共、平地百姓ノ業ニハ行屆カネ可レ申哉ト奉レ存候、何レ山中向ノ業ニテ御座候、尤田畑無ニ少空隙一之地多、場所ヲ取調サセ助成ニ致サセ候ハヾ可レ然奉レ存候、楮之儀、山中筋ハ所ニ寄素ヨリ植付助成ニ致シ居候場所モ御座候、文政之度、京都町人紙屋九郎兵衛ト申者楮買集仕度、夫ニ付在在不毛ノ地ヘ楮御植付サセ被ニ成下一候樣、尤楮苗ハ望ミ相渡申度旨願出、其節近在之内ヘ植付サセ候處、育方修理等難ニ行屆一哉生立兼、右之内名草郡有本村見取畑ヘ植付候筋ハ、修理行屆候ニ付生立宜ク、當時ハ金成候趣ニ御座候、只川除堤抔ヘ植付候ノミニテハ生立カネ可レ申哉、川俣街道スヂ。大和邊在々ニハ、重ニ畑地之内ヘ植付御座候ニ付、是ハ生立至極宜シク、何レ土地ノ摸

様ニ寄ル儀ト奉レ存候

一　櫨・肉桂植付之事

右櫨植付之儀、先年御世話振モ御座候テ、川除堤等ヘ御植付サセ候筋、于レ今殘リ候株モ御座候、是ハ土地ノ摸様ニテ出來不出來有レ之趣ニ御座候、肉桂ノ儀モ同様ノ趣ニテ、有田郡ノ内ニハ所々ニ植付助成ニ仕居候事ニ御座候

一　葛城山ヘ樹木植付候事

右山筋ノ儀ハ村山在々入會山、尤百姓持山ノ筋ハ樹木生立セ候事ニ候ヘドモ、右在々入會山村山之儀ハ、小前末々迄稼ギ場所ニ付、兎角諸木生立セ不レ申候事ニ御座候、右ハ場廣ノ儀ニ付、程ヨク村村稼ギ方差支不レ申場所ハ、□ニ鎌留山ニ致サセ置候ハヾ、追テ一廉ノ助成ニ相成可レ申ト奉レ存候

一　村地主附方ニ付、爲レ補村山ヲ割附候事

右ハ道理合ハ宜ク御座候得共、前文ニ申上候通、村方末々迄不斷稼場所ニ付、右ノ業容易ニ納得モ仕兼可レ申哉、乍レ去諭振ニテ受用モ可レ仕哉、業ニ掛リ不レ申儀ハ候ヘドモ、何レ六ケ敷可レ有ニ御座ートト奉レ存候

一　山中筋田畑無少、專ラ山稼ギ渡世ノ在々、近年炭ヲ燒候事、皆御仕入方ノ所作ニ相成候由、是

ハ以前之通相成候樣トノ事

右炭燒稼致シ候村々、御仕入方ノ手ヲ放レ、村方ノ爲ニ可ニ相成一摸樣等ノ儀ハ□取調サセ候樣可レ仕ト奉レ存候

一　山中村々椎茸初產物之事

右土地ノ摸樣モ可レ有ニ御座一ニ付、押廣助成ニ可ニ相成一儀ハ、郡々ニテ取調サセ候樣可レ仕ト奉レ存候、尤在々ヨリ出シ候諸產物之儀、先達ヨリ二分口役所取扱ニテ、江戶濱町御屋敷內ニテ賣捌方爲ニ取計一御座候事

一　山中僻遠之地海邊ヘ遠、大川筋船之通ヒ有レ之場所ヘ遠キ村々稼ギ業手細ク、交易利潤厚相成候樣トノ事

右ハ其村々ニテ以前ヨリ仕馴候業ニ御座候ヘドモ、何ト歟六ケ敷業ニ無レ之、稼方辨利ニ相成候儀等可レ有レ之哉、申見サセ候樣可レ仕ト奉レ存候

一　熊野山中疱瘡病人養生之事

右ハ先年ヨリ色々御世話振御座候得共難ニ行屆一、疱瘡セザルモノ殘候土地ニ付、只疱瘡ト申セバ大ニ相恐レ、何處村ニ疱瘡病人有レ之候ト承リ候得バ、其村通リ候モノハ在々通行差支候位嫌ヒ候場所ニ付、疱瘡病人養生中介抱人雇入初、其外雜用多分相掛リ、難澁仕候儀ハ相違モ無ニ御座一候、就

テハ病人養生モ難ニ行屆一、此段相難ジ候事ニ御座候、夫ニ付右救方之儀厚申見、猶上方出稼モノ等
ノ内ヨリ、内存ノモノモ御座候ニ付、此節申見中ニテ、取極リ候得バ、相伺候心得ニ御座候、旁
本文之主意符合仕候事御座候

一　浦々手厚仕入方之事

右ハ當時二分口役所ニテ、専無ニ油斷一爲ニ取扱一御座候得共、此上厚仕入方、且不漁備宛等ノ儀モ、
此節申見中ニ御座候ニ付、猶取調相伺候樣可レ仕ト奉レ存候

一　陶器之事

右ハ段々御世話振モ、被レ爲レ在ニ御座一候ニ付、先男山・宇治兩所當時専ラ燒方仕候事ニ付、此上手
行宜追々繁昌致シ候得バ、御國中一統相用ヒ候樣可ニ相成一ト奉レ存候
右之外ケ條之儀、夫々業相調ヒ候ヘバ、諸物御國内ニテ用足、他國ヨリ金銀ヲ取入、自然融通宜、御
國之繁昌ト可ニ相成一儀ニ可レ有ニ御座一候、併業合之儀ハ熟ト申盡サセ候テ、猶辨利之上相伺候樣可レ仕
ト奉レ存候事

在方頭取

一　別帳之趣申見候樣トノ御儀承知仕候、水利之儀近年別テ御世話振有レ之、追々新池幷堤重置等御
普請有レ之候得共、御出箇モ莫太之御儀、一時ニ難ニ行屆一御座候得共、猶無レ據筋ヨリ取掛セ候心得

ニ御座候

一 疱瘡病之儀、已前ヨリ御世話振モ有レ之、此節別テ御取調中ニ有レ之候ニ付、猶相伺候樣可レ仕候

一 諸產物之儀、所ニ寄土地相應之種類植付、利潤ヲ得候樣ニ候得共、全ク土地ニ依候儀、其外農家利益作間・漁間之稼、遠近地利ニ寄得失之場モ可レ有ニ御座一候、且ハ時勢之釣合モ可レ有ニ御座一候ニ付、猶御申試セ可レ然ト奉レ存候事

右天保七年申十一月御勘定吟味役中ヨリ、奉行衆ヘ差出候由之事

富國存念書 終

貨幣秘錄

佐藤治左衛門著

貨幣秘錄目錄

貨幣秘錄

佐藤治左衛門著

○金銀座起立之事

古へ大判小判等の製造あらざりし以前は、板金或は砂金にて、各其代物に換へて通用せしかば、自ら品位輕重の違ひありて、不辨なる事共なりき、是臣家の代文祿四年乙未に至りて、神祖金銀は御政務第一の重事たるを思召よられ、後藤庄三郎光次を召て、御直に金銀改役を命ぜらる、爰に初て小判を製造して奉る、世にいふ文祿小判是なり、其後駿府江戸兩所にて宅地を賜ひ、あらたに金座を設けらる、是金座の起立なり、加之江州小比江村の中にて、馬飼料として五十一石六斗の御朱印を賜ふ、是より世々家職を奉じて怠らず、十一代目庄三郎の時に至りて、文化七年庚午八月十六日、年來の不正顯れて、終に御咎を蒙りて家斷絶せり、是によりて庄三郎が同家銀座年寄役後藤三右衛門をして、御金改役に命ぜられ、新に貳拾人扶持を賜ふ、同年十月御手當として、每年金千五百兩、並常盤橋御門外にして庄三郎が上地の內八百坪を役所地として下し賜ふ、其子三右衛門に至りて、天保十二年辛丑十二月、年來の功勞を賞せられ、さきの二十人扶持を併せて、二百俵の世祿に加增し賜ふ

そのかみ諸國銀山より掘し銀は、灰吹の儘切遣にて通用せしかば、品位違ひあり、互市ひとしからずするに依て、天下一統銀位一定あるべきの御旨によりて、慶長六年辛丑五月、伏見において地所四町を賜ひ、始めて銀座を設けらる此所を兩替町といふ、座人を定め、後藤庄右衛門・末吉勘兵衛差配たるべき由を命ぜらる、同十三年戊辰、伏見の銀座を京都に移され、地所四町を賜ひ銀座を建られ、伏見と兩所にて鑄造す爰をも兩替町といふ、同十七壬子駿府の銀座を江戸へ移され、京橋より南に地所四町を賜ふ今の銀座町是なり、享和元年辛酉七月今の蠣殼町へ移され、文政十二年己丑六月濱町にて七百四十坪餘の添地を賜ふ、蠣殼町三千五百六拾坪餘に併せて四千三百坪餘となれり、天保十三年壬寅九月十二日、銀座圍込地千二百八十一坪餘、夫のみならず文政二年己卯六月、淺草橋場町にて千二百八十七坪の地を下吹所に賜ふ、銀座は代々座人の中より年寄役を建られ萬の事を取計ひ來りしを、寛政十二年庚申六月、座人共不正の品これあるによりて悉く座職を召放され、三都銀座一時に廢絶に及べり、其月改て座人の中十五人を召返され、舊弊を除き改革を遂られて今に至れり、當時辻傳衛門秋田內記の兩人年寄役たり、慶長十三年戊申大阪兩換町に銀座を立られ、御改正後も其儘にて今に存在せり、同十九年甲寅、長崎芋原といふ地に銀座を設けらる、寛政十二年庚申十二月に至つて廢せらる、常是の事は慶長三年戊戌十二月、泉州堺の町人湯淺作兵衛常是を伏見に召して、御銀吹極幷御銀改役を命ぜられ、大黑と苗字を賜り、大黑銀打印の事、末々迄違犯無レ之樣改むべきの由を御朱印をなし下さ

る、其頃迄は銀位不同にて、堺の町人申合せ、諸國より出る灰吹銀を買集めて銅を加へ、各々極印を打賣買なしたりしを、是時より常是一人の極印に定られ、伏見兩替町にて宅地を賜り、其子作右衛門常好の時、同十三戊申、伏見より京都兩替町に移る、十代目作右衛門常明の代に至りて、寛政十二庚申五月、同家長左衛門御咎の事によりて江戸に召下され、同年七月、江戸の御用をも一手に勤むべき由命ぜらる、同年十二月蠣殼町にて酒井雅樂頭上地千八百七十一坪餘の宅地を賜ふ、享和元年辛酉十二月、御手當として毎年金二百兩を賜ふ、天保二年辛卯十一月、大阪鈴木町にて役所地を下し賜ふ、慶長十一年丙午、作右衛門が弟長左衛門駿府へ移り、御用の事を奉る、同十七年壬子、江戸兩替町にて宅地を賜ひ引移る、是より世々其事を奉じて怠らざりしに、寛政十二年庚申五月、八代目長左衛門不正の事あるに因て御咎を蒙り、其家終に斷絶す、此時迄は京都に大黒作右衛門、江戸に大黒長左衛門あり、兩人にて御用の事を奉りしなり　後藤庄三郎ハ後藤徳乘カ家ニ寓居セシ者ニテ、モト後藤ノ一族ニハアラズ、天正十八年、神祖江戸ニウツル時、後藤ノ族一人ヲ召レシニ、皆遠國ニ下ルコトヲ肯ンゼズ、因テ庄三郎ニ後藤ノ姓ヲ與ヘテ一族ト稱シ、江戸ニ下リタルト云

○金銀通用之事

慶長六年辛丑五月、始て通用金銀の法を定む、大判金・小判金・歩判金・丁銀・豆板銀等の數品なり、是を慶長金銀といふ、元祿十一年戊寅三月に至て通用止む、凡九十八年、元祿八年乙亥九月、金銀の法を改む、大判金以下輕重其違あり、世に元字金銀、又元祿金銀といふ、背に元字の極印あり、享保三年

戊戌十月、小判金・歩判金通用停止、凡二十四年（慶長元和ヨリ元祿八年マデ、通貨ノ權衡輕重ハ大凡左ノ割合ナリ 金一兩正金四匁、銀五十匁、正銀四十匁、錢四貫文、正銅二貫匁、鉛錫二貫匁、即金一匁ニ付銀十匁、錢一貫目ナリ、コレ德川氏全盛ノ時ノ貨制ナリ）

元祿十年丁丑、二朱判金を鑄る、寳永七年庚寅四月、通用止む、凡十四年、寳永三年丙戌六月、新銀を鑄る、寳字の極印二ッあり、世に寳字銀、又二寳銀といふ、享保六年辛丑十二月、通用止む、凡十六年、寳永七年庚寅三月、二寳銀を改む、兩頭に寳字中に永字の極印あり、永字銀、又中字銀といふ、享保六年辛丑十二月、通用止む、凡十二年、寳永七年庚寅七月、永字銀を改む、寳字の極印三つあり、是を三寳銀といふ、享保六年辛丑十二月、通用止む、寳永七年庚寅四月、元字金を吹改め、慶長金の位に復せられ、小判・歩判金共小形になる、乾字の極印あり、故に乾字金、又乾金といふ、享保四年乙亥十二月、通用止む、凡十年、正德元年辛卯二月、三寳銀を改む、寳字の極印四つあり、之を四寳銀といふ、享保六年辛丑十二月、通用止む、凡十一年、正德四年甲子五月、金銀の品悉く改鑄せられ（慶長の舊規に復せらる、添極印等なし、是を正德金銀といふ、又金をば武藏判といふ、享保新鑄出來の後も取交通用す、元文元年丙辰五月に至て通用止む、此間凡二十三年、享保三年戊戌閏十月、新金銀を頒行す、是を享保金銀といふ、至レ是海内の金銀悉皆神祖の定玉ひし舊制に復し、物價平準して、黠商も其直を二にする事あたはず、（寳永以來金銀ノ品種多キコト、殆ンド八九種ニイタル、各其位ヲ異ニシテ、引換ノ煩シキコト言フベカラズ、人民ノ苦ミ甚シカリシナリ）蒼生安堵、猾吏も其術を施す所なし、實に有廟の御恩德、仰ぐべし敬すべし、惜かな氣運極有、物力支へがたし、遂に

元文元年丙辰五月に至て通用止む、凡二十一年、元文元年丙辰五月、金銀改鑄有て、文字の極印を施せり、是を文字金・文字銀といふ、文政十年丁亥二月、通用止む、凡九十二年、明和二年乙酉九月、新たに五匁銀を鑄る、丁銀小玉銀取交通用すべき由命ぜらる（元文ノ改鑄ハ明君ニ似合ハザル秕政ナレドモ、コノ時金銀不足シテ、鑄造ノ用ニ充ルニタラサルヨリ、止ムヲ得ズ此下策ニ出デタルモノカ）　按に慶長以來、銀は常是包の儘通用す、露禮にて通用を施す事是を始とす、此後二朱銀・一朱銀・一分銀、皆露禮にて通用せり、銀を楮封の儘用る事は、神祖深き微旨おはしましての事なり、其事常是が譜牒に載せたり

同四年丁亥十二月、五匁銀の事以來、銀相場に拘らず、金一兩に六十匁替の積を以て、金一分に三枚、一兩に十二枚の割にて通用すべき由命ぜらる、（五匁銀・二朱銀ハ、勘定奉行河井越前守ノ建言ニヨリ出來タリト云）　按に元祿以來、改貨の度毎に品位を改めらるゝ事はしば〳〵成しかど、都て輕重を亂る事は、乾金の外絕てあらざるなり、後世同事に行はるゝ金銀品位輕重、混淆してひとしからざるの弊は實に爰に基本せり、乾金は其位を古製に復せられんが爲に、暫く權に隨はれしものあれば、後世の雜貨と同日に論ずべからず、然れ共輕重混淆其實に適はざるの俑を作りし罪は、猶免れざるべし

同九年壬辰九月、二朱銀通用始りしより、五匁銀を以て諸渡方に用ゆる事を止めらる、凡八年

明和九年壬辰九月、南鐐銀を以て二朱銀を鑄る、八枚を以て金一兩に換ふ、南鐐十匁にして通用銀二十五匁替の割たり是を二朱銀といふ、（馬ノ極メテ白キヲ南鐐ト名ヅケシト云フコト、盛衰記ニ見エタレバ、南鐐ノ稱、昔治平ノ比ヨリ用來レドモ、其義不レ詳、近藤正齋云、或ハ詩ノ大雅南金ノ南ヲ假借スルカ）

按に、爾雅に、白銀謂ニ之銀ー、其美謂ニ之鐐ーと見えたり、南の義は未考、後の知者を待つ、

天明八年戊申四月、二朱銀永代通用の令あり、文政二年己卯三月、通用止む、凡五十八年

文政元年戊寅六月、二歩判金を鑄る、二枚を以て金一兩に換ふ、世に是を眞字二歩判といふ、天保六年乙未十月、通用止む、凡十八年、文政二年乙卯九月、小判金・歩判金を改む、是を文政金といふ、天保十三年壬寅八月、通用止む、凡二十四年（文政元年以來ノ改鑄ハ、皆水野出羽守ノスル所ナリ）按に、凡改貨の擧は、金銀共同時に改めらるゝ事先格なり、是金銀の品位輕重適當を欲すれば也、寶永の度荻原近江守屢々私に銀位を改め、其當りを失ひ、天下惡弊に苦しめり、(是一つなり)乾金は一時止むべからざるの權法に出で、其說前に論ずるごとくなれ共、其當りを失へる一つなり、(是二つなり)明和の五匁銀、(是三つなり)同二朱銀、(是四つなり)文政の二歩判金、(是五つなり)金銀を閣てひとり小判一歩判のみを改められし事、古規に違へりといへども、其品位輕重適當の法を失へる事既に久しければ、今更いふべきにあらず、但し其事を奉れる輩法意の基く所を知らず、政本を亂し後世を謬つ事實に歎息すべき事なり

文政三年庚辰七月通用銀を改む、是を艸文字銀又新文字銀といふ、後來の文字銀を眞文字銀、又古文字銀といふ、天保十三年壬寅八月通用止む、凡二十三年

文政七年甲申三月二朱銀を改鑄す、從來の二朱銀に對して新二朱銀といふ、天保十三年壬寅八月、通用止む、凡十九年

文政七年甲申七月、一朱金を鑄る、天保二年庚子十月に至り通用止む、凡十七年、文政十一戊子十一月、二歩判金を改鑄す、是を草字二歩判といふ、從來二歩判を眞字二歩判といふ、天保十三年壬寅八月、通用止む、凡十五年、文政十二年己丑七月、一朱銀を鑄る、十六枚を以て金一兩に換ふ、天保十三年壬寅八月、通用止む、凡十四年、天保三年壬辰十月、二朱金を鑄る、今用る物是なり、天保八年丁酉十一月、五兩判を鑄る、一枚を以て小判五兩に換ふ、今用る物是なり、天保八年丁酉十一月、一分銀を鑄る、四枚を以て金一兩に換ふ、今用る物是なり（文政以來天保ニイタリテ紛々改鑄、品種モ多ク、量目モ一樣ナラズシテ、貨幣ノ正理ヲ失ヒタルハ、コレ德川氏ノ衰亡スル一ノ光ナルベシ、大凡德川氏ノ德ノ衰フル始メヲヒラキタルハ、文恭公ノ晩年、水野出羽守ガ所爲ナリ、水野出羽守ノ改革ハスデニ小人ノ後ニシテ、善者アリトイヘドモ如何トモスベキナキ時ニイタリシナリ）

○金銀品位の事（品位吹替等ノ事ハ、貨幣條例備考ニ參看スベシ）

慶長小判金一枚重サ四匁七分六厘(正金四匁一厘二毛二糸)位五十二匁二分、同一歩判金一枚重サ一匁一分九厘(正金一匁三毛)位同上、元祿小判金一枚重サ四匁七分六厘(正金一匁七分三厘六糸)位七十六匁七分同一歩判金一枚重サ一匁一分九厘(正金六分八厘二毛六糸)位同上、同二朱判金一枚重サ五分九厘五毛(正金三分四厘一毛三糸)位同上、乾字小判金一枚重サ二匁五分(正金二匁一分七毛三糸)位五十二匁二分、同一歩判金一枚重サ六分二厘五毛(正金二厘六毛八糸)位同上、正德小判金一枚重サ四匁七分六厘(正金四匁一厘二毛二糸)位同上、同一歩判金一枚重サ一匁一分二厘(正金一匁三毛)位同上、享保小判金一枚重サ四匁七分六厘(正金四匁一分三毛九糸)位五十匁七分、同一分判金一枚重サ一匁一分九

厘(正金一匁三厘二毛七糸)位同上、文字小判金一枚重サ三匁五分(正金二匁三分)位六十六匁九分五厘六毛五糸、同一歩判金一枚重サ八分七厘五毛(正金五分七厘五毛)位同上、眞字二歩判、金一枚重サ一匁七分五厘(正金五分七厘五毛)位七十八匁、文政小判金一枚重サ三匁五分(正金一匁九分七厘四毛三糸)位同上、同一歩判金一枚重サ八分七厘五毛(正金四分九厘三毛五糸)位同上、一朱金一枚重サ三分七厘五毛(正金四厘五毛二糸〇餘)位三百六十五匁、草字二分判金一枚重サ一匁七分五厘(正金八分五厘五毛)位九十匁、二朱金一枚重サ四分三厘七毛五糸(正金一分二厘八毛三糸)位百五十匁、五兩判金一枚重サ九匁(正金七匁五分八厘六毛二糸)位五十二匁二分、保字小判金一枚重サ三匁(正金一匁七分三毛二糸)位七十七匁五分、同一歩判金一枚重サ七分五厘(正金四分二厘五毛八糸)位同上、丁銀一枚重サ四十三匁内外なり俗に大黒銀といふ、豆板銀大小輕重同じからず俗に小玉銀といふ、慶長銀百目銀八十匁銅二十目、元祿銀百目銀六十四匁銅三十六匁、寶永銀百目銀五十匁銅五十匁、中銀百目銀四十目銅六十匁、三寶銀百目銀三十二匁銅六十八匁、四寶銀百目銀二十匁銅八十匁、享保銀百目銀八十匁銅二十匁、眞文字銀百目銀四十六匁銅五十四匁、草文字銀百目銀三十六匁銅六十四匁、保字銀百目銀二十六匁銅七十四匁、五匁銀一枚重サ五匁三厘銀二匁三分一厘餘銅二匁六分八厘餘、古二朱銀一枚重サ二匁七分（此古二朱銀南鐐ト云フモノ、始メテ銀ニ定名、アリシ也、コレヨリ金銀兩本位ノ姿ニナレリ）新二朱銀一枚重サ二匁、一朱銀一枚重サ七分、一歩銀一枚重サ二匁三分

○金銀新古吹立高之事

慶長金千五十二萬四千兩餘、按に吹立高未詳、故に天保十四癸卯八月迄之引替高を擧るのみ、元祿金千三百九十三萬兩餘、乾字金千五十一萬五千五百兩、享保金八百四十九萬千六百兩餘、内武藏判二十一萬三千兩餘武藏判ハ正徳中ニ吹立タルモノナルヲ、享保金ノ内譯ニ出セシハ、位ノ同位ナルガ故カ文字金千七百四十一萬二千百二十兩餘、眞字二步金二百九十八萬四千九百四十五兩餘、文政金千百四萬三千三百六十兩餘、一朱金二百八十六萬百九十二兩餘、草字二步金二百三萬三千六十一兩餘、二朱金千百七十萬千兩餘、五兩判金十七萬二千二百七十五兩、小數三萬四千四百五十五枚、保字金六百四十一萬六千兩、慶長銀百二十萬貫目、元祿銀四十萬五千八百九十貫目餘、寶永銀二十七萬八千百三十貫目餘、中銀五千八百三十六貫目餘、三寶銀三十七萬三千八百七十貫目餘、四寶銀四十萬千二百四十貫目餘、享保銀三十三萬九百二十五貫四百六十八匁餘、座方書留には、三十三萬千四百二十貫目餘とあり、書上高より四百九十五貫目餘多し、此事往々然り、座方の一弊なり、古文字銀五十二萬五千四百六十五貫九百目餘、內五匁銀三十六萬千二百八十枚、此銀千八百十七貫二百三十八匁四分、新文字銀二十二萬四千九百八十一貫九百目、保字銀十四萬八千四十一貫目餘、古二朱銀四千七百四十六萬四千三百三十六枚(座方書留、五百九十七萬四千四十二兩二分二朱とあり、書上高より四萬千兩多し)、新二朱銀六千六十九萬六千二百八十枚(此金七百五十八萬七千三十五兩)、一朱銀一億三千九百九十一萬三千百五十二枚(此金八百七十四萬四千五百七十二兩餘)、

一歩銀六千六十一萬五千二百八枚（此金千五百十五萬三千八百二枚）慶長金以下ノ員數ノ他書所載ト頗ル不同アリ、調方ノ異同モアルベク、又傳寫ノ訛リモアルベシ

○金銀有高之事

天保十四年癸卯八月十七日、金銀吹替停止之令あり、此日通用金銀世上有高左之如し

五兩判金三萬四千四百五十五枚（此金十七萬二千二百七十五兩）、小判金五百五十七萬六千百兩）、一歩判金三百三十五萬九千六百枚（此金八十三萬九千九百兩）、二朱金百四十六萬二千六百二十五枚（此金百七十萬千兩）、合金千八百二十八萬九千二百七十五兩、大判金一萬二百三十九枚保字銀十四萬八千四十一貫目餘、一歩銀六千六十一萬五千二百八枚（此金千五百十五萬三千八百二兩）

停止金銀引替殘高、次のごとし、文字金四百九十七萬七千二百七十七兩、文政金四百三萬千四百七十七兩、眞字二歩判金三十萬四千四百四十一兩、一朱金三萬三十八兩、合金九百五十三萬八千九百八十五兩、古文字銀十五萬七千四百七十一貫目餘、新文字銀七萬三千三百二十四貫四百目餘、合銀二十三萬七百九十五貫四百目餘、古二朱銀八十一萬三千八百六十七兩餘、新二朱銀三十一萬八千八十七兩餘、一朱銀百三十八萬六千六百四十三兩餘、合銀二百五十一萬八千五百九十七兩餘 有高調ト云モノハ、引替高ヲ以テ吹立ノ高ニ差引スルモノナレバ、コレニテ必正數ヲ得タルモノトハ云ヒガタシ、唯其大數トシテ見ルベシ、且其品位量目一定セザレバ、一々正金ニ改算セザレバ、的正ノ數ハ得ガタキコト論ナシ

○大判金之事

慶長六年辛丑五月、始て大判金を鑄る、重サ四十四匁一分、正銀七匁九分、正金三十四匁六分、銅一匁六分、位六十四匁六分二厘、世に是を慶長大判金といふ、吹立高一萬六千五百六十五枚（大判金ノ價ト云フ者、官ノ定メハアレドモ、通用金銀ノ品位ノ差ニ從ツテ、通用ノ相場ハ一定セザリシナリ、シカレバ官ノ價モ時ニ從ツテ動キシ也）按に金銀目を分る物は、享保の度吹直しの節、組合の手續に因て、其分量をあらはすなり

元祿八年乙亥九月、大判金を改鑄る、重サ四十四匁一分、正金二十六匁六分一厘五毛四糸、銀十六匁二分五厘三毛九糸、銅一匁二分三厘七糸、位八十四匁餘、世に是を元祿大判金と云是なり、吹立高二萬二千三百枚

享保十年乙巳十二月、元祿大判を廢せられ、新たに大判金を鑄る、品位輕重慶長大判金に同じ、是を享保大判金といふ、吹立高八千五百十五枚、今用ゆる物是なり、天保九戊戌九月、大判金增鑄る事あり、品位輕重享保大判金と同じ、新古取交通用す、吹立高千七百三十一枚、外に吹直し百三十六枚、合て千八百六十七枚

○金銀分銅之事

萬治二年己亥正月、金銀分銅を鑄て、非常御備金に除置かる、「行軍守城用勿レ作ニ尋常費一、萬治二年正月吉日」の銘あり、是より前明暦三年丁酉正月、御本城炎上之後、燒爛金銀を以て分銅に鑄立べしとの儀によりて、此年於ニ三之丸一此擧あり、金分銅數二十程（百書ニ、銀分銅ハ二百六ニトアリ）四十一貫より四十四五貫目に

至る、此内金分銅七つ、此目三百十貫九百目餘、延寶四年丙辰、慶長金に吹直さる、此代金五萬七千八百兩餘、其後金分銅十、此目四百三十八貫百目餘、天和元年辛酉、慶長金に吹直さる、此代金七萬六千百六十兩餘、此他巨細の事記載慥かならずして、今知るべからず、當時奥御金藏に存する物、金分銅三、位三十五匁、銀分銅五、位缺、金目四十四貫六百五十目、同四十三貫三百目、同四十二貫四百目、合金百三十貫三百五十目、銀目四十四貫七百七十目、同四十四貫六百三十目、同四十三貫五百八十目、同四十三貫三百五十目、同四十三貫五十目、合銀二百十九貫七百八十目

寛政五年癸丑八月、金銀分銅を鑄る、「征伐軍旅用、勿レ爲ニ尋常費一寛政五年癸丑八月吉日」の銘有、筆者御勘定吟味役佐久間甚八、彫工後藤四郎兵衛、當時奥御金藏にあり、五ッ、位五十二匁五分より三匁五分、銀分銅一つ、金目四十一貫九百四十目、位五十三匁五分、同四十一貫四百三十目、位五十三匁、同四十一貫三百目、位五十三匁二分、同四十一貫二百八十目、位五十二匁五分、同四十一貫二百五十目、位同上、合金目二百七貫二百目、銀目三十貫百目、位七分入

天保十三年壬寅十二月、金銀分銅を鑄る、「藏充ニ軍資一泰平寶傳、天保十三年壬寅五月吉日」の銘あり、筆者御勘定奉行岡本近江守忠成、（一書ニハ、文字ハ成島司直トアリ）彫工後藤四郎兵衛なり、金分銅三ッ、位五十三匁五分、銀分銅二十三、金目四十一貫五百五十目、同四十一貫四百目、同四十一貫目、合金目百二十三貫九百五十目、銀目三十貫四百九十目、同三十貫二十目、同三十貫三百十目、同三十貫六十目、同三十一貫

四百目、同三十一貫三百五十目、同三十一貫三百目、同三十一貫七十目、同三十一貫二十目、同三十一貫目、同三十貫九百五十目、同三十貫八百五十目、同三十貫六百二十目、同三十貫五百八十目、同三十貫四百八十目、同三十貫三百五十目、同三十貫二百五十目、同三十貫二百目、同三十貫百目、同三十貫三十目、同三十貫目二十三枚ノ内二枚不足アリ、傳寫ノ際ニ脫セシナラン、但シ同量ノモノ三ツアルニヤ、合銀日七百二貫四百七十目

○金銀相場之事

享保十年乙巳十二月、大判金一枚、金七兩二分の積りたるべき由定めらる

寬政三年辛亥三月、遠國御用御暇拜領物之分、以來大判金一枚の代小判金二十兩賜ふべき由定めらる

元祿十三年庚辰十一月、銀子の事、御藏元拂金一兩には六十目替の積たるを以、世間にても是に準ずべき由令せらる元祿以前ハ、金一兩ニ銀五十匁、錢四貫文ノ定メナリ

明暦元年乙未十二月、町中錢取引時々の相場次第、相對にて賣買すべく、御定直段は金一兩に付四貫文、一分に付一貫文たるべき由令せらる

天和二年壬戌五月、元祿十三年庚辰十一月、重て金一兩錢四貫文替たるべき由令せらる、天保十三年壬寅八月、金一兩に付錢六貫五百文替たるべき由市中に觸らる

○金銀山の事

佐州金銀山は、慶長六年辛丑、始て大久保石見守に命ぜられて其事を掌らしむ、元和七年辛酉七月、

後藤庄三郎に命ぜられて、手代を彼地に遣し、山出金之分都て小判金に吹立させ上納す、是佐州にて吹立上納の始めなり。其後元祿九年丙子より延享三年丙寅迄、延金にて上納す、同四年丁卯より小判金に吹立納むべき由令せられ、文政二年己卯より吹立上納相止、延金にて佐州御藏へ納置、天保七年丙申より山出金之內、三分一は燒金にて同所御藏に除置、三分二を江戶へ上納すべき由定めらる、近年山勢衰微し、一ヶ年大概納高燒金十八貫五百目餘、灰吹銀二百貫目程なり（佐州の事は別に錄せし書詳なり）但生野銀山は、慶長三年戊戌、初て間宮新左衞門に銀山奉行を命せられ、其事を掌らしむ、灰吹銀を出す事今に絕ず、當時御代官支配して二十分一を下さる

石州銀山は、慶長五年庚子、大久保石見守に命ぜられしより、今に至りて灰吹銀を出す事絕ず、當時御代官支配して、一ヶ年五十貫目餘出るなり、奧州半田銀山は、松平宮內少輔領分なりしを、其願に任せられ、延享四年丁卯三月、其所の村々二十ヶ村上地命ぜられ、村方は其所の御代官進退に任せ、銀山は佐渡奉行支配すべき由命ぜらる、其後寬延二年己巳七月より、銀山をも御代官指揮に從はしむ、近來諸山とも衰微せし中に、此山のみ金銀を出す事古へに減ぜず、實に當今の寶山といふべし、一ヶ年納高大概筋金十七貫九百目、灰吹銀百三十二貫目程なり

羽州秋田銀山は、佐竹右京大夫領內にあり、古來より運上として、每年灰吹銀一貫四百目づゝ貢献す

○金銀活用之事

金銀は諸物を運輸するの具なり、故に諸物に金銀の數位相對して、其平を得るを至極とす、往古金銀乏しかりし世には、其價貴くして諸物賤しき事を知るべし、當時物價の騰貴を以、獨り其罪を金銀の品位輕重に歸して、多少の論に涉らざるは、いまだ其實を盡さざるの論なり、諸物の貴くなれるは、金銀の多きによれり、抑年々生る所の諸物には定數ありて、歳々鑄る所の金銀に定額ある事なし、其數ます〳〵多して、其弊ます〳〵多く、何を以てか割レ肉啗レ飢に異ならん、古の金銀乏しく諸物の賤價なりしは、其利あるに似て其便宜しからず、今の金銀多して諸物の貴騰なるは、此便宜しきに似て、其利を失へりと申べし、金銀諸物平準を得て、始て其運輸の具たるを知り、其後に至りて終に品位輕重の論にも涉るべき事なり此論信ジガタシ、假令金銀ハ少ク諸物ハ多クトモ、其位宜シケレバ、必シモ其數倍ヲマスヲ要セズ、是諸物價ノ下落スルニハアラズシテ、其金銀ノ位ノ爲ニ正シキ位ニ還ル也、又金銀多キトテモ、其品位ヨロシカラザレバ其効ナシ、品位ヲ正サズシテ多少ヲ先ニスルハ、知本ノ論ニアラズ

○金銀品數の事

金銀品多き時は、煩碎にして眞僞錯亂少からず、尤通用に害あり、今より後其所を定められんには、金は大判・小判・一歩の三品に限るべく、銀は丁銀・豆板銀の二品に止るべし、今俄に其數を減ぜられんに、猶通便のさゝはりあるに於ては、別に二朱銀を用ゆる事は、暫時其時宜に隨ふべし、金銀の品少なきときは通用不辨抔と申者あり、目前の小利に拘泥して、千載に達せざるの論は、識者のとらざる所なり金銀ノ品種少ナキヲ欲スルハ正論ナリ、之ヲ要スルニ、品種多クトモ位キニ不同ナケレバ、弊害モ少ナシ、各種ニ位ノ不同アリシ故大ニ民害ヲナシタルナリ

○佐州印銀之事

元和五年己未、佐州一國通用のため初て印銀を鑄る、「德通定印」の四字表裏に極印あり、飾師三左衞門造レ之、元和より正德迄鑄る物を元印銀といふ、元印銀一匁錢六十七文に通用す、正德年間吹直す物あり、新印銀といふ、新印銀一匁錢三十六文に通用す、（一說に新印銀一匁代錢四十八文といふ）寶曆十一年辛巳に至りて通用止む、凡百四十三年

○金銀札之事

寶永四年丁亥十月、金銀錢札遣所も有レ之候はゞ、札遣無レ之處通用のため不レ宜候條、向後札遣停止之事に候間、其所々へ申遣し、相達候日より五十日を限り、相止可レ申との令あり、享保十五年庚戌六月、金銀錢札遣有レ之所々、先年札遣相止候得共、向後前々之通札遣仕來候處は、勝手次第たるべく、前前より仕來候所にて、二十萬石以上は二十五ヶ年二十萬石以下は十五年の間たるべし、年數滿候ても猶又札遣仕度儀も候はゞ、其節に至り御勘定奉行へ可レ承合レ旨令せらる（金銀札ノ制禁ノ寬嚴ハ、皆幕府ノ銀貨ノ盈縮ニヨリテ、之ガ權度セシモノヽ如シ）

寶曆五年乙亥四月、向後金札は都て難レ成旨令せらる、同九年己卯八月、向後新規銀札は難レ成、金錢札は前々より通用仕來候分も、以後難レ成旨定めらる

安永三年甲午九月、前々より銀札遣來る所にても、中絕の分は難レ成由令せらる、天保七年丙申十二月、金銀札は不レ及レ申、顧濟にあらざる銀札は難レ成由令せらる

○通用錢之事

我國鑄錢の事、天德の後久敷廢せられて、中古專ら異朝の錢のみを用られき、就レ中室町殿以來、明の永樂錢其品勝れたるを以、朝野舉て是を珍重す、故に永樂錢一貫文を京錢（異朝代々の古錢をいふ）四貫文に當て通用せり、此後世四貫文相場の因て起る所なり 鎌倉ノ時ヨリ我邦ニテ錢ヲ鑄ズシテ、宋錢ヲ用タルハ、貿易ノ利ヲ謀リタルガ爲ニテ、是鎌倉ノ政略ナリ、此事北條九代條記ニアレバ、北條氏ノ時ニ然リシナリ 按に、此事慶長九年甲辰十月に始るといふ、然れ共永樂錢一文を以京錢四文に當る事、猶夫より古き事と見えたり、其比の記錄を參考して知るべし

同十三年戊申十二月八日、永樂錢を廢して京錢を用ゆべき旨令あり、夫より永樂錢京錢の差別なく、等しく交へ用ひし事もありと見えたり、寬永十三年丙子六月、銀座役人秋田宗古に命ぜられ、芝濱手及江州阪本に於て、新たに錢座を立て、始て銅錢を鑄る、是を寬永通寶といふ

或書曰、六月朔日より通用被二仰出一、石谷十藏監レ之、一說に、此時天海僧正の吹擧に依て、鳴見兵庫賢信といふ者に鑄錢の事を命ぜらる、賢信頓て芝繩手に錢座を立て、（今の新錢座なり）初て鑄錢百貫文を鑄て奉る、其賞として金二十五兩賜はれり、則寬永通寶是なり、（天海僧正吹擧に依て鑄る錢は、寬永通寶にはあらざるべし、慶長十三年、永樂通寶京鑄取交通用すべき命ありし時、慶長通寶元和五年に、元和通寶鑄立し事あり、今稀に世に存す） 慶長・元和ノ二錢ハ、鳴海ノ與リシモノニハアラザラン、其事ハ別考アリ 按に、鑄錢百貫文の賞に金二十五兩を賜ふ、則金一兩に付四貫文相場の出處か

寛文三年辛丑、京都方廣寺の銅佛を毀て新錢を鑄る、裏に文字を記す世に是を文錢と云、寛永十三年、秋田宗古に命ぜられ、江州阪本・京都九條にて鑄る所の錢は今世に耳白錢と云、文錢は則ち目方に隨て鑄る、故に品仕輕重同じ、爰に至て寛永より寛文に至迄、前後總吹高四百萬貫文（各重さ一匁）、同十年庚戌六月、寛永錢之内古錢（永樂以下異朝代々の古錢を云）を取交通用すべき旨令ぜらる、按に享保元年丙申十二月、呉服町會所にて新錢座呉服師共より新錢賣渡の事に付令有（呉服師後藤縫殿助等ソノ事ヲ司リシ故ナリ）此後元文に新金銀の改め鑄られしより、金銀の數多く、錢相場高直に成しより、江戸・大阪・長崎・仙臺・秋田、其外所々に鑄錢座を立られ、專ら新錢を鑄られしが、延享二年乙丑に至りて、悉く錢座を廢せられき、按に此内大阪鑄錢座は、寛保元年辛酉五月より延享二年乙丑に至り、凡五年にして廢し、仙臺鑄錢座は、元文二年丁巳五月より延享二年乙丑五月に至り、凡九年にして止む、江戸鑄錢座は元文元年丙辰五月より延享元年甲子に至り、凡九年にして廢せられき

明和二年乙酉七月、後藤庄三郎に命ぜられ、龜井戸村にて六千四百坪の地所を賜ひ、鑄錢定座を立られ、其年九月十五日より吹方を始む、一ヶ年吹高貳萬貫文づゝと定めらる、安永三年丙午九月に至りて鑄錢座を廢せらる、凡十年、此間鐵錢吹高二百二十六萬二千五百八十九貫文餘、重さ各七分六厘餘

按に此間追々に吹高を增れし事あり

明和四年丁亥より安永二年癸亥迄凡七年の間、長崎にて銅錢を鑄る、重さ六分、此吹高二十三萬千貫

文といふ、明和四年丁亥より安永三年甲午九月迄、京都鑄錢座にて鐵錢を鑄る　重さ七分七厘餘、此吹高百四十二萬二千七百八十貫文餘、明和五年戊子四月、水戶殿領分、並仙臺領內にて鑄錢の事免許あり、尤江戶定座差配たるべき旨定めらる、同九年壬辰十月に至り、凡五年にして其事止む、其後安永二年癸巳、水戶領分にて再び鑄錢始、同七年戊戌迄凡六年にして止む、天明四年甲辰、仙臺領にて再鑄始、同七年丁未迄凡四年にして止む、此間兩所にての吹高凡銅錢二十萬三百二十九貫文、鐵錢百三十九萬四百九十六貫文といふ（銅錢重さ六分、鐵錢重さ七分六厘餘）

天保六年乙未九月、金座にて鐵錢を鑄る、同七年甲申迄吹高五千二百六十貫文、重さ七分六厘九絲

天保九年戊戌、金座にて鐵錢吹增あり、同十二年辛丑、吹高十八萬六千貫文餘、重さ六分五厘

明和九年壬辰九月、向後金銀座之分、新規錢座難成旨令せらる

○當十錢之事

寛永五年戊子四月、京都七條錢座に於て新に大錢を鑄る、大錢一文を以並錢十文に換ふ、世に是を十文錢といふ、背文「永久世用」の四字內郭にあり、寶永通寶是なり、徑り一寸二分、重さ二匁、同六年己丑正月、大錢を廢す

○眞鍮錢之事

明和五年戊子五月、龜井戶村銀座に於て眞鍮錢を鑄る、眞鍮錢一枚を以並錢四文に換ふ、故に是を四

文錢といふ、徑り九分强し、重さ一匁四分(銅六割八分、針丹二割四分、白鑞八分、背に浪あり)、一ヶ年吹高五萬五千貫文と定めらる、此後連々に吹高を減ぜらる、天明八年戊申十二月に至りて吹方を止め、永代通用の令あり、總吹高五百五十三萬六千三百八十貫二百八文(但一文を一枚にして算す)、文政四年辛巳十一月より同八年乙酉迄五年の間、銀座にて眞鍮錢吹增の事あり、重さ一匁四分(銅七割半、針丹一割半、鉛一割)、吹高七萬九千七百貫文、但同上

○當百錢之事

天保六年乙未九月、金座に於て當百錢を鑄る、一枚を以並錢百文に換ふ、世に是を百文錢といふ(重さ五匁五分、銅八分、錫一割、鉛一割二分)、同十二年辛丑迄總吹高三百九十七萬三千二百二十貫文

○仙臺通寶之事

天明四年甲辰十一月、松平陸奥守領分に限り通用の鑄錢、形ち撫角、文字は「仙臺通寶」となし、當年より五ヶ年鑄錢免許あり、一ヶ年吹高千萬貫文、運上錢五千貫文の定なり、同八年戊申十月、鑄錢年季中といへ共、其願によりて吹方を止めらる尤鐵錢なり、按に寛永新錢譜、天明四年の春、仙臺石卷所レ鑄鐵錢徑八分、重さ一匁、徑六分半、重さ不レ過ニ五分ニ文曰ニ仙臺通寶ニ、俗曰ニ撫角錢ニ(按、語ニ訛脫アリ)

○唐金銀之事

舶來の唐金に五種あり、所レ謂足赤金・九程金・入程金・西藏金・安南金なり、其品位により價銀の等差あ

り、足赤金三十二雙半替、九程金二十八雙四分替、八程金二十六雙四分替、西藏金二十三雙替、安南金二十一雙一分〇三厘九毛八糸替

唐銀に三種あり、元寶銀一挺重さ五百目、足紋銀一挺重さ三十三匁、元圓銀一挺重さ十一匁、是淸國通寶の定なり

○御勝手御繰合之事

御勝手御繰合の事は、量入爲出の外更に別法ある事なし、一年の用は定額を立、正税を以て取賄ふべく、金税は收めて不虞の備とすべし、彼税歛を厚ふし金銀の數を增の類は、小人一時の詭智に出て、君子悠久の至計にあらず、爰に天保三年以來每年出納と、金銀吹替に付ての出日納とを擧て、過不足の異同を知らしむ、按に吹替に付ての出日納を、文政以來御益納と唱へ來れり、是小人の上下を欺罔する辭なり、其品位を貶し、其輕重を損し、其數を細かにして益といふべけんや、假令ば一石の米を一斗づゝ分て、是に秕糠を加へ、各一石の數に充しめ、九分の益ありといふが如し、況㞡々改鑄すれば、其度每に吹缺と稱して、消鑠する物少からず、其實損ありて益ある事なし、故に元文以前益納と唱へし事を聞ず、今爰に出日納と記して其實に隨はしむ、是區々の稱呼といへ共、名實二つながら失せん事を恐れて、聊其辨をなすのみ

年	金額		金額	
天保三年	金百六十一萬二千二百十一兩餘	納、	金百五十九萬三千九百九兩餘	出
	金一萬八千三百四兩餘	餘、	金三十九萬四千二百兩餘	出目
天保四年	金百七十六萬三千二百四十一兩餘	納、	金百六十四萬六千八百三十二兩餘	出
	金十一萬六千四百九兩餘	余、	金五十四萬兩餘	出目
天保五年	金百六十四萬四千五百三兩餘	納、	金百七十九萬五十一兩餘	出
	金十四萬五千五百四十七兩餘	不足、	金四十七萬五百九十六兩餘	出目
天保六年	金百六十三萬千七百八十六兩餘	納、	金百七十六萬二百八十八兩餘	出
	金十二萬八千五百二兩餘	不足、	金六十二萬兩	出目
天保七年	金二百十五萬千三百七十二兩餘	納、	金百九十六萬三千七百五十兩餘	出
	金十八萬七千六百二十一兩餘	餘、	金四十九萬九千八百四十四兩餘	出目
天保八年	金二百五十三萬千八十兩餘	納、	金二百四十六萬七千九百二兩餘	出
	金六萬三千百七十八兩餘	餘、	金六十二萬九千二百六十三兩餘	出目
天保九年	金三百二十七萬八千三百八十六兩餘	納、	金二百五十一萬二千六百六十六兩餘	出
	金七十六萬五千七百二十兩餘	餘、	金百七萬五千九百五十兩餘	出目
天保十年	金二百四十萬千百九十七兩餘	納、	金二百十八萬九百二十二兩餘	出

金二十二萬二百七十五兩餘　餘、　金六十九萬四千七百四十五兩餘　出目

天保十一年

金二百四十一萬九千四百八十七兩餘　納、　金二百萬千九百五十八兩餘　出

金四十一萬七千五百二十九兩餘　餘、　金九十九萬七千兩餘

天保十二年

金二百二十四萬五千五百九十兩餘　納、　金百九十六萬二千六百八十四兩餘　出

金二十八萬二千九百六兩餘　餘、　金百十五萬五千兩餘　出目

天保十三年

金百七十六萬千百四十七兩餘　納、　金百九十六萬三千九百十一兩餘　出

金二十萬二千七百六十四兩餘　不足、　金五十萬千四百四十五兩餘　出目

右納出餘出目を記して示ニ後人

附

寛文五年乙巳四月廿八日向後銀座運上銀、一ヶ年一萬枚と定めらる

寛文元年辛丑より延寶四年丙辰迄十六年の間、鑄る所の文錢凡百九十七萬貫といふ

元祿九年丙子七月箔座建、寶永六年己丑三月八日止む

元祿十四年辛巳銀座の者共に命ぜられて、大阪に銅座を設く、正德二年壬辰三月十七日、銅座を廢す

元文三年戊午四月銀座人に命ぜられて再び大阪に銅座を建らる、寛延三年庚午七月銅座を止めらる

明和三年丙戌六月、猶又大阪に銅座を設けらる、是より後今に至りて連綿す

萬治二年己亥七月廿四日、於二長崎一如二古錢新規鳥目一令レ鑄レ之、異國船來朝之節賣買仕度旨、彼地町人訴之趣、黑川與兵衛より及二言上一候處、如二古錢年號之文字一に鑄レ之、異船へ賣買可レ仕旨にて、寛永之文字堅可レ爲二制禁一旨命ぜらる

保字金一兩目方三匁、吹減百兩に付金目二匁三分、二朱金一兩目方三匁五分、吹減百兩に付金目二匁二分、二朱金一兩目方三匁五分、吹減百兩に付金目八匁二分、五兩判金一兩目方一匁八分、吹減百枚に付金目四匁、保字銀吹を諸入用步、一百貫目に付三貫匁、一步銀吹立諸入用步、一千兩に付二十五兩

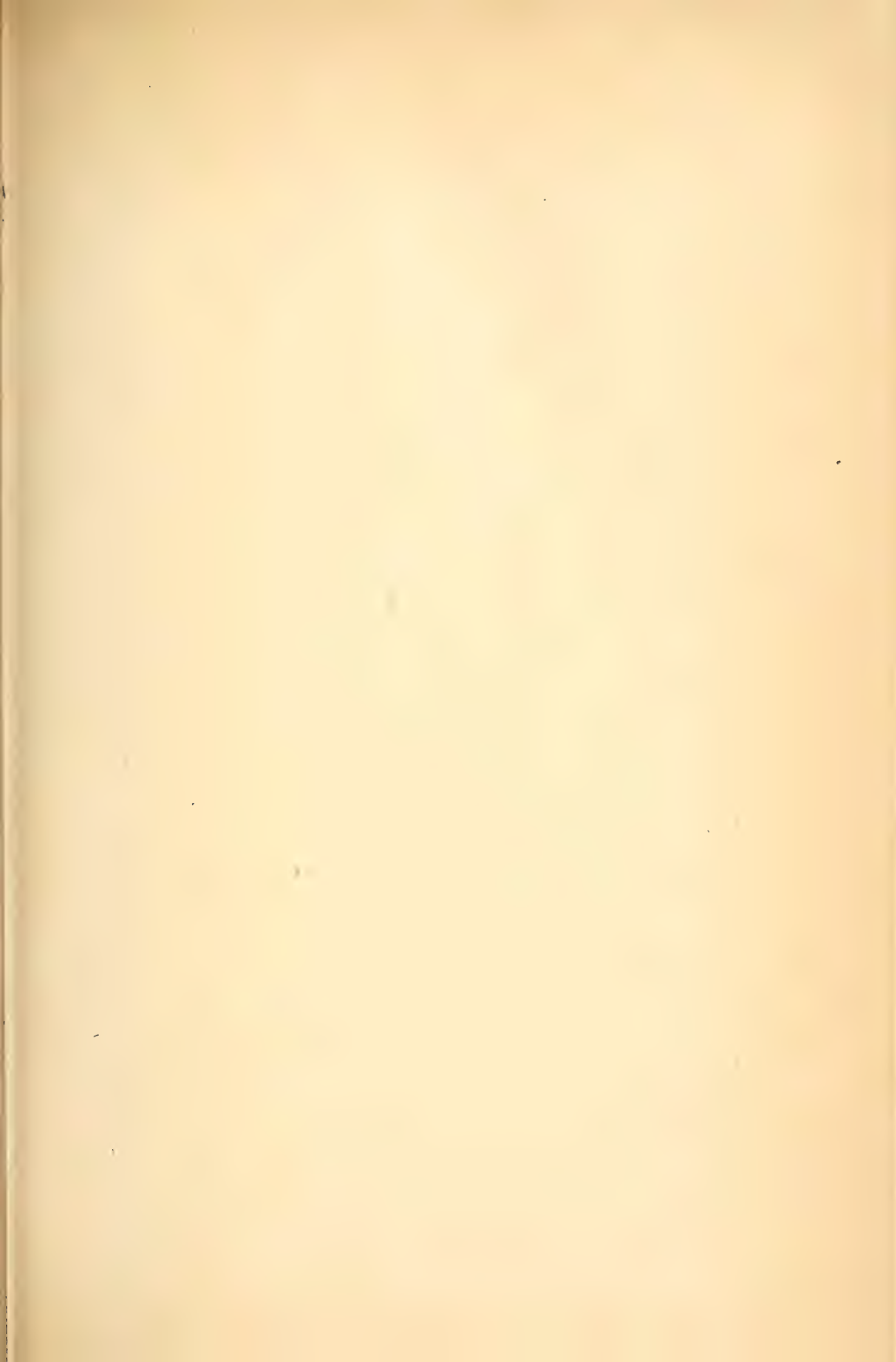
金雙替之事は、慶長金二十四雙一分、元祿金十六雙八分、元文金十九雙、享保金二十四雙八分文政金十六雙、保字金十六雙六分、草字二步判十三雙九分、二朱判八雙六分、一朱判五雙一分、五兩判二十四雙一分

古金引換代、幷御手當の事は、慶長金百兩引換代百九十兩、元祿金百兩引替代百三十兩、乾字金百兩引替代金百兩、武藏判百兩に付代百九十兩、享保金百兩引替代百九十兩、元文金百兩引替代御手當十兩、眞草字二步判金百兩引替御手當金一兩、文政金同斷、一朱金素引替

銀雙替の事、御買上正銀一匁代銀二匁六分、銀座賣渡正銀一匁代二匁七分なり

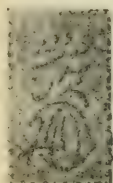
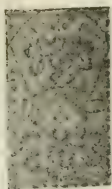
金銀位異動を見る附け石は、南紀那智石を吉とす、試金石といふ

貨幣秘錄終

金銀圖錄續編

金銀圖錄續編

正用品

近藤守重ガ金銀圖錄ニ正用品載スルトコロ、明和南鐐貳朱判ニトヾマル、爾後文・天ノ間金銀通用ノ正品、形制改造一ナラズ、因テ今續添具列ス、凡二十五品

文政貳分判金

重サ壹匁七分五厘

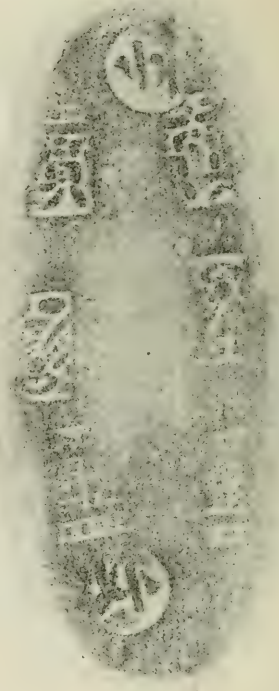
長七分半、横四分半、厚サ六厘、文政元年六月十日ヨリ通用、新金ニテ鑄トコロニシテ、歩判二ツヲ以テ金壹兩ノ積リ、天保六年十月通用停止

同上壹兩小判金

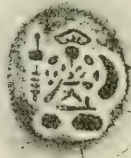
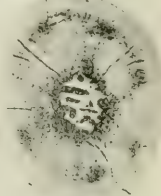
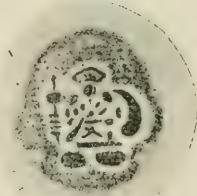
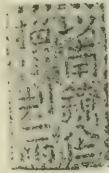
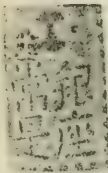
元文ニ鑄トコロノ小判、年ヲ經瑕金多キニヨツテ、重サ前ノ如ク、形チ少シク小サク厚ク、文ノ字ヲ草字ニ改テ鑄セラル、壹分判モ極印ワカリカヌルモ有ニ仍テ、同時ニ吹替ラル、小判・壹分判トモ、文政二年九月二十日ヨリ引替ラル、天保十三年八月二日通用停止

同上壹分判金

元文鑄トコロト、重サ同ジク、形チ少ク廣ク薄クシテ、文ノ字ヲ草字ニ改鑄セラル

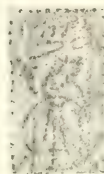
同上丁銀

文政三年七月廿日ヨリ丁銀・豆板銀トモ草文ニ改メ鑄テ引替ラル、天保十三年八月三日通用停止

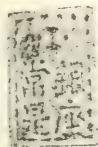
同上大黒銀　原本ニ共原圖・重量等ナシ

同上豆板銀

背

同上南鐐貳朱判

明和貳朱判年ヲ經、極印分ラザルモアリ、目方モ重ク便利宜シカラザルニツキ、重サ七分減ジ、長七分・横四分半・厚サ九厘ニ吹替ラル、文政七年三月廿一日ヨリ引替、天保十三年八月二日通用停止

同上壹朱判金

重サ三分、竪横各三分半、文政七年七月二日ヨリ通用、新金ニテ鑄ラル、歩判十六ヲ以テ金壹兩ノ積リ、天保十一年十月廿一日通用停止

同上草字貳分判金

文政元年鑄セラル、眞字弍歩判金、世上通用不足ニツキ、同十一年十一月小判壹分判ノ如ク、草文ニ改メ吹増シ、眞字判ト倶ニ通用、天保十三年八月二日通用停止

同上南鐐壹朱判

重サ七分、長五分、横三分半、厚サ五厘、文政十二年七月十日ヨリ通用、上銀南鐐ヲ以テ壹朱ノ歩判ヲ鑄ラル、十六ヲ以テ金壹兩ノ積リ、天保十三年八月二日通用停止

天保貳朱判金

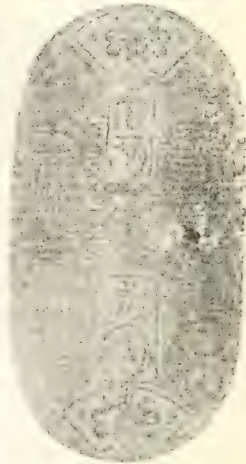
原圖ナシ

重サ七分五厘、長四分、横二分半、天保三年十月二日ヨリ通用、新金ニテ鑄ラル、歩判八ツヲ以テ金壹兩ノ積リ

同上五兩判金

重サ九匁

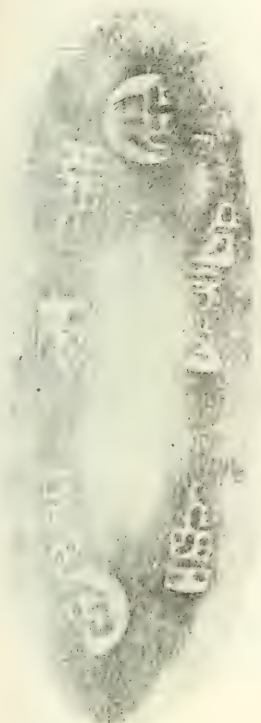
天保八年十一月朔日ヨリ通用、慶長金ノ位ヲ以テ新ニ鑄ラル、判金壹枚ニテ金五兩ノ積リ、保ノ字ノ添極印ヲ打ツ

同上壹兩小判金

重サ三匁

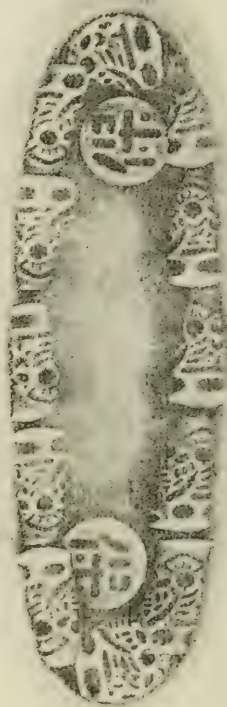
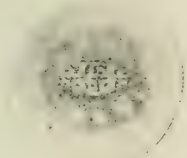
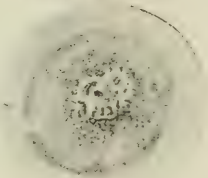
天保八年七月廿日小判壹分判トモ通用、金ノ位ヲ上ゲラル、ニ仍テ、員數減ズルニツキ、壹兩ニツキ重サ五分ヲ減ジ吹替ラル、ミナ保ノ字ノ極印ヲ打ツ、同年十一月十五日ヨリ通用

同上壹分判金

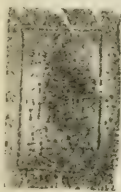
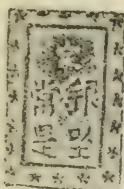
重サ七分五厘・長五分半・横三分半

同上丁銀

天保八年十二月十八日ヨリ、丁銀・豆板銀・極印保字ニ改メ引替ラル

同上大黒銀

同上豆板銀

背

背

同上南鐐壹分判

重サ貳匁三分、長七分半、横九分、厚サ八厘位、最上ノ銀ヲ以テ新ニ鑄ラル、天保八年十二月廿一日ヨリ通用、歩判四ツヲ以テ金壹兩ノ積リ

同上異品

天保十三年七月、奥羽ニテ金銀僞造セルモノ有ニ仍テ制禁ノ令アリ、コレ共私鑄セルモノヽ類ナルカ

金銀圖錄續編　終

收米權上書

一

收米權上書

米穀權柄□官え被ㇾ爲ㇾ收候儀に付申上候書付

米權町人の手に落候由來

一　往年大坂町人淀屋源右衞門、依ㇾ願諸家之廻米引請商買仕候に付諸方米商人共相集り、源右衞門濱先にて賣買仕、尤諸方廻米引請御免之御書物頂戴仕居候趣、源右衞門子故庵孫辰五郎に至り、身代闕所被ㇾ仰付ㇾ右御書物も被ㇾ召上ㇾ候段申傳候、其後は米商人共堂島藪陰にして竊に米商買仕、町奉行組の者通行仕節は、皆々藪之内え隱れ候故、世に虎市と唱候由、其後追々盛に相成、備前屋權兵衞・柴屋長左衞門と申者工夫仕、正米商内計にては、賣繫買繫等之商内も自由に不ㇾ相成ㇾ迚、建物米と申ものを立、限月限日相定、右日限迄之内延賣と申事を相始、夫より限月限日迄は振合相對にて濟來候處、追々盛に相成、人數夥敷集り、振合相對にては難ㇾ濟に付、支配人定置、賃銀を以支配爲ㇾ仕候、則唯今の遣來(ヤリクリ)兩替と唱候ものに御座候、尤延賣買の儀は公邊之聞を恐れ、遣來兩替屋の帳面には、正銀正切手出入の姿に仕支配銀を步銀と名付、壹貫目に何程と相定め取引仕來候、然所享保六年辛丑に至り年來米穀高直に付、米商人共彌不都束の取計仕候に付、閏七月二十五日、町奉行より左之通申渡有ㇾ之

一　藏元の米を晦日限り賣渡、此外延賣仕間敷旨申渡候所、米仲買共三歩一程代銀を渡し置、約束の日限を延し、右敷銀に利足加へ、其手形を順々に賣付候間、一日の内に壹枚の手形を數十人の手に渡し、米高直に成、且又藏元に無㆑之米を、先手形を賣渡候儀も有㆑之旨相聞候に付、兼て藏元の銘々え、ヶ樣の儀爲㆑仕間敷旨、前々より申渡證文取置候條、米買候町人え此旨堅爲㆓相守㆒可㆑申事

一　米買〆の儀は先規より停止の事、若藏元の入札米を買候もの米高に成候迄は、其儘藏に預ヶ置、高直に成候節賣出候者於㆑有㆑之は、買〆同前の仕形に候間、遂㆓吟味㆒急度可㆓申付㆒事

享保六年丑閏七月二十五日　安房　飛驒

右之通申渡有㆑之候得共、兎角不㆓相止㆒趣に付、八月二十六日、堂島立會の場所に捕手差向、仲買六七人召捕、夫より相場の立會相止、右之者共北條安房守殿御役所呼出、吟味有㆑之、右の內紙屋治兵衛・高田治右衛門兩人は老年の者故、委細可㆓申立㆒段申渡、兩人申立候は、相場は淀屋源右衛門蒙㆓御免㆒、御朱印頂戴仕候由に付、淀屋橋にて數年立會賣買仕候所、辰五郎闕所被㆓仰付㆒候砌、右御朱印も被㆓召上㆒候由傳來り候、其後堂島新地出來仕候節、場所繁昌の爲米市場引移、年々懸引の爲め延賣買相始候儀にて、不實と申儀毛頭無㆑之、正路の商內に相違無㆓御座㆒候段申立候得共、更取用無㆑之、其後又々呼出、安房守殿・飛驒守殿立會にて、淀屋源右衛門え米相場御朱印被㆓下置㆒候儀決而無㆑之、正米賣買は格別、以來延賣買堅停止申付候間、其旨相心得可㆑申、此度は急度叱り置旨申渡、是より延商內相止

候處、翌七年壬寅二月より、忍候て少々宛賣買仕候處、同四月三四人召捕、御停止の儀猥に相破候段、不屆迚闕所被ニ仰付一猶左之通申渡有レ之候

一　去る年不實の米はた商いたし候者吟味の上御仕置申付候處、于レ今密々相集り商內致し候者も有レ之其外の商買も不實の仕形にて相集り候を、町人共見遁しに致し候趣相聞不屆に候、此以後右の商買致し候者有レ之ば、町人共見付次第急度召連可レ來、ゆるがせに致し候はゞ、年寄町人共可レ爲ニ越度一候

享保七年寅七月　　安房
　　　　　　　　　飛驒

依レ之帳合延商內の博奕不實の所業必至と相止候、兩奉行の取計誠に至正至當の儀と奉レ存候、翌八年癸卯八月三日、左の通申渡有レ之

一　今度米不實商內いたし候者共遂ニ吟味一、名々町人え預け、家財相改候處、相除候樣に相見へ不屆に付、右之者共より金銀帳面は不レ及レ申、諸道具一色にても預り候者有レ之候はゞ、來る二十日迄に可ニ申出一、其科をゆるすべし、若かくし置、此方より吟味の上相知候はゞ、急度可レ令ニ沙汰一候

享保八年卯八月

翌九年辰二月、從ニ江戶表一御觸左之通

一　米穀去年より段々下直に候處、其外諸道具直段高直に付諸人及ニ難儀一候、酒・酢・醬油・味噌類は米穀を以造り致候物に候得ば、米直段に可レ准儀は勿論に候、且又竹木・炭薪・鹽・油・織物等一切の賣買

物、或諸色之職人に至迄、直に米穀を以作り不レ出といへ共、工手間人夫の賃銀、何れも飯米を本として積り立候事故候得ば、穀物の直段准じ下直に可二賣出一道理候

右の段去年よりも可二申付一候得共、いまだ間も無レ之事故不レ及二其儀一に、當年に至りても、前々之通直段之位を以て致二商内一候儀、過分の利潤を心懸ケ間敷事に候條、此以後直段引下げ可レ申候、如レ斯申聞せ、其儀無レ之においては、三月晦日より其筋え遂二詮議一、急度曲事申付候、件之趣國々諸々にも相觸候間、諸色仕出し候處より元直段引下げ不レ申候はゞ、其手前の商賣人可二訴出一候、若打捨置候はゞ、是又曲事可レ爲もの也

享保九年辰二月

右之通從二江戸一被二仰付一條、三鄉町中可二相觸一もの也　飛驒

然所奸商共相巧み、其後何となく延商内千石迄は不レ苦趣風說爲レ仕、同九年甲辰正月より少々宛相始可レ申と相談仕罷在候內、三月廿一日大阪大火にて、殊の外混雜仕候に付、人氣靜り候を見定め、五月前津輕米を建米に定め賣買仕候得共、丑寅兩年御咎間も無レ之事故、仲買共危み居候處、同七月左の通り奉行所より申渡有レ之

一　大坂町中米賣買に付市を立候儀、幷手形を以先々商内致候事、停止之旨度々申渡候、彌以違背仕間敷事

一　大名衆に米を何程買候共、早速藏より出し可㆓相渡㆒候、買候日より日數三十日の外於㆓相延㆒は、双方共可㆑爲㆓曲事㆒候

但し賣方に其藏米肝煎候町人、藏米之肝煎無㆑之ば、其藏屋敷名代之町人可㆑爲㆓曲事㆒、其意を以藏屋敷之侍中へも可㆓相斷㆒事

一　賣米藏出之時分、其買主へ可㆓相渡㆒、餘人手形を以持來候とも渡間敷事

一　問屋を賴米を買、其米江戶へ廻るに於ては、早速船積可㆑致、其外京・伏見・奈良他所の者米を買候も、右同前相渡候宿々へ拘置間敷事

一　侍方藏屋敷の外、於㆓町屋㆒其賣買之儀、米を見屆可㆓相究㆒候、受取候日數右同前可㆑爲事

右之條々藏元の米を賣候町人同名代町人、其外自分に致㆓商賣㆒候米屋中此旨を可㆓相守㆒、若違背之輩於㆑有㆑之は、本人は其時之依㆑品、或は死罪、或は籠舍・幷手代之者相背候共、其咎可㆑懸㆓主人㆒、違背候五人組・年寄、米屋にて無㆑之とも可㆑爲㆓曲事㆒也

享保九年甲辰九月　日向
飛驒

依て諸家藏元名代之町人、米問屋・同仲買、幷五人組・年寄請證文差出申候、同十年乙巳十一月、紀伊國屋源兵衞・大坂屋利右衞門・野村屋甚兵衞、大坂にて米會所取立度段願濟の上、同十一年丙午より相始候所、無㆑程相止み、此三人例の奸商にて、表向御爲筋申立、內實米權を專らに仕度取巧み願出候儀と

被ㇾ存候、尤一旦は江戸・大阪の米權を右三人の手に握り申候、其節江戸表之御觸

一　今度江戸本材木町紀伊國屋源兵衛・同所大坂屋利右衛門・北新堀野村屋甚兵衛買米の儀相願、吟味の上左之通申渡候

一　於₂江戸幷大坂₁高何程にても右三人之者共、自分金銀を以買取候筈に候、尤脇々米商買人共は一切相障不ㇾ申趣申付候

一　江戸淺草御藏拜借申付、右買米詰置、尤賣拂の儀勝手次第申付候

一　大坂御城米江戸表へ御廻米の內、十萬俵爲ㇾ替の儀申付候、上納之儀は於₂江戸₁淺草御藏へ相納候筈に候

一　今度於₂大坂₁米相場相立候場所差免候、右場所へ仲買共寄合賣買可ㇾ仕候、此外脇へ寄集り相場相立候儀、堅無用可ㇾ仕候

但諸國より入津之賣米、米問屋共方にて、其時の相場を以賣買仕候儀は、唯今迄の通可ㇾ仕候

一　西國・北國筋、其外諸大名大坂着米入札の節、掃前看板出し候分は、落札買人より一石に付銀貳分宛口錢、右三人之者共方へ請取の內半分は、仲買共方へ令₂割符₁候筈に候間、落札の買人ども、其段相心得無ㇾ滯可₂差出₁候　附り諸國入津の賣米、町人賣買の米より一切口錢取上不ㇾ申筈候

右之通申付候間、三鄕町人米商買の者共令₂承知₁、差免候場所の猥無ㇾ之樣に可₂觸出₁もの也

巳十一月

右之通被ニ仰付ー候旨、江戸町奉行中より申來候間、三郷町中可ニ相觸出ー候

享保十年巳十一月九日　日向
飛驒

右之通被ニ仰渡ー、既に御弛み付候病源と奉ㇾ存候、安房守殿・飛驒守殿維持被ㇾ致候年來の心労水の泡と相成申候、同十二年丁未、江戸町人川口茂右衛門・中川清三郎・久保田孫兵衛と申者又々願立、米會所組立候得共、故障有ㇾ之御差留に相成、（大坂御觸面、大體紀伊國屋源兵衛願濟の節と同樣に付略ㇾ之）同十四年乙酉、江戸町人冬木善太郎・杉田新兵衛・伊勢屋萬右衛門・柿木平四郎・冬木彦六願立、同十五年庚戌より北濱一町目にて米會所組立候處、是又無ㇾ程相止、（御觸書略ㇾ之、此外前後數度之御觸書、夫々寫置候得共爰略申候）同十五年庚戌三月、仲買の內田邊屋藤左衛門・尼ヶ崎屋藤兵衛・加島屋清兵衛三人爲ニ惣代ー出府仕、大坂米商內御免の儀願立、尤加州家江立入、金子借用等仕候由、（空米帳合商內始て御免の節、果して加賀米を以て建物と仕候）此時大岡越前守殿懸りにて、評定所に於て御糺之上、同八月、大坂米商內の儀、古來仕米の法を以流相場商內、諸國商人にも、幷大坂米仲ヶ間共、勝手次第手廣賣買仕候樣被ニ仰渡ー、其節從ニ江戸表ー御觸之趣左之通

一　近來米穀相場の儀に付願有ㇾ之、依て米商人共無ニ覺束ー存候、相場之障に相成候樣相聞候に付、向後右願一切不ニ取上ー筈に候間、大坂米商內の儀は、古來より致來候仕方を以流相場商內、諸國商人共、幷大坂中買共勝手次第に可ㇾ仕候、兩替の儀は有來候五十軒除ㇾ之兩替屋取計、相對次第敷銀其外相場

差引勘定等の儀、前々之通致㆓商內㆒、隨分手廣く、少々にても米商內の障に成候儀無㆑之樣可㆑致候、畢竟米相場宜敷成候爲の事に候間、其趣を以心次第商內可㆑仕候、尤冬木善太郎米會所の儀相止候、但古來より有來候儀は構無㆑之、若古來無㆑之儀を新規に拵出し、古法と申紛敷有㆑之候はゞ、詮議の上急度曲事に可㆓申付㆒候、米商內に付ては公事訴訟とも、古來の通不㆓取上㆒候、然共有來の外に於ては格別に付、惣て米仲買共自分の趣意を以、猥に仲買の騷敷儀無㆑之樣可㆑致候

右之通從㆓江戶表㆒より被㆓仰出㆒候間、三鄕町中可㆓相觸㆒もの也

戌八月　　日向
　　　　　淡路

右松平日向守殿・稻垣淡路守殿御役中、享保十五年戌八月十三日事之由、爰に至り奸商共積年相巧候奸謀成就仕、再挽回すべからざるに至候、是より一同聊恐れ憚る所無㆑之、隨意氣儘に賣買相始候、其頃以來米直段追々下落仕候に付、同十六年辛亥十月、仲買之內加島屋久右衛門・舛屋平作・津輕屋彥兵衛・俵屋喜兵衛・久寶寺屋太兵衛右五人の者、奉行所へ呼出、米直段引立方有㆑之候得ば可㆓申立㆒旨被㆓申渡㆒候に付、五人の者、申立候は、仲買一統相談の上人數相定、諸家拂米之節、入札を以買請候はゞ米締宜敷、直段も可㆓引立㆒旨申立候に付、江戶表へ伺之上、同十二月大坂米仲買株御免相成、株札㊑如㆑此燒印被㆑居、四百五十二枚相渡、同十七年壬子四月、五百三十八枚、同二十年乙卯七月、三百六十二枚、都合千三百五十二枚相渡、加島屋久右衛門外四人米年寄被㆓仰付㆒、上下脇差は訴訟御免、猶又遣來兩替

も同年願立、仲ヶ間五十軒御免に相成、印札御渡、仲買株札も、其後寛保五年辛酉松浦河内守殿・佐々美濃守殿御役中、囲焼印如レ此相改、追々引立有レ之に付、此時に至り奸商共の悪計全備大成仕、公然として萬世大易米權を握り候

米權□官え可レ被レ爲レ收論

一　米穀糶糴昂低之權柄は官にて御握り可レ被レ爲レ在筈之所、百年以來大坂奸商共の手に落候は苦々敷儀に有レ之、右來歴は前條に述候通りに御座候、惣て和漢共古來流弊之不レ可レ救もの、此儀に類するもの餘多有レ之候得共、かく迄奸商共の術中に陷り候は、實に識者の流涕長大息に御座候、夫より大坂の富商、大賈其富諸侯に齊しく、同所の諺にも、辰巳屋久右衛門を細川家と同じ身代と申候程の勢にて、天下の富大坂に歸し、錦衣玉食の豪家奢、彼等の上は有レ之間敷候、松平新太郎公被レ申候通、四民之長たる諸侯之身として、四民最下なる商賈を仰で國用を足し、屈膝して彼の意に投ずるは口惜次第に御座候、中川善太痛快に流弊を論破仕候得共、米商ひ一條に於ては、大坂を賑はし候に組し候歟、大權を官に收給ふの條に至りては、靴を隔て搔くが如くに御座候、既に白川源公大坂御巡視の節、町人共米權を弄し候を如何に思召、右御收被レ爲レ在候御仕法、中井善太え御尋の所、同人曖昧たる御答いたし候由承り申候、當今未曾有之御改革故、此時に當りて米權を官に爲レ收、奸商の勢を御挫き無レ之ては、重來の期は有レ之間敷と奉レ存候

一　米權官ヘ被ν爲ν收候はゞ、非常御備は勿論、常平倉・社倉之良法に依り、斟酌損益之御法被ν爲ν立、億萬之人民を救せ給ふ事も思召の儘に可ニ相成一、凶年饑歲にても餓莩無ν之、連年豐熟仕候ても、米價一石に付銀四拾匁位より下落仕間敷、饑饉にても銀百匁迄には上り申間敷、奸商利を射る事能はず、武家方並農民小前町人共におゐては、無ν限大幸と奉ν存候、是迄米權商賈の手に有ν之候ては、奸商ども聊の風雨・陰晴にも、心儘に價を高下し、一時に大金を得、其餘毒は武家方小前並末々にて請る事なり、たとへば町人の內、持正米一萬石之處、五萬石之空米手形賣出し大利を得、翌春相場下落之節、右之切手買戾し、又高價之節切手賣出し申候、或は有米を匿し置、種々の詐術至らざる所無ニ御座一候、既に未年・酉年饑饉之節、米一石に付銀三百匁に至り候處、酉年稻作宜敷を見込、未新穀出來不ν仕內、米穀諸方より持出し、米價大下落仕候、有高も日本國中平均之所、米穀十分に貯有ν之段分明に御座候、且米一石に付銀三百匁に至り候は、全奸商共の所爲たる事瞭然に御座候、左候はゞ天下之人民益鼓腹擊壤に至り太平を樂候は、此御法の外有ν之間敷奉ν存候

一　大坂堂島の儀は不實商と唱へ、賣櫫・買櫫・流相場・帳合空米・切手遣米等天下之大博奕に御座候、小博奕は嚴重に被ν禁、大博奕を其儘被ニ差置一候は、酒狂之小科を罰し、君父を弑し候大逆人を御赦しν被ν置候と、同日の論には當り不ν申哉、且堂島の空手遊民數千人のものは、其堂島の內並新地等の娼婦に萬倍仕候、娼婦は御差留に相成、堂島の遊民は于ν今依然と仕候は、一事兩樣に可ν有ニ御座一、殊に堂

島遊民の內、狀屋と唱へ候ものは、諸國へ風說種々申觸、大政を評論し、人心を惑亂爲ㇾ致候ものにて、聖王の誅をまぬかれざる者に御座候、此外堂島の大害可ㇾ惡儀は難㆓認盡㆒候、前條之舊弊を一掃し、米權官の物と相成候はゞ、御名目も正敷、且內實御益莫大之儀にて、五十萬石之新田出來仕候にも優り申候、左候はゞ名實兩得、千載の快事と奉ㇾ存候

米權被ㇾ爲ㇾ收候に付、諸家ゑ被㆓仰渡㆒振大略

一　五穀は人命生死の關係する所にて、國用・軍用之第一、億萬の人民を撫育するも、天下・國家を鎭護するも、皆此力に依り候は申迄も無ㇾ之、元來商賈の手に可ㇾ積貯品に無ㇾ之候、天下の米權商賈の手に歸し候てより、聊の風雨・陰晴に依て、恣に米價を高低し、狡黠の致方を以大利を得、小前末々の者にも難澁を受候は、不便成儀に有ㇾ之、殊に大阪堂島の儀は、大政御取締にも關り、捨置がたくに付、此度漢土鹽鐵の法に擬し、米權官ゑ被ㇾ收、商賈の賣買禁じ、豐凶共米價格別の高下無ㇾ之樣、常平倉の遺法に依て、斟酌損益の御仕法被ㇾ立、普く天下の蒼生被ㇾ爲ㇾ救度思召に候間、諸家爲㆓金銀融通㆒、右穀物は如何程にても御買入に相成候間、廻船都合により、江戸並に大阪ゑ相廻し可ㇾ申事

一　諸家勝手方融通都合により、願の向ゑは御買入金先渡にも可㆓被㆓仰付㆒、惣て諸家の都合の儀相成候樣に御仕法可ㇾ被ㇾ立候事

同方ゑ被㆓仰渡㆒振大略

一　天下之大寶一日も闕くべからざるものは、米穀の上に出るものあらず、此米穀は粒々皆民の膏血に候へば、國用・軍糧の手當は勿論、平日の糶糴も輕易に致すべきものにあらず、素より町人・商賈の輩可㆑取扱㆑品に無㆑之候、然處積年の流弊にて、米權は町人の手に歸し、聊の風雨・陰晴等に依りても、心儘に價を高下し、民の膏血を以大利を心懸、殊に大阪堂島米市場の儀は、往年淀屋源右衛門淀屋橋に於て、諸家廻米引請商內致、孫辰五郎代不埒有㆑之に付、身代闕所被㆓仰付㆒、其後忍候て米商內不正の儀いたし候者、或は被㆓召捕㆒、或闕所被㆓仰付㆒、享保度町奉行所より毎々觸有㆑之事に候、其後享保戌年依㆑願米商內手廣に可㆑致樣被㆓仰渡㆒候迚、不實不正博奕同樣の商內被㆓差免㆒候譯には無㆑之候、然る處種種の奸詐惡弊年々に增長し、是迄の姿にては奸商の富む者は益富、貧しき者は益貧しく、小前末々難澁いたし、畢竟億兆の人民生死の係る所に候へば難㆓取捨置㆒、此度天下の人民普く御救、豐凶とも米價格別の高下無㆑之樣被㆑遊度、難㆑有御仁慈を以唐土糴糶の法に擬し、御仕法被㆑爲㆑立候間、下々にて飯米の外、米穀取扱候儀堅く令㆓停止㆒候

一　町人共飯米の儀一町宛組合、高何程と可㆓申出㆒、一ヶ年兩度にも　又々三度にも御拂可㆑有㆑之候

一　町人小前末々、當日限小買致し候者は、穀屋より可㆓買取㆒事

一　穀屋の儀は、是迄の通り勝手に商買可㆑致、尤賣出し先凡人別見積、御拂米可㆑有㆑之事

一　穀屋共店方小賣直段は、其時々御役所より申渡可㆑有㆑之事

一　年來米相場致渡世候遊民共、早々良民に立戻り外商買可ㇾ致、三ヶ月相立候ても、是迄の姿に罷在ものは、召捕吟味可ㇾ申付ㇾ事

右之條々致ㇾ違背ㇾ、或種々の故障、其外浮說等申唱候者は、其品に寄り急度御仕置可ㇾ被ㇾ仰付ㇾもの也

大阪表出米、並御益凡積

大阪表一ヶ年諸國出米高

一　凡米百三十萬石　　但中國・西國・北國より積立米、冬十一月頃より翌年七月頃迄

此代金百三十萬兩　　但平均一石に付金一兩替

大阪表一ヶ年御益金高

一　金十三萬兩　　但是御拂米御利分、平均壹割と見込

右之外江戸表之出米石數は夥敷儀に可ㇾ有ㇾ之候得共、江戸表の儀は篤と不ㇾ相辨ㇾに付除ㇾ之、其外京都え爲ㇾ登米一ヶ年分凡四十萬石、內大阪より爲ㇾ登米四分通も可ㇾ有ㇾ之歟、其外大津・兵庫・伏見・堺・奈良、いづれも御益は大阪に准じ申候

右大阪表御買米御手當金、凡百萬兩位御用意可ㇾ有ㇾ之所、拾萬兩にて相辨じ候御仕法相考、其外御仕法眼目の處、大略相考罷在候得共、是は御尋の上可ㇾ申上ㇾ候

附　錄

一　當時の急務は府庫を充實するに可レ有レ之と奉レ存候、一概に論じ候得ば、是者大學の本文に戾馳仕、末を務るの儀も起り可レ申候得共、其府庫充實不レ仕時は、御仁慈の御政事も難レ被レ施、下々に於も仰事俯養に不足有レ之候ては、風俗立直候場には至るまじく、書經・論孟に說く所、食足りて而後教を施し、管子の衣食足りて禮節を知ると申所に可レ有レ之歟、堯舜・孔孟の經綸も此外有レ之間敷と奉レ存候、然し收斂を以充實仕、大桀小桀に相成候ては御失德の儀に付、米權御收を至策と奉レ存候、右御益にて府財充實仕候得ば金銀の位能、御吹替御座候儀も、其外諸事御都合に可二相成一奉レ存候

一　御貸付の儀は逐年大弊を生じ、其害は私學友京都町奉行組與力平塚表次郎著述之鬻貸私議に論じ盡し申候、元來武家金銀貸付出入は、御取上無レ之段被二仰出一も有レ之、武家之貸付を被レ禁、官にて御貸付有レ之候は一事兩樣奉レ存候、（御手當筋御貸付之儀、御失體に不二相成一候御仕法愚考有レ之）且遠國に至りては尤等閑に相成、元金も御貸損に相成、利金も滯り、證文と帳面は依然たれども、名有て實なく、却て罪人を生じ候媒に付、可二相成一は一切御停廢有二御座一度、畢竟御貸付御益は、米權御益の十分の一にも至り申間敷と奉レ存候

一　馬喰所御貸付、其外諸國御貸付、一切御停廢有レ之候はゞ、是迄右利金を以年々御渡しに成來候分は、米權御益にて御渡有レ之可レ然奉レ存候

一　御代官所御貸付御差留、社倉之法にて、支配所內手當仕候樣被二仰付一度、此儀愚考も御座候、但し（御代官所御貸付流弊等も愚論御座候）

一　大阪町人共文化度御用金米御下ゲ戻無レ之分、米權御益にて御渡可レ然奉レ存候、但米權御收之儀被レ爲レ行候はゞ、此度御用金に付建議仕度御座候

一　大阪金銀錢相場之儀日々相狂ひ、是又奸商共一時大利を得、外々難澁仕、其害莫大に御座候、たとへば中國・西國御代官所より銀納の節、手附手代銀納荷物大阪着仕候と、直樣銀相場引上ゲ、銀納相濟候へば、如レ元下落仕候、是は御代官所より金子持參、大阪にて銀子買入上納仕候故之儀に有レ之、總て右に准じ候惡弊有レ之、其上相場使と唱へ候米金銀相場にて、諸國へ往來の飛脚數百人有レ之、皆不益のものに御座候間、江戶同樣金銀幷錢等の位相定り候樣奉レ存候此外流弊數ヶ條申上度儀に御座候

一　此度御料所御改革檢田之儀、御沙汰止に被二仰出一、誠に難レ有御美意と乍レ恐奉二感服一候、右爲二御用一罷出候御勘定方一統御引取の上、御徒目付の內御人撰にて、左のヶ條を以御料所巡見仕、三ヶ月位陣屋許に淹留仕、支配所の內の儀細々內糺仕、當時大阪詰御徒目付勤方同樣、如何敷儀は御代官え談じ、夫々取計、或は白洲等へ立合、又は牢屋等巡見視仕、下情上達仕候樣相成申候はゞ、御美意下々に行渡り、無二此上一大仁と奉レ存候、右五ヶ條は

一　問二民瘼輕重一附聽二滯獄一　是は民之疾苦は勿論、奸民・良民を區別し、或は先前支配よりの滯獄も有レ之、右等仔細に糺候樣

一　勸二豪强一　是は村々にて富豪の者、或は米穀其外の品々買〆、又高步の金銀貸付、貧民を苦しめ、

其身奢侈を極め、窮民に賑恤不ㇾ仕もの數多有ㇾ之、其品により或は御仕置、又は說諭して、前書社倉の元積米等爲ニ差出一候樣

一 戮ニ贓吏一 是は御改正後も遠境僻邑にては、手代手附威福を恣にし、賄賂に依て法を進退し、良民茶毒に苦候、右等仔細に糺候樣

一 罰ニ惰農一 是は村々にて惰農のもの、博奕其外三味線等を玩び、或は寄合酒興に長じ、風化を亂し候者有ㇾ之、右等仔細に糺候樣

一 賞ニ孝悌・力田一 是は孝悌力田のものは、御代官より申立候得共、種々手數懸り遲緩に至り候間、御徒目付場所にて直に御稱美申渡候樣

右之通相成候はゞ、御料所一新仕、私領の手本とも可ニ相成一、是迄私領は取締宜敷、御料所は風化甚相亂候次第は、拙著の隱居放言に粗相認候通に御座候、何卒御料所一新仕候樣奉ニ默禱一候

右愚存之趣大略書取、不ㇾ顧ㇾ憚奉ニ申上一候、以上

卯之九月

收米權上書 終

當今金錢米布江水通價考

當今金錢米布江水通價考

貴賤品ありといへども、米穀・布帛・金錢の資一日もかぐべからざる至寶なり、米穀・布帛の有無を通ずるには値をもつてす、値となすものは金錢也、値の低昂時に行はれて均しからず、其行はれ來たる處古人の書策にあり、然れども旨遠く言たかくして、吾儕の急に備ひ難し、余晩學孤陋、志もつとも褊小、其企拙く淺しといへども、ちかく天正以往當今にいたる値の低昂幾許を、あつめんと欲すれども、管見大をうかゞひがたく、たまたま多門院日記に載る天正中の値にもとづき、金錢の事は國產金銀錢譜、及び金銀圖錄等によりてはしをうかゞひ、又江戶・水戶御藏御直段付帳によりて私に其價を平均し、併せて二百六七十年間の大概をみるたよりとす、吾にひとしき志の農商あらば、此記をもつて江戶にちかきもの、水戶にちかきもの、時の値を折衷せば、庶幾は其處々の價の中をしり、各業を勵む一助ともなさば、なるべきもの成べし

○續日本紀大寶元年に、「先レ是遣二三百首五瀬於對馬島一、冶二成金一」を始とし、「天平二十一年二月、陸奧國始貢二黃金一」是我國黃金始て出る證と、寶貨事略にいはれたり、銅錢を用る始は白鳳十三年に始、和銅元年我國始て銅を出す、十月の詔曰、「夫錢之爲レ用、所下以通二貨財一貿中易有無上也、當今百姓尚迷二習

俗ハ未ㇾ解二其理一」とみゆ、此時人情未錢を喜ばざる事とみえしに、「同五年閏十月、諸國所ㇾ送調庸等物以ㇾ錢換、宜下以ㇾ錢五文ㇾ准中布一常上」此時人錢の利をしり、濫惡の錢を用て罪を被るやうにみゆ、扨一常は尋の倍なるや、又丈に通ずるや、如何しらずといへども、和銅を距る事こゝに一千百有餘年、一年一錢づゝ上りとさは今の（一反二十六尺値十三文のもの）價一貫六百三十文也、凡値のうつる大旨如ㇾ此、以下當今の事におよぶ、併滄海の一滴なり（和銅錢出テモ時人其利ヲシラヌ内ハ通用セズ、利ヲシルヤ忽罪ヲオカスモノ出ヅ、近ク永祿中始テ鐵炮ワタル、人オソレモシツベシ、然レドモ戰ニ利アルヲシルヤ、忽鐵炮天下ニミチタリ、今金錢ノ利ヲシルモノ忽利ヲアツムルナリ、誰モ利ヲ好マザルハナケレドモ、今ノ利ヲ知ル者ハ別ニアルベシ）

○金銀圖錄云、切金銀とは、鈑金を入用程きつて遣ひしなり、是をきり遣といふ

同云、金幾枚銀幾枚といふ事、愚がみる處は信長公の時を始めとす、是黃金大判丁銀也、其金一枚は大概重四十匁餘也

同云、足利の時金銀一兩の重各四匁五分也、文明の末に至て、金は五匁を一兩とす、今も古金は一兩五匁なり

同云、銀は四匁五分を一兩とするものあり、天正中に金一兩といふもの四五匁にあたるなり、又小判金一兩を銀五十匁と定められし事は、慶長の令にみゆ（老談一言記、銀十枚ヲ黃金十兩トス、大判一枚ヲ銀四百三十目ニ通用ス、高下ハ兩替所ノ相場也○草茅危言、昔ハ四角ナルノベ金ニテキリ遣也）

○國家金銀錢譜に云、慶長六年大判重四十四匁程、慶長小判重四匁八分、方金一分重一匁二分

謹で愚按、文明金一兩の重五匁は、十合量法の小兩にかなふなり、慶長の制四匁八分は正味なり、古量九合六勺法を以除レ之得ニ五匁一、是文明の制に相同じ

同云、白銀一兩重四匁三分、十兩爲ニ一枚一

謹愚按、白銀五十七匁六分を金一兩に充つ、古量法九匁六分を以除レ之得ニ六十匁一、よつて關東通用銀六十匁を金一兩に充つ、金重一匁に白銀十九匁にあたる也、白銀正味四匁三分を、古量法九匁六分を以除レ之四十五匁を得たり、是を金三分に換るなり 編年集成云、天正十九年關八州通用ノ爲メ、後藤庄三郎光次ニ命ジテ、黃金ヲ以テ大小ノ形ヲ定鑄サセラル、大判ハ四十八匁ヲ一枚トス、室町家ノ流例也、玉露證話・官中秘策辨云、光次判京・江戸・佐渡ニテ吹シ大法十二兩替ノ定メ也、駿河判ハ金位オトル由、信按、十二兩ハ一兩四匁ヲ四十八匁也、大判一枚也、一兩ハ四匁八分ニアタル

同云、大判面に筵目なく、表裏極印二重輪の中に桐、重四十四匁三分、天正十六年に造ともいふ、大坂一分光次の極印あるは、天正の頃通用する成るべし、重一匁一分九厘

同云、文字元文元六月十五日令 小鈑一兩三匁六分は、慶長大鈑一枚を十枚に直したるなり 寶貨事略、天正十六年、造ニ黃金大判小判一天正十三年ノ秋、金賦トテ大小名金銀ヲ玉フ、金五千兩、銀三萬枚、是ハ古物也、寶貨事略ニ、慶長六年ノ後大判・小判・一分判・丁銀・豆板制改ル、金銀圖錄、元祿八年九月、元字金大判重四十四匁二分、享保十年十二月朔停止

謹按、慶長大鈑一枚は重三十六匁、是七兩二分の秤目也、乘穗錄云、永祿十二年三月十六日、織田彈正忠秀より加藤紀左衞門に賜る證文、金子十兩代十五貫文、銀子十兩代二貫文としるせり、當時の價をしるべしと

按に、十兩は各一枚と同意なるべし、扨は銀七兩二分をもつて金一枚に換るなり、多門院日記に、

金一枚と記するものは、金七兩二分と解すべきなり

秉穂錄、金子十兩の錢十五貫文は一兩に一貫文にあたる、是永樂錢並開元宣化等のよき錢成べし

鹽尻云、天正十年三月十一日、平信長森蘭丸を奉行として兩宮修造の時、永樂錢三千貫文を下行せらる、三千貫文は當時三萬石にあたるといふは、田一町歩を一貫文に充たる錢位にて、當時通商に行はれし永樂錢と同じきにはあらず、今前代の錢をいふもの、貫を古顯錢と稱せしと、永樂錢と鐚錢との別を解さず惑もの多し、通商の錢の事蹟はさしおき、ちかくみる處、永正五年八月七日に撰レ錢事、近年令レ超二過先規一之條、爲レ世爲レ人不レ可レ不レ誡、所レ詮於二古今渡唐錢一者、悉以可レ取二用之一、次惡錢賣買儀停止事」など、建武式目追加にみえたり、當時錢少き中にも、利に耽るもの其制にかなはざる錢を賣買したるゆゑ、金一兩分に六貫以上十四五貫に及ぶもありたるとみえたり、草廬雜談に、中國治亂記を引て、永樂錢渡來の事をいひ、天文の末北條氏此錢を關東一統他錢を雜ひず通用さする由にて、他錢をば上方へのぼせ、たまたまあるをば京錢と申せし由、御當代慶長九年正月より悉永樂錢を御用にて、鐚は四錢以て永樂一錢に代らる、下民錢の善惡をえらみむづかしければ、慶長十一年十二月八日より永樂は停止せらるとも、又四家合考には、永樂錢天正十九年に秀て鐚にまさり、五十七年めに鐚また秀とも、又慶長十九年に永樂錢を止、京錢を用ともあれど、慶長十三年戊申十二月八日の令定に、永樂一貫文は鐚四貫文づゝの積りたるべし、但向後永樂錢は一切取あつか

ふべからず、金銀・錏錢をもつて可ㇾ取引ㇾ事、金子一兩は錏錢四貫文に可ㇾ取引ㇾ事、錢右六錢之外は、御藏へも納候間不ㇾ可ㇾ撰、金一分に一貫文可ㇾ爲ㇾ賣買ㇾ者也、」當時錢のやかましき大むねかくの如し、又永樂錢の事、天正八年八月、秀吉公より宇都宮彌三郎どのへ給る狀、「一　永樂錢事、金一枚に二十貫づゝ、びた錢永樂に三錢たるべき事」とあり、按に是金一兩に二貫六百六十六文、これに換る錏錢は八貫文にあたりたるなり

室町日記に、天文九年、米一石に付六匁三分五厘、兵庫の賣買如ㇾ此由、ひだや新左衞門申

按、六匁餘は銀成べし、若此時銀五十匁を金一兩に充たらば、此米金一兩に七石八斗

同記に、木綿一疋に付一匁六分七厘の賣買にて候、又一匁三分づゝのも有ㇾ之、云々

按に、金一兩に三十疋、一匁三分は三十八疋、但し此一疋は今の一反の意か、如何不ㇾ詳

多門院日記、天文十二年、米五斗、四百十一文

永祿十年、米一石、八百二十七文

按、此以下天正十七年十月朔日に、遣錢事かき候間、金一匁一分代一貫四百四十四文にうるとみゆ、是所ㇾ謂さり遣ひの金成べし、此金五匁にて金一兩にあたらば、此錢は六貫五百文、錏錢成べし、此錢八百二十七文に換る、金目六分三厘成べし、扨は此米金一兩に七石九斗、天文九年は永祿十年まで

で凡年歷三十年を隔つといへども、此間大概此値をもつて貴賤致たる事成べし

元龜三年、米三石八斗　銀一枚　按、銀一枚を金三分とみて、金一兩に五石

天正二年、米九石九斗　銀三枚　按、銀三枚は金二兩一分、金一兩に二石六斗二升

同七年、米三石七斗　銀三枚　按、金一兩に一石六斗四升、尤高價也、今の金勢に比せば、三斗三升致と意同じ、例せば天保八九年に似たるか

金銀圖錄に、銀一枚代錢十貫五百七十文九分、按、金一兩に十四貫九十四文、今の小判一兩に比せば、此錢八貫四百五十文餘、是今の錢より一貫四百文餘賤し、扨は至極濫惡の鐚錢成べし

天正八年、米二十八石五斗　金一枚　按、金一兩に三石八斗

同九年、米五十石　金一枚　按、金一兩に六石六斗六升

金銀圖錄云、錢百十六貫六百六十六文六分と、是一兩に十五貫五百五十文五分、尤安直也

同十年、米五石二斗　銀一枚　按、金一兩に六石九斗

同十一年、米三十六石　金一枚　按、金一兩に四石八斗

同十二年、米二十七石五斗　金一枚　按、金一兩に三石六斗六升

金銀圖錄云、錢六十四貫百六十六文六分、是は金一兩に八貫五百五十五文、此錢今の金に比せば五

貫百文餘、少しよき錢成べし

同十三年、米三十三石三斗　金一枚　按、金一兩に四石四斗四升

同十四年、米四石六斗　金一兩　按、是は金一枚に三十四石五斗

同十五年、米六十六石　金一枚　按、金一兩に八石八斗、是は天文・永祿より猶やすき今の金勢に比せば、今の金一兩に一石七斗六升、ちか頃文化二年・文政二年、此價に似たる事ありき

天正十六年、米十石五斗　金十匁　按、十匁は金二兩なるべし、然らば金一兩に五石二斗五升

同十月五日の條々、奈良中へ大納言殿より、金子一枚の代米四石づゝにて一萬石計町々へ借用、押て如此金は來年春可ㇾ取由也、不辨の衆手前御尤なり、返辨の時如何

金銀圖錄に、四石は四十石の誤かと、愚按に、いかさま當時の値にあたらぬ事ながら、强て推ㇾ之に、是は大納言殿より米一萬石計藏入なるを引當とし、通價四十石にては金二百五十文なれば、此十倍二千五百枚を押借同樣の御振舞としられたり、此記文押て如ㇾ此金は來年春可ㇾ取由、不辨の衆手前御尤などある、畢竟苛虐を譏りたるものなるべし

同十一月二十日に、古米一貫に七斗七升、今升にて買ふ

按、此前十月朔日に、遣銭事かき候間、金一匁一分を代一貫四百四十四文にうるといふに推せば、金一兩に六貫五百文にあたる、扨て此米金一兩に五石なり、今升の事、好古小錄に古量種々載たり、こゝに今升とあるは、今の九合六勺判の事か不レ詳、但慶長小判の制は此量による衡目にあまる、もつて推ときは、こゝにいふ今升は今の九合六勺入か、如何

以上天文十二癸卯より天正十七己丑まで四十六年間、大概平均金一兩に米六石八斗(今の金勢に比すれば一石三斗六升)にあたる、但是は遠く大和の國の事、此時關東の値いくばくせしや未しらずといへども、右もつて時勢のあらまし一端を窺ふ一助となるべきか

慶長・元和の米價、分田備考及び諸書、皆金一兩に米五六斗といふ、余が家藏の內、慶長八年より元和中の收納帳、大體金一兩に米五六石、籾は五斗入にて十九俵、又は二十俵、錢は金一兩に三貫二百文なり、余初甚疑ふ慶長十三年の令に、金一兩に四貫文と、然るに鄉里に行はる錢三貫二百文なり、おもふに、僻邑錢乏しき故如レ此かと、後に近頃舶來の籌海圖編(籌海圖編、明ノ隆慶六年ノ序有、本邦元龜三壬申ニ當ル、天正改元前一年也)をよみ侍るに、倭人の好む物をあげて、其中に錢の事あり、云、「倭不二自鑄一、但用二中國古錢一而已、每一千價銀四兩、若二福建私鑄新錢一、每一千價銀一兩二錢、唯用二永樂・開元二種一」と載す、よつて按るに、明の一兩は十匁にて、四兩は四十匁なり、本邦の銀四十八匁にあたり、永一貫に俵六十匁割にて直せば、永八百文となる、定令四貫文に直し三貫二百文、是明國より渡すよき錢一千の價なり、又福建等にて私に鑄たる錢

一千、價銀一兩二錢は本邦の銀十四匁、永に直し二百四十文、四貫文に直し九百六十文、是明の鐚錢一千の價なり、よつておもふ、當時當國僻邑金錢少きの時、兼て明より渡したるよき錢一千もつて金一兩位にあて、其價を三貫二百文とし、其錢は鐚錢一千九百六十文にあたるを用ひ、三貫二百文には百三十三錢三分三厘不足ゆゑ、此不足を足すに、今俗間にいふ輕目足しの法を用へたるものなるべし、傳へて今の收納の法永錢に、口永・小口永の法あるは此遺法、又九十六佰の法こゝに始るにはあらず、鎌倉時分の古文書に、目足錢の事まゝあり、是九十六佰とする錢の法なるべし、然るを貝原翁の說幷甲陽軍鑑等に、長尾意玄にはじまるよしをいふは、其昔をしらぬに似たり、扨當時よき錢一千を金一兩に充、其錢を愚按の如三貫二百文として用られたる事がいかゞ、證すべき物得ざれば、押張ては申兼る事なれども、大かたは當國かゝるすがたにて、九十六佰通用の路いよいよかたまり、今日に及ぶかと愚に思ふなり、また寬文の後まで收納割付帳に、永樂幾貫文、京錢幾貫文と農官吏書れたり、此永樂とは、右のよき錢一千を一貫に充たるが如きの稱にて、いにしへ稻に換たる頴錢とは別なれども、時勢とて其時唐より渡來のよき錢、いにしへの頴錢と同等の値におし移したる事なれば、相混じ傳へて、今は猶更此わかちなくなりたる也、京錢とは、小田原北條氏の時永樂錢を用へ、此外の錢はみな上み方へ登せたるゆゑしか稱し、また右一千九百六十にあたる如きの鐚錢を、時の下民は通用したる事とみえたり、傳へて今に至りては、永樂・京錢のわけも又しらず、收納官の下吏とても、古頴・新永・京錢の別を

しらず、たゞ法のみ守るもの多ければ、下民此わけしらぬは斷至極なり、昔錢少くて、人々よき錢・あしき錢の爭ひ喧しきをもつて、忝くも國家寛永通寳を鑄て民を賑し賜ふ、其鴻恩尤大也、寳貨事略には寛永十三年に江戸と近江國阪本兩所にて、寛永通寳を鑄始るとみゆれど、楓軒小宮山君の云、水戸の町人佐藤氏家記に、祖父佐藤新助元和中より鑄弊を以、寛永二年新錢鑄立願、江戸相濟錢座取立、ほどなく死す、父庄兵衞十四歳故姑相止、十二年又相願、江戸町人三久保屋甚右衞門と新錢元祖之旨願立相濟、水戸にて新錢大分造り出し、此後所々に錢座出とあるよし、是に從へば、寛永通寳新錢の始は水戸に興るなり、今に此鑄錢座の稻荷とて、余が住む官舍の東に稻荷の祠あるなり、錢座稻荷と稱て扨寛永錢の事は、藤貞幹子が寛永錢譜、鈴木重宜君が見行錢等にあり

國家金錢の制を謹で按るに、寛永通寳一錢其徑八分、重一錢、(今の九分六厘なり)十枚重二兩、百枚重二十兩、四千枚重八百兩、もつて金一兩に充つ、小判一枚重五錢、(今四匁八分)、官中秘策、玉露證談幷いふ、光次大人鈑十二兩を以造レ之と、十二兩は五十匁(今の四十八匁)なり、時に行はる、量方五寸、深二寸五分、一升(今の九合六勺)とす、此衡法五錢は、今の四匁八分を一兩にあてたるものなり、草茅雜談云、艮子の重十匁とは、時世の大一兩也、小兩にては二兩といふなり、是亦量の入にて輕重すべき制なり、宜旨量による、衡十錢は今の八匁、(小兩は四匁)古量は今の九匁六分(小兩四匁八分)なり、大小兩の稱は古制に從ふなり、扨寛永通寳四千枚の重八百兩と、一斗米の重

(今の九升六合入)宣旨量の衡目二十斤と相比す、今の十六斤、是遠く異邦漢の百斤とも亦相あたるものなり、漢書に云、黄金方寸價一斤と、國家の金八兩是にあたり、即米一合の重さなり、黄金八百兩は漢の黄金百斤也、(本邦の十斤にあたる、稻一束につく米なり)今の金にては千三百三十三兩なり、今の錢は七千、此衡目千四百兩もつて金一兩に充つるなり、時勢の差大旨かくの如し、(金一兩分の錢は、時に行ふ一斗米の重なるべし、今の七千は其實六千七百二十、これ米一斗八升六合の重にして、賤きこと八升六合、この錢二千七百二十文)今一斗ハ重サ五斤、四斗ノ重百斤也、宣旨量ハ五斗ヲ百斤也、稻十束米ノ重也

○玉滴隱見云、板倉周防守殿京師所司代の時天下飢饉、米一石銀八十匁

○田政考證云、寛永中米三石金一兩、同十八・十九凶作、巳午の餓死といふ是なり、同二十年金一兩に、籾八俵・米一石六斗八升　按に、今の金勢に比せば、金一兩に三斗三升五合、天保八酉年平均直段、金十兩に籾十六俵なるもの、これにあたるべし

○端亭漫錄云、寛永の末、木綿一反代六百文　按に、右と同時なるべし、今の世風に比せば、常時の六百文は三貫文の如し、天保丙申飢饉の時また如レ此

水戸の米價、寛永十八年辛巳より慶安二丑まで九ヶ年、平均金一兩に米二石一斗八升

此中正保二酉年、金十兩に籾百五十俵、同三戌百四十俵、是は金一兩に米三石七八斗以下天正八・同十二月ノ値ト同ジ、天正八ヨリ正保二マデ六十六年

同慶安三寅より萬治三亥まで十ヶ年、平均金一兩に米一石五斗

端亭漫錄云、慶安三年十二月二十八日、水戸吉田同心町飯田新右衛門殿御組足輕八郎兵衛女房、市日ゆゑ市へ出、木綿一反を百六十二文直にいたし代錢拂候處、市人の申に、百六十五文拂可ㇾ給と申に付、止めて買不ㇾ申由、今按るに、其差三錢なれども、強て是をとらず、世に錢少きことしられたり、此時の百六十二文は今の八百十文、三文は今の勢十五文の意なるべし、一反代八百文の木綿が壯歲の頃の常なりき、今は此一部に及ぶなり、其頃米は金一兩に一石前後のあたひと覺えぬ

江戸御藏直段平均、承應元より萬治二年まで、平均金一兩に一石七斗五升

水戸萬治三より寛文九酉まで一石七升

萬治三年、水戸米七斗、江戸一石六升

寛文元年、水戸米二石、江戸各直段一石三斗

同二年、江戸一石五斗八升、水戸錢四貫文、或三貫八百文

江戸平均（萬三より寛九まで）一石五升

水戸寛文十戌より延寶七未まで、平均一石四升、江戸同平均九斗五升、（延寶三年水戸米七斗五升、寛永十八より玆三十四年にして初高直あり）

水戸延寶八申より元祿二巳まで、平均一石一斗六升、天和元酉年、右同

江戸同平均一石四斗、元祿十子同、是より寶永二酉まで八年、大概同レ之、錢は一兩に四貫文餘

水戸元祿三午より同十二卯まで、平均一石七升、江戸同平均一石三升 寛文中余ガ曾祖父ノ父ナルモノ、養高祖ガ江戸ノ在ニ送ル狀傳ハル中ニ云、爰元市中ヲ尋候ヘ共、絹ノフンドシ買兼申候、重便ニ寛下シ可レ給トアリ、是其妻兄ナレバ也、ビンツケ油元結モコノトキ初テ用ユ、正德四年、水戸米金一兩ニ五斗、錢三貫四百文、此年五月十五日、金銀ノ品慶長ノ法ニ返サル

水戸同十三辰より寶永七午まで、平均八斗

端亭漫錄に、木綿一疋一貫二三百文とみゆ、疋は今の反の意か、當時の高直なるべし、江戸水戸米價の貴きを以推せば、此時木綿も不作せる物か如何、(寶永七年四月、元祿金通用止み、乾金と成る、慶長金一兩を二兩となされたり)

江戸同平均七斗九升

水戸正德元卯より享保五子まで、平均七斗三升

江戸同平均六斗五升

正德三年、水戸七斗八升、江戸六斗七升、享保元申、水戸四斗八升、江戸冬五斗、同二・三飢饉、水戸四斗二升、江戸三年の冬四斗五升、享保五年、水戸一石三斗

水戸享保六丑より同十五戌まで、平均一石三斗八升

江戸同平均一石一斗餘

享保十四・十五大豐年、元祿三の後四十三年にして、水戸米金一兩に二石、江戸同十四・十五春夏冬

直段、平均一石五斗程

水戸同十六亥より元文五申まで、平均米一石二升

江戸同平均米一石

元文元辰年次豊年、金一兩に水戸米一石八斗九升、江戸同二春直段、米石七斗五升

元文五年以下今に百年、斷て豊稔なし（以下ノ間ノ米價、天正七年稀成高直ト、コヽノヤス直相等シ、天正七ヨリコヽニ年歴百六十年程ニナル）

水戸寛保元酉より寛延三午まで、平均六斗九升

江戸同平均米九斗

水戸寶暦元未より同十辰まで、平均米九斗

江戸同平均米九斗八升

余幼稚の時、祖父が物語を聞に、寛延・寶暦の間郷里隣邑農戸の中に出て、商賈となるもの皆各利を射たり、今時賑ふものその頃業を立初しものなりといはれき、此時勢を今按るに、その時大にひらけたるは、抑今に衰ふべき兆なるものか

水戸寶暦十一巳より明和七午まで、平均米八斗

江戸同平均米九斗

水戸明和八卯より安永九子まで、平均米九斗

江戸同平均米九斗八升

明和七寅年大旱、水戸米六斗八升、同八卯旱、米七斗六升、江戸同七・八、平均四斗六升程

安永二己年、水戸(同三年)平均一石三斗二升、但籾金十兩に五十三俵半にあたる、以來于今六十七八年、如此賤價なし

安永九子年、水戸米一石、(籾金十兩に四十一俵)以來文化元年まで二十四年間、此例直なし

水戸天明元丑より寛政二戌年迄平均米七斗二升

江戸同平均米八斗

天明三卯年砂降凶作、金一兩に水戸米四斗五升、六年午年洪水飢饉、又同直、此前後八申年まで六斗五六升、江戸御藏天明三春夏冬平均米八斗、同六年春八斗七八升、冬八斗餘、但町米は金一兩二斗五六升のさはぎあり、是も一時奸商の爲なり

天明の飢饉、享保以來六十六七年にして到る、水戸寛政三亥より同十二申まで、平均米七斗六升

江戸同平均米九斗

水戸享和元酉より文化七午まで、平均米八斗六升

江戸同平均一石六升

寛政十二申年、水戸米六斗六升、江戸冬八斗餘

文化元子年、水戸金十兩に籾四十二俵、二年・三年、同四十俵

安永九年以來こゝに二十四年、如ㇾ此例直なし、江戸御藏一石一斗六七升、此頃比年金一兩に米八斗

前後にありし處、今年勃然として此やす直段あり、商しらず、此時米價安きをもつて惰農出、又蓄

あるもの大に損、田畑手あまり、荒不作出來れり、米價賤しきに過たるゆゑなり

水戸文化八未より文政三辰まで、平均米八斗六升

江戸平均米一石六升

文政二卯年、又水戸金十兩に籾四十一俵、前年は三十五俵なり、江戸文政二年冬一石二斗五升なり、

金が鄕里金一兩に一石六七斗なり、精農こゝに農にすゝむの意を失ふ

水戸文政四巳より天保元午まで、平均米七斗四升

江戸同米七斗

文政四、同十一年、水戸米六斗八升、江戸夏六斗六升

同十二年春三斗八升、(九十一兩なり)天保元年春(八十兩)四斗四升

水戸天保二卯より同十亥まで、平均米五斗三升

江戸同より七酉まで、平均五斗

天保四巳年八朔大風、水戸金十兩に籾十七俵、(米四斗三升、金一兩)

天明六以來于〻茲四十七年に此凶荒到る、午年籾二十五俵、（米六斗三升）六未年、籾二十俵、（米五斗）かく高直の處、七申年夏陰凉大不登、金十兩に籾十俵、（米二斗五升）八年酉・九年戌・同二十六俵、（米四斗）十年亥籾二十七俵（米六斗八升）

江戸天保四冬六十兩、（米六斗八升）六年冬百二十三兩二斗八升、七年申年かくの如し（文政二年六月金銀改鑄、文化十五年四月二分判出ル、天保五年止一朱金止、銀一朱出、天保八酉年七月慶長金位ノ通判金吹立一枚五兩判出ル、小判一分判ハ文金一兩目ニ五分減ニ成ル）

右寛永以上はさし置き、同十八年巳年こゝに百九十九年間、水戸の米價平均永一貫文に米一石にあたる、度量權衡共制にかなひ、天の時相行はるに於いては、永一貫文に米一石にあたるべき制のきはめなり、しかれども年に豐凶ありて、制作する處にあたらざるあり、是はまぬかれがたき所なり、寛永・慶安の初までは、天正以來の餘波にや、金十兩に籾百五六十俵までせし事あり、慶安三寅年に籾六十一俵、此のち斷て此値にあたるなし、よつて籾六十俵金十兩にあたるを、大豐年としてこれをみるに、元文元年以來于〻今百四年、是にあたるなし、五十俵を次豐としても、安永三午年以來七十年、またあたるなし、慶安三より安永三まで百二十三年間に、こゝにあたるもの二十六回なり、四十俵（米一石）を中歳として、寛永以來二百年間に四十二回なり、三十俵を次とし、于〻今八十三回なり、天明元丑年（余が誕生年）よりこゝに六十年、平均の米價こゝにあたり、籾三十俵、金一兩に米七斗五六升なり、是天下平準の値と減ずる事二斗五升なり、是は天下の人口まして、食足らずして價かく貴きか、また農す

すまず、田荒て生穀少きが故か、また農つとむといへども、地力盡てかくの如きか、また金銀の價貴きをもつてかくの如きか、殆解しがたし、寛永飢饉のいち、大飢金一兩に米二斗五六升にあたる事凡七回、小飢金一兩に米五斗にあたる事十七八回なり、人壽六十歳の内、此大小飢年にあふもの七八回、大飢は一二回はありぬべし、誰も大飢を欲するはなけれども、億兆の人衆農商の中には、是が爲に利を射るあり、利を射ずとも此災をまぬかれ、死せざるものは人情のならひ其窮を忘る事あり、窮し死するものをみて、あはれみ思はざるはなけれども、おのれ死なんとして活たる程にはあらじ、ましてかゝる凶荒にあひたるときは、其窮民を救はしめ賜ふ上の鴻恩又甚し、愚人は意これに慣あまいるものまゝなしとせず、奢侈の止ざる多くはこゝにあるべし、扨二百年前の金錢と、今の金錢の値をひそかに考るに、昔金一兩の錢四貫文したるに、今は三貫文まして七貫文なり、是昔の金にて三分々々錢なり、今の小判一兩は昔の金二分二朱にあたる、今の金十兩は昔の六兩一分にあたる、三兩三分不足なり、金は不足なれども、錢を多く鑄出されて賑し給へて、相當の錢より金一兩に付四貫五百文をまし置せらるゝなり、こゝに於いて假令小商元手金二百兩もつ者は、半を錢に換て、金百兩錢百兩分とするときは、忽二百七十五兩分の賑をなす理あるなり、又天下平準農一戸の田高十五石には、豆麥も米に換へて三十石はあるべき制なり、即永三十貫文也、是を今の金にても三十兩とは稱せども、黄金に直せば十八兩三分にあたる、昔の三十兩は錢にて百二十貫文なり、今の錢は鐵錢又は文字なし

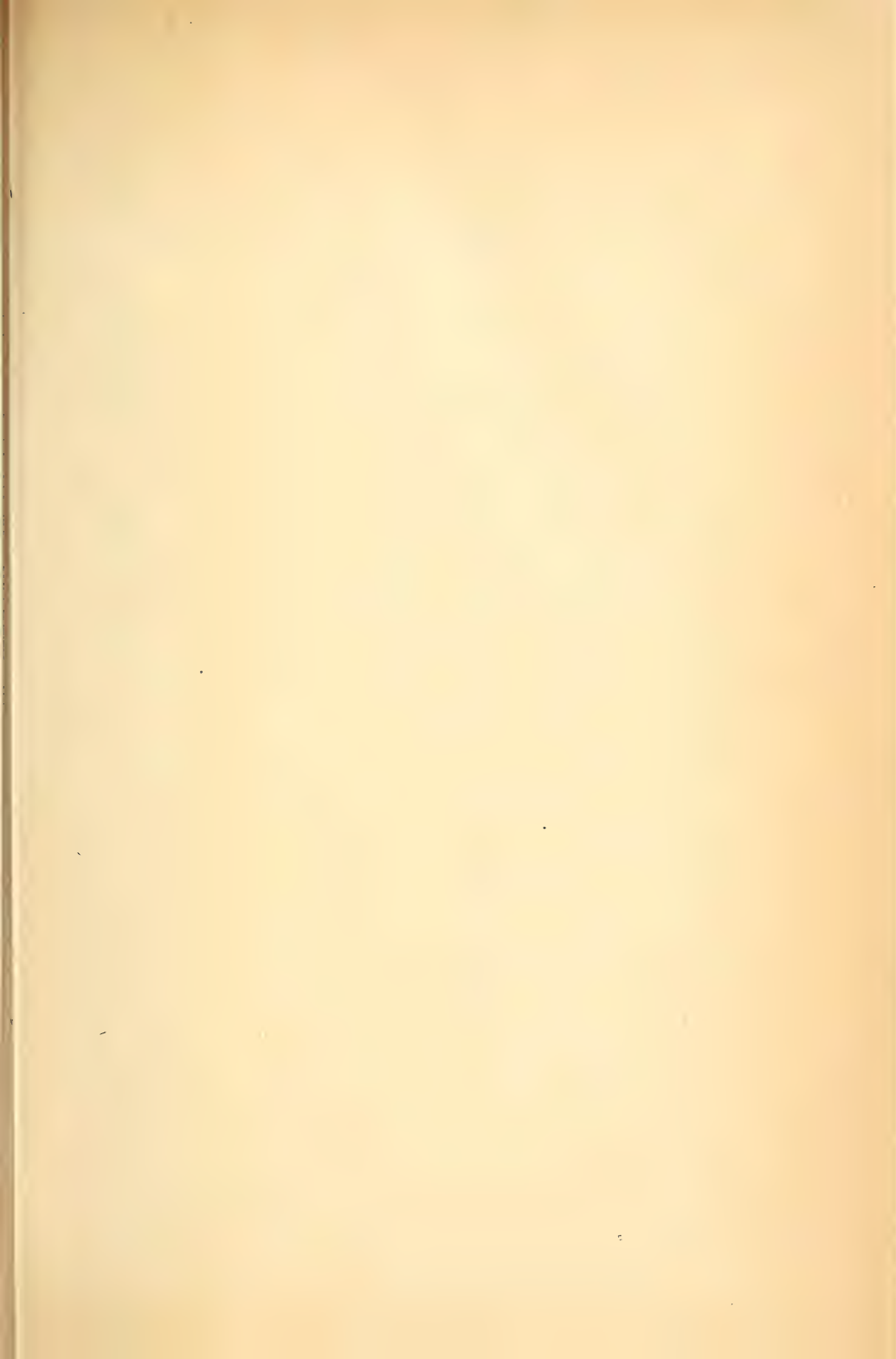
錢など取雜ぜて二百十貫文なり、此錢を昔の四貫一兩に直し五十二兩二分なり、此內の昔の三十兩に不足十一兩一分引、又錢のまし分二十五兩分引、永に直し二十貫六百七十八文也、是を米とみて、天明以來六十年平均相場七斗五升に除き、金二十七兩二分となる、是を平準一石直にみるときは、此一戶に付米二石五斗の減也、扨は田畠一反のまとめ米二石ときはめ賜へる本制にそむき、今は一石八斗の生穀にて、古今の平準永一貫に一石たる處も、今は九斗となるすがたとひそかにおどろき思ふなり、昔金錢少き時は民心質朴に、其耕深ければ生穀多く價賤く、今金錢多ければ、民心おのづから意り、生穀減じ其價貴く、隨て諸物高直となる、新奇無用の物出、眼是に奪はれ、意奢侈にうつる、是が爲に質朴ならず、ますます奸猾こゝに出る、農商今の華をみて心をうつさゞるものは、商は金一兩に錢一貫六百五十文、爭はず求めずして自然の此利を請備るなり、富有にして金をかすものは、求めずして此利ある物たり、是今の世金錢をもつて業をなすもの、ますく益ある所爲なり、農は世の勢、昔の收穫に一段二斗を減ずる中に、地力を盡せば此減なく、然るときは其益一戶高十五石にして、金三兩一分にあたる、かくあらんものは、大飢至るといへども、しづかに上の鴻恩に酬奉るあり、世の華にうつる農は、一段に一斗を減ずれば一兩二分二朱の損あり、是を昔の農にくらぶれば其差米四石五斗、其金は四兩二分（平準の値にて）なり、かくまでの損にあたらずとも、つまる處大かた此理もつて業をうつし、或田畠を他へ賣り跡を斷に到る、扨今の金錢の勢其盛んなる、なべて知る處ながら、愚がみる處

は、假令木綿金一兩に四反なるを、昔の金に比すれば二十反、其一反は錢百六十文、（三貫二百文にて）今の一反は一貫七百五十文、こゝに十倍なるものなり、今の金一兩に米九斗は、昔の一兩に四石五斗、其一升は錢七文一分、今の一升は七十七文餘、是もまた十倍なり、穀と金銀土に出るかぎりあり、かぎりあるをもつてかぎりなき此盛榮にあひては、米價貴く金銀少くなる事、自然の勢理なり、されば世の盛んなるに對しては、米穀金銀甚だ不足す、此不足を補ふに錢をもつてす、錢方に充てべき銅も亦少し、こゝをもつて鐵砂をもつてして是を償ふ、其制にあたらざるもとより論なしと、國に忠あるものの長歎息せざるはなし、今より後はいかんぞや、嗟愚夫老たり、幸にして霞浦の隈、櫻川のわたりに一人の盟弟壯なるあり、商戸にして傍好んで古書をよみ、また業になれて世利をしる、よつて此草案を贈る、盟弟余が管見に漏したるを補ひ、且つ今より以往の米價金錢行はれやう記して、後の農商志あらんものゝ古今の勢を察し、もつて各業にすゝみ、父母をやしなひ、國恩の萬一にじ報奉るはしのたすけともなし賜はゞ、われは死すとも欣々然たるべし

天保十二辛丑年春二月、東海濱田の宮舍において、枯木に華さかせ爺（于レ時六十一歳）一時禿筆を馳せたるに、相馬の士人羽根田氏乞によつて與ひ、再び毫をぬらして盟弟某に贈る

當今金錢米布江水通價考　終

減銅錄

花井一好著

滅銅錄

花井一好誌

○白石先生之本朝寶貨通用事略に、長崎より外國に入りし銅の大數を記されたり、慶長六辛丑年より寛文二壬寅年まで六十二年の間、銅壹億壹萬壹千四百四拾九萬八千七百斤餘と記されたるは大數成へし、銅貳億二萬二千八百九拾九萬七千四百斤者、慶長六辛丑年より寛文二壬寅年まで六十貳年之間に外國に入し積、幷に寛文三癸卯年より此方の惣數也、是者寛文三癸卯年より、此方の數を一倍せし積り也

○佐久間甚八の著せし天壽随筆に、銅壹萬七千三百四拾三萬三千九十斤餘、長崎より外國に入りし惣數也、慶安九戊子年より寳永五戊子年迄、壹ケ年百七拾七萬七千八百六十斤餘、寳永六己丑年より明和元甲申年迄、五十六年之間は貳百七十九萬七千斤餘

○青島俊藏之著せし光被錄に、明和二乙酉年より天明三癸卯年迄拾九年の間、唐商に渡せし銅貳千八百九拾九万三千四百五十四斤餘、此内貳千三百七拾三萬四千三百六斤は、一ヶ年に唐船拾三艘と定レ之、壹艘に渡す銅拾万斤宛、又拾八万九千百四十八斤は、官命に因而舶來せし物品之代として賜處亦五百五万斤餘は唐商より貢せし金銀錢之代として賜處、此三條之惣數は三許の如し、又此外に壹万九千九百三拾五斤は、是者明和二乙酉年より天明三癸卯年迄拾九年之間、各船に銅器にて渡せし紅銅之斤數高也

○光被録に、明和二乙酉年より天明三癸卯年まで拾九年之内、拾八年（天明二壬寅年は紅毛船欠年）紅毛船に渡せし銅之總斤數高千六百三十九万五千斤餘也、寳暦十三癸未年以前は、壹ヶ年之定高は百十万斤也、其後諸國の出銅乏しきが故に、明和元甲申年より減銅、壹ヶ年に八十萬斤を給るべき命令有て、其後四ヶ年を經て、明和五戊子年より亦拾萬斤を增、壹ヶ年に九拾萬斤を賜る、此外に金子千兩の代りとして、銅七萬斤を渡す事は、明和元甲申年より始而、今に給はる

○又銅拾七萬四千七百八拾五斤、是は明和二乙酉年より天明三癸卯年迄十八年之間、紅毛船に渡せし銅器の總斤數也、此外に銅錢五萬四千七百四十貫貳百文餘、是は明和二乙酉年より天明三癸卯年まで十八年之間、諸品之代りとして紅毛船に渡せし處、錢之總數也、三許に記す處之唐商、幷に紅毛へ渡されし處之銅錢之惣數を計較するに、銅四千五百三拾六萬八千四百五十四斤餘、亦銅拾九萬四千七百二拾斤餘、是は銅器にて唐商紅毛へ渡せし也、銅數合而四千五百五十六萬三千百七十四斤餘、是者明和二乙酉年より天明三癸卯年迄十九年之間、唐商紅毛へ渡せし銅之總數也

○花井一好天保十三壬寅年より命を蒙、崎陽に在勤する事四年、弘化二乙巳年に至り武陽に歸る、勤役中唐方阿蘭陀方年々之渡銅、其餘銅針金、また銅の諸銅器物を買入、外國に持渡る處之銅之斤數高數斤也、實に惜むべき事ならずや、先哲も既に云へる事有、惣斤數高八千九百萬斤也、是者天明四甲辰年より天保十四癸卯年迄六十年の間に、外國に入りし惣斤數也、天明四甲辰年より天保十四癸卯年

迄六拾年之間、唐船之入津せし總數四百四拾艘、唐船壹艘に付銅拾萬斤宛渡せし銅之總斤數四千四百萬斤也、此外官命に因而舶來せし處之物品の代りとして賜る處、また各船に銅器にて買渡せし斤數等之委數事は是には省く

○天明四甲辰年より天保十四癸卯年迄六十年の間、紅毛船入津なく、欠年九ヶ年を減じて、殘る年數は五拾壹年分、紅毛船に壹ヶ年之渡銅六拾萬斤宛、此銅之惣斤數四千五百萬斤とす、此紅毛船の惣船數五十一年之間七十五艘入津也、此外に官命に因而舶來せし所の物品の代として賜處、また銅諸器物等にて買渡れる斤數、此精說は爰に省く、長崎より唐商蠻客等に、天明四甲辰年より天保十四癸卯年迄六十年の間に、外國に買渡れる處之銅大數八千九百萬斤なれば、予按ずるに、弘化元甲辰年より以後百年を積りては、其大數を知るべし

○銅の用の多き事は、和蘭は云ふに不ㇾ及、西洋の諸州にて用ゆる處數多也、大小の船を造るに用ゆ、大小の炮を鑄造するに用る事は數萬斤也、また屋上の銅瓦、或は煙出しに造り用ひ、書畫共に板木には銅板を用ゆ、銅錢を鑄立なすに用ゆ、其餘の銅器物を造に用ゆ、其外天文地理等の測器を造に用ゆ、我國より西洋諸國にて銅を用ゆる事の多きを知べし、俗說に、日本の銅を買渡りて、和蘭にて金を絞り取ると云ふは妄說にて、更に取用ひ難し、北夷齋本多利明の著せる豐饒錄に、金含銅を唐紅毛人持渡りて、金を絞り取と云ふ事を、吹試たる樣に書載たれども、難ㇾ請說也

○本多利明は白虹齋最上德內常矩の筭術の師なりしによりて、花井一好最上氏に尋合せしに、白虹齋曰く、金含銅の說は信用なしがたしと答、本多利明の豐饒錄に、當時唐と紅毛と渡す處の員數、壹ケ年之定式金含銅二百二十萬斤、但し壹斤掛目百六十匁、此惣銅掛目三十五萬二千貫目餘も、是を樣々試る事貳拾四年、漸其一端を得て是を吹試るに、古銅の掛目十六貫目より燒詰、金掛目百六十匁得たり、是を以觀れば、異國にて日本の銅より金を絞り取之說慥成事を知れり、右燒詰金六十匁を、長崎本途直段燒詰金掛目壹匁に付、通用銀三十二匁の御定にて、異國より持渡燒詰金の御買上有、此本途直段を以積り試るに、通用銀五貫百二十匁と成、また文字小判に替て金八十五兩、壹分銀五匁と成也、此勘定を以彼の二百二十萬斤の土金を試る事左の如し、金含銅二百二十萬斤、此燒詰金十一萬二千六百貫目、但百斤に付燒詰金百六十匁宛の積り也、此代銀十一萬二千六百四十貫目、但し燒詰金掛目壹匁に付代銀三十二匁替、長崎本途直段也、此代金百八十七萬七千三百三十三兩、壹分銀五匁、但文字金一兩に付通用銀六十匁の積り成と記せり、前條に述るが如く信用なしがたし

○銅の多く外國に入りし我國の骨肉の定數寶貨の費ゆる事を歎かれしは、新井白石先生の寶貨通用事略に精細は觀ゆ之御普請役にて、其後に御勘定になれる佐久間甚八の著せる天壽隨筆、また御普請役勤めける青島俊藏の著す光被錄にも載す、筑前の儒者にて龜井道載の著せし處の答問十策の書にも、銅の精細は觀えたれば爰に省けり、予も彼地に在住する事四年、銅の外國に買渡れる斤數高の年々數

多成を歎き、外品代り物を渡すべき事を淺智短才ながらも種々心を用ひたりしに、一品の代り物に成べき物を製せる事を工夫し得たり、精細は神州論の附錄に載す

○太宰先生の經濟錄に、近世異國と貨物を交易するに付て、銅を異國に渡す事夥敷、是に依て銅の價甚だ貴し、海內の山に銅を產する處も多けれども、有司のもの人工の費を輕じ而、深く鑿らざる故に銅出る事少し、世用に乏しき程にもあらねども、費甚だ貴き故に新錢を鑄にも費多し、されば國家に鑄錢の儀あればゞ、有司必銅の乏しき事を云て、其儀を拒む者有、昔川越侯信綱執政の時、京都の大佛の銅像を毀て、寛文の錢を鑄れしは、眞の英雄のしわざ也、京都の大佛は、其時木像を以銅の像に易たり、南都の大佛像は、其時未だ毀たざりし故に、今も依然として銅也、次には鎌倉の大佛像も銅也、其餘海內に有銅像小さきは云ふに足らず、長壹貳丈成物其數知らず、近年東都に六地藏の像を鑄たる、長壹丈六尺成と云ふ、昔より有像多も無用の者成に、今また新らたに大像を鑄て銅を費す事、國家の害也、ケ樣の事をなす者を蟲と云ふは、木を食ふ蟲也、今の世にも川越侯の如き英雄あらば、南都を首として所々の大像を悉く毀し錢を鑄出し、其餘をば國家の諸用に供し、其上に嚴禁を立て、小像をも妄に鑄る事を得せしめず、又寺院にも各寺巨刹にあらずば、大鐘を鑄る事を許さず、小寺院に喚鐘を掛る事を聽して、有來の大鐘をば悉く毀て、鑄錢以下の諸用に供すべし、如此せば銅の用乏しからずして、國家も民も其利を請べし、凡佛法の意はかならず銅にて佛像を鑄て、其功德勝る

にもあらず、木を割き土を塑するも其功德同前成と云ふ、然るを國用軍用に切要成銅を佛像に棄るは誠に不智成事也、今にもあれ、是等の禁令を出さば、銅は海內に豐饒成べし、亦所々の山より銅を出すとも、有司の者人工の方費と錢穀の費とを計りて、銅の出る事其方費を償ふ程にあらざれば、深く鑿らしめず、是又不智也、官家より出る錢穀を民に下れば、然々費にあらず、銅鐵の類は少しも出れば國の用と成、且細民此事に使はれば、其間食物を得て困窮を免るゝ喜び有、是又民の利也、然ば之ら費を不ㇾ憚出すべきをば、掘出して地力を盡す術を行ふべき也、されども大見識大力量有ものに非ずしては、ヶ樣なる事は決斷成がたし、花井一好按ずるに、銅の多く出る地は羽州秋田領也、今は昔の如くならず減じて銅八十萬斤程宛大坂に廻すと云ふ、其外は奧州南部領、豫州の別子立川等より出る地有と云ふ、然ども是又銅の出方甚だ減じたりと云ふ、白石先生の曰、神祖十世二十世の御後には、我國にて用ひ給ふべき金銀銅の乏しき事、彼異國の如くならん事を歎かれたり、花井一好爰に因てつら〳〵按ずるに、未開の大國あり、其國の度數は四十三度より五十二度に係りて、南北三百里、東西百里計と有、屈曲の廣狹有て、僅に二十四五里に至れる地も有、此國屈せる大小の島有、國體は大小の高山有ど、地面嶮岨にして一大石山なり、海岸には村落有て、異人の住居する者有、山村には大木良材は繁茂せり、海川の產物には海草魚物有て、其益莫大也、此國に金銀銅鐵の產する山甚だ多く、其地名は神州論の附錄に精說を載する故に爰には省く、また砂金の出る地有、金銀銅鐵の產する鑛山有

と云へども、未だ掘取事をせず、空敷埋もれて有、實に惜むべき事ならずや、其國の名は異人に問へば「アイノモシリ」と答ふ、日本人は此國を「エゾ」と唱ふ、文字は蝦夷と書す、其國地の地理・土風・人物・產物等の精細を知らんと欲せば、蝦夷志・蝦夷事略・蝦夷拾遺・蝦夷記聞・蝦夷艸志・三國通覽に因て觀るべし、此地に鑛夫・樵夫・炭夫・大工・鍛工・桶工の類多く、數千人入込て鑛山を掘出しなば、我國永世不朽の寶貨は增益し、且土地も自然とひらけ、山海の產物もあらまし、焰硝・硫黃・明礬等の物ども生、國用は他年には他國に不レ求して、自國にて足る程には至る成べし、蝦夷の地は人民の乏しき國地なれば、外寇の襲ひ來る事有、其土地に住馴たる鑛夫・樵夫・炭夫・大工・鍛工類、其外下働の人工數百人集居らば、海岸防禦の備等の事に付て、陣所・小屋掛等の急速の事に臨みたりとも用便にて、兼て土地の案內をも知りければ、諸事甚だ辨利にして、海國守護は勿論、沿海の領地國務の政を預る人は、必是武備には厚く心を用度事に社あれ、蝦夷地は四十度以上の大寒地なれば、兼て冬の月に至とも、雪國のならひにて雪どけに至らざれば、往來も自由を得ず、平生に此國地に數千人人民多く集居せば、急務の備とも成べき最第一の良策成べし

○正德五乙未年、長崎表廻銅凡一年の定數、四百萬斤より四百五十萬斤迄の間を以、其限りとすべき事

○唐人方商賣法、凡一年の船數口船奧船合て三十艘都て銀高六千貫目に限其內銅三百萬斤を可相渡事

○正德五乙未年二月、上使仙石丹波守・石河三右衛門長崎表に發向有、向後阿蘭商賣方御新例に改めら

れ、毎年船數二艘に限り、銀高三千貫目、銅百五十萬斤可レ被二相渡一旨被レ仰二渡之一

○享保五庚子年二月十一日、二番の唐船より伊孚九御用馬二疋引渡

○同年五月、此度南京馬引渡候伊孚九へ、銅二萬斤まし被レ下候事

○同年是迄乾金高五萬兩の商船、明年より新金半減二萬五千兩にて銅百萬斤可レ被二相渡一旨被レ仰渡之一

○同六辛丑年は、歳渡銅百萬斤と被二仰出一と云へども、日本所々より出銅多少有レ之時は、渡方も増減有べし、且また銅定直段にては損失有レ之故、直段直り割合を、「銅高に加へられべき旨被レ仰二渡之一

○享保七壬寅年、當年一艘荷物に前年殘荷物相加へ、銀高猶不足に付、銅高割合にて被二相渡一、外に十萬斤爲二御易成一と被二相渡一旨被レ仰二渡之一

○享保十八癸丑年、於二江府一甲比丹是まで數年御用の爲引渡、爲二御褒美一銅拾萬斤拜領被レ仰二付之一

○同年九月、向後商賣銅高千七百貫目の內、六百貫目減千百貫目高にて、銅は元の通り百萬斤相渡、持渡金可二相減一の旨被レ仰二渡之一

○寛保二壬戌年十二月、江府より諸國出銅減少に付、向後一ヶ年唐船十艘宛にて、年分銅百五十萬斤可二相渡一旨被レ仰二出之一

○同三癸亥年正月、近年諸所出銅減少故、紅毛方向後半減、銀高五百五拾貫目にて、銅五拾萬斤に可レ被レ減旨被レ仰二渡之一

○延享元甲子年、銀高六百貫目、銅六十五萬斤可レ被ニ相渡ー旨被レ仰ニ出之ー
○同二乙丑年、銀高千貫目にて銅九十萬斤被ニ相渡ー
○同三丙寅年、銅百五十萬斤、外に金千兩相添可レ被ニ相渡ー旨被レ仰ニ渡之ー
○同年五月、江戸より向後唐船定數十艘の外、古牌十枚迄は入津御免にて、一ヶ年銅二百萬斤宛可レ被ニ相渡ー旨被レ仰ニ出之ー
○寛延二己巳年正月、向後唐船商賣方御仕法被ニ改定ニ、一ヶ年拾五艘宛にて、壹艘銀高二百七十貫目、配銅拾萬斤被ニ限定ー旨、船主より配銅證文を令ニ差出ー、此以後增賣割增迎船等の證據書、共外他の船に從り荷物・供荷物等一切不レ被ニ差出置ニ、一艘限り商賣方に可レ被ニ仰付ー旨漢文を以被レ仰ニ渡之ー
○寳暦十三癸未年七月七日、九番王履階船入津、唐國より四號七號元絲銀合三百貫目持渡り、此代り銅三十萬斤、內正銅七分俵物三分可レ被ニ相ー渡約條にて、二十ヶ年可ニ持渡ー憑文渡置候、但し今年俵物拂底に付、正銅三十萬斤被ニ相渡ー
○同年、去る延享年中より阿蘭陀每歲金千兩づゝ持歸るの處、當年より願に付因て金の代り銅七萬斤被ニ相渡ー、但壹兩に付六十匁二分五厘の積り
○明和元甲申年秋田銅山出銅不進に付、來酉年より當分唐船方渡銅二十萬斤可レ被ニ相減ーに付、如ニ古例ニ一艘八萬八千斤宛可レ被ニ相渡ー哉、又は一ヶ年船數二艘可レ被ニ相渡ー哉、右兩條の返答書可レ差ニ出之

旨被ㇾ仰聞ㇾ候處、諸船主一同に壹艘に銅十萬斤被ㇾ相渡、年分船數十三艘入津の積に相願出る、同年秋田銅山不進に付、來酉年より當分阿蘭陀方渡銅三十萬斤被ㇾ相減、八十萬斤宛可ㇾ被ㇾ相渡ㇾ旨被ㇾ仰ㇾ渡之ㇾ
○同二乙酉年、去年被ㇾ仰付ㇾ通、銅八十萬斤御請申上、其內當年六拾萬斤買渡、殘り貳拾萬斤とも明年分八拾萬斤、都合百萬斤買渡、當年より持渡候金千兩の代り日本錢五千貫文買渡、明和三丙戌年銅百萬斤買渡、同四丁亥年銅六十五萬斤、明年銅九十五萬斤買渡度旨、願之通被ㇾ仰ㇾ付之ㇾ、去年迄持渡り金代り日本錢買渡之處、於使所囉吧等捌方不ㇾ宜に付、當年半年分、錢半分銅三萬五十斤買渡度旨、來子年より元之通り金千兩哉、銅七萬斤買渡度旨、願之通り被ㇾ仰ㇾ付之ㇾ
○文政三辰年阿蘭陀甲比丹へ被ㇾ仰ㇾ渡ㇾ之趣、諸山之銅追年相減に付、古に復し出來候はん迄は、銅之員を減る之間、持渡處之品も可ㇾ減ㇾ之旨、寬政之度申渡候ㇾ處、其後本國戰爭に因而、入津不ㇾ致年柄も有ㇾ之、當暮に至り戰爭平和に及び候に付、江戶拜禮も年々相勤、獻上物も古之通差上申度旨、且又印度迪魇荒之諸商館再建致候に付て、莫大之費用相掛る故を以、銅之員を增度旨願ふ處の趣、其謂れ無ㇾ余儀ㇾ相聞るの間、別紙を以定銅六十萬斤之外、去る寅年より二十萬斤宛の增銅とも合而、一ヶ年に五十萬斤づゝ、當辰年より三ヶ年之間措も相增、持渡處之品も右に准商賣方相增、注文之品々申付通無ㇾ相違ㇾ品合等も相撰積渡り申べし、江戶拜禮之儀は先不ㇾ及ㇾ沙汰ㇾ、是迄之通可ㇾ相心得ㇾ候也

減銅錄 終

神州論

花井一好著

神州論

花井一好編輯

我が皇國は上古は葦原の中津國と稱て、開天闢地以來皇極連綿として、東溟に獨立して四隅の華夷自ら入貢せり、夫國の廣狹を狄夷の諸蠻に比較せば、東洋中の一塊嶼たりといへども、四時の風寒・暑濕・燥冷相參て行れ、人畜・草木を造化して、日月・星辰を運轉して晝夜の位を分ち、亞細洲東洋中の大島にして、赤道線を去る事三十一度にして、陸奥は北に首し、九州西南に尾す、山城中央に居て天府に應ず、北極の出地は大隅・薩摩にて三十四度、畿內にて三十五度、奥州津輕に至て四十度に及べり、正帶に屬せる一勝地たり、此國の總號を耶麻騰と稱して、大日靈貴の本國は素畿內大和の名なり、日神の都居の地なれば、後此國の惣稱となれり、蓋此州に數號あり、葦原の中津國・自凝島・浦安國・豐秋津島・日高見國と稱せり、其餘猶我國の異名は、大日本異名箋に精細を載たれば玆に省く、此國は五畿七道にして、六十六箇國に分てり、國の周圍は滄海にして、要害堅固の土たり、此州に生ずる天工の三富は、一として闕たるなく、金石・草木・禽獸を產じ、中にも稻米は美良にして、五世界中我皇國を最第一とせり、金・銀・銅・鐵・鉛の五金を產し、明礬・綠礬・丹礬をも生ず、鶏・家鴨・鶴・雁・鴨・野鷄の類は、卵

或は其の肉を食するに足れり、牛馬は人工を助くる事大にして其益尤多し、軍陣・行旅遠きに驅走し、能く數斤の重を運び、猪・鹿・猿・兎の類は得て其肉を食し、皮を用て諸用に達す、草木は葉・實・根・皮を採て食するに足り、又藥用となすも足れりとせり、海中より出る産物も多くして、勇魚(イサナ)取を最第一として、鰮魚も亦是に亞る大獵なるべし、神代の昔火酢芹命海の幸を得給ひしより以來、鰭の廣物・鰭の狭物は種々にして數へ盡し難し、鯨てふ魚も神武天皇の大御歌に、曾細と褒め給ふ程の大魚なりし、鯨魚を漁する事は上古より傳て、其利は計るべからず、世俗の諺にも、鯨魚一尾を得れば、七浦も富といへる程の大漁なり、皇國にては紀州熊野浦・肥前の五島・唐津大村・平戸なり、平戸領の生月嶋には、益富又左衛門といへる鯨魚漁の首長たり、漁民を二千人養へりと、又筑前の福岡・壹岐國・奥州南部・房州勝山浦、土佐國にては、東の海邊椎谷崎濱浮津の邊、西の海邊にては津の邊にして鯨魚を漁す、土佐にては鯨方の有司兩人ありて、東西の所々を交代して司るとなり、肥前平戸領は鯨一尾を得れば、地頭への運上金六貫目なりとぞ、我國にて鯨漁をなす地は八九箇所に過ず、我國にては鯨漁をなすといへど、肉を取り油を絞り鬚を得るのみにして、其利尤も薄し、西洋の地方にては、鯨魚を漁し得る時は、全身は盡く用ひて、纔も捨れる事なく、其利甚厚し、先第一に鯨魚の肉は食料として油を取、其脂肉・筋肉なども蒸餾して油を取る、魵皮膓胃尾鰾を以て魚膠に製し、竹木を鉾てよく固著し、飲膳調料に用ひ、又藥用になして奇効あり、腦髓より斯百兒麻撒的(スペルマセツテ)といへるものを取る、是

も多く藥用になす、腋中よりは安鼈兒傑禮斯（アペルケレイス）と云ものを取得るなり、是を龍涎香と稱して藥用になせり、此魚の鬚は諸道具に造りて其用多く、世に鯨細工をなすもの多し、又腦髓にて蠟燭をも造り用ゆるに、潔白にして臭氣なく、燭淚流れずして甚だ佳なり、此魚の油はよく蝗を除くの奇効ある故に、西國邊にては、一ヶ年宛鯨油を多く貯ふと、鯨油を用て蝗を除く術は、除蝗錄といへる書に記せり、鯨の形狀、及び其主治等を知らんとせば、鯨志・三才圖會・肥前產物圖考・勇魚取圖說・鯨魚談・地方凡例錄・遠西名物考の斯鼈兒厤攝的（スペルマセッテ）の條、及龍涎香の條、遠西名物考補遺の魚膠の條を見るべし、南谿子の西遊記・司馬江漢の西遊旅譚、或は乳房ありて自ら其兒を哺す、故に魚中特り鯨魚を以て獸類に屬すと、醫原樞要の中に見えたり、全國の海濱に介品を產し、食に充に足れり、所レ謂蛤・蚫・小甲春・蜊・紅螺・朗光、海底に生ずる海草にも、昆布・荒和布・鹿角菜・裙帶菜・海苔、魚類にも其數多く、棘鬣魚・鮃鰈魚・鰮魚・烏頰魚・鰡魚・撥尾魚・牛尾魚・眞黑魚・鯖・竹莢魚・鱵魚・章魚・沙噀・鰕、湖水或は江河・谿川に生ずる魚品に、鰻・鱺鱠・鮧魚・鯉・鮒・鰷魚・鮎・蜆、肉を食すべき禽には、鵠・鴈・鵆・鴨・水雞、山野の鳥にも、鳩・野雞・山鷄・鶉・鷸・雲雀・安加波・羅雀・鵇、山野の獸類にも、兎・鹿・熊・狐・貍・貉・獺・豕・猪・猿、松前の海にも鰊を生ずる事多し、鮭も又蝦夷より出るも人のしる所なり、稻米の美味にして且豐饒なる、外餘の國に超過せり、美濃・尾張を上とす、粳米・糯米ありて水田に作るあり、又畑に作る旱稻あり、國所によりて大燒糯とて芒のなきものあり、長鬚糯とて芒の長く生ずることのあり、土佐國にて作る稻

八戸・彌六早稲と稱するは、早々收納なして一歳に再收のものなり、奥州邊にては稲米の種類に方言あり、傳兵衛、白志・爾井若・ひのき・四十日早稲・小早稲・浪の上（一名黒髭とも、鍋こわしともいへり）もろ白髮・大黒・海道早稲・京餅・赤餅の十三種なり、麥も又種類あり、所謂大麥・小麥・裸麥・蜈蚣麥・火燒麥の類なり、草綿を作り紡績し、衣服として冷寒を凌ぐに足れり、綿の種類にはかぐら・八寸・黄花・備中・ごろり・紅葉・長九・九郎・大こく・びちん・このら・山城麻わた、河内ぼたん・早わせ・今七兵衛・權九郎・てつぽう・黄花・猿の耳・赤綿・靑綿・阿波・土佐綿の類、精細は綿甫要務に見ゆ、養蠶の術も精く、奥州・福島・上野の邊を第一とせり、紡績に精く、紬となし糸となす、布帛の細にして上田縞・郡内縞・川越平・仙臺平・南部縞、八丈島にて織出せる八丈織を世に八丈縞と稱す、皇都の西陣にて織出せるもの、錦綾織或は天鵞絨の類にて、諸邦より織出せる所の名產精く載せず、織紝は巨價園の著せる機織彙編あり、養蠶の術は養蠶秘書・蠶養育手鑑・養蠶全書・養蠶須知の著述あり、海中より潮を汲て食鹽を製し、山に山鹽を生ず、奥州會津領の大鹽村是なり、草木の實を絞りて油となして、燈油・食油・藥用にも充る、又土中より油を生ず、越後の臭津是なり、木を燒て炭とす、又土中より石炭を生ず、筑前の邊に多し、五平太と稱す、赤地・御德・中泉・鯰田・日尾・大隈、此村々より多く出せり、燒ざるものを生炭と云、或は焚炭又燃石と云、筑後は三池、肥前佐賀領高島、大村領の内松島、平戶領・唐津領よりも出す、武備第一たる大炮の術に用ゆべき火藥を土中より生ずる事、硫黄・硝石是なり、山中に良材を出す、杉は

勢州、檜・楠は五畿內、樫は薩州、槻は關東をよしとす、黃楊は豆州七嶋の內なる神倉島より出すものを佳品とす、世に嶋黃楊と稱す、薩州・豐後・紀伊・肥前・日向よりは樟腦を製し取て長崎に送り、數萬斤を蠻舶・華船に互市なす。日本產の樟腦はは洋舶載返りて、阿蘭陀の都府亞謨斯的兒達謨（アムステルダム）に於て、再製して龍腦となし四方に貨し、內外醫藥に供す、其精製の功、萬國是を擬する事能はず、拂郎斯（フランス）・諳厄里亞（アンゲリア）等の買舶、東方の諸地より樟腦を交易し來れども、自國にて再製して龍腦となす事能はず、必ず阿蘭陀へ返り、其精製を仰ぐ、製煉術の精功に出ん歟、今に至る迄是を知る人なしといふ、松前より產する昆布、奧州の海岸より出る金海鼠も、長崎に送りて華蠻に交易せり、黃櫨の實を絞りて蠟となすに其用多く、鬢付・蠟燭、或は藥用となす事も多し、黃櫨の木は九州及會津に多く植る、黃櫨の植方或は蠟の製法は、農家益といふ書に見へたり、甘蔗を植て其莖を採り、絞り製して黑白の糖を製す、甘蔗の植方及糖の製法等は、砂糖製作記・甘蔗大成に見ゆ、甘蔗は多く讃岐・駿河・遠江の邊にて植る、大和の國にて蔓草の根を取、製して葛粉となす、其蔓の皮は是を葛布に織る、遠州掛川の邊にて織るもの則葛布なり、根は乾して葛根と稱し、多く藥用に充る、精說は製葛錄に載したり、又蕨を採り製て、蕨の粉に造る、食用に達す、苧麻の皮を採製して麻布に織る、又糸となす、農業全書、或は農業要集に見ゆ、藺草を多く植て其葉を採乾し、編て莚席とす、近江・備後・備中の邊にて多く植る、藺草の植方・莚席の織方等は、琉藺百方といへる書に載したり、因て見るべし、松・杉・檜・樫・楠・槻・樅・擲は是

を材とし、家屋・船車、及諸の器械に造るに足れりとす、楮を産する事も多くして、是を製して紙とす、我邦の紙の性又萬國に勝れて、方今に昌平の餘澤海内に普く、紙工精を競ひ、佳品奇種日々に出て、皇朝の紙異域に劣らず、楮紙尤其用をなす事大なるかな。檀紙・奉書・西の内・書院紙・板紙の如きは萬國冠たり、紙の漉方は紙漉調法記、紙漉必用の書に載せたり、漆器の佳品なる萬國に勝て、金貓漆器は絶妙を盡せる故に、華夷の皆是を稱して世界第一とせりと、漆の木の植方は農業全書・農業要集に載す、慶長の頃は蠻國より煙草の種を渡して、今盛に諸國に作り出せり、元一品の種を渡すといへど、諸國に移し植て、上下數品の煙草となれり、薩州の國分、常陸の小山田・舘舞を上品とす、皆其地の風土、或は地性の異なるに因て、自ら數品となれり、煙草の作方は農業全書に委し、名所は煙草名所記に見ゆ、煙草の氣味能毒の事は、大槻氏の蔫錄、又目覺草・煙草記にも見ゆ、又近頃刊行なす和蘭藥鏡の煙艸の條に能毒主治を擧る、阿波國にて藍を作り、其葉を採り製して、玉となし、多く諸國に出せり、農業全書を見るべし、茶も又山城宇治を上として、伊勢・駿河・近江・肥前の地よりも出す、宇治・信樂・阿部・芦久保・菰野・相良・嬉野なり、肥前・肥後天草島・尾張に一種の土を産して磁器を造り出せり、此土を白堊土と稱す、磁器の繪紋を畫く、紺色は呉須と稱す、漢名を畫燒靑といふ、漢渡あり、或は美濃・尾張の兩國より多く出す、陶工は近世精巧を加へて、佳良の品を出す、伊丹・池田の地に酒造りありて、多く米を以て醸して、醇烈の酒を造りて、皇國第一の良好なりと、異邦の人是を稱す、金銀銅

鐵の多く產する礦山あり、上古は陸奥より黃金を始て出せり、對島より銀を出す、武藏より銅を出す、文祿・慶長の頃より佐渡に金の花咲、初より今に至て絕る事なきは、昌平の御代いと目出度事ならずや、奧州南部・伊豫別子立川・羽州の秋田領より銅坑を開て、紅銅を出す事は他邦に勝れて、每歲數拾萬斤の銅を肥前長崎に送りて、華蠻と互市せり、我邦華蠻と通商開けしより、紅銅の異邦に渡れる高幾億萬ならずや、先哲既に紅銅の多く異邦に渡れるを惜みていへる事あり、鐵は鑛山所在多く、諸金の中に於て、鐵の如きは最も人間の有用の物にして、暫くも是を闕べからず、尤貴重すべき物なれども、世に夥く在に因て、人間夫程の貴き物とせざるなり、其用の多きを以て是を論ずれば、鐵を以て諸金中の首長として可なるべしと、泰西七金釋說の中に載したり、鐵を用て刀劍に鍛錬し造るものは、神妙の精功を得て、上古の天國の如き寶劍に至ては、其價黃金數百枚を以て是に換る、其武具の銳利なる、我邦第一の武威を示す防禦の器械となす、國俗能く防戰の術に長じて、常に能く是を習練せり、近きは戰爭に刀劍・尖槍を交へ、遠きは弓箭・火炮を用ゆ、故に海外の夷狄稱して武國と號く、皇國の蒼生は古より質朴にして武の强き、武道も自ら一流ありて、其氣象は韃靼人の威烈猛悍と、支那人の恬淡溫和とを相和したる所ありと、西洋人の往年我國に渡りて、見聞せし處を集て著したる日本志に載したり、外蠻と鬪戰を企て、挑爭ふ時は船舶を用ひ、陸にして戰ふ者は軍馬を用ゆ、牛馬の壯健なる、北に陸奥より駿馬を出し、南に長門より牛を產せり、千斤の重きを運ぶには、山野・平地は牛馬車を用ひ、

海河に舟舶を用ゐ、よく數萬斤の重さを積て數百里を航する、我が大日本の洲は衣食住の三つも足りて、此餘種々の產物ありて、此各島の生產する所、殆ど全國の用に備るに足れば、實に我が皇國は亞細亞洲東洋中の一大孤島たりといへど、他邦の救を受ずして特立なすは、東海中の富國たらん歟

神州論 完

末黑のすゝき

平塚茂喬著

末黑のすゝき

春の野山を燒きたる跡へ、生出るすゝきのかしらを焦しても、こりず二もと三もとさし出たる有樣、わが物にこりず、やゝもすればかよふの事をほのめかすに能似たり、かきわけみる人の爲に目標を記す事左のごとし

一　高貴の方々御醫療麁略なる事

二　御幸に付・修學院村難澁の事

三　御所御普請向等不都合の事

四　二條在番衆止宿の家々迷惑の事

五　問屋仲ヶ間御停止の功急に顯れ難き事

六　屋根屋・瓦師等印鑑を以再黨を結ぶ事

七　京・大坂御政道大に相違なる事

八　京都米穀幷非常備の事

九　役掛りの者不學文盲の事

十　京町與力已下惡弊品々の事

十一　盜賊幷に流人の事

十二　弊風を病ひに見立候事

十三　經濟に預る人は大學の道を辨へ度事

十四　豪家へ課役金山等の事

十五　海國兵談板行に被二仰付一度事

末黒のすゝ記

平塚茂喬著

一竹山居士が草茅危言の中、王室の事を論ずる條に附して云ふ、皇統綿々、寳祚萬々歳無レ疆御事は、卑賤區々の議を贅するに及ばず、しかしながら尊貴の御身には、子育の廣からぬ事危言に述る如く、現在先帝の御子たちの今上のみ世に渡らせ給ひ、春宮御體は動き無きも、御連枝は唯姫宮御一ト方にて、その餘は大方雲隱れ給ひしを、今更申すも恐多き事共にて、四親王家の京極殿は、今に御無住なる上、又閑院宮薨ぜられて、御[illegible]在しばらく御世嗣の絶たるも遺憾なる事也、殊に彼宮の御違例は纔の日數なる所、御醫の見損とかにて、調藥主剤の事拵定かならぬ樣に洩聞えぬ、（太田肥後守診察、御瘧氣の樣子に寛ひ、抑肝散を調進す、山本阿波守存寄を以右書を加へしに、御容被レ成ざる故、御内醫師服部啓順拜診し、御容體不レ輕、御醫の霍術直を申立候所、太田肥州へ家司より相談ありしかど決し兼に及はず速返答に付、左程の儀にも至らぬ内御薨去り、實は疫症の趣云々）扨大事既に去つて後、衆醫連名の御容體書を差出したり迚、何の詮か有る、御發病の折に典藥拜診して、各通の案文を奉る樣命ぜられ、議論の慥なる者に治療を委任せられなば、其任に當るの侍醫、などか丹精粉骨せざらんや、聞が如きは衆醫互ひに相讓つて、一己拙でゝ執匕する者無き由、是萬一の時其罪を頒つ工夫のみにて、偶御快然の事在らせらるゝは實に僥倖のみ、嘗て野史の三王外紀なるもの

を竊に閲するに、その一章王紀に云、「王稟性虛弱、不レ耐二寒著一、遊二內園一移レ時、有レ所二感冐一、飄嗟惡風、遽奉レ歸レ宮、褁レ頭襲レ衣、侍醫進レ藥、設レ爐爇二炭於室中四隅一、頃之王流汗煩悶曰、諸々出々、復奉以往二內園一、則重感傷、遂至二病困一、如レ是者數矣、侍醫山田道圓驟諫、極三言其非二慈幼之道一、用レ之忤、因自劾而退、王之所二以早夭一、雖レ曰二天命一、亦可レ謂レ速レ之云、同書浚王紀云、有二池雲伯者一、爲二侍醫一、太子嘗疾、雲伯曰、夫人必有レ所二壅閉湫底一、而后生レ疾、治レ之莫レ若三遊行而節二宣其氣一也、於レ是太子驟遊二于原野一、安永八年二月丙子、放二鷹於驪山一、其將レ出也色如レ土、雲伯及左右强レ之、果塗而疾病、既還大漸、其明丁丑薨云々、一同紀又云、天明六年丙午八月、王有レ疾、衆醫百不レ驗、相良侯進二日向陶菴・若林啓順二醫一、嘗因三相良侯得二朝見一者也、丁亥召レ之診脈、庚寅命二啓順一獻レ藥、此日賜二二醫俸米一、爲二侍醫一、會王飲二其藥一嘔吐、怒黜二二醫一、戊戌取二日向・若林二醫俸一、爲二庶人一、二醫解レ褐、僅九日而罷、時人笑レ之、或云、庚寅王飲二啓順之藥一瞑眩、壬辰殂云々、」以上 野史の錄する所證考に足らずと雖、當世の醫師山田道圓如きは稀なり、近聞水府公醫說の御著文ありと、皇統國脈の係る所豈小ならんや、故に憚を顧ずして、附言するものなり

因に云ふ、是迄御所表皇子姬宮方御逝去の砌は、市中日數三日之間鳴物停止觸出、また關東御同樣の節には、日數七日之間鳴物停止也、則近格觸書を左に徵す

天保十三年　寶鏡寺歡宮薨去に付、昨十七日より明十九日迄鳴物停止、普請者不レ苦候、此旨洛中洛外

へ可二相觸一もの也　寅正月十八日

同十四年　泰姫君樣御逝去に付、今十日より來る十六日迄鳴物停止、普請者不ㇾ苦、洛中洛外へ可二相觸一もの也　卯正月十日

天保十三年　閑院宮薨去に付、今十七日より明後十九日迄日數三日鳴物停止、普請者不ㇾ苦候、此旨洛中洛外へ可二相觸一もの也　寅九月十七日

同八年　德川民部卿殿逝去に付、普請者今十四日より明後十六日迄三日、鳴物は來る廿日迄七日停止之旨、洛中洛外へ可二相觸一者也　酉五月十四日

以上觸面に而者、御所表之方御輕き樣に相心得、愚昧之者は猶以名分順逆をも辨へざる樣に成行かん事、何共可ㇾ歎事に候得ば、是等は御同樣の日數に鳴物停止觸を被ㇾ出、扨市中渡世柄に寄、難儀の者も可ㇾ有ㇾ之間、御憐愍を以御所表より三日限鳴物被ㇾ免とあらば、下方も難ㇾ有歸伏すべき事と存る也、猶云まほしき事あれど擱筆

一　故院御在世の頃、春秋には御保養の爲修學院御茶屋へ御幸の御沙汰あり、其度々に右村庄屋の奔走、百姓使役せられ、農業を廢する事前後數日に及ぶ、近年御中風發せられて後、御幸の被二仰出一相止み、一村肩を休むるといふは、何共勿體なき事共にて、彼村方には中古靈元帝御幸の節の借財殘り有、漸々皆濟に及ぶ比、又文政の御幸はじめより年々物入出來、尤其度に公儀より鳥目拾貫文與賜れ

共、中々費用の十分一にも足らぬよし、何卒修學院一村は格別の譯を以、租税の半を免除せられ度事也、左あらば孟子に所謂「吾王、庶幾無₂疾病₁與」の意に近うして、民各其所を得る御仁惠ならん

三　朝廷御尊敬の事に付、決而御麁略の事は無き筈なれども、御築地向などの造作は、大かた定御修理方請負の町人任せに成て、御取締役人の吟味を經て直段減じ嚴敷故、何角手拔する樣になり、荒壁の上へ白土を塗り隱すといふ事、堂上方にて關東御取扱の疎なる比諭に被ㇾ申由、御所向御取締掛りを數拾年勤めたる老人の自讃に、我等此役を蒙りてより、年々御入用を省略せし事凡十六萬金に至ると近年大宮御所御年寄せらるゝに付、冬向御厚召の被₂仰立₁、又仙洞御所一旦御不例御快然の節、數夜御看病を勤めたる御醫へ被ㇾ下銀願など、御取締掛にて申支へたる由、或人曰、締の字義、糸扁に帝の字を書く、至尊を縛し奉るの謂歟、嗚呼是何の妄言ぞや、併泉涌寺御凶事の假建物、其外御廟塔造立の入用を頻に減少し、疵ある石に灰を塗隱せしを不ㇾ知顏に見分を濟ませ、御葬式の當晩龕前、堂の後にて魚肉を喰ひ、御中陰の未だ明かざるに、年始の門松を建注連飾りを憚らずして、是を關東の御威光目出度事と心得る族もあれば、一向に論ずるも無益なり

四　御所向の事に付而猶議すべき事多端なれ共、我知らず譖妄の罪に陷らんも計り難ければ略ㇾ之、扨都下の愁苦する事、二條御城在番衆の交代度に、旅宿を相勤る者尤甚だし、總じて近年公儀御家人等の御威光振る事尤甚敷、夫れも布衣以上御旗本方。御代官等は、道中往來も至極穩かなる由、唯京。大坂

へ在番に通ふ大番衆、或は御朱印を首に掛け、夫を當に着て論所見分等に行く御勘定輩、道中にて諸侯などをも途人の樣に蔑視し、俗にいふ肩で風を切らぬは一人もなし、諸侯さへ右の如くなれば、宿役人・百姓を螻蟲同樣に會釋ひ、夫に從ふ若黨・鎗持まで横柄を彈かざるは稀なり、然れ共道中筋の事は我が預る所にあらざれば强て云はず、爰に京都堀川通西南の數町、毎年四月在番衆の旅宿を勤る事課役の一つに成りたり、前々は大津宿より直に御城入の例なりしに、いつの頃よりか御城最寄町家に止宿の事始り、年々大御番所衆より町御奉行所へ、前以掛合有ㇾ之候へ者、其宿を勤る者の名前を取調べ、町年寄を呼出し請書を被ㇾ申付、扨御番衆京着の當朝六ッ時より三條堀川の辻へ銘々迎ひの人を出し、宿の町所名前書を五六枚宛相認め、馬荷其外人足の者へ右の書付を渡し、宿主は其已前曉七ッ時より起て風呂を拵へ、朝膳燒物・熨斗・昆布・煎茶・菓子等の用意を整へ、馬荷・人足・用役の家來等着する時は、其荷物を運び入、扨出迎のもの御番衆の案内をして罷歸る、無人の宿にて一時になる折には、其混雜いふばかりなし、夫故に雇人の兩三人もして滯なく是を辨ずる由、近年は川支度々有ㇾ之、兩三日も延着に相成儀も有、箇樣の節は夜中何時着と申程も難ㇾ計故、家内晝夜用意いたし、出迎の者は夜中も引取られず、殊に三條堀川橋詰は休足場も無ㇾ之故、立ながら夜を明し、風雨の節などは誠に難澁、家内も睫々相休事も出來兼、着迄に氣勞れ、着の日とても雇ひ人共甚不都合勝にて、扨朝の膳部平皿・菓子・椀汁・生盛・鱠・猪口・燒物等相附け、其跡にて酒肴品々調理鹽梅して、上下五六人へ是を勸

め、晝飯は平皿・燒物計、夕膳も又晝同樣にて、夜分寢酒を差出、其翌日朝夕三度の膳部、夜分は酒を出し、第三日目御城入の當朝は、曉七ッ時より起出て、肴の節同樣の料理を拵へ、上下の晝辨當迄も詰めて、大宮口迄相見立歸るや否、直に跡登りの御番衆の出迎をいたし、酒飯の馳走前におなじ、別而川支等の節は、假宿の寺院へ迎ひを遣、雇人をして駕籠・荷物を引取、扨又滯留中懇意の客來等にて、俄に酒肴を差出す樣に被₂申付₁衆も有ㇾ之、是等に使役奔走するのみならず、疊の表がへ障子の張綴り抔より夜具布團の損料迄夥敷雜費相懸れ共、御城內春屋より米一斗に幾の薪代を差越迄にて、御番衆よりは定式金百疋ほどよりは宿料を拂はれず、昨年四月以來格別改革にて、右馳走ヶ間敷儀は一切相止み、一汁一菜の膳部の外酒菓子等は不₂差出₁、宿料も上分九分より壹匁貳分迄、供廻りは七八分位にて、滯留中入用書付差出、代金被₂相渡₁に付、是迄とは格別雜費も相減、難ㇾ有がり居る由なり、併はじめに述る如く、元來公威に誇る御旗本衆の事なれば溫和なる方は無ㇾ數、たとへ主人慈憐の性質にても、用役侍・中間等兎角權高に給仕を罵り、食事湯の加減などの小言を申故、新規に宿を勤る者共首尾の宜からん爲に、內々酒肴等を差出す樣の事有ㇾ之は人情にて、先年此止宿に於て下人を手討に被ㇾ致たる仁もあり、或は妻娘を酒相手に呼出して戲れ、又は遊里へ案內を命じ、金銀の無心等を被₂申掛₁衆も間々に有ㇾ之、平常吳服・兩替・質店等を家業とする商人は、渡世を廢するうへ、無禮咎め等に逢て事六ヶ敷もあれば、世話に云疫病神に障る心得にて難儀に思ひ、家內產婦・病人等を申立宿を斷れ共、一々夫

を間濟む時は、聊の病氣をも大造に申なし、宿の軒數相減るに付、無㆑據病人にても相除けず、親類へ預けて宿を勤る事になり　堀川より西の町々は居宅の普請をしても、態と不勝手の建物をして、便所・風呂場等を見合せ、御番衆宿の當らぬ様に工風をし、或は宿割の町代抔へ内々頼込て遁るゝ者も有㆑之由、夫故家賣買等の節も望人稀にて、無㆑據大家を少貲に沽却し、城下々の町々衰微の一ッとは成りぬ、或人曰、今日町家の輩安堵に渡世を營むは、大城ある其御蔭なり、一年に一度當る歟當らぬかの御番衆宿を迷惑がるは、國恩を思はざる不屆也と、此說尤の様なれども、應仁亂や關ヶ原御陣の事を考ふるに、町人は妻子を携へ資財を運びて、山野へ隱れ田舍へ遁るゝ迄なり、御旗本衆は歷々といへども、晝夜甲冑を着し、黑米飯に糠味噌汁、一命を的にして野宿せらるゝが當り前にて、寺院の止宿を不吉と嫌はるゝ抔臆病の至り、甚可㆑笑、其心掛にて討死の覺悟は出來るや否、今日太平の御恩澤は、町家より武家の人の取分ヶ有がたく思ひ知るべき事に候へば、一二夜の止宿に撰好みをせず、町奉行所次第に任せ置るゝ事ならば、神苑町邊の公事宿、又は六角御馬場邊の寄宿渡世、三條小橋最寄大橋の東旅籠屋等へ課役に申付て、何事も無㆑滯相濟むべし、祇園祭や稲荷祭の外、終に家を仕馴ぬ商家へ大切なる御用宿を申付るは、所を支配する奉行所に、目の明たる役人なき故、數十年下々の愁苦する事斯の如し、愚が議する如く、向後御番衆旅籠屋止宿とならば、豫め其宿をすべき家を定め宿割を申付て、年々四月交代の比には、其宿屋は四五日他の旅人を泊めずとても、渡世の冥加なれば不勝をす

べし、尤宿賃を取極め、萬一不拂の人あらば奉行所へ斷出て、大御番頭衆へ催促に及び、急度察當ある筈にいたし、三度の食事の外には何も不㆓差出㆒禁酒の制嚴重に申渡置べし、下部共の宿主を困らすも、多分酒狂より起れり、又病人等ありて、好みの品は現金にて直に勝手次第に求めて濟むべき事なれば、旅宿へ世話を掛べからず、若川支等にて京着一時にならば、合宿にすべし、少し混雜は有べけれ共、宿屋の事なれば間數もある故、左程に騷ぐべからず、是簡易の良策と存れども、大坂表の事を承れば、彼地御番衆宿は、船場の町々會所家を明けて勤る趣、夫故誰あるじと無く、壹町內惣掛りにて出迎ひ、其外手分をして雇人にも不㆑及、費用も惣割なれば、壹人の迷惑に成らぬ由、京都も大坂の振合に准じて、會所家止宿と成らば差支有べからず、余は尋常の町家に公役の寄宿を課する事を厭ふ故に、旅籠屋の一策を立るなり、猶再考すべし

五　去年三月諸問屋仲ヶ間御停止被㆓仰出㆒御觸、其外數通の御書付、每々違犯の輩は可㆑被㆑處㆓嚴科㆒との儀なれ共、右の御觸を信伏する者は一向に無きと相見え、大坂へ西國よりの出荷物は結句其以前より相減、江戶積の菱垣など今に入船の數を增さぬ由、然るに誰か壹人嚴科に處せられしと云沙汰も承らぬは、制度に預る役掛の人々奸商に馴合たる歟、又欺れ居る歟の二ッなり、我が京都の物價にても、數十ヶ所の遊所取拂ひと成り、其勢ひ大に減じたれば、酒肴・焚炭・燈油・蠟燭・紙の類潤澤にて、價も廉に相成べき所、左も無きは商人と役人との根氣競べに成て役掛りは改正の功を急に見せ、上へ

手柄を顯さんとする利心の甚敷、その脚元へ奸商共付込み、將仲ヶ間が潰れたる故、他所より積込む荷物の日當無く、且仕切の金を危踏出故などゝ困らせて、再三株を立んとする趣向みえたり、夫を待て暫し無く、最初の觸事の未だ行渡らぬに、追觸申通達を廻す程に、奸商舌を吐て益々諸品を持圍ひ居るに違なし、假令奸商にあらず共、眼前利を見ては、一命にも換る愚民の馴ひ、何程法を以威す共、今召捕に來る迄は辛抱して居る也、舜の明德も四凶を罪せられずば、天下に明かなるべからず、希くは奸商一兩人を刑に行ひ度し、併諸國にて出し出す品の産物、都會へ出さずして、何方へ賣捌べきや、暫く人氣の居り合を待ち、奸商終に角を落して降參する時を待べき事也、三十年來漸々に超過したる物價を壹年や半季に下落させんとは無理也、堯舜も猶病諸と有るを以て察すべし

六 諸職人云ひ合せ、作料手間賃等高直にすべからず、諸商賣物或は一所に買置〆賣し、或は云ひ合せて高直にすべからざる事、前々より御制禁の一ヶ條にて、高札の表に明かなり、然るに冥加金を取仲ヶ間を立させ、諸人の迷惑を顧ざるは、誰が不調法なるぞ、藩翰譜に出たる伊丹家の譜をみるべし同書五之卷に云、播磨守源康勝寬永十九年三月三日、初て勘定頭三人を置れし時其第一に撰れき、年老て頭の毛禿なりければ、おのづから入道して順齋と號す、此人農を勸め商を通じ、民と共に利を同うしける名譽、天下の人語り傳ふる事まことに多し、たとへば當時商人の抽分の料とて、（世に運上金といふことなり）黄金を公に奉りて、甲斐の國の郡內より出る紙を、（世にはな紙といふものなり）壹人して買ふて商ふものあり、然る

に又とめる商人ありて職につきて、今迄の人の奉りしより黄金一千兩を增して奉るべし、某が紙買ふ事を免じ給へと云ひてきかず、此望請ふ商人は執政の人々にも皆知られたる者なれば、內々執政にも此由を申て、望請ふ事止まず、三年の後執政の人々順齋に向ひて、甲斐の御領より出る紙の事望請ふ者あり、同職の人々免すべしと有れど、わどのひとりが用ひぬといふは誠か、天下の富より見る時は、千兩のこがね實にすこしき也といへ共、是を以て國用をたすときは豈貲なしとせんや、いかで免し給はぬにやと問ひけるに、順齋是を聞て、今より後偸盜の起り候ぬ政だに候はんには、如何にも免しなんと答ふ、人々心得ず、如何なる事ぞと云へば、本朝の唐土より誠にすぐれたる物は紙の品なり、中にも小紙といふ物は、高きいやしきに至りて、一日も無くて叶はぬ物にて、其價のいやしければこそ、世のたすけとはなれ、望請ふ者が今迄の商人の奉りしより千兩の金を增して奉らんと云ふは、此千兩の金何方より出づべき、此紙を商ふに價を增して、其利を得て奉らんとの事にて候、彼れまづ價を增して商ふを、又それを買なしてあきなふ人幾等もあらんに、是を同じく利を得て商はんとせんには、爰に加はりかしこに增して、後には價甚貴くなりなん共、一帖の紙あたひ一二錢をましたらんには、資ある人の累となるにいたらず、貧賤の人一日に得る所の利誠に少なし、わづか一錢二錢を重ねて妻子を養ふに、斯あさましき者とても、今日までは小紙やうの物を常にもらひ來れり、價忽に增したればとて、更に何ものをもつてか是に替ふべき、然らば是にも又おのれ〳〵が商ふ物、何にもあれ其價を增

して、其賣る所の利を取て、小紙を買取候より外の事あらじ、凡一物の價ます時は、萬物の價も同じく貴く成事皆此如く、物毎の價貴く成に至て、求んとして得ざる時は、或は飢或は凍ゆ、飢ると凍ゆるもの極りには必死す、死する者其守る所を失なはぬは、士より上つかたの事にして、下つかたの者は飢ても死す、凍えても死す、死は共に一定なり、同じく死する命なりとも、いかにもして一日も世に有まほしく思ふは、賤しきがならひ也、扨こそ盜は起る事にてぞ侍れ、是はたゞ農と商との事の樣に候へ共、士のめし仕ふ婢・僕從等も、物の價貴くして求て得ねば盜む事同じ、斯偸盜の世に行れん時に至りては、如何なる政を以てこれをとゞめ給はんや、是等の盜はみな貧と賤しきとより起る事にて候か、夫より今かく民を免るして利を爭はずば、其利上に歸する樣に仕給はんには、天下其風になびき、隨つて商人と共に利をあらそひ、各其欲する所を得んと思はん、是等は盜せぬ盜人にて、其禍盜より增て、當代既に天下の富を保ち給へば、世の寶こと〴〵く御寶ならざるはなし、且は上の費をだにはぶかせ給はゞ、一年の內に積む所の御寶幾千萬兩の事にてか候べき、夫にわづか千兩の金をまさんとして、民を苦しめ世の風をみだり給はんは、身のしゝむらをそぎて飢を救ふに、腹の滿る時則身の終るたとへに同じかるべし、大略天下の物價貴く成行は、國郡に抽分の多く有が致す處也、入道既に年老たり、頓て死し候べし、相構へて此後もかゝる事申す者ありとも、人々能心得候へと云ければ、皆皆深く感じけるとなり」以上新井白石先生の註し置れたるを考ふれば、寬永の比紙の運上といふ事既に

有て、順齋入道は增金の事を論じたるにて、今日問屋・組合・仲間等唱候儀、停止諸運上悉く御免といふ事は、實に未曾有の御仁政なり、扨右申付候趣不二相用一、組合無レ之候ては差支候抔と申觸、又は內々申合願立等致す者有レ之候は、時刻を不レ移嚴重に吟味之上、御仕置可二申付一との御觸なる故、下方より願出べき筈は無きに、京都は奉行所抔より種々差支を言上せられしが、瓦師・左官・檜皮師・鍛冶、幷餝師・疊・翠簾師等一旦潰れたる觸頭年番を呼出し、是迄の通に取締可レ致旨申渡有レ之、再び鑑札を渡、徒を結ぶ様に成しは、如何なる事にや、何も觸頭年番を賴むに不レ及、奉行所より直に取締度事なるを、此御時節に右の如く成る時は、假令株仲ヶ間の唱は不レ致共、觸頭共は萬古不易の家督と心得、大に權勢を增したる由、其外酒屋・米屋・兩替錢屋等常に奉行所へ往來する者は、何角に事を託し、內々仲ヶ間を解かず、時を待體みえたり、能々按ずるに、株仲ヶ間の文字や唱へに惡事はなし、其渡世を狹ばめ他の差支をするこそ不埒なるに、號をのみ停止して、結黨を其儘に置くは、心得ぬ事にこそ

七　今般の如く天下の花美を禁じ、質素に復する様仰出るゝ事は、私領の國々其所に寄、少々寬嚴の差別有べきなれ共、京・大坂・伏見・奈良・堺等直轄（公儀御直支配所）の地は、奉行所よりの制度故、一事兩様は決而有間敷事と存る也、然るに京都六條新地の米市、幷小川猪熊の米賣買所迄差留めと成り、米相場は一切相止みしに、大坂堂島は依然たる上に、其相場の移りを取る江戸堀・東天滿、及び島之內久左衞門町三ヶ所の帳合米も、是迄の通にて冥加金計被レ免、株主を市頭と唱へ替へて、其儘人集をするは、

北驛の小博奕は罰せられて、市驛の大博奕は見遁さるゝに同じ、是京都（祇園町・二條新地・北野・五條橋下等）四ヶ所の遊女商賣人は、寛政のはじめ松平越中侯御内意にて、島原出張の心得を以て相立有之所、端々茶屋渡世一般又差止と成り、唯島原傾城町の一廓而已へつぼみたる所、浪華は山陰・山陽・南海・西海之海陸出口にて、諸國之商旅等も立廻り候場所迄、江戸御府内出口、品川・千住・四ッ谷・板橋等の四宿振合を以、新地（安治川上一丁目より同二丁目まで）并曾根崎新地（一丁目より三丁目まで）、道頓堀（立慶町日本橋より西吉左衛門町五丁目迄、湊町[illegible]西側迄）三ヶ所へ新規食盛女付旅籠屋を被ㇾ免、（京都は皇居首善の地にて、遊興の賤女を大内近くと唱へ、東國の果より參り、或は本願寺門徒の男女六條參り、其外諸國の往來米商人等も多く入込む所に候、[illegible]傾城町は此にあらずや、然るに江戸大坂に準ぜられぬは如何）其餘新町廓の外は、堀江揚か枝新地等の遊所は不ㇾ殘差止に成たる由承れ共、遊女が食盛女と替りたる迄にて、殊に道頓堀幸町は西の方海邊迄續き、廣々たる地面にて、此上何百何千軒の家建も勝手次第なれば、御改正以前より淫市倍増に成り、夫故京都河東宮川町等の賣婦藝妓、各家内連にて大坂へ引越もの數百人に及び、元來良家の子弟を損ふ遊所者の減ずるは土地の幸になれ共、此方の奉行所は無慈悲彼方は御憐愍と取沙汰する由、是は何國何方へ行ても遊民は住み場無之を、天下の御政道と社中せ、大坂へ引越せば不正の働が出來る故、正路の渡世に立戻る者稀也、併大家の女を數多抱へ居るは、急に家を賣る事も出來ず、半分は島原へ引越、半分は河東に殘り、傾城町へ行者も又少なからず、差當り廓は繁昌する如くみゆれ共、市中室町邊の呉服店等追々貸家札を張る故、花洛の衰微は必せり、夫に引返へ、當春大坂は十日蛭子の參詣例より群集甚しく、怪我人も有りし位と喋々敷話し、御奉行を

神佛の樣に難ㇾ有がり、旅籠屋町に報恩の爲に、挑燈を出し献燈をする、其驗にや今般東都の市尹に拔擧せられ、夫に從ふ與力内山某も、御目見以上の御直參に被ㇾ仰付ㇾ樣と浮說する事、實否は兎も角も時に當ての僥倖と云ふべし、聞近き京坂の制度右の如く異同あれば、遠き國々は嘸かしと思ひ遣らるる事共なり

八　三都の內京都程米穀諸式運漕の六ヶ敷所は無し、太平記に、楠公が足利將軍の大兵を京都へ入れ、自身河州へ引取、其粮道を絕んと被ㇾ申たるを以て能々察すべし、其妙策なる事は天保丁酉の歲米穀挪底之節、大坂奉行にて京都へ登米を差押へられし時に思ひ知りぬ、智將の見る所又格別也、此頃町人の馬に乘、武藝を稽古する事をも被ㇾ禁趣の觸書出たり、尤左も有べき事ながら、竊に思ふに、是は其儘に捨置ても强て害なきもの歟、夫よりは侍の武道を辨へずに居る者を勵む樣に沙汰有度事也、後世萬萬一盜賊如き徒黨の起りたる時、警衛の大名籏本方は、重に御所方幷二條御城を固めらるゝ故、外廓封境の口々は、兩町奉行組の與力・同心を手分けして是を防禦せんに、決而人數不足なるべし、左樣の節出家山伏、或は町人・百姓の壯者を撰み、町々へ持場割をして梯を持たせ、礫を打せ防がす事軍法の一ッなり、兩組の與力・同心平日は御威光を貸りて市中を橫行し、白眼を以て世間の人を蔑視すれ共、素破强盜・あばれ者を召捕る期に臨めば、悲田院穢多を先に立て、銘々は尻込みする事常にて、去年江州の百姓騷動の時も、是を鎭むる智惠さへ出ず、逃退たる臆病者も有り、彼六波羅攻に北條家兩探題

の兵三萬あれど、半分は更代にて戰に慣れざる故、唯濠を深くし壘を固めて守りし事見えたれば、心掛ある人は兼々非常の覺悟をも論じ、武器・兵粮の手當をも考置度事なり

九　寛政の頃、執政白川源侯御書付に、諸國城主等は能き家來多く、其國郡能く治り、文武の道をも行はれ候、唯風俗正しからざるは、御旗本以下の御家人等歎くべき事に候と有レ之、其御家人の中にても、今日御政道に携る者の文盲成るは危き事也、一郷の支配を司り公事訴訟を承るからは、物の義理を辨ふべき學問專用なるに、讀書と云へば四角なる漢土の文字を讀んずる儀と心得、此方は嫌ひ故不レ致、あの男は好き故學ぶ抔と云ふは、尤可レ笑事也、學問の第一は何と申せば、親へ孝行、君へ忠義にて、その忠孝の仕形を吟味する事なるに、何の好き嫌ひを論ずべきや、左樣の不案內故、師を撰ぶ事も知らず、詩文章を學問と心得違居る俗儒を賴み、我子を入門さす故、人の人爲る義理は終に辨へず、本を口拍子に讀み、師家へ通ふ途中にて、商人の小者を理不盡に打擲し、或は犬を逐ひ廻はし、不作法のみ增長すれど、其親が形の如き人物ゆゑ、偶々子の惡事を告る者あれば却て立腹し、少も敎戒はせず、町奉行組抔は別而子共迄風儀不レ宜、重役公事方を勤る者の上へ見ぬ昔の羽振を望み、金銀を摑み取を手利きと羨む也、是は歌舞妓狂言の舞臺で捌きを勤めて、樂屋へ這入れば茶碗酒を吞み、塞を投ると同日の談なる歟、芝居役者は惡人の藝をしても、心の善なる者あるべし、然るに役人は白洲で金銀滯の濟方を申渡せど、夫は表向の役前なりと心得、銘々借用買掛りの決算はせず、貸方より

賄賂を貰ふて滯を嚴刻に取立るは、表裏の相違にして、老分重役右の如くなれば、若輩番方の面々抔、遊所へ行にも花代を拂はず、酒狂にて百姓を切殺しても、又女を連て欠落しても、內證手切に是を揉み消す故、他組の樣にばつと風聞せず、然れども町奉行組程無人情不取締は無し、是を耻る者は學問して自身行狀を嗜み、子弟の教導をも致度事なり

十　世に無學の人程危きはなし、夫も無智の者は左程の惡をせざれ共、才智有つて義理を辨ぬは、多く贓吏に成る也、余が町奉行所の弊風を論じて、自警錄と號し物を書畢りたるは、天保己丑の冬十二月廿八日の事にて、夫より六十日餘りの後、庚□三月二日目付方は昇役せし處、同月十一日當組與力の內、公事方出頭の何某不束の風聞御聽に達したれ共、格別の御用捨を以御暇被₂申渡₁しかば、彼與黨の人人は余が發奸摘伏せし樣に思ひ、後々迄憤を含みたる由、然れ共何某御咎は、所司代よりの御沙汰にて、同時に御手與力をはじめ、伏見・奈良等の諸組にも、不正の者を退けられし向あれば、余が預りたる事にあらざるを察すべし、況や彼自警錄は篋中に秘めて人にみせず、一二の心友に示したるも遙か後の事也、扨前後七年余が目付方を勤たる中は、聊か弊風改りたる樣なりしが、近年奉行所の威權日付の與力・同心にわたり、御政務の樣子も一變して、盜・かたり・人殺の惡黨は頓着せず、唯富有の町家の者御法を犯したるを、俗に鵜の目・鷹の目と云ふ如く穿鑿する事流行、天保丁酉米穀高直の節、紛敷耕を遣ひたる者、（三條業揚中屋嘉兵衞をはじめ）同辛丑の年銀具御制禁を用ひざる輩、（木屋町松原上ル藤澤九兵衞の類）當人は申に不ㇾ及、連

程の者迄悉く召捕はれ、囹圄に久繫せらるゝ者數百人、無宿は知らず、都下の町人獄中に斃れ、杖下の鬼と成る者、五ヶ年の間凡貳百人餘といふ、（村田屋作兵衛・若山屋喜右衛門等如き其科に行はるゝ者は論なし、爰に二百人と記す者は、全罪狀不分明更死の如き者を云也、元來富有の町人は無實と謂ひ、違背するものにあらず、殊に人殺・強盜之外、罪科未決の内は牢へ入候儀有間敷旨の御定もあるとぞ）此外罪狀相分り、死刑・追放等に成て、家財收公せらる る者も數十人有り、左樣の向は初發牢舍の砌、居宅・山林・田畑等を改め一々帳面に記し、落着の節闕所方へ其帳面を引渡す事定法なるに、掛り與力の自儘に珍器奇貨の類は役所へ取寄せ、明き土藏へ入れ置內鼠の引如くぽつ〳〵と失せたるもあり、又本人の貯金及び貸付證券夥敷有レ之由、是は如何なりしや、或人云ふ、有證券は內々借用主より手を廻して返し囉ひ、有金は下役の芝居掛りの者と申合せ、顏見世狂言の銀主をして高利を設け、大坂へ召捕ものに藝妓を連て下るやら、或は妾宅の月賄に子母とも數千金を減ぜしとぞ、是は餘りの事の樣なれ共、朱子文集卷十八、「按、唐仲友第三狀云、一自レ到任一以來、錄二公庫一實錢、賣酒、錢額既高、督二責兵官吏一、逐日捕捉、私造二酒麴一、及羅二糴米造麴一者、所レ犯之家與二四鄰一、盡是籍二沒貲產一、以充二自立賞錢格一、所レ犯止二於升合一、亦不レ能レ免、兩年中破二壞二千餘家一、其間久繫二囹圄一染レ疫、而死者甚多、所レ犯甚輕、並出二私意一、文二致其罪一、至二於徒配一、如二兵士盧宗之類一、閤郡軍民寃恨、無二一日安迹一、」爰を以考るに、和漢今古贓吏の其情態相似たり、全虛說にもあらざる歟、夫は兎もあれ、爾後諸人の捕捉を恐るゝ事、さながら虎狼蛇蝎の如く、假初にも町會所へ呼ばるゝ時は、其妻子中半年行事の手に縋りて憐を乞ひ、親類は居村小屋頭の役を潛りて哀を告ぐ、斯て放免に

逢たる者各貳百三百の禮金を贈り、終に賄賂公行の世の中と成りしとぞ、何故輕き中坐輩へ斯ばかり大金を贈るぞと問へば、其事に預らぬ仲ヶ間數十人へも分ヶ口を配當して、若後日他より告る者有らん時、口を揃へて申陳べき爲とぞ、惡むべきの甚敷事也、猶是が上に立つ賊吏の貪濫暴惡を詳にせんは、筆紙も穢るゝ計なる故記さず、その頃の落し話に、所は室町通の一富家へ夜盜三人押込けるに、亭主早く起出て袴をはき燭臺をともし、是は能こそ御來臨被レ下難レ有と、三人を坐敷へ案内しけるに、兼々用意致せしや、毛氈を敷速かに酒肴を出しもてなす事甚敷、盜賊も不レ存寄レ事故痛み入、そこ〳〵に呑喰を仕舞立歸らんとする時、亭主百兩包みを三ッ臺に乘せて三人に贈りしかば、盜賊大に氣毒がり、ヶ樣に馳走に成りたる上金を貰ふては、何とやらお目付の御役人樣のやう也と申せしとぞ、誰が作爲せしや、賊吏頂門の一鍼とも云ふべし、扨前に述る如く、在牢小屋下預ヶ、又は寺裏天領の會所預けに成る者次第に夥敷相增す處、却て公事訴訟は無レ數成行、毎月十日の御用日に、東西町奉行の御立會は稀也、是は前々は訴訟日にても寄合ありしに、近年は公事一ト口にては立會無レ之、當病の姿にて斷相濟、日安裏判は壹人にて出さるゝ故、如レ此奉行方は御用向も閑暇なるに、與力・同心は何歟事多く、日日御役所へ被レ呼もの共門前に屯し、神泉苑町公事宿の繁昌目ざましき體に成、花奢も又甚敷、是は諸會所仲ヶ間の願立出入繁きに寄る所といふ、昨年二月嚴令ありて、今はむかしの割子辨當に替りたれども、一二を爰に記して後の戒とするのみ、實に上寛なれば下慢るの習ひ、衙門より數歩に足らぬ宿

屋の座敷に、松竹梅の間を分けしも近年の事にて、島原の角屋はしらず、公事宿始りて後古今未曾有の事共也、譬へば松の間へ通る客には、酒器・膳具迄悉く松の蒔繪を用ひ、竹の間には唐紙・襖・座布團迄竹の模様を並べ立、梅の間は給仕の下婢が前垂も梅花の小紋を揃へるといふ程なれば、料理も夫に准じて、三月の初茄子・九月の筍など手を盡して、一ト比三井本宅の讓り狀御割印願ひの支度入用銀拾貫目かゝり、又毎年古町年寄江戸下りの道中御證文頂戴は失脚壹貫目宛費る由、此外初春元日・二日諸仲ヶ間會所の出禮には、必ず公事宿へ立寄、懇意の町代小番付込て、祝酒を酌みかはす事往例に成り、夏向は水論出入の庄屋どの村入用で河東の遊所通ひ、藝妓仲居に送られて行もどり、或は宿の下女に馴染で不時の金を取らるゝも有れど、誰有て咎めず、結句是等より組屋敷へ内々賄る重組取肴など、宿のあるじが取次にて、日々兩奉行臺所用の肴迄、神泉苑町より荷ひ込む勢ひも、終に株仲ヶ間會所潰れて在郷宿にもどりしは、陣鼓叩き破れて聖代の趣があたりしならん、然るに右の嚴禁も又次第に跡戻りして、舊臘二十七日盗賊かゝり合の者富小路御池邊の寡婦の由落着に付被二呼出一たるが、夕七ツ時の白洲申渡に曉七時より相詰め、寒天に終日さらされ堪難き儘、町役人等へ支度酒肴を振舞たる入用銀四拾目餘相費え、被レ下處の衣類は價五百文計の單ものなりとぞ、此外雜色町代部屋に相詰居る物書共、常々公事人の訴答を認めて金錢を貪る惡弊あり、舊冬諸願自筆又は町内にて認參る樣、觸事は差出されたれ共、右の物書共に認さす共勝手次第との事なる上、自筆の書付は雜色町代小言をいふて取次せぬ故、

矢張物書ども時を得たり

十一　今日刑罰に行はるゝ者、各律例を考へたる上に夫々の申渡あれば、決して濫なる事は有間敷儀ながら、盗賊ばかりは餘程役人の私恩をかけて、所謂筆先にて首を繼るゝ者多し、是は元來盗人の刑重き故也、物を盗む者大方忍び入ならざるはなし、初犯に夫を斬る事も、餘り殘酷の樣なればしばらく恕して、夜盗を晝鳶店先の盗とし、入墨・敲拂位にて相濟す故、盗賊共役筋の者を旦那と敬ひ其手先を働き、蛇の道はへびが知る譬への通り、折には大盗人などを嗅出、手柄をする代りに、己が小盗をして世渡りするを見遁し貰ふ事、京都の流弊也、元より此類の盗賊を切蓋したり迚、盡し難き事なれば、刃物抔をもて人を刼かし物を取る强盗の外は、假令大金を盗むとも家藏へ忍入らざる者、又家藏へ忍入ても十兩已下の盗人は徒罪にして、遠國の新田開發場・蝦夷地等迄も渡して、歩役に働かすべし、此頃無宿・非人の寄場出來たれ共往々取締如何なりや、願くは伏見の葭島、江州の沖の嶋抔の如き四方に水ある所へ遣り度もの也、扨又近日不如法の僧の遠嶋に行なはれ、出立するをみたる人、彼の僧の荷物等衣類を簞笥に入、或は弟子法類より大金を贈りたる抔いふを聞て、公法の寛に過たるを議したるは尤也、既に先年二條殿の中間部屋頭吉五郎と云者、人を殺して流罪に成りたる時、子分より金百兩贐し、夫を嶋にて貸附安樂に暮したる由、嶋へ行ずは生涯京にて押借り博奕等をして、今日を送るべき者の、人殺が幸ひと成、金貸と迄經上りしは可笑事也、是等も役人御法に暗くして、流は死に續きた

る重罪にて、絶島へ遣り餘命を終らす迄の御仕置を知らず、金銭衣類等を過分に持せ遣り、常人の宅替する様に心得しは甚誤也、又近來在牢の者へ濫多に宅より肴・菓類を差送る事のよし、是も壹月壹度の御法にて、華麗なる品を決して許さず、然るに町家の者抔は食物を入る丶時は、相牢の者に呵嘖せられずとて、平日給べぬ程の珍味などを拵へ、度々差入願を致すに、兎角差當も無く官にて聞濟み有るは、當らぬ樣に存れども、江戸表抔は牢内へ金を持遣入て、望の品を注文し食する趣なれば、強て論にも及ばざる歟

十二　扨是迄は京都の弊今く除かれざるを云ふ也、大坂の事は委しく辨へざれ共、旅籠屋町遊女の賑ひをみれば、弊の弊を加ふるもの、京よりは又甚しき様也、是を唐宮の大病人を療治するに譬ふる時は、京は流弊の内攻にて、梅毒次第に裏に入、大坂は流弊が表へ發して、黴瘡の楊梅瘡に變じたる様に見ゆ、何れも急には本復すへからず、朱子文集卷十一戊申封事云、蓋臣竊觀今日天下之勢、如人之有重病、内自心腹、外達四肢、蓋無一毛一髪、不受病者、雖於起居飲食、未至有妨、然其危迫之證、深於醫者、固已望之而走矣、是必得如盧扁・華佗之輩、授以神丹妙劑、爲之湔腸滌胃、以去病根、然後可以幸於安全、如其不然、則病日益深、而病者不覺其可寒心、殆非俗醫常藥之所能及也、故臣前日之奏、輙引藥不瞑眩、厥疾不瘳之語云々」右朱文公の論を以て流弊の内攻を察すべし、譯もなく補劑を用ゆるは、下手醫者の療治にて、病除く時は一旦癒るもの也、その癰が極ら

ずば肥立事は無き道理也、島原邊の良田を潰して埒もなき人家や芝居を建て、態々市中を離したる傾城廓を壹貫町迄續ける抔、今日の御趣意に相違したる制度、此一條を以眞の治療にあらぬを察すべし

十三　東都は追々御改正の御沙汰嚴密にして、今般御勘定、并に支配勘定等勤向如何の者五拾八人、一日に黜職被レ仰付一たる由、向後司農府御取締に掛る人々は、聖賢大學の旨趣を能々辨へ度事也、夫も迂儒輩の講釋を聽くは役に立ぬ事也、三輪執齋先生が註解至極明白なれば爰に拔抄す、天下の經濟に預る人々なれば、責て此位の事にても辨居るべし、一古本大學解云（序ニ、享保十二年丁酉正月十二日、後學三輪希賢操ニ筆于武州小石川之寓舍一、予時得ニ老奴畏火之罪一蟄居トアリ）一生レ財有ニ大道一、生レ之者衆、食レ之者寡、爲レ之者疾、用レ之者舒、則財恒足矣、」生民ノ道上一人ヨリ下萬民ニ至ルマデ、衣食住ノ三ツ、一ツ欠テモ生ヲ保ツコト不レ能、故ニ人君爲レ之ニ仁政常産ノ法ヲ制ス、皐陶六府ニ穀ヲ云、洪範五行ニ稼穡ヲ擧玉ヘル所ニテ、平天下ノ事業必生財ニ及ブ所也、是皆衆人ノ知ル所ナレドモ、大道ニヨラズシテ唯コレヲ生ゼントスレバ、必德ヲ外ニシ財ヲ內ニス、是國家ヲ合セテ失レ之トコロ也、大道ノ字上文ニ出テ、言ロハ君子ノ道大道アルノミニ非ズ、生財ノ道亦此大道アリ、コレニヨラズシテハ必定財ヲ生ズルコト不レ能也、夫德ヲ本トセズシテ唯財ノミツトムレバ、爭奪ノ教ヲ施スニナル、故ニ上下交利ヲ征リテ國危キコト、古今和漢其アト歷然ナリ、紂ハ鹿臺ノ錢・巨橋ノ粟ヲ畜ヘテ一身亡ビ、武王ハコレヲ散ジテ八百年ノ基ヲ開キ玉フ、所レ謂大道ハ下文四ケ條是也、此外ニ財ヲ生ゼントスルハ皆小道ニシテ、害必コレニ從フ、カノ通行ノ大路ヲ歩スレ

バ、小兒・盲人モ怪我ナク行得至リ、荊棘ノ小徑ヲ行ケバ丈夫モ害ニ遇ガ如シ、サレバ其大道ノ善コトハ誰シラヌ者モナケレドモ、華侈ニ多ク用テ用不レ足、自ラ己ガ欲ヲ制スルコト不レ能故ニ、大道ヲ行テ居テハ間ニ合ヌ故近道ヲ求ル也、夫財ハ天地ノ生氣也、人タル者子ヲ產テハ、母ノ身ヨリ乳味ヲ生ジテ養レ之、天ヨリ人間ヲ生ズレバ、必草木・鳥獸ヲ生ジテ養レ之、自然ノ理也、故ニ利欲ニ心ナクシテ人事ヲヨクツトムレバ、必衣食ニ事缺コトハナシ、學也、祿在二其中一也、一向衣食ヲノミツトムル者、必富ル者ヲ見ズ、耕也、餧在二其中一ナリ、サテ又外ニ不レ求シテ能大道ニ従フトモ、自然ノ時節ヲマタズシテ、急ニ聚メテ生ゼントスレバ又必失レ之、彼苗ヲ拔ク類也、生レ之者衆シトハ農人ノ事也、農人ハ夫ハ五穀ヲ生ジ、婦ハ布帛ヲ織テ、生民ヲ養フ者也、國家太平日久シクシテ、文華甚盛ニシテ、工商ハ多ク百姓ハ寡クナリテ、本ヲ務ル者日々減ズ、百姓ハ多ク骨ヲ折テ利少ク、衣食麁惡也、工商ハ少ク骨ヲ折テ利多ク、衣食精美ナレバ、日々末ヲ逐フ者多クナルニ、又僧徒盛ニシテ、手ヲ束ネテ農商工男女ノ作リ出ス所ヲ費ヤス、是亦自然ノ勢ト云ヘドモ、生ル者ノ寡クナレル所也、若今華美ヲ退ケテ質朴ニ返サバ、國々府下ノ町々ハ必衰微スベシ、サレド市町ハワヅカニシテ農人ハ大分ナレバ、天下ヲ通視セバ富盛ト云ベシ、然ルニ工商利ヲ失ヒタル計ニテ、農人益ヲ得ルコトナケレバ、又生レ之者衆クハナルベカラズ、又農人多クナリテモ、可レ耕土地ナケレバ又食ヲ不レ得、今田野ヒラケ人民衆多ニナリテ、五穀水火ノ如ク充滿スベキ謀ハ別ニ論レ之、食レ之者寡トハ、人々其所業ヲツトメテ、コレ

ヲ以テ食ム者ハ、何ホド多クテモ害ナシ、サレドモソレモ身上ニヨリテ、多寡ノ分數アルベキ事ナル故ニ、大夫ハ官ヲ攝ル禮法アリ、況ヤ所業ナクテ祿ヲ費ス者多クンバ、用ノ足ベキヤウハナキコト也、ソノ所業ナクシテ祿ヲ費ス者多シ、今ヲ以イハバ、一ニハ僧徒、二ニハ能役者、三ニハ女寵ヲ以進ミタル者、四ニハ藝術ヲ以出身シタル者ノ子ノ世家者、凡如レ此ノ類其數多シ、一同ニコレヲ除キ去ベケレドモ、人情未レ服、人心未レ改ノ内ニ、急ニコレヲ治メントセバ、其害却テ甚シカルベシ、又其内ニハアハレンデ存スベキ者モ多カルベケレバ、卒爾ニ論ズベカラズ、只衆心ヲ安堵セシムルノ上ニ處置アルベキコト也、幷ニ別ニ論レ之、爲レ之者疾トハ、農ヲ勵マスコト也、「詩云、民事不レ可レ緩也、晝爾于茅、宵爾索綯一ノ意ヲヨク〳〵可レ考、凡富農ハ蹴鞠・圍碁・連歌等ニ日ヲ送リ、貧民モ相應ニ伊勢講・日待・寺建立ノ奉加、六十六部納經・西國巡禮等ニカヽリテ農事ヲイトナマズ、殊更關東ハ惰農多シ、勸農使ヲ置テコレヲ勵スベシ、其處置ハ別ニ說アリ、更ニ可レ論レ之、サテ如レ此ニコレヲ勵スト云ヘドモ、農人田畝ニ事アル時節歩役ニ指使フコトアレバ、カノ耕作ニ盡スコトヲ不レ得シテ、コレガ爲ニトオソシ、其第一堤川・除等也、川普請ハ夏秋ノ水勢ヲ考置テ、十月末ヨリモクロミテ二月中ニ功ヲ畢ルヤウニスベシ、土手堤ノ類冬築タルハ、土ノシマリカタマリモヨクテ堪ルコト久シ、其上春ヨリ末ニ作ントスレバ、一朝ノ水ニモ流レ捨リテ前功ヲ無ニスルコト多シ、タトヒ爲得テモ土ユルクシテシマリ不レ固、此類ノ事其品多シ、不レ可二畢論一也、又溝洫ノサラヘ惡ケレバ、百姓ノ精ヲ入タル功ヲ無ニス

ルコト多シ、夫糞シハ田地ノ食物也、用水カヽリハ田地ノ口咽也、悪水ハキハ田ノ便道也、糞シ少ケレバ地痩テ田地乏シ、用水ノカヽリアシヽレバ植付遅クシテ、又早ク旱魃ニイタム、悪水ハキ悪ケレバ水落ガタクシテ、水損ニ逢フコト速カ也、人ゴトニヨク知ルコトナレドモ、水道ウヅマリタルモ、吾一人ノ田水ノミヲ落ス所ニ非ル故、相互ニ譲リ合テ水道ヲサラエルコトナシ、禹王ノ力ニ溝洫ニ盡サセ玉フコト可レ考、養シノコトハ農人ノ自スルコトニテ、上ヨリ令スルコトニ非ズ、然ルニ農人ハ無知ナル者多ケレバ、目ノ前ノ利ヲノミ見テ末ノコトヲ不レ謀、里遠キ村々ハ別シテ糞シ少キ故ニ、干鰯・油粕ノ類ヲ用ユ、或ハ苅草ヲ牛馬ニ踏シテコレヲコヤシニスルコト、皆手ヅカヒヨキヤウニシテ、ムダ瘠ヲサセヌヤウニスルガ肝要也、一家ノ奴婢ヲ御スルモ、姑息シテ怠惰セシムレバ、家勢不レ振シテ物ノ用ニ不レ立、サレバトテ労セル計ニテ休スルコトナキヤウニスルハ、又アルマジキコト也、民ヲ親ム心ヲ不レ失シテ、怠惰サセヌヤウニ戒メツカフベキコト也、己コレニ先立テコレヲ誘ベキ也、其時所ニヨリテノ處置ハ、又別ニ論ズベキナリ、用レ之者舒トハ、一年ノ物成ノ所務ヲ考ヘテ、分際相應ニクラスコト也、天下ノ大ト云ヘドモ相應ニ又用ルコト多ケレバ、旱水ノ備アルコト不レ能、一旦飢饉ナドアラバ、必定餓死ノ者アルベレバ、ケ様ノ所ニ法ヲ設ケテ分量ヲ定ムベキコト也、是古聖ノ禮法ヲ定メ玉フ所也、王制ノ三年耕シテ一年ノ蓄ヲ存スル類、社倉・豫備・平價ノ類、各心ヲ用ヒテ永久ヲハカリテナスベキコト也、夫禹ノ天下ニ王タル、菲二飲食一而致二孝乎鬼神一、悪二衣服一而致二美乎黻冕一、卑二宮室一而

盡二力乎溝洫一」トアリ、飲食ヲ厚クシ玉ヘリトテ、孝ヲ鬼神ニ致スノ邪魔ニモナルベカラズ、衣服ヲ美ニシ玉ヘバトテ、黻冕ヲ美ニセラレマジキニモ非ズ、宮室ヲ高クシ玉ヘバトテ、溝洫ニ力ヲトヾカヌニモ非ルベキヲ、兩方ヨキヤウニハナラヌ者故、一方ヲ不足シ玉ヒヌルヲ、孔子間然スルコトナシト稱美セサセ玉ヘバ、輕クシテ事ノ濟ム所ニ財ヲ費スコトハ、聖人ノ戒ト心得ベシ、況ヤ始ニ於テ少モ華侈ノ方ニ流レバ、後世必ズ大ニ非分ノ奢リ出ベキコト也、如レ此ノ禹王ノ子孫ニ桀ト云侈リ者出來ヌルコト、歷然ノ明證也、ヨク〳〵可二反省一也、或ハ當代ニ奢肆ノ事ナシト云ヘドモ、前代宮中ノ華侈ニナレタル風ヲ改ムルニ不レ及シテ置モ、姑息ノ愛ノ類ナルベシ、又報本ニ似テ非ナル者アリ、佛事等ヲ盛ニスルノ類皆々可レ考也、然レドモ時處ニ應ジタル禮法ヲ缺グコトハ、又聖人ノ旨ニハアラザルベキ也、ソレ如レ此ノ大道ヲ以テ財ヲ生ゼバ、財必常ニ餘アリテ不足ナカルベキ也、故曰、財恒足矣

十四　右に云ふ生レ之者衆とは、麥飯を喰て働く百姓を大勢拵へる事、食レ之者寡とは、米の飯を喰てぬくり手して居る遊徒を減らす譯にて、是に付京都に拘らぬ事なれ共、天下の經濟を試に論ずる時は今日農工商の業をも勤めず、安座飽食して王侯の富をする者は、浪華の豪家町人共也、日本國大小名の權は悉く此輩に奪れて、薩藩・備藩抔の如き大國の主も、鴻池が島屋の鼻息を仰がるゝは口惜き次第也、されば迚右町人共の貨殖したるは、夫々初代の智力に依る事にて、諸侯の先祖武功鎗先を以國郡を領せらるゝと同じ道理なれば、無レ謂其產を滅ずる事も叶べからず、但し大名は參勤交代、其外公役

あれ共、豪家は其用なく、畢竟は遊民の大なる者を其儘差置るゝも如何なれば、何卒課役を被二仰付一、是迄の榮耀歡樂全く太平の御餘澤なる國恩を報くはすべき事當前也、其御用公役は、蝦夷地幷諸國金銀銅山等の發開をも被二申渡一、主人は云ふに不レ及、番頭別家手代迄不レ殘遠境遐地へ、一ヶ年代りの詰越を致させ、無レ滯御用を勤たる者は苗字帶刀御免、功に應じて御褒美をも賜るべし、左すれば平日淫酒に耽りたる罰をも時に行はれ、仕付ぬ艱難を仕覺て、身の養生長壽の種にも成るべき歟、竊に聞く、近年佐渡の金山も掘盡して、南部領の金山爲二見分一御普請役、金座人等被二差遣一趣なれ共、兎角公儀役人出役する時は、俗に云ふ雜用倒れに成て、事就り難きよし、蝦夷幷薩摩領金山の事は、左に徵するをみるべし

一　林子平ガ三國通覽圖說ニ云（子平ハ仙臺ノ人ニテ、此圖說及ビ海國兵談ナ著シ、禁忌ニ觸ルル事アルナ以テ罪セラル、絕板ノ書ナ引用スルハ如何ナレド、國家ノタメニ取ルベキ說ハスツルニ忍ビズ）蝦夷一洲ノ地ヲ五部ニ分ツ云々、其國ニ第一金山甚多シ、然レドモ掘コトヲ不レ知、空ク埋レテアル也、銀山・銅山亦然リ、又砂金ノ出ル地多シ、クンスイ・ウンベツ・ユウバリ・シコツハボロ等也、此砂金河水ニ流レ出ル耳ニ非ズ、砂金ノアル地ハ十里二十里モ土地一面ニ生ズル也、ハボロノ砂金ハ海底ヨリ打上ルト覺エテ、西北風ノ大荒シタル後ハ、海濱四十里ノ間一帶金色ヲナスト云リ、是等ノ金銀ヲ不レ取シテ、空ク捨置コト可レ惜コトナリ、竊ニ憶フ、今取ズンバ後世必莫斯欲未亞取ベシ、莫斯欲未亞既ニ是ヲ取バ、臍ヲ噬トモ遲カルベキ歟

○或說ニ、砂金ヲ取ンコトヲ欲シテ、ハボロニ冬ゴモリナドスレバ、極寒ニ攣レテ必死ス、タトヒ不レ死トモ病身・廢人トナル故行人ナシト云傳フ、小子按ニ、其事實ナラバ無術無謀ノ甚キ也、ハボロニテ寒氣ノ爲ニ人死ヌルナラバ、ハボロヨリ北方ノ人ハ何ヲ以テカ活ルコトヲ得ベキヤ、其寒氣ノ爲ニ人死スルト云ハ、暖地ノ人强寒ノ地ニ入テ、豫メ寒氣ヲ防ガザル故也、防グ術アラバ何ノ死ト云コトカアラン、可レ思云々、只可レ惜ハ金銀出ヲ不レ掘ト、土地一面ニ生ズル砂金ヲ取ザルノ二ツ也、何レノ時カ術者出テ、蝦夷地ノ金銀ヲ得ルコト有ン

一 佐藤元海翁薩藩經緯記ニ云、（薩藩ノ大夫猪飼央ガ求ニヨツテ著ス所、文政十三庚寅年三月自序アリ）貴藩ニハ金銀・銅鉛錫等ヲ含有スル諸山數多アレドモ、山相ノ學ニ通ジタル官人ノ無キヲ以テ、此ヲ鑿出シテ國家ノ利益ヲ興スコトヲ知ラズ、故ニ僞造ノ遊棍等人ヲ勸テ、無實ノ山ナドヲ穿テ金錢ヲ費サシム、大夫モ知ラルヽ如ク、予ガ本國秋田領ハ氣候冷ニシテ、木綿ヲ始メトシテ茶紙・鹽鐵ヲ生ゼズ貧窮スベキノ國ナリ、然レドモ土人山相學ニ通ジ、銅ト銀ヲ出スコト夥キヲ以テ國勢衰弱ニ至ラズ、此モ亦稱スベキ國ナリ

十五 今日武を講ずるもの、海國兵談を熟讀せずんば有べからず、實に作者が自滿の如く、日本の武備志とも稱すべき書也、昨年以來海岸御備の御沙汰に付而、林子が精忠ますく〳〵顯はる、一部の大旨は、序文にて分りたれば、未レ讀人の爲に附錄す

一 海國兵談序ニ云、海國トハ何ノ謂ゾ、曰、地續ノ隣國無シテ、四方皆海ニ沿ル國ヲ謂也、然ルニ

海國ニハ、海國相當ノ武備有テ、唐山ノ軍書、及ビ日本ニテ古今傳授スル諸流ノ說ト品替レル也、此ワケヲ知ザレバ、日本ノ武術トハ云ガタシ、先海國ハ外寇ノ來リ易キソケアリ、亦來リ難キイハレモアリ、其來リ易シトイフハ、軍艦ニ乘ジテ順風ヲ得レバ、日本道二三百里ノ遠海モ、一二日ニ走リ來ル也、此如ク來リ易キワケアルユヱ、此備ヲ設ザレバ叶ザルコトナリ、亦來リ難シトイフイハレハ、四方皆大海ノ險アル故妄リニ來得ザルナリ、シカレドモ其險ヲ恃テ備ニ怠ルコトナカレ、是ニ付テ思ヘバ、日本ノ武備ハ外寇ヲ防グ術ヲ知ルコト、指當テノ急務ナルベシ、サテ外寇ヲ防グノ術ハ水戰ニアリ、水戰ノ要ハ大銃ニアリ、此ノ二ツヲ能調度スル事、日本武備ノ正味ニシテ、唐山・韃靼等ノ山國ト軍政ノ殊ナル所ナリ、コレヲ知テ然シテ後陸戰ノコトニ及ブベシ、惜哉大江匡房ヲ始トシテ、楠正成・甲越二子ノ如ク、世ニ軍ノ名人ト稱スルモ、其根元唐山ノ軍書ヲ宗トシテ稽古アリシ人々ナレバ、皆唐山流ノ軍理ノミ傳授シテ、海國ノ議ニ及ベル人ナシ、是其一ヲ知テ其二ヲ知ザルニ似タリ、今小子ハ海國兵談ヲ作テ、水戰ヲ以テ開卷第一義ニ述ス、是海國武備ノ根元ナルガユヱナリ、日本ノ武備ハ此水戰ヲ第一トシテ、其上ニ又一ツノ心得アリ、其心得トイフハ、古ノ唐山ト、今ノ唐山ト、地勢人情トモニ相違シタルソケ也、マヅ日本開闢以來外國ヨリ來リ襲シコトハ、唐山ノ元ノ時代度々軍ヲ仕掛シナリ、就中弘安四年ニハ、大軍ニテ押來リシカドモ、幸ニ神風ニ逢テ鏖セラレタリ、是元君ハ北種ヨリ出テ、唐山ヲ押領シタル人ナレバ、元ノ代ハ唐山ト北狄ト一體ニ成テ、北邊ノ軍止果タリ、然ル

故ニ遠ク兵馬ヲ出スニモ、後ニ心碍ナカリシユヱ度々軍ヲ仕掛シナリ、是ニ付テ唐山ノ時勢ヲ考見ルベシ、三代ハ言ニ不レ及、秦漢迄ハ日本ノ廣狹、幷海路等ノコト詳ニ知得ザリシナリ、唐ノ代ニハ屢日本ト往來シテ、海路國郡等ノ事迄詳ニ知タレドモ、互ニ好ミ深カリシユヱ侵襲コトニ不レ及、宋ニ至テハ其朝ノ風儀懦弱ナリシユヱ是又來リ得ザリシナリ、扨宋ヲ滅タル者ハ北種ノ蒙古ニシテ、即チ元也、元ノ兵馬度々日本ヘ來リシ事ハ、上ニ云シ如ク唐山北狄一體ニ成テ、其境目ノ軍止果タル故、遠ク兵馬ヲ出シテモ後心碍無キ故也、其後明ノ世祖元ヲ滅シテ唐山ヲ再興シ、其政事柔弱ナラズ、能一統ノ業ヲ成セリ、此代日本ヲ侵掠スルノ議アリト云ドモ、北種ノ大敵日々月々ニ襲掛リシユヱ、遠海ヲ絕テ來ルニ遑ナシ、其上太閤ノ猛威朝鮮ヲ陷レテ、北京ヘ入ベキ勢ヒニ辟易シテ、侵シ伐ベキ隙ナカリシ間ニ、又韃靼ニ亡サレテ、康熙以來唐山韃靼又一體ニ成テ、今ハ愈能一統シ、北邊愈能太平ニ成シゾ、此故ニ遠ク兵馬ヲ出スニモ後ノ心碍リナシ、其上康熙。雍正•乾隆ノ三主、各文武剛敵ニシテ能時勢ニ達シ、能唐山ヲ手ニ附タリ、必明迄ノ唐山ト思フコトナカレ、マヅ今ノ清ヲ以テ古ノ唐山ニ競レバ、土地モ古ノ唐山ニ一倍シ、武藝モ北風ヲ傳ヘテ能修練シ、情慾モ北習ヲ承テ剛强ニ移リ行故、終ニ北狄貪賂ノ心根次第ニ唐山ニ移リテ、其仁厚ノ風儀モ漸々ニ消滅シ、且又世々ノ書籍モ次第ニ精ク成行、亦日本ト往來モ繁ク、其上人心日々月々ニ發明スレバ、今ハ唐山ニテ日本ノ海路國郡等モ微細ニ知得タリ、竊ニ憶ヘバ、若クハ此以後ノ清主無ニ內患一ノ時ニ乘ジ、且ツ元ノ古業ヲ思ヒ合セテ、如何ナル無主意

ヲ起ス間ジキニモアラズ、其時ニ至テハ貪慾ヲ本トスレバ、日本ノ仁政ニモ不レ可レ慎、又兵馬億萬ノ多キヲ恃メバ、日本ノ武威ニ不レ可レ畏、是明迄ノ唐山ト同ジカラザルワケナリ、又近頃臥羅巴ノ莫斯哥未亞其勢ヒ無雙ニシテ、遠ク韃靼ノ北地ヲ侵掠シ、此ゴロハ室韋ノ地方ヲ略シテ、東ノ限リ加模西葛杜加（韃靼ノ東北ニアリ、堪カムサスカナリ）迄押領シタリ、加模西葛杜加ヨリ東ニハ、此上ヘ取ベキ國土ナシ、此故ニ又西ニ顧ミテ、蝦夷國ノ東ナル千島ヲ手ニ入ルベキ機シアリト聞及ベリ、既ニ明和辛卯ノ年、莫斯哥未亞ヨリ加模西葛杜加へ遣シ置ル豪傑ハロンマオリッツ・アラタルハン・ベンコロウト云フ者、加模西葛杜加ヨリ船ヲ發シテ日本へ押渡リ、港々へ下縄シテ其深サヲ計リナガラ、日本ヲ過半乘廻シタルコトアリ、就レ中土佐ノ國ニ於テハ日本國ニ在合阿蘭陀人ヘト認シ書ヲ遺置タル事モアル也、是等ノ事其心根可レ惛可レ恐、是海國ナルガユエニ來ル間敷鼎モ、乘人ノ機轉次第ニテ心易ク來ラルヽナリ、察スベシ、サテ海國ノワケト、唐山ノ時勢トヲ辨ジ得タル上ニ、又一ツノ心得アリ、其心得トイフハ、偏武ニ不レ陷シテ文武兩全ニシテ、國ノ大事是ニ過ルモノハナキニエ、野ニシテ無智ナル偏武ノ輩ニ任セ難キコト也、此故ニ日本ナルベキコトヲ欲シ願フベシ、偏武ナレバ野也、無智也、元ヨリ兵者凶器也、然レドモ死生存亡ノ係ル處ノ古代ハ都ニハ鼓吹司ト、淳和奨學ノ兩院ヲ置、國々ニハ軍團ト郷學トヲ置テ、皆文武ヲ教ラレタリ、又孔子モ文武兩全ノ意ヲ述テ、「有ニ文事一者、必有ニ武備一矣」ト宣ヘリ、其外黃石公ハ治世ニ職ヲ不レ忘ハ、國家ヲ保護スルノ道ナルコトヲ言リ、ソノホカニハ晉ノ六卿・齊ノ管仲・漢ノ二祖・蜀ノ孔明・我ガ神祖ノ如

キ、皆兩全ノ旨ヲ會得シタル人々也、其餘兵ヲ談ズル人和漢數多アレドモ、皆各其長ズル所ノミ傳授シテ、一方キ、ノ兵家ナレバ、兩全ト云ベカラズ、且又戰鬪ノ道各國土ノ模儀アリ、其大槩ヲ論ズル時ハ日本ハ其軍立小拵合也、血戰ヲ主トシテ謀慮少、只國士自然ノ勇氣ニ任セ、命ヲ捨テ敵ヲ碎事ヲ第一ノ戰法トスルユヱ、其鋒先ハスルドナレドモ法粗キユヱ、持重ノ位ヲ爲シ難シ、唐山ハ理ト法トヲ重ンジテ謀計多ク、持重ヲ第一儀トスルユヱ、其軍立ハ堂々タレドモ、血戰ニ至テハ甚鈍シ、是等ノコトハ日本•唐山兩國ノ軍記ヲ讀テ味ヘバ其鋭鈍ハ知ベシ、且寛永ノ頃涉田八右衞門•濱田彌兵衞等只九人臺灣ヘ押渡テ、阿蘭陀ノゼネラル（城代ノ事ナリ）ヲ擒ニ仕タル例モアリ、又安永中小子肥前ノ鎭臺館ニ遊歴シタリシ頃、崎陽ノ在館唐人六十一人徒黨シテ亂ヲ爲タル時、吾黨十五人鎭臺ノ令ヲ承テ相向ヒ、即時ニ六十一人ヲ討破リ、其栖籠タル工神堂ヲ毀テ歸レリ、此時唐山人ト手詰ノ勝負ヲ爲テ、彼國人ノ力戰ニ鈍キコトヲ親ラ試ミ知レリ、又歐羅巴ノ諸國ハ大小ノ火器ヲ專トシテ、其外ノ飛道具甚多シ、尤艦船ノ制妙ニ精クシテ、船軍ニ長ジタリ、殊ニ其國妙法有テ能治メテ和親スルユヱ、同國攻討コトナク、只相互ニ他州ヲ侵掠シテ己レガ有トスルコトヲ世々ノ勉トシテ、決シテ同國中ニテ同士軍ヲセザル也、是日本•唐山等ノ企及ザル所ナリ、兵ヲ提ル者此三軍情ヲ能會得シテ臨機應變セバ、天下ニ横行スベシ抑日本海國ノワケト、今ノ淸ハ古ノ唐山ニ優シユヱ、日本ニ於テ油斷ナリガタキワケト、三州各戰鬪ノ模儀ニ別アルノ三說ハ、日本前兵家ノ未ダ發セザルトコロ也、其未ダ發セザルワケハ、世々ノ軍學

先生皆唐山ノ書ニ本テ工夫ヲ附シユヱ、自然ニ唐山流ニ留テ、却テ海國ハ海國ノ兵制アルコトヲ發明セザル故ナルベシ、今小子始テ是ヲ言者ハ、深ク患ル所有テ、廣ク問切ニ考テ此旨ヲ得タリ、此旨ヲ得タリトイフトモ、尋常ノ世人ハ口外スベカラズ、口外スベカラザルハ謹愼ナレバナリ、小子ハ直情徑行ノ獨夫ナルユヱ、敢テ忌諱ヲ不レ顧、因テヘンゴロウガ事ヲ始トシテ、都テ外寇ノ來リ易キワケヲ有ノママニ書シテ、却テ海國肝要ノ武備ハ始レ此也ト云フコトヲ、肉食ノ人々ニ知ラシメント欲ス、故見聞スル處ヲ纂集シテ此書ヲ作爲ス、是吾小子德ヲ不レ量位ヲ不レ計シテ、患ルニ海國ヲ以テスルユヱンナリ、是併テ小子極テ僭偸之罪ヲ不レ遁コトヲ知ル、然ドモ人ヲバ不レ可レ取、言ヲバ可レ取、是吾小子德ト位ト不ニ量計一、此書ヲ作爲シテ言ヲ當世ニ危スル所也、而テ書成テ以テ躬ラ珍トス、然レドモ小子不才也、文獻不レ足、此故ニ字々句ヲ不レ成、句々章ヲ不レ成、觀者畫法ニ苦ムベキコトヲ恐ル、然ト云ドモ初學ノ士端ヲ此ニ開テ、文以テ戰法ヲ潤色シ、武以テ文華ヲ助ケ開クノ趣ヲ會得シ、文武相兼テ其精ニ至ル事ヲ得バ、即邦家ヲ安ジ海國ヲ保護スル一助ナルベシ、竊ニ是ヲ日本武備志ト云トモ罪無ン歟、只其文ノ拙ヲ以テ其意ヲ害スルコト無ンコトヲ希而已、時天明六年丙午夏、仙臺林子平自序

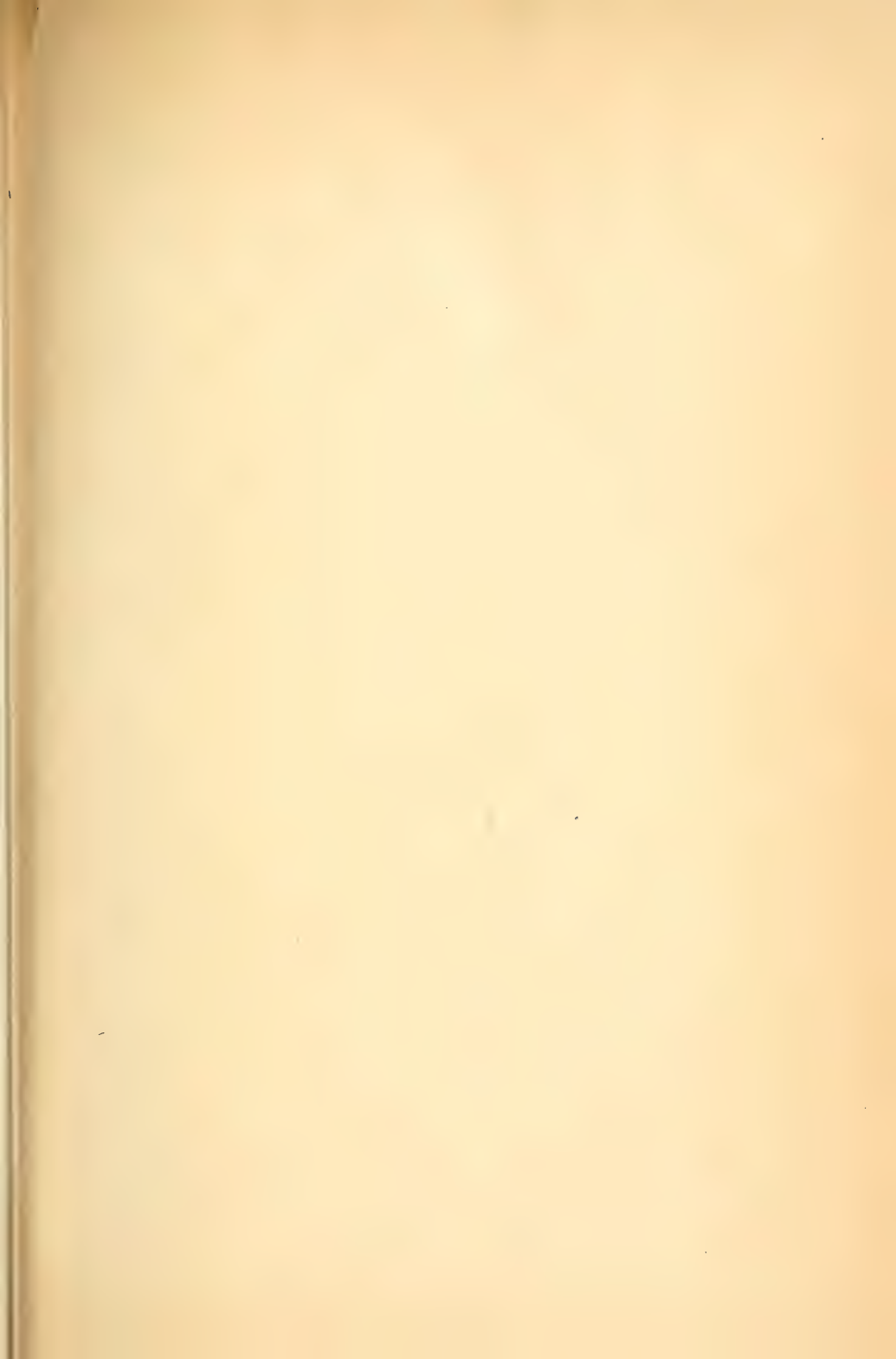
一　間書水戰之條ニ云、當世ノ俗習ニテ、異國船ノ入津ハ長崎ニ限タルコトニテ、別ノ浦ニ船ヲ寄ルコトハ決シテ不レ成コトト思ヘリ、實ニ太平ニ鼓腹スル人ト云ベシ、既ニ古ハ薩摩ノ坊ノ津、筑前ノ博多・肥前ノ平戸・攝州ノ兵庫・泉州ノ界・越前ノ敦賀等ヘ異國船入津シテ、物ヲ獻ジ物ヲ商ヒタルコト

數多アリ、是自序ニモ言シ如ク海國ナルユヱ、何國ノ浦ヘモ心ニ任セテ船ヲ寄ラル、コトナレバ、東國ナリトテ曾テ油斷ハ致レザルコトナリ、是ニ因テ思ヘバ、當世長崎ノ港口ニ石火矢臺ヲ設テ備ヲ張ガ如ク、日本國中東西南北ヲ不レ論、悉ク長崎ノ港ノ如クニ備置度コト、海國武備ノ大主意ナルベシ、サテ此コト爲シ難キ趣意ニアラズ、今ヨリ新制度ヲ定テ漸々ニ備ナバ、五十年ニシテ日本ノ惣海濱、堂々タル嚴備ヲナスベキコト得テ可レ期、疑事勿レ、此如ク成就スル時ハ、大海ヲ以テ池ト爲シ、海岸ヲ以テ石壁ト爲テ、日本トイフ方五千里ノ大城ヲ築キ立タルガ如シ、豈愉快ナラズヤ○竊ニ憶ヘバ當時長崎ニ嚴重ニ石火矢ノ備有テ、却テ安房・相摸ノ海港ニ其備ナシ、此事甚不審、細カニ思ヘバ、江戸ノ日本橋ヨリ唐・阿蘭陀迄境ナシノ水路也、然ルヲ此ニ不レ備シテ長崎ニノミ備ルハ何ゾヤ、小子ガ見ヲ以テセバ、安房・相摸ノ兩國ニ諸侯ヲ置テ、入海ノ瀬戸ニ嚴重ノ備ヲ設ケ度コト也、日本ノ惣海岸ニ備ルコトハ、先以港口ヲ以テ始ト爲ベシ、是海國武備ノ中ノ又肝要ナル處也、然ト云ドモ忌諱ヲ不レ顧シテ、有ノ儘ニ言フハ不敬也、不レ言ハ又不忠ナリ、此故ニ獨大罪ヲ不レ憚シテ以テ書ス ○當時日本ヘ來ル異國船ハ、唐山・阿蘭陀・朝鮮・琉球・暹羅等也、北方ニ蝦夷船アレドモ、未ダ本邦ニ來シタメシヲキカズ、タトヒ來ルコトアリトモ取ニ足ザル小船也、同ク北方ニ加模西葛杜加即カムサスカ也ノ黒船アリ、是又未ダ日本ヘ不レ來ト云ドモ、既ニ自序ニ言シ如ク、加模西葛杜加ノベンゴロウ黒船ニ乘テ、日本ヲ巡見シタルタメシアレバ、一圓ニ來コトナシトモ云難シ、其船ハ和蘭船ノ類ニシテ小城ノ如ク、堅實至極ノ船ト

聞及べリ、此船來ル程ナラバ、先當奥及ビ上下總州等ノ港口へ寄ベキ歟ト思ハル、是海路ノ順道ナル故、斯アルベク存ル也○竊ニ按ズルニ、日本開闢ヨリ三千年來、此大銃ノ備ヲ海岸ニ不レ設シテ、今ニ至テ猶安全ナリ、其上外寇ノ爲ニ嚴クタシナメラレシコトモ、今日ニ至ル迄曾テ有ラザルコトナルニ、今新ニ此海國ノ備ヲ事々シク言出スコト、且ハ思慮ノ過タルニモ似、且ハ新奇ヲ好ニモ似、又ハ狂言ヲ發スルニモ似タリ、然ト云ドモ天地ノ間人間世ノコトニハ、必變革アルコト定リタル理ナリ、必萬萬世々モ一定ノ今日ト思コトナカレ、其上ニ五世界ノ國々早ク開闢シタルハ、今年迄六千餘年遲キモ三千年ニ足ザルハナシ、然ルニ各國皆英雄豪傑アリ、各三千餘年ノ智ヲ積テ、天文・地理・海路等ヲ度量シテ掌上ニ見ルガ如シ、然ル故ニ相互ニ遠國ヲ侵掠スベキ工夫、五世界ノ英雄豪傑等互ニ是ヲ旨トスルコト、當世一統ノ人情トナレリ、就レ中歐羅巴ノ諸國妙法ヲ奉ズルノ國人、殊ニ此情多シ、然レドモ遠國ヲ取ルニハ、妄リニ干戈ヲ動サズ、只利害ヲ說話シテ其國人ヲ懷ケテ、然シテ後ニ押領ス、是ニ因テ憶ヘバ、今日本ハ歐羅巴ト路遠シ、其上彼ガ說話ハ、古來ヨリ取用ザル人情也、其干戈ハ路遠キ故施スコトヲ得ザレバ、我ニ於テ歐羅巴ハ患ルニ不レ足也、然ルニ竊ニ聞ルコトアリ、近年唐山韃靼ノ人等歐羅巴ノ人ト交親ト云リ、愈親バ唐山韃靼ノ英雄豪傑等妙法ヲ受ベシ、妙法ヲ受得バ侵掠ノ心起ルベシ、彼等侵掠ノ心ヲ起シテ日本ヘ來ル程ナラバ、海路ハ近シ、兵馬ハ多シ、此時ニ當テ備無ンバ、如何トモスルコトナカルベシ、熟思ヘバ後世必唐山韃靼ノ地ヨリ日本ヲ侵掠スル企ヲナス者起ルベ

シ、怠ルコトナカレ〳〵、是開闢ヨリ三千年ノ後、今日ニ至テ小子始テ發言スル所ナリ、竊ニ憶ヘバ此說話小子ガ度過タリ、若クハ鹽竈大神ノ託宣ニモアルカ、「此餘文武偏廢すべからざる儀、幷に國家の經濟に預る事をも述べたれど、惜哉林子は聖學不案內の人歟、古昔の聖人黃帝。堯舜。禹湯。文武。周公を軍の名人と稱し、或は本朝の武將を論じて、足利尊氏卿の智謀十四ヶ條を賞揚するの類、順逆の道理にも叉暗きや、夫も元來儒者にあらねば咎むるにも及ばず、兵談全部十六卷何卒官板流布を被ㇾ免なば、林子が忠魂を慰する事此上あるべからず、是予が竊に庶幾する所也

天保十四年癸卯三月三日

末黑のすゝき 終

救急或問

安井息軒著

救急或問

安井息軒著

或問曰、今日ノ勢外寇内亂ノ兆日ニ相迫リ、加レ之物價沸騰シ、上下困弊ス、民社ノ責アル者先其國ヲ富サヽレバ、上ニ事ヘ下ヲ安ンズルコト能ハズ、其道如何

答曰、治國ノ道布テ聖經・賢傳ニアリ、別ニ簡便奇妙ノ法ナシ、其要ヲ摘デ之ヲ言バ、修身明徳ヲ以テ本トシ、擧賢使能ヲ以テ用トシ、然後ニ官制ヲ定メ法度ヲ正シ、財ヲ生ジ用ヲ節シ、之ヲ助クルニ賞罰ヲ以テス、此事人々能ク言ヘ共、能ク之ヲ行フ者實ニ少ナシ、國ノ治マラザル所以ナリ、今試ミニ其略ヲ言ハン、其詳ナルコトハ聖經・賢傳・律令・格式等ニ就テ考究スベシ

一　修トハ修理ノ事ニテ、家室ノ壞レタル處、不便利ナル處ハ、修理ヲ加ヘザレバ完キ家ト成ラズ、人ノ身モ之ニ同ジ、臭ク穢キ處アレバ臣民信服セズ、「其身不レ正、雖レ令不レ從」ト云ル是レナリ、故ニ務テ其身臭穢ノ行ヒヲ除キ去テ修理ヲ加ヘ、全キ人トナルベシ、總テ人ハ善惡ヲ論セズ、己レニ類スル者ヲ悅ブ者ナリ、故ニ「取レ人以レ身」トアリテ、己善ナレバ善人ヲ取リ、己惡ナレバ惡人ヲ取ル、古來亡國ノ君モ惡人ヲ用ヰテ、己レガ國ヲ亡サント思フ者一人モ有ルベカラズ、唯々身修ラズ德明ラカナラザル

ニユエ、惡人ヲ賢人ト思ヒ、秕政ヲ善政ト思ヒ誤リテ、終ニ其國ヲ亡スニ至レルナリ、中庸ノ「治ニ天下國家ニ有ニ九經一ト云ル條ニモ、修身ヲ以テ首出トセルハ此譯ナリ、德トハ好心得アル、云、己レヲ薄クシテ人ヲ厚クスルノ意ヲ含ム、明德トハ左傳ニ「務崇レ之也」ト見エテ、好心得ヲ積重ネテ、天下ニ誰知ラヌ者モ無ホドニスルコトナリ、論語ニ「爲レ政以レ德、譬如下北辰居ニ其所一而衆星共上レ之」ト云リ、政ハ法度號令ノ類ニテ、民ヲ治ムル手筋ナリ、時ニ應ジタル善政ニテモ、權謀術數ヨリ出レバ民心服セズ、專ラ民ノ爲ニスル好心得ヨリ出レバ、民心誠ニ服シテ樂クノ星ガ北極ニ向ヒテ、之レニ背ケル星一ツモナキガ如シト云ルナリ、民心此ノ如クナレバ、財ノ多寡有無ニ拘ラズ、水火ヲモ蹈マシムベシ、故ニ人君ハ「修レ身明レ德」、勉メテ治國ノ本ヲ立ルヲ第一ノ務メトスベシ

一　修身明德ヲ勉メテ良臣ナケレバ、心アリテ股肱ナキガ如シ、堯ノ大聖スラ舜ヲ得ラレテ、後始メテ能ク四凶ヲ去リ、八元八愷ヲ擧テ、古今無類ノ聖代ト稱セラレタリ、增テ其以下ナル人如何程才學アリテモ、良臣ヲ得ズシテハ能ク至治ヲ成ンヤ、故ニ次ニハ賢能ヲ求ムルヲ肝要トス、然レドモ古ヨリ今ニ至ル迄、凡ソ君相タル人々材無キヲ辭トシテ、徧ク賢才ヲ求ムルコトヲ知ラズ、庸々碌々ノ徒ニ任ジテ空ク歲月ヲ送リ、上下困乏シ、終ニ危亡ニ至ルコト世主ノ常ナリ、古人此弊ヲ論ジテ、秦ハ人材ナキヲ以テ亡ビタレドモ、漢ヲ輔ケテ秦ヲ亡セシハ、皆秦代ノ豪傑ナリト云リ、總テ衣服飲食ヲ始トシ、其人ノ用ウル程ノ品者、必其地ニ生ジテ不足ナキ者ナリ、故ニ此地ニ獸類多ク、其皮ヲ用ヒ

テ寒ヲ防グニ足リ、南國ニ麻葛苧多ク、其皮ヲ績テ暑ヲ淩グニ足ル、人材モ亦此ノ如シ、其國ヲ治ムル程ノ人ハ、必ラズ其地ニ生ズル者ナリ、「古人世々不レ絶レ賢」ト云ルハ是レナリ、然レドモ書經ニ「知レ人則哲、維帝難レ之」トアリテ、人ヲ知ルコトハ極メテ安カラザルコトナリ、晋ノ桓温姦雄ナルモ、王猛ニ向ヒテ地方ノ豪傑ヲ問ヒナガラ、猛ガ天下ノ大豪傑ナルコトヲ知ラズ、故ニ我目ヲ以テ賢才ヲ見出サントシテハ終身其人ヲ得ルコト、能ハズ之ヲ求ムルニ法アリ、書經ニ「敷奏以レ言、明試以レ功、車服以レ庸」ト、又「三載考レ績、三考黜ニ陟幽明一」ト云ル語アリ、是レ千古人ヲ擇ビ用ウルノ聖法ナリ、「敷奏以レ言」トハ、其言ヲ以テ邪正才愚ヲ考フルナリ、治民・水害・救荒・墾開・理財・讞獄ノ類如何ニ處置シ宜シカラント思フ事ヲ、一二箇條宛題トシテ其處置ヲ論ゼシムベシ、勿論俗文タルベシ、才不才ハ知リ易シ、其言フ所民ト國トノ爲ヨリ辭ヲ立ルハ、正忠ノ人ナリ、專ラ君ノ爲メヲ主トシテ、民ト國トヲ次ニスルハ、小忠ニシテ治國ノ大體ニ通ゼザル人ナリ、上ノ好ム所ヲ主張スルハ姦人也、「明試以レ功」トハ、功ハ工ト通ジテ事ト云フコトナリ、其言フトコロ才アリテ正路ヲ失ハザレバ、役人ト爲テ其才ヲ試ムベシ、「車服以レ庸」トハ、車服ハ格祿ヲ謂フ、庸ハ功ナリ、功アリテ後、其功ニ應ジテ格祿ヲ賜フ也、「三載考レ績」トハ、績モ功ト同ク、三年勤メタル時、其勤メ方ノ善惡ヲ吟味スル也、勤メ方宜シカラザレバ役ヲ免ジ、宜シケレバ仍レ舊其役ヲ勤メシム、三考ハ三載考績ヲ三度スルユヱ九年ナリ、「黜ニ陟幽明一」トハ、九年官ニアレバ、其賢不肖者ハ祿位ヲ貶ヲ云フ、人材ヲ用ウルノ道是レヨリ善ハナシ、但今日此法ヲ

行フニハ、三年ヲ一任ト定メ、任滿ル三月前、自ラ辭職ノ願ヲ出サシメ、勤メ方善レバ再任ヲ申付、惡ケレバ辭職ヲ許スベシ、是レ士ニ疵ヲ付ケズ、廉恥ヲ養フノ一端ナリ

一　凡ソ人材ヲ鑑定スルノ法、詐僞矯飾ノ心アル者ハ、外貌端正柔和ニテモ必ラズ姦人ナリ、天性楚簡略ニテモ、天眞爛熳タル者ハ必ラズ用ウベキ所アリ、又世人ノ毀譽ニ拘ラズ、君大夫ヲモ物ノ忽數トセズ、己レガ爲度儘ニ立主張雜者アリ、世俗ハ名ケテ狂人トスレドモ、此類ノ中ニ勝レタル人材アル者ナリ、古人ノ人材ハ疵物ノ中ニ求メヨト云ルハ是レナリ、孔子モ「衆惡レ之必察焉」ト仰セラレタリ、此等ノ人ハ心ヲ付テ能ク窺フベシ、其人ニ異ナルヲ以テ一槪ニ之レヲ見棄ルハ、人君タル量ニアラズ

一　古聖帝明王之所レ行、賢人君子ノ所レ論、賢才ヲ求ルヨリ急ナルハナシ、然ルニ孟子ハ「國君進レ賢、如レ不レ德レ已、將レ使ニ賤踰レ貴、疏踰ニ親、可レ不レ愼乎」ト云テ、其意正ニ相反スル處ニ付テ考フレバ、聖賢人ヲ用ウルノ法火ヲ以テ晴キヲ照スガ如シ、三代ノ頃ハ皆世祿ニシテ、家柄ヲ貴ブコト今ト同ジ、唐虞ノ稷契・皐陶、殷ノ伊尹・傅說、周ノ呂望・膠鬲ノ如キハ本ヨリ論ナシ、秦ノ百里奚・楚ノ孫叔敖ガ如キモ、皆千人ニ勝レタル俊傑ナル故、之レヲ擧テ疑ハズ、所レ謂立レ賢無レ方ナリ、若シ少許之優劣ヲ以テ、賤者ヲシテ貴者ニ踰エ、疏者ヲシテ親者ニ踰エシムルハ、人々躁進ノ心ヲ生ジテ、大臣ニ以ヒザルノ怨ミヲ抱カシム、故ニ孟子又嘗テ「貴レ貴尊レ賢、其義一也」ト云リ、然レドモ專ラ門閥ヲ貴ミテ、材能

ノ士ヲ進メザレバ、貴者ハ自ラ安ンジ、賤者ハ利ニ走リテ人材益々衰フ、是レ有ニ民社ニ者ノ大患ナリ、今平ラカニ其法ヲ考フルニ、賤者八分之才徳アリ、貴者二分之才徳アラバ、大賢ニアラズトモ、同格ニ用キテ苦シカラズ、賤者六分ノ才アリ、貴者四分ノ才アリ、其格一階ノ貴賤ナラバ、同等ニ用ウルモ可ナラム、三考黜陟ハ功ヲ以テ進退スレバ、此ノ限リニアラズ

一　官制トハ役儀ノ立方ナリ、其法和漢共ニ周官ヨリ出タリ、周官六卿（周官ノ六卿ハ、天地四時ノ官トテ、大宰・司徒・宗伯・司馬・司寇・司空ナリ）ニテ六職ヲ分掌スルニ倣ヒテ、唐ノ世ニハ六部尚書（唐ノ六部ハ、吏・戸・禮・兵・刑・工ナリ）ヲ立、其後追々變革ハアレドモ、大略此法ニ本ヅカザルハナシ、我王室モ唐ノ六部尚書ニ倣ヒ、其宜シキニ従ヒテ取舍シ、八省（日本ノ八省ハ中務・式部・治部・民部・刑部・兵部・大藏・宮内ナリ）ノ卿ヲ立ラレ、其上ニ太政官ヲ置レシハ、即チ唐虞百揆ノ任ナリ、武家ノ世ト成リテハ制度モ草略ニテ、官制ハ殊ニ備ラズ、鎌倉ノ時評定衆ヲ置テ政事ヲ議シ、引付衆ヲ置テ訴訟ヲ斷ジ、其餘武家ノ事ハ侍所ノ別當之ヲ治ム、今日太平ノ久敷ニ至リテ、官名モ追々増益シタレドモ、古法ニ叶ヘリトハ云ヒ難シ、然レドモ一旦ニ變更シテ古ニ復セントスルハ、亦時務ヲ知レリト云フベカラズ、但其中ニ改ザルベカラル事、新ニ立ザルベカラザル官アリ、即チ左ノ如シ（徳川氏ノ制、老中以下奉行役人・番頭・物頭等ノ武官ニ至ルマデ、悉ク月番アリテ公務ヲ處理セザルモノナシ）

一　月番ト云フ事ハ、和漢共ニ古ハナキコトナリ、其害アルコト遠ク古ヲ引ニ及バズ、今萬金ノ家アランニ、其家五人ノ番頭アリ、此五人ノ者共代ル代ル一人ニテ、一箇月ノ事ヲ處理センカ、其家立所

ニ襄フベシ、此ヨリ上ニ之ヲ推バ、月番ノ政事ニ害アルコト明白也、周官ノ六卿太宰ハ奥向ヲ始メ、衣服・飲食・藥餌ノ類總テ君ノ身ニ付タル事ヲ掌リ、天下ノ事預リ聞ザル所ナシ、司徒ハ土地・人民・教導・税斂ノ事ヲ掌リ、宗伯ハ禮樂・祭祀ノ事ヲ掌リ、司馬ハ軍旅・征伐ノ事ヲ掌リ、司寇ハ訟獄・刑戮ノ事ヲ掌リ、司空ハ土功・作役ノ事ヲ掌ル、其職中ニ種々ノ事、並聯事（聯事ト云フコトハ周官ニ在リテ、彼官ト此官ト互ニカヽリ合アルコトヲ云ナリ）ノ勤メモアレドモ、大略右ノ如シ、若シ國ニ三人ノ重役アレバ、國中ノ事ヲ三ツニ分チ、其相近キコトヲ聚メテ一職ト爲シ、一人ヲ以テ其役頭トナシ、各々其才ノ長ズル所ニ從ヒテ用フベシ、一國ノ大政ヲ取者ハ、格祿ノ高下ニ拘ラズ、三人中ニテ才ノ大ナル者ヲ擇ミテ任ズベシ、齊ノ國民高氏ハ宗室ニシテ、位管仲ガ上ニ在リシカドモ、其才管仲ニ及バザルユヱ、桓公管仲ニ命ジテ政ヲ爲サシム、鄭ノ子皮ハ爵祿共ニ子産ガ上ニ在リシカドモ、鄭國ノ政ヲ爲セシ者ハ子産ナリシ、此等ハ古人已驗ノ明法ナレバ、今日ニモ斷ジテ行フベシ

一　古ハ世祿アレドモ世官ナシ、祿ハ功ヲ賞スルモノユヱ子孫ニ及ブベク、官ハ君ヲ助ケテ、國ヲ治メ民ヲ安クスルモノナレバ、子孫ニ及ブノ理ナシ、然ルニ先祖ノ功アリシヲ以テ、國家第一ノ重職タル大夫ヲ世官トスルハ、沙汰ノ限リナルコト也、且大夫トナルノ家五六軒ニ限リタレバ、其家ニ生レタル者、小兒ノ時ヨリ早大夫ニナリタル心ニナリ、人モ從ヒテ尊敬スル故、自然ト驕傲ノ心生ジ、安逸ニシテ學問ヲ勉メズ、多クハ並ビナキ馬鹿者トナレリ、然ルニ家柄ナリトテ國家第一ノ重職ニ居ラ

シムルハ、萬鎰ノ玉ヲ小兒ニ磨カシムルヨリ危キ事ナリ、然レドモ海内一同ノ弊風ナレバ、急ニハ變ジ難カルベシ、姑ク舊法ヲ變ジ、中士以上ハ才ニ從ヒテ大夫ニ任ズルノ命ヲ下シナバ、其撰稍々廣ク成リテ、人材ヲ得ルコト易ク、家柄ノ者モ自ラ勵ミテ、其中ヨリ人材ヲ生ジ、實ニ世家臣室ヲ保全スルノ道ニ叶ヒナム

一　封邑（封邑ハ大名ノ領地ナリ、都邸ハ江戸ノ屋敷ナリ）ト都邸ト役人ヲ分チテ、都邸ノ役人ハ專ラ府中ノ事ヲ掌リ、封邑ノ役人ハ專ラ國事ヲ掌ル國アリ、是レ一國ヲ分チテ二ト爲ルノ理ニテ、其ノ害尤モ甚シ、府下ハ財ヲ用ウルノ地ナリ、封邑ハ財ヲ生ズルノ地ナリ、故ニ府下ノ役人ニ權アレバ、費用多クシテ國計立チ難シ、交代シテ府邸ヲ治ル者モ、末官ヲ遣スヲ善トス、增テ府邸ノ役人ヲ定置ンニハ、封邑ノ役人ハ府下ノ事情ヲ知ラザルユヱ、費用多クシテモ詰問ニ便ナラズ、上下ノ困窮スル、立チテ待ツベキ也

一　今日政事ト云ルハ、年貢運上ヲ取リ納メ、公事訴訟ヲ聽斷スルト、盜賊ヲ緝捕スルトノ三ニ止リテ、治教ト云ルコトハ絕テナシ、是故ニ何レノ國ニモ教官ヲ置トテ、書生等ガ廻村シテ書ヲ講ズルガ如キハ、唯々益ナキノミニ非ズ、大キニ村里ノ煩擾ヲ增スベシ、周禮立官ノ意此役成丈書ヲ讀ンデ、大義ニ通ジタル者ヲ用キ、教職ヲ兼シムベシ、又百姓ノ中ニ生得忠實ノ老人、一村ノ心服スル者必ズアル者也、其人ヲ撰ミテ地ノ廣狹、人ノ有無ニ從ヒ、一箇村ニ二人、或ハ二箇村ニ三人立テ縮老トナシ、兼テ郡奉行ヨリ教導ノ大意、孝悌和順ノ筋ヲ喩シ置キテ、其村ノ弟子ヲ教ヘ導カシムベシ、但シ

事ニ觸レ類ニ隨ヒテ教ウルヲ善トス、煩雜ナレバ厭倦ノ心ヲ生ズル者ナリ、若シ村中ニ爭訟等ノ事アレバ之レヲ和解シ、身持惡シキ者アレバ之レヲ異見シ、孝悌力田ノ者アレバ、竊ニ郡奉行ニ申達シテ、他日勸懲ノ本トナスベシ、其人田祿アラバ別ニ俸米ヲ賜フニ及バズ、格ハ名主ノ次席タルベシ、郡奉行ハ子弟ノ勤ムベキ事ヲ解シ易ク書取リテ、廻村ノ時ニ讀聞セ、孝悌力田ノ者アラバ呼出シ、大勢ノ中ニテ褒遣シ、其ヲ勉メシメ、尤モ勝レタル者ハ上ヘ達シテ賞典ヲ行フベシ、此レ其ノ大略也

一　我國ノ人ハ勇剛精悍ノ氣他國ニ勝レタレドモ、古ヨリ直言極諫之士ハ少シ、是大義ノ明カ成ザルノ故ナリ、甚キニ至リテハ君ヲ諫ルハ失禮ナリナド、思ヘル者アリ、悲ム可ノ至リ也、然ルニ筒井順慶和州郡山ヲ領セシ時、異見役ト云ル官ヲ創メテ、君ノ過失ヲ始メトシ、政事ノ是非得失等ニ至ル迄、口ヲ極テ議論スルコトヲ許セリ、即チ漢ノ諫議大夫唐以下御史ノ職ニシテ、其用更ニ廣シ、此官ヲ置テヨリ郡山ハ善ク治レリ、順慶ハ差タル人ニハ非ザレドモ、此一事ニ於テハ千古ノ卓見也ト云ベシ、順慶ノ時ニスラ猶ホ能ク此官ヲ置リ、增テ今日右文ノ世ニ當テ、此官ヲ置ザルハ油斷ト云ベシ、此官ハ事情ニ通達シ、時務ニ練熟シタレドモ、重職トナルニハ、門地賤ク履歷淺ク、下僚ニ滯ラセンハ惜ムベシト云フ程ノ地位ナル人ヲ用ヰテ、其望ミヲ重クスルヲ尤モ善トス

一　周易「一君二民君子道也、二君一民小人之道也」トアレバ、役人ハ員少キヲ善トス、員少ケレバ人才

撰ビ易クシテ費少シ、員多ケレバ自然ト不肖ノ人共中ニ混入スルユヱ、唯々費多キノミナラズ、弊害必ズ並ビ生ズ、又小吏ノ財ヲ掌ル者、其俸ヲ厚クシテ其罰ヲ重クスベシ、「俸祿猶少、未レ可レ責ニ小吏之廉ニ」ト云ルハ、深ク人情ニ通ジタル語ナリ、律ニ監臨姦ノ文アリ、役人ノ贓罪ヲ犯シヽヲ云フ、常ノ盗賊ヨリ其罪一等重シ、小吏ヲ駕御スルハ此二法ヲ尤モ善トス

一　法度制令ハ簡ニシテ嚴ナルヲ善トス、簡ハ煩ノ反也、簡ナレバ人從ヒ易ク、嚴ナレバ人敢テ犯サズ、故ニ易ニモ易簡ノ政ハ、至善ニ稱フト云ヘリ、又孔子ノ語ニ「苛政猛ニ於虎ニ」ト見エタリ、苛政ヲカラキ政リゴトヽ訓ジテ、暴政ノ如ク心得タル人アレドモ、左ニハアラズ、苛ハイタ〱草ト云フ草ニテ、滿莖ニ小刺アリ、手ヲ觸ルレバ必ズ刺セドモ、傷ツク程ノコトハナシ、サレド如何ニモ心持チアシク痛ムモノナリ、故ニ煩苛ト熟用シテ、至極瑣細ナルコトマデ禁令アリテ、手ヲ出シ足ヲ動セバ必ズ法禁ニ觸ルヽガ如キ政ヲ苛政トハ云フナリ、暴政ハ譬ヘバ棒ヲ以テ打チ惱スガ如ク、苛政ハ譬ヘバ傍ラニ付添ヒテ、或ハ慰メモシ、或ハ怒リモシテ、終夜眠ラシメザルガ如シ、民ノ痛ムコトハ暴政ヨリ實ニ甚シト謂フベシ、又孔子子貢ノ問ルニ答ヘ給ヒテ、「民無レ信不レ立」ト宣ヘリ、上ニ信無レバ民立ズト云フコトナリ、是ニテ法度・制令ハ簡ニシテ嚴ナルヲ貴ブコトヲ曉ルベシ、古ヨリ有リ來リタル法ハ、成丈改メザルヲ善トス、古人モ利百ナラザレバ舊法ヲ易ヘズト云リ、新法・新令ハ事一々善キ様ナレドモ、思ヒノ外ナル處ニ故障出來テ、改ザルコト有ル物ナリ、若シ隨ヒテ令ヲ出シ、隨ヒテ之レ

ヲ改ムレバ、下世話ニ云ル三日法度ニテ、如何程善キ法ニテモ、後ニハ民従ハザルモノナリ、故ニ舊法ヲ改ントナラバ、能々考究シテ後ニ定ムベシ、容易ニ為スベカラズ、但シ中古ヨリ始メタル煩令苛法ハ一掃シテ、民ト更始セザルベカラズ、法制ハ先王ノ禮意ニ本ヅキテ立ルヲ善トス、論語ニ「奢則不遜、儉則固、與其不遜也寧固」ト云ヒテ、天地ノ物ヲ生ズルコト限リアリ、有限ノ財ヲ以テ無限ノ欲ニ奉ゼバ、天下ノ富ヲ以テ一人ヲ養フトモ、窮セザルコトヲ得ンヤ、是ヲ以テ聖人禮ヲ制シテ天下ノ財ヲ養ヒ、四海ノ内ヲシテ凍餒ノ民無ラシム、故ニ儉約ハ禮ニ及バザルコトアリテモ、美徳タルコトヲ失ハズ、今日制度ノ立ザル時ニ當リテ、禮ヲ論ズルハ迂遠ニ似タレドモ、其意ヲ祖トシテ法制ヲ立ルコトハ難キニアラズ、儉ニ本ヅキ法制ヲ立ルハ、先ヅ衣食住ノ三ツヲ首トシテ、冠婚喪祭ノ四禮ヨリ始ムベシ、中ニモ衣食住ノ三ツハ、延寶・元祿以來上下ノ奢リ甚シ、其内衣ハ制度ヲ立易シ、地品・染色等ニテ貴賤上下ヲ定ムベシ、食ハ慶賀宴集ノ外ハ、教諭ニ非ザレバ屆キ難シ、住ハ貧富ノ制アレバ、廣狹ノ度ハ格ヲ以テ定メ難シ」、但シ造營ノ式ニ貴賤ノ規矩ヲ存スベシ、冠祭ハ四海一同弊ト名クル程ノ事少シ、葬ト婚トニ至リテハ、土風ニ因リテ夥シク僭踰冗費ノ事アリ、身分ニ從ヒテ其度ヲ定ムベシ、「喪事稱家之有無」トアレドモ、是ハ貧者ノ為メニ語レルナリ、禮ヲ踰エテ奢ルヲ云フニアラズ、但シ是等ノ事ハ其地ノ風俗ニ因ルコトユヱ、一概ニハ論ジ難シ

一　諸國官署ニ一大弊アリ、一署ノ官人幾員アリテモ、皆上官一人ノ成法ヲ承テ、自ラ謀ヲ發シ慮ヲ

出スコト能ハズ、是レ一府ノ事一人ノ處置ト成リテ、衆人ハ員ニ備ル迄也、此ノ如クニテハ多ク官員ヲ備フル甲斐ナシ、洞家ノ法論ハ沙彌ヨリ始ムト云ルコトアリ、沙彌ハ小僧也、和尚先ヅ法ヲ說ケバ、其餘ハ口ヲ開クコト能ハズ、故ニ小僧ヨリ段々上ニ押上セテ、衆論盡タル後和尚之レヲ斷ズルナリ、浮屠ノ法ヲ論ズルスラ此ノ如シ、增テ一國ノ政府ニテ、衆官ノ言ヲ盡サシメズ、上官タル者一人ノ了簡ニテ事ヲ處置スルノ理アランヤ、故ニ上官タル者ハ先ヅ屬吏末官ニ言ヲ盡サシメ、其善ヲ擇ミテ之ヲ取リ、若シ衆議未ダ善ヲ盡サズンバ、其時己レガ見ル所ヲ述テ之ヲ行フベシ、此ノ如クスレバ衆人ノ智ヲ盡シテ一事ヲ謀ルユヱ、必ズ敗事少キナリ、我國ノ風俗萬國ニ勝リタレドモ、老人ヲ貴ブコトハ漢土ニ及バザルコト遠シ、敎ノ屆カザル故ナリ、此弊ヲ改ムルニハ養老ノ禮ヲ始ムベシ、藩士七十以上ハ一口俸ヲ賜ヒ、秋春時候宜敷時ヲ擇ミ、年々一度宴ヲ賜フベシ、遠方又ハ步行難儀ノ者ハ籃輿ヲ賜ヒ、難步者ハ本丸門外迄乘込シムベシ、病アル者ハ酒食ヲ家ニ賜フ、初獻ハ君親ラ酌ミテ賜フ、君在サザル時ハ宗室又ハ大夫之レニ代ル、齒ハ天下達尊ノ一ナリ、養老ハ齒ヲ尊ブノ禮ナレバ、爵ノ尊卑ニ拘ルベカラズ、目見以下ノ者タリ共、相待ノ禮ハ同樣タルベシ、盃三巡ノ後ハ各昔ノ事ヲ語リ、且ツ飮シムベシ、百姓ハ七十以上ハ子或ハ孫一人ノ役目ヲ赦シ、八十以上ハ一口俸ヲ賜フ、養老ノ宴藩士ニ准ジ、郡奉行之レヲ掌リ、子弟其禮ヲ觀ルコトヲ許スベシ、町人ハ町奉行養老ノ宴ヲ掌ル、八十以上ノ者同ク一口俸ヲ賜フ、肴核ノ類ハ老人ノ口ニ合フベキ物ヲ主トシテ、必ズシモ多品ヲ貴バズ、

孟子五十非レ帛不レ暖ノ文ニ因テ、五十以上絹布赦免ノ國アリ、然レドモ孟子ノ時ハ絹布ノ外ハ、麻葛紵ノミニテ今ノ木綿ナシ、今ノ木綿ハ暖ナルコト絹ニ勝レリ、必ズシモ此ノ令ヲ用キズ、身分アル者ハ自ラ絹ヲ服スルモ可ナリ、民間ニ必ズ令ス可ハ孝悌力田ナリ、漢代ノ循吏ハ此三者ヲ重クシテ、支配中ニ三者有バ必ズ賞美シタリ、禁ズベキハ洗子・賭博・淫奔ナリ、賭博ハ盜ノ源ナリ、淫奔ハ風ヲ亂ルノ始メナリ、然セザルベカラズ、洗子ハ下世話ニ云ル子ヲ間引ナリ、親タル者手カラ子ヲ殺セル、其惡俗タルコト言ニ及バズ、此惡俗ヲ改ムルコト容易ナラズ、忠實ニシテ辯才アル者ニ命ジ、家ゴトニ說キ人ゴトニ諭シ嚴刑ヲ立テ、其命ニ從ハザル者ヲ罪スベシ、其法婦人姙身セバ、五人組立合見屆シ上其筋ノ役人ニ屆ケ、萬一間引ナバ、當人ハ死罪一等ヲ宥メ、五人組ハ當人ヨリハ一等輕ク罰スベシ、但其事ヲ與リ知ラバ死罪タルベシ、若藥術ヲ以テ墮胎セシメナバ、其事ニ與リシ醫師・穩婆ハ死罪タルベシ、此事十年行ハルレバ、其後ハ嚴禁ヲ待ズシテ自ラ止ムベシ、親子ノ至情ニ本ヅクガ故ナリ

一　淫奔ハ源ヲ塞ント思ハヾ、男女共ニ早ク婚セシムベシ、聖王モ此所ニ深ク心ヲ用キラレシト見エ、周禮ニ「仲春合ニ男女之無ニ夫家者ニ、是月也奔者不レ禁」トアリ、漢土ニハ婚姻ノ六禮ト云フコトアリテ、納采・問名・納吉・納徵・請期・親迎即チ是レナリ、若シ此ノ六禮ヲ行ハザレバ、妾ト稱シテ妻ト稱セズ、貧者ハ此ノ禮ヲ行フコト能ハズ、聖人男女ノ時ヲ失フコトヲ憐レミ給ヒ、仲春ニハ六禮ヲ備ヘズシテ嫁スルコトヲバ許ルサレタリ、之ヲ名ケテ奔ト云フ、即チ江戸ノ下世話ニ云ル引越女房ノ類ニテ、淫奔

ノ事ニハアラズ、聖人ノ世、風化恩澤餘リアリテサヘ猶ホ此ノ如ク心ヲ用キラル、增テ今日ニ於テ其儘ニ棄置バ、身ヲ喪フ者必ズ多カルベシ、徧ク世上ノ體ヲ觀察スルニ、卑賤ノ男子妻子無ケレバ、自然放埒ニ流レ家業ヲ勉メズ、終ニハ博徒ニ陷ル、婦人ハ獨居スレバ酌人ニ賴マレ、野遊ニ誘ハレ、身ヲ持崩シ、衆人ノ慰ミ者トナリ、一生ヲ誤ル者多シ、其身ノ憐ム可ノミナラズ、大キニ風俗ノ害トナルコトアリ、此ノ旨ヲ郡奉行・町奉行ヨリ里正・市長・宿老等ニ諭シ、前ニ云ル如キ身持ニテ、命ヲ用キザル者アラバ、詰問ノ上相當ノ罰ヲ與フベシ、風俗ハ政事ノ田地ト云リ、如何程ノ善政ニテモ、風俗惡シケレバ行ハレズ、關東ニハ佃戸ノ妻ヲ迎ルニ二十金餘モ費ス處アリ、是レニ因テ貧窮ナル者ハ一生獨身ナルユヱ、終ニハ博徒無賴ノ者トナリ、家ヲ潰ス、上毛・下總等ニ荒地多キハ、十分ノ二ハ此ノ譯ヨリ起ル、此ノ如キ弊風アラバ、速カニ改正スベシ、總テ何事モ風俗ノ妨ゲトナル事ハ、速カニ改正セザルベカラズ、俗吏ハ治體ニ通セズ、一時ノ急ヲ改メントテ、運上ヲ貪リ妓院ヲ許シ、富商・豪農ニ權沽ヲ許シテ、封內ノ產物ヲ買シメサスル等ノ事多シ、不經濟ノ甚シキモノ也

一　生レ財大道ト云フコト大學ニ見エテ、至極ノ道理ナレドモ、今世ニハ之レヲ生ズル者ハ百姓ノミニテ、之レヲ食フ者ハ士ト商ト古ヘニ數十倍シ、其上ニ浮居・修驗・神職・游手等夥シキ人數ナレドモ、其勢速カニ變ジ難シ、但用レ之舒ナル事ハ人君ノ心ニアレバ、今日生財ノ道ハ用ヲ節スルヲ肝要トス、然レドモ委敷邦內ヲ講究セバ、猶伏利ナキニアラズ、農ノ餘力アル者、無高ノ小民等ヘ勸メテ開懇セシム

ベシ、又山僻曠莫ノ地アラバ、小祿ノ士二三男ヲ募リ一給メニ總メ、始メハ夫食ヲ給シテ開墾セシメ、五箇年ノ間ハ作リ取トシ、六年目ヨリ本田高十分二ノ租ヲ出サシメテ士格ヲ許シ、萬一國家爭擾ノ事アラバ、宗家ニ屬シテ出陣セシムベシ、久シキ後ハ自然ニ古ヘノ黨兵ノ如キ者ト成リテ、治亂トモ兩便ナルベシ、其地五穀ニ宜シカラズンバ、蕎麥・蕃薯・稗・芋ヲ始メ、棉・茶・漆・楮・櫨・甘蔗ノ類其地ニ宜シキ品ヲ種シムベシ、蕎麥・蕃薯・稗・芋等ノ類ハ新開ノ柔脆ナル地ニ宜シク、如何程瘠薄ノ土ニテモ善ク蕃殖ス、木綿ハ赤土ノ淺クシテ岩サシ雜リタル地・沙地等ニ宜シ、尤モ東南風ヲ受ケル地ヲ善トス、黑壤ヲ嫌フ、茶・漆・楮ハ北陰ニ宜シ、海風ヲ諱ム、茶ハ川霧立地ヲ尤モ妙トス、櫨ハ之ニ反ス、甘蔗ハ沙地ニ宜シ、猶老農ニ功者アルベシ、詳カニ問ヒテ明ムベシ

一　樊遲ガ稼ヲ問ヒシニ、孔子ノ我老農ニ若ズト答ヘ玉ヒシハ譯アルコトニテ、稼ヨリ大キナル事ニ心ヲ用ヰシメンガ爲メナリ、尤モ農ノ稼ニ通ジタルハ論ナキコトナレドモ、下賤ノ者ハ一所ニ滯リテ、我習熟セシ事ノミ自負シ、習熟セザル事ヲバ、蹴ナシテ敢テ爲ザルモノナリ、故ニ其土地ニ習ハザル事ヲ聞クニハ、嚴命ニテ行ハレ難シ、凡ソ一村ノ中ニハ、道理ニ敏クシテ衆人ノ服スル者一兩人ハ必ズアルモノナリ、其者ヲ能ク諭シテ開ント思フコトヲ爲サシムベシ、其利アルヲ見レバ、上ノ勸メヲ待ズシテ一同ニ倣ヒ行フハ人情ナリ、總テ百姓ハ小兒ノ如キ者ニテ、嚴令ノミニテハ何事モ行ハレズ、心ヲ盡シテ倦ズ怠ラズ、其人ヲ擇ミテ教ヘ諭シ、其手ヨリシテ衆人ニ及ボスヲ上策トス、尙書

ノ盤庚ヲ讀ミテ、古ノ賢君民事ニ心ヲ盡スコト、赤子ヲ保クスルガ如シト云ル趣キヲ曉ルベシ、尋常ノ人ハ一二度令シテ從ハザレバ、退屈シテ打棄置故、何事モ行ハレズ、子路ノ益ヲ請ルニ、孔子ノ勿レ倦ト答ヘ玉ヘリシコトヲ思ヒヤルベシ

一　物價沸騰ハ一國ノ力ニハ止メガタシ、其患ヲ防グハ人間必要ノ品國中ニ産シ、他ニ求メズシテ足ル樣ニ心掛ベシ、鹽ハ沙ノ善惡ニ因リテ多ク付ト、少キトノ違ヒアレドモ、沿海ノ地ニ産セザル處ナシ、其道ニ委敷者ヲ傭ヒテ鹽濱ヲ開クベシ、石炭ニテ燒バ、費ハ過半減ズレドモ氣味薄シ、試ミテ其宜キニ從フベシ、茶ハ山僻ニ宜ク、蠟ハ海邊ニ宜シ、此二種ハ皆西國ノ産ヲ善トス、燈油ハ茶・椿・山茶花・毒荏鈴□ヱ（萬兩ノ實ノ如シテ大ナリ、大木ニシテ枝腕シ、葉ハ椿ニ似テ長ク薄シ、ヒヨ鳥ノ好ミテ食フ物也）醬油ノ糟、何レモ油ヲ絞リテ能ク出ル物ナリ、伊豆ニテハ棗實ニ似テ綠色ナル物ノ油ヲ取リテ、木モ棗ニ似タリ、名ヲ聞シカ共忘レタリ、皆毒アリテ揚物ニハ用キ難シ、委敷吟味セバ猶ホ此ノ外ニモ有ルベシ、但シ醬油・糟油ノ外ハ（以下脱文）

一　新田畠ハ上ノ手ニテ開クベカラズ、民ヲ導キテ開カシムベシ、年貢ハ本田畠十分ノ一タルベシ、三年毎ニ檢見ヲ遣スベシ、出來足宜シケレバ少宛年貢ヲ增シ、六年ニシテ本田畠七八分ノ處ニ止ルベシ、新田開墾ハ財費エ力勞スルユヱ、税薄カラザレバ民勸マズ、老子ノ取者與ト云ル是レナリ

一　田税ハ定免ヲ善トス、檢見ハ民ト吏トニ姦詐アリテ、十分ノ二ハ其懷ニ入リテ、且農家ニ費多シ、定免ハ即チ貢法ナリ、孟子ノ「無レ不レ善二於貢一」ト云レシハ、井田ニ對シテ云ルナリ、井田既ニ壞レテ後

ハ、貢法ヨリ善ハナシ、檢見ノ地ハ定免ト爲ニハ、先ヅ五箇年ノ豐凶ヲ平均シ、公四民六ニ定ムベシ、此事ハ大事ナリ、公淸ニシテ農事ニ練熟シタル者ヲ用ウベシ、然ラザレバ必ズ大患ヲ生ズ

一　山海ノ利モ天ヨリ我ニ與ル品ナリ、忽セニ爲スベカラズ、但其利ヲ專ラニスルハ又天ノ道ニ非ズ、材木・薪炭ノ類民ニ取ラシメテ、其運上ヲ收ムベシ、總テ租稅・賦斂ノ法ヲ新ニ立ル時ハ、老子ノ取者與ト云ル語ヲ忘ルベカラズ、管子ハ此語ヲ延テ、「知二與之爲一取、政之寶也」ト云リ、聖人道ヲ語リテ利ヲ語ラザルユヱ、「義者利之和也」ト云ル、皆一物也、良賈ハ自然ニ此理ヲ曉リテ廣ク賣買ヲ爲シ、少シク利ヲ收メ、元方ニ利ヲ與ルユヱ、其利廣大ニシテ永久ナリ、姦商ハ一旦ノ利ヲ貪リ、元方ノ價ヲ減ズルユヱ、元方手ヲ引テ其家從テ衰フ、韓非ニ「竭ㇾ澤而漁、非ㇾ不ㇾ得ㇾ魚、明年無ㇾ魚」ト云ルハ此事ナリ、一國ノ主タラン人ハ、謹ミテ竭澤ノ漁ヲ爲スベカラズ、又材木・薪炭ヲ取ラシムルニ心得アリ、山ニ木ナケレバ水氣ヲ有タズシテ朽壞ヲ生ジ、旱魃ニハ溪流涸レテ灌漑ノ利ヲ失ヒ、大雨ニハ土石ヲ洗ヒ出シテ河身高クナル故、洪水基漲シテ堤防ヲ衝決シ、田廬ヲ漂沒ス、國語ニ「山崩川竭、亡國ノ徵也」ト云ルハ、天災ノミニアラズ、即チ人害ニテ、人主山澤ノ利ヲ貪ルヨリ起ル、材炭ヲ取ルトモ所々ニテ少宛伐ラシメ、山ニ水氣ノ絕ザル樣爲スベシ

一　天災流行ハ世ノ常理ニシテ禹湯ノ聖代ト云フトモ免ルコト能ハズ、古人モ「救荒無二良策一」ト云テ、差掛リテハ實ニ救ヒ難シ、預メ備ヲ爲サヾルベカラズ、昔ヨリ常平・義倉・社倉等ノ法アリテ、今モ之

レニ倣ヒテ非常ニ備フル國アリ、至極ノ美政ナレドモ、米ハ新故出納ノ煩アリ、且價貴キユヱ種々ノ惡弊ヲ生ジテ、終ニ有名無實トナル事多シ、其弊ヲ防グニハ稗ヲ蓄フベシ、稗ハ數十年蓄ヘ置テモ臭腐セズ、味美ナラズ價賤シケレバ、移動ノ憂ヒナシ、然レドモ饑饉ノ夫食ト爲ンニハ、草根木皮ヨリ其養ヒ萬々ナルベシ、此ヲ以テ食料ノ本トシ、老幼病人等ノ氣力ヲ補ヒ、米ヲ糴フハ容易ノ事ナリ、民ニ喩シテ自ラ蓄サセンハ宜シケレドモ、急ニハ行ハレ難カルベシ、先ヅ上ヨリ其事ヲ始メ、收納高百分ノ一ヲ稗ニシテ納メシムベシ、稗ハ至リテ蕃殖シ易キ物ナリ、埆薄ノ地ヲ開墾シ、糞力ヲ費サズシテ常穀ヨリ多ク收ム、百分ノ一ハ十萬石ノ高ニテ千石高ナリ、然レドモ蕃殖シ易ク價賤キユヱ、倍納セシムベシ、是ヲ折邑ト云フ、折邑トハ品替リノ事ナリ、薪炭・鹽茶・繩竹・萱草、又ハ豆麥、海物ハ鰹節ノ類、人家必用ノ品ヲ米價ニ照シ合セ、民ノ願望ム者ニ年貢ノ代リニ納メシメ、藩士ノ有品ヲ望ム者ニ、廩米差引配リ與フ、小歉ノ年ニハ民間大ナル助トナルベシ

一　用ヲ節スルノ大意ハ、禮記王制ニ「三年耕有二一年食一」ト云ルヲ本トス、國君ヨリ下士ニ至ル迄、常祿アル者ハ此外ニ經濟ノ法ナシ、其法一年ノ邑入ヲ四分シテ、二分半ヲ經費トシ、半分ヲ不時ノ費ニ當、一分ヲ留テ他年ノ貯蓄トス、此法ヲ堅ク守レバ、三十年ニシテ九年ノ蓄ヘアリ、三年ノ蓄ヘ無レバ國非二其國一トテ、國アレドモ無キガ如シト云リ、今ノ諸侯ハ大略商賈ノ鼻息ヲ仰ギテ世ヲ渡ルユヱ、元利ニ逐レテ藩士ノ祿ヲ借リ、封內ノ農商ニ横歛ヲ賦シ、山ヲ童ニシ田ヲ典シ、來年ノ邑入ヲ今年用キ

テモ猶足ラザレドモ、恬然トシテ故轍ヲ改メ、其國ヲ國トスルコトヲ知ラズ、餘リ云甲斐ナキ事ニアラズヤ、然レドモ積弊ノ後ヲ承テハ、一時ニ國勢ヲ立直スコト實ニ難シ、邑入四分ノ外ニ非常ノ節儉ヲ行フベシ、信ニ背クハ不義ノ大ナルモノナレドモ、府庫空虛ノ上ハ爲スベキ樣ナシ、且ツ終身信ニ背クヨリハ、暫時信ヲ虧ハ其罪輕シ、先ヅ債家アラバ、年ヲ限リテ元利居置ノ旨ヲ談ジ、君ヲ始メ衣服食ハ平士ト同クシ、公用ノ外ハ先例古格タリトモ、費アルコトハ暫ク廢替スベシ、年々地ヨリ生ズル財用ナレバ、用レ之舒ナル時ハ、數年ナラズシテ財用饒裕ナルハ必定ナリ、是レ程ノ果斷ナクテハ、積弊ノ餘殃ハ除キ難シ

一　國ノ貧シキヲ憂ヒテ利ヲ求メ、融通ヲ善スルヲ事トスルハ小人ノ常ナリ、遼ノ耶律楚材ト云ル者此理ヲ論ジテ「生二一利一、不レ若レ除二一害一」トイヘリ、利ノ裏ニハ必ズ害アリ、害ヲ除ケバ利自ラ生ズルガ故ナリ、誠ニ千古ノ名言ト云フベシ、又費ヲ省クハ事ヲ省クニハ若ズ、事ヲ省クハ吏ヲ省クニハ若ズト云フ語アリ、用ヲ節スルノ根本ト知ルベシ

一　賞罰ハ善ヲ勸メ惡ヲ懲スノ具ナリ、堯舜ノ聖代ト云トモ、賞罰ヲ舍テ治ヲ成ス事能ハズ、聖人ノ天下國家ヲ治ムルハ、天ニ則リテ之ヲ行フ、天ハ春生ジ夏長ジ、秋殺シ冬收ム、故ニ先ヅ賞シテ後ニ罰シ、其功ヲ收ムベシ、刑罰世輕世重トアリテ、世ノ風俗ニ因テ輕重スルコトアリ、諸葛孔明蜀ヲ治ル時、劉璋暗弱ノ後ヲ承テ、風俗柔惰ナルユヘ、重賞峻罰ヲ用ユ、今士風ヲ振起スルニハ、孔明ガ蜀ヲ

治メタルニ倣フベシ、軍中ハ紀律ヲ貴ブ、易ニ「師出以レ律、不レ臧凶」ト云リ、紀律ハ締括ノ嚴ナルコトナリ、紀律ハ賞罰ニ非レバ立ズ、人ヲ必死ノ地ニ驅ルニ、紀律立ザレバ敗走ヲ諱ズ、必ズ大敗ニ至ル、是故ニ軍中ハ最モ信賞必罰スベシ

一　賞典ハ議スベキコト少ナシ、古ヨリ孝子ノ賞ハ僅カニ有レドモ、悌ト力田ノ賞ハナシ、又何レノ國モ淫風盛リニ行ハル、先ヅ賞シテ後ニ罰スルハ天ノ道ナレバ、貞女節婦ヲ賞スベシ、是レ皆民俗ヲ勵スノ大キナル者ナレバ、速ニ擧行スベシ、力田ハ農業ヲ出精スル百姓ナリ

一　刑罰ノ備ハラザルコト今日ヨリ甚ダシキハナシ、死罪ノ次ニハ過料ト追放ト二アリ、追放ハ戰國ノ餘習ナリ、一錢ノ蓄ヘナキ惡人ヲ境外ニ追拂フハ、其日ヨリ惡事ヲ爲サヾレバ食フコト能ハズ、是レ隣國ヲ以テ壑ト爲スノ類ニテ、其罪人モ死罪一等ヲ宥ムト云トモ重ネテ之ヲ死罪ニ陷レ、不仁不義ノ甚シキナリ、速カニ改ムベシ、過料バカリニテハ富ル者ヲ懲スニ不レ足、笞・徒・黥ノ三法ヲ復スベシ、笞ハ鞭打ナリ、圍二寸長三尺五寸ノ竹ニテ臀ヲ打チ、其數、五十・七十・一百ノ三等ニ分ツ、徒ハ作役也、普請其外勞役ノ事ニ使ヒ、百姓ノ肩ヲ休ルノ助トス、亦一年・二年・三年ノ三等ニ分ツ、使役スル時ハ日ニ五分ノ作料ヲ與フ、内二分ヲ渡シテ小使トシ、三分ヲ留メテ後日期滿ル時ノ本手トス、黥ハ入墨ナリ、額ニ黥スベシ、黥セシ者再犯スレバ死罪ナリ、婦人ハ黥セズ、藩士ニ賜ヒ下婢トス、命ヲ用キザル時ハ笞杖生殺主人ノ心ニ任ズ、他ニ賣與フル時ハ、官ニ達シテ其直三分ノ二ヲ進納ス、徒罪ハ官

中春水等ノ勞役ニ使フ、作料ハ一日三分タルベシ、藩士ハ三刑ニ代ルニ逼塞・蟄居ヲ以シテ、其廉恥ノ心ヲ養フ、亦百日・一年・三年ノ三等ニ分ツ、但シ淫刑ハ笞ヲ與フ、其下賤ノ行ヲ爲スヲ以テナリ

一　淫奔ハ風俗ヲ亂ルノ大ナル者ナリ、嚴禁セザルベカラズ、古ハ淫罪ヲ犯シタル者ハ宮刑ニ處スレドモ、今世ニハ重過ギタリ、貴賤男女共笞刑ヲ與フベシ、夫アル女ノ姦通ハ、是迄通リ其夫ノ心ニ任スベシ、部賤ノ者訴出バ、強姦・和姦ヲ分チテ罪スベシ、強姦ハ俗ニ云フ強淫ナリ、男子ハ死罪タルベシ、和姦ハ女モ承知シテ通ズルナリ、男女同罪ニテ笞刑タルベシ、夫アル女ハ處女ヨリ二等ヲ加フ、男子モ是レニ准ズ、淫蕩止ザル者ハ藩士ハ格ヲ降シ、甚シキハ士籍ヲ除キ、婦人ハ幽閉シ、民庶ハ黥シ、婦人ハ婢ニ賜フベシ、士人ノ女三嫁ノ後ハ、人妻トナルコトヲ許サズ、降シテ妾トナスベシ、聖王ノ治ハ必ズ閨門ヨリ始マル、忽ニスベカラズ、右其大略ナリ、其全キヲ成ハ其人ニ在ルベシ、書ノ能ク盡ス所ニアラズ

救急或問　終

高島喜平上書

高島喜平上書

乍レ恐謹テ奉ニ申上一候

一　去ル卯年以來度々夷船渡來仕、專交易筋奉レ願、當年之儀モ亞米利加・魯西亞等浦賀・長崎へ渡來仕リ、何レモ交易奉レ願候風說ニ御座候處、乍レ恐公邊ニテモ被レ爲レ在ニ御憂慮一候御儀ト奉ニ恐入一候、然處御臺場御築造御筒御鑄造ヲ始メ、海岸御防禦筋御掛被レ爲レ蒙レ仰候段ハ、誠 以冥加ニ被レ爲レ叶候儀ト、乍レ恐被レ爲レ盡ニ御誠忠一候ハ、此時ニ可レ有ニ御座一儀ト奉レ存候、隨テ一失之非、一國之存亡ニ係ル共可レ申哉、實ニ御大任ト奉レ存候、右ニ付テハ微賤之私式愚見奉ニ申上一候ハ、身分ニ出過恐入候仕合、殊更多年幽蟄中、只々恐入相愼候外、世間之事情當時之形勢モ不ニ相辨一儀ニ付、御神算之御模樣御內慮奉レ伺度奉レ存候得共、御機密之筋御洩無レ之儀ハ勿論顯然仕、且奉レ伺候儀モ恐入候間、差扣可レ申筈ニ御座候得共、世間之風說傳聞仕候處、去二三月ニ至候得者、戰鬪相始候抔申觸、安堵不レ仕哉之由、諸向兵械火械新ニ製作有レ之候儀ハ相違無レ之儀ニ付、巷說モ無レ據筋ニ相聞、左候時ハ國家之安危ニ係申候御大事ニテ心中不レ安、其儘差措候テモ無ニ本意一次第ニ奉レ存候得共、更ニ御取用モ相成良法ヲリ上候ニ無レ之、多年紅毛人共へ應接仕、說話中餘事ニ於テ、西俗之情態相伺候儀モ有レ之、常談之儀ニ御

座候得共、却テ於ニ此中一滋味可レ仕儀モ可レ有レ之哉ニ奉レ存候間、其一二ヲ擧テ御採擇ニ相備迄之儀ニ御座候、随テ交易筋願而已之儀ニモ御座候ハヾ、干戈ヲ不レ動御深慮之御籌畫ニモ不レ及トハ奉レ存候得共、自然兵端一度相開、外患有レ之節ハ、内寇必生候ハ古ヨリ有レ之候儀ニ御座候間、彼ガ術中ニ陷リ候ト申儀ハ有レ之間敷候得共、彼ヲ我ガ術中ニ陷レ、生民塗淵之禍ヲ相免レ候様有ニ御座一度奉存レ候間、忌諱ニ觸候儀モ可レ有ニ御座一、於ニ其後一ハ深恐入候得共、蒙ニ御許容一心中不レ殘左ニ奉ニ申上一候

一　蘭船入津之上、諸荷物取調相濟候上ハ直組候儀有レ之、私共之内三四輩立合、會所役人其外右ニ携候役々、一同出島へ出役仕、加比丹廣間ニ於テ直組爲レ致候仕來ニ御座候、天保度ニイマント申者加比丹役へ轉候砌ニ御座候處、右直組御用相濟候後、同場所ニ大幅之輿地圖ヲ掛有レ之ヲ相尋候處、是ハ新鐫ニシテ當年始テ持渡候旨相答、右ニ付通詞申聞候ハ、ニイマン儀ハ諸國へ航海仕、諸國之風土委敷諳ジ罷在、折々承候處、地球中ニハ種々異成國モ有レ之候旨等申候ニ付、私共銘々地圖ヲ指シ相尋候處、ニイマン其風土概略相答申候、然ル處圖中萬里之長城有レ之處ハ、漢土ト申儀ハ相辨へ居候得共、何レ之國ニ候哉ト試ニ問候處、ニイマン答テ支那也ト申候間、支那ハ如何成國ニ候哉ト相尋候處、甚大國ニシテ産物多ク、土地豐饒ニシテ人ハ痴頑也ト相答候間、武備アリヤト相尋候處、武備アリ隨分盛ナリト答候、仍レ之又々尋候、ニイマン前々申處ニテハ、歐羅巴之中ニテ軍艦ヲ仕出シ、某之國ハ某之國ヲ掠略シ所領トシテ、或ハ屬國トナセリ抔之事有リ、然ルニ唐國ニ於テハ、歐羅巴ハ勿論、諸州廣東

へ諸商舘ヲ建、各國彼ニ服從シテ、彼ガ其制ヲ請ル者ハ、痴頓之國トイヘ共、大國ニシテ武備盛ナルヲ以、侵掠スル事能ハザル歟ト相尋候處、ニイマン申答候ハ、唐國ヲ侵伐シテ我ガ有ト存候者誠ニ易キ事ニ御座候、三ケ年ニ不レ至シテ歐羅巴之者トナシ候儀ハ相違無レ之候得共、餘リ大ニ過テ能キ取比ロト申候ニ無レ之、殊ニ國大ニシテ人數夥敷事ハ此國ニ限リ候儀ニテ、既ニ亡命之者咬𠺕吧ニ參リ、住居致候モノ計リモ幾萬之數ニ候得共、是式之人別聊相滅候ト申儀ニモ無レ之、既ニ昨年咬𠺕吧住居之唐人共、國法不二相守一徒黨致シ、及二亂妨一候間、無二餘儀一鐵砲ヲ以テ數百人打殺候處、右ニテ平穩ニ相成候得共、唐國人別之儀ニ付其儘難二捨置一唐國へ使者ヲ立、右之次第申述候處、唐國返答ニハ、其地ニ參リ住居致シ候者ハ、勝手ニ取扱可レ申旨相答候ニ付、其段唐人共へ申渡候處、其後大ニ相恐、神妙ニ相成國法相守候、右樣人別夥敷候得共、唐國ヲ掠略致ス儀ハ易キ事ニ御座候、乍レ去永久相保候儀ハ相成兼、和蘭國抔ハ一國之兵ヲ移シ候共尚不足有レ之、尤歐羅巴三四ケ國申談候テ配分致シ、領地ト仕候時ハ永遠相保候儀相違無レ之候へ共、此國ハ諸國之田畑之如キ物ニテ、此儘差置有無ヲ交易仕候テ、互ニ利ヲ得國用ヲ辨ジ候方宜敷、皆國民ヲ養候爲之事ニ御座候、唐國ハ大國成トイヘ共、其之ヲ攻取候儀ハ易事ニ御座候ト相答申候、是等私一人承リ候儀ニモ無レ之、同役ハ勿論通詞通辨仕候儀ニ付、詰合一同孰レモ承知仕候儀ニ御座候、右樣大國ヲ併呑仕候ニ三年ニ至ラズ抔ト申、殊ニ言下ニ相答候儀、如何可レ有レ之哉ト格別心ヲ留メ候儀ニモ無二御座一候處、其後三四ケ年ヲ歷、於二唐國一阿片一件勃然ト事起リ、

遂ニハ及ニ戰爭ニ候次第、右風說之儀ハ唐入津之時ニ私儀取伺、御奉行所ヘ差上來候儀ニ御座候處、唐人共儀ハ平生下賤之者トイヘドモ、自國之外都テ禽獸無智之者之樣心得輕蔑仕候間、迚モ敗軍仕候次第申出間敷ト奉ニ存候處、格別之大敗ニ候哉、時々申立候風說、水陸共一戰之勝モ無ニ之、都テ敗衂而已ニ御座候、固ヨリ船主共儀ハ乍浦邊近隣蘇州邊住居之者ニテ、廣東邊ハ數百里ヲ相隔、乍浦ハ蘇州ニ相隔候儀、僅ニ十里程ニ御座候得共、戰場ニ出候者申儀ニモ無ニ之、何レモ風說ヲ以申出候ニ付、實否モ不ニ相分ニ候得共、紅毛人入津之上申上候風說ヲ以相考候時ハ、敗衂ニ於テハ疑モ無ニ之候、其敗衂之出候處ハ都テ火器之爲ニ御座候、淸國ハ明ヲ併吞仕候程之儀ニテ、戰場火器ヲモ相用、火器之戰闘ニ利用ノ多キ事モ相心得居、康熙帝自製之大砲モ有レ之候程之儀ニ御座候得バ、明ニ勝候ヲ砲術之極ト相心得、太平ニ至リ候テハ研究仕候者モ無ニ之處ヨリ、イギリス之砲陣ニ敵對スル事不レ能、遂ニハ敗極リ和ヲ乞ヒ、金ヲ出シ國削ラレ、居ナガラ降ヲ乞候モ同様之儀、實ニ國體ヲ失ヒ申候、然ルニ皇國大砲之術ハ、文祿朝鮮之役初テ相傳、其後無ニ幾程ニ昇平ニ相成、昇平中ニ相開候儀ニ付、未ダ戰場實地之經驗無レ之處ヨリ、正法ニ存候儀モ皆華法之類ニテ御座候テ、正法ニ相違無レ之術ニ有レ之候テモ、戰場之便否ニハ頓着不レ申、一ヲ擧テ申候時ハ、譬バ拾匁筒ヲ重厚ニ拵、日込ニ仕候テ厚物ニテモ打洞候ハ、如何ニモ正法ニ相聞エ候得共、一人一術トハ違候儀ニテ、戰場之得失ハ研究不足之儀ニ御座候、且三匁五分等之小筒ハ足輕、十匁筒以上ハ士分打筒ト定、拾匁筒ハ侍筒抔ト唱候得共、先手足輕コソ遠キ

ニ及、利用多キ筒不二相用一テ不二相成一、侍ハ槍間ニ至リ打心得ニ御座候間、三匁五分筒ニテモ短用之功有レ之譯ニ御座候處、筒分有レ之候モ攻究不足故之儀ニ御座候、中外ニテモ屈宅仕リ、或ハ無用之遠キニ及バセ候ヲ主ト仕、皆砲術開ケザル處ヨリ彼ニ侮ヲ受候儀ニ御座候、右イギリスニ對シ候時ハ、矢張清國ノ火器モ同様之儀ニ御座候處、右ニイマン言下ニ相答候砌者、於二唐國一モ阿片禁令モ不レ出以前、廣東騒動聊其兆モ無レ之時ニ御座候處、悉クニイマン相答候事ニ相洩候儀無レ之、玆ニ於テ相驚候ハ、ニイマン兵事ニ心懸候者ニモ無レ之處、何故勝算ヲ定候答ニ御座候哉、甚不審ニ奉レ存候處、全西洋之習俗常ニ無事之時トイヘドモ、諸國ノ風ニヨリ勝ヲ制候理ヲ考究仕候段ハ、兼テ承候儀モ有レ之、左モ無レ之テハニイマン言下ニ答候儀ハ有レ之間敷、夫ニ付相考候得者、本邦之儀ト雖モ長ズル所ニ随ヒ、如何ナル工夫仕居候哉モ難レ計、短兵接戰ニ長タル國ト存候節ハ、其長ズル所ニ就テ砲陣ニ制モ相改、勝算ヲ握儀ヲ專一ト仕、古法ニ固着不レ仕候間、於二本邦一モ深ク被レ爲レ環二御神算一候様有二御座一度希候儀ニ御座候、敗衂ヲ招候者己ニ恃候處アリテ、油斷仕候ヨリ生候儀ニテ、刺撃之術ニ長ジ、火繩鐵砲ヲ以テ懸針ヲ射落候トテ、當今夷狄砲戰ニ對スル時ハ、未ダ萬全之師トハ相成間敷哉、砲陣大隊ニ對シテ勝算アル處迄モ、詳明ニ仕候上ニ無レ之テハ、合戰相成申間敷奉レ存候、唐國ハ大ニ過候テ、ヨキ取比ロト申ニ無レ之トノ說ニ至リ候テハ、深ク可レ考事ト奉レ存候

一　清國ハ二百餘年之昇平ニシテ、武備廢業シテ敗衂ヲ取候様識者申候趣ニ御座候得共、曾テ左様之儀

ニ無ニ御座一候、前明之政從甚商鑑モ御座候儀ニ付、別テ武備ニハ心ヲ用ヒ、懈候儀ハ無ニ御座一候、御案內被レ爲レ在候通、天下國家之護衞トシテ所謂八旗有レ之、始ハ四旗ヲ配列シ、重テ又四旗ヲ合セ八旗ト相成、八旗ハ滿洲八旗・蒙古八旗・漢軍八旗アリ、合テ廿四旗ト相成、旗每ニ都統官一人・副都統二人アリ、是ヲ一旗之棟梁ト仕、專旗下之軍人ヲ始メ掌ラシメ、是ガ下ニ參領・副參領職數人有レ之、皆都統・副都統之政令ヲ聞テ、又其下司佐領之職ニ通達シテ、普ク旗下之軍丁ニ令ヲ行ヒ、滿洲旗之佐令ハ旗每ニ七十人・八九十人、蒙古・漢軍之佐令ハ二十餘人ヨリ四十人ニ至ル、佐領一人ヲ合セテ軍人三百人、是ヲ一卒ト仕、滿洲・蒙古・漢軍之二十四旗ヲ以二京十八省ニ分別仕候テ、總軍八拾餘萬人ト申事ニ御座候、此兵數ハ初淸之事ニテ、當今幾百萬之數ニモ及候由、文學ハ申ニ不レ及、文武共ニ盛ニ成候儀ニテ、武藝練熟之者ハ文官同樣及第仕候由ニ御座候ヘバ、藝術モ餘程骨折候趣意僉々及レ承候儀ニ御座候得共、本邦ニテ諸侯方甲冑ヲ着、調練有レ之候儀ハ是迄承及候儀モ無ニ御座一候處、當淸朝ニ於テハ、三歲ニ一度大閱ヲ執行候儀ニテ、皇帝甲冑ヲ着ケ刀ヲ佩ビ、王公大臣八旗之將士軍丁ニ至ル迄甲冑ヲ着ケ、銃騎護軍前鋒火器營等之諸隊アリテ陣ヲナシ、金鼓・旗旌・號砲等之相圖ハ勿論、進退周旋スル事九度、第十度ニ至レバ礮ヲ連ネ等シク發シ、更ニ間ナク此時金ヲナラセバ即止ム、是ヨリ振旅之諸手續ト相成申候、是等ハ年來相缺候儀モ無ニ御座一、淸國ハ昇平トイヘドモ右樣心掛厚、殊ニ邊境之戰鬪ハ度々有レ之候ニ付、怠リ候儀ハ聊無レ之、國中之戰爭ニハ時々戰捷有レ之候ニ付、陣營・戰法皆是ニテ事足候者ト

而已相恃油斷仕、尙諸州於ニ廣東ニ交易仕候者、利潤之爲ニ淸國ヲ高崇仕候ヲ、聖人基業之國ト申、殊ニ漢滿二國ヲ併セ、世界中之大國ヲ恃他ヲ蔑視仕、四夷八蠻臣服ス抔相心得、外夷之强盛成事ハ更ニ心付モ不レ仕、林則徐國威ヲ振ヒ候爲、苛刻之取扱仕候處、是ヨリ兵端ヲ開居ナガラ降ヲ乞候モ、全ク我强ヲ恃油斷ヨリ生候儀ニ有レ之趣、然ル處淸國之敗ヲ嘲リ候者有レ之候得共、上黃帝ヲ始メ孫吳・穰苴・韓信・諸葛ノ徒、歷代名將名臣モ夥敷出ル事ニテ、當時之淸朝トイヘドモ文ニ文人アル如ク、武モ亦同樣練達之者モ候事ニテ、陣營之制・日月星晨・吉凶之觀象ニ至迄、悉ク練熟仕ザルモノ無レ之、我兵學モ彼ヲ祖ト仕候處、當時之兵家同樣鈐韜之秘ニ通候者ハ、彼ニモ夥敷有レ之趣ハ兼テ傳聞モ仕候處、淸國脆弱之艨艟、古製之城堡火器、八佛良機將軍礮、震天雷・地雷・噴筒・火桶等之類、火繩鐵砲三匁五分ヤ四匁之鳥銃等ヲ以、堅實厚大成ル戰艦ニ猛烈ナル火器ヲ備、陸戰ニハ節制精明練熟之イギリス共剛敵ヲ引受、三ケ年之對陣可也ニモ防戰仕候儀ハ、大國ニテ兵數夥敷故カト感心仕候、我兵數ニ候候而ハ、其衆寡ハ如何可レ有ニ御座ー歟不ニ相辨ー、只淸國之弱兵トハ違候得共、古戰之趣ヲ以テ相考候時ハ、鋭勇之士ト雖ドモ、火器之爲ニハ力ヲ施ス所ナク、敗軍ニ相成候儀モ有レ之歟、然處當今之火器ニ至リ候テハ、古ト違ヒ奇巧彌究リ、便捷猛烈之火器ト相成、其効力大ニ違候處ヨリ陣制・戰法モ出候儀ニ付、古ヘ戰場ニ用候火器トハ比較難ニ相成ー、然ルニ我五十騎一備ヲ以テ申候時ハ、實戰之數ニ至リ候テハ、從者迄凡千人ニ相成可レ申由、是等ハ日々糧食費候處ニシテ、戰ハ半ヲ過申間敷候得共、先ヅ敵ニ對シ合戰相

始候ハ、此中三四匁ノ鐵砲漸ク三拾挺而已、弓二拾張有レ之候テモ未ダ用ヲ爲シ不レ申、彼ハ千人ニ千挺ノ鐵砲ニシテ、無用之手明キト申者無レ之シテ、彼ガ打出候歩數我ガ打出候歩數トハ、長短大ニ差ヒ有レ之、彼ガ短用ト致候處ニテモ、我鐵砲ハ未ダ効力有處ニ至ラズ、彼ガ打出候テ我々充分害ヲ受候節モ、弓ハ勿論鐵砲モ未ダ用ヲ爲シ不レ申、加レ之三十挺之鐵砲ト千挺トハイヅレガ害ヲ受候事多候哉、長柄騎馬殿備ニ至ル迄モ、手ヲ空敷シテ徒ラニ彼等ガ標的ト成ル如ク被レ存候、應變制勝之法有トコソ可レ申候得共、小筒幷弓等共及處ノ力ハ定リタル者ニテ、別ニ秘術ハ無レ之事ニ御座候間、可レ改ハ相改不レ申候ハデハ、我用ル處ト彼ノ用ル處ト强弱遠近遙ニ差ヒ候儀ニ御座候得バ、勝敗如何ト心配仕候、且又魚鱗鶴翼如何成嚴陣ヲ布候共、敵間比合宜敷處ニテ、地中ヨリ湧出候事ニハ難ニ相成一、小筒効アル處迄進歩致シ陣形ヲ成ス中ニハ、味方ヲ損ジ候儀モ不レ少被レ存候、又十町位ヨリ眞シグラニ驅込候儀モ難ニ相成一、馳込候迚モ呼吸相通リ候テハ、充分之働ハ出來仕間敷候間、先手小筒ヨリシテ改不レ申候テハ不ニ相成一儀ニ奉レ存候、水戰モ如レ此者ニテ、前中後兩翼等船列正敷陣形ヲ成シ、中軍之指揮ニ隨ヒ進退聚散自在ニ相成、正奇無端相進候共、敵間頃合宜敷處ニテ、水中ヨリ湧出候術モ無レ之、イヅレモ十町廿町ヨリ漕出シ不レ申候テハ不ニ相叶一處、彼ガ船上ヨリ打出候玉ハ、先手之船ヨリ戰ヲ始候ト申定法ハ無レ之、前後左右之差別ハ無レ之、手分ヲ以打出候時ハ、如何成良陣之法有レ之候共、陣形ハ皆無用之物ト相成、中軍先ニ沈沒致シ候時ハ、令ヲ下シ候者ハ無レ之ト申者ニテ、堅實之船放時、熟達之者數多

無レ之テハ、夷狄トノ水戰ハ難二相成一、是等奉二申上一候者、所レ謂釋迦ニ說法ト可レ申候得共、諸向悉釋迦ニ相成不レ申候テハ、勝算難レ量奉レ存候、譬バ本邦ヘ兵ヲ向ケ候共、淸國ヘ差向候軍勢ハ可レ有レ之、左候時ハ我ガ士刀槍之術ニ熟シ、勇氣ニシテ奮戰可レ致モ、水戰ニハ力ヲ施ス處無レ之ニ付、一切之器械相揃不レ申候內、利ヲ失ヒ候迄ニテ、合戰如何ト心配仕、三艘四艘之船ニハ無レ之候間、篤ト御工夫被レ爲レ在候樣奉レ存候

一　豐臣氏征韓之儀ハ、朝鮮之兵ヲ以嚮導トシ、明ヲ併吞スル之趣意ニテ、朝鮮モシ命ヲ拒バ擊滅シテ、遼東ヨリ直ニ北京ヲ襲ヒ明ヲ奄有シ、其土壤ヲ割テ諸侯功臣ニ與ントノ算、事已ニ熟セリ、難キ事ニ非ズトノ事ノ由、朝鮮八道（脫文アリ）西南四道之兵ヲ八軍トナシ、水陸九軍拾五萬人、遊軍六萬人ヲ以應援ニ備ヘ、東北三道之兵ヲ以自衞トスルト有レ之候處、我兵ハ源平以後戰鬪無二止時一、數百年打續候戰鬪ニテ、元龜・天正ニ至リ候テハ、彌練熟精銳之兵ト相成、開闢以來最モ强盛之時ニ御座候、朝鮮ハ漢之武帝降スト申位ニテ、代々唐國ニ服從仕、爭ヒ候事ナク兵禍無レ之國ニテ、實ニ羸弱成兵ニ御座候、明之援兵ト雖ドモ、二百餘年之昇平ニシテ政ヲ失シ、衆心離散之時ニテ、邊寇之合戰モ有レ之候得共、戰鬪不練之弱兵、壞垣ヲ推ガ如キ者ニ御座候、我精銳練熟ノ兵ヲ以テ、彼之太平備ナキ弱國ヲ伐候故、不レ戰シテ潰エ、守ヲ棄テ遁立スル類ニ御座候間、一擧シテ朝鮮ヲ得候得共、是ハ我至極强盛之時ヲ以、彼之至極弱時ヲ伐候儀ニ御座候、右樣練熟之兵ニ有レ之候得共、朝鮮之將李舜臣大砲ヲ以我船ヲ擊碎キ

候ニ付、木島康親ハ之ニ死シ、脇坂安治ハ苦戰シ、其衆ヲ亡テ退キ、陸軍ト合シ候策應不ニ相成一候、石田三成ハ馬灘ニ敗レ、蜂須賀ハ鶴尾浦ニ敗レ、明之援兵來候テハ、李如松火器ヲ以平壤ヲ攻候節、一日之合戰ニテ處々陷、死傷甚敷、小西行長守リヲ棄テ、即夜潜ニ衆ヲ卒ヰテ遁走致シ、毛利秀之。加藤光泰。細川忠興等之七將、晉州ヲ攻テ皆大敗致シ候、後役ニモ我將菅正信碧波高下ニ戰ヒ、李舜臣大破ヲ以テ來攻シテ正信敗死致シ、島津義弘八畳ヲ築候處數壘攻陷レ、彼新寨ヲ攻ルニ至テハ、木砲ヲ以大門及城墻ヲ摧キ、我城兵殊ニ死戰致、垂極危相成候處。砲薬ケ烟焰盛ニ迸リ、明陣大亂候折柄、其機ニ臨ミ衝入候間、漸ク勝軍ニ相成候得共、是ハ明軍火器ヲ取扱方其拙故之儀ニテ、左モ無レ之節ハ敗軍ニモ可ニ相成一、此外互ニ勝敗モ有レ之候處、刀槍之働朝鮮之役ニ過ギルハ有レ之間敷、戰場百練之將士一卒トイヘ共弱卒ハ無ニ御座一、忠勇ヲ盡シ合戰致候得共、前後七年之合戰朝鮮ニ被レ泥候テ、遂ニ明境ニ入事不レ能ハ、遺憾之次第ニ御座候、今之清國ハ漢滿二國ヲ合セ、其頃之明ニ較候テハ、一倍之大國ニ相成居候ヲ、英吉利之ヲ攻メ、三年ニ過ズシテ、居ナガラ降ヲ乞ハシメ候ハ、何ニ長ジタレバ如レ斯勝ヲ制候哉、我國之征韓ニ較候テハ優ル處アルガ如ク、是ヲ以相考候時ハ、剌撃之術ニ長候トテ特ニ難ニ相成一、火器之精器ト練熟之者多無レ之テハ、當今夷狄ノ合戰ニハ甚危奉レ存候、豐臣氏ハ天受之雄才大略ニシテ、ニイマンハ凡庸之賈人ニ候得共、永久難レ保說ニ至リ候テ、豐臣氏モ穿鑿足ラザル處アルガ如ク奉レ存候

一　慶長十四年己酉五月、有馬氏黒船燒討之捷ヲ以、夷狄之船容易ニ燒討出來候ト相心得候儀ハ、甚量簡違之樣奉レ存候、右入津仕候黒船ハ亞媽港仕出シ之商船ニテ、本邦ヲ襲來候船ニハ無レ之候間、武備之手當固ヨリ無レ之候、外國之風トシテ、商船トイヘ共海賊防候爲メ、石火矢少々ハ備付居候事ニ御座候、其比ハ有馬氏ヨリ夷國ヘ仕出之船、洋中ニテ破損等有レ之候ニ付、亞媽港地ニ寄テ修理相加候節蠻人ト喧嘩仕、一船乘組五拾人悉殺サレ候由、然ル處其後長崎ヘ入津之亞媽港船、先々喧嘩之者乘組居候ト申儀承リ及、討取之儀公邊ニ御願ニ相成候處、一船之内ニハ罪無キ者モ可レ有間、加比丹ヲ捕テ推問有ルベシトノ御下知ニ相成候處、其儀ヲ洩聞、黒船夜ニマギレ遁出候ヲ有馬氏聞付、兼テ用意モ致居候儀ニ付、兵船幷燒草船數千艘ヲ出シテ追懸候處、黒船モ風ナクシテ進事不レ能、勝敗ヲ決セントノ趣意モ候哉、碇ヲ入追船ヲ待受一戰ニ及ビ、遂ニハ定例之通彼風之討死ニテ、船中ヘ蓄候火藥ニ火ヲ點ジ、討死致タル事ニ御座候、黒船人數ハ僅少ニシテ、有馬氏之死傷ハ千餘ニモ及候由、全商賣之爲入津仕、不慮之儀ニ逢恐怖仕、遁出候位之事ニ御座候、亞媽港ハ勿論西洋トイヘドモ、其頃迄之儀ハ航海幷砲術モ都テ不ニ相開一時ニシテ、殊更只一艘ノ商船ニハ燒討出來候モ、彼ヨリ焚燒致シ候故、右樣戰捷モ有レ之候得共、當今之西洋ニテハ、海軍諸術モ相開、且侵掠之爲其用意ヲ致シ、數百艘押寄候儀ニ付、燒討抔申儀ハ出來候儀ニ無レ之、紙上之論迄ニ御座候、一船之軍艦トイヘドモ、我漁船等之小船ヲ以テ圍燒致シ候共、小船ハ乘沈走出可レ申候ニ付、燒討之手段ハ全無用之事ト相成申候、於レ今モ

南塘ガ水戰法ニ倣ヒ、小船ヲ以大船ヲ圍燒シ、圍攻致シ候積ニ御座候得共、南塘ガ戰法ハ倭寇之大船ニ、大礮無レ之ニ對シ候處ヨリ出候策ニシテ、彼ガ火砲ト技拙キト雖モ、間近ク接シ打碎キ候儀モ出來候得共、當今之西洋軍艦之三百目五百目之筒ニテ打洞候事難ニ相成、此ヨリ打候筒ヨリ、彼ヨリ打候筒効力烈敷候間、未ダ近寄不レ申內ニ打碎可レ申、且又進退難ニ相成一船ニ候得バ、小船ニ燒草ヲ積夷船ヘ取付候儀モ可レ仕候得共、海軍ニハ帆ヲ懸ケ進退自由ニ働モ仕候間、不利ト存候節ハ、疾ク洋中ニ退キ候事ト奉レ存候、兵家燒討之良策有レ之候得共、蒸船偶人ニ對候テハ其法行ハレ可レ申候得共、彼モ智惠有レ之、大砲ヲ始メ諸防守之法モ委敷候間、容易ニ燒討モ出來仕間敷、英國船襲來候ハヾ、一二艘之船ニ限候樣存、是ヨリ出候兵家之戰略ニ御座候間、事ニ臨候テハ大ナル違ヒニ相成、小事ニハ有レ之間敷、黑船之一挺ヲ以恃ト仕候ハ、甚ダ迂ナル事之樣奉レ存候、彼ヨリ輕侮ヲ受候儀ハ彼ニ非ズ彼ヲ伐候ニモ左之例ハ難ニ相成、況ヤ西洋人ニテハ水陸戰法御案內通之儀ニ御座候間、何分ニモ御一戰之儀ハ、四五年御見合御座候樣、伏テ奉レ祈候事ニ御座候

一　阿蘭人醉中或憤激之餘リ、等事ニ觸候テ申タル儀ヲ通詞承リ、內々噂仕候儀モ有レ之、取留候儀ニモ無ニ御座一候得共、其情ヲ察シ候時ハ、我ガ彼ヲ侮候如ク、彼モ又我ヲ侮、右之內ニハ諸國共憤怨ヲ懷候樣ニモ相聞候間、兵端一度相開候時ハ、諸國モ加勢之兵ヲ出候儀ハ彼國之習ニテ、兵端相開候儀ヲ希候事ニ相聞申候間、誠ニ御大切之御時ニ御座候

一　來年渡來之アメリカ船一戰ニシテ殲滅致シ、提軍ニ相成御武威ニ畏縮仕、再ビ覬覦之情ヲ斷候樣有レ之候者希候處ニ候得共、彼敗衂仕候節ハ、諸國ヨリモ加勢兵ヲ出シ候儀ニテ、アメリリカ一州ニテモ仰山ナル大國ニテ、元來イギリス之爲メ開カレ候由ニ御座候得共、近年ニテハ却テイギリ衝候時スニモ敵對仕候程之强國ニ相成候由、此上ロシア・イギリス等諸國ヨリモ軍艦差向、本邦處々ヲハ、追々手ニ餘リ候樣相成、我武勁捷勇悍ト雖ドモ、諸侯兵數モ限有レ之候得バ、衆寡敵シ難ニ至リ可レ申哉、連年戰鬪打續候儀ハ必定ニ御座候、左候時ハ鐵砲石火矢相揃候共、第一懸念仕候ハ國中之火藥ニテ、一ケ年之戰鬪ニハ足リ合申間敷候、近來諸國之振合ハ不ニ相心得ニ候得共、隣國ニテ硝石製法所一ケ所ニテ、一日之贅上高四五貫目位ノ者ニ相當リ、是亦年分無ニ間斷ニ共高ニ上リ候ト申ニハ無レ之候、殊更諸方ニテ稽古之爲日々ニ打捨候高モ不レ少、各國硝石製作致シ候ト申儀ニモ無ニ御座ニ候間、硝石甚乏敷奉レ存候、然ル處諸向鐵砲鑄造有レ之、固ヨリ用意筒モ可レ有レ之候得共、砲數ニ較候テハ火藥益足合不レ申儀ハ顯然仕候、是ハ海防第一ニ御座候間、蘭國ニテハ過分之火藥貯、平日硝石丘ヲ拵へ作、硝石過分ニ出來仕候得共、猶硝石代料引合候ハバ、買渡申度申出候程之儀ニ御座候、砲戰之次第ハ御案内之通之儀ニ御座候間、火藥之儀ハ御方略中之儀ニテ、申上候迄モ無レ之候儀ニ御座候得共、國國之便利ニ隨ヒ硝石丘拵立候樣被ニ仰付置ニ、一年ニテハ其分之硝石相備候ニ付、可也ニモ相蓄候樣可ニ相成、急務ト可レ仕儀ニ奉レ存候儘奉ニ申上ニ候

一　一戰モ無レ之テハ、彼ガ兵威ニ相懼、彼ニ弱ヲ示シ、御國威相衰、御耻辱トモ相成候樣相開候得共、兵道ハ只勝候ヲ要道ト仕候處ニテ、夫迄之遲速ハ時ニヨリ候儀ニ付、戰期相延候モ御籌畫之一ト奉レ存候、所レ謂避ニ其鋭氣一討ニ其惰氣一、不レ戰而屈ニ人兵一者也、是古事ニ御座候得共、是等ハ戰場ニ臨ミ候而已用候儀モ有レ之間敷、只今相用可レ然歟ト奉レ存候、淸國彼ガ爲ニ脆ク敗衂仕、彼大ニ志ヲ得候處、本邦之戰法唐國ニ相同ト申儀ハ兼テ承知致居候ニ付、淸國同樣勝算ヲ握定仕候見極ヲ以テ、我好マザル處ノ交易ヲ願ヒ、其成否ニ隨ヒ或ハ不敬ヲ働キ、我ヨリ兵端ヲ開候ヲ希望仕リ、遂ニ戰爭ニ及ビ、掠奪可レ仕之趣意ニテ、實ニ可レ惜事ニ御座候得共、其情ニ不レ堪シテ我ヨリ手ヲ出候時ハ、彼ガ術中ニ陷リ候テモ、我々勝算サヘ有レ之候得バ、聊心配仕候儀ハ無ニ御座一候得共、未ダ海防向御全備ト申ニハ有レ之間敷、此處ニテ一度合戰相始リ候得バ、其節限リ事濟可レ申儀ト自然可レ被ニ思召一候哉モ難レ計候得共、中中左樣之儀ニ無レ之、早クモ四五年ハ休戰難ニ相成一、左候トキハ硝石ハ勿論、糧餉等之儀モ如何可レ有ニ御座一候哉、恐ラクハ三年ノ蓄有レ之候御向ハ有レ之間敷哉、常々承リ候儀モ御座候、攻城ニハ攻城ノ器械相整攻カヽリ候如ク、當今士氣モ振起仕、槍刀之技ニモ練熟仕候付、是ニテ急度恃ニ足可レ申樣被レ存候得共、兼テ愚見モ申候如ク、夷狄ハ夷狄ヲ防候術盛ニ無レ之テハ難ニ相成一候處、此長ト彼之短ト比較仕勝算ヲ定メ候ハヽ、皆紙上論ニ御座候、水戰ニ至リ候テハ、攻城ヨリハ甚急接難ニ相成一時ハ、短兵勇氣モ施候處無ニ御座一候、空敷我兵ヲ失候迄ニテ、如何ニモ殘念之次第ニ御座候間、何卒御全備相成候

迄、御延引ニ相成候樣仕度、自然一戰之後ニ至リ、半途ニシテ兵ヲ控ヘ候樣之事ニ至候テハ、御國體ヲ失ヒ候外有レ之間敷奉レ存候、彼西夷之砲術陣列船皆一國一流ニシテ、國家ノ爲ニ力ヲ盡シ、戰鬪之度々戰後ニ至リ候得バ、其非ヲ相改、專ラ精究仕候間、命令モ能行屆、萬人一心トモ可レ申歟、却テ神武之御國ニシテ、國家安危ニ係リ候儀ハ置テ不レ論、只自己之門戶ヲ爭ヒ、身之利害ヲ以テ可否ヲナシ、料簡モ區々有レ之、諸事研究行屆候樣ニハ不レ奉レ存候、本邦陣營之體、凡長崎表ニ於テ軍人見分仕候儀有レ之、晝ハ數百之旌旗ヲ建、夜ハ數千之燈籠ヲ懸ケ、勢衆軍威ヲ相示シ、軍艦ニハ旗吹貫・弓砲數槍相備付ケ、列船嚴整之形勢ハ、恰モ源平水戰畫圖ヲ見ルガ如クニシテ、我見慣レ候處ヨリ見受ケ候時ハ、至極武威盛ナル樣ニ相見候得共、彼ガ實驗之眼ヨリ見候時ハ、却テヲカシミ有レ之趣ニ相聞候間、通詞ヲ以相尋候時ハ、御武備感心仕恐入抔之儀ヲ申候得共、竊ニ相探候時ハ、旗旌灯籠盛ナルハ美事ニ候得共、大砲放時照準之便ニ宜敷、列船陣形ヲナストイヘドモ、一船一發之玉ヲ受候時ハ、萬衆共ニ沈沒致、弓ハ西洋古代ニ棄テ、火繩鐵砲戰陣ニ相成候間、實眞之勇・實正之藝ニ相成候樣所レ希ニ御座候、本邦ハ獨立之國ニ御座候得共、彼ヲ防候ハ彼ヲ防候具ヲ設ケ、彼ニ十倍之兵力無レ之テハ安心難レ仕、本邦之風氣ニシテ性命ヲ惜ミ候者ハ無レ之候ニ付、有事ニ臨ミ候テハ、討死致候トノミ各覺悟仕居候得共、婦女子モ怒ニ觸身命ヲ捐候儀ニ付、戰場ニ臨ミ性命ヲ惜ミ候者ハ無二御座一候、然ル處命ヲ捐候儀ハ易キ事ニ御座候得共、性命ヲ捐候迚勝算ニ相成候事ニモ極メ難ク、只々夷狄之爲メ、國ヲ被レ奪不レ申

候樣、專力ヲ盡シ度事ニ御座候、上ニ親ミ長ニ死スル(脱　文)其ナキ時ハ、所レ謂乳犬犯レ虎、伏雞搏レ狸、闘心有トイヘドモ之ニ隨ヘバ死ス、徒ニ我衆ヲ魚肉ニスト申タルガ如ク、戰艦諸器相揃候上ハ、思召ニ御鏖戰有ニ御座ニ度所レ希ニ御座候得共、未ダ相整不レ申、恃ミ候モノ臺場ノミニ御座候、陸地ニ長蛇之陣ヲ布キ、四藝練達之勇士相守候共、夷船ヨリ打出候彈丸其堅陣ヲ打碎候時ハ、一頭兩尾相應候儀モ相叶申間敷、勇士空敷拳ヲ握候迄ニ御座候、是等ノ利害難レ通、差カヽリ候夷狄トノ合戰ハ、專ラ柔術抔骨折出精致スモノ有レ之、患事ニハ無レ之候得共、場合違候儀ニテ、用意整兼候向モ多ク有レ之、未ダ水軍之戰器相揃不レ申候間、勝算如何ト心配仕候、只今之急務ト仕候處ハ大砲ニ御座候處、御世話モ御候座テ、大砲ハ出來仕候間、精器ハ御座候テモ、精藝之者甚ダ少ク、右樣之儀モ連續不レ仕候、弘安之蒙古之戰捷ト申ニハ有レ之間敷候、歐羅巴人トハ未ダ一戰之鋒ヲ交タル儀無レ之候間、朝鮮・明之例ニハ參リ難ク、我一ヲ以彼ガ十ニ當ルト申儀ハ、我精鋭之兵ヲ以テ、太平韓・明之弱兵ニ對シ候處ニ御座候得共、今我ガ太平不練之時ヲ以(脱　文)候テハ、所レ謂杓子定木ニ相當候樣奉レ存候、四五艘之船ニ仕候テモ、島原一揆ニハ相優候事ト奉レ存候、左候時ハ格別厚ク御用意無レ之テハ、勝算如何ト心配仕候、疆場之責アル者ハ據レ實以對、從レ實而練トコソ申候ヲ、本邦ハ天地之給ニシテ、四面滄海ヲ環、暗礁四方ニ迸リ、遠付淺砂異賊近ヅク事ヲ不レ得、人皆勇悍勁捷、刄利堅甲刺擊之術ニ長候抔專讃稱仕候、悉ク其說之通ニ御座候時恃トモ相成候得共、甚齟齬仕難レ信儀モ御座候間、之ヲ恃候時ハ敗ヲ招候階梯トモ

相成可レ申哉、固ク本邦ヲ尊敬仕候ハ當然ノ儀ニ御座候得共、事品ニヨリ候儀ニテ、明人之其下モ亦諛辭ヲナシ、其上ヲ悦シメ而テ僻リテ貪ル、是故ニ其勝往々敗端ト成ト申タル如ク、諛辭ヲ以テ上ヲ悦バシメ其譽ヲ取候儀ヲ、只々心懸候ハ昇平之弊風ニ御座候得共、國家安危ニ係ル事ニ候得バ、實ニ據リテ申上度者ニ御座候、累勝之卒トイヘドモ、之ヲ馳スルニ未レ勝ニ信ズト申候位ニテ、如レ此大切ニ心ヲ用ヒ、勝軍共相成可レ申處、只夷狄ハ弱キ者ト而已心得サセル者、一國油斷ヲ發候譯ニ相聞候、依レ之防禦手當行屆兼候場合モ可レ有レ之哉ニテ、卒然之變有レ之候テハ如何ト懸念仕候、夷狄ノ强盛ヲ知ラシメ候テハ人心先怯、不レ戰シテ敗ル抔心得候得共、是ハ僥倖之勝ヲ希候道理ニテ、若意外ニ出候儀モ有レ之節ハ、敗遁仕候外無ニ御座一候、ケ樣成儀ハ時ニ臨一時之權ニシテ、平生無事之日ニ示シ候處ニテハ、矢張其强盛ナル者ハ强盛ナル處ヲ知ラシメ候テ、其右ニ出候樣專攻究仕、萬全萬勝之國ト相成候者、皆有司之皷舞ニ可レ有レ之儀ト奉レ存候、浮氣之勇、花法之藝ハ恃ミ難シテ、皆我ニアル事ニ御座候間、何事モ穿鑿行屆、戰具相揃候上御英斷御座候樣仕度奉レ存候

一　寛永十四年島原一揆之儀、大坂落城ヲ去リ候事僅ニ二拾四年ニシテ、瘡痍未レ癒共可レ申歟、然ルニ百姓二萬千三百餘人、内浪人頭立候者拾五六人相加リ、女子童一萬八千九百餘、都合四萬二千餘ニ候得共、相働候者二萬餘之百姓ニ御座候、追討大將御名代ニハ、板倉内膳正殿ヲ初トシテ、細川・有馬・黒田・鍋島・小笠原・毛利・水野・寺澤・松倉氏等九州之諸侯、皆武功之大將ニシテ、其臣モ實戰ヲ經候者モ有

レ之、其勢十六萬餘人ニシテ、合戰之度々却テ利ヲ失ヒ、同十五年正月元日、三番攻之節ハ寄手總軍勢二十六萬餘ト申事ニ御座候、內膳正殿ニハ大坂御陣ニモ有名之御方ニ御座候處、賊城櫓下ニ迄押寄、鐵砲之爲ニ戰死ト相成、手勢何レモ討死致候得共拔候事不レ能、松平伊豆守殿御下向後モ一捷無レ之、二萬餘之百姓勢ヲ伐候ニ、二十六萬餘之大軍ヲ以テ攻候得共、二百餘日落城ニ不相成、然ルニ逆賊兵粮玉藥トモ盡果テ、最早籠城之術計無レ之處ヨリ討死ト相定候故、落城ニ相成候得共、若兵粮玉藥十分ニ貯候時ハ、急ニ落城之儀モ無ニ覺束一奉レ存候、寄手之討死ハ三千人ト申事ニ候得共、內實ハ其數難レ計趣、然ルニ西洋人ハ我足輕・町人・百姓等ニ比シ、蔑視仕候ハ宜敷候得共、此爲手輕ニ相心得防禦不ニ行屆一向モ可レ有レ之奉レ存候、夷情ハ百姓ト見候テモ、此位之兵力ハ可レ有レ之、殊ニ海中ニ堅城ヲ形リ、撰澰ニ依リ進退周旋自在ヲ得、猛烈之火器十分相備、防守之法モ精究仕候儀ニ付、容易ニ乘入短兵急接仕度モ不ニ相叶一候、蒙古・朝鮮船抔之類ニハ無レ之候間、是等之先例ヲ以制候樣存ニ不利一、皆棄テ用ル事ナシ、弓アル國ハ未戰理開ケザル國ト相嘲候體ニ御座候、臺場之製、幷大礮、幷臺製等之儀ニ至ル迄常ニ見分致候處、本邦ハ有用ヲ捨テ無用ヲ飾リ、實用ニ力ヲ盡候處ナキ抔竊ニ冷笑致シ候事之由ニ御座候、輕侮ヲ受候理無レ之ニモ有レ之間敷、旌旗灯籠ヲ以衆ニ示シ軍威ヲ張候ハ、孫吳時代火器無レ之時之策ニ御座候、只今ニテハ遠ク隔テ候テモ砲丸飛來、或ハ遠目鏡一本有レ之候テモ、敵之虛實衆寡相分申候ト申者ニ御座候間、刺擊之術長ジ、人々勇猛トイヘドモ、水戰ニ至リ候テハ勝算定メ難ク奉レ存候、兵法、使ニ

敵人不レ得レ至者、害レ之也ト有レ之由ニ候得共、彼ヲ害スルノ器無レ之ヲ以、彼ガ畏ル、處無ニ御座一候、其害スルノ器ハ未ダ完備不レ仕、南塘モ申候如ク、弓矢之力、不レ强ニ於寇一、而欲ニ藉以制一レ勝ト歎キ候如ク、彼ガ軍艦ニハ猛烈之大砲數十門ヲ相備候處、我水戰法ニテハ、百石積之船ハ五百目筒ヲ限ル抔敎ヘ、是以夷船厚薄モ存不レ申、洞貫之力試放致候儀ニモ無レ之、只術者之考而已之儀ニ御座候、當今之如ク御世話モ御座候得共、砲術彌相開候時ハ、彌後患ハ無レ之事ニ相成可レ申奉レ存候、右ニ付何時ニテモ合戰可ニ相成一御用意サヘ相整居候時ハ、縱令交易御免ニ相成候テモ、差止候儀モ何時モ出來可レ仕儀ニ御座候、何分兵端開ケ不レ申候樣取扱、御用意向之儀ハ、當時之御振合ニテ、四五年相送リ申度、其上ニテ思召モ御英斷御座候樣仕度奉レ存候

一　蠻夷互ニ有無ヲ通ジ交易仕候儀ハ、彼ガ國之習俗常ト仕候儀ニテ、此品ヲ以テ彼品ニ易ヘ其利潤ハ互之事ニテ、敢テ一國之利ヲ貪リ候ト申趣意無レ之、交易ハ各國民ヲ撫育致シ候爲之儀ニテ、子細無レ之事ト手輕ニ相心得候儀ニ御座候處、於ニ本邦一御深遠之御趣意モ有レ之、御許容難ニ相成一處ヨリ甚齟齬仕候意味ニ御座候處、彼等本邦之產物多少有無委敷次第モ相心得不レ申、譬ヘバ有物ヲ以テ與ヘザル樣相心得、憤怨ヲ抱キ候儀ハ、唯々交易御免之一事ニ而已相拘リ居候儀ト御座候處、若顧之通御免ニモ相成、雙方商法取組、代物ニ可ニ相成一產物等委敷承知仕候樣相成候場合ニ至リ候得共、彼等相好候品モ無レ之候ニ付、却テ後悔可レ仕程之儀ニ御座候、遠洋乘渡交易仕候儀ハ、莫太利益有レ之品代リ物ニ受取候

樣無レ之テハ、其詮無レ之次第御座候、阿蘭陀方昨今迄無レ滯入津仕御用相勤候儀モ、金銅御渡ニ相成候故之儀ニテ、自然銅御渡無レ之時ニ至リ候節ハ、外ニ利潤ニ相成候品一種モ無二御座一候間、決テ渡來仕候儀無二御座一候、一船仕出候ハ不レ少雜費モ相掛リ候儀ニ付、格別之利潤無レ之候テハ、遠洋凌來候テ引合兼候趣ハ兼テ承知仕候、然ル處アメリカ・ロシヤ等交易奉レ願候趣、右交易御許之有無ハ、乍レ恐本邦治亂兩端ニ相係候儀ニテ、當時ニ至リ候テハ、古之夷狄ニハ無二御座一候間、小事ヨリ大事ニ及、不二容易一御儀ト竊ニ心痛仕候、若彼ガ願之通御免無レ之節ハ、恐クハ其儘ニテ相濟申間敷、必是ヨリ兵端ヲ開キ候儀、永遠御世話モ不レ絶事ニ立至リ、不幸之生靈ヲ水火ノ中ニ陷イレ、國家ノ安危モイカヾト心痛仕候程之儀ニ御座候處、別ニ斷無レ之ハ無二是非一事ニ奉レ存候得共、交易一向之儀ハ、凡彼地之風ニ習ヒ、手輕ニ御取扱ニ相成候樣仕度、其手輕ニ取扱候ト申儀ハ、別ニテモ無二御座一、利潤無レ之代物ニテハ迚モ引合不レ申、彼ヨリ退候事ニ相成候間、先御理解被二仰渡一候テ、其上ニテモ交易相願候儀ニ御座候ハヾ、假ニ交易御免之思召ヲ以テ御免被レ爲二仰付一、兩三年商賣仕候得者、損益之次第モ相分リ、必彼ヨリ退候事ニ相成申候、其御理解ヲ申大意ハ、凡左之意味ニ仕度奉レ存候、於二本邦一諸國交易相好無レ之ニハ無二御座一候得共、御國小ニシテ舶來之貨物國中潰シ高モ限リ有レ之、又御國ニテ產スル處ノ產物甚少キヲ以、代リ物ニ御渡可二相成一品無レ之ニ付テハ、交易取縮ニ相成候ヨリ外無二御座一、依レ之往古諸州ヨリ渡來致シ交易ヲ御免ニ相成、右代リ物ハ主トシテ金銀ヲ以御渡ニ相成候處、遂ニハ金

銀出方無レ之處ヨリ、銅ヲ以御渡ニ相成、銅之儀モ追々出劣リ、渡來ニ至リ渡方差支候處ヨリ、阿蘭陀古格互市法ヲ被レ成ニ御改一銅半ヲ被レ減、半減商賣ニ被ニ仰付一程之儀ニ相成、猶又貨物積方不レ宜故ヲ以、唐國ヨリ積渡候品ハ、阿蘭陀積渡ヲ御差留ラレ、阿蘭陀積渡候品ハ、唐國積渡リヲ被ニ御差留一是以同物相嵩ザル爲之御仕法ニシテ、畢竟御國小ニシテ潰方不レ宜、同品相嵩利潤無レ之トキハ、交易之詮難ニ相立一阿蘭陀人モ心得候通、纔ニ丁子三千斤ヲ一ヶ年交易之高ト相定有レ之、自然此高ヲ過ギ持渡候節ハ、過斤之分ハ例格元買直段ヲ被レ減候程之事ニ有レ之、然ル處銅之儀ハ近來ニ至リ必至ト出劣、御國用ニモ差支候程之儀ニ付、猶御仕法御改革之思召モ有レ之候折柄ニ有レ之候得者、阿蘭陀同樣之交易之儀ハ、專ラ於ニ長崎一取扱候御法候間、彼地ヘ罷越、御國產諸品熟覽致シ、右直段出產之多少等モ悉ク承知可レ致、且又其國ヨリ積渡交易可レ致產物モ諸品名書出、幷直段等モ逐一申立、凡交易之仕法豫メ組合相試ミ候樣可レ致候、交易之儀ハ互ニ國民扶助之爲之儀ニテ、利潤無レ之テハ難ニ詮立一事ニ候處、交易之儀ニ付テハ、其筋役人ニ於テ損益取調申立候次第モ有レ之候間、先以交易之仕法篤ト承知之上、彌治定之所再ビ相願候樣可レ致、其上ニテ雙方差支無レ之筋ニ至リ候テ、願之通御許容可レ被レ成旨被ニ仰渡一双方仕法組合再ビ相願候儀ニモ至リ候ハヾ、先例之交易御免之思召ヲ以、兩三年爲ニ御試一御免可レ被レ成旨被ニ仰渡一ニ相成候樣仕度、且御返翰被レ下候共、是等之御趣意ヲ以被ニ仰渡一御國產之諸品モ委敷承知爲レ致、交易取組方モ爲レ試候方、永ク國家之御爲ニ宜敷、覬覦之情モ自然ニ絕候事ニ成行候儀ニ

御座候、殊更仕法取組試方ニ付テハ、年月モ相送リ候儀ニ付、其内ニハ海備御萬全ニモ相成可レ申、然ル上ハ交易御差止之思召ニモ御座候ハヾ、何時モ御差留ニ相成、勝手次第ニ相成候儀ニ御座候、モシ其節ニ至リ彼ヨリ兵端相開候共、御防禦向行屆キ候上ハ、敢テ頓着仕候儀モ無レ之、乍レ併夷狄ト合戰仕候儀ハ、矢張國家之御損害、永遠之御爲ニ不レ宜、御上策ニハ相成申間敷、商賣之儀ハ今日市中小商賣モ同樣之儀ニテ、品物代料自然之相場モ有レ之、爭ヒ候處ハ專ラ利潤之多少ニ拘リ候儀無ニ御座一候、交易御免之成否ニ至候テハ、偏ニ公邊ヲ奉レ恐候次第ニ相成候間、先年之通ヲロシヤ蝦夷地ヲ奪候如ク、往々邊患ヲナシ候事ニ成行候ハ必定之儀ニテ、蝦夷地方ハ捨候テモ無ニ是非一次第ニ奉レ存候得共、近來ニテハ諸夷強盛ニ相成候ニ付、國家始終之御爲ニ不レ宜儀ニ奉レ存候、互ニ産物之取調ニ不レ仕、遂ニ騷擾ト罷成、自然存亡ニ係リ候樣之儀モ御座候テハ、實ニ不ニ容易一次第、更ニ殲滅仕候トテ、益熾ニハ相成候トモ、畏縮仕候儀モ無ニ御座一候、左候トキハ永式御世話モ不レ絕儀ニ御座候、本邦産物多少有無モ相心得候上、彼ガ望ヲ絕候節、御怨望仕候儀ハ無ニ御座一候間、永御安心之場ニ相成可レ申事ニ御座候

一　右樣假ニモ交易御免ニ相成候テ、一國御免ニ相成候時ハ、其他追々相願可レ申、是又御免ニ相成不レ申テハ相叶申間敷、左候時ハ際限モ無レ之、本邦之膏腴ハ彼ニ可レ被ニ絞上一ト奉レ存候儀モ可レ有ニ御座一候得共、左樣之次第ニハ無レ之、素ヨリ一國御免之上ハ、願出候儀當然之儀ニテ、左樣相成候得バ猶更相好候處ニテ、於ニ本邦一右樣莫太之荷物國中ニ潰候儀ハ無ニ御座一候、唐・紅毛之荷物ダニ外ニ商賣

之仕法ヲ違ヒ、締賣・締買モ御免之廉ニ相成居候位之儀ニテ、買持候者無レ之テハ、積荷ニ而已相揃候儀無ニ御座一候、依レ之此上ニモ諸國相願、御免ニ罷成候上、積渡候品格別下落仕候トキハ、彼引合不レ申、猶代リ物ニ受取可レ申品モ無レ之、此處彼等合點仕候時ハ、渡來致シ候樣申候テモ、渡來仕候儀ハ無レ之、間右樣相願候儀モ御座候ハヾ、都テ先例之通爲レ試御免被ニ仰付一、商賣取組マセ試方被ニ仰付一候方可レ然筋ニ御座候、商賣方之儀ハ取組方仕方而已ニ有レ之候儀ニ御座候間、聊御懸念之筋ハ無レ之儀ニ御座候

一　夷國互市之儀ハ識者之議論モ有レ之、商賣之仕法ハ不ニ相辨一、銅御渡ニ相成候儀ニ付、夷國交易ハ銅可ニ相渡一事ニ限リ候樣存候處ヨリ生候說ニテ、我有用ヲ以無用ニ易候ト而已相心得候得共、銅御渡ニ相成候ハ、阿蘭陀ニテ本方荷ト唱候品々銅御渡ニ相成、時計・硝子器・玩物等之類ハ脇荷ト相唱、加比丹始メ私之商賣ニテ、右代リ物ニハ我ガ無用之品ヲ相渡シ、人命ヲ救ヒ候藥種類、專ラ脇荷中ニ有レ之候儀ニ御座候、唐方ニテハ本賣ト相唱、御國必用之藥種等ニ御座候、珊瑚・時計、其外玩物等之類ハ別段賣ト唱、唐人私之商賣ニテ、代リ物ハ我無用之品ヲ相渡候儀ニ御座候處、古ヲ捨今ヲ以論候時ハ、銅相渡候儀無用之事ニ相聞候得共、二百年前白絲サヘ出產乏敷、專ラ彼ヨリ取寄、無用之砂糖モ、文化以來和製漸盛ニ相成候ト申程之儀、取分藥種類之儀ハ、一國之性命ニ相係候品ニテ、自然久々舶來無レ之バ、名方・名醫アリト雖ドモ、人命ヲ救候儀難ニ相成一、阿蘭陀方之儀ハ交易主ト相成候儀ニ無レ之、彼地方動靜ヲ申上候儀第一御趣意ニテ、右樣有用之銅海外ニ御捨被レ遊候儀モ、本邦御大切ニ被レ爲ニ思召一、萬民御救

彼レ遊候雖レ有御仁政故之儀ニ御座候得共、何卒干戈ヲ不レ汚、永平穩ニ相濟候樣仕度奉レ存候

一　唐・阿蘭陀代リ物ニ相成候品ニ、銅相除候外都テ我ガ無用之品ヲ以相渡候儀ニ御座候處、彼國ヨリ可ニ積渡一諸品相分候上ハ、其內必御國益ニ可ニ相成一品モ可レ有レ之奉レ存候間、御國用ニ可ニ相成一品而已爲ニ積渡一、右代リ物ニハ我無用之品ヲ以相渡候時ハ、全良法之交易ト相成候儀ニ御座候間、兩三年交易試ヲシテ、御免ニ相成候後モ、引續交易相願候儀ニモ御座候ハヾ、實ニ御國益ニ相成候交易ニ御座候間、彼是ヨリ渡來相止候迄御免ニ相成候テモ、聊害ニ相成候儀ハ無ニ御座一候、阿蘭陀交易仕法之儀ハ、全往古出銅過分ニ有レ之候砌之法ニテ、當時商賣之模樣不ニ相心得一候得共、往々彼ヨリ空船ヲ仕出シ候間、銅而已積歸候樣ニモ相成候譯ニ相成候儀ニ御座候間、アメリカ・魯西亞等交易願之儀ハ、程能御取アシラヒハ相成候方御爲ニ宜敷、商賣取組方持渡候品物ニヨリ候テハ御國益モ相增國中融通ニモ相成、且國中出產之品ヲ以代リ物ニ相渡候時ハ、庶民生計之基モ相增、殊ニ藥種類之儀ハ員數少ク候間、格別高價ニ罷成候處ヨリ、貧民容易ニ服用モ難ニ相成一、空敷性命ヲ亡ヒ候モ不レ少候間、萬民御救之御仁澤トモ罷成候哉ト奉レ存候、聊通親ヲ好候儀ニハ無ニ御座一、一應明細ニ商法取組爲ニ相試一候方、國家盤石之安キヲ保候ト申譯ニ相成候儀ニ御座候、若又智術ヲ以彼等ヲ相欺キ候儀ニ御座候ハヾ、言語モ通ジ兼候夷狄之事ニ御座候間、如何樣ニモ其術取施可レ申候得共、夫々一時之術ニテ却テ忿怒ヲ相增、彌兵ヲ以怨ヲ報候樣相成候儀ハ必定ニテ、騷擾ニ至リ候節ハ、和寇明ヲ侵シ明人內應有レ之候如ク、御武威

盛成御府内近キ處ト雖ドモ、恐憚リ候處モナク、强盜之類有レ之候如ク、如何成不所存ハ其虛ニ乘候哉モ難レ量、乍レ恐兵端相開候ハ不ニ容易一御儀ト奉レ存候

一　奸商米穀ヲ夷狄ヘ渡密賣仕候儀、先年ヨリ不レ絕風說モ有レ之、今以折々右樣之風說モ有レ之事、實不ニ相辨一儀ニ候得共、內密ニテ夷國ヘ拔候モ、表向夷國ニ相渡候儀モ、國中ニ米穀共高相減候儀モ、同樣之儀ニ御座候處、表向夷國ニ相渡候時ハ密賣ハ自ラ相止、一體御國中之御取締宜敷筋ニ奉レ存候、利潤ニ迷ヒ候者商賣人之常ニ御座候得バ、乍レ存ニ犯罪一嚴刑ヲ蒙リ候者モ不レ少儀ニ可レ有ニ御座一候得共、相罷候儀ニモ至リ申間敷、事アルニ臨ミ候時ハ、利潤之爲如何成內應仕候哉モ難レ計儀ニ御座候間、若米穀相願候儀モ御座候ハヾ、御許容相成方可レ然筋歟ト奉レ存候、一二艘積受候石數モ程知候儀ニテ、御國用御差支ニ相成候程之儀ハ有レ之間敷、諸向酒造減石被ニ仰付一、其分ヲ以相渡候見込ニ仕候テモ、差支無レ之ト奉レ存候、殊更蒸氣船其外便捷之船御製造ニモ相成候趣ニ御座候得者、萬一凶年ニ至リ御國用差支ニモ相成候節ハ、不ニ取敢一唐國ヘ差遣シ、積取候儀モ出來仕候哉ト奉レ存候

一　風說之趣ニテハ、石炭懇望仕候哉ニモ相聞候處石數不ニ相分一、其高ニヨリ候儀ニモ御座候得共、九州內出產モ有レ之、其外出產之國モ有レ之哉ニ付、穿鑿仕候ハヾ此外出產ノ國モ可レ有ニ御座一、於ニ本邦一蒸氣船御製造相成候上ハ、必用之品ニ御座候間、相渡候儀ハ可レ惜儀ニ御座候得共、交易取組方最初ヨリ之取極ニ寄リ候テハ、差止候儀ハ何時ニテモ出來仕候儀ニ付、是非相好候儀ニモ御座候ハヾ、當分之

內御渡ニ相成候テモ、差支候儀ハ有レ之間敷奉レ存候、固ヨリ右樣之品相渡候上ハ、彼ヨリ取寄候品モ、御國用第一之品ヲ以取寄候事ニ仕度御座候

一　外夷交易之儀ニ付テハ、後來難レ計抔懸念仕候者モ御座候得共、二百年前之儀ハ、本邦ト雖ドモ不ニ相開一時ニシテ、高貴之向ヘモ耶蘇宗門信仰有レ之候程之事ニ御座候間、所レ謂上好ム處ニテ、愚民迷候者最之次第ニ御座候、且愚民ヲ煽惑致シ、兵ヲ不レ用シテ併呑ヲ計ル者、彼ガ上策ニ出候處ニテ我智恵不レ足、我不調法トモ可レ申哉、或ハ伊斯把儞亞人呂宋國ニ通商シテ其國兵弱ク奪取ベキヲ計リ黃金ヲ貢シ、牛皮ノ覆不程之地ヲ借、終ニ國ヲ奪候事抔ヲ以、夷國通商ヲ嫌候譯モ有レ之候得共、是ハ畢竟其國愚ニシテ兵弱キ故之儀ニ付、右樣欺罔被レ致候ヘドモ、於ニ本邦一ハ武勇多智ニシテ、彼ガ謀計ニ陷候儀ハ有レ之間敷候間、意トスルニモ不レ足事ト奉レ存候、懸念仕候儀ハ尤ニモ御座候得共、知モナク武モナキ國之樣ニ相當リ候間、外夷襲來之時ハ猶更敗衂可レ仕被レ存候、先年ヨリ兎角妙法・妖術等相恐レ候沙汰モ仕候得共、一ツモ實跡ハ無ニ御座一、妙術ヲ以勝ヲ制、人之國ヲ奪候儀、自在成モノニ御座候ハヾ、戰艦・火器等ニ億萬之資財ヲ費シ、專ラ護衞之術ヲ撰、武備不レ怠樣仕候儀ハ有レ之間敷、殊ニ妖術之教理學相開候テハ都テ絕盡候趣、人々迷ヲ取候モ固陋ヨリ出候處ニテ、昔年開ケザル時ハ、火取目鏡ニテ遠近望候テモ人々相驚太恐候由、是ノミニ限リ候儀ニハ無ニ御座一候得共、追々蘭學相開候以來ハ、右樣之儀ニ迷ヲ取、怪ミ候者モ無レ之、右ヲ以相考候時ハ、有用之銅海外ニ御捨ニ相成候樣ニ御座

候得共、夷國通商之譯ニヨリ右ニ較候テハ、醫術其外諸物相開、御國益ニ相成候儀モ不レ少、蘭學之儀ハ却テ藝術ニ係リ候書ノミニテ、術ニカヽリ候儀ハ古ヨリ華夷之差別ナク、其善ナルモノハ之ヲ取テ本邦ノ用ニ充候儀ニ有レ之、城堡・陣營之製モ皆群藝之內ニ有レ之候間、外夷之諸術本邦ニ相開候儀ハ、第一之御國益ニ御座候得共、蘭學心懸候者耶蘇之妖說ニ惑溺仕候樣申儀、終ニハ罪ヲ得候者可レ有レ之モ難レ計候得ドモ蘭學相開候、御國益ニ相成儀ハ有レ之候得共、心得違仕不埒之者ハ一人モ承及不レ申、却テ聖賢之道ヲ學、專ラ倫道ヲ明ニ仕候大鹽平八ガ如キ凶賊モ有レ之候間、聖賢之敎モ亦恃ニ足ラザルガ如クニ被レ存、蘭學ヲ以テ邪道ニ導候抔申儀ハ有レ之間敷、外寇防禦之儀ハ當今計リニ限リ候儀ニ無レ之、億萬年之後モ無二懈怠一相忘候儀ハ相成申間敷候得共、戰艦之製・火器之術・陣製・戰法モ彼ト相同シキ時ハ、彼カ軍資ヲ費シ、遠洋ヲ凌襲來候者全□ト相成候ニ付、覬覦之情ハ永相絕、防禦之秘訣ハ元ニ止リ候儀ニ御座候間、先年愚見モ申述、聊心配モ仕候得共、迚モ私式之微力ニ及候儀ニ無二御座一候、然ルニ本邦之人情ニテハ、他ヲ學候儀ヲ耻ト仕候得共、彼ガ心得ニテハ他ヲ學候儀ヲ、國家之爲力ヲ盡シ候者ト感賞仕候儀ニテ、彼ハ諸國ニ航海仕、其善成者有レ之候得者皆之ヲ取候テ、自國ノ欠タル處ニ補ヒ候、交易利潤ヲ貪候モ、國ヲ富シ兵ヲ强ク致シ候爲メノ主意ニシテ、舊習ニ固陋仕候習俗ニ無二御座一候間、他ヲ學ビ候儀ヲ聊耻ト仕候儀ハ無二御座一候、却テ他ヲ學ビ不レ申ヲ固陋ト侮候程之儀ニ御座候、未レ聞異用變二於夏一之語ヲ能申候者モ有レ之候得共、此語ハ藝術之儀ニハ有レ之間敷候間、諸國武備

ニ係候儀ハ勿論、何事モ博ク探索仕相開置度儀ニテ、本邦不虞ノ御備サヘ相整居候儀ニ御座候得バ、何等之夷船渡來仕、商賣御免ニ相成候共、後年之患ハ聊無レ之候間、我ガ御寛大ヲ御示シ、彼ヲ御容レ被レ遊候思召ニテ、御試之爲兩三年假リニ交易御免被レ仰付、若不レ宜事ト被レ爲レ思召一候ハヾ、何時モ其節御差止メ被レ成度奉レ存候、無用之品ヲ渡、有用之品ヲ受入、殊ニ彼ガ强弱ヲ知候一術トモ相成、猶交易利益有レ之候テ、聊トイヘドモ海防御入用向ニ被二差加一候ハヾ、御警衛致シ御手厚ニ行屆候儀ト奉レ存候、交易之儀ハ御免被二仰付一候迚、御國體ニ相係リ候儀無二御座一候得共、萬一兵端相開候樣之儀ニモ御座候テハ、實ニ不二容易一次第、是等之儀ハ多年竊憂惶ヲ懐候儀ニ御座候間、不レ顧二身分一心付候儀、此段書付ヲ以奉二申上一候、以上

嘉永六癸丑年十月　　高島喜平

高島喜平上書　終

佐久間象山上書

佐久間象山上書

舊臘十五日亞墨利加使節應接ノ次第、幷ニ使節差出シ候假條約御渡シニ相成リ候節、御添書ヲ以テ近來世界ノ形勢一變致シ、唐土ノ昔戰國ノ七雄四方ニ立分レ居候姿ニテ、御當國ニ於テモ已ニ外國ノ條約御取結、御交通被レ爲レ在候上ハ、古來ノ御制度ニノミ被レ爲レ泥候テハ、御國勢御挽回ノ期無レ之、日夜御心ヲ被レ爲レ惱候儀ニ有レ之、併非常ノ功ハ非常ノ時ニ無レ之候テハ難レ成、中興ノ御大業ヲ被レ爲レ立、御國威御更張ノ機會モ又此ノ時ニ有レ之候間、御大變革被レ爲レ在度思召候得共、當時御國內人心折合方モ有レ之、人心不二折合一候節ハ、內外何樣ノ禍ヲ引出シ可レ申モ難レ計候間、先使節申立ノ趣、可レ成丈取縮メ候積リ、精々可レ被レ爲レ及二應接一候ヘ共、今般御處置ノ當否ハ、國家治亂ノ境ニ候間、右再應申立ノ趣ニ付、猶心付候儀モ有レ之候ハヾ、早々可二申上一旨被二仰出一候段御達シ被二成下一、奉レ得二貴意一候、然ル處既ニ其ノ二日亞使應接ノ砌、貿易相開キ候儀御承知ニ相成、ミニストル差置候儀モ、可二承屆一旨御挨拶相濟候儀ニ付、聊カ所存ナキニシモアラズ候ヘ共、事既往ニ罷成候上ハ、力ニ及バザル儀ト觀念仕、恐入候儀ニハ御座候ヘ共默止罷在候、然ル處今度天朝ニモ深ク被レ爲レ惱二宸襟一、此期ニ至リ候テハ、人心ノ居合國家ノ重事ニ付、私共迄赤心被二聞召一度候勅命相下候ヲ以テ、各存無二伏藏一可二申

上二旨被ニ仰出一奉レ畏候、仍テ愚存左ニ申上候、偕亞使最初申立ノ次第篤ト反覆仕見候處、事柄稍々尤ニ聞エ候處モ御座候ヘ共、其歸着仕候所ハ、御國ノ腹背頭腦至要ノ地ニ貿易ノ場ヲ開キミニストルヲ置キツケ、朝廷ノ御政權ヲ控制シ、遂ニ屬國同樣ニ致シ可レ申策略ニテ、只顧欺瞞恐嚇ノ說ヲ設ケ、其所願ヲ成就シ候樣巧ミ候者トハ察候、元來箇樣ノ御時勢ニ至リ候テモ、尚御舊制ヲ被レ爲レ守、人ヲ海外へ出シ、外國ノ形勢探索セシメラレ候御手段一切無ニ御座一候故、其ノ言ノ虛實ヲ明知仕ルベキ左證トテモ無レ之候ヘ共、姑ク彼ノ申ス所ヲ以テ、彼レノ申ス所ニ引合セルニ、矛盾ノ事ドモ多ク、不詰リ至極ノ儀ト被レ存候、左候ヘバ當今御武備モ十分ニ不レ被レ爲ニ行屆一、御勢力御敵對ノ場ニ至ラセラレズ候ヨリ、異日ニ及ビ無ニ餘儀一御許容ニ可ニ相成一筋迄モ、不詰リノ儀ヲ以テ申出候廉ハ、一言モナク申伏セ候樣無レ之候テハ、御國體難ニ相立一儀ト存候、春秋平且ノ盟ニ、子產承ニ貢賦一ノ次ヲ爭ヒ、日中ヨリ昏暮ニ至リ候モ、卽チ國體ヲ立テ候爲ニテ、子太叔へ對シ候詞ニモ、國トシテ競ヒ奮ハザラバ、敵人ノ爲メニ侮凌セラレ、何ノ國ヲモ爲シ得ズト申候類ニ御座候、ゲニ尤ノ儀ニテ、小國ヲ以テ大國ニ交リ候ハ、始終此ノ意ヲ失ヒ候テハ難ニ相成一事ノ樣奉レ存候、左レバコノ平且ノ事ヲバ、孔子モ深ク御賞美ニテ、「子產於ニ是行一也、足ニ以爲ニ國基一矣」ト沙汰御座候事ト奉レ存候、然ル所亞使應接ニハ、其不詰リノ廉モ一切詰難モ無レ之、只々何事モ其ノ申ニ任セラレ候ハ、深ク怪ミ奉レ存候儀ニ御座候、斯テハ益々彼レノ侮凌ヲ被レ爲レ受、ユクユク其饜クコトナキノ欲ヲ充タシメラレ候モ、實ニ際限有ニ御座一間

數候、且兼々承リ候ニ、外國ニテ城內ニ城堡ヲ構ヘ候ハ、多クハ外寇ヲ禦ギ候爲ニ付、丈夫ノ築法有レ之、外邊ヨリ其主ノ都城ニ至リ候迄、幾遍モ繚繞トシテ、脈絡聯續候樣築キ候モノト承リ候、然ル所本邦ハ是ト相違ニテ、諸國ノ城々多ク皆自國同志戰爭ノ爲メニ設ケテ、外寇ヲ禦ギ候爲ノ手段トテハ聊カ無レ之候故、海岸最寄要害ヲ設クベキ所モ要害無レ之、脈絡多クハ聯續仕ラズ、偶々聯續仕候ト存ジ候所モ、大砲ノ術未ダ精巧ニ至ラザル以前ニ築キ候モノ故ニ、當時ハ改制モ經候ニアラザレバ、實用不便手弱ノ儀ニ可レ有レ之、且三都ヲ始メ外廓ノ設一切無レ之、皇居トテモ甚以手薄ノ御樣子ニ候ヨシ、御國ノ形勢統テ尙外國ノ侮ヲ受ケ可レ申體ニ御座候ヲ、未ダ其御修繕方モ不レ被レ加候テ、直樣彼レノ申ニ任セラレ、許多ノ外蕃御引受ケ、交易御開キ御座候ハンハ、大易ノ慢藏海盜ノ戒ヲ被レ犯候御儀ニ相當リ、旁以テ恐惶仕儀ニ御座候、雖レ然既ニ已ニ御許容ニモ相成リ候儀、不レ及ニ是非一、此上ハ銘々分ニ應ジ、覺悟ノ外有レ之間敷存能在候、然ル所此度揆ラズ私共銘々赤心可レ奉ニ申上一ノ勅命有レ之、且今度ノ條約迚テモ難レ被レ遊ニ御許容一、右衆議中自然差縺レ、精々取鎭候テモ、彼ヨリ違變ニ及ビ候節ハ、無ニ是非一儀ニ思召候叡慮ノ旨、御評決被ニ仰出一候趣承レ之、一ト度ハ甚以テ驚愕仕、形ノ如ク略御許容ニ相成候ヲ、今更御違約御座候ハヾ、彼レ夫ヲ名ニ致シ、忽チ兵端ヲ開キ可レ申ハ目前ノ事ニ有レ之、去トテ今度ノ條約勅許難ニ相成一ニ被ニ仰出一候上ハ、右ニ不レ被レ爲レ從候時ハ、御違勅ノ御筋ニ當リ、大義ニ於テ難レ被レ爲レ濟、何レノ道ニ致シ候トモ、御當惑ノ御儀ト奉レ存候、然ル所再思熟考仕候ヘバ、今

度從二天朝一之勅命御座候コソ誠ニ幸ノ御事、惟海盜之禍患ヲ被レ爲レ免候ノミニ無レ之、御國體ノ相競ヒ候樣相成候トモ、此ノ御一擧ニ可レ有二御座一奉レ存候、抑今度條約ノ筋御許容難二相成一ト申ハ、全ク天朝ノ御趣意ニ有レ之、天朝ニ於テ右御趣意被レ爲レ立候ハ、十月二十六日亞使申立ノ次第、辭理甚矛盾致シ、親睦ノ情ヨリ出デ候樣ニ申成シ候トモ、全ク欺罔恐嚇ノ詐術ニ紛レ無レ之廉々、歴然トシテ蔽フ可ラズ候ヨリ、主上御疑惑ヲ被レ爲レ生候ニ出デ候御事ニ可レ有二御座一候、就テハ其矛盾之廉々、端ヲ改メテ御糾問有レ之、其次第ニ依リ候ヘバ、大使ヲ發シ彼ノ國都ニ至ラシメ、其政府ノ官吏ト及二對話一、右欺罔恐嚇ニ紛レ無レ之廉ヲ詰難シ、曲直ヲ辨明サセラレ候叡慮之旨ヲ以テ、別紙ニ認メ候條々尚善ク其辭ヲ修飾シ、且潤色ヲ加ヘ、洋文ニ譯シテモ能ク其詞理ヲ詳ニシテ、其語ヲ挾ミ精練ヲ盡シ申度事、右使節ノモノヘ被二相示一候ハ、義理ノ當然誣フベカラザル事共ニ候ヘバ、其詞必ズ塞リ可レ申、ソノ詞塞リ候ハヾ、其ノ廉ヲ以テ舊臘二日略御許諾ニ相成候儀御申直シ、尚又御人選ヲ以テ御一使ヲ被レ發、其次第彼ノ政府迄被二仰遣一可レ然哉ト奉レ存候、如レ此ニ御座候ハヾ、彼ニ欺罔恐嚇ノ曲ヲ負ハセ候儀ニ付、猥ニ兵ヲ動シ候儀ハ難二相成一筋ト奉レ存候、其上此表ニハ專ラ御寬容ヲ御旨トセラレ、右等ノ廉モ總テ御見ユルシ御座候ヘドモ、天朝ニテハ中々御假借無二御座一、其隱微ノ情由迄モ盡ク能ク御洞察被レ爲レ在候儀ト、彼國ノ者共モ奉レ存候ハヾ、兼テハ兵ヲ加ヘ可レ申ト存候儀モ、是ガ爲メ相憚リ候テ、容易ニ兵端ヲ開キ申間敷、カノ秦ノ楚ヲ伐タシト欲シ候モ、昭奚恤ガ善對ノ爲ニコレヲ伐タズ、晉ノ平公ノ

齊ヲ伐ント企テ候モ、晏平仲ト師曠トノ爲メニ是ヲ止メ候、是其證ト奉レ存候、國ニ其人アルヲ示シ候ハ、兵禍ヲ除セラレルノ善謀不レ過レ之ト奉レ存候、去レバコソ孔子モ晏子ヲ稱セラレテ、尊俎ノ間ヲ出ズシテ千里折衝スト被レ申候事ト奉レ存候、左候ヘバ當時モ右ノ如ク御處置御座候ハヾ、差向キ御當惑ノ御廉モ相變ジ、結局天朝ノ御威靈ヲ御發揮被レ爲レ在候ハヾ、亞人ノ膽ヲ破リ、永ク御國ヲ侮凌シ奉ラザル御一助ニモ相成可レ申哉ニ奉レ存候、乍レ然タトヘ此等ノ御處置ヲ以一時御無難ニ被レ爲レ在候トモ、是迄ノ御仕向ニテハ、何分恐入候儀ニ奉レ存候、實ニ舊臘十五日御添書ニモ御座候通リ、時ニ隨テ御制度ヲ被レ爲レ改、天下城制ノ儀モ何卒外藩之模樣ニ被レ爲レ倣、堅固ノ大船モ多分ニ御造立相成、御國力御威勢總テ外國ノ凌蔑ヲ不レ被レ爲レ受候樣、速ニ中興之御大業ヲ被レ爲レ立候樣、所レ奉二乞願一ニ御座候、右御垂聽之上御採用モ被二成下一候ハヾ、天下幸甚之儀ト奉レ存候、以上　四月

(別紙) 一　天朝ノ御趣意ヲ以テ、此度端ヲ改メテ亞墨利加使ヘ及二應接一度筋、左ノ通リ

西洋諸國ニ於テ、世界中一族一統ニ致シ度欲シ候ハ、天地公共ノ道理ヨリ出デ、自國他國ノ隔ナク生靈ヲ愛育シ、有無ヲ交通シ候ハンタメノ情願ニ出デ候事歟、但シハ各國ニテ自己ノ私ヲ營ミ、世界ノ利ヲ網シ候ハン爲ノ邪欲ニ興リ候事カト尋ネ申度、左候ハヾ彼レ必ズ公共ノ道理ヨリ出デ候事也ト答ヘ可レ申、其時此方ニテ申度候ハ、去ラバ其方申立候筋全クウケ難ク候、其子細ハ唐國之人民、阿片ノ爲ニ年々夥シク其ノ害ヲ受ケ候故ニ、唐國官府是ヲ嚴禁候ハ、固ヨリシカアルベキ道理ニ候、然ルヲ

英國ニテ自國ノ利益ニ相成候トテ和親ヲ結、致二交通一候國ノ嚴禁ヲ犯シ、人民ノ殘害ヲ顧ミズ、剰ヘ容易ニ手出シ難成程ニ、其ノ舶ニ火砲等致二用意一、嚴重ノ手配ニテ其兇奸ヲ恣ニシ候由、其不仁・不慈無禮・無義・強盜ノ所爲トモ可レ申、是レヲ其國ニテハ皇天后土生靈ヲ愛育シ候公共ノ道ト致シ候哉、英國ニ此無道有レ之候上ハ、西洋諸國天地公共ノ道理ヲ奉行シ候トハ申スベカラズ、西洋諸國ニ於テ果シテ天地公共ノ道理ヲ奉行シ候ハヾ、英國ニ決シテ此無道ハアルベカラズ、然ルヲ今此談ニ及候ハ、唯吾國ヲ恐嚇シテ、其求ムル所ニ叶ヘ候ハムトテノ誣言ナルベシ、始ノ言實ナラバ終ノ言僞ナリ、終ノ言眞ナラバ始ノ言妄ナリ、イヅレモ聢ト返答可レ申旨及ニ懸合一候ト、彼レノ詞塞リ可レ申、其節尚申聞ケ度候ハ、既ニ大綱領ノ所ニ於テ如レ此僞妄有レ之候上ハ、瑣々タル細目論ズルニ及バザル事ナガラ、尚一二可ニ申聞一候、合衆國一體ノ風誼ヲ心得候マデニトテ申立テ候ニ、是迄一里タリトモ、干戈ヲ以テ合衆國ノ部ニ入レ候儀無レ之、他部ヨリ合盟致シ候儀有レ之候ヘドモ、干戈ヲ用ヒ候儀ハ無レ之、條約ヲ以テ相結候事ト申候ヘドモ、六ヶ年已前其國當邦ヘ始メテ使節差越シ候節、許多ノ軍艦・兵器用意有レ之候ハ、如何ナル趣意ニ候ヤ、其節使節ヨリ白旗等贈リ候無禮ノ事モ候ヒシカドモ、吾朝廷邦内生靈ノ塗炭ニ苦シミ候ハムヲ嘆キ思召、ヒタスラ寛容ノ沙汰ニ及バレ候ヘバコソ、只今兩國ノ軍民カク無難ニシテ、其生ヲ樂ミ候事ニ候ヘ、若シ彼時吾ガ朝廷寛容ヲ旨トセラレズシテ、干戈ヲ用ヒ候ハ必然ノ事ト、彼ノ一時ノミ一體ノ風誼ヲ失ヒ候事也、是又不審ノ一ツ也、英國ト唐國トノ取合ノ事ハ、喋

喋シク被レ申述一候所、印度英領デリーノ大亂ハ、何故一切口ヲ開カズ候哉、是全ク恐嚇ノ意思ニ相碍リ候故ノ事ニ可レ有レ之候、是又不審ノ二ツナリ、阿片ノ生民ニ大害アルコト心付ケ尤ニ候所、英國ニハ本邦ニ交易ノ道開ケ候ヘバ、唐國同樣追々阿片持渡リ賣弘メ候志願ノヨシ、既ニ唐國ノ大國ト雖手出シ難レ成程ニ手配致シ、嚴禁ヲ破テ奸賣ヲ恣ニシ候趣ニ候ヘバ、小國ノ本邦ニテ條約ノ禁ノヨク制スル所ニアルマジク候、然ルヲ合衆國ノ條約ニ旋ト据置キ候ハヾ、英國ニテ削リ可レ申ト存候トモ叶ヒ申マジクノ事、タトヘ條約ヲ削ラズトモ、其ノ禁ヲ犯シ候ヘバ生民ノ害ハ同樣ニ候、是小兒ヲ欺クノ說ト可レ申、他國ノ邪利ヲ助ケムガ爲ニ、自國ノ生民ヲ損害セシムベキ道理可レ有レ之ヤ、是又不審ノ三ツナリ、吾朝廷ニ於テハ其國ト一度信約ヲ被レ結候上ハ、何事モ親睦ヲ旨トシ、毫髮モ欺ク事ナク候ヘバ、其國ニ於テモ固ヨリ欺瞞變詐ハアルマジキ事ト存ジ、且此度大統領ヨリノ呈書ニモ、使節中立ノ言十分信用疑ヒアルマジクト迄モ有レ之候故、形ノ如キ談判ノ運ビニモ相成候事ニ候、然ル所此度天朝ノ御趣意トシテ、端ヲ改メ相尋ネ候ヘバ、如レ此不都合アル事ドモ失望ノ至ニ候、斯テハ此儘朝廷ノ思召ニ任セラレ候事難二相成一、就テハ態ト發二一使一、倘其國政府可レ及二懸合一候事、以上

壬戌九月上書稿

眞田信濃守家來　佐久間修理

乍レ恐謹而申上候、私儀陪臣之身分、殊久々蒙二御咎一罷在候者ニ御座候ヘドモ、當今天下ノ御爲聊愚見申上度奉レ存候、私儀乍二不肖一幼年ヨリ漢籍ヲ讀候儀ヲ心掛ケ罷在候所、先主人信濃守御加判之列被二

仰付ニ海防掛ヲモ蒙レ仰候砌、私儀ニ內意仕候樣ハ、凡ソ海防ノ要彼レヲ熟知シ候ヨリ先ナルハナク候ヘバ、是ヨリ歐羅巴諸洲ノ記載ニ涉リ、彼レノ紀綱。政治。兵制。民俗何レニヨラズ記臆罷在リ、顧問ノ用ヲ辨ジ可レ申トノ儀ニ付、其頃上飜譯ニ成リ居候洋書ノ類取集メ、一讀仕候儀ニ御座候、然ル所何程ノ儀モ相分ラズ、隔靴搔痒ノ嘆ヲ免カレズ、乍レ去其頃英國ノ兵淸朝ヲ騷ガシ候儀モ風聞御座候ニ付、深ク皇國ノ御儀ヲ心配仕候テ、眞實防海ノ御籌策ヲ被レ爲レ立候ニハ、公儀ニテ是非トモ御船政ト御兵制トヲ御改革被レ爲レ在候ヨリ外有ニ御座ニ間敷奉レ存、其他微賤ノ者ヨリノ口ヨリ難ニ申出ニ程ノ儀迄ヲ一書ニ認取、信濃守迄差出候儀ニ御座候、然ル所信濃守儀モ無レ程病氣ヲ以テ御役辭免仕、私儀皇國ノ御爲當今ノ御急務ト存ジ、精々申上候儀モ空シク泥羹畫餅ト罷成候、其後在所松代表ニ聊カ役儀被ニ申付ニ相勤罷在候所、其職ヲ得ザル筋御座候ニ依テ役儀ヲ辭シ、閑散ニ罷在候內傳聞仕候ヘバ、ネウヨルク・ボストン・イギリス等ノ舶頻ニ相房邊迄入込候趣、是唯事ニアラズ、必ズ覬覦ノ禍心ヨリ起リ候儀ト相察シ、海防ノ御計策イカニモ御實着ニ有ニ御座ニ度ト念願仕候ヘ共、上下隔絕力ニ及バズ、去ラバ分ニ隨ヒ防海馭戎ノ階梯ト成リ可レ申儀ヲ興シ候ハント心掛ケ、淸朝ノ同文韻統ニ傚ヒ皇國同文鑑ヲ作リ、五大洲中ノ語ヲ通ジ可レ申、但和蘭久シク互市御許容ノ國ニテ、其ノ國ノ書渡來モ多ク、天文・地理・醫術・砲兵ノ學ヲ爲シ候者モ、皆和蘭ノ書ヲ讀候儀ニ付、和蘭ノ部ヲ荷蘭語彙ト題シ刻シ申度、己酉ノ冬其爲態々出府仕、序・凡例等相添、草稿ヲ以テ板行ノ儀奉レ伺候所、年ヲ越候テモ御差圖無レ之、

依レ之阿部伊勢守樣迄罷出、書取ヲ以テ夷俗ヲ馭シ候ハ、夷情ヲ知リ候ヨリ先ナルハナク、夷情ヲ知リ候ニハ、夷語ニ通ズルヨリ要ナルハナク、又兵法ノ先務モ彼レヲ知リ候ヨリ專ナルハナク、當今海防ノ御先務モ彼レヲ知リ候ヨリ急ナルハ無ニ御座一、海防ハ天下ノ海防ニ付、天下ノ人ニ悉ク彼情ヲ知セ候樣ニハ、普通ニ夷書ヲ讀マセルニシクコトナク、普通ニ夷書ヲ讀マセルニハ、其詞書ヲ板行候ヨリ先著ハ無ニ御座一ト、尙委細ニ其ノ得失ヲ申上候儀ニ御座候、然ル所戌年四月ニ及ビ、遂ニ右詞書板行不ニ相成一趣御差圖御座候、右ニ付大ニ望ヲ失ヒ、去ラバ近來江府近海砲臺御取立モ御座候趣、右ヲ一見歸國可レ仕ト存ジ立、江ノ島・鎌倉邊ヨリ州崎・松輪・鶴崎・浦賀・猿島等諸家樣御預リノ御臺場十箇所ニ餘リ候ヲ、手寄リヲ以テ內々悉ク一見仕候、然ル所公邊ニテモ定メテ御心力ヲ被レ爲レ盡、諸家樣ニモ隨分御國力ヲ被レ費候テ、御取立ニ相成候ト被レ存候御臺場十餘箇所トモ、悉ク御實用ニ相成不レ申、結局外國人ノ嗤咲ヲ引キ、御國威ヲ損ジ可レ申御容體ニ付キ、以テノ外ノ儀ト憤發仕、聊カ夫迄心得罷在候海岸臺場ノ法則、幷ニ江府御都城ノ御爲、其ノ御備ニ可ニ相成一儀等、海防御掛御老中樣迄上書仕度、極密右草稿ヲ以テ信濃守ヘ御內慮相伺ヒ候所、申上間敷筋ヲ申上候トテ、重キ御咎ヲ蒙リ候迄モ、御國恩ヲ報ジ候ハン爲ニ上書仕度ト申ハ、奇特ノ志ニハ候ヘ共、其內必ズ折モ可レ有レ之、此度ハ此ノ方別ニ存ズル子細モ有レ之候間、暫ク存ジ留リ候樣申儀ニ付、不レ及ニ是非一差扣ヘ罷在候內、川路左衞門尉樣大坂町奉行ヨリ御勘定奉行ニ御轉役、海防掛ヲモ被レ蒙レ仰候、左衞門尉殿兼々御懇意モ被レ下候儀、且亞墨利

加ヨリ明白難題ヲ可二申出一トノ儀、壬子ノ冬專ラ風說モ御座候ニ付、信濃守又折モ可レ有レ之ト申候ハ此節ノ儀トモ存ジ候、旁兼テノ擬上書草稿御同人マデ持參掛二御目一候所、大ニ被レ驚候樣子ニテ、是程之儀ニハ有レ之間敷、是程ノ儀デハ有レ之マジクト被レ申、更ニ信用ノ體無二御座一候ニ付、憖ニ其道ヲ以テ實驗候儀ヲ、御疑念御座候上ハ不レ及二是非一、乍レ去其內ニハ必ズ思召被レ合候儀モ候ハントテ相止ミ候儀ニ御座候、然ル所癸丑六月亞墨利加船浦賀御關所乘破リ、本牧浦マデ乘入候ニ及デ、右擬上書草稿中認メ置候儀ニ少シモ相違無二御座一候ニ、其日ニ至テ左衞門尉殿ニモ先見ノ明感ジ入候トテ稱シ被レ下候ヘドモ、計畫仕候儀皆御手後レニ相成、何ノ補モ無二御座一、殘念奉レ存候、其時節ヨリ其中當候儀御座候儀ヲ以テ、海防ノ義理ニ左衞門尉殿ヨリ御尋モ有レ之、又阿部樣ヘ上書仕候樣勸メモ被レ下候所、私及二挨拶一候樣ハ、明公此節公邊ノ御用ヒモ宜ク、御建言モ能ク被レ行候御樣子ニ候、其御尋ニ付申上候愚見、明公ノ御心得ニ相成、天下ノ御實用ニ相立候ヘバ本懷無二此上一、其上ニ更ニ上書等仕候ハ名ヲ釣候ノ嫌疑ナキニアラズ、且甚欲スル所ニ無二御座一ト及二辭退一候儀ニ御座候、然ルニ其頃時務ノ談ニ及ビ候節、過日既ニ亞墨利加ヘ爾々ノ御返答御座候ニ付テハ、和ト戰トヲ論ゼズ、御人ヲ彼國ヘ被レ遣、其形勢事情委シク御探索御座候ヨリ急務ハ有二御座一間敷、孫子兵法、明君賢相動テ人ニ勝チ、成功衆ニ出ル、必ズ人ニ取テ敵ノ情ヲ知ルモノ也ト申ハ此儀ニ候、此儀何分モ建白相成候樣ニト申候所、其色大ニ阻マレ候テ、此節右樣ノ儀ハ中々建白出來難シト被レ申候、右ニ付私申候ハ、當今ノ御有樣偖

倭歎カハシキ次第ニ候、明公ノ如キスラ既ニ如レ此ニ候、其他誰ヲ望候ハン、然ラバ御採用ノ有無ハ兎モ角モ、其上申仕度候間御取次被レ下候樣申候テ、當今御急務十箇條認取、伊勢守樣迄差上候儀御座候、其十箇條ノ第一ハ、差向御人選ヲ以テバタビヤ邊迄、洋船御買上御用被二仰付一被二差遣一度、左候ハバ御船備早速御調ヒ御座候ノミニ無二御座一、其往來ノ間外國港ノ備禦ノ形勢ヲモ實見、何カト御心備ニ可二相成一ト申儀ニ御座候、然ル所聊カ御採用モ無二御座一候御樣子、但亞國ヘ漂流致候土州獵師ノ悴萬二郎儀、其頃迄御大法ヲ以テ禁錮被二仰付置一候所、此度亞國ノ事興リ候故ヲ以テ、御尋ノ筋有レ之、御召出シニ相成候トノ風聞御座候ニ付、私儀奉レ存候樣ハ、外國ヘ渡海ノ御國禁御弛メニ相成候旨、縱ト御觸達シハ無レ之候ヘドモ、御國禁相弛ミ候ニ相違無レ之、萬二郎形ノ如ク御取立ニ相成候カラハ、カノモノニ傚ヒ、漂流ト申モノニテ亞墨利加、其他ノ諸州ニ渡リ、學問才識御座候テ、彼ノ形勢事情縱ト探索致シ罷歸リ候バ、一廉ノ御用ニ可二相立一儀、只漂流ト申モノニ候ヘバ、御法禁ニモ不レ觸儀ト存ジ、門人ノ內一人ナリトモ、右非常ノ功ヲ立候樣仕度、吉田寅次郎ヲ申勸メ、漂流ニ取成シ渡海仕ラセ候ハント企テ候儀、行違ヒテ遂ニ御吟味ヲ蒙リ、御吟味中禁獄被二仰付一候是全ク思フコトト其位ニ踰エ、言ソノ分ニ過ギ、爲スコト其規ニ合ハザルノ致ス所、恐入候儀ニ御座候ヘドモ、海防ノ儀ハ他事トモ違ヒ、御當家樣御一代ノ御榮辱而已ニ無二御座一候、皇統ノ御安危ニモ係リ候ニ付、既ニ其ノ儀ヲ以テ禁獄被二仰付一候儀ニハ御座候ヘ共、尙已ムベカラザル愚見モ御座候ニ付、

上書ノ儀腹稿仕、筆墨借用ヲ願ヒ候處不㆓相成㆒趣、不㆑及㆓是非㆒候ヒキ、寅年九月御裁決ニテ、在所表蟄居被㆓仰付㆒、初ノ程至テ嚴重ナル儀ニテ、緣者ト雖容易ニ面會不㆓相成㆒候ニ付、右腹稿ノ上書等轉送賴ミ可㆑申樣モ無㆑之歲月ヲ過シ候、其內少シク寛ヤカニモ至リ候カト存ジ候ニ付、公邊迄上書仕度趣、親類ノ者ヲ以テ重役共迄申立候處、一槪ニ不㆓相成㆒候趣不㆑及㆓是非㆒、丁巳十二月二日堀田備中守樣御屋敷ニ於テ、亞國ノコンシユルト御應接御座候節、港ヲ開キ土地御貸與可㆑有㆓御座㆒段、聢ト御挨拶御座候趣傳聞仕、無㆑程京師ヘ被㆑爲㆑召、翌春御上京ノ所、四月初旬開港幷ニ土地御貸與ノ義敕許無㆓御座㆒、備中守樣空シク御歸府ト申事早クモ承知仕、天下ノ御安危爰ニ相分レ候儀ト深ク痛心仕候、其故ハ敕諚御遵奉御座候ヘバ外國ヘ御違約ニ相成、此儀モ容易ニ相濟マジク、又外國ヘ御違約無㆓御座㆒候樣御取計御座候ヘバ、御違敕ノ御筋ニ御當リ被㆑成、イヅレノ道御難儀至極ノ御儀ト奉㆑存、遂ニ一策ヲ存ジ付、其頃當信濃守在府留守ニ候ヒシ所、竊カニ同志ノ重役ノ者相招キ申談ジ、備中守樣御歸府ニテ未ダ亞人ニ御逢無㆓御座㆒候間ニ、此筋主人ヨリ上書建白候樣取計ラヒ度、此策幸ニ御採用ニ相成候ニ於テハ、即チ公武御合體ニテ、御國威モ御十分ニ相立チ、彼レニ曲ヲ負ハセ、此御方ニ理ヲ直クセラレ候御儀ニ付、世界萬國ヘ被㆑爲㆑對候テモ、隨分天晴ノ御處置ト可㆑奉㆓申上㆒存ジ込ミ、疾速ニ上書案文取調、一人急用出府申付、其段重役共ヨリ申送リ候所、其間ニ邪魔入候テ事行ハレズ、日合相延ビシ內、備中守樣御歸府ニテ、亞人ヘモ又々御應接御座候等ニ至リ、折角ト苦心仕候策略、又徒ラニ

書餅ト相成候、此節迄度々天下ノ御爲ニ愚構仕候計策ノ内、此度ノ策ノミハ實ニ主人家一廉ノ大功ニモ仕度、天下ノ御爲ニモ一廉ノ成績ヲ遺シ候ハント存候所、小人ドモノ障碍ニ遇ヒ候テ期ヲ延シ、主聽ニモ入リ兼候儀、千載ノ遺憾トモ可レ申候、其節私儀折角愚忠ヲ盡シ、其甲斐モ無ニ御座一候儀、主人ニモ氣ノ毒ニ存、川路殿迄内使ヲ以テ此草案一見致シ給リ候様申越候ト申事ニ候所、御同人ヨリ備中守様御目ニ掛ケラレ候ヤ否不ニ相分一、此策只今ト相成候テハ、所謂十日ノ菊ニ御座候ヘ共、外國人御取扱ヒハ、總テ是等ノ意ヲ以テ御取扱有ニ御座一度哉ニ奉レ存候、依テ右策一通奉レ入ニ御覽一候、右存ジ込候一策モ行ハレ不レ申候ニ付、幾度トナクモハヤ止ミ候ハント存ジ候ヒナガラ、天下ハ一家上下ハ一體ノ道理ヲ以テ、何分相忘レ候コト能ハズ、掃部頭様御大老職中モ聊カ上言仕度儀御座候處、其道ヲ得候ハズ、其内偶(午年ノ儀)早打ノ小銃ニ存付候儀有レ之、圖ヲ製シ銃工ニ命ジ、出來ノ上親戚ノ内砲術ノ門人モ御座候ニ付、共者ヲ以テ種々打試ミサセ候ニ頗ル便利ニ候故、御咎中ニハ候ヘドモ、御武備ニ於テ萬一ノ御裨益ト相成候ヘバ、責テハ御國恩ヲ空シク不レ仕候筋ニモ當リ候ハント、右圖錄ヲ以テ公邊ヘ献上仕度申出候處、主家ニモ聽受ケ、留守居ノ者ヲ以テ掃部頭様御用人迄午年冬差出シ置候所、翌年六月ニ及ビ、蒙ニ御咎一罷在候者ヨリ献上モノ等不ニ相成一ト申事ニテ、右圖錄御下ゲニ相成候、右等ノ儀ニテ天下ノ御儀ヲ忘レ候ト申ニハ無ニ御座一候ヘドモ、實ニ如何トモ仕ルベキ様無ニ御座一候一日々々ト御代ノ形勢ヲ奉ニ觀察一罷在候内、當六月上様ニモ御發憤被レ爲レ在、從來ノ御弊風御一洗、御

武威被レ遊二御振張一、皇國ヲ世界第一等ノ強國ニ被レ遊候御偉業ヲ被レ爲レ立、上ハ宸襟ヲ被レ爲レ安、下ハ萬民安堵致候樣思召候ヘバ、何モ厚ク奉レ得二其意一、御政事向御變革之筋ニ、各見込ノ儀モ可レ有レ之候ハバ、聊カ不レ憚二忌諱一、國家ノ御爲第一ニ相心得、心底ヲ盡シ可二申上一ノ旨御達モ有レ之、尙又閏八月十五日、御大政御改革、參勤交替ノ御規矩迄御改メ、武備充實候樣ニトノ上意ニテ、方今宇內ノ形勢一變、外國ノ交通モ御差免ニ相成候ニ就テハ、全國ノ御政事一致ノ上ナラデハ難二相立一、上下擧テ心力ヲ盡シ、御國威御更張被レ遊度思召候、銘々見込候趣有レ之候ハヾ、無二腹臟一申立候心得ニ可二罷在一旨被二仰出一候趣、屛居ノ私儀迄追々奉二傳承一、井底ニ於テ白日ノ方ニ中スルヲ仰望仕候心地、難レ有候事ニ奉レ存候、六月並ニ八月ノ被二仰出一トテモ、祖國ノ御委任モ御座候方樣ヘノ御達シ迄ニテ、微末ノ陪臣迄ニ被レ爲レ及候御儀ニハ無二御座一、況ヤ私儀久シク御咎ヲ蒙リ罷在候身分トシテ、天下ノ御大政ニ關係仕候儀申上候ハ、實ニ奉二恐入一候儀ニハ御座候ヘドモ、前文長々敷ヲ顧ミズ申上候通、私儀乍二微賤一先主人御加判ノ列蒙レ仰候砌ヨリ、分ニ過ギ候儀ニ御座候ヘドモ、天下ノ御爲毎ニ苦心計畫仕、遂ニ又夫ニ依テ重キ御咎ヲ蒙リ候ニ至リ、其御咎中ト雖御國恩聊モ忘却仕ラズ、種々苦思モ仕候儀ニ付、此度聊カ存付候儀共奉二申上一度奉レ存候、人ヲ以テ言ヲ不レ被レ爲レ棄、御採擇モ被レ下候ハヾ、誠ニ以幸甚至極難レ有仕合可レ奉レ存候、抑々曲リ候者ヲ矯テ中ニ就ケ候ハ、必ズ中ヲ過ギ候程ニ矯メ候ニアラザレバ、曲リハ直リ候ハヌモノニ御座候ヘドモ、矯メ過ギ候テ遂ニ中ニ叶ヒ候ハズバ、中正ト申スベカラズ、中正ニ無

レ之筋ハ、一旦其効アルガ如クニ御座候ヘドモ、亦遂ニ其弊ヲ免カレズヤト奉レ存候、江府ヨリ罷歸候モノニ承リ候ニ、近來御大政向御變革ニテ、諸家樣御供連殊ノ外御減少、御老中樣方御登城ニ僅カ三騎五騎位ニテ、御道具モ無ニ御座一候ヲ見カケ候ト申儀、最初傳聞仕訛傳トノミ存ジ罷在候所、再三右同樣ノ儀承リ、左候ヘバ實事ニ御座候カト被レ奉レ存候、イカサマ是迄諸侯樣方、御府內門地廻リニ御供多勢召連候モ、戰國ノ餘風ナド申テ奉ニ稱譽一候儀ニハ無ニ御座一候ヘドモ、オノヅカラ上下尊卑ノ等級ト申モノモ有レ之、冗人ノ分可レ成丈御省略御座候ハ、御尤至極ノ御事ニ御座候ヘドモ、天下ノ御大政ヲモ被レ爲レ執候御方樣、御道具等モ無ニ御座一、平士同樣三騎五騎ニテ御登城御座候ト申儀、果シテ實事ニ候ヘバ、誠ニ觀聽ヲ驚カシ候儀ト奉レ存候、乍レ恐何等ノ御緣故ヲ以テ右等ノ擧動被レ爲レ在候御儀哉、更ニ解シカネ候儀ニ奉レ存候、假令御登城等ノ御供ニ不レ被ニ召連一候テモ、元來御扶助ノ御士卒等其儘罷在候儀ニ付、其費ヲ被レ爲レ省候等ノ御爲ニテハ固ヨリ有ニ御座一間敷、又諸侯樣方御始メ、御富貴ニ御生立被レ成候方樣ハ、平日被レ召候馬ノ御始末モ多クハ人任セニテ、御門外御出馬御座候ニモ、イツモ御供連多キニ被レ爲レ狎、御身一ツノ御始末六カシキニ付、非常ノ節御差支無ニ御座一候爲ニ、此節御手狎シヲ被レ遊候ニテモ御座候カト奉レ存候所、御加判ノ列ヲモ被レ爲レ蒙レ仰候程ノ御方樣、是式ノ儀兼テ御心得モ可レ被レ爲レ在、又タトヒ御富貴ニ御生立、御一分ノ御儀無ニ心許一被ニ思召一ノ節御座候トモ、世ノ觀聽ヲ驚カサズ、窃カニ御鍛錬被レ遊方、御屋敷內ニテ如何程モ御座候御事ト奉レ存候、又御

扶助ノ御士卒御供ニモ不レ被ニ召連一其暇ヲ以テ文武ノ業ヲ御修メ候樣ニト申御趣意歟トモ奉レ存候處、貴重ノ御方樣ノ御ミヅカラ御警衛御守禦御座候ハヽ、本ヨリ御當然ノ御事、御家來ノ分內外常非常其主君ヲ警衛守禦可レ仕ハヽ是又當然ノ本務ニ御座候、文武修業モ不レ輕候ヘドモ、當然ノ本務ニ比シ候ヘバ、亦自カラ有ニ等差一儀ト奉レ存候、其上ニ御一法ヲ被レ爲レ設、御供ノ衆文武ノ志ニ隨ヒ、當用ノ書一兩卷懷ニシ罷在、御供待ノ間無益ノ雜談相停メ、懷中ノ書取出シ各獨看仕候トモ、又ハ志ヲ共ニシ候者ト、互ニ講習討論仕候モ勝手次第ニ致シ、或ハ測量・砲兵等ニ預リ候表ノ類持參、常ニ目ニ狎レ暗記仕候樣相勤、或ハ其間ニ肝煎樣ノモノ御取立、御世話御座候ハヾ、御供ニ出候モ卽チ學校ヘ出席仕候モ同樣ニテ、文武共一廉御家中ノ進ミニ相成可レ申、且御供番ノ者イカ樣非常ノ急御出馬御座候共、君侯御支度ト一時出揃ヒ、少シモ相後レ候者無ニ御座一候樣相成リ候御法ニ相成候ハヾ、結句ソノ方御武備ノ御一助ニモ有ニ御座一、必ズシモ御體格ヲ被レ爲レ外御減少ニ不レ及儀、却テ御體格ヲ御嚴守被レ遊候上ニ、文武御振興ノ御良策如何程モ可レ有ニ御座一奉レ存候、公儀御威光モ御座候上、御銘々樣御自反被レ爲レ在、行ハセラレ候所ノ御事業、宜シク御直道ニ被レ爲レ出候ハヽ、何ノ御怖怯ニモ不レ被レ在、掃部頭樣・對馬守樣等ノ御事ハ、例外ノ事タルベキハ勿論ノ儀ニ候得共、亂心者・破家者等ハイツイヅレノ所ニアルマジトモ難レ申候ヘバ、御登城其外御地廻ニモ、御高柄幷ニ御役柄丈ノ御定式御供ハ御座候方、御當然ノ御事ト奉レ存候、此ノ非常ノ御變革ニ被レ爲レ際候御儀ニ付、可レ成丈ノ御人減ジハ御尤ノ御事御座候ヘド

モ、傳聞ノ次第ニテハ餘リニ甚シク、乍レ恐御至當ノ儀ト難ニ申上一奉レ存候、然ラバ此節ノ御擧動誠ニ何ノ故トモ奉レ察兼候、若クハ亞墨利加・歐羅巴諸國ノ大統領・執政、又ハ本邦へ渡來罷在候ミニストル等ノ貴人、外出ニ僅々ノ從僕ヲ召連レ、多クノ人數ヲ要セズ候儀御見聞被レ爲レ及、面白キ事ニ被ニ思召一、御本邦ニテモ其風習ニセサセラレ候方可レ然抔申御事ニハ無ニ御座一候哉、若自然左樣ノ御儀ニモ候ハヾ、乍レ恐方木ノ本ヲ撰バセラレズ候テ、其末ヲ岑樓ト齊シクセサセラレ候トモ可ニ申上一奉レ存候、イカニト御座候ニ、皇國ト外蕃トハ御國體本ヨリ同ジカラズ、夫故ニ又御政體モ異ナラザルコトヲ得ザル儀ト奉レ存候、彼國ニテハ農工・商賈・舟子・漁師・獸醫・傭夫ノ子ト雖モ、其才能・學術優長ニシテ、果シテ衆ニ出候時ハ登用シテ、ミニストルニモ、執政ニモ、大統領ニモ至リ候事ニ御座候、去レドモ其職ヲ罷候へバ本貫ノ氓ニテ候故、其職ニ居候時節使令ニ供シ候ハ、多クハ皆其國ニ屬シ候小吏ニシテ、其家事ヲ辨ジ候爲ノ奴隷ハ僅々ノ事ト相見候、右故ニ私用ノ外出ニハ、其僅々ノ奴隷ノ內ヲ從者ニ召連レ候事ト被レ存候、是其國體・政體ノ然ラシムル所、然ラザルヲ不レ可レ得候、皇國當今ノ御形勢ハ、全ク漢土三代封建ノ制ト同樣ニテ、大朝ノ御大政ヲ被レ爲レ執候ハ即チ諸侯樣ニ御座候、諸侯樣ハ御高柄ノ御人數ヲ被レ爲レ持、御定メ御軍役ヲ被レ爲レ勤候事、御本分ノ儀ニ御座候、其被レ爲レ持候御人數ハ、平日御扶助ノ者共ニ付、內外非常共ニ自カラ御警衞御守固ニ被レ爲レ備候事固ヨリ六ケ敷、御國體ノ御當然、マシテ御大政ヲ被レ爲レ執候御重職ニ被レ爲レ居候御事ニ付、御登城其外御地廻ニモ、御體格丈ノ御儀衞ハ固ヨ

リ可レ有二御座一筈ノ御事ト奉レ存候、然ルヲ御道具モ不レ被レ爲レ持、僅ニ三騎五騎ニテ御登城等被レ爲レ在候ハ、假令御ミヅカラ重ンゼサセラレズ候トモ、乍レ恐御職柄ニ被レ爲レ對、ヤハリ御不敬ノ御筋ニモヤ當リ候ハント奉レ存候、右ハ全ク是迄ノ御過分ナル御供連ヲ被レ爲レ矯候御儀ニモ可レ有二御座一候ヘドモ、中正ニ被レ爲レ過候御儀ニ付、必ズ又弊ヲ生ジ可レ申奉レ存候、漢ノ高祖天下草創ニ當リ、悉ク秦代ノ儀法ヲ去リ、毎事易簡ニ被レ從候所、ヤガテ群臣酒ヲ飲ミ功ヲ爭ヒ、劍ヲ抜テ宮柱ヲ撃チ候ノ弊ヲ生ジ候事、漢書ニモ詳カニ見エ候、此節トテモ御舊弊ヲ除リニ痛ク被レ爲レ矯、中正ヲ被レ爲レ過候ハヾ、其弊又不測ニ生ジ可レ申カト恐懼仕候儀ニ御座候、兎ニ角當今ノ御形勢ト相成候テハ、和漢ノ跡ヲ御襲用被レ遊候計リニ無二御座一候テハ不レ被レ爲レ濟候ヘドモ、必ズ御精密ニ御折衷、御國體ニ被レ爲レ叶候樣、御政體ヲ被レ爲レ正度御儀ニ奉レ存候

貴賤尊卑ノ等ハ、天地自然禮ノ大經ニ有レ之、侯伯ノ御身ニ護衞ノ儀法御座候モ、是又禮文ノ當然已ムニ容レザル所ト奉レ存候、別シテ皇國ニ於テハ、貴賤尊卑ノ等殊ニ顯ナラザルコトヲ得ザル深意御座候儀ト奉レ存候、此深意能々御勘辨被レ爲レ在度奉レ存候、偖又傳聞仕候ニ、此節御大政ニ被レ爲レ預候御方樣ト雖モ、多ク御綿服ヲ被レ爲レ召候ト承リ候、是即チ國奢ル時ハ是レニ示スニ儉ヲ以テスルノ御美事ト奉レ存候ヘドモ、是又乍レ恐中正ニ過ギサセラレ候御儀ニテ、御政體ノ御上ニモ不レ可レ然、又其弊端的ニ出デ來リ候ハント奉レ存候、如何ニト御座候ニ、衣服ノ制上下法象アリテ尊卑ヲ標顯シ候ハ、政事上欠グ

ベカラザル大典ト奉レ存候、去レバコソ虞書ニモ詳カニ其儀ヲ載セラレ候、太平二百餘年總テ易簡ヲ被レ爲レ尙候御大政故ニ、是迄服色等ノ御沙汰モ至テ御簡略ニテ、乍レ恐上樣モ麻ノ御上下被レ爲レ召、下輩ノ侍・町人・百姓モ麻上下着用仕候、箇樣ノ儀ハ漢土文物ノ邦ニ限ラズ、世界萬國ニモ無レ之儀ト被レ存候、斯ク諸外蕃ト御交通被レ爲レ在候上ハ、爰ニテ服色ノ御制度御正シ被レ遊、御役名モ末々胥吏ノ分ニ至リ候迄、盡ク典雅ニ御更定被レ爲レ在、御文書類モ各其人ヲ被レ爲レ選、御辭命御修飾御座候テ、イヅレノ國ニ散在候テモ、後代迄外人ノ誹議ヲ不レ被レ爲レ受候樣ニコソ、奉二望願一所ニ御座候、然ルニ是迄ヨリ更ニ御易簡ヲ被レ爲レ尙、諸侯樣方御綿服ト申御事、天下甚不レ奉レ願儀ト奉レ存候、其故ハ右ニテハ古先聖王衣服ノ制モテ、尊卑上下ヲ標顯御座候治法ノ大典ニ叶セラレズ、且御富有高貴ノ方樣ニテ、木綿・紬等ノ御粗服被レ爲レ召候時ハ、其御下風ニ被レ立候上中ノ方々モ皆此服ヲ被レ求候。左候時ハ木綿・紬何ニヨラズ、大抵年々天下ニ定數御座候ニ付、下等貧賤ノ者ニ引足リ不レ申、其價端的ニ引揚リ、迷惑仕候者少ナカルマジク、其上是迄上方ヲ始メ諸國ニテ綾絹ヲ織出シ産業ト仕候者、猝ニ生産ヲ失ヒ可レ申、夫等モ一々御手充等モ被二下置一、失産ノ歎キ無二御座一候樣ノ御處置モ可レ被レ爲レ在候ヘ共、御制度ダニ相立候ヘバ、御綾衣ノ方樣ハ御綾衣ノ儘ニテ、上下ノ御標顯モ相立チ、天下ニ其ノ節儉ノ道モ相付キ、職工等産ヲ失ヒ候ノ患ヒモ無二御座一、非時御手充ノ御費モ無レ之、所レ謂弗費ノ御大惠トモ可二申上一候、又御儉約ノ御趣意ヲ專ラ被レ爲レ示度御儀ニ候ハヾ、御綾衣ヲ洗濯補綴シテ被レ爲レ召可レ然奉レ存候、左候ハヾ上

下貴賤ノ御法制モ崩レズ候テ、御倹德ノミ相顯レ、布紬等ノ價騰貴ニ至ラズ、下等ノ賤者暗ニ其御
恩惠ヲ蒙リ候ハンモノ、幾萬々ナルヲ知ルベカラズト奉レ存候、此儀天下ニ響キ候所甚細ナラズ候間、
何分モ御熟慮被レ爲度御儀ト奉レ存候、此非常御改革ノ御時節ニ付、服色ノ御制度ト御役名ノ御更定ハ、
何卒急々御評議被レ爲レ在度乍レ恐奉ニ企望一候、偖御政治ノ儀ハ孔子之聖訓之通リ、兎モ角モ人ヲ被レ爲
レ得候ニ無ニ御座一候テハ不レ被レ爲レ叶、多ク其人ヲ被レ爲レ得候ニハ、迂遠ニ似候ヘドモ御教育御座候ヨリ
外無ニ御座一候。人材ヲ得候ニ畢竟此一路ノ外無レ之候故、常典ニ男子ヲ教フル法ヲ詳カニシ、周禮成均
ノ法專ラ國子ヲ教育候儀ト奉レ存候、卿大夫ノ嫡子・子弟ハ國家ト共ニ相終始シ候モノニテ、コレ才德兼
善ニ候ヘバ、國家ノ治モ從テ善ク、コレニ反シ候ヘバ國家ノ上必ズ憂慮スベキノ事出デ來リ候、右故ニ
唐虞ノ昔ヨリ此教ヲ愼マレ候事ト被レ遊候、然ル所御當家樣御法、御大政ヲ被レ爲レ執候ハ必ズ諸侯樣ニ
テ、其他重キ御役筋モ皆御旗本ヨリ御人選ニ御座候、左候テ男子ヲ教フルノ御學政、是迄聢ト不レ被レ爲
レ立候ハ、乍レ恐御闕典ト奉レ存候

右故ニ諸侯樣方御家ニ依リ候テハ、世子ノ御輔導殊ノ外御等閑ニテ、學術ノ御擇ミモ無レ之、御督責モ嚴
ナラズ、道德ノ士ニ御親近モ無ニ御座一、其御左右ヲモ善ク選ムコトナクシテ、御氣隨ニ御成長被レ成候モ
御座候趣、是皆其老職ノモノ不行屆ニ歸シ候儀ニハ御座候ヘ共極メテ論ジ候ヘバ、公儀御學政ノ夫迄ニ
不レ被レ爲レ及故ト奉レ存候、此ノ御改革ノ期ヲ以テ何卒御學政御維新被レ爲レ在、御譜代ノ諸侯樣方世子御、

輔導御念入候樣有二御座一度奉レ存候、諸侯樣方ノミナラズ、御旗本方ニテモ御高祿ノ方樣ハ、其御世嗣ニ被レ定候御子ハ勿論、其御子弟迄賢良方正ノ士其左右ニ成リ、假ニモ邪佞輕薄文妄ノ輩其間ニ參錯スルコトヲ得ズ、其師ハ必ズ學術正シキモノヲ擇ミ、御勸學御座候樣屹ト被二仰出一、御小祿ニテ是ニ被レ及カネ候分ハ、其分限ニ應ジ、良師・良友ヲ擇ミ、其才ヲ成シ候樣有二御座一度奉レ存候、左樣御座候ハヾ、先第一ニ公儀御取用ヒノ御學術ヲ被レ爲レ正、夫ヲ以テ天下ノ學術皆一致ニ歸シ候樣御仕向有二御座一度奉レ存候、學術一致ニ無二御座一候時ハ、諸侯樣方幷ニ御旗本ノ方樣御役ヅカレ候上、往々御要路ニ進ミ被レ成候節、御取捨御決擇ノ間ニ於テ、天下國家ニ大ナル利害可レ有二御座一儀ト奉レ存候、偖此學術一致ト申儀、初ヨリ章句訓詁ノ末節ヲ申ニハ無二御座一、道德・仁義・孝悌・忠信等ノ教ハ、盡ク漢土聖人ノ謨訓ニ從ヒ、天文・地理・航海・測量・萬物ノ究理・砲兵ノ技・商法・醫術・器械・工作等ハ皆西洋ヲ主トシ、五世界ノ所長ヲ集メテ皇國ノ大學問ヲ成シ候儀ニ御座候、（四書六經イヅレモ聖人ノ謨訓ナラザルハ無二御座一候所、朱子大學格致ノ訓ニ從ヒ修業仕候儀、聖學ノ正脈ト奉レ存候、朱子格致ノ補傳ニ、凡天下ノ物ニ即テ其理ヲ究ムルト御座候、此凡天下ノ三字、南宋褊安ノ版圖ヲサスト申陋說ハ和漢トモニ御座候、左候ヘバ當今ノ世ニ於テハ、五世界ニ涉リ其所有ノ學藝物理ヲ究メ可レ申事、本ヨリ朱子ノ本意タルベク候、去ル故ニ當今ノ世ニ出テ善ク大學ヲ讀ミ候者ハ、必ズ西洋ノ學ヲ兼ネ可レ申事、有無ノ論ニ不レ及儀ト奉レ存候）此大綱領ヲ以テ先ヅ公儀ノ御學術ヲ被レ爲レ正、御學政ノ御根本ニ被レ遊、冑子・國子御

教育ニ御力ヲ被レ爲レ盡候樣有二御座一度奉レ存候、凡ソ學問三年ニシテ小成シ、九年ニシテ大成スト申候ヘバ、右御教育十年御倦怠無二御座一、御世話被レ爲二行屆一候ハヾ、御人材ニ御不自由御座候樣ノ御事ハ有二御座一間敷奉レ存候、此儀迂濶ニ近ク候ヘ共、カノ七年ノ病ニ三年ノ艾ヲ蓄ヘ候ノ譬ニテ、只今ヨリ蓄ヘサセラレズ候ハヾ、遂ニ被レ爲レ得候期有二御座一マジク奉レ存候、偖又民ヲ教フルト申事モ、是迄ハイカニモ御疎濶ト奉レ存候、右故天下ニ兎角無賴ノモノ多ク、不良ヲ働キ候テハ被二召捕一、年々牢獄ニ瘦死シ、斬ニ處セラレ候モノ御府内バカリニテモ夥シキ儀ト奉レ存候、御教導ダニ被レ爲二行屆一候ハヾ、其者共モ多クハ良民タルコトヲ得、職業ヲ以テ何カ世ノ用ニ可二相成一候ヲ、誠ニ愍ムベク惜ムベキ儀ニ御座候、歐羅巴・亞墨利加諸國ノ記載ヲ讀候ニ、年分死囚ノ數全國民口ニ掛ケ合セ甚寡ク御座候、全ク教ヘニ念入候効ト被レ存候、其民ノ性皇國ヨリ宜シキニモ無レ之、又皇國ノ民性ノ彼レヨリ不善ナルニハ無二御座一被レ存候、學校ノ建方モ教ヘ方モ東西諸蕃ノ制宜シク被レ存候ヘバ、總テ其仕方ニ倣ヒ、其教ヘ導キ候筋ハ孔孟ノ正道ヲ和ラゲ諭シ、惡事ヲサセヌ樣ニ致シ、農工・商賈ニシテモ其才發ノモノニハ、別ニ先ヅ窮理ノ初歩ヲ教ヘ、其才ニ應ジ諸學科ヲ治メサセ候樣ニ仕リ、大ニ天下ノ刑人數ヲ減ジ、有用ノ工藝追々興リ候樣相成候ハヾ、天下ノ御有益少ナカラズト奉レ存候、偖又教ヘ道ハシニ孔孟ノ正道ヲ以テシ候ト申内、第一ニ孝道ヲ先ト仕度、孝道ヲ先ト仕候ニハ、第一ニ喪服ノ御制度ヲ被レ爲レ正候事其大本ト奉レ存候、大戴禮ニ、凡ソ不孝ハ仁愛ナラザルニ生ジ、仁愛ナラザルハ喪祭ノ禮明カナラ

ザルニ生ズ、喪祭ノ禮ハ仁愛ヲ教フル所以ナリト御座候モ此儀ト奉レ存候、喪服ノ儀ニハ聊カ拙著モ御座候、御忌諱ニ觸レ候儀モ御座候歟ト奉ニ恐懼一候ヘドモ、乘テ愚存ノ次第モ御座候ニ付、拙著喪禮私說成服ノ條錄出奉レ入ニ御覽一候、御熟覽ノ上御採擇モ被ニ成下一候ハヾ、天下幸甚ノ儀ト奉レ存候、偖其他奉ニ申上一度ハ、御辭命ト御稱呼トノ儀ニ御座候、斯ク五世界諸蕃ト御交通被レ爲レ在候ニ就キテハ、御辭命ニ被レ爲レ入ニ御念一候樣仕度奉レ存候、御辭命善ク修リ候ヘバ、他ニ少シク御短處御座候テモ其御補ニモ相成リ、又御國勢ヲ被レ爲レ張候ニモ、御辭命ニ其力多カルベク奉レ存候、春秋ノ際ニ當テ、鄭ノ小國ヲ以テ晋楚ノ間ニハサマレ、其兵禍ヲ受ケ候ハ殆ンド虛歲ナク候ヘシヲ、子產政ヲ執リ候ニ及デ、辭令ニアラザレバ此大患ヲ免カレ候事ノ難キヲ知リ、裨諶子・太叔・子羽等ノ名士ヲ選用シ、草創・討論・修飾ノ任ニ充テ、尙自カラ是潤色ノ功ヲ加ヘ、諸侯・賓客交通ノ間ニ施シ候故ニ、每ニ敗事アルコトナク、定公・獻公・襄公ヲ合セテ五十餘年ノ久シキ兵禍ヲ免カレ、社稷・人民コレニ依賴シテ保全ヲ得候事、全ク辭命ヲ修メ候功ト被レ存候ヘバ、此節モ其器ニ當リ候者、御選擇子產ノ意ニ被レ爲レ倣、假ニモ御敗事無ニ御座一候樣有ニ御座一度奉レ存候、御稱呼ノ儀ト申ハ、近日御勅宣ノ寫ト申者拜見仕候、僞託ノ品ニモ候ヘバ誠ニ幸ノ儀ニ御座候所、自然其御勅宣ニ御座候時ハ、假令天朝ニテ被レ仰候ニモ御稱呼不ニ相當一、御國體ヨリ申上候テモ、御政體ヨリ申上候テモ、穩カナラザル儀天下國家ノ御爲大損ニ御座候テ、小益ナキ儀ニ付、其御理解善ク被ニ仰上一、向後外國ヲシテ戎狄夷狄ト御稱呼無ニ御座一候樣有ニ御座一度奉

レ存候、凡ソ戎狄夷狄ト稱ハ、漢土ノ中ツ國ニテ四邊ノ外邦ヲ少シ稱候辭ニテ、代々ノ歷史御本邦ノ如キヲモ皆東夷傳ニ收メ、是ハ全ク漢土ノ彼ノ如ク蚤ク關ケ、代々賢明ノ王者出デラレ、賢才ノ臣下多ク、人倫ノ敎モ明ニ相立チ、禮樂・政刑・制度・文物形ノ如ク備リ候故ニ、倫理綱常モナク、文學ノ敎モ屆ザル邊陬ノ國ヲバ、毛ダモノ、如ク蟲豸ノ如クニモ被レ思候故ニ、戎狄トモ蠻貊トモ呼レタル事ニ御座候、其中習ヒ遂ニ常ト成リ候テ、御本邦ノ如キ綱常正シキ君子國迄ヲ夷狄ト申候ハ、漢人既ニ誤リ候儀ニ御座候、然ルヲ御本邦ニモ又其誤リニナラヒ、只管外邦他國ヲ貶シ、學術・技藝・制度・文章、遙カ此方ヨリ備ハリ候ト見エ候有力ノ大國ヲ、戎狄夷狄ト御稱呼被レ爲レ在候ハ、甚何如ノ御儀ト奉レ存候、御勅宣トテ世ニモテハヤシ候上ハ、萬一外蕃ヘ傳播仕ルマジキニ無ニ御座一候、其節ハ諸大邦ノ怒ヲ起シ候筋、御損ナル御事ト奉レ存候、ヨシヤ左迄ニ無ニ御座一候トモ、天下ノ御大政ヲ御委任被レ爲レ在候東府ニ於テ、御交通有レ之其國々ノ使節官人ハ、夫々皆賓禮ヲ以テ被レ爲レ待候モ、無下ニ蠻狄ト御稱呼御座候ハンコト、御不都合ノ御儀ト奉レ存候、御本邦ニテ夷ト稱シ候ハ蝦夷ニ限リ候儀、(日本紀ニ蝦夷ヲエミシト被レ訓候、コレソノ證ト奉レ存候)征夷ノ御稱號モ本蝦夷ヨリ出候御事、古來御本邦ニテ夷ト呼ビ可レ申國ハ、蝦夷ノ外ニ無ニ御座一、其他ハ皆蕃ト被レ稱候儀ト奉レ存候、右故ニ往古任那・高麗・百濟・新羅モ夷ト被レ爲レ呼候儀無ニ御座一、琉球モ夷ト被レ稱候儀ハ無ニ御座一候、只今モシ朝鮮・琉球ノ小國ヲダニモ夷狄ト御稱呼御座候ハヾ、必ズ甘ンジ受ケ申マジク、況ンヤ西洋ノ大國ヲサシテ夷狄ト御賤シミ

御座候ハヽ、唯御無禮ニ當リ可ﾚ申ト奉ﾚ存候、國語ニ、夫レ戎狄ハ冒沒輕儳ニシテ貪テ讓ラズ、ソノ血氣治マラズ、禽獸ノ如シ、ソノタマタマ來テ貢物ヲツラヌルモ、馨香嘉味ヲ俟タズ、故ニコレヲ門外ニ坐セシメ、舌人ニ其牲ヲ體ノマヽ委テコレヲ與ヘシムト御座候、イカサマ禮儀ノ敎ヲ知ラズ、進退上下ノ別モナク、食物等ニ臨ンデハ血氣ニ任セテ、馨香嘉味ノ調理ヲモ俟タズ打食ヒ候樣ノモノニ候ヘバ、禽獸ニ近シトテ是ヲ門外ニ出セシメ、狗畜ニ物ヲ與ヘ候ガ如キ取扱ヒ御座候モ其理アル事、又戎狄ノ方ニ於テモ其稱呼ヲ甘ジ、其禮ヲ受ケテ柔服候故ニ、仔細モ無キ事ニ御座候、然ル所當今諸蕃ノ使節ヲ御內外ニ座セシメラレ、御饗應候ハント御座候ニ、納得仕ルベキヤ否ヤ、此ノ儀納得仕ラズ、唯納得仕ラズ候ノミナラズ、其御不當御不禮ノ筋奉ﾚ糺候樣ノ事ニ至リ可ﾚ申、氣遣ヒ奉ﾚ存候儀ニ御座候、外蕃御取扱ヒハ卽チ賓禮ニ屬シ候儀、賓禮ハ卽チ五禮ノ一ニ候ヘバ、厚クセラレズバアルベカラズト奉ﾚ存候、厚クト申儀無下ニ彼ヲ崇メ、御國體モ屈候儀ニハ無ニ御座ニ、至當ノ禮儀ヲ以テ御手薄ノ儀無ニ御座ニ候樣ニト申迄ノ儀ニ御座候、兎ニ角只今ノ御形勢、此御方ニ御無理御座候テハ不ニ相成ニ候樣、就テハ漢學ノ諸生輩詩文章ノ上勢ニ任セ、英夷・赤狄・紅毛夷墨夷等ノ詞ヲ用ヒ來リ候儀ニ御座候ヘ共、斯ク諸蕃ト御交通御座候上ハ、一切右等ノ文字扱ヒ不ﾚ申候樣、屹ト御觸諭シ有ニ御座ニ度奉ﾚ存候、此御時節柄彼方ニテ右等ノ儀ニ付、御國事ヲ指摘シ申上候樣ノ儀ニ御座候テハ、甚遺恨ノ事ニ奉ﾚ存候、兎角此御方ニハ分毫ノ指摘申スベキ事無ニ御座ニ候樣被ﾚ爲ﾚ在度御事ト奉ﾚ存候、偖テ尙ホ申上度奉ﾚ存

候ハ、御國力ノ儀ニ御座候、皇國ヲ以テ外國ト比較シ候ニ、氣候ノ順正ナル、米穀ノ富饒ナル、人民ノ靈慧ニシテ衆多ナル、實外ニ類モナキ御國柄ト可レ申奉レ存候、然ル所人口ノ衆多ナル程ニ御國力不レ被レ爲レ屆候、竊ニ其故ヲ求メシニ、四箇條御座候樣奉レ存候、其一ハ遊民多クシテ、徒ラニ其財用ヲ耗靡シ候ニ御座候、其ニハ貿易・理財ノ道外蕃ノ如ク開ケザルニ御座候、其三ハ物産ノ學未ダ精シカラズ、山澤ニ遺材アルニ御座候、其四ハ百工ノ職、力學・器學ヲ知ラズ、人力限リアルニ御座候、此度御大政御變革御座候ニ就キテハ、御府内ノ遊民ヲ始メ、各其職業ニ有付キ候樣御趣法御座候ハ、勿論ノ御事タルベク奉レ存候ヘドモ、御本邦ニテ只今遊民ノ第一ト申ハ佛氏ノ徒ニ御座候、凡ソ天地ノ間少壯男女トナク、此身アル時ハ必ズ居ル所ノ分位有レ之、分位有レ之候時ハ必ズ治ル所ノ職業御座候、然ル故ニ天地ノ間無職ノモノトテハ一人モ無レ之筈ノ事ニ御座候、右故ニ若シ一人其職ヲ守ラザルモノ有レ之候ヘバ、天下國家ヲ保チ候モノ、必ズ陰ニ其害ヲ受クルト申事ニ御座候、皇國ノ人口外國ノ割合ヨリ多ク候ト雖モ、此御小國ヲ以テ(魯西亞・英吉利・亞墨利加・漢土等ニ比シテ申上候也)、佛寺ノ數殆ンド五十萬ニ及ビ候、其寺ニ在ル所ノ僧侶多クハ數十人、其少ナキハ十人五人、乃至一兩人ナルモ有レ之、僻地貧地ノ寺院ニハ、農夫同樣自カラ耕シ候モ御座候トモ、多クハ皆伏居シテ飽食暖衣スルコトニ御座候、天下國家ノ上一人其耕職ヲ務メザル者御座候ダニ、陰ニ其害ヲ受ルニ御座候、五十萬宇ニ近キ寺々ニ許多ノ僧侶其身ヲ託シ、空シク世上ノ米穀・布帛・物材ヲ耗靡致シ候、是天下大ニ其病害ヲ陰受シテ、御

國力ノ大ニ振フコト能ハザル根本ト奉レ存候、斯ル御時節ト相成、上樣御發憤被レ爲レ在、世界第一ノ御强國ト被レ遊度思召候テモ、此一路ノ御始末付キ不レ申候テハ、譬ヘバ山ヲ作ル九仭ナラント欲シ候ニ、傍ヨリ土石ヲ崩シ持去シガ如ク、又井ヲ掘リ泉ニ及バンコトヲ欲シ候モ、隨テ土沙ヲ塡メ候ガ如ク、許多ノ歲月ヲ被レ爲レ積候トモ、決シテ思召ニ報イサセラレ候御時節有ニ御座一間敷奉レ存候、去リトテ佛ノ儀ハ年久シテ骨髓ニ入候病根ノ儀ニ付、倉卒過劇ノ御改革御座候テハ、之ガ爲メニ忽チ大害ヲ引出シ可レ申候ヘバ、久漸ノ病ハ久漸ヲ以テ治メ候外無レ之ト御觀念被レ爲レ在、先ヅ邪說ノ亂ルコト能ハザル正理ヲ以テ御一法ヲ被レ爲レ立、夫ヲ御持久被レ遊、御怠慢無ニ御座一候間ニ、小ヲ積デ大ニ至リ、徵ヲ積テ顯ニ至リ、終ニ其大功ヲ被レ爲レ收候樣有ニ御座一度奉レ存候、邪說亂ル事能ハザル正理トハ、天下ニ佛ニ依ラズ、儒禮ヲ以テ葬祭仕候儀ヲ御免許被レ爲レ在候ト、度ニ僧尼一ノ法ヲ嚴ニセサセラレ候トノ儀ニ御座候、度ニ僧尼一ノ法ハ徃古太政官ニテ度牒被レ授候御法ヲ被レ爲レ復、其御法通リ嚴重ニセサセラレ候ハヾ、一二十年ヲ出ズシテ僧徒ノ數大ニ減ジ可レ申、左候ハヾ其間情願ヲ以テ度ヲ受候僧ハ、其行ヒモ必ズ汚下ニ有ニ御座一マジク、眞ノ佛道ノ爲ニモ願ハシカルベキ儀ト奉レ存候、只今現在ノ僧ハ多クハ出家ト申ナガラ出家ニアラズ、貪冒汚穢ノ行ヒ在家ノ俗民ヨリ甚シク候、斯テハ其數多シトテ、其道ノ盛也トハ申スベカラズ、其行高ク其學ブ所深ク候ヘバ、其流ノ人寡クトモ、ソノ道ノ爲ニハ可レ然候、佛氏ノ學儒者ハ一概ニ邪說ト破リ候ヘドモ、ソノ寂靜ヲ習ヒ候所、全ク孔孟ノ敎トハ別派ニハ候ヘド

モ、一向人ニ益ナシト申スベカラズ、且ツノ說ク所多ク列子ニ合ヒ、又列子ノ說ハ西洋實測ノ理ニ叶ヒ候所往々有レ之候、皆其心得ノ妙地ニ東西ノ別ナク、世ニ古今ノ差ナシト可レ申候、既ニ人ニ益ナキニアラズ候ヘバ、必ズシモ其書ヲ火ニセズ、其モ亦世ニ用ユル所可レ有ニ御座一候、世ニ用ユル所有レ之候ハヾ、少シク是レヲ存シ候モ亦妨ゲ無ニ御座一候儀ト奉レ存候、但只今ノ儘ニテ御差置候テハ、天下國家ノ蠹害大方ナラズ候ニ付、是非トモ御良法ヲ以テ此害ヲ被レ爲レ除度奉レ存候、孔孟ノ教ヲ以テ忠孝仁義ノ道ヲ怠慢ナク御訓導有レ之、喪服ノ御制度御更張被レ爲レ在候ハヾ、天下人民大凡其向フ所ヲ存ジ可レ申、其所ニ於テ儒葬ノ儀情願ニ任セ候樣相成候ハヾ、佛寺ハ多クイラヌモノト可ニ相成一候、又住持無レ之廢寺ノ分、其處置イカ程モ可レ有ニ御座一、其儘手ヲ入レ文武ノ教場ニ可レ仕ナドモ可レ多候、邪宗門ノ儀モ平日正道ノ御教諭ニ御念入、加レ之保伍ノ法ヲ被レ爲レ正、其教導ノ士大夫ニ命ジ、邪書ヲ繙キ、邪教ヲ聽キ、邪言ヲ吐キ候儀ヲ痛ク被レ爲レ禁候ハヾ、カク只今迄佛氏ノ徒世話仕候ヨリモ、御邦禁嚴重ニ相成可レ申奉レ存候、偖貿易理財ノ儀ニ御座候所、私儀本ヨリ此節修業仕ラズ、乍レ去洪範ノ八政食貨ヲ一二ニ列シ、周禮天官ノ職九職ヲ以テ萬民ニ任ジ、商賈阜ニ貨財ヲ通ズルヲ以テ一職ノ務ト爲シ候事ニ候ヘバ、貨財ノ儀ハ先生ノ政食ニ次デ被レ重候事兼テ心得罷在候、別シテ當今ノ御代御國用乏シク御座候テハ、何事モ思召通リ出來セサセラレマジク、是非トモ御理財ノ御法相立不レ申候テハ被レ爲レ叶間敷奉レ存候、私儀理財ノ儀學ビ候事ハ無ニ御座一候ヘドモ、西洋諸蕃貿易ノ利ヲ以テ國本トナシ候大略ハ承知罷在候、

依テ愚意奉レ存候ニハ、是迄ノ御會計ニ被レ爲ニ立置一、別ニ專ラ西洋ノ貿易理財ノ術御取用ヒ、御老中樣ノ御內ニテ其御掛リ被レ爲レ定、公儀御船ヲ以テ其御定額ヲモ被レ爲レ立、不斷御國ヲ始メ五世界ヲ往來シテ彼民ト貿易シ、其御出方ヲ以テ防海ノ入費、外蕃御接待ノ御用途ニ被レ爲レ充度儀ト奉レ存候、全世界ノ形勢此體ニ相成候所ニテハ、防海ノ儀モ弥御嚴重ニ無ニ御座一候テハ叶ハセラレズ、就レ中御軍艦ノ數モ次第ニ可レ被レ爲レ增、城制ノ儀モ追々被レ爲レ改、西洋諸國ノ如ク國內ノ城々脉絡貫通シテ、京師邊ハ別シテ京師ヲ環拱圍繞シテ、互ニ相控援シ候樣有ニ御座一度、是等ノ儀皆外蕃ニ依テ御入增ニ相成候御用途ニテ、年々歲々莫大ノ御儀ニ可レ有ニ御座一、是迄御會計ヲ以テハ何程御省略ヲ被レ爲レ務候テモ、御出方無ニ覺束一儀ト奉レ存候、依テ愚考ニハ、是等皆外蕃ニ因テ御入增ニ相成候御用途ニ付、其分外蕃ヨリ被レ爲レ得候御出方ヲ以テ、被レ爲レ償候樣有ニ御座一度モノト奉レ存候、右申上候公儀御船ニテ、御積登リニ可ニ相成一品々、大凡此度御改革ニテ、工職ニ有リ付カセラレ候遊民ノ手ニ成リ相成候樣候ヘバ、此策全ク御成就ト申モノト奉レ存候、今天下ノ佛寺四十六萬餘宇、一寺ニ一人ノ僧ヲ減ジ工職ニ就カセ候ヘバ、四十六萬餘人ノ工職出デ來リ候。二三人減ジ候ヘバ百三四拾萬ノ工職出デ來リ候、加之ナラズ僧徒ナラザル遊手ノ民イカ程モ有レ之、又正道御教諭ノ爲メニ惡徒ニ陷ラズ、刑戮ヲ免カレ候者モ有レ之、夫等御趣法次第皆職業ヲ務メ候樣可ニ相成一、左候ハヾ只今迄世上ニ無レ之工職ノ數二百萬人出デ來リ候ハ、容易ノ儀ニ可レ有ニ御座一候、然ル上ニ力學・器學ヲ興シ、外蕃ノ通リ便利ノ器械ヲ制シテ人力ヲ助ケ、又彼ノ國

國ノ方法ニ倣ヒ、諸所ニ工作場ヲ開キ、互ニ相勵ミ候樣御董正有レ之、又物產ノ學ヲ明カニシテ澤山ノ遺財ヲ收メ、其出來立候貨物ト共ニ船ニ積ミ、五世界ニ御通商御座候ハヾ、莫大ノ御利分ニテ、防海其外ノ御用途ニ隨分御餘計可レ有二御座一、其餘計ヲ以テ徐々御國力ヲ被レ爲レ振候樣被レ爲レ勉候ハヾ、上樣思召通リ五世界第一等ノ御强國ト相成候ハン事、年ヲ數ヘテ可レ奉レ待儀ト奉レ存候、乍レ去大事ニ付早速ニ其功ヲ被レ爲レ收候ニ至ラズ、但邪說亂ル事能ハザルノ正理ヲ御持久被レ爲レ在、イツマデモ御怠慢無二御座一候樣被レ爲レ在度、左候ハヾ小ヲ被レ爲レ積候者必ズ大ニ至リ、微ヲ被レ爲レ積候者必ズ顯ニ至リ候ハン事、何ノ疑カ御座候ベキ、唯々御速功ヲ不レ被レ爲レ望、御持久可レ有二御座一ノ御規模ヲ被レ爲レ定候事御肝要ト奉レ存候、此御規模即チ御國是ニ付、タトヘ御執政之御方樣幾度被レ爲レ替候モ、イツモ御同樣ニ御所務有二御座一度奉レ存候、尚一々ニ御利害上存寄候儀モ御座候ヘドモ、一々毛擧仕可二申上一筋ニモ無二御座一、但前條申上候數件ハ、當今ニ於テ御事體ノ大ナルモノト奉レ存候ニ付、不レ顧二愚蒙一上言仕候、御審察ノ上御採用被二成下一候ハヾ、天下幸甚之儀ト可レ奉レ存候、以上

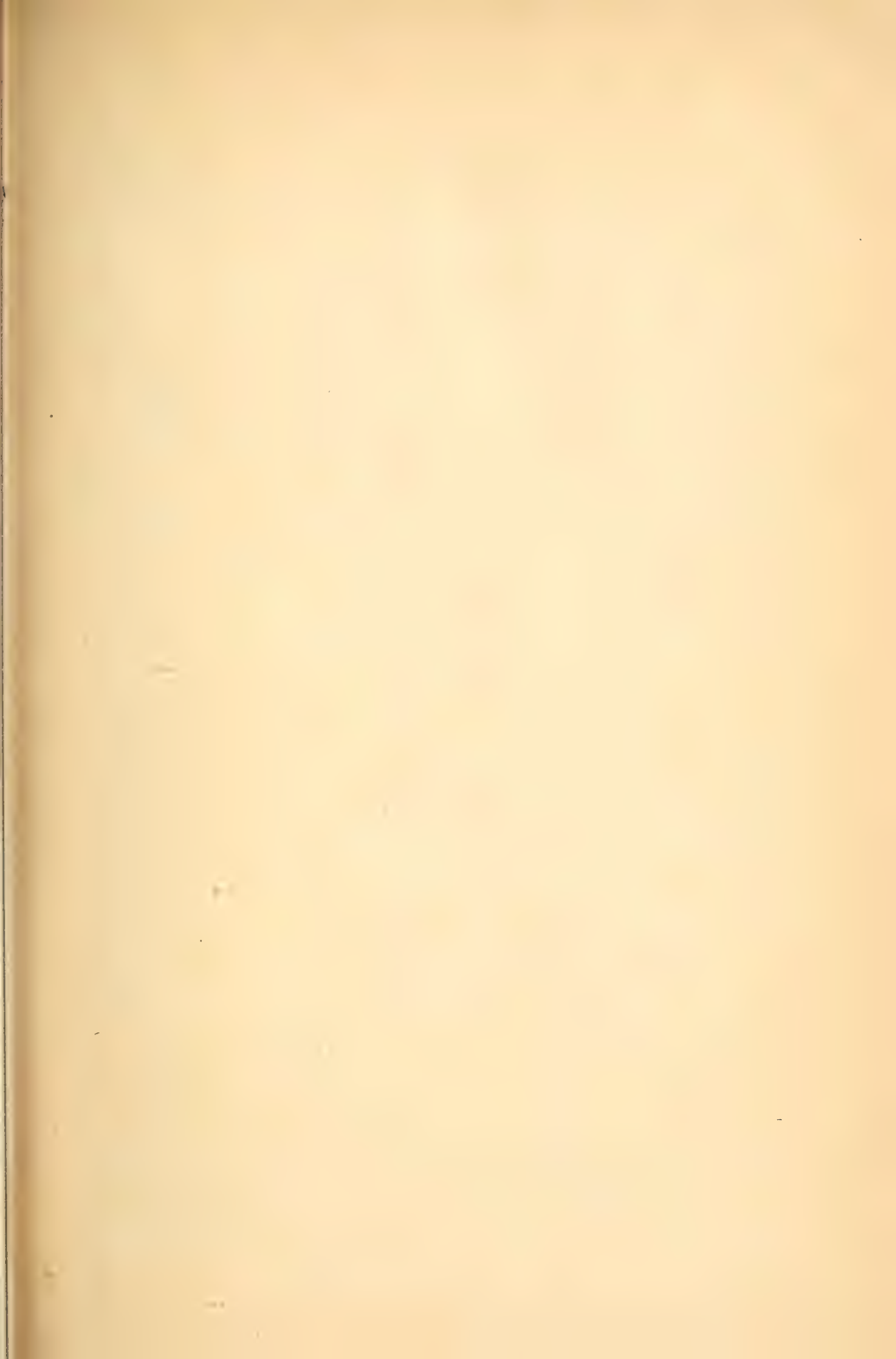
眞田信濃守家來

佐久間修理

戌（嘉永三年）九月

佐久間象山上書 終

治本策

岡本信克著

治本策

岡本信克著

敦教

一　近年五穀豐穰ニシテ、産財日々ニヒラケ、天變地妖ナク、上兵革災殃ノ事ナク、刑殺士大夫ニ上ラズ、下民蕃育シ、少長トナク、餓莩ノ何ノ狀タル事ヲシラズ、至治ノ澤天下ニ冠シテ、上下枕ヲ高フス、實ニ千萬年ノ一時ト謂ベシ、然ルニ上下困究シ、士庶トモ利欲ニ溺ミ、道義ヲ失ヒ、身家ヲ喪ボシ、或ハ愁訴黨與ノ獄行ハレ、盜賊シゲク、非常ノ罪ヲ犯シ、有司小吏職ニ安ンゼズ、今日進ムル所、明日亡スルニ至ルノ類、是却テ前時ヨリモ多シ、其故何ゾヤ、夫今日上下困究ト云ハ、眞ノ困究ニアラズ、皆々恩澤ノ至渥ニ飽キテ足ルコトヲシラズ、我所ニ安ンゼザルガ故ニ爾オモヘル也、誠ニ眞ニ困スルハ、明和・享保間ノ如ク、野ニ生草ナク、國ニ積粟ナク、上ニ在テハ士臣ノ難ヲ救フコトアタハズ、下トナリテハ君ノ急ニ副スルコトアタハズ、飢餓ノ民四邊ニ充滿ス、是ヲ以テ今日ヲ察スルニ、上下ノ急如レ此ナラズ、畢竟ハ華奢ニヒカレ、游佚ヲ逞フスル心ヨリ、其身ノ分際ヲ忘却シ、是ニヨリテ財貨欠齡、困究ノ苦辛ヲ懷クモノ也、今其名ニ驚キテ其實ヲ察セズ、困究ヲ以テ口實トスルハ、實ニ天

地若恩ヲ思ハザルノ甚シキ也、天地如レ此位シ、萬物如レ此育シ、人心ノ淳厚ナラザルハ、嘆クベキノ甚シキ也、是恐レナガラ教化陵夷シ、世勢ノシカラシムル所也、故ニ今日人心ノ淳厚ナラザルハ甚ダ憂フル所ニシテ、因究ハ憂フルニ足ラズ、一旦足ルコトヲ知ルノ風俗トナラバ、財帛ハ外ニ求ムルヲマタズ、自ラ餘アルベシ、近年有司小吏官物ヲ私シ、或ハ市中ニ掠竊スルモノアリテ咎ヲ蒙リ、家ニ錮セラル、モノ多シ、是皆因ヲ失ヒ飢寒ニ迫リテシカルニ非ズ、孰レモ廉耻ノ風ヲ失ヒ、一時僥倖ヲ求ムルヨリ大刑ニ陥ルモノナリ、然ラザレバ遊惰ヲ事トシ、遠慮ナク、幼時ヨリ學技ヲツトメズ、暗弱ノ徒一時ノ逼迫ヨリ起ルナリ、是亦素訓ノイタラザルモノニテ、教化ノ未ダ及バザル所ナリ、扨又黨ヲ起シテ枉曲ヲ訟ヘ、人氣擾動ノ機ヲ挾ムモノアルハ、是有司ノ其任ヲ得ズ、事ヲ裁スルコト輕々シク、又威事ヲ改ルノ倉卒ナル故ニ、下民己ガ理ヲ恃ミテ官吏ヲ信ゼズ、官吏ヲ視ルコト敬マザルヨリ出ル也、苟モヨク人ヲ用ヒ、才者一タビ行ハレ、闕ヲ補ヒ漏ヲ修シテ、下ノ輕視ヲフセグベキコト也、下ノ上ヲ輕視スルハ、教化ノ陵夷スル基也、盜賊ノサカンニ行ハル、ハ、上ノ制未ダ及バザル所アリ、大抵盜ヲナスハ無産ノ貧民ナリ、若之ヲシテ大ニ刑ニ懲リ、糊口ノ道アラシメバ、教化ニウツルベキハズ也、然ルヲ藩制罪アルモノハ偏地ニウツシ、世計ハ其好ム所ニシタガハシム、偏地ハ教化ノ及ボシガタキ所ナルヲ、無頼ノ徒ヲ其中ニ縱横セシム、是其身ニトリテハ過チヲ改ムルノ日ナク、却テ民俗ヲソコナハシム、有司職ニ安ンゼズ、前進後亡ナルハ、皆教化ノイタラズシテ、人才ノ淳厚ナ

ラザル所也、是故ニ教化ノ至ラザルハ國ノ大患ニシテ、政ヲ出スノ大本也、シカレバ今日ノ先務トスル所ハ、富國ノ術ニアラズ、政刑ヲ先トスルニアラズ、能〻敦敎ノ法ヲソナヘ、政綱ヲ固シ人心ヲ正スベシ、是實ニ當代ノ宏模ナリ

改革

一　近年改革ノ道行ハルヽコト諸省皆然リ、多年ナラズシテ舊人ヲ用ヒ玉フコトマヽ有レ之、其時ニイタリ事ノ得失損益ヲパアルニ、舊人新人ニマサレルコト多シ、シカレバ新人事ヲトリ、舊人未ダ復セザル時ハ、諸事草々タルコトシルベシ、コレヲ以テミレバ、當時ノ改革ハ人ヲ改メテ法ヲ革メズ、ヨリテ改革毎ニ古法ヲ失ヒ、諸事叢脞トナリテ、其詮ハ改道ノ闕トナル也、是未ダ改革ノ道ノ本ヲ穿議ナキ故也、實ニ能其法ヲ得ル時ハ、人ハ改メズトモ法ハ革ムベキモノ也

一　近年行ハルヽ改革ノ本意ハ流弊也、世ニ所レ謂流弊トハ、諸吏ノ公物ヲ私スルノ疑ヒ、賂賄ノ行ハルヽノ嫌トニアリ、此弊ハ官長其任ニ勝ヘ、威明下ヲ鎮壓スルニ足ル時ハ自ラ止ムベシ、必竟此弊アルハ、官長ノ明下ニ及バザルガ故也、今之ガ爲ニ諸吏ヲ沒スルハ、其弊官ノ舊法ヲ廢シ、不時ノ變ヲ招クニ至ル、又是ニ更ル人トテモ、皆々舊人ト同樣ノ人物ナレバ、上ノ明及バザレバ、又々私意ヲハタラクコト有ベシ、然レバ事ニ益ナク害マスマスイタル、夫嫌疑ノ爲ニ公法ヲ廢スルヲイトヒ玉ハザルハ、末ヲ治メテ本ヲユルメ玉フ也、「君子在レ位、小人革レ面」、コレ玩味スベキコト也

一　諺ニ云、綸言ハ汗ノ如シト、是甚ダ好シ、世ノ人法ヲ變ゼントスル時ハ必ズ云、過テハ改ルニ憚ルナカレト、是大ニ事ヲ誤ル基也、子細ハ君言汗ノ如ク、出レバカヘラザルコトヲオモハヾ、出サザル以前必戒メ敬ムノ意深シ、シカレバ出ス上ニテ改ムベキコト少シ、後世ハ事ヲ行ハザル以前ヨリ、モシ不可ナレバ改ムベシト云義ニ安ンズ、故ニ事ヲ始メニツツシマズ、之ヲ治ルコト容易也、容易ナルガ故ニ改ムベキコト多シ、事ヲ施シテシバシバ改ムルハ、民ノ信ヲウシナヒ、官司ノ權輕クナル端也、上ノ事ヲナス、何事モ試ミ試ミト稱シ塞ガル時ハ止ム、上ニ於テ大費ナキガ如クナレドモ、下民ハ其中ニ浮沈シテ、害ヲ受ルコトハカラレズ、孔子ノ言ハ、君子ハ身ヲ重ンジ事ヲ學ビ、事ニ忠信ヲ主トシ善人ヲ用ヒ、其上ニテ過アレバ改ムベシト云義ナルヲ、今人ハ始メニ身ヲ重ンゼズ、古ヲ師トセズ、善人ニハカラズ、多クハ私意ニ出デ忠信ナラズ、容易ニ事ヲ執リ、失アルニ臨テ、乍過チハ改ルニ憚ラズト稱ス、是無智妄作ニテ、決テ聖言ノ趣ニ非ズ

一　政ノ敗跡ヲ改ムルハ、洪水ヲ防グガ如シ、已ニ敗ルル時ハ、便ニ從テ漸々正ニ歸セシムベシ、水已ニ潰決スル時ハ、便ニ導キテ疏ルベシ、今事敗スル時ハ一切ニ之ヲ改ントス、是洪水ヲ防ギ止メテ後、水路ヲ別ニツクルガ如シ、タトヒ之ヲ改メウルトモ、其中間害ヲカフムルモノ鮮カラズ、政ヲヨクスルモノニアラズ

省　員

一歴代中世ノ君、國用不足スル時ハ儉ヲ行ヒ、冗官ヲ汰スルコトヲ務トス、然ルニ之ニヨリテ家ヲ起シ、國勢ヲ舊ニ復スルハ至テマレニシテ、政綱弛マリ姦猾ナラビススムノ隙ヲ生ジ、終ニ國ノ大患ヲノコスコトママ有レ之ニヨリテ、國勢ヲ挽回スルハ實用ヲ旨トシ、虛設ニワタリ、安逸不急ノ費ヲ減省スルヲ以テ也、後世此擧アルハ、事ノ實不實、有用無用ヲ分タズ、例シテ一概ニ減省ス、故ニ實用ニシテ廢スルアリ、虛設ニシテ存スルアリ、諸官其不平ノ弊ヲ存スルガ故ニ綱弛マル也、今其一端ヲイハン、煩劇ノ官ニシテ員ヲ減ズ、存スルモノ一人數事ヲ攝ザルコトヲ得ズ、ヨツテ事ヲナス速カニ辨ズルコトアタハズ、其事滯ル時ハ下吏ニ委シテ、其力ヲ假リ一時ノ用ヲ達ス、下吏ナスコト能ハザレバ、人少ナキヲモテ口實トシ、官長モ亦シヒテ督責シガタシ、下民其遲滯ノ費ヲウケテ情ヲノブルコト能ハズ、勢止ベカラザル時ハ、官ノ隙ヲウカヾヒ、私ニ用ヲ達シテ事ノ害ヲ萠生ス、又唯下民ノ怠ルノミナラズ、他官ト事ヲハカルニ其事ヲ辨ゼザレバ、彼手ヲ束テ居ナガラ、敗事ヲ視過スナリ、其極ル所官長威ヲ損ジ、下吏志ヲ得、下吏ヲ退クル時ハ事ニ幹タルモノナク、下ノ人氣ヲ傷害スル也、今其實用ヲ尙ビ虛役ヲ減ズルコトイカント云ニ、又其本アリ、先官ヲ減ゼント欲セバ、君上ノ左右ヨリ始メ、諸事實用ノミシ玉フベシ、タトヘバ出遊シ玉フトキハ、ナルホド供奉ノ人ヲ減ズベシ、其意ハ官ヲ備フルハ禮式ニ管ル時ノ事ニテ、出遊ノ時ハ無用ノ華飾ヲ除キ、實用ヲ宗トシ、田獵ナレバ田獵ニアヅカルモノヽミニテ可也、且其國都ノ中ヲ巡行シ玉フハ、家園ノ中ニ從フガ如ナレバ、必シモ

文具ヲソナヘズ、渇テハ流ニノゾミ水ヲ飲、人家ヲ尋ネテ烟茶ヲ辨ジ玉フ、是武家當然ノ儀ト、君上之ニ安ジ玉ハヾ、餘ノ供奉ノ從者ハ自ラ減ズベシ、歩士以下ハ自ラ糧ヲ裹ミ、之ヲ腰ニストモ事足リスベシ、其要實用サヘ達シナバ、浮觀ニカヽハラズ、然時ハ上一人ノ供奉ヲ減ジ、陪從胥徒ヲ省スルコト若干也、トカク上ノ出行シ玉フハ、直ニ供奉ノ人ヲ費スニアラズ、夫ニツキテ諸省ノ人ヲ費ス也、是減ジテ可ナルモノ也、サテ外政府ノ法官ハ、刑罰執法ニツキテ尤モ人ヲ費ス也、故ニ罪人ヲ省ク術行レテ、法制ヲ簡約ニシ玉ハヾ自ラ減ズベシ、又算官ハ省毎ニ役人アリ、證據役アリ、違亂ノ憂ナシ、況ヤ上仕置場・勘定奉行・小頭等アリ、若過失アレバ法官之ヲ監察ス、法制密ナリト云ベシ、今勘定人ナルモノ其中ニアリテ事ヲ取ル、是冗官也、國家ノ古法官物ヲ剽掠シ、己ガ私ヲ營スルモノハ輕ク死罪、重クシテ一家ヲ誅夷セシ也、今如レ此ナラズトモ、大抵逆罪ヲ以テ之ヲ正シ玉ハヾ、人々皆畏懼シテ犯スモノアラジ、今日トテモ下民ノ官物ヲ竊取ルモノハ、或ハ助命追放、或ハ死刑等ニ行ハル也、然ニ是類ハ守者ノ怠ヲミコシテスルコトナレバ罪淺シ、仕官ノ者上ヨリ委ネ任ゼラレ、其職ニ在テ己ガ私ヲ營スルハ大ナル罪ニテ、祿盜人ト云ベキモノ也、然レバ下民ヨリモ重ク罰ストモ、輕クスベカラザル筈也、若如レ此ナラバ官吏皆己レヲツヽシミ、冒掠ノ態少クシテ、此官人數少ニテ事足ヌベシ、是併ラ國家仁惠ノ至渥、刑罰ノ輕クシ玉フニナレテ、之ヲ犯スコトヲ懼ルヽコト深カラズ、故ニ犯スモノ多キガ故ニ、此コトヲ得玉ハズ此贅官ヲナスモノ也、是減ジテ可ナルベシ、其他減省スベキモノ皆此例ヲ

推セバ、事ニ臨デ自ラ辨ジ、官閑ニシテ事治ルベシ、所詮實ヲセメテ虚ヲハラフノ政行ハル、時ハ、人ヲ減ズルニ意アラズトモ、自ラ減ゼザルコト能ハザルニ至ル、是官員ヲ減ズルノ本意也、然ルニ近年官制ヲ沙汰スルノ擧ナケレバ、仕官ノ者オビタヾシキコト也、今一時ニ官員ヲ減ズル時ハ、小祿ノ士吏自ラ保ツコト能ハズ、上トナリテハ無用ノ人ヲ召抱ヘ玉フニアタル、サレドモ之ヲ沒シ玉フハ不仁ノ事也、此所ニ於テ一術アリ、必コレガ處ヲナシテ、而シテ後官員ヲ減ズベシ

禁姦

一 國家姦盜ヲ防グノ制至テ密ニシテ、姦民手足ヲ容ル、所ナシ、然ルニ非常ノ盜ヲナスモノ比々踵ヲ接ス、其中ニテ官吏ノ官物ヲ私ニシ、士吏ノ物ヲ偸スルガ如ハ、官長ノ怠慢スルト、處置ノ疎ナルト、廉耻ノ風下ニ行ハレザルトニアリテ、法制ノ罪ニアラズ、今法制ノ中ニアリテ能禁ズベキヲ論ゼン、盜ヲナスモノハ大ニコレヲコラシ、口腹ノ養ヒ缺ザラシメバ、大ニ悔テ良心ヲ發スベシ、今日國家ノ制、罪アル者ハ產地ヲ遠ザケテ偏地ニ放ツ、罪重ケレバマス〳〵遠地ニ放ツ、元來盜ヲナスモノハ恆ノ產ナク、產ヲ興スノ知慮ナク、止ムコトヲ得ズ今日ノ命ヲ係グガ爲ニナスコト也、ヨリテ桎梏面縛ヲ耻トセズ、囹圄ニ居テ苦トセズ、カヘツテ飢渴ノ難ナキヲヨロコブ、一旦罪ヲ蒙リテ、偏地ニウツサル、ニ及デハ、猶又產ニ安ゼズ、口腹ノ養ヲナスコト能ハズ、近地ニウツサル、者ハマス〳〵甚シク、時ニトリテハ物ヲ盜ミ、暫時ノ急ヲスクヒ、又ハ囹圄ニ入リ、一旦ノ飢ヲノガル、ノ計ヲナス、

如レ此ナレバ上ノ刑罰姦ヲコラスニ足ラズ、却テ之ヲ以テ飢渇ヲスクヒ、暫ノ息ヲ休ル所トナス也、譬ヘバ惡虎ヲ憎デ之ヲ大里ニ縛シ、小里ニ放ツガ如シ、大里ニ在テハ人々ノ衛リ多ケレバ害少シ、小里ニ放テハ人少クシテ衛リ難シ、彼ガ害ヲナスコトマス〳〵盛ニシテ、飢渇イヨ〳〵甚シ、是何ヲ以テ其攫噬ヲ禁ズルコトヲ得ン、必之ナキ道理也、今盜賊甚ダ多ク獄訟シゲキモ、皆此弊ニヨリテ、一賊ニシテ度々罪ヲ犯シ、毎ニ之ヲ治ルガ故也、若一賊ニシテ刑ニ伏テ後ハ大ニコリ、二度ト惡事ヲナサヾルヤウニイクサバ、盜獄ノ減ズルコト的然ナリ、西土歷代徒罪アリ、或ハ倩罪ト云ヒ、鉗奴ト云フ、皆其飢渇ヲタスケ其力ヲ勞シ、大ニ懲スノ法也、今此ヲ行ンニ、罪ノ輕重ニヨリテ、十年或ハ五年三年ト限ヲナシ、其年限ニアルモノハ、或ハ頭ヲ髡シ、眉毛ヲ剃リ、服ヲコトニシ、衆民ト別チヤスクシ、道ヲ往來スル時ハ符節・璽書・時限・途筋ヲ記シテ與ノベシ、若其證ナキ者ハ、在所ノ伍正ヨリ本途ニカヘシ、命ヲ用ヒザル者ハ、トラヘテ官ニ訟フベシ、如レ此シテ國中ニ身ヲ隱ス處ナカラシメ、サテ之ヲ勞事ニ使フベシ、大率土木ノ功、又ハ負擔、山河ノ運送ノ役ニツカヒ、閑散ノ吏ヲオキテ之ヲ馭スベシ、其力ヲ勞シ功大ナル者ハ褒賞ヲ與ヘ、褒賞ノ數多キモノハ之ガ限年ヲ減ジ、其中又罪ヲ重スルモノハ限年ヲ益スベシ、サテ限年ヲ首尾ヨク終ル者ハ、ヨク〳〵敎諭ノ上、相應ノ生產ノ基トスベキ金錢ヲ與ヘ、良心ニカヘサスベシ、然ラバ恩ニ感ジテ悔悟スベキモノ多カラン、是上ニトリテハ大ニ工役ノ費ヲ省シ、平民ノ力ヲ安ンズベシ、又本國ハ山澤多クシテ、人力遍ク及バザレバ、材木ヲ

深山・幽谷ヨリ出シ、險阻ノ路ヲ平ラゲ、或ハ荒蕪ヲ開キ、水利ヲ起ス等ノ國益ヲナスコトカギリナシ、此事少シク試テ實ニ行ハルヽ時ハ、旁ラ國ヲ富スルノ益アリテ、盜姦ヲコラスノ道トナルベシ

一　尺ヲ枉尋ヲ伸ノ古語古ヘヨリ之アリ、今姦民之ニ乘ジテ術ヲメグラスモ多シ、今目撃スル處ヲ云ン、博奕ハ天下ノ嚴禁ナレドモ、之ヲ犯スモノヤマズ、是費ス處アレドモ、得ルニ至ツテハ巨大ナルガ爲也、然レドモ之ハ必シモ得ベカラズ、一姦民アリ術ヲ巡ラシ、愚蒙ノ士人ヲアザムキ謀判イタサセ、自ラ大金ヲ掠メ取リ、終ニハ其身放逐セラルヽ、其期ニ及ンデ得ル處ノ金錢ヲ人ニカシ利息ヲ蓄ヘ、數年ノ後赦ニ逢テ歸ル、其時若干ノ利息ヲナセリ、此類多シ、アラカジメ刑罰至ル處ヲハカリ、寧ロ之ニ居テ大利ヲ後來ニ殘サンコトヲハカル、其心ニクムベシ、其他存ジ寄ヲ出シ、某ノ問屋・某口錢・某ノ制産ナドヽ國ヲ富スノ術ヲノベ、官之ヲ行フニ至テ、日ナラズ廢格ス、皆右ノ餘智ニテ、終ニハ廢格シ咎ハ被ルトモ、一旦ノ利ヲアミスルハカリゴト也、其他士人ノ宰長姦商ト計ヲ合セ、主家ノ貨物ヲ掠シ、己レガ終ニ擯斥セラルヽコトヲ厭ハズ、僞姦百出至ラザル處ナシ、主家ヲ追斥セラルヽ時ハ、餘利ヲ抱イテ他家ニ仕フル類多シ、此類常刑ノヨク禁ズル處ニアラズ、官制意誅ノ法ヲ作リテ、巧ニ出ル者ハ罪アサシトイヘドモ、刑ヲ重クシテ其姦根ヲ拔キ、後來ノイマシメトナシタキ者也

一　無頼ノ惡徒盜ヲ業トスル者、隨フテトラハレ從フテ放タル、放タルヽニ及ンデハ又盜ス、生涯幾度カ收放セラルレドモコリズ、其業シバ〳〵スル者ソノ術マス〳〵精シ、僻地ニアリテ大利ヲ得ザレ

バ、禁境ヲ犯シテ人官ノ閑ニ乘ジ、或ハ宮寺ノ寶物ヲ盜ミ、又ハ人ノ庫廩ヲ穿チ、其貨物ヲ得テ此ヲ近地ニ鬻ギテハ、蹤跡アラハルヽ故、多分ハ境外ノ地ヘ持出シメ、四境ノ固全シトイヘドモ、之ヲ衞ル人ナケレバ、是徒ノ闌出ヲ禁ズルコト能ハズ、今四境ノ民ニ命ジテ盜賊ノ物ヲ携ヘ、或ハ罪ヲ負テ奔ル者ト見付ナバ之ヲ官ニ訟ヘ、官ヨリハ物ヲ與ヘ、ソノ功ヲ賞スベシ、而レバ境邊ノ民ソノ賞物ヲ貪リテ、自然ト衞護ノ堅キニ至リ、姦商闌出ノ患ヲ絶ツベシ、世ニ姦盜ノ業クハシキモノハ、邊境ノ人ニ狎レテ其蹤跡ヲカクサシムト聞ケリ、右ノ法嚴ニ行ハルヽ時ハ、是等ノ惡風止ムニ近シ

安民

一當時ノ勢ヒヲ平視スルニ、公法四民ノ心ヲ畏服セシムルコト能ハズ、其尤モ甚シキハ商ノ利ニ走ルニアリ、士ノ心ヲ一ツニセザルニアリ、工ハ其間ニ俯仰シテ、害必シモ多カラズ、農ニ至リテ害ヲウクルコト甚シ、其僅ニ安ンズル處ハ、米穀高價ニヨリテ、産物騰貴ノ勢ヒアルニヨリテ也、然レドモ商ハ之ニ乘ジテ變化シ、イマダカツテ害ヲ被ラズ、其弊ノ歸スル處、大農ハマス〳〵富ミ、小農ハイヨ〳〵困ジ、業ヲ失フニ至ル、兼併ノ徒恣ニ廢居シ、物價ヲ煽動ス、其弊ニ乘ジテ士商ノ小産ナル者、手足ヲ措ク所ナキニ至ル、公法コノ弊ヲスクハントスレドモ、官制シバ〳〵改マリ、司吏改マル毎ニ事ヲ改メ、舊人ノ尙ブ處ハ新人之ヲ輕ンジ、輕ンズル處ハ却テ重トス、姦民其機ニ乘ジ術ヲ廻ラス、事キハマラズ、之ニヨツテ公法其勢ヒヲ挽回スルコト能ハズ、遂ニ畏服シガタキニ至ル、是又司吏ノ

力衆ヲ驚カスニ足ラザルノミナラズ、持重ノ謀ナキニ及ブ故也

一　今商ノ利ニ趨リ、諸物ノ價ヲ騰貴スルヲ抑ヘントシ、商ノ末利ヲ檢シ、吏ヲシテ嚴ニ其賣沽ノ出入ヲ籍セシム、コレ抑末也、其弊小商ヲ勸シムルノミニテ、公法ノ擧國ヲ平準スルノ制ニアラズ、イカントナレバ、大賈ノ居家シテ貨ヲツムモノハ、頓カニ其價ヲ減ズベカラズ、亦其來歷ヲ一々正ストキハ、一旦夕ニキハムベカラズ、故ニ必シモ論定シ難シ、今日行ハルヽ處ハ菜菓・魚木ノ類ニテ、今日沽シ今日賣スルモノ也、ヨリテ只此物ノミ嚴ニ苛刻ヲキハム、其弊小商手足ヲ措ク處ナク、終身成立ノ期ナシ、大賈ハ居然トシテ、言ヲ左右ニカリ大利ヲアミス、公法ノヨク制スル所ニアラズ、今其弊ヲスクハンニハ、大賈ヲ抑ヘ小商ヲアゲ、大農ヲ抑ヘ小農ヲノバスベシ、而シテ商ヲ減ジ農ヲマスノ術、其間ニ行ハルヽ時ハ可也、何ヲカ大賈ヲ抑フト云、大賈ハ金銀多ケレバ、近利ヲミズ大利ヲ網ス、旱ニ雨具ヲ求メ、雨ニ旱備ヲナス、陶朱ガ計至ラザル所ナシ、且一人數十隷ヲオキ、日夜利ヲノミハカル、數十隷ミナ〳〵大利ヲハカリ小利ヲアマサズ、其術ヲハカリ得テハ己ガ功トシ、互ニ利ヲノミスヽムル故ニ、大賈一人數十人ノ耳目ヲ以テ其智術ヲヒラキ、素ヨリ金銀乏シカラザレバ、施ストシテ成ラザルコトナシ、此ガ爲ニ擧國遺利ナク、小商自ラ產ヲ失フニ至ル也、且官商戶ヲ限スル法ナケレバ、小農ノ產ヲ失フモノ、其財ヲ老父弱子ニ託シ自ラ商トナリ、小商益々多キ時ハイヨ〳〵產ノナシ難キニ至リ、產ノナシ難キガ故ニ、利息ヲマシテ物價ヲ貴フセザルコトヲ得ズ、而シテ其ツトメテ利

ヲ逐フ者、皆菜菓・魚木日用ノ小品ノミナレバ、其價騰ル時ハ其弊工士ノ間ニ溢ル、工士其弊ヲウクル時ハ、大率小商ノ所爲トシ、大賈ノ其産ヲウバヒ、之ヲシテ然ラシムルコトヲ知ラズ、故ニ官ノ法制ヲ出ス、其見多ク之ニ出ル也、故ニ終ニ之ヲ禁ズルコト能ハズ、今ヨリ其原ヲ推考シ、ヨク〳〵處置シ得バ、目ナラズシテ其價權上ニ歸セン、此之ヲ大商ヲオサヘテ小商ヲアグト云、何ヲカ大農ヲオサヘテ小農ヲノブト云、農ノ務ハ功ヲ通ハシ力ヲ通ズルヨリ便ナルハナシ、今郷ニ大農アレバ、必業ヲ失フ小農アリ、イカントナレバ、大農ハ財力ヲ以テ人ヲ役ス、是人ノ力ヲ奪テ自ラ力ヲ人ニカサズ、是小農ノ便ヲ妨グ也、夫小農ハ自ラ佃シテ衣食ニタラザルモノハ、大農ニ役シテ金錢ヲ得ルヲ利トス、ヨツテ自ラ佃スルニオコタル、一旦病患ニカヽリテ人ノ役ヲナサヾレバ、其道ヲ失ヒ佃スルコト能ハズ、産ヲ失フニ至ル、自ラ佃セズシテ人ノ役ノミヲ事トセバ、家人ヲ撫育スルニ足ラズ、終ニハ業ヲ投ジテ城市ニワシリ、小商トナリ、傭夫トナルノ類多シテ、農戸ノ實ヲ失フ、是農事ノ衰也、然ニ小農滅ズルトモ、大農之ヲカスル時ハ田壤ヲアラサズ、穀物ノ耗滅ナケレバ可ナルニ似タレドモ、大農金銀ニ富ム時ハ、農ヲ忘レ末ニ走リ、或ハ山ヲ營シ金ヲカシ、工商ノ術ヲ干シ、小民ヲ勵シムルコト大商ニ異ナラズ、特ニハ時糴ヲ伺ヒ糴糶ヲ恣ニシ、ヒトヘニ穀權ヲミダリニシ、穀價ヲ騰貴ナサシメ、衆民ヲヤマシムルモノ也、小農ハ金錢ニ乏シケレバ、穀成ル時ハウラザルコトヲ得ズ、之ヲウルニ時候ノ貴賤ヲ待ツコト能ハズ、故ニ小農多キ時ハ穀物滯ラズ、凶年トイヘドモ頓カニ穀ナキニ苦マズ、

大農多キ時ハ、價賤ケレバトヾメテ出サズ、故ニ豐年トイヘドモ穀ニ乏シク、價ヲ騰躍セシム、是所レ謂穀權ヲミダリニスルモノ也、今官ヨリ此處ヲ治メ玉ハヾ、穀權自ラ上ニ歸シ、必シモ嚴命ヲハリ物價ヲ抑ニ及バズ、此之ヲ大農ヲ抑ヘテ小農ヲノバシムト云（商ヲ減ジ農ヲ增スノ術、自ラ此小目ニシテ治本ノ用ニアラズ、故ニ之ヲ略ス）

一　大賈小戶ヲ勵スノ諸術、其尤モ大ナルモノハ、米賈・充舖・息金ノ類ヲ抑スルコト尤急也、其道ハクダクダシケレバ略ス、其他ハ華ヲ禁ジ實ヲ主トスル政事アレバ自ラヤム、但此三術ヲ公行セシメズンバ小戶ノ患ヤマズ、安民ノ道行ハレザルベシ

一　民ノ欲スル所ニ從フテ行フハ、仁主ノ先務也、然ルニ後世ハ民ノ俗澆キガ故ニ、心得ベキコトアリ、今日諸々ノ愁願存寄ナド申出ルモノハ、一人ノ利ノ爲ニシテ衆ノ害ヲナスコトアリ、衆ノ害ナケレバ國家ノ利ヲ失フコトアリ、上タル人此ニ心ヲ用ヒザレバ、其欺キヲウクルコト少カラズ、是彼細事ニワタル故ニ今ハ不レ論

一　財物高價ナルハ、民ノ安ンゼザル本ニシテ、財物高價ナルハ、穀ノ貴キ其本ニシテ、文具ノサカンナルガユヱ也、穀ノ貴キハ穀ノ乏シキガ故也、近年田野大ニ開ケ、他糴ヲモユルシ玉ヒ、且年々不毛ノ患ナシトイヘドモ、穀積多カラズ、是生齒日々ニ多キガイタス所トイヘドモ、尙議スベキコトアリ、夫生齒年々滋キハ、之ヲ生ズルモノモ日々ニヒロケレバ、憂イマダ及バシ、其穀ヲ失フコト二道アリ、穀價ヲ賤シクセザルニ二道アリ、先穀ヲ糜スルノ大ナルハ酒ニ如クハナシ、近年世ノ富饒ナル

ニツレテ、酒宴ヲ張ルコト大ニ奢侈ニ至リ、冠婚•葬祭ハ勿論、百禮ミナ酒ヲ用ヒザルコトナク、其餘飲食ノ徒日々ニ費スコトハカラレズ、官之ヲ抑ヘ玉フト云ドモ、命下ルノ後數日ハ嚴ニ守ルガ如シトイヘドモ、日ナラズシテ舊ニ復ス、殆ド法制ノ禁ジ難キ處也、今之ヲ節スルニ法有リ、スベテ宴饗ヲナスコト日ヲカギリテ許スベシ、但シ行旅ノ贐送ハ、日ヲ刻スルモノナレバ格別ニテ、其餘吉凶賓嘉ノ禮ハ平日ニ行フコトヲ許サズ、或ハ朔望ノ中ニテ月ニ一箇度ハユルスベシ。凡ソ客ヲヒカントスルモノハ、必此日ヲマチテ行フベシ、平日ハ養老護病ノ外、ミダリニ飲スルコト一切斷禁スベシ、勿論父子間トテモ、陽ニハ對飲スルコトヲ許サズ、如ㇾ此定メテ行フ時ハ、其費ヲハブクコト大半ニ至ルベシ、子細ハ神祭ナドハ許多ノ客アリトイヘドモ、數席ニ連及シテ一家ニノミ留飲セザレバ、一家ノ費ス處多カラズ、平日ノ宴饗ハ必一家ニ止ルユヱニ、席ヲシムルコト久シク、醉俺タヘザルニ至ル時ハ之ヲコボシ、席ヲ池トシ長ヲヒタシ、無用ニ費スコト多シ、今之ヲ一日ニカタムル時ハ、必シモ一家ニトヾマラズ、席ヲ重ヌルコト多ク、醉ヲトルコト多シトイヘドモ費ス處少シ、是ヤヽ穀ヲ失ハザルノ道ニシテ、カネテ飲食ヲ節セシムルノ道也、扨又米ノ消耗スル製搭工ニアリ、近年此道大ニ開ケ、他邦ニ運スルモノ多キガ中ニ、之ヲ製スルコト尤多シ、之ヲ製スルニハ必米糊ヲ用ユ、モトハ我國ニ給スルモノヽミナレバ費スコト少シ、今ハ天下ニ布ノ所ノモノ皆我産ニ出デヽ、有限ノ穀ヲ費ス、其潜カニコヽニ消耗スルコト少々ナラズ、夫一工一日一人ノ食ヲ潰却ストモ、國中ニ合シテ幾許ゾ、又

一年ニハカリテ幾許ゾ、其大耗余ガ言ヲ待ズシテシラルベシ、今之ヲ節スルコトイカント云ニ、凡舶ヲ製スル時ハ必船ヲ以テ他邦ニ輸ス、然レバ津口ニ於テ其員數ヲハカリシラルヽ也、其舶スデニ他邦ニヒサグトキハ、金銭ヲ得テカヘラズ、多クハ其土ノ器財・珍玩華奢ノ文具ヲ求ムルニ過ズ、今令ヲ定メテ舶幾箇ヲ出ス時ハ、歸帆毎ニ必穀幾箇ヲ求メ歸ルベシト法ヲ定ムル時ハ、上失フ所ナク、下モ亦損セズ、而シテ我國費ス穀ハ、彼國ノ穀ニテ償ヒ、紙ニヨリテ我穀ヲ減ズル失ナク、亦我不耕ノ民穀ヲ生ズルノ理也、是亦穀ヲ息スルノ道ト云ベシ

一　凡ソ穀ハ萬民日用ノモノナレバ、其之ヲ糴糶スルコトハ、國民ノ憂樂盛衰ノカヽル處ナレバ、威權ノアヅカルコト大也、然ルニ今日穀物ヲ賣買スルコトハ、民ノ好ム處ノマヽナルガ故ニ、米商甚多シ、又天氣ノ不正ナルヲミテハ、時ニ乘ジ價ヲ上下スルコト、其徒ノホシヒマヽニスル處也、官其暴貴ヲ禁ジ價ヲヒキクシテウラシムル時ハ、閉藏シテウラズ、三民是ナクシテ止ムベカラザレバ、價ノ貴賤ヲ云ハズ、必定之ニ乞テ表ニ奉ジ裏ニ反シ、其徒ノ好ムマヽニ貴クシテ買フニ至リ、且凶年ニテ穀甚貴キ時ハ、官ヨリ小商ノ爲ニハ賤シクウリ玉ヘドモ、微祿多口ノ士吏ヨリ、工者及ビ小民ナドハ家産ツヾキ難ク、官モ亦盡ク之ヲ救フコトアタハズ、必竟穀權上ヲハナルヽガ故、力及ビガタキ也、今之ヲ制センニハ、官ヨリ穀ヲ鬻グ儈ヲ置キ、之ヲウルコトツネノ官價ヨリ貴クシ、平民賣買スル價ノ中最賤シキモノニ比シテ出スベシ、然レバ姦商ノ私ニ騰貴スルノ弊ヲ抑ヘ、自ラ貧民拯濟ノ道トナ

リ、世ノ平準ヲナスコト、社倉・義倉ニツグベシ、且其利息ヲ得ル處ハ之ヲ徒ニ斂メズ、其得ル所ノ多少ヲ棱リテ、普通ノ官價・立用價等ヲイヤシクシ玉ハヾ、往々小民租稅ノ艱難少ナカラン、是亦穀價ヲ減ズル道ト云フベシ、即今官ノ定價ヲ賤シクセザルハ、國計ノシカラシムルニ似タリ、然ルニ國民ノ患ル處實ニ斯ニアリテ、又穀權ノ上ニ歸セザル一端也、上ニ云ガ如ク利息ヲ取トキハ、民ト末利ヲ爭フ如ク聞ユレドモ、其利スル所ノモノ、國中一統ノ賦スル小民ノ害ニアラズ、カノ官價ヲ貴クシ、陰ニ民ノ利ヲ斂メ、富民亦其間利ヲ得、小民利ヲ失ンノ得失平均セザルニマサレリ、其流弊貪濫ノ吏下ヲ侵漁スルニ落ヤスシ、官モ豫メ防ヲナシ玉ハヾ、國家ノ大利ト云ベシ

一　近年荐ニ年有テ、豪農大ニ產ヲナシ、小農大ニ衰フ、皆々穀價ノ貴キ故也、豪農ハ穀ヲ得ルコト多ク、亦秋ニシテ出サズ、深ク閉藏シテ穀乏シク、價ノ騰貴スルヲ待チ、機ヲ候フテ利ヲ射、一時ニ大贏ヲ網ス、故ニ日々ニ產ヲ作シ、小農ノ佃ヲ奄幷スル也、小農ハ有年トイヘドモ、終年ノ蓄ヲナスコト能ハズ、且必需ギテ□器ニカノルコトアリ、故ニ豪農ノ閉藏シテ賤價多穀ノ日ニ販ギ、又其糶發シテ穀貴キ日ニ沽ノ故ニ、日々ニ究シテ其佃ヲヒサギ、庸食スルニ至ル也、上ニ論ズル如ク、官倉ヲ置キ穀價ヲ平準セバ、米商権ヲ張ルコト能ハズ、繼イデ豪農ノ穀權ヲトルコトアタハズ、終ニハ小農息ヲ休スルニ至ルベシ、去ナガラ米權ノ擧ハ米商豪家ヲ抑フル道ナレバ、或ハ人氣ヲ動カスニ至ル、庸官・凡吏ノ及ブ處ニアラズ、必有幹ノ人ヲ得テ、五年七年ノ力ヲ以テ成就スベシ

國家官米ノ券價ヲ貴クスルハ、國家ノ資用トスルコトナレドモ、實ニ民利ヲ陰ニ奪フ道ニシテ、官ノミナラズ、商モ亦之ニヨリテ陽ニ農ノ利ヲ奪フ術ナリ、要スルニ所農ノ傷害也不ㇾ如陽ニヒサギテ陰ニ下ヲ害スルノ弊風ヲノゾカンニハ、但一通リハ米商ノ患ノ如クナレドモ、財産日々昌ンナル國ナレバ、今兼并ノ道ヲ止ムル時ハ、產ヲナスニナヅマズ

一　或ハ人モシ余ガ説ヲ排シテ云ハン、足下一月三十日ニ行ハル丶宴享ヲ一日ニ并セント云、是魚物ノ價ヲ貴クスル理ニテ、却テ世人ノ煩ヒトナラン、余答ヘテ曰ン、余ガ説ハ酒材ノ穀ヲ減ゼヌヨリノ計也、タトヘバ一人一升ノ酒量アリ、一家ニ飲セバ主人一升ヲ費スベシ、十家ニ飲セバ主人一合ヲ費ス也、是一人ノ醉ニ損益ナクシテ、酒ヲ費スコト大損益アリ、魚肴モ之ニ準ジテ減ズル也、又魚物イカヤウニ貴クトモ、酒ノ費ヲ省スルニアタラジ、魚物モ亦之ヲ蓄ヘ藏ムルモノアレバ乏シカラズ、價モ亦天氣ニ從フテ上下アルトモ、大ニ平時ニコトナラジ、秋祭ノ時ヲシテ知ルベシ、夫トテモカネテ儉約シテ豐厚セザル令ヲ嚴ニセバ、魚物ノ費モ少カラン、朔望ハ諸省モ休日ナレバ、時々監察ヲ四方ニ巡視セシメ、歌皷・笑舞ノ外ハ亂妨・醉酗ナキヤウニイマシメナバ、敗事アルコト少カラン、但シ是ハ都會ノ地ヲ以テ專ラ論ズルモノナレドモ、近山・深山トテモ此例ヲ推ス時ハ小民業ヲ妨ゲズ、時ヲ費サズシテ可ナラン、是亦法制ヲ定メナバ、醉酗ノ憂ナカラン、扨又酒價ノ金錢ハ市中ニトヾマリ、魚物ノ價ハ遠ク海濱山野ニ□ル、是國家ノ利ニアラズト云モノアラン、是甚鄙陋ニシテ小商夫ノ算計ナリ、

市中ニ留ルモ、山海ニ出ルモ、同ジク國内ナリ、ナンノ妨カアラン、若夫酒ヲ多ク醸スルハ、有限ノ國力ヲ失スル道ナリ、魚物ヲ多ク得ハ、無限ノ海ヨリ得テ、國土ノ大利ナリ、是則經濟ノ一大算計ニシテ、政府ノシルベキコト也

成俗

一　人君ノ國ヲ治ルハ機ヲ見テ事ヲ察シ、勢ニ乘ジテ民ノ利ヲ開クヲ先務ト爲シ、成俗化民ヲ以テ事ノ終リトス、成俗ノ界ニ至ラザル時ハ、治ムルトイヘトモ永久ノ業ニ非ズ、成俗移風ハ人君志ヲ起ス時ハ、成ラザルコトナシ、大學ニ「一家仁一國興レ仁、一家讓一國興レ讓」ト云ハ是ナリ、今人君是ヲ事トセバ、尙質奢靡ヲ禁ジ玉フ、是根本ノコト也、此事ヲ上一人守リ玉ヒ、宮室・服食・供奉ヲ初メ、諸事浮華ヲ禁ジ實ヲ尙ビ、此心ヲ擴テ公子・公孫、上ニ從フテ守リ玉ヒ、一家ヨク人君ノ意ヲ體スル時ハ、士庶自ラ之ニ服シ、令セズシテ其風下ニ及ボスベシ、若人君ヨク之ヲ守リ玉フトモ、其實心一家ニ薰徹シテ、下萬民ノ耳目ニ觸ルベキホドノ事アラザレバ、公法正シク禁制嚴密ナルトモ、風ヲ移スコトナク、マスマス靡浮ニ流レテ、免レテ恥ルコトナシト云ニオツル也、サテ一家樸實ノ風行ハレテ後、士庶一家ニ使令スルホドノモノ、ヨク心服シテ謹ミ守ル、モシ令ニ從ハザルトキハ、禁ヲモ嚴ニスベシ、トカク一家和□ニシテ、後一國ニ推シ及ボスベシ、夫人君ノ公族ニ於ル、尊ムベキアリ、憐ムベキアリ、若情ニマカスル時ハ、愛敬ニヒカレテ之ヲ制スルニ忍ビズ、ヨリテ寧其身ノミヲ正シ、公族宮内

ヲトヒ玉ハズ、下萬民ヲ威服シ玉ハントスルニ至ルベシ、シカル時ハ下民表ニ奉ジ裏ニ怠ルノ意生ズル
ヨリ、一旦令ニ從ハシムルトモ、ツヒニ俗ヲ成スコト不レ能モノ也

一　俗ハ上ノ尙ブ處ニ從フテ趣向ヲナスモノ也、上ノ尙ブ所ハ美好ノミニアラズ、粗惡ノモノトイヘドモ下之ニ從フモノ也、楚王ノ細腰・齊桓ノ紫服ハサラ也、高祖ノ竹皮冠・神祖ノ帋衣ヲ賀禮トシ玉フノ類、ミナ人ノ知ル所也、人君之ニ準ジテモノゴトヲ減ジ、有司ミナ其準ヲ守ル時ハ、庶民ハ自ラ靡華ニ走ルコトナシ、今タトヒ庶民ヲ嚴制シ、之ヲ待ツニ嚴刑ヲ以テストモ、表ニ奉ジ裏ニ怠ルノ弊ヤマザレバ、成俗ノ禁ナルコト不レ能ベシ

一　成俗ノ極ハ化民ナリ、化民ハ制度・文物ノヨク行ハシムルモノニアラズ、德義ノ薰陶スルコト深キ處ヨリ發ス、シカレバ君ノ德ヲ正シ玉ヒテ、有司其意ヲ體シ、典刑ヲ持主シ、民其中ニアリテ感動セシムベキモノ也、士臣ハ家ニ□スルモノナレバ、國民ヲ治ムル□

一　成俗ノ事ヲ志シ玉ハヾ、下ノ情ヲツブサニキヽ玉ヒ、衆ノ心向フ處ニ乘ジテ行ヒ玉フベシ、サテ下ニ處シ玉フハ、各其言ヲ盡サセ、賢不肖トナク心ヲ盡シ、其所見ヲノベシメ、善ヲ容レ惡ヲ措、タトヒ不善ノコトヲ申シ出ルトモ、其志ヲ稱シ其不及ノ處ヲバ恕シ玉フベシ、但内外近疎ニツキテ處ル道亦異也、左右ノ近臣、又ハ大官ノ人々ハ、君ノ側ニ侍スルモノナレバ、進デ言ヲ盡シ面從無ニ後言一ヤウニイタスベシ、サテ微賤ノ臣、散官ノ事ニ任ゼザルノ人ナドハ、君ニ侍スルノ日ナケレバ、君ヲ敬

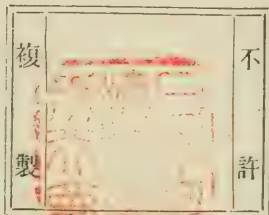
スル心亦各別ニテ、畏憚ノアルヨリ其言ヲ盡スコトアタハズ、其言至善ナレドモ、且自ラ之ヲ行フ才力アラザルモノハ、身ノ逮バザルヲ恥テ、公然トシテ上言スルコトヲ得ザルモノ也、君上ソノ心ヲ恕シ玉ヒ、下ニテ誹議スルコトヲユルシ、市井ノ諷謠。落頭ニイタルマデ之ヲトガメ玉ハズ、ヒソカニ之ヲ聞カシメ、其義ヲ取舍シ玉ハヾ、自ラ言路ヲヒラキ、下情ヲ通ズルノ一助トナルベシ、アナガチ上言スルコトヲ令シ玉ヒ、外言スル事ヲ戒メ玉ハズ、其弊腹誹偶言ヲ禁ズルガ如クナリテ、小民口ヲ緘スルノ甚キナリ、言路一タビヒラクトキハ小民其情ヲノベ、上ヨク其要ヲサトリ令ヲ發シ玉ハヾ、下自ラ其心ヲ體シ、上意トシテ從ハザルコトナシ、如此ナレバ俗ノ淳厚ナルコト日ヲ刻シテマツベシ、所謂君子之德風也、小人之德艸ナルモノハ、此謂ナリ

治本策畢

宮崎幸麿
小西武治　校

大正六年一月三十一日印刷
大正六年二月　三　日發行

日本經濟叢書
卷三十二
非賣品

編者　瀧本誠一
發行者　佐藤卯兵衛
東京市神田區駿河臺鈴木町拾六番地
印刷者　中田福三郎
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所　東京神田區駿河臺鈴木町拾六番地　日本經濟叢書刊行會
電話本局三一八五番
振替口座東京二六八一〇番

理事　高木範之丞
佐藤卯兵衛

sented to the authorities on political and economical matters

By **SAKUMA SHŌZAN**
(1811-1864)

17. **CHIHON SAKU,** *or fundamental policies, a politico-economical discourse*

By **OKAMOTO NOBUKATSU**

---

11. **GENDŌ ROKU**, *or a Memoir on the circumstances of the export of copper from Japan, with strictures on the necessity of suppressing the same*

By **HANAI IKKŌ**

12. **SHINSHŪ RON,** *or the staple products of the Divine Country (Japan) described, in proof of the uselessness of importing foreign products*

By **AN ANONYMOUS**

13. **SUYEGURO NO SUSUKI,** *or sundry talks, especially on the corruption of Shogunate officials in Kyoto*

By **HIRATSUKA MOKYŌ**

14. **KYŪKYŪ WAKUMON,** *or answers to queries on how to relieve the poverty*

By **YASUI SOKUKEN**
(1799-1876)

15. **TAKASHIMA SHŪHAN JŌSHO,** *or a memorial presented to the authorities on political and economical matters*

By **TAKASHIMA SHŪHAN**
(1794-1866)

16. **SAKUMA SHŌZAN JŌSHO,** *or a memorial pre-*

6. **FUKOKU ZONNENSHO,** *or an opinion on the means of enriching the country*

By **NIIDA KŌKO**
(1769-1847)

7. **KWAHEI HIROKU,** *or secret memoirs on coins*

By **SATŌ JIZAYEMON**

8. **KINGIN DZUROKU ZOKUHEN,** *or a continuation volume of "the graphical record of gold and silver coins" by* **KONDŌ MORISHIGE**

By **AN ANONYMOUS**

9. **SHŪMAIKEN JŌSHO,** or *a memorial presented to the authorities on abolishing the evils perpetrated by rice-merchants, especially by the rice exchange, through establishing the government monopoly of rice trade.*
Presumably compiled about 1867

By **AN ANONYMOUS**

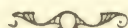
10. **TŌKON KINSEN BEIFU KŌSUI TSŪKA KŌ,** *or an essay on the currency of coins and on prices of rice and other commodities, chiefly in Yedo and Mito*

By **AN ANONYMOUS**
(*Presumably an official of the Mito Daimiate*)

CONTENTS

of the thirty-second volume

BIBLIOTHECA
JAPONICA
ŒCONOMIÆ POLITICÆ

VOL. XXXII

TŌKIŌ
NIHON KEIZAI SŌSHO
KANKŌKWAI

1917.